

【完結】艦隊これくしょん 提督を探しに来た姉の話

しゅーがく

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『艦隊これくしょん 艦娘たちに呼ばれた提督の話』の主人公である天色 紅（あましき こう）が横須賀鎮守府に転移した後、紅が元居た世界では紅の突然の失踪に家族は困惑していた。

そんな中、人一倍紅の事を心配していた紅の姉、天色 ましろ（あましき ましろ）は様々な手がかりを元に紅が『艦これ』の世界に消えたのではないかと仮説立てた。

失踪から半年後、遂にましろは紅を探しに『艦これ』の世界に旅立つ。

旅立った先でましろが見たのは敗戦ムードに呑み込まれた日本皇国だった……。この世界でどうましろは紅を探すのか……………。

※注意（必ずお読み下さい）

- ・ 本作は『艦隊これくしょん ―艦これ―』の二次創作小説です。
- ・ 独自解釈、独自設定のオンパレードです。
- ・ 地の文で『私』は主人公である天色 ましろの事です。
- ・ 本作は『艦隊これくしょん 艦娘たちに呼ばれた提督の話』の続編です。前作の『艦隊これくしょん 艦娘たちに呼ばれた提督の話』を読んでおく必要がありますが、一応、読まなくてもいいように書きます。

- ・ 前作程長くなる予定はありません。
- ・ シリアス・鬱が苦手な方はブラウザバックすることを勧めます。

・『終焉の章』は鬱な内容です。

・深海棲艦との戦闘はありません。

・話の流れ上、艦娘との絡みはかなり少ないです。

以上のことをお読みになった上で、本作をご観覧下さい。質問がありましたら、作者にメッセージで質問をお送り下さい。

ーお知らせー

2016/07/29 日刊ランキングにて、12位になりました。

2016/10/22 終焉の章は『バッドエンド』だということ
を公表しました。

2017/01/06 設定・組織図を投稿しました。

2017/02/26 タグに『鬱』を追加しました。

2017/03/02 あらすじを書き換えました。

2017/05/29 完結しました！

2017/07/24 続編『艦隊これくしょん 艦娘たちと提督

の話』の公開を開始しました。

目次

設定

組織図 (随時更新)

1

序章

第1話

失踪

5

第2話

行方

9

第一章

第3話

横須賀鎮守府

13

第4話

艦娘

25

第5話

警備棟

35

第6話

真実

44

第7話

重い空気

52

第8話

謝罪

58

第9話

条件①

63

第10話

条件②

69

第11話

条件③

75

第二章

第12話

『柴壁』

82

第13話

情報収集①

89

第14話

情報収集②

95

第15話

情報収集③

101

第16話

情報収集④

111

第17話

情報収集⑤

117

第18話

鼻の効く犬と、白い番犬①

124

第19話

鼻の利く犬と、白い番犬②

131

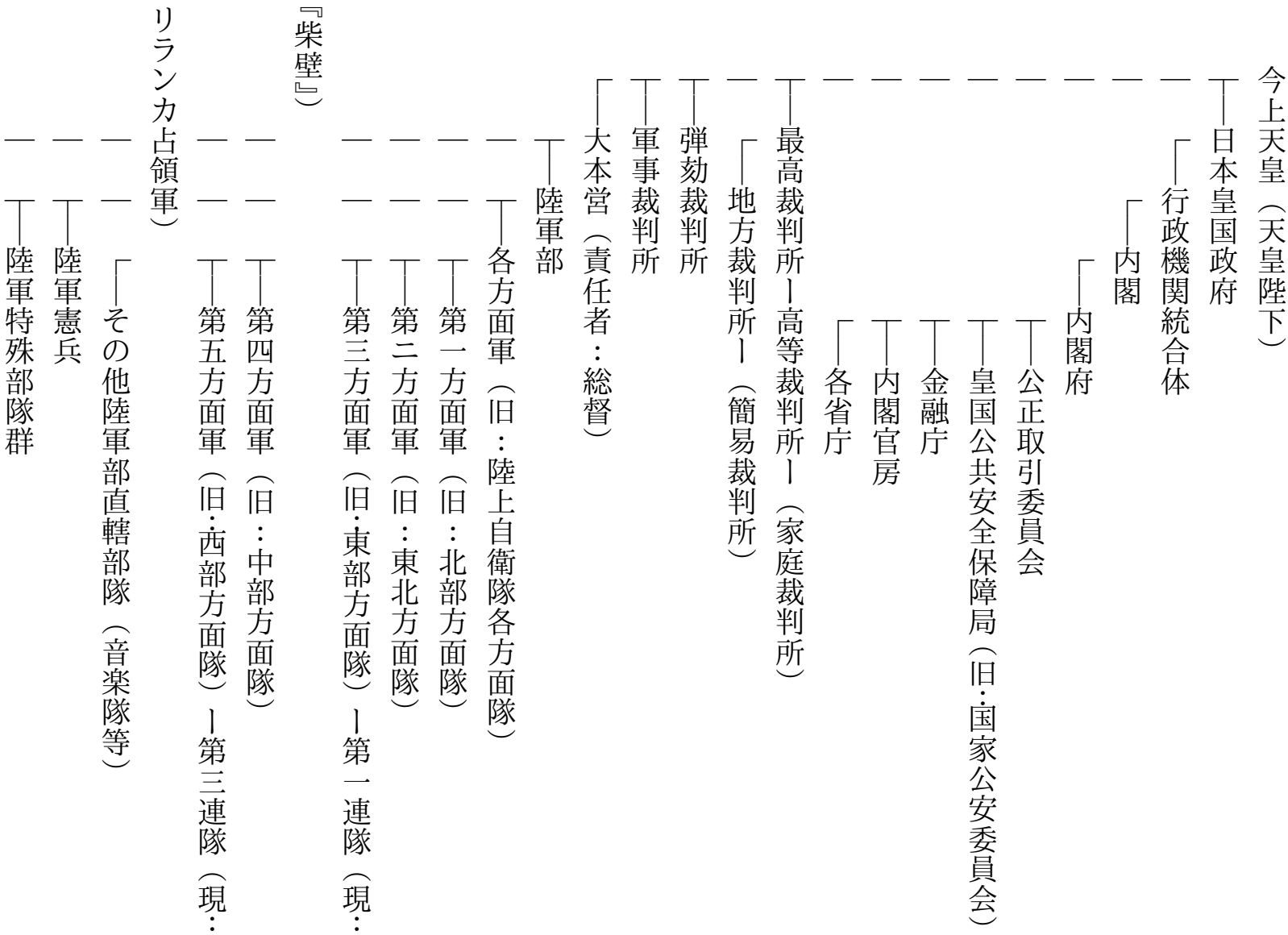
第20話	作戦立案	137
第21話	執務室	142
第22話	動き	148
第23話	紅と艦娘と日本皇国	154
第24話	艦娘にある共通意識と、ましろの怒り	162
第25話	警報	169
第26話	外の敵、中の敵。そして、見えない敵。	176
第27話	侵入者	185
第28話	知りすぎたこと	193
第29話	奪還作戦準備	202
第30話	確認	211
第31話	『紅提督』という存在	217
終焉の章 (マルチエンディング その1)		
第32話	『紅葉狩り』①	226
第33話	『紅葉狩り』②	233
第34話	『紅葉狩り』③	241
第35話	『紅葉狩り』④	248
第36話	『紅葉狩り』⑤	257
第37話	『紅葉狩り』⑥	266
第38話	『紅葉狩り』⑦	274
第39話	全て	286
第40話	集会	295
第41話	覚悟	302
第42話	早朝	307
第43話	提督を探しに来た姉の話	313

第56話	束の間の休息④	553
第55話	束の間の休息③	545
第54話	束の間の休息②	538
第53話	束の間の休息①	530
第52話	ティータイムは方針会議の 後で	522
第51話	厚木飛行場制圧作戦②	514
第50話	厚木飛行場制圧作戦①	506
第49話	艦種代表会議	499
第48話	再起②	489
第47話	再起①	478
第46話	豹変	470
第45話	金剛の背後	462
第44話	『紅葉狩り』	455
終結の章 (マルチエンディング その2)		
After Story	日本皇国最期の盾の話⑩	437
After Story	日本皇国最期の盾の話⑨	425
After Story	日本皇国最期の盾の話⑧	414
After Story	日本皇国最期の盾の話⑦	407
After Story	日本皇国最期の盾の話⑥	394
After Story	日本皇国最期の盾の話⑤	383
After Story	日本皇国最期の盾の話④	377
After Story	日本皇国最期の盾の話③	364
After Story	日本皇国最期の盾の話②	354
After Story	日本皇国最期の盾の話①	338
After Story	海軍最期の指揮官	329

第57話	東の間の休息⑤	566
第58話	大本営にて①	574
第59話	大本営にて②	581
第60話	黎明の空、前日	589
第61話	作戦艦隊編 黎明の空①	597
第62話	作戦艦隊編 黎明の空②	606
第63話	作戦艦隊編 黎明の空③	612
第64話	作戦艦隊編 黎明の空④	620
第65話	作戦艦隊編 黎明の空⑤	628
第65話	呉司令支部編 黎明の空①	635
第66話	呉司令支部編 黎明の空②	645
第68話	呉司令支部編 黎明の空③	651
第69話	呉司令支部編 黎明の空④	657
第70話	呉司令支部編 黎明の空⑤	663
第71話	提督〈紅〉を探しに来た姉〈私〉の話	669
After Story	私と紅くん	677
After Story	責任	689
終幕の章 (マルチエンディング その3)		
第72話 帰還と記憶		709

設定

組織図（随時更新）



- ― 陸軍造兵工廠集合体
- ― 陸軍兵器開発局
- ― 陸軍造兵工廠
- ― 陸軍学校
 - ― 陸軍士官学校 (士官用)
 - ― 陸軍兵科学校 (下士官以下・一般兵科用)
 - ― 陸軍航空機学校 (回転翼機・固定翼機搭乗員用)
- ― 海軍部 (長官：新瑞)
 - ― 各管轄軍 (旧：海上自衛隊各地方隊)
 - ― 第一管轄軍 (旧：大湊地方隊)
 - ― 第二管轄軍 (旧：舞鶴地方隊)
 - ― 第三管轄軍 (旧：横須賀地方隊)
 - ― 第四管轄軍 (旧：呉地方隊)
 - ― 第五管轄軍 (旧：佐世保地方隊)
 - ― その他海軍部直轄部隊 (端島鎮守府・海軍部情造)
- ― 海軍海兵 (俗語：海兵隊)
- ― 海軍憲兵
- ― 海軍工廠
 - ― 横須賀海軍工廠―かざばな型汎用護衛艦 (建造)
 - ― 呉海軍工廠
 - ― 舞鶴海軍工廠
 - ― 佐世保海軍工廠
- ― 海軍学校
 - ― 海軍士官学校 (士官用)
 - ― 海軍海兵学校
 - ― 海軍水兵学校 (下士官以下・水兵用)
 - ― 海軍航空機学校 (回転翼機・固定翼機搭乗員用)
 - ― 鎮守府群 (艦娘に割譲している土地及び、基地)
- ― 大湊警備府群

艦・重巡洋艦	―	―	―	舞鶴鎮守府群
―	―	―	―	横須賀鎮守府群
―	―	―	―	横須賀鎮守府（提督：天色 紅）
遣艦隊・遠征艦隊	―	―	―	横須賀鎮守府艦隊司令部
―	―	―	―	所属艦隊
―	―	―	―	通常編成艦隊（特務艦隊・派
艦・重巡洋艦	―	―	―	水上打撃部隊（主軸：戦
―	―	―	―	空母機動部隊（主軸：航
空母艦	―	―	―	各空母艦載機航空
隊	―	―	―	赤城航空隊
―	―	―	―	加賀航空隊
―	―	―	―	蒼龍航空隊
―	―	―	―	飛龍航空隊
―	―	―	―	翔鶴航空隊
―	―	―	―	瑞鶴航空隊
―	―	―	―	鳳翔航空隊
―	―	―	―	龍驤航空隊
―	―	―	―	祥鳳航空隊
―	―	―	―	瑞鳳航空隊
―	―	―	―	飛鷹航空隊
―	―	―	―	隼鷹航空隊
艦・駆逐艦	―	―	―	水雷戦隊（主軸：軽巡洋
―	―	―	―	『近衛艦隊』（代表：金剛）
―	―	―	―	『親衛艦隊』（代表：赤城）
―	―	―	―	『番犬艦隊』（代表：ビスマルク）
―	―	―	―	特務無所属艦（近海哨戒）

四三乙型改

	「秋津洲」二式大艇改「桜花」
	「警備部（現：『柴壁』 指揮官：武下）」
	「『番犬』」
	「『獵犬』」
	「『血獵犬』（指揮官：巡田）」
	「酒保」
	「『灰犬』（終焉の章に登場）」
	「『鬪犬』（終焉の章に登場）」
	「羽田基地」
	「航空教導団（指揮官：水谷）」
	「呉鎮守府群」
	「佐世保鎮守府群」
空軍部	
	「各航空方面隊（各航空隊）」
	「北部航空方面隊」
	「東北航空方面隊」
	「東部航空方面隊」
	「中部航空方面隊」
	「西部航空方面隊」
	「その他空軍部直轄部隊（地上配置・音楽隊等）」
	「空軍憲兵」
	「空軍教導団集合体」
	「空軍学校」
	「空軍航空訓練学校（固定翼機搭乗員・整備兵用）」
	「空軍地上士官学校（士官用）」
	「空軍地上兵科学校（下士官以下・一般兵科用）」
	「軍病院」
	「地方軍病院」

序章

第1話 失踪

今日、紅くんが消えました。いいえ、失踪したのかもしれませんが。

9月になりますが、私は社会人なものですからいつもの様に仕事の用意をしています。一方で、紅くんは高校生です。昨日まで夏休みでしたが、今日は始業式です。学校に行かねばなりません。

いつまで経っても起きてない紅くんを心配したお母さんは、私に起こしてくる様に言いました。なので紅くんの部屋の扉を私はノックしました。

ですけど、返事はありません。いつもなら『いま行くー』と、返事をするんですけど、今日に限ってありません。

私は気になったので部屋の扉を開きました。

「紅くん？ 準備しないと……」

部屋の中に紅くんは居ませんでした。返事が無かったので薄々分かっては居たんですけどね。

私は部屋に入ってキョロキョロと見渡しましたが、紅くんは居ません。通学に使うかばんも確認しますけど、ありました。制服もハンガーに掛かっています。

パジャマ姿で紅くんは、何処に行っただんでしょうか。

「お母さん！ 紅くんはもう学校に？」

廊下に出てお母さんに確認を取ります。もしかしたらもう学校に行ってしまったのかもしれないですね。

「まだ行ってないからむしろに頼んだの！ 居ないの?! 全く……」

お母さんの声が遠ざかりました。多分、私の声を聞くために廊下に出ていたんでしょうね。私の報告を聞いて、リビングに戻ってしまっただけです。

紅くんは、たまにこうやっていなくなる事があります。前は突然、喫茶店に行きたいと言って寄り道して学校に行く事がありました。

今日はまた違う事で居ないのだろうと思い、私は確認で玄関に向かいます。そこに靴がなければ出掛けてます。勿論、靴を履かずに出かけるなんて事はしません。ですけど、私が玄関を見ると靴はありません。学校用と普段履き用、両方ともです。

「お母さん！ 紅くんはまだ居るみたいですよ！」
「ええ?!」

不思議に思いつつ、私は何の気なしに家の中を歩き回りました。ですが、紅くんはどこにも居ません。

今まで忘れてましたが、携帯電話を鳴らせばいいのでは、と思い立ち、私は紅くんの携帯電話に電話を掛けます。コールが鳴り、私はそれを元に家の中を探します。

紅くんの携帯電話があつたのは、紅くんの部屋にありました。机の上に置かれていたんです。

何だか変、そう思いました。こんな事は今までに無かったんです。手がかりがいつも残っていたのですが、今日はありません。

私はお母さんに報告します。再度、確認しましたからね。

「やっぱり居ません！」

「おかしいねえ……。でも、そのうち出てくるでしょ?」

「かもしれないね」

私はそう言つてダイニングに向かいます。そして朝食を摂つて、家を出ました。仕事に行かなければなりませんからね。

今年から専門学校を卒業して就職しました。なので、まだ1年目です。不慣れな事が多いですが、半年が経ちましたので慣れてきたと思います。

—————

—————

—————

仕事場から家に帰って来れるのは、だいたい午後6時くらいです。新人だと、残業や夜勤は無いみたいですからね。

今日の私は機嫌がいいです。何故なら金曜日ですからね。私の家の決まりで、金曜日の夜はカレーと決まっています。ですけど、

それだけで私の機嫌が良くなる訳ではありません。カレーの時はオムレツを乗せるのが好きなんです。それも紅くんの作ったものです。普通にオムレツだけで食べても美味しいんですけど、カレーに乗せるとオムカレーになって、これがまたいいんです。

偶に、紅くんの機嫌が悪いと作ってもらえない事があります。ですが、そんなときには、ジュースを奢ってあげると作って貰えます。そこまでして、オムカレーが私は食べたいんです。

鼻歌を歌いながらリビングの扉を私は開けますが、そこには誰も居ませんでした。いつもなら紅くんが居るんですけどね。

変だと思い、私は紅くんの部屋に向かいます。扉をノックして開いても紅くんは居ません。朝の状態のままでした。

「あれ？」

私は朝みたいにキョロキョロと見渡してみますが、紅くんは居ません。変わっているとすれば、洗濯物が置かれていることだけです。

かばんや制服も朝のままです。どうしてだろうと考えてながら見ていると、私は朝に気づかなかった事に気づきました。

紅くんのパソコンが起動したままになっていきます。気になった私はパソコンの前に座り、マウスを少しだけ動かします。そうすると、ブラックアウトしていた画面が点きました。そして、明るくなった画面には、あるものが映っていました。

『艦隊これくしょん』とタグに書かれています。紅くんは『艦隊これくしょん』をやっているみたいですね。

画面を見ると、どうやらプレイ途中だったみたいです。『戦果報告』と左上に書かれていて、真ん中に大きく『勝利!! S』と書かれています。マウスで適当なところをクリックしてみると、画面が進みました。女の子がしゃべりできました。『この勝利で慢心しては……』と言ってるだけです。そして数字が右側中央に出ました。これ以上触らない様に、マウスから私は手を離します。

(何故でしょうか……)

そんな事を考えながら、リビングに戻りました。ゲーム画面も離れたら悪いので、そのままにして置きます。

――
――

結局、紅くんは昨日、帰ってきませんでした。今日も、もう午後6時になるというのに、紅くんは帰ってきません。それを不安に思ったお父さんとお母さんは、警察に行くと言って出て行きました。私は、もし紅くんが帰ってきた時の為、家に残っています。

1人、リビングで待っています。凄く不安です。

少しすると、玄関から物音が聞こえたので、私は見に行きました。帰ってきたのは、どうやらお父さんとお母さんだったみたいです。話を聞くと、捜索願を提出してきた、と言ってました。紅くんが家から出た形跡は無いんですけどね。

お父さんもお母さんも、このことは知っている筈です。それを警察の方に伝えた上での、紅くんの捜索願だったのでしよう。

私はそのまま私の部屋に行きました。

私の部屋は、リビングや紅くんの部屋に比べて少し汚いです。掃除のやる気がでないんです。一応、お父さんとお母さんから家事は叩きこまれています。ですけど、私はやろうとはしません。気付はこんな風になっているんです。

そんな私はベッドに寝転がり、紅くんの事を考えます。

(何処に行ってしまったんでしょうか)

そう考えてしまっていますが、少し、気になる事があります。

紅くんのパソコンの事です。紅くんはパソコンを使わないとなると、電源を必ず切る癖があるんです。それが何故、そのままになっていたんでしょうか。このことはお父さんにもお母さんにも話してません。私だけが知っている事です。

本当に何処に行ってしまったんでしょうか。紅くんは。

第2話 行方

紅くんが失踪して1ヶ月が経ちました。警察は紅くんを一応、探してくれている様です。高校生が移動できる範囲での捜索ですけどね。それでも全然見つからないと、先日連絡がありました。

ですので、私は私自身で紅くんの捜索を始めたのです。手始めに失踪した動機です。私が見ていた限りでは、無かったと思います。高校3年ですので、大学受験の事で何かあったのではと母に聞きました。ですが、志望校のボーダーよりもかなり上に居るそうです。それでも勉強をしている姿はよく目にしてました。快調に進んでいる姿を見ますので、そう言った悩みでは無いと判断しました。保険で友人関係などを紅くんの友人に聞きました。問題ないとの事です。紅くんがどう思ってるかは分からないので、グレーですけどね。

学校関係では無いとなると、それ以外となります。こちらに関しては、ほとんど外出しない紅くんを私は見てますので、ないと思います。次に失踪原因です。こちら結論を先に言えば、動機と同じです。目立った原因が見つかりませんでした。

そんな事を数ヶ月しながら私は、艦これを始めました。紅くんが失踪した時、パソコンに点いたままだった事から調査目的で始めました。自分のアカウントで、自分のパソコンでプレイしています。

—————

—————

—————

紅くんの失踪の調査は全く進みません。この約半年間、何度も心が折れそうになりましたが、その度に持ち直しています。何度も何度も、動機や失踪原因を考えます。そんな中に、ある失踪原因が浮上ってきてました。ですがそれは、現実味の無いものでした。

『紅くんの失踪した状況を鑑みて、パラレルワールドに行ってしまったのではないか』というものでした。お父さんとお母さんにその趣旨を伝えるも、それはあり得ないと一蹴されてしまいました。ですが、

これが何の情報も無かった紅くんの失踪に、最も説明がつきます。ですので、紅くんの友人に会って話してみました。私が考えついた失踪原因を聞いて貰ったところ、それはないと一刀両断されました。それは当然でしょうね。『パラレルワールド』なんて信じる方がおかしいです。

一方、警察の方は約半年が経っても、捜査の進展はないようです。全く情報が入って来ないと聞きました。捜査をしている人の電話は、もう5ヶ月以上鳴ってない様です。

搜索願を出したあの時から、何も変わってないと仰ってました。

もし、紅くんが『パラレルワールド』に行っていたらどこの『パラレルワールド』にいるのでしょうか。タイムスリップや場所だけの移動、全く分からない世界等、様々あるでしょう。目星が付きません。そんな事を考えている私はじつと、紅くんのパソコンの画面を見えます。約半年前の、あのままです。

『パラレルワールド』に関して調べてみました。皆さんは紅くんの失踪先を、『パラレルワールド』だなんて思ってません。ですが、『パラレルワールド』へ消えてしまった具体例はあるんです。それもいくつも。そして、消えてしまった後、帰ってきた人の証言も残っています。それを幻想や夢物語、筋が通らないと言う人は大勢います。確かに、そうなのかもしれません。量子力学、量子物理学、素粒子物理学的観点から見れば、あり得ない事なのかもしれません。ならどうして、『パラレルワールド』に行ってしまった人が大勢いるのでしょうか。

物理法則を信じる事は、正しいことです。ですが、その物理法則を逸脱する事例が起きる事もあるのでは、と私は思います。その例が『運』なのではないでしょうか。1番身近な例だと私は思います。

紅くんが消えた『パラレルワールド』が『艦これ』だったなら。そんな風に考える事が増えました。パソコンの画面が点けっぱなしだった、それだけの理由です。

私は前例が無いか、調べますけど勿論、ある訳がありません。

フィクションの小説は数えきれない程あります。ですが、ノンフィクションはひと握りもありません。ある訳がありません。当たり前前です。

私はもう1度、紅くんが失踪した状況を確認めます。

失踪の前夜は確かにいました。私の記憶では午後9時まで、目の前にいました。嘘ではありません。問題は、午後9時から朝までの約10時間です。その間に何があったのでしょうか。

確実なのは、パソコンで艦これをやっていた事です。そして居なくなつたのが、朝ではないことです。前者は、部屋で見つけた唯一の手がかりです。後者は、私の予測です。紅くんの性格を、考慮した上での事です。

靴を履かずに出て行つた、窓から外に出たとは考えられません。紅くん自身の変調もあり得ないでしょう。精神的な異常でしたら、きつと事前に私かお母さんに知らせているでしょうから。知らせて無かつたとしても、それが急に來ることなんてあり得ません。午後9時までに、何か変調がなければなりません。

結局、私の紅くん搜索は手詰まりになっていました。もし、なんて仮説を立てるばかりです。紅くんのパソコンでログインされたままの艦これの画面を、ただ呆然と眺めているだけです。

右上の資材の数値だけが変わる画面を眺めているだけです。絵が、赤城さんが呼吸をしている様に動き、たまに声を出すだけです。放置ボイスというらしいです。

そんな画面を眺めていると、ある異変に気付きました。

触つてもないですが、右上にある開発資材とバケツの量が変わつているのです。発見した時は『戦果報告』を見ただけです。それからは、そのままにしておく決めていたので、増減するはずがないのです。

なのにも関わらず、数字が変動しています。

(どうしてでしょうか?)

そう思いながら注視していると、また、開発資材の数字が変わりました。触つてもいないのに、どうしてでしょうか。

艦これはやっているのである程度は分かりますが、開発資材が勝手に

に増減する事はありません。ですけど、実際に目の前で勝手に増減しているんです。

(一体、どうなってるんですか?!)

私は自分のパソコンで確認のために、艦これの開発資材の増減に関する記述を調べました。やはり、勝手に増減はしないみたいです。

(何かが起きてるんですね。バグという可能性もありますが……)

何かが起きている事に、間違いはないんです。ですが、原因が分かりません。それが特異的なものかなんて、ひと目見れば分かる事なんです。

その刹那、紅くんのパソコンの画面が光り始めました。そして、そこに見えたモノが私の目に焼きつきました。

赤城さんは後ろを向き、その正面に立っている白い服の男の人です。こちらを向いているので、顔は分かります。その顔に私は見覚えがあります。いいえ。私が探していた人です。

そうして私は、パソコンの放つ光に包まれていきました。

第一章

第3話 横須賀鎮守府

光が消え、私の視界が元に戻ると、私は知らないところに居ました。旅行に行くどころか、遊びになんて滅多に行かない私ですが、ここが私の知らない場所だというのは分かりました。

どんなところに居るのか、先ずは目の前の景色を私は見ました。鉛色をした空、今にも雨が降り出しそうです。その下にはビルが生えています。どうやら私は高いところに居るみたいですね。最後に、足元を見ました。

(これ、なんででしょうか)

テラスなのですが、足元は木の板でもコンクリートでも芝生でもありません。袋が敷き詰められています。

足踏みをしてみると、少し沈むので多分、土囊でしょうか。何故、こんな高いところに土囊があるのでしょうか。

変に思いつつ、後ろを振り返ってみると、そこには信じられないモノが置かれていました。

どう見ても機関銃です。長い筒が空に向けられています。そして、地面に長い溝があります。大人の男の人が入れる程度です。機関銃の後ろは壁になっていて、さらに向こうには扉もあります。その扉の横には大きなポスターが貼ってあります。

『深海棲艦等に恐れるな！ 銃を持って、砲を構えろ！』

そう書かれていて、とても恐ろしいイラストが書かれています。

深海棲艦という文字を見て、私はピンとききました。深海棲艦なんて単語、艦これでしか使いません。つまり、私は艦これの世界に来てしまったのです。『パラレルワールド』に来てしまった、と言ってもいいでしょう。

私は光に包まれる前に、見ていたのです。紅くんのパソコンに映る、あのおかしな光景を。赤城さんはこちらに背中を向け、こちらを

向いていた白い服の男の人。アレはどう見ても紅くんです。間違ありません。

となると、紅くんは艦これの世界に消えてしまったのだ、と解釈しても問題ないです。

そんな事を私が考えていると、背後からいきなり声を掛けられました。

「そのの」

私に声を掛けてきた人は男の人です。そしてその人は、迷彩服を着ています。小銃を脇に閉め、銃口は私の足元くらいに向いています。多分。

「はいっ?! なんでしょうか?!」

「いやっ。どうして対空陣地に居るのだろうと思ひまして……」

(成る程。だから機関銃が上を向いているのですか)

私が現れたのは、どこかの対空陣地だったという事です。それらしいところではあるんですけどね。

私に声を掛けた男の人は一体、何者なのでしょう。私が言うのも何ですけど。

「高いところから外を見たくなりまして」

そう適当な理由を私は言いましたが、疑っている顔をしています。

「それならわざわざ、軍の対空陣地のあるビルに登らなくても良かったのでは?」

今、確かに男の人は軍といいました。やはり、ここは艦これの世界のようです。

「それは……」

もう、適当な理由は言えません。怪しまれて警察に連れてかれるのが目に見えています。ですので、私は正直に言おうと決心しました。

そう思った矢先、男の人は小銃を肩にかけると、私をジューつと見えます。いやらしい目ではありません。なんとというか、観察すると言うのが合っている見方です。

「……貴女は、雰囲気を変えますね」

私を観察していた男の人はそう、私に言いました。

雰囲気を変、というのはどういう意味なのでしょうか。

「どういう意味、ですか？」

私がそう男の人に聞くと、ヘルメットを脱いで答えてくれました。「なんとなくですが、1度だけ見たことある人に雰囲気が似ていたんです」

私にそう言った男の人は私をまた観察すると、ある事を訊いてきました。

「先ほど、高いところから外を見たくなくなったと仰ってましたね。本当は何かを探しに来たのでは？」

この男の人は鋭いです。全くもってその通りです。

この状況ではもう、嘘は吐けませんので、真実を伝えます。私が紅くんを探しに来た事を伝える為、携帯電話を取り出しました。

「その通りです。本当は、この人を探しに来たんです」

そうやって私が見せた写真に、男の人はとてつもなく驚きました。見せた写真は紅くんです。他はモノしか写ってませんので、私が探しに来たのはこの写真に写っているただ1人の事になります。

「この、人はっ……」

男の人は額から汗を流し、下唇を噛むと、そう呟きました。

この様子からして、紅くんを知っている様ですね。

「もしかして、知っているんですか？」

私はその男の人に聞きます。知っているのなら、情報が欲しいです。何でもいい、些細なことでもです。

「はい。……ですが、何処に居らっしゃるのかまでは分かりません」

男の人は敬語を使いました。ということは、紅くんは偉い人になっているということでしょうか。艦これをしていて、艦これの世界に居るのなら、提督をしているのだらうとは思いますが。

「会った事は？」

「あります」

これで無いと答えられたら振り出しに戻るところでした。この男の人から、紅くんと何処で会ったか聞き出せば、また一歩近づきます。

「何処で？」

「横須賀鎮守府です」

「どうやら紅くんが提督をしている可能性が上がった様ですね。

「何をしている人か、どこ存じですか？」

「ええ。横須賀鎮守府艦隊司令部司令官、提督ですよ」

(当たり前ですね)

「紅くんが提督をしている事は事実となりました。

「そうですか。では、私はこれで」

「そう言って私は携帯電話でGPSを起動し、位置情報を取得しようとした時、その男の人に止められました。

「待って下さい。ここからどうやって向かうつもりですか？」

「どうやって何も、電車やバスで……」

「平時なら構いませんが、今は戦時です。おいそれと女性を放り出すような真似は出来ません」

少し、この世界の状況が分かってきました。深海棲艦との戦いは、戦争とされているみたいです。この男の人の言い方だと、戦時になると国内の治安が悪化するみたいです。最も、今がその戦時なんですから。

「少々お待ちください。連絡をとりますので」

徐ろに電話みたいなもので話したその男の人は、誰かに連絡をとると、私に言いました。

「横須賀鎮守府に向かう、軍のコンボイが近くを通るそうです。そちらに話をつけましたので、乗っていただきます」

「そうですか……ん？ 軍のコンボイですか？ つまり、輸送隊とかではなく？」

異世界にきているということですが、どうしてコンボイという単語が出てくるのでしょうか。どこか、別の国ならわかりますが、国内です。

コンボイというのは、護衛付輸送集団のことです。

「はい。前は無かったのですが、海軍が現在、戦闘力を失っています。その為に、深海棲艦が戦線を押し上げて来ていまして、陸から50k

mのところまで攻められているんです。そんな状況なものですから、輸送をしているトラックなんかを攻撃するんです。近海に来ている深海棲艦の空母から発艦した艦載機がです。ですのでトラックには必ず、軍の護衛が付くんですよ。地対空迎撃に特化した迎撃車両が。ですから皆、コンボイと呼んでいるんです」

「そうなんですか」

「今回に関しては運が良かったです。普通は、民間人をコンボイに同乗させる事はないですからね。それに貴女はどうやら提督のお知り合いの様子。提督に助けられた身、恩返しも出来ておりませんので、最初はこれくらいで。では、参りましょうか」

そう言ったその男の人は歩き出したので、その後ろを私は付いていきます。

テラス、対空陣地と通り抜け、私の前を歩く男の人と同じ格好をしている人を沢山見ました。軍の対空陣地だからでしょうね。その同じ格好をしている人たちはどうやら、かなり士気が低いみたいです。ね。皆さん口々に『提督が……』『提督さえ戻ってきて下されば……』と言ってます。私の弟は、この世界でそれだけ色々な人から信頼されているのでしょうか。ですが、皆さんの言っていた意味を別視点から見ると、私の弟は居ないというような意味合いになります。どういう意味なんでしょうか。

――――

――

――

その男の人の知り合いらしき人と合流しました。ここには既にトラックの集団、コンボイが到着しています。長い列を作り、途中に何台も戦闘車両らしきものも止まっています。本当にコンボイみたいですね。

私はテラスで会った男の人から言わた通り、その知り合いの人の案内でコンボイの最後尾、食料を運んでいるトラックの荷台に入りました。空きスペースに身体をねじ込み、座ります。

間もなく、トラックは動き出しました。私の座っているところか

ら、外の景色は見えます。ですが、空気は最悪です。通りかかる人、全員とはいきませんが、この世の終わりみたいいな表情をしています。さっきの男の人の話を思い返してみると、この国の様子が手に取るように分かります。

劣勢、迫り来る深海棲艦、国内治安の悪化……。

そんな事を考えていると、どうやら目的地に着いたみたいです。

「乗り心地、悪かったですよね？ 申し訳ありません」

私はトラックから降ります。

「ありがとうございます」

お礼を言って辺りを見渡すと、そこには片面に大きな塀が何処までも続いていました。塀を眺める私に、降ろしてくれた人は話してくれました。横須賀鎮守府のことを。

「横須賀鎮守府。正式には日本皇国海軍横須賀鎮守府艦隊司令部。たった半年で深海棲艦から次々と海域を奪還した、日本皇国の矛です」

私はそれを黙って聞きます。

「この国で、横須賀鎮守府を知らない人は居ません。そして、私たちと深海棲艦との戦争は、横須賀鎮守府無しではどうにもなりませんでした。近海から始まり、北はアルフォンシーノ、西はカスガダマ、南は沖ノ島まで、あらゆる方面の海域を奪還。欧州との貿易の再開、アメリカとのコンタクトまでも行いました」

「それは……凄いいことなんですか？」

「はい。それに私たち、下つ端には噂しか来ませんが、不確かな情報に更にあります。新鋭大型戦略爆撃機の大編隊による海上への絨毯爆撃戦術、最新鋭艦載機の開発と運用、現行戦闘機の改良、遠方から大破寸前の状態で帰還、残留兵の回収……。挙げ出したらキリがありません」

話を聞いて、想像するだけで恐ろしいモノがあります。どれだけの事を紅くんはしていたんでしょうか。

「では、物資の運び入れがありますのでこれにて」

「はい。ありがとうございます」

すぐにコンボイは走り去り、塀の途中にある門に入っていくしまった。

それを見送った私は、塀にそって歩きます。どこかに正門があるはずです。

――

――

――

歩くこと数十分、私はひととき大きな門にたどり着きました。その前には、テラスで話し掛けられた男の人と同じ格好をした人が4人、立っています。

その人たちの中で、一番近くに居た人に私は声を掛けました。

「あのー、すみません」

「はい、どうされましたか？」

柔らかな物腰で答えてくれるその人は、どうやら女の人みたいです。

「提督はいらっしゃいますか？」

疑り深い女の人は、上司に話してくるといつて離れていきました。数分後、戻ってくると、要件を訊いてきます。

「中へお入り下さい」

どうやら疑いはしたようですが、中に入れてくれるみたいです。

セキリユティーが甘い気もしますね。

門のすぐ横にあった小さい小屋で待つ事、7分くらい。いかにも士官、というような格好をした人が現れました。見た目は完璧、髪の毛の短いラ○ボーです。

「私は警備部の武下と申します。提督に御用があるとの事、ご案内させていただきます」

その武下と名乗ったラ○ボー風の男の人に着いて鎮守府の中を歩きます。

中に入った最初の感想は、広い。否、広すぎます。道幅は12mあります。そしてグラウンドらしきもの、大型ショッピングセンターらしきものであり、大きな建物が2つも立っています。そしてレン

ガ造りの建物、マンション、平屋が繋がっているモノがありました。それ以外にも、点々と建物があります。それだけ建物があるにも関わらず、鎮守府はおかしいです。これだけ広くて、建物も多いのに誰も歩いてないんです。

武下さんの後ろを歩く事、15分。大きな建物の前に着きました。横には、『警備棟』と書かれている看板があります。この建物の事を指してるのでしょうか。

警備棟に入ると、迷彩服を来た人たち立っています。小銃を携えています。こちらには向けずに、肩にかけてるだけです。

私と武下さんは、その間を通り抜けて会議室のような部屋に入りました。

「お座り下さい」

「ありがとうございます」

私は椅子に腰を掛けます。私が座ったのを確認すると、武下さんも腰を掛けました。

「さて、私は貴女に聞かなければならない事があります」

一気に辺りの空気が凄みしました。ピリピリとした空気を肌感じます。

「貴女は何者ですか？」

そう武下さんは私に訊いてきました。まあ、その疑問は勿論のことでしょうね。

ですが、私は質問を質問で返します。

「それを答える前に、聞いてもいいですか？」

「どうぞ」

雰囲気、服装を見る限り偉い人だというのは自明です。なら、私がどういう人間かというのを知らせなければなりません。

ですが、普通に私が異世界人だと言っても面白くありません。ですので、言い換えて伝えます。

「日本皇国とは、何でしょうか？」

効果てきめんです。表情は変わりませんが、空気が変わりました。少し時間を置くと、武下さんはそれに答えてくれました。

「深海棲艦が出現してから、国名を変えたんですよ。日本国から日本皇国へ」

ざっくりとした説明ですが、趣旨は伝わったと思います。

私が反応を返そうとした時、武下さんはさつきとは違う質問を私にしてみました。

「貴女、異世界から来ましたね？」

どうやら伝わったみたいです。

「よく分かりましたね。その通りですよ」

武下さんはぼそつと何かを言いましたが、私には少ししか聞こえませんでした。『まさか』だけでは、何を言ったのかは分かりません。

「なんとなく、ですよ。それで、貴女はどうしてここに？」

「ここに、私と同じ境遇の方、提督がいらっしやるだとか。よろしければ、私を置いていただきたいのです」

「成る程……そうですね」

私は嘘を言いました。ここに居られる口実を手に入れる為です。

「分かりました。話は付けて置きます」

武下さんはあっさりとした解を出しました。多分、上の人に伝えるということでしょう。上となると、多分ですが、提督に伝わるのでしようね。提督は紅くんですので、問題無い筈です。

「それと、貴女のお名前は？」

「碧 葵（へき あおい）です」

私は武下さんに偽名を伝えました。ここで私が本当に紅くんの姉だと証明出来るモノはありません。本名を言つて、写真を見せてもそれだけでは信じては貰えないでしょうから。

ここには身元を確認出来るものもありませんし、第一、本人が異世界人だと言っているのなら調べるのも野暮です。これですんなり通る筈です。

「分かりました。では、ここでお待ち下さい。案内を呼びます」

そう言つて立ち上がった武下さんは私に敬礼をします。それに私は答礼をしました。私は文民なものですから、額に手をあてる敬礼はしません。右の手のひらを胸の前にかざすだけです。

「おお、博識ですね。普通の人は、それを知りませんよ?」

「当然です。それに、私は文民です」

「それでは、失礼します」

私は右手を降ろして、椅子に腰を掛けます。どうやら後で、人が来るみたいですからね。

気になる事があります。ここに来るまでに、話した人たち。全員が迷彩服を着てました。一般人に会ってません。トラックからは見えますけどね。

その人たちを軍人として見るべきか、隊員として見るべきかは明白でしょうね。コンボイの人は、日本皇国海軍」と仰ってましたし。

更にもうひとつ、気になる事があります。横須賀鎮守府が先陣切つて戦っているというのに、何故、前線が海岸線から50kmまでしかないんでしょうか。色々な矛盾が生じているのです。その矛盾を証明するにも、情報が圧倒的に少ないです。

そして、この敗戦ムードは何なのでしょう?

私が現れた場所、テラスにあつた対空陣地。深海棲艦による本土攻撃。その対策でコンボイで動く、陸上輸送路。実際に私は見たことありませんが、第二次世界大戦、太平洋戦争末期の日本国内の状況を彷彿とさせます。

紅くんの来た、艦これの世界で一体、何があつたのでしょうか。

「失礼します」

私が考え事をしてしていると、扉がノックされました。そして、私が返事をする前に誰かが入ってきました。女の子です。それも、見覚えのある女の子でした。

「大淀型軽巡洋艦 大淀と申します。案内役として、貴女を案内させていただきます」

「大淀ですか……最期の連合艦隊旗艦ですね。私は、碧 葵です」

「よくご存知ですね。女性でそういう事を知っている方は珍しいですね。碧さんは、そういうのが好きな方なのですか?」

「たまたまですよ」

そう、たまたまなんです。紅くんが携帯電話で、何かを調べている

のはよく見かけましたからね。その時に聞いたとき、たまたま紅くんが調べていたのは大淀さんの事だったというだけです。

「では、付いてきて下さい」

そう言った大淀さんは扉を開きました。私は立ち上がり、大淀さんの後を付いていきます。

後ろから見る大淀さんは、格好はともかく、どう見ても人間にしか見えませんね。

艦娘はここまで人間に近いものなんですね。

警備棟を出た私たちは、大淀さんの案内で、鎮守府の中を歩きまわりました。グラウンド、大型ショッピングモール、警備棟、事務棟、本部棟、艦娘寮、食堂を見て回りました。他にも、埠頭、工廠、倉庫、要塞砲、滑走路跡なども見て回りました。

回るのに3時間以上、歩きっぱなしでしたが、鎮守府は平坦でしたので、そこまで疲れる事はありませんでした。それと、大淀さん曰く、大型ショッピングモールみたいなモノは「酒保」と呼ばれているそうです。

「さて、お部屋のご案内します。見ての通り、ここは軍事施設です。ですので、宿泊施設はありませんので、艦娘寮へご案内します」

「はい」

私が女性だったからでしょう。艦娘寮に通されました。多分、男性でしたら、警備棟の空き部屋になっていたんでしょうね。

艦娘寮に入れば、誰かとすれ違うと思っていました。そんなにすれ違いませんでした。すれ違ったのは、霧島さんくらいです。書類を持ってました。

「ここをお使い下さい。では、お夕飯の時に呼びに来ますね」

そう言っつて、大淀さんは私を1人部屋に案内すると、どこかへ行っつてしまいました。部屋の鍵も置いていきましたが、タグがついてません。管理外の部屋なのでしょうか？

私は部屋の中を見渡してみます。かなり清潔な部屋です。ですけど、使われていた部屋には見えませんね。備え付けのモノは、水道と鏡、ベッド、机と椅子、クローゼット、棚だけです。収納には何も入っ

てません。

何もすることがありませんので、私はベッドに倒れ込みました。そして、そのまま目を瞑ってしまったのです。そ

第4話 艦娘

寝てしまったみたいですよ。身体を大淀さんに揺さぶられ、私は起きました。

床が茜色になっていて、窓から夕日が差し込んでいます。

「すみません。起こさせていただきました。これから夕食です」

どうやら夕食みたいです。

「そうなんですか？ わざわざありがとうございます」

お礼を大淀さんに言っつて、身体を起こします。

「では、食堂に行きますよ」

「はい」

私は大淀さんに付いて部屋を出ました。

廊下に出ると、艦娘がチラホラと歩いています。どうやら皆さん、

これから夕食みたいです。

「碧さんは……異世界から来たとか。それは本当ですか？」

黙って歩いていると、大淀さんが私に話しかけてきました。

「どうやら武下さんに聞いたみたいです」

「はい」

「そうですか」

それで話が途切れました。まあ、これ以上、異世界から来た云々の話を続けても仕方ない様な気もしましたからね。

10分程、歩くと食堂に着きました。今日の午前中、大淀さんに案内してもらったので覚えています。中に入ると、大勢の艦娘がいます。その中に、私みたいな人は居ません。

横を通り過ぎる艦娘は、私に会釈をしてくれます。私もそれに答えて会釈をします。何かを話すわけでもありません。

「食堂では先ず、カウンターで何を食べるかを注文します」

私は大淀さんがする事を真似ます。トレーを取って、カウンターに並ぶ列に並びます。

「朝昼晩と食堂では食事が出来ます。メニューは全て日替わりです。注文するときは和食、中華、洋食の3種から選びます。碧さんはどれ

にしますか?」

私はカウンターまでの列の途中にある、看板に目をやります。そこに今日のメニューが書かれています。

「洋食にします」

「では、カウンターの順番が来たら、間宮さんにそれを伝えて下さいね」

順番が来て、私より先に大淀さんが注文します。大淀さんはどうやら和食を選んだみたいです。私の番になり、カウンターの前に立ち、間宮さんに注文します。

「洋食でお願いします」

「はい。お席でお待ち下さいね。それと、貴女が碧さんですか? よろしくお願いしますね」

「はい」

私は間宮さんに注文を取ると、そこから離れます。そして、大淀さんを探して席に座ります。

大淀さんが座っていたのは、どうやら金剛型戦艦の艦娘が集まっているところの横みたいです。

「こっちですよー」

そう大淀さんは呼んでくれます。

「早いですね」

「そうでしょうか?」

トレーを机に置いて、大淀さんの横に座ります。せっかく呼んでくださったので。

「オウ、ニューフェイスデスネー。お名前ハー?」

「碧 葵です」

「葵デスネ。私は金剛型戦艦 一番艦 金剛デース。いきなりで悪いデスガ、どうやってここに入ったデスカ?」

大胆に肩を露出させた巫女服に、特徴的なカチューシャをしています。それに顔をとて整っています。他の艦娘にも言えたことですが、けどね。

「色々ありまして、異世界から……」

私がそう言った途端、食堂の空気がガラリと変わりました。なんと
いうか、張り詰めたような感じでした。

この空気になったのは、私の発言が原因でしょう。異世界という単語がそうさせたのかもしれない。

「そ、そうなんデスカー。ということは、葵は提督なんデスカ？」

無理に話を繋げたのは見え見えです。ですけど、私からしてもあり
がたいです。

「提督では、あるかな？」

艦これは紅くんの失踪後から始めていましたので、嘘ではありませ
ん。

どうやら提督であることの話題には、特段、反応することはないみ
たいです。

「ほおー！ 何処のデスカ？」

金剛さんは興味津々に訊いてきます。そんな気になる事、なので
しょうか。

「岩川です」

「岩川デスカ！ 演習で何度か相手になってマシタ」

金剛さんも無理矢理には見えませんが、変な感じがしますね。勝手
なイメージを、私が押し付けているだけかもしれないけど。

「岩川の提督なら、どうして葵は岩川じゃくてここに居るデスカ？」

急な金剛さんからの質問だけど、どういう事なんでしょうか。どこ
の提督かと聞かかれて、答えただけです。なのに、ここに居ることを
疑問に思われているのでしょうか。

もしかしたらというか、絶対、私が岩川のサーバーでプレイしてい
るといふ言い方を変な風に答えてしまったからです。

ですけど、このまま行きます。ここでゲーム云々の話をしても仕方
ないです。そもそも、艦娘たちがそういつた事を知らない可能性だっ
てありますからね。

「それはどういう意味ですか？」

「そのままの意味デース。それと敬語はいいデス」

私は回答に困りました。

良い説明が思いつかないのです。少し私が悩んでいると、金剛さんが口を開きました。

「異世界から来たという事は、葵が”艦娘に呼び出された”って事デスヨネ？なら、ここに居る事はおかしいデース。ここはもう、提督がいますカラ」

”艦娘に呼び出された”とはどういう意味でしょうか。話の前後関係を考えると、異世界から来る人は、艦娘に呼ばれなきゃいけないという事なんでしょう。

「鎮守府や基地、泊地に所属している艦娘が一定の功績を挙げること、艦娘は妖精さんから”提督を呼び出す力”を使えるようになりマス。それによって自分たちを指揮している提督を異世界から呼び出す事が出来るのデス」

金剛さんの言い方によれば、私の元居た世界での艦これとこの世界は密接な関係にあるようです。それに、自分の指揮しているという言葉。何だか、含みがあるように思えて仕方ないです。

「普段からこうなので、気にしないで下さい。そうなんですか？」

「そうデスカ。ハイ。だから葵が異世界から来たという事ナラ、力を与えられた艦娘によって、その力が行使されなければあり得ない事デース。デスカラ、何故、ここに現れたのか……おかしいデス」

そんな話を金剛さんと話をしていると、大淀さんが話に加わってきました。

「不具合でもあったのでしょうか？」

「それは、あり得マス。これまでに、この力を行使したのは1回だけデスカラネー」

金剛さんと大淀さんがそんな事を話します。

そんな中、私はある言葉が気になりました。金剛さんの『1回だけ』ということです。

話の流れを見て考えると、この世界に提督として呼ばれた人がいるという事です。安直な考えですが、それが、紅くんなのでは、と私は考えます。

気になりましたので、話の間に入って聞くことにしました。

「1回って、どこの鎮守府ですか？」

多分、何の気なしに答えたんでしようけど、一気に周囲の気温と霧囲気が変調しました。悪い方向に、です。

「ここデス。横須賀鎮守府」

そう言った金剛さんもすぐに分かったのか、苦虫を噛み潰したような表情をしました。

その表情を見た瞬間、私はある事を悟りました。紅くんにかががあつたのだ、と。

ですけど、それを私は表情に出さずに、話をそらします。

「それときつきから気になっていたのですが、功績ってなんですか？」
私が気になってしたのは、提督を呼び出す力を使えるようになる条件、一定の功績です。まだ1回しかないのなら、相当難しいものなのでしようね。

「それはデスネー、司令部レベルが1ヶ塔台の時に、レア艦、レア装備を一定数持つてる事デース」

納得しました。それは確かに難しいでしょうね。

レアな艦娘の建造も、レアな装備の開発も、かなりの資材を使いますから、1ヶ塔台の時にはそんな事、出来る余裕もないですからね。よっぽど運が良くないかぎりあり得ないでしょう。

「そうなんですね」

「ハイ」

金剛さんはそう返事して、食事を進めます。話しながらなのに、とても器用です。

「そういえば葵。どこに現れたデスカ？」

不意に金剛さんがそんな事を私に訊いてきました。

「ここから近いところですか？」

そう私が答えると、今後は大淀さんが訊いてきました。

「それは、鎮守府の扉の向こう側ですか？」

「いいえ。ここから離れたところにある、高い建物の屋上です」

そう私が答えると、大淀さんは首を傾げました。多分、おかしなところがあるんでしようね。それは私も重々分かっています。これま

での話を整理すると、私がこの世界に転移するとすれば、岩川だったという事です。それにも関わらず、私は、ここから比較的近いところに現れました。大淀さんの話も付け加えると、現れるのなら、鎮守府のすぐ近くみたいです。

「変なところは多々ありますガ、赤城がいいと言ったからここに居るみたいデスシ。葵からも危険な雰囲気はしませんノデ」

そう言つて金剛さんは食べ終わったのか、箸を置きました。

「まあ、デスガ、ここに来たということは、何か目的があるという事デスヨネ？」

この鎮守府に入つて思うことがあります。鋭い人ばかりですね。

私はここで嘘を言つても仕方ないので、目的を教えました。

「探している人がいるんです。それで探し始めたのはいいんですけど、右も左も分からないですから、軍人さんに保護されてここに」
「そうだったのですか？」

どうやら武下さんは大淀さんに、どうして私がここに来たかということは教えてないみたいです。ですけど、武下さんに教えたものは嘘なんですけどね。

「はい。それで、ここから調査を始めようかと」

「そうデスカ」

そう答える金剛さんですけど、何だか様子が変わります。異世界の話をしている時のような、そんな雰囲気です。

「ちなみに、探している人ってどんな人デスカー？」

さつきと同じように、金剛さんが空気を換えようと、違うことを私に訊いてきました。私は今回も嘘を言わずに真実を言います。ですけど、名前をいいません。どんな人か、と聞かれているだけですからね。

「物静かで、歳の割に大人びています。私の面倒を結構見てくれます……」

「ということ、大人デスカ？」

「いいえ、今年で19歳です」

そう私が言うと、金剛さんの顔が見るからに青くなっています。

金剛さんの回りに座っている金剛型戦艦の他の姉妹も同様です。そして、それはかなりの範囲に伝染しました。

「そ、それで……アテはあるデスカ？」

金剛さんが訊いてきているのは、何処に居るのか検討が付いているのか、という事でしよう。本当は分かっていますが、はぐらかします。「さあ……分からないですね」

そう私が言うのと、突然、金剛さんがモノを纏め始めました。どうやら離席するみたいです。

「それでは、私はこれで失礼シマス」

金剛さんはトレーを持って立ち上がりました。どうやら帰るみたいですね。

私は少し挨拶をしました。とりあえず、知り合いましたからね。

ふとトレーを見てみると、来た時は無かったものが置かれています。

「食堂は変なシステムになっています」

私の様子を見て説明を始めてくれるみたいです。

「料理の注文受注と、作るのは間宮さんが行いますが、運搬は妖精さんがやります」

そう大淀さんが言っているのを聞き流して、私は目の前の光景に注目しています。妖精さんがあれこれと持って運んでいるのです。それがどんどん私や、大淀さんのトレーに置かれていきます。

「驚かないんですね」

「そりゃ、勿論」

これに関しては本当に驚いていません。驚く要素はありませんからね。この世界では。

そんな事より、大淀さんに聞いて置かなければならない事があります。それを聞くことにします。

「大淀さん」

「はい、何ですか？」

「入っちゃいけない場所とか、ありますか？」

私がそう聞くと、大淀さんは即答してくれました。

「私が説明してもいいんですが、やはり赤城さんに聞いた方がいいでしょうね」

「赤城さんですか……」

私はこの世界に来るときに見た、画面の映像がフツラツシユバックしました。

こちらに背中を向けた赤城さんに、その先に見えたこちらを向いた紅くん。接触しておいて、損はないでしょうね。

「分かりました。赤城さんに聞いてみる事にします」

「そうですか。私もそろそろ帰ります。ですけど、出たところでお待ちしていますので、終わったなら声を掛けて下さい」

「はい。では」

私もご飯を食べ終わりましたので、トレーを1度、片付けた跡に私は赤城さんを探し始めました。

赤城さんは特徴的な艦娘です。長い黒髪ストレート、袴を改造した様な格好の上にミニスカ、白いニーハイソックスを履いています。多分、艦これのキャラで赤城さんみたいな特徴をしている艦娘はいません。

目を凝らして、食堂の中を見渡すとすぐに赤城さんを発見できました。私はそこに向かいます。

赤城さんは食事を終えていた様で、トレーを片付けた後にまた、座りにきていたみたいです。傍らにはテレビのリモコンがあります。どうやらテレビの管理をしているみたいです。

「はじめまして」

「……あら、今日の方ですね。はじめまして」

私が声を掛けると、ほんの数秒考えた後、すぐに誰だ分かったんでしょう。はじめましてと、返してくれました。

「私は碧 葵です」

「私は航空母艦 赤城です。葵さんでよろしいですか？」

「はい」

軽く自己紹介をし合ったあと、私は赤城さんの正面に座りました。私は赤城さんの顔をよく見ます。幾ら、創造物の登場人物だったと

しても、今は異世界です。ですけど、それを抜いても美人です。まるで絵から飛び出してきたかのような。

「ここに居させてもらえるとの事ですけど、入ってはいけない場所とがあります?」

ここに居させてもらおう、ということは大丈夫でしょう。ですけど、入ってはいけないところなんて分かりません。軍事施設ですから、そんなところいくつもあっても不思議じゃありません。多分ですけど、大淀さんの案内の時に回らなかった場所。そこが立ち入り禁止なのかもしれませんね。

「基本的には出入り自由です。ですけど、モノの持ち出しは禁止です。それだけ守っていただければ有り難いです」

「そうですか。ありがとうございます」

私がそれを聞いて立ち去ろうとすると、赤城さんに止められました。

「待って下さい。ここに来た時、荷物はほとんど持ってないそうですね?」

急でしたので、何も持ってません。強いて言えば持ってきたものは、携帯電話と財布くらいです。

「一応、食事はここで摂る分にはお金は発生しません。ですけど、服などを用意するにはお金が必要です。お金は持ってますか?」

そう言われて、私はその場で財布を見せました。普通なら見せないものですけどね。

「紙幣はともかく、硬貨はみたことないモノです。硬貨は使わないようにしてくださいね」

「わかりました。では」

金剛さんといい、鋭い人、多過ぎです。それに洞察力や情報力にも驚かされました。

その後は、艦娘寮に戻って、ベッドに寝転がっています。ですけど、やることはありません。帰ってくる最中、大淀さんに『お風呂は、艦娘寮の地下1階ですからね』と言われて入ってきました。

情報を整理しようにも、ここに紅くんが居るって事しか分かってな

い
で
す。
そ
れ
に、
紅
く
ん
は
外
出
中
み
た
い
で
す
ね。
ど
れ
く
ら
い
で
戻
っ
て
く
る
か、
聞
い
て
お
け
ば
良
か
っ
た
と
思
い
ま
し
た。

第5話 警備棟

私はどうやら、寝てしまっていたみたいです。昨日、お風呂に入っただけ、何も無い部屋のベッドに寝転がったところまでは記憶があるんですけどね。

私は起き上がりますと、フラフラと立ち上がりました。着ている服は、昨日着ていたものですけど、着替えがありません。今日、酒保に買いに行けばいいでしょう。

よたよたと歩きますけど、今、目がぼやけていますので、部屋の状況が分かりません。ですので、ぼやけが取れるまで、ベッドに戻って座ります。

ぼやけが取れましたので、改めて立ち上がりました。それと同時に、昨日の記憶を掘り返します。昨日の出来事は、情報量が多過ぎました。色々な事が、1度に起こったからです。私はそんなに要領がよくありませんので、整理は追いついていませんが、これだけは言えます。私は今、異世界に居るんです。紅くんが消えたであろう。

私は顔を洗い、髪を手櫛で整えると、扉のノブに手を掛けました。私はこの時ほど、癖つ毛の無さに感謝した事はありません。髪にどう手を加えても、私の髪はそれに反発してストレートに戻るんです。パーマをかけようが、ヘアワックスをつけようが、意味がありませんでした。どうしてそうなるか、未だに理由はわからないんですけどね。

それと、私は普段、化粧をあまりしません。大人の女性としてどうなのか、とも思いますが、必要ないんです。色白ですし、アイプチも必要ないです。女性の敵だと、友人に昔言われましたが、女性が女性の敵ってどういう事でしょう。少なくとも私は、女性である事を捨てた覚えはありません。

そんな事を考えつつ、携帯電話をポケットに押し込みながら、扉を開きました。そうすると、突然、目の前に金剛さんが立っていました。

「お、おはようございます。金剛さん」

「おはようございます。……ノックしようと思ったら出てきたノ

デ、心臓が飛び出るかと思いきや」

金剛さんはそう言って、胸を撫で下ろしました。そうとうびっくりしたんでしょうね。

「起こしてくださろうとしていたんですか？」

「そうデス。鎮守府の朝は早いデスカラ」

金剛さんがここに居た理由なんて、それくらいでしょうからね。逆に、それ以外の理由があるのかと思う程です。

携帯電話を不意に取り出して、時間を確認します。今は午前6時8分。私からしてみれば、いつも通りです。これくらいに起きて、準備をしてから仕事に向かうのです。

「あつ」

私はある事を思い出しました。異世界に来たはいいものの、仕事場に何も連絡をしていないんです。

「ン？　どうかしたデス？」

「私、働いているんですけど、その先に連絡を入れてないんですよ」

「それって、悪い事なのデスカ？」

「はい。無断欠勤です。つまり、サボリというやつですね」

「アチャー」

金剛さんは額に手の平をあてて、少し大げさなりアクションを下しました。きっと私への気遣いでしょうね。

「良くないんですけど、こちらからは何も連絡出来ません。仕方ないですね」

「いいンデスカ？」

「いいんです」

そんな事を話しながら私たちは歩いていました。

直に食堂に着き、私たちは入っていきます。昨日の夜と食堂の雰囲気は変わりません。いつも通りなんでしょうね。

「さあーて、何食べるデスカ？」

「そうですねえ……洋食にします」

いつも、朝はパンと決めていきますので、洋食にします。多分、パンが出てくるでしょうからね。

金剛さんもどうやら洋食を頼んだみたいです。トレーを持って、席に座りました。

「おはようございますッ！ 葵さん！」

「おはようございます」

「おはようございます」

私と金剛さんが座ると、他の金剛型戦艦の艦娘が集まってきました。

「おはようございます」

私はそう軽く、挨拶を返します。そんな私に金剛さんが話しかけてきました。

「昨日、聞き忘れてましたが、私の姉妹の見分けは付きマスカ？」

「勿論ですよ。私の金剛さんを挟んだ反対側が比叡さん。正面の左が榛名さん。右が霧島さん」

艦娘の見分けがつかか、という事みたいでしたので、私は答えました。

流石に、艦これはやってましたから、分かります。大体の艦娘は分かるんじゃないでしょうか。

「正解デース。なら、他の艦娘の紹介も要らないデスネ」

「はい」

そう言つて一息吐いた金剛さんは、私にある事を訊いてきました。「そういえば、人を探すなら頼れる人を知ってマース。この後、行きますか？」

唐突な話ですが、正直、いらないます。紅くんがここの提督をしているのは分かっていますからね。ですけど、それをバラしていない今、何かしらの工作は必要でしょう。

「本当ですか？」

「ハイ！」

私はそれを頼る姿勢を見せます。

私が本名と誰を探しているのかを隠しているのかというと、単純に、何が起ころるか分からないからです。疑われて、警察に突き出されるってのが一番怖いですね。殺されるなんて事はないと思いたいで

す。

「じゃあ、その人に会ってみましようかね。金剛さん、よろしく願います」

「任せるネー！ それでサー、葵の探している人の写真とかないの？ さつき携帯電話持ってたケド？」

そう金剛さんは私に訊いてきます。私は携帯電話を取り出して、金剛さんに画面が見えないように操作をします。ここで感づかれたらそこでアウトですからね。

ここでもし、紅くんの写真を見せたらどんな反応をするか分かりません。相手は紅くんの艦娘です。

それよりも私は気になる事があります。昨日、話の途中で出てきた”艦娘に呼ばれた”という言葉。どういう意味なんでしょうか？ですけど、これが紅くんの消えた謎に繋がるのでしょうか思えないんです。

そもそも、この世界で起きている事が丸で分かりません。昨日も考えましたがさっぱりでした。眼と鼻の先にある防衛線、コンボイ、対空陣地……。一体、何があつてこんな状況になつているのでしょうか。それに対空陣地の人が言つていた、『提督が……』、『提督さえ戻つてきて下されば……』という独り言も気になります。前者はともかく、後者に関しては、ある事を揶揄しているように思えて仕方ありません。

(あの言葉をそのまま解釈すれば、紅くんが姿を消しているということでしょうか?)

単純に考えたらそういう事になります。それならコンボイの人や、聞いた話と辻褃が合います。対深海棲艦戦闘を担ってきた横須賀鎮守府が活動していないとなれば、それまでに奪還していた海域を深海棲艦に再攻略されてしまうのも理解できます。

そうなると、横須賀鎮守府の皆さんは姿を消している提督を探そうと動いていないように見えるのは、何故でしょうか。私が1日2日で分かるようなことでもありません。私が気づいていないだけで、水面下で捜索が行われているのかもしれないからね。

「葵？」

考え事をしていた私に顔を、金剛さんが覗きこんできました。

きめ細かい白い肌に大きな目、長いまつ毛、端正な顔立ち。女の私
でさえも、ドキツとする程の美人です。

「あつ、いや、なんでもないです。……見つからないですね」

「そうデスカ……。それを手がかりに出来れば、と思っただんデスケド」

金剛さんはそう言っただけで落ち込んでしまいました。

私の人探しに熱心になってくれるのは有り難いですが、もう、探す
必要はないんですね。それに、人探しをするにしても、異世界から
来た人間なんてすぐに分かると思います。それだけで十分、特徴になっ
ていますからね。

「いいですよ。そもそも、異世界から来てる人ですから、すぐに分か
ります」

そうフオローを入れます。親身に考えてくれますからね。

「そうデスネ……。とりあえず、食べ終わりましたノデ、その人のところ
にとりあえず行きマスカ？」

私も金剛さんも食べ終わってましたので、トレイを持って立ち上
ります。

「はい」

比叡さんたちに少し会釈すると、私は金剛さんと食堂を出て行きま
した。

—————

—————

—————

金剛さんに案内された先は警備棟でした。昨日来たばかりですが、
金剛さんの言う頼れる人がここにいるんでしょう。

私は黙って、金剛さんの後を付いてきます。

中に入ると、金剛さんが迷彩服を着た人に『巡田さんは帰ってきて
マスカ?』と言っていました。多分、頼れる人というのが、その巡田
さんという人なんでしょう。それからの話を聞いている限り、まだ
帰ってきてないらしいです。ですが、もう少ししたら帰ってくると
仰っていました。そのまま私たちは、警備棟の中で待つことになりま

した。

金剛さんは武下さんに用事がある、といって席を外しましたので、私はその場に1人になってしまいました。離れたところに迷彩服を着た人が2人、立っているだけです。

私は考え事を始めました。今度は“艦娘に呼び出された”の真意です。言葉通りの意味だということは分かっています。ですけど、その意味が何を指しているのか分かりません。私は、その言葉が出てきた場面を思い出します。その時は金剛さんと、異世界から来たという話題をしていた時でした。

その時の言葉を出来る限り、思い出します。

『異世界から来たという事は、葵が“艦娘に呼び出された”って事デスヨネ？なら、ここに居る事はおかしいデース。ここはもう、提督がいますカラ』

金剛さんがそう言っていたんです。私が意味を知ろうとしている言葉の簡単な説明がありました。

端折ったものでしょうけど、話を整理したら『紅くんが横須賀鎮守府の艦娘に呼び出された』という事になります。

なんて簡単なんでしょう。私の率直な感想です。約半年間、考え続けてきていざ異世界に来たら、たった1日で紅くんの失踪原因が分かかってしまったんです。

紅くんの失踪原因は、横須賀鎮守府の艦娘です。自供しているので、その通りなんでしょう。

私は今、考えていた事を携帯電話のメモに書き残しました。

真新しい訳ではありませんが、割りと内装が綺麗な警備棟です。ですけど、迷彩服を着ている人の様子が変です。外に立っていた人たちと同じ格好ではあるんですけど、なんといいいますか、違います。よく見れば、持っている銃も違います。細身でシユツとしているものではなく、角ばっています。紅くんに聞けば分かるんですけど、今はいません。

じっと私が見ていると、あちらも流石に気付いたみたいで、こちらに来ました。

「昨日来たというのは貴女ですか？ 何でも、異世界から来たとか」
「そうですけど、貴方は？」

「私は横須賀鎮守府付私設軍事組織『柴壁（さいへき）』 番犬第1中隊の西川です」

「あつ、はい。私は碧 葵です」

途中までは理解できませんでしたけど、西川と名乗ったこの男の人は何を言っているのでしょうか。ここは曲がりなりにも軍事施設なのに、私設軍事組織が中に居るとはどういうことなのでしょう。

「あの。ひとつお尋ねしてもよろしいでしょうか？」

「なんなりと」

「何故、軍事施設に私設軍事組織が？」

「話せば長くなります。私たちは軍を離れてまで、ここにいたいと思いましたが、雇って頂いているんですよ」

そう西川さんは笑顔で返してくださいました。となると、門の前に立っていた人たちは軍人で、施設内に居る人たちは隊員、社員みたな扱いなんでしょうね。

「それで、碧さんはどうしてここに？ 鎮守府内には現在、許可が降りないと入れない様になっているはずですが？」

西川さんは聞いてきました。この質問は昨日も聞かれたものです。軍事施設なら許可なら必要ですけど、西川さんの言い方ですと、並のことでは入れないみたいですね。

ここで理由を正直に言ってしまったら、別に不利益はありません。

「異世界から来たんですよ。人を探しにですが」

間違った事は言ってます。

「ええ、それで？」

どうやら凌げたいみたいですね。あまり深く聞かない性格なんでしょう？

「外で探していたら兵士に捕まってしまいました、若い女がほつつき歩いていたら危ないからと、ここに連れてこられました」

「そうなんですか。それで、探している人は？」

「その為に、巡田さんという人に頼ろうと思ひまして、ここに居るとい

うことです」

「ああ、巡田さんですか」

西川さんはそう、私の話に相槌を打ちます。金剛さんと誰かが話していたところで出てきた人の名前を適当に上げただけです。それが当たっていたということですね。

「了解しました。それと、先ほどの自己紹介でなんとなく察しているとは思いますが、ここの警備に関して説明させていただきます」

唐突にそんな事を、西川さんは私に言いました。まあ、ここに居ると分かった訳ですからね。教えない訳にもいかないでしょう。

「お願いします」

西川さんは説明をしてくれました。ここ、横須賀鎮守府は過去に様々な事件に巻き込まれていた事を念押しされました。それを踏まえての説明です。

国内外の勢力からのデモ、圧力、攻勢などに対抗するために、私設軍事組織の前身である、横須賀鎮守府警備部があったらしいです。今となつては、解体されてないようですがね。訳あって解体されて、その任を現在の私設軍事組織が担っているそうです。

任務内容は多岐に渡っているらしいですけど、決まりがあるそうです。『自らの命が危ぶまれない限り、殺してはならない』だそうです。いわゆる、専守防衛と攻勢を混ぜたものという事らしいです。

そして、私設軍事組織の維持は横須賀鎮守府が出資しているそうです。

「そんな……ここって、軍事施設ですよ？」

「そうですよ？　ですけど、ここは特殊なんです。例外が利きますからね」

「特殊なんですか？　他にも、艦娘が所属している基地はあると思いますけど？」

「はい。艦娘とか関係なしに特殊なんです」

少し、話をはぐらかされた気もしますが、話を聞いて分かってきた事があります。西川さんは横須賀鎮守府の提督、つまり紅くんとそれなりに交友があったのでは、と思いました。度々、話をしたり、出

掛けたりしていたみたいなお話を言っていましたからね。

これは、有力な情報源を手に入れました。ですが、金剛さんの仰っていた巡田さんに会いますので、まだまだですね。それにその巡田さんにどこまで話すか、どんな人か見て判断しましょう。もし、信頼するに値する人でなければ話しません。

「その特殊というのを、見てみたいですね。既に、色々特殊なところは多いと思いますが」

「まあ、今ではその特殊なところは、見れないでしょうね」

どういう意味でしょう。

そう言った西川さんは、『あまり長話していますと、怒られてしまいますので、これで戻りますね』と言って、戻ってしまいました。

それと同時に、金剛さんが戻ってきました。誰かを連れて歩いています。

「お待たせしまシター。葵ー、この人がその人デース」

そう金剛さんが言うのと、金剛さんが連れてきた人が話し始めました。

「私は巡田と申します。金剛さんから聞きました。何でも、異世界から来たとか」

「はい。私は碧 葵です」

軽く挨拶を済ませます。

「では、立ち話も何ですから、移動しましょう。会議室を借りていますので」

私は巡田さんの後を、金剛さんと共に付いていきました。

この巡田さんという人、何だか気が抜けないと感じました。なんとなく言っている表現すばいいいんでしょうか。見透かされている……そんな感じがしました。

第6話 真実

私と金剛さん、巡田さんは会議室に入りました。

中は至って普通な会議室です。机が楕円状に並べられています。巡田さんと金剛さんは並び、その正面に私は座りました。

「金剛さんからお聞きしました。私に何かして欲しいそうですね？」

「はい」

私のところに戻ってくるまでに、金剛さんは巡田さんにある程度、話してくれていたみたいですね。

心の中で金剛さんにお礼を言っつて、話を始めます。

「人探しを、お願いしたいです」

「ふむ……私は探偵ではないんですが。それで、どんな人を探しているのでしょうか？」

そう巡田さんが訊いてきました。反射的に携帯電話に手が伸びましたが、出す寸前で躊躇しました。この場で写真を出すと、面倒な事になると思っただけです。

そもそも、巡田さんに写真を見せたところで、どうしようもないです。探している対称が、この提督ですからね。

「私と同じ、異世界からこの世界に来た人です。と言っても、私よりもかなり前に来ているみたいですけども」

私がそう言いますと、巡田さんの表情が険しくなりました。

「少し、席を外して貰えますか？」

「……分かったネー」

突然、巡田さんが金剛さんを会議室から追い出しました。理由が分かりません。

「どうしたんですか？ 金剛さんを追い出して」

「どうしたもこうしたもないです。異世界から来た人を探して欲しいって……碧さんはともかく、私が知っている限りだと提督しか居ません」

そう言った巡田さんは、私に訊いてきました。

「もしかして、探している人というのは、提督の事ですか？」

巡田さんに言われて、私は初めて気付いた事があります。よくよく考えて見れば、異世界から来た人で自分から堂々と、『私は異世界から来ました』なんて言う人は居ないでしょう。それを私は堂々と、言っ
て回っています。そして、どうしてか知りませんが、この艦これの世界では、紅くんが異世界から来た人だということが知られています。普通に考えれば、私が探している私と同じように異世界から来た人なんて、紅くんしか居ません。だから、あの機関銃のあつたところで会った男の人は、私はここに導いたんでしよう。

私は悩みました。ここで、本当の事を言ってしまうでしょうか。それとも、嘘を貫き通しましょうか。

ですが、ここで本当の事を言っておいた方が、良いのかもしれない。そう、私の心は揺らぎました。

私は、携帯電話をポケットから取り出し、画面に紅くんだけが映る写真を、巡田さんに見せました。

「この人です。私が探しているのは」

そう言っ
て私は、紅くんの写真を巡田さんに見せました。そうすると、巡田さんの様子がおかしくなりました。顔が次第に青くなり、頭を抑え始めたんです。

私はなんと伝えればいいか、わからなくなりました。

この写真を見せたなら、私が何者かなんて分かっ
てしまっ
う。

「こっ
つ、この方はっ……てっ、提督?! しかも、第二種軍装ではない、高校生が着ているようなブレザー……」

今までの反応でハッキリしました。この人はまだ若いし、経験が浅い様です。口から感情が駄々漏れしています。斯く言う私も、人のことを言えないですけど。

ここから先、何を言おうか悩みました。偽るか、本当の事を言うかです。

私は考えます。どちらが正解なのか分かりません。

「貴女は一体、何者なんですか？ 提督の写真を持って、探しているだ

なんて」

単純な疑問でしょう。こんな写真を持っている事が、この世界ではおかしい事なんです。

そんな私は、答えに悩んでいます。どう答えたものかと。

先ほど、私は偽名を名乗りました。それをコロツと『さっきのは偽名です』なんて言ったたら、どうなるか分かりません。それに、巡田さんに会う前、西川さんから聞いたあの話、横須賀鎮守府の警備状況に關して、気になるところがあります。こんな状況になってしまった経緯が、単純に気になっているんです。

「質問に答えて下さい。もし答えないのでしたら、実力で貴女を”消す”事も出来るんですよ」

黙って考え事をしていた私に、そう巡田さんは言いました。それに後で言った言葉が気になります。私を”消す”事が出来るということとはつまり、殺せるということでしょう。

「殺人罪になるのでは？ 無抵抗な人間を殺すとは」

ここで私が落ちていていられるのは、人を殺すための道具が見当たらないからです。もし、巡田さんの手で首を締めるなりして殺すなら、抵抗する猶予は何秒かでもある筈です。

ですが、武器があればどうでしょうか。一瞬で私は殺されてしまいます。

「私が何者か答えてもいいですが、その前に拳銃やナイフは床に置いて下さい」

これは保険です。巡田さんが何者か分かりませんが、ここの警備をしている人間となると、武器を持っているのは確実です。

巡田さんは私に言われた通り、拳銃とナイフを床に置きました。やはり持っていたんです。

「これでいいですよね？ これをさせるといふ事は、貴女が私”たち”にとって不利益な存在であるか？」

私は意を決しました。本当の事を言います。私が紅くんの姉だといふ事をです。

「どうでしょうね？」

手に汗が滲みます。背中も暑くなってきたのと同時に、足も震え始めます。

「さっきのは……偽名です」

言ってしまいました。

「本名は、天色 ましろです」

何が起るのか、それすらも私には分かりません。どんな反応を巡田さんがするのかなんて、私に分かる訳がありません。この世界にとって、紅くんがどんな存在だったかなんて、私には知る時間ありませんでしたからね。

「天色っ!? まさかッ!!」

予想に打って変わって、巡田さんの反応は私の想像とは全然違いました。

本名を言っただけで、巡田さんはこの世に絶望したような表情をしています。

何故、そんな反応をするのか分かりませんが、私は話し続けます。紅くんとの関係、この世界に來た目的を巡田さんに伝えます。

「横須賀鎮守府の提督である天色 紅は、私の弟です」

そう言った瞬間、巡田さんはしゃがんで拳銃を手に取りました。そして、その拳銃を操作すると、私に差し出しました。

「私を、撃つて下さい」

唐突に巡田さんの言った言葉を、私は理解出来ませんでした。

何故、いきなり私に撃てと言ったのでしょうか。

「どういう事ですか?」

私は拳銃を受け取らずに、巡田さんに聞きます。そうすると、答えは返って來ました。

「横須賀鎮守府艦隊司令部司令官である天色 紅中佐、提督は……貴女が來られる数週間前に……」

巡田さんは、そう言いかけて止まりました。というより、躊躇しているみたいです。

「数週間前に、紅くん何かあったんですか?」

私がそう聞くと、巡田さんは膝から崩れ落ちました。

涙を零し、焦点が合っていない目で私の目を捉えてきます。

「……腿と足の甲、左胸を撃たれたんです」

「うそっ……」

手と足が震えているのが、自分でも分かります。いきなり突きつけられた現実には、私は混乱しました。考えていた事も、全て阻害されてしまったんです。

「それに……私は約5ヶ月前、提督を撃ちました」

巡田さんが、何故そんな事を言ったのか分かりません。ですけど、強烈な殺意が込上がってきました。

反射的に、巡田さんが持っていた拳銃をひったくりました。そして、巡田さんの額に銃口を突きつけます。

「この距離なら、絶対に外しませんッ!!」

身体が勝手に動きました。頭の中で私の声が、『こいつを殺せ』と訴えかけてきます。私の弟を、紅くんを撃った人なんです。

「命乞いをするつもりはありません。ですが、聞いて下さい」

私は答えこそしませんが、引き金から指を少し浮かせました。

「提督を撃った時、当時の私は洗脳されていたんです」

「洗脳?」

「はい。説明は省きますが、『海軍本部』という組織に以前、私は所属していました。そこは艦娘を統制し、深海棲艦との戦争を上から見下ろしていた集団です」

私は引き金から指を離しました。巡田さんの話は、聞く価値があると思ったからです。

「どういう意味ですか?」

「この世界は、貴女の思っているよりも複雑なんですよ。……『海軍本部』という組織は艦娘をモノの様に顎で指図して戦争を押し付けていた集団です」

巡田さんの言った事は、半分くらいは理解できました。最後の『海軍本部』という組織は、というところ以降はよく分かりませんでしたけどね。

「その組織に私は洗脳され、ある任務を任されたんです。その任務が

『提督の暗殺』でした。目的は今でも分かりませんが、排除しなければならなかった事は確かです」

「紅くんを、ですか？」

「はい。それで洗脳されていた私は、何故か警備が嚴重になっていた横須賀鎮守府に潜入しました。監視や警備の目を掻い潜り、提督の目の前に現れた私は撃ちました。ですが、当たったところは致命傷にはならなかったんです」

そう言つて、巡田さんは自分の右胸に手を当てました。

「ここに当たりました。心臓には破片すら当たっていません。弾は身体を貫通し、肺に穴が空いただけで済んだんです。それから私の洗脳は解かれて、今に至ります」

どうやら洗脳が解けた事で何かがあり、その殺そうとした相手のいる横須賀鎮守府で働く事を決めたみたいです。

確かに、これだけでも複雑です。こんな事を細かく説明していたら、かなり時間が経ってしまったでしょう。

「まあそれは置いておいて、です。撃たれた時の状況を知っていると、いうことは、目の前で見ていたということですか？」

巡田さんが何をしていたかなんて、どうでもいいです。紅くんがどんな状態で、どうなったのかを私は知りたいんです。

「はい。警備に800人以上投入し、艦娘の皆さんにも協力していただきました。ですが、拉致されてしまい、誰もいない廃工場で……」

手が震えます。拳銃の重みに耐えられないのと、怒りです。一体、誰がどんな目的で撃ったんでしょうか。

「見ているだけしか出来なかった私は、貴女になんと申し上げればいいのかッ!! あの最悪な状況で、足を踏み出せなかった私を撃って下さいッ!!」

そう言つて巡田さんは、拳銃を握っている私の手を掴み、支えました。外さないように、ということでしょう。

「肝心な事、忘れてませんか？」

そんな巡田さんの手を払い、私は拳銃を床に置きました。

「えっ?」

巡田さんは肝心な事を言ってます。その時の紅くんの容体、現在の様子です。それを聞かない限り、私は巡田さんを撃つ気になれないのです。

それにもし、紅くんが死んでいたとしたても、多分私には巡田さんを撃つ勇氣はないです。人を殺すんですから。

「紅くんのその時の容体ですよ。巡田さん、最低限の知識はありますよね？ どうなったたら人が死ぬのかくらい」

私がそう言うと、すぐに巡田さんは答えました。

「先ず、腿を撃たれました。動脈血も出ていました。次に足の甲です。最後に右胸」

聞く限り、動脈血を出しているのなら酷い状態です。

「それから？」

「軍病院に搬送されました。それから……連絡がありません」

「こちらからの連絡は？」

「取りましたが、どうやら軍の要人扱いらしく、部下だと言っても教えてくださいさらないで……」

どうなっているか、私には分かりました。紅くんは生きています。死んでしまったのなら、この世界に来てからの経験から、かなり大事になるはず。唯一心配なのは、障害が残っていないかだけです。

「成る程……分かりました」

私はそう言って手を差し伸ばします。

「それなら多分、生きていますよ」

「え？」

「死んでしまったのなら、大事になりますよね？ 違いますか？」

「違いますけど……」

「なら生きてます」

私は巡田さんを立ち上がらせて、拳銃を返しました。

「これといった根拠はありません。それでも、死んでないと断言できません。紅くんはこの国にとって、とても重要な存在。そうですね？」

「はい」

「なら、紅くんの情報をシャットアウトするのは当然ですよね？」

拳銃を受け取った巡田さんは、弾倉を抜いて薬室の弾丸を抜くと、拳銃を仕舞いました。次にナイフを拾い、仕舞うと私に向かって敬礼をしました。

「ありがとうございますッ！」

「何がですか?!」

「私は前向きに考える事を放棄してたんです。この鎮守府は、いつも良くない事が降りかかり、その度に提督が払ってきたんです。その提督が居ない今、私は正常な考えをすることが出来ませんでした。考えてみればそうですね。提督が要人なのは当然です」

巡田さんの表情から、沈んだ雰囲気は消え去っていました。

「少し用事が出来ましたので、失礼します！」

そう言って巡田さんは、走って会議室を出て行ってしまいました。

「あー。せめて、外まで連れてって欲しかったです……」

その一方で、私は置いてかれました。

ですけど、良かったです。最初、撃たれたなんて聞いた時、とんでもなく不安になりました。それでも状況を聞けば、簡単な事だったんです。

そんな状況なら、紅くんが生きている事は確かです。完治まで隔離でもされるんでしょうね。

第7話 重い空気

巡田さんに置いてかれた私は、近くを通りかかった武下さんに外まで連れてってもらいました。その際に、私は巡田さんに伝えた話を話しました。その時の反応は、巡田さんと同じでした。おもむろに拳銃を抜き、私に差し出すと、『私を撃つて下さい』と同じセリフを言ったんです。

その時には、既に出口付近で、巡田さんを待っていたところだったので、警備をしていた西川さんらも動揺し、同じように私に撃つて欲しいと言ってきました。そんな武下さんらに、巡田さんと同じような事を言うとなちまち元氣になりました。そして、その場で武下さんはある事を言い始めました。

この横須賀鎮守府にある民間軍事組織には諜報部門があるそうです。そこを取り仕切っているのは巡田さんらしいです。巡田さんは諜報員だったんですね。

その諜報部門に任務を出すと、武下さんは言ったんです。任務内容は、提督が収容された軍病院に潜入し、容体を確認する、です。聞く限り、なんとも滑稽な任務ですが、それが巡田さんらでは軍病院に入る事が出来ないらしいです。だから、潜入するという任務になった様です。

普通ならすんなり入れるのではないんでしょうか、と私は聞いたんですが、どうやら民間軍事組織だから無理だと言われるらしいです。話を聞いてみると、武下さんらは全員は元海軍憲兵から横須賀鎮守府門兵になった人や、訳ありで増員した陸軍の部隊の人らしいです。紅くんが撃たれたことから全員が退役、そのまま民間軍事組織を立ち上げ、横須賀鎮守府の私兵になったという事みたいです。詳しい話は、かなり省かれていたみたいですが、軍人ではない上に、相手が要人だから話を聞かせてもくれないからこそその任務ということですよ。

「では、私はこの任務の下調べがありますので、これにて失礼しますね」

そうやって、武下さんは走って行ってしまいました。

それに続くかのように、西川さんも聞いていた片割れに口止めをしました。

「では、お姉さん。ありがとうございます」

「あはは。私、貴方より年下ですよ?」

そう言つて私は、警備棟から出て行きました。

何もせず、そのまま寮に戻った私は、自分の部屋に帰ると、時計を見て寝転がりました。時間は午前11時です。大淀さん曰く、昼食は正午からの事でしたので、それまで私は目を閉じました。

――

――

――

腹の虫に私は、目を覚まされました。携帯電話を点けて見れば、時刻は正午を少し回ったくらいでした。この時間は、大淀さんから聞いていますが、昼食の時間です。私はそのまま部屋を出て、食堂に向かいます。もう、何回か行つてますので道は覚えていきます。

食堂に着いて、艦娘に混じつて、カウンターで間宮さんに注文をします。今は中華の気分ですので、中華を頼みました。トレーを持って、そのまま空いている席に私は腰を掛けました。

私が座つたのは、多分ですけど大井さんの隣です。北上さんとベタバタしているイメージがありますが、私が隣に座つた大井さんの横に北上さんは座つてはいるものの、そんなにベタバタしている雰囲気はありません。

どちらかと言うと、親友というか姉妹という雰囲気です。

「あら、赤城さんの言っていた人ですね。はじめまして、大井です」

「はじめまして」

私は自分の名前を出しそうになりましたので、はじめましてと挨拶しただけで口を閉じました。

そんな私をマジマジと見る大井さんに、少し声を掛けてみます。

「どうかされましたか?」

「いえ。困った事があれば、何でも言つてくださいね。それと、敬語はいいですよ」

「そうですか？　ですけど、これ、治らないんですよ」

次々と妖精さんが運んでくるのを眺めながら、私は大井さんに訊きました。

「提督は、お泊りで何かお仕事でもあるんですか？　昨日もいらっしやらなかったみたいですけど」

そう言うのと、大井さんは肩を跳ねさせました。真横に居ても分かかるくらい大きいです。

「そつ、そうね……いつになったら」

大井さんの顔を見ると、どんどん表情が暗くなっていくのが分かります。そんな大井さんを見ながら私は、巡田さんが言っていた事を思い出しました。鎮守府の外にある廃工場で撃たれて運ばれたということなんです。それからどうなったかは知らない、そう言っていたんです。

「止めなよ、大井っち」

大井さんの横に座っていた北上さんが、いきなりこつちを向いたかと思うと、そう言いました。

「はい……」

「外の人さあ」

大井さんが黙ると、入れ替わって北上さんが話しかけてきました。

「提督の事、嗅ぎまわってるみたいだけど、何が目的なの？」

そう、冷たい声で言いました。一瞬にして、私の周囲の空気も冷め、緊張が走ります。

「金剛さんとかに頼んで、何かしているみたいだけど、止めてくれない？　金剛さんだって、きつと嫌な思いしながら手伝ってくれてるんだと思うけど」

「嫌々ですか？」

「うん」

そう言った北上さんはそっぽ向いて、大井さんの頭を撫でると、自分の昼食を食べ始めました。私も何か聞く気になれずに食事を始めます。美味しい筈なのに、喉を通りません。何故でしょうか。

紅くんが外で撃たれた事と、艦娘に一体何の因果関係があるのかを

考えます。

答えは簡単でした。”艦娘に呼ばれた提督”である紅くんは、約7ヶ月間、提督として指揮をして戦果を挙げていました。そんな中、大量の警備をいとも簡単にすり抜けられ、拉致された挙句、撃たれてしまいました。

これだけで考え付く答えは、『艦娘が呼び出しておいて、国内の暗殺者に手をかけられた。しかも自分たちは何も出来なかった』ということとでしょう。

(でも、これだけじゃ弱いんでしょね。きつとまだ、何かある筈です)

そう、疑いました。ここまでの反応をする理由がある筈なんです。

――

――

――

私は昼食を終え、トレーを戻して帰ろうとすると、ある艦娘が出口で立っていました。皆、立ち止まらずにそれぞれ出て行くにも関わらず、その艦娘だけがその場に立っているんです。そして、私をずっと見ているんです。

「どうされたんですか？ 赤城さん」

「はい。少し、お話がありました、少々時間をいただけませんか？」

そう言われ、私は艦娘と紅くんの別の繋がりについて考えながら、赤城さんに付いていきます。付いて行った先は、初めて行く場所でした。

他の扉よりも大きな扉で、その横には“執務室”と書かれた板が掛かっています。

「入ってください」

私は言われるがままに、執務室に入りました。中はとても綺麗で、率直に言えば、使っている雰囲気はありません。ですけど、埃がないんです。よく分からない部屋ですけど、ここが何をする部屋かは分かりません。

提督が仕事をし、だいたいここに居る部屋なんでしょう。

「そこに腰かけていて下さい。お茶を淹れてきます」

赤城さんは私をソファアに案内すると、どこかへ消えてしまいました。多分、給湯室に行つたんでしょう。それっぽい部屋が、入つてきた時に見えましたからね。

(ここ、執務室ですね)

ここに連れてこられた理由が分かりません。それに何故、ここを選んだかもです。

「……貴女の本当の名前を教えてくださいませんか？」

お茶を淹れてきた赤城さんは、私の対面に座ると、そう訊いてきました。

(そのことを誰から聞いたんでしょうか？ 状況から考えると、巡田さん……かもしれないですね)

一瞬、頭を過ぎつたのはそのことでした。赤城さんは多分、巡田さんから昼までに話を聞いていたということでしょう。それから、私に何か言いたい事がある、と考えられます。それを聞く前に、私の本名を聞いたという事ですね。

「天色 ましろです」

「天色っ?!」

そう私が本名を名乗つた途端、赤城さんは凄く反応しました。表情からして、かなり驚いているみたいです。

「貴女が探している人というのはっ……」

少し、赤城さんは呼吸を乱しながら訊いてきます。

このままいくと、過呼吸になりかねません。極度の緊張が出ているんでしょう。紅くんがこの提督で、『海軍本部』という組織の何かで殺されたと考えているとしたら、そんな様子に赤城さんがなつてしまふのも頷けます。

「横須賀鎮守府の提督です。提督は私の弟ですから」

私は真実を、嘘偽りなく言いました。多分、巡田さんから聞いていたと思つたんですが、面と向かつて言われるのでは違うみたいです。既に過呼吸を起こしています。

喉を鳴らし、大きく肩を上下させながら息を吐く赤城さんに、私は

近寄って声をかけます。

「赤城さん、ごめんなさい」

私はそんな赤城さんの口を塞ぎました。無理やり鼻呼吸をさせ、すぐに手を話して指示を出します。

「息を止めて下さい！ そうしたら、少し空気を吸って、また息を止めますっ！」

落ち着いてきたのか、私の指示を聞いてそれを実践する赤城さんの傍らで様子を見てみると、過呼吸はだんだん治り、普通に呼吸が出来る様になったみたいです。

ですので、話を再開しました。

「それで、私を呼び出したのは、こんな事を聞きたかったからではないですよ？」

ソファーに座り直した私は、赤城さんに訊きます。

「はい。勿論です」

そう答えた赤城さんは、怯えた目をしながら、私を見ました。そして、唐突に立ち上がると、床に正座をして手を付きます。そして、頭を下げました。

「申し訳ありませんでしたッ!!」

何に対してなのかは言いませんが、なんとなく何のことだか分かりません。

頭を下げた時、鈍い音がしましたので、多分頭を打ち付けたんでしょう。ですけど、赤城さんは頭を上げません。

「私たちは事情を鑑みず、自らの利ばかりを考えて、提督を呼び出した拳句、瀕死に……」

そういう事です。やはり、巡田さんは赤城さんに話していたんです。そうだろうとは思ってましたけどね。

私は言葉に詰まりました。どう言葉をかけていいのか分かりません。赤城さんが頭を下げたまま、刻々と時間が過ぎて行きました。

第8話 謝罪

私が何を言おうか考えていると、赤城さんは顔を下げたまま、話し始めました。

「……紅提督がこちらに”呼びだされた”のは、9月初旬です」

確かに、紅くんが失踪したのは、9月1日です。間違つてませんね。「”呼び出した”理由ですが、私たちを直接指揮をして頂くためです。元より、私たちは印刷機から吐き出される指令書で、作戦行動を取っていました」

部屋を見渡すと、確かに大きなプリンターが置いてあります。埃は被つてませんが、長く使われてないみたいですね。

「ある条件をクリアした私たちは、”提督を呼び出す力”を行使。紅提督をこの世界に”呼び出し”ました。それからは、ずっとここに”私は、赤城さんを見ます。かれこれ6分くらい、頭を下げたままなんです。」

どういう意図で土下座するに至ったか、分かりません。ですけど、紅くんは自分の意志でこの世界に来た訳ではない事は、自明でした。元居た世界に伝言や痕跡も残さずに消えたんですから。

「着任歓迎会、第四艦隊開放、軽空母戦隊によるカムラン半島強襲、娯楽品や施設の設置、暗殺未遂事件、軍法会議、観艦式、運動会、ジャム島攻略作戦、様々な新戦術、リランカ島空襲、鎮守府初空襲、空襲からの復興、鎮守府文化祭(仮)、ドイツ艦の移籍、雷撃作戦、技術革新による噴進機構搭載戦闘機開発、大晦日、お正月、『アルフォンシーノの魔法』作戦、『タイフーン』作戦、バレンタインデー、デモ隊との衝突、アメリカとのコンタクト、ホワイトデー、紅提督が初めて怒つた日、『FF』作戦、大規模作戦の頓挫、紅提督の暗殺……思い返せば、私たちは紅提督から貰ったモノは計り知れません。指揮や作戦、私生活でも色々楽しいことをさせていただきました。イベントをやつて頂いたり、皆さんで騒いで寝たり……。ですけど、私たちは何も紅提督に返せてないんです。それなのに……」

話しを聞いている限り、約半年間で色々な事をしていたという事みたいです。

紅くんが中心になっていたみたいですけどね。

「私たちは、紅提督の為に戦うと誓ったのにも関わらず、何も出来ませんでした。私はただ、紅提督が撃たれるのを見ている事しか出来なかつたんです」

赤城さんは顔を上げませんが、どんな表情をしているかなんて、想像するのは容易です。

「散々」迷惑をお掛けして、心配をお掛けして、それでも信じて頂いていたのにつ……」

刹那、赤城さんが顔を上げました。

額から血が滴り落ち、大粒の涙が流れています。

「守ることも出来ずに、生死も分からないんです……。しかも、紅提督のお姉さんがこうして探しに来てしまいました……。異世界から誰かが来たと聞いた時、もしやと思いました。わざわざ、ここにいらつしやつたんですから……」

なんとなく、分かつてきた事があります。紅くんが中心に色々な事をしてきてはいましたが、艦娘と共にやってきた事だったんです。ですから、こんな風に赤城さんが私に土下座してまで、謝っているのではないんでしょうか。

「そうですね……」

何も答えないのも酷ですので、何か言おうとします。ですけど、言葉に詰まりました。何を言っているのか、未だに分からないんです。約半年間のこちらの出来事は、とても濃かつた筈です。そんなところで、部外者である私が何か言えるなんて思えません。

「横須賀鎮守府艦隊司令部所属の艦娘は皆、紅提督が亡くなられたと思つてます。軍病院に連れてかれてしまつてから約1週間は、酷かつたですからね」

赤城さんは遠い目をして、そんな事を言いました。

そして、赤城さんたち艦娘もまた、紅くんが死んだと決めつけていました。巡田さんと同じです。考えてみれば、生きている事だつて可

能性としてはあり得る事なのに。

「亡くなった。本当に、そう思っているんですか？」

「はい……もう1ヶ月経ちます。軍病院からの連絡はありませんし、こちらから掛けてもはぐらかされますから……」

巡田さんと、同じ事を言いました。多分、共通意識で皆、そんな事を思っているんでしょうね。

「もし、紅くんが死んでしまっていたのなら、大事になりますよね？
分かりますか？」

私はそう、赤城さんに言いました。

赤城さんはきよとんとしています。

「えっと……そうですね……。紅提督は日本皇国では『救国の英雄』と呼ばれていますから」

「でしたら、そんな紅くんの情報は全てシャットアウトする……違い
ますか？」

「違い……ませんっ」

私は赤城さんにハンカチを渡します。まだ使っていないものですか
ら、良いでしょう。

「なら、紅くんは生きてます。きっと、軍病院で隔離されているに違い
ありません」

そう言つて、赤城さんに手を伸ばしました。

「さあ、立って下さい。帰ってくるまでに、皆さんがこんな風だと、紅
くんも困るんじゃないですか？」

そう言いますが、赤城さんは戸惑っているみたいです。

状況は飲み込めてはいるみたいですが、追いつけてないところがある
みたいですね。

私の勝手なイメージですが、赤城さんはひたむきに努力して、何事も
冷静に考えるタイプだと思っていました。艦これでのボイスは
ちよつとアレですけども。押し付けでしたかね？

「あつ、あのっ……私っ」

キャラがブレている赤城さんに、私は止められました。

「もう謝るのは無しです。それと、そろそろ額の血、拭った方がいいで

すよ？ 服に付いてしまいそうです」

そう言つて、私はソファーに座り直しました。

話はまだ続きそうですからね。

赤城さんは、額の血を拭うと、私の対面に再び座りました。

「紅提督が戻ってくるって……本当ですか？」

「はい。確率は『0』ではありません」

そう、『0』では無いんです。ですけど、帰ってくるかも分かりません。先ずは、生死を確かめないといけませんからね。

「生きているか、死んでいるか、どちらかです。私的には勿論、生きていて欲しいですけどね」

「勿論ですよ。では、このことは他の艦娘に……」

そう赤城さんが立ち上がったのを、私は止めました。

「待つて下さい。まだ、早いですよ」

「どうしてですか？」

少し頬を赤くした赤城さんは、ソファーに座り直しました。

私が赤城さんを止めたのは、理由があります。

今、そう言い回つたところで、信じる艦娘がどれくらい居るか、です。巡田さんと赤城さんは私の本名を信じましたけど、信じない事がほとんどですからね。言つたところで『それで？』と、なりますからね。

ですから止めたんです。

「徐々に広めていった方が良くと思います。いきなり広めると、半信半疑から何が正しいのか分からなくて、混乱させてしまいます」

苦し紛れです。これで、赤城さんが止まってくればいいんですけど。

「……本当ですか？」

「はい。現に、赤城さんだつて……」

そう。赤城さんも混乱していたんです。

「ですから、徐々に相手を選んで話して行つた方がいいです」

「……はい。そうしてみます」

どうやらこれで、終わりみたいです。赤城さんも、私に聞くこと

はないみたいです。

「ありがとうございます」

「いえ。私も、ここで紅くんが何をしていたか聞けて良かったです」

私はそう言って執務室を出て行きました。

赤城さんは湯のみやらの片付けをすると行ってましたので、手伝うといったんですが、『客人にそんな事はさせられませんよ』と言われてしまいました。

どうやら、私はここでは客人扱いみたいです。

第9話 条件①

執務室から出た私は、酒保に向かいました。よく考えたら、着替えも何一つ持ってないんです。今、着ている服も、昨日のものですし。洗濯もしたいですからね。

こちらに来るとき、辛うじて携帯電話と財布は持って来れたので良かったです。携帯電話はポケットの中に入れてましたし、財布は手元にありましたからね。たまたま、一緒に持って来れたんだと思います。

財布の中は、給料日後でしたので、そこそこ潤ってます。7万円くらいは入っていたと思います。

私室に置いてある財布を持ってきて、そのまま酒保に向かいました。

酒保の中は、至って普通のショッピングモールです。店が立ち並び、目を惹かれるものがいくつも置いてあります。ですけど、変ですね。

女性物しか置いてません。何処を見ても女性物、女性物です。男性の物は何一つ、置いてません。どうしてでしょう。それと、奥に進むと、食料品売場がありました。保存の効かないお惣菜はありませんが、それ以外のものは結構置いてあります。生鮮野菜、肉類、魚類、調味料、お菓子等など……普通のスーパーマーケットみたいですね。

食料品売場を出て、私は下着屋に入ります。服はなんとかなっても、下着はどうにもなりませんからね。

店内に入ると、普通に店員さんが居ました。

「いらっしゃいませー」

そう、声を掛けてくれます。一瞬、錯覚しましたが、ここは鎮守府の中にあるんですよね。

私は店員さんに軽く会釈すると、下着を見て、自分のサイズに合うモノを何セットか取ると、会計をします。選びはしたんですけど、あまり悩まないんですよね。

「28600円になります」

ブランドはよく見てませんが、そこそこのところ何でしょうね。一応、3セット選んでますけど。

「30000円、お預かりします。1400円のお返しです。ありがとうございますましたー！」

ここで私は、店員さんに違和感を感じました。

今まで行った、お店で一番、接客態度が良いんです。気持ち悪いくらいに、です。

手際よく、綺麗に。そして、満面の笑顔でした。そんなお店、入ったことありません。

「ありがとうございます」

癖で、受け取る時にお礼を言ってしまう。いつまで経っても、治らないです。

私がお店から出ると、また、あることに気付きました。

この酒保と呼ばれる施設、店員さん以外にすれ違ってません。どういう事なんでしょうか。酒保はてつきり、横須賀鎮守府で働く人のための施設だと思っていました。違うんでしょうか。

不思議に思いながらも、私は洋服屋をはしごして、3泊4日分くらいの洋服を買いました。ちなみにどのお店の店員さんも、下着屋さんの店員さんみたいに、気持ち悪かったです。

袋をいくつか下げて、中を歩いてみると、誰かに話し掛けられました。振り返ると、女性ですが、格好からして警備の人です。

「すみません」

「はい？」

私は受け答えをするのに、立ち止まりました。

「貴女、艦娘の方ではないですね」

舐め回す様に、私を見た警備員さんはそう、私に言いました。

「はい。2日前からここにいます」

私がそう答えると、警戒されました。明らかに、雰囲気が変わったんです。

「どういう事ですか？」

ピリピリとしたオーラを発して、警備員さんは私に問いかけます。

答えに悩みます。本当の事を言うか、言わないか考えます。

黙っていても仕方ないですし、どうせ知られるでしょうから、とりあえず誤魔化します。

「異世界から来たものですから、ここに匿われたんですよ」

嘘は言ってません。ですけど、本意は伝えません。中途半端に、言いました。

警備員さんは少し唸ると、開放してくれました。

「……そうですか。では」

それだけを伝えて、警備員さんは腰からぶら下げている警棒と、拳銃をカシャカシャと揺らして、遠ざかって行きました。

警備員さんの後ろ姿を数秒間見届けると、私は出口に向かいます。一度、荷物を置きに、私室に戻ります。

――

――

――

酒保から私室に帰って来ました。ふと、携帯電話を見てみると、時刻は午後3時過ぎ。昼からあまり時間が経ってないです。

荷物を部屋の隅に置いて、ベッドに寝転がります。少し、背伸びをして、天井を見上げました。勿論、知らない天井です。昨日、ここで寝てますが、天井の記憶なんてありませんからね。

「葵さん、いらっしやいますか?」

天井を見上げていると、ノックと共に声が聞こえました。多分、大淀さんです。

「いますよ」

「失礼してもよろしいですか?」

「どうぞ」

起き上がって、ベッドに腰掛けるのと同時に、大淀さんが入ってきました。

片手には何やら、書類を持っているみたいです。

「酒保に行つてらしたんですね」

「はい。着替えが無いものだから」

買った物した袋を片付けなかった事を少し後悔しつつ、大淀さんの用事を訊きました。

「それで、どうされたんですか？」

「はい。こちらから連絡した事がありまして、お邪魔させていただきました」

そう言つて、大淀さんは傍らに持っていた書類を出して、読み上げます。

「大本営海軍部から、葵さんへ。提督と同様に、異世界からいらつしやつたとの事。ですが、今回は異例とします。引き続き、鎮守府にいらつしやるのでしたら、所要の手続きをしていただきたいです。こちらが、書類になります」

大淀さんは、私に一枚の紙を渡しました。

紙に目を落とし、目を皿にして文字を読みます。

『発、大本営海軍部。宛、碧 葵。』

横須賀鎮守府艦隊司令部に在る状態に於いて、貴女は長期滞在を希望するのであれば、以下の条件を課す。

一 横須賀鎮守府にて使役する事。二 艦隊司令部所属艦娘の戦意高揚。

以上に従う場合のみ、横須賀鎮守府艦隊司令部に引き続き、在る状態である事を認める。』

回りくどく、面倒な書き方で書かれています。文章を噛み砕くと、鎮守府に居なければ労働し、艦娘の士気を上げろということ。ただで置かせてもらえらると思つてませんでしたので、こちらとしては納得です。ですけど、条件の后者に関しては、私でどうにかなると思いません。

この書類を渡した大淀さんも、困った表情をしていました。

「どうされますか？」

私は少し悩んで、決めました。ここに居なければ、紅くんに会えません。

「大淀さん」

「はい」

「ペンを貸してもらえますか？」

少し驚いた表情をした大淀さんから、ボールペンを借りると、すぐにサイン欄にサインをします。勿論、碧 葵と書きます。

サインした後、確認して大淀さんに渡しました。

「はい。これでいいですよね？」

「はあ……いいんですか？」

「ん？ 何故です」

大淀さんは、少し困った表情で私に言ってきました。

「横須賀鎮守府は特殊な施設です。普通なら通らない要求なども、網を通る水のように通り抜けますが？」

つまり、言いたい放題言えるということでしょう。何故、そんな事になっているか分かりませんが、それは私にとって良くないことです。甘えですからね。

ここに居させてもらう以上、何かしなければなりません。

「いいんです。タダ飯食らいにはなりたくありませんからね」

「そうですか。……分かりました。提出してきますので、返信があり次第、条件を果たして下さいね」

そう言って書類を大淀さんは仕舞いましたが、少し浮かない顔をしています。

「大淀さんは、今の書類に何か思うことでもあるんですか？」

そう聞くと、すんなり答えてくれました。

「条件の前者に関しては、理解できます。ですけど、後者が問題です」

艦娘の戦意高揚に何か、問題が在るみたいですね。

「何かあるんですか？」

「はい。戦意高揚に関して、100%無理と言っても過言ではありません」

やる前からバツサリと切られてしまいました。

理由を思い浮かべてみると、1つ浮上してきました。紅くんの存在です。

艦娘たちにとって、紅くんがどんな存在だったかが、大淀さんを『無理』だと言わせた理由になるのでは、と思いました。

単純に、『信頼できる提督』ならば、同列かそれ以上の指揮能力を見せたら士気も上がると思えます。

もしそうだとしたら、大淀さんは『無理』だなんて言わないでしょうね。精々、『多分、無理』となら言うでしょう。私という人間をまだ、2日くらいしか見てないですからね。そんな短期間で、私の能力を見抜けるとは思えません。

少し捻ると、『紅くんの事を、提督として見ていない』と言うことです。つまり、別の人間として見ていたという事です。どう見ていたかなんて様々ですが、それ以外として見ていたのなら、考えられる可能性です。

先ず無いと思うのが、『紅くん以外の指揮者を必要としていない』という事です。そうなると、組織としてどうなのかと、私は思いました。上に立つ人間が変わると、機能不全を起こすなんて、疾患もいいところですよ。

結局のところ、どの理由も有り得そうで有り得ない、という回答になつてしまいました。これは前途多難ですね。

「善処しますよ……」

「期待してますね。では、失礼します」

大淀さんは部屋を出て行きました。書類を提出に行くんでしょうね。

私は、ベッドに寝転がると、天井を見上げました。

ここにいて、条件を課せられるのは想定内でしたが、まさかこんな条件を加えてくる等、思っても見ませんでしたから。

それに、大淀さんから『無理』と言われた事。本当に無理なんじゃないか、と思つてしまいそうです。

紅くと会える日までに、私はここで何をしていく事になるんでしょうね。

第10話 条件②

私は布団を整えて、立ち上がりました。今日で鎮守府に来て3日目です。今日はやる必要があります。

大本営海軍部というところからの、鎮守府滞在条件をクリアする為に行動しなければなりません。

まず1つ目です。『横須賀鎮守府にて使役する事』、です。という事は、この横須賀鎮守府で働き口を見つけなければなりません。

そう思つて、昨日、たまたますれ違った金剛さんに聞いてみました。

『そうデスネー……。見た感じダト、何処も手が足りてると思いマス』と、返答がありました。確かに、飽和とまでは行きませんが、横須賀鎮守府の労働力は充実していると思います。

『柴壁』という民間軍事組織に入る事が、一番確実でしょうね。
(色々回る前に、朝ごはん食べてきましょう)

そう思い立ち、私は部屋から出ていきます。着ている服は、昨日買った服です。

—————

—————

—————

食堂で朝食を済ませました。私はこれから、とりあえず条件をクリアするために、労働の出来るところを回ってみる事にしました。

先ずはですが、事務棟に行つてみようと思います。

「すみません。責任者の方、いらっしゃいますか？」

私はとりあえず、事務棟の入り口から入つてすぐにある、カウンターでそう受付の人に言いました。見たところ、外部から入るところはここしかありませんでした。他にも入り口はあったんですが、関係者用の入り口みたいです。

「はい。少々お待ちください」

受付の人はそう、答えるとどこかに内線で電話をします。

数秒後に受話器を置くと、私に返事をくれました。

「応接室にご案内します」

そう言われて、私は受付の人の後について奥へ入って行きました。応接室に通されましたが、至って普通の部屋にしか見えません。会議室というよりも、規模が小さいみたいですからね。

「どうされました？ 見たところ、艦娘の方ではないみたいですが」

「はい。先日ここに来ました、碧 葵と申します」

「ああ、碧さんですね」

どうやら、あちらの人は分かっているみたいです。多分、ここが横須賀鎮守府の施設だからでしょう。それに、ここは鎮守府と外との連絡手段として使われるらしいですから、私の偽名のやり取りが耳に入らない訳がないですよ。

「はい。それで、大本営海軍部からの……」

私がそう言いかけると、遮られてしまいました。

「その件ですが、ここでは出来ません」

抽象的でしたが、意味は分かります。

ここでは働けないという事でしょう。

「よろしければ、理由をお聞かせ下さいませんか？」

私がそう聞くと、快く教えてくれました。

理由として第一にあるのが、『取り扱う仕事』でした。事務棟というのは、外との連絡手段です。鎮守府が外と連絡する事なんて言えば、大本営などの軍上層部しか無いでしょう。そう言ったところとのやり取りを、“民間人”である私に見せる訳にはいかないそうです。次にあるのが、『見せられないものがある』でした。これも、第一とほぼ同じような理由ですね。私には見せられないような事務処理がある、という事です。

つまり、事務棟では働く事が出来ない、ということになります。

「そうですか……ありがとうございました」

「いえ。横須賀鎮守府の中なら、何かしらあるはずですよ。諦めないで探して下さい」

「はい」

応援されてしまいました。私は事務棟を出て行きました。

なんかというか、悔しいみたいな気持ちは芽生えませんか。『貴女は要らない』と言われた訳ではないからでしょうか。

次に向かったのは、酒保です。酒保はかなり広い施設です。どれだけ人がいても、問題ないと思い、私は話をする事に決めました。

酒保に入り、サービスカウンターのような場所で従業員さんに声を掛けます。

「すみません。責任者の方、いらっしゃいますか？」

事務棟の時と、同じセリフです。普通に使ったら、ただのクレーマーの様にも聞こえてしまいますね。ですけど、ここだとそのようには感じません。不思議です。

「貴女、艦娘の方ではありませんね……少々お待ち下さい」

何だか、事務棟の時と同じようなセリフを言われたような気もしますが、素直に黙って待ちます。

そうすると数分後、私の前にある女性が現れました。多分、酒保の責任者でしょう。

会議室に行くとのことでしたので、後ろを付いていきました。

「どうされましたか？」

「はい。先日、ここに滞在する条件として……」

そう話を切り出した時、またもや遮られてしまいました。

「どうやら、私のことは知られているみたいですね。碧 葵の方でしようけど。」

「ああ、碧さんですか。ええつと……それで、条件とは？」

「はい。条件に、横須賀鎮守府で労働する事があるんですよ。それを達成する為に、私を雇っては頂けませんか？」

「そう、私は酒保の責任者の人の頭を下げます。」

「責任者の人は、少し考えると答えをくれました。」

「現状、即決することは出来ません。なにせ、人数が多いですし、把握しきれませんからね」

「そうですか。……ありがとうございました」

私が会議室から出ようと立ち上がった時、止められました。

「時間がかかりますので、他で見つかるといいですね」

「はい。ありがとうございます」

酒保もダメでした。もう、私の考えて、アテにしていたところはこれで全滅です。

この他にどこか、あるんでしょうかね？

――

――

――

行く宛無いまま、本部棟の中を歩き回っていたら、あることに気が付きました。

大淀さんに鎮守府を案内してもらいましたが、その時に案内されなかった部屋がいくつもあるんです。例えば、会議室です。鍵がかつてなかったので、覗いてみたところ、かなり広い会議室でした。多分、60人以上座れる会議室です。その他にも、強引に封鎖されている部屋や、通信室、書類保管室、火器保管室などがありました。どれも嚴重に鍵が掛けられていて、見るからに使ってないんだろな、と思いました。特に、火器保管室です。鍵に埃が積もっていましたからね。きつと、長い事開いてないでしょう。

そんな風に、本部棟の中を探検していると、ある部屋を見つけました。

医務室です。その名の通り、診療などをしてくれる部屋ですね。入り口は開いてましたので、使っているんでしょう。

他にも、使われている特殊な部屋があります。用具倉庫、自習室、教室、懲罰室など。懲罰室に関しては、使っているようには見えませんでした。中に荷物が置いてあったので、倉庫として利用されているんでしょうね。

私は結局、どこで労働するかを決め悩んでいました。どこかで労働するにしても、2つ目の条件の事もありますので、艦娘と密接にならなければなりませんからね。

それを踏まえると、1つしかありませんでした。

(医務室でしょうね……)

医務室でした。今更ですが、私の元居た世界での職業は、看護師で

す。一応、免許はありますし、半年間だけですが、経験もあります。医務室なら遺憾なく、私の能力を発揮できると共に、2つ目の条件のクリアを目指しやすいのでは、と思いました。

この事に関して、妖精さんに言ってみたところ、『私たちでは決めかねます。赤城さんとかに聞いてみないと分かりませんね』と返されてしまいました。

ですので、私は赤城さんの元を訪れています。

「ここに滞在する条件で、労働しなくてはならないんですけど、どこで働けばいいんでしょうか？」

私は赤城さんの部屋で正座しながら、訊きます。

部屋を見ると、見るからに1人部屋ではありません。誰かと相部屋なんだろうね。

「大淀さんからそんな事を聞いたような……。そうですね」

赤城さんは考え始めました。私はそれをただ黙って、待っています。

「……私から見ても、ほとんど無いでしょうね。外へ買い物には送り出せませんし、中でも……」

そう言った赤城さんは、言葉に詰まりました。多分、何か引っかかる事でもあったんでしょう。

「あるかも、知れません」

そう、赤城さんは言いました。会う人、会う人に無いと言われ続けてきたというのに、どこにあるんでしょうか。

「本当ですか？」

「はい。……と言っても、紅提督のお姉様に鎮守府で労働させる等、恐れ多いです」

赤城さんは渋りました。どういった考えで、そんな事を言っているのかわかりませんが、『働かざるもの、食うべからず』です。

「そんな事ないですよ。『働かざるもの、食うべからず』ですよ？ タダ飯食らいにはなりたくありません」

正直な気持ちを、赤城さんに伝えました。

「そうですか？」

「はい」

本音ですよ。ニートはしたくないですからね。

「分かりました。……私が思い付いたのは、『柴壁』で働く事ですね」
「『柴壁』ですか……」

『柴壁』は、横須賀鎮守府が雇っている民間軍事組織です。そこなら働けるのでは、と赤城さんは言うのです。

私は、赤城さんから提案されて少し考えました。

聞いて最初に思った事は、『無理』でした。理由としては、まだこの世界に来て日が浅い事と、横須賀鎮守府という組織自体が特殊故です。後者に関しては、ひしひしとそれが感じられていたんです。

紅くんへの思い、体制、大本営の鎮守府への弱腰な態度……。見るからにおかしいです。

そんな様子しか見ていないものですから、『柴壁』で働き始めたとしても、付いていけないと思っただんです。

『柴壁』は……無理ですね。ごめんなさい」

「そうですか？　なら、もう思いつきませんね。力になれずに、申し訳ございません」

赤城さんは頭を下げました。それに釣られて私も、赤城さんに頭を下げてお礼を言います。

「こちらこそ、話を聞いて頂き、ありがとうございますございました」
「いえ、当然のことです」

私は少し、そのまま赤城さんと雑談をしました。他愛もない話です。異様に、紅くんの事を聞かれた事が気になりますけどね。

第11話 条件③

結局、鎮守府で労働の出来る場所は、見つかりませんでした。

あちこち回ってみたものの、どこも手が足りているみたいですね。余分に必要ということも、特に言われませんでした。

それでも私は、働き口を探しました。

まだ行っていないところに足を運び、声を掛けます。ですが、やはり、ダメみたいですね。そんな事が続き、歩いていると、ふとある事を思い出しました。

昨日、赤城さんが言っていた『柴壁』という民間軍事組織です。『柴壁』に入る事を一時は、私は嫌でしたが、もうそんな事も言ってもらえません。ここに残るためには、何が何でも労働しなければなりませんからね。

(警備棟に行きましようか……)

腹を括りました。もう探し回っていても、見つかりませんでしょうからね。いたずらに時間を使うよりも、割り切った方が絶対良いに決まっています。

(腹を括ります。もう、四の五の言ってもらえませんかからね)

なんとか働かないと、追い出されますからね。

私は、警備棟に向けて重い足を前に出しました。

――

――

――

警備棟に入り、入り口の社員さんに会釈をします。昨日とは違う人が立っています。

私は片方の人に声を掛けました。

「すみません」

「はい？ どうされました？」

「武下さんにお会いしたんですが」

そう私が言うと、快く答えてくれます。

「分かりました。連絡を入れますので、少々お待ち下さい」

その場で肩にぶら下がっている何かを手にとると、話し始めました。多分、無線機でしょう。

少し話すと、無線機をぶら下がっていたところに引っ掛けました。

「これからご案内します。付いてきて下さい」

「はい」

私は後を付いて行きました。

着いたところは、昨日と同じ会議室です。昨日は巡田さんでしたが、今日は武下さんです。

「天色さん。御用とは何でしょうか？」

そう、武下さんは訊いてきます。遠回しに言っても伝わらなかったら意味がないので、私は率直に伝えました。

「私を『柴壁』で雇っては頂けませんか？」

「はっ?!」

流星に想像を超えていたみたいですね。凄く驚いています。

ただ、それだけ伝えただけでは足りませんので、その経緯を付け足しました。

「ここに滞在するつもりなんです。大本営が労働を条件に許可を頂けたんです」

「ほお……」

「他は手が足りているみたいで、ダメ元で来ました」

これは嘘です。

「そうなんですか……。ちなみに、他には何処に行かれました？」

「事務棟と酒保です。その他にも回ってみました。全て空振りでした」

捉え方によっては、『仕方なく来た』とも思われてしまうでしょうけど、しようがないですよ。ね。

「……分かりました。ですが」

武下さんは、そう言ってくれました。

「私たちの雇い主、横須賀鎮守府艦隊司令部から採用されないことにはどうにも……」

横須賀鎮守府艦隊司令部が採用しているなんて、初耳です。ですけど

ど、どういった仕組み何でしょうか。紅くんが居ない現状、それを代わり処理する人でも居るんでしょうか？

「それって、紅くんが雇い主という事でしょうか？」

そう私が聞くと、意外な回答が帰って来ました。

「いいえ。艦娘ですよ」

「はい？」

私はその回答に驚き、思わず、聞き返してしまいました。

「私たちの雇い主は艦娘です」

武下さんはハッキリ言いました。

艦娘に雇われていると考ええると、かなり変な話ですね。というより、艦娘にそれだけの財力があるんですね。

「そうなんですか……」

私はそう言っただけで考えます。誰に言えはいいのかわからないんです。艦娘といっても、横須賀鎮守府艦隊司令部に所属している艦娘はかなりの数が居るように思えます。

イベントなどで手に入るレア艦はほとんど居ないようですが、ある程度の艦娘は居るみたいです。

「それで、『柴壁』で働こうとお考えで？」

これまでの話を聞いていけば、そう考えてしまうのも無理ないです。

というより、今のところ、『柴壁』以外の場所が見つかってないんですよ。酒保の方も結局、ダメだったみたいです。それに雇い主は艦娘だとも言っていました。『柴壁』と同じですね。

私はもう一度、武下さんに伝えます。

「はい。ですので、どうかお願いします」

私は頭を深々と下げました。

—————

—————

—————

結論から言うと、私は『柴壁』で雇ってもらえる事になりました。

武下さんの推薦状(?)を片手に、赤城さんに会いに行つて、趣旨

を伝えたんです。

そしてたら、とてつもなく心配されましたが、それまでの経緯は知っていますので、納得してもらえたんです。

推薦状(?)を赤城さんに渡すということは、『柴壁』やら、酒保の雇い主は赤城さんになつているといふ事なんですかね？

こうして、私は『柴壁』に加わりました。この事は、大淀さんを通じて、大本営海軍部に書類が送られているそうですので、もう、条件の1つ目はクリアです。

「あつ、天色さんっ?! その格好は?!」

『柴壁』に入ったと言うことで、私は新人教育を受ける事になりました。

ガイダンスは一応、ありましたが、ほんの10分で終わってしまつたんです。理由としては、『ここでの勤務は、基本的に外部から侵入する“敵”を排除する事です。と言っても、そんな事で働いた事は2回しかありませんけどね』ということ、特に説明する事はない、とのこと。訳が分かりませんが、それ以上に説明することがないとの事でした。

「本日付で『柴壁』に入社(?)しました、天色 ましろです。よろしくお願いします」

「新人つて、天色さんでしたか……」

私の指導教官を務めるのは、西川さんです。その他にも2名居ます。長政さんと、沖江さんです。6月の頭だというのに、長政さんは顔が隠れるくらいに顔に何かを巻いています。

特に意味はないらしいですけどね。ちなみに、沖江さんは女性の方です。『柴壁』には一定数、女性の方も在籍されている様ですね。

「はい。それに、この鎮守府には“天色”は2人いますので、下の名前で読んで下さい」

「分かりました。ましろさん。提督のお姉様ということですが、遠慮はしませんよ」

「はい」

そんなこんなで、私の新人教育が始まりました。

一応、民間“軍事”組織ということなので、体力作りから始まりま
す。

運動は専門学校卒業以来、やってないですので、身体が動くか心配
でしたが、案外動きました。まだ20代前半だからでしょうね。

テレビでやっている様な、訓練を永遠とやります。と言つても、走
るだけですけどね。

何時間か、走り込みをすると、警備棟の部屋に通され、座学が始ま
ります。

何を習うのかというと、ここで働くには欠かせない物の扱い方や、
整備方法など。それ以外には、ここでの決まり、ルールみたいなも
のでしょうか。

「ここまでの座学は正直、必要ないと思つて貰つて結構です」

西川さんは、そう言いました。ここまでの座学、約2時間は何だっ
たんでしょう。

「今からは、横須賀鎮守府艦隊司令部に居る限り、必要な知識をお教え
します。ですので、よく覚えて下さいね」

ここに居る限り必要な知識とは、仕事で使う知識とはまた違うんで
しょうね。ですけど、仕事よりも優先順位が高いように思えます。

そんな事があるんでしょうか。

「横須賀鎮守府艦隊司令部はその特殊さ故、治外法権が適応されてい
ます」

私は初っ端から、意味が理解できなくなりました。

国の組織である筈なのに、治外法権が適応されてるとは、ここは日
本皇国の軍事施設じゃないって事になります。

「日本皇国内で最も、武力を保有しているのは他でもない横須賀鎮
守府だということを先にお伝えさせていただきます。それを踏まえ
て、横須賀鎮守府がどういった施設なのかを、説明させていただきます
ます」

紅くんが提督をしている横須賀鎮守府は、ただの日本皇国の軍事施
設ではないみたいですね。

「率直に言つてしまえば、紅提督の着任から治外法権が適応されまし

た。その理由といたしましては、艦娘による提督への過度な保護欲によるものです」

話を聞いていて思うことがあります。その過度な保護欲がなければ、紅くんを守る事が出来なかつたんです。艦娘は。

「私たちは『提督への執着』と呼んでいます。彼女たち艦娘曰く、『提督に振りかかる火の粉、水しぶきは全て私たちが払う』だそうです」
『だそうです』ということは、定かではないということですね。ですけど、こうやって教えている時点で、定かではないが、信憑性のある情報という事でしょう。

「ですので、艦娘の目の前で紅提督への暴言や暴行は勿論、不快に思わせる様な行動はしない様をお願いします。最悪、その場で殺されま

す」
本当に最悪です。ここは思っていた以上に、とんでもない世界だったみたいですね。艦これの世界だと侮っていました。まあ、紅くんが暗殺云々でそれは気付いていましたけどね。

「ですので、横須賀鎮守府艦隊司令部には治外法権が適応されています。ここでの法律は紅提督にありますことを、ご理解ください」

本当にとんでもないところですよ。

「次に、艦娘たちへの接触方法です」

先にそれを話すべきでは、と言いつうになりましたが、飲み込みました。

「彼女たちを、人間の女性同様に扱う事を心がけて下さい」

これに関しては、聞きたいことが出てきました。

「以前は人間の女性として扱われていなかった、ということですか？」
「はい。以前の鎮守府は、いくなれば『檻』でした。艦娘はここに帰って来て食事をして寝るだけでしたからね」

『檻』という表現が合ってますね。ということは、戦闘をずっとやらされていた、ということになりますね。ブラック企業もいいところですよ。

「という説明を致しましたが、ましろさんが紅提督のお姉様だとすれば、この知識はあまり必要ないかも知れませんね」

「そうなんですか？」

散々、説明しておいて、そう西川さんは言いました。

私なら、今の話を覚えている必要がないとは、どういう意味なんでしょうか。

「はい。理由は挙げられません、そういう事になるとするのは、分かりません」

そう言つて、西川さんは話に戻りました。

次は、紅くん着任からこれまでの出来事に関してです。

聞いていて思ったことですが、率直に感想を言えば、『濃い』半年間だったと思いました。

様々な事が起こり、行つて来た半年間だったみたいですね。大きな事件だけだ、と西川さんは言いましたが、それでもかなりの量の出来事です。

小さな事を含めたら、とんでもない数の事件が起きたんでしょうね。

私は、西川さんの話を聞きつつ、そんな事を考えてました。

第二章

第12話 『柴壁』

『柴壁』に入った事によって、私は常に迷彩服を着ることになりました。私服を買いはしましたが、まあ、仕方ないですね。

それと、今日の座学の後に西川さんからの連絡がありました。私は一応、“書類上”では雇用されていますので、お給料が出るみたいですね。

扱いに関しては、『新卒二等兵 基本給23万円(保険込)』という事でした。どれだけ財力あるんですか、横須賀鎮守府艦隊司令部。

それはさておき、今日も体力作りです。迷彩服を来て、キャップを被って警備棟の周りを永遠と走っています。休憩は西川さんの裁量であります。『柴壁』に入る以上、並以上の戦闘力を必要とされるそう。私が紅くんの姉だろうが関係無しにやるとの事でした。です。で、現在進行形で私は限界寸前の状態を走りこんでます。

「そんなもんですかッ?! そんなんじや、大本営の実力行使で引っこ抜かれて、陽の照る場所に出れなくされますよッ?!」

(さーらっど……とんでもないっ……事をっ?!)

何も考えてられない状況の私が、唯一、それだけを考える事が出来ました。

陽の照る場所じゃないって、どんな場所なんでしょうか。

息を切らせながら、痛む腿にムチを打ちます。走りながら、げんこつを腿に振りかざし、叩きます。

目だけを横にずらすと、平気な表情をしている西川さんが並走しています。とんでもないです。私からしたら、バケモノですよ。

「まだまだ走りますからねッ!! あと、5周ッ!!」

返事をしている余裕もありませんので、私はただただ前を見て走るだけです。

—————

午前中はひたすら走るだけでした。昨日もそうでしたが、必要な事だということは理解しています。ですが、身体がやはり追いつかないですね。

筋肉痛のまま、走り込みでしたので、昨日以上に苦しかったです。それに、足の裏も痛いんです。擦れているんでしょうね。

昼食を摂った後、座学があります。一応。内容は、『指揮系統に関して』でした。

組織の特殊さ故、指揮系統も不思議でした。

先ず、命令は私設軍事組織『柴壁』のリーダーである、武下さんからの命令が通常時です。緊急時は現在の体制だと、赤城さんからの協力“要請”によって、『柴壁』の人員は一時的に、艦娘の指揮下に置かるそうです。ちなみに武下さんも、その指揮下に入るそうです。

次に任務です。任務内容は以前にも説明があつた様な気が増しますが、詳しい事を聴きました。

『柴壁』は人員によって、部隊が分けられているそうです。

一般的な人員は、『番犬』と呼ばれているそうです。由来は色々あるそうですが、最も大きな影響を受けているのは、横須賀鎮守府艦隊司令部の艦娘が非公式に編成している、“番犬艦隊”というものから由来しているみたいです。元の“番犬艦隊”とは、紅くんお付の護衛艦隊の事らしいです。その“番犬艦隊”の請け負っていた任務を、将来的には、『柴壁』が担うという意味を込めているみたいです。

次に、『獵犬』です。由来としては、『番犬』の中でもエリートが集められた、特化部隊みたいなものらしいです。この前会った、長政さんがそちらの所属らしいです。

主な任務は、侵入者の警戒や排除等だそうです。と言っても、全く出番がないみたいです。

最後に、『血獵犬』です。由来は、犬の中でも嗅覚の鋭い犬種から取られた名前だそうです。任務は諜報などを担っているみたいです。体外的な組織だということです。普段は、『諜報班』と呼ばれていると

の事でした。ちなみに、巡田さんは『血獵犬』だそうです。

他にも、様々な部署があるみたいです。ですけど、犬に関連した名前が付けられているのは、これだけみたいです。どうやら、戦闘要員の括りは一括で、犬で括られてしまうみたいです。

「今日の座学はこれまでです。休憩を挟んで、射撃訓練を行います。地下に来て下さい」

これで座学は終わりみたいです。内容としては難しくもないものの、覚えなければならぬので、結構大変です。ですが、テストなどはしないそうですので、有り難いです。

「はあ……」

西川さんが姿勢を崩して、歩き出した途端、私は机に突っ伏せました。

昨日もこんな調子でしたが、身体が追いつく訳ありません。かなり疲労が溜まっています。

眠気と格闘しながら、私は地下に向かいました。

――

――

――

地下は外の温度とは正反対で、とても涼しいです。ですけど、硝煙の臭いが鼻に効きます。昨日もですが、思わず鼻をつまんでしまいました。

「2日ではまだ、慣れないですよね……」

そう西川さんは、苦笑いしながら言います。

地下では、射撃訓練をします。約2週間、拳銃を扱い、その後の2週間は短機関銃を扱います。最後の2週間で、小銃を撃つとの事でした。

「いいですか。昨日言った通り、立って構えて下さいね」

私の後ろで、西川さんはそう言います。正面の5m先には、紙で出来たターゲットが壁に貼られています。素人は5mでも外すというらしいです。それを基準に、どんどん距離を遠くしていくと、昨日言っていました。

「脇を閉めて、両目をちゃんと開いて下さい」

私は返事をせずに、構える事に集中します。拳銃を両手で支え、照準器で的を狙います。

突き出す様に出した、拳銃の引き金を引きます。

耳を劈く音と共に、腕に衝撃が走ります。握っている方の手のひらと、手首がジンジンと痛みます。

それを我慢して、ズレた照準器で的を狙って、同じように引き金を引きます。

何度か撃った後、的を見に行つて、西川さんから指導を受けます。射撃訓練はこの繰り返しです。

今は立ちながら撃つてますが、中腰になったり、立膝で撃つてみたり、屈んで撃つてみたり、姿勢を変えて撃つ練習もします。どんな体勢でも、撃てるようになるための訓練ですね。壁に隠れて、手を出して、頭を数秒間出して撃つ訓練もしました。

ですが、ただ姿勢を変えて撃つただけではありません。上と繋がる階段を全力疾走して戻つて来て撃つ訓練もします。息の上がつた状態でも正確に撃てるか、という訓練です。走る時は、拳銃を持ったまま走りますので、片手に約1kgの鉄の塊を持ったまま走ります。それだけでも、かなり苦しいものでした。

射撃訓練を終える頃には、手の感覚がありませんでした。昨日もでしたけどね。

そんな手を擦りながら、西川さんの話を聴きます。

「今日の訓練は終わりです。身体をゆつくり休めてくださいね」

「はっ」

私は西川さんにお辞儀をします。軍人ではありませんからね。

そこは徹底するつもりです。

――

――

――

私室は艦娘寮から移動して、『柴壁』用の寮に移りました。どこにあるのかと言うと、鎮守府の中を10分くらい歩いたところにあるま

す。

嘗ては、滑走路があつたらしいですが、そんな痕跡は何処にも残つてないんですよ。

建物は2棟立っていて、男女で分かれています。そりやそうですね。ですけど、内装は全く同じとの事です。何でも、妖精さんが同じ設計図から作ったのだとか。それは同じになりますよね。

西川さん曰く、『柴壁』の人員数は約800人居るらしいです。

しかも全員、いわゆるエリートというものらしいです。海軍憲兵出身と言われても、分かりませんが、凄いという事は伝わりました。特殊部隊出身の人なども沢山いるそうです。

とんでもない組織なんですね。

ですが、よくよく考えてみると、全員は以前は軍人だったそうです。一斉に退役したそうです。それでも軍は、止めなかつたみたいですね。私だったら、必死に止めていたでしょうね。

「部屋の勝手はどうですか？」

「丁度良いですよ。今のところ、困った事はないですね」

私の部屋に、沖江さんが来ています。相変わらずの迷彩服ですけど、上は脱いでいて、肩を思いっきり出したノースリーブです。私もですけどね。

「それは良かったです。それと昨日、色々伝え忘れていました」

そう言った沖江さんから聞いた話だと、酒保が利用出来ないという事でした。鎮守府を出てすぐには栄えたところがありますので、そこらを利用して欲しいとの事でした。

「酒保は艦娘専用に使われた施設ですから、私たちが利用する訳にはいかないんですよ」

沖江さんはそう、笑って言います。

「艦娘専用ですか？」

「はい。元の横須賀鎮守府は、買い物も満足に出来ないところでしたからね。必要最低限の日用品しか、売ってませんでしたから」

笑いながら、沖江さんは言います。

私としては、全然笑えないんですけどね。

「横須賀鎮守府にある施設は全て、艦娘の為に後で用意されたものですので、利用しないようにしてくださいね」

そう念押しのように言った、沖江さんのセリフを反芻しました。よくよく考えてみれば、横須賀鎮守府にはグラウンドがありました。ですけど、訓練であそこを使った事は今のところありません。

使えるものなら使うんでしょうけど、そういう理由があったから使わなかったんですね。

「分かりました」

「では、ご飯は昨日と同じように。また、後ほど」

そう言って、沖江さんは部屋を出て行きました。

昨日のご飯は、寮と寮の間にある食堂で食べました。味としては、間宮さんの作るものとほとんど変わらないです。とても美味しいんですよ。

レパトリーは、こっちの方が多いいみたいですけどね。

食堂は男女が入り乱れています。流石にノースリーブで行くのは恥ずかしいのか、女性はみなさん上着を着ていますが、男性はノースリーブですね。

こちらの食堂は、カウンターで直接頼むのではなく、発券機で発券したものをカウンターに置いて、番号札を貰うだけです。

私の番号は『26』でした。

「こっちですよ」

沖江さんが、席に座りながら手を振ってくれます。

私は沖江さんの横に、座りました。

「すみません」

「いえいえ。ここは全員が知っている顔で名前も覚えてますから、新入りは入り辛いんですよ」

そう沖江さんは言いました。

確か、『柴壁』が出来てから、私が初の新入りだそうです。

「そうなんですか?」

「はい。ましろさんの名前は皆知りませんが、配属が決まれば嫌でも知る事になりますからね」

そう言つて沖江さんは、番号が呼ばれたのか、立ち上がつて取りに行きました。

嫌でも知る事になるつて、何があるんでしようね。

トレーを持つて戻つてきた沖江さんと入れ替わりで、私の番号も呼ばれたので、取りに行きます。

戻つてきて、私は沖江さんと話しをしました。

どういつた経緯で異世界から来たのか、『柴壁』に入った理由等が聞かれました。まあ、嘘を言つても仕方ないですので、素直に答えるんですけどね。

大本営とは繋がりがあまりないみたいですから、言つても問題ないかと考えました。

「そんな事が……。紅提督がこつちに来られてからはの事は知つてましたが、向こうでそんな事になつていたんですね」

「はい。両親も紅くんの友だち、学校も……」

沖江さんは、黙つて聞いてくれました。

そんな話が終わつてからの、沖江さんの言葉です。

「私は紅提督着任の時から居ましたので、これまでの事は全部見えてきました」

沖江さんは、おかずをつつきながら話します。

「西川君の座学を聞いているなら分かるでしょうけど、本当に色々な事がありましたからね」

「大雑把にしか聞いてませんけど、なんか細かい事であつたんですかね？」

「ええ。紅提督は頻繁に『イレギュラー』という単語を使つてましたね」

『『イレギュラー』ですか……』

ここにきて、急に新たな情報を手に入れました。

『イレギュラー』という単語をよく、紅くんが話していた、という事です。その言葉にどんな意味を込められていたのか、私は当分先まで知ることがありません。

第13話 情報収集①

私が『柴壁』に入って、約2ヶ月と半分が経ちました。もう、季節は夏至を通りすぎてしばらく経った9月。まだまだ暑く、陽も長いです。

訓練は今日の、小銃などを使った総合射撃訓練を経て、修了しました。私の来た頃の頃とは違い、小銃はまだ難しいですが、拳銃や短機関銃は操作に戸惑うこと無く、扱う事が出来ます。

身体もある程度鍛えさせられましたが、出るところは出て、引っ込むところは引っ込みました。少し気になっていたお腹周りも、結構そぎ落とし、くびれが出ました。

ですけど、目に見えて筋肉が付いたようには見えません。洋服を着たら、普通の女性にしか見えないそうです。

「何処の配属になるんでしょうね」

沖江さんには、あれ以来仲良くしてもらっています。教官ではありますが、ほとんど出る事が無かったんです。ですから、友人みたいなものですね。同い年ですし。

「どうでしょうね。私的には、番犬に来て欲しいです」

どうやら沖江さんは、私が番犬になることを期待しているみたいですね。約2ヶ月間の付け焼き刃で、行けるのなら申し分ないでしょうね。特筆すべき能力は、私には備わってないですからね。

ですけど、それはたった2分で裏切られました。

武下さんから、私の配属が連絡されたんです。

「天色 ましろ二等兵は、只今を以って『血獠犬』へ配属します」

私の配属先連絡は、その一言だけでした。

もつと何か言うべき事があるのではないかと、思いましたが、武下さんはそれだけを言って、私に書類を渡したんです。

勿論、その結果には、私を含めて聞いていた全員が固まってしまうものでした。

どういった意図で、たった2ヶ月の訓練をした、なよなよの女を特

殊部隊みたいなところに放り込んだんでしよう。

――

――

――

『血猟犬』に配属になりましたので、『血猟犬』での全体ミーティングが開かれました。

『血猟犬』初の新人です。では、挨拶を」

巡田さんはそう言って、私に場所を開けました。

「この度、こちらに配属されました、天色 ましろです。よろしく願います」

私がそう自己紹介をすると、集まっていた人たちはかなり動揺しました。

それもその筈です。『柴壁』に入って、ずっと下の名前で呼ばれていましたからね。気付かないのも、当然のことです。

驚いた先輩たちは、一斉に床に正座します。この光景も何度も見えました。未だに慣れませんね。

全員が一斉に頭を下げます。鈍い音が響きました。床に頭を打ち付けたんでしよう。

「頭を上げて下さいっ！」

慌てて私は、皆さんにそう言います。

何に関して、頭を下げているのか分かっていきますからね。

「そもそも、あなた方が責任を感じる必要はないと思うのですが？」

取り繕ったかのような言葉を言います。

そもそも、紅くんがどんな状況だったのかも、私は知らない訳ですからね。

紅くんが撃たれた状況は、巡田さんから聞いています。警備を突破され、拉致られて、誰もいない廃工場で撃たれた、と。そして、巡田さんはそれをただただ見ていることしか出来なかったんです。

その詳しいところは、私は知りません。出るに出来ない、状況だったとは思いますがね。

多分、相当切迫していたんでしようね。

それはともかくとして、果たすべき事をしていたのなら、謝る必要はないと思うんです。

「それでしようか?」

巡田さんは、私に訊いてきます。

初めて会った時にも、私は巡田さんに言ったと思うんですけどね。

「はい」

私がそう答えると、巡田さんは話し始めました。

「……座学で聴いているとは思いますが、『血獠犬』、諜報班の任務は、体外的な諜報活動です」

「情報収集や諜報活動、鎮守府侵入者の監視、敵勢力の排除、紅くんの直掩ですよね?」

「はい。そこでましろさんには、情報収集を専門に行ってもらおうと思います」

話を聞く限り、重要度が割りと低い任務ですね。

「分かりました」

「はい。ということですので、付いてきて下さい」

「ん?」

どういう事でしょうか。巡田さんがそんな事を言うなんて、思いもしませんでした。

「どういうことですか?」

私が訊くと、巡田さんは答えてくれます。

「情報収集は、私が直接指揮をしていますので。それに、諜報班とうもの元は、帯書きの情報収集活動をしていた私たちの事を指しているんですよ」

巡田さんがそう言うと、後ろから5人が目の前に並びました。

どうやら、巡田さん直属の部下みたいですね。

全員が名を名乗り、私はあるところに連れて行かれました。

そこは約2ヶ月間、ずっと目にしてきた施設でした。

「寮……ですか?」

「はい」

巡田さんは、そう言って頷くだけです。

「えつと……どういう事ですか？」

「情報収集をするにあたって、この格好では目立ちます」

巡田さんは自分の着ている迷彩服を指さしました。

「確かにそうですね」

「ですので、私服に着替えていただきます。その代わり、こちらの用意している服に着替えていただくんですけどね」

私に有無も言わず、巡田さんの部下の1人である、南風（みなかぜ）さんが私の腕を掴みました。

「着替えに行きますよ。これから任務ですので」

ニコニコと笑いながら、私を引っ張る南風さんに、私は苦笑いしながら引かれる他ありませんでした。

――

――

――

私が着せられるのは、てっきり普通の私服だと思ったんですけど、何も着せられませんでした。いつもの、迷彩服です。装備はかなり外されたんですけどね。

腰に拳銃が刺さっているだけです。

「あの……体外的な情報収集活動をするんですよね？」

「はい。そうですね？」

「なら、この格好は目立つのでは？」

「ええ。ましろさんには別働隊として、私たちが出来ない分野の情報収集をしていただこうと思っています」

そう、巡田さんは言います。ちなみに巡田さんの格好は、白いカットーシャツに、黒いパンツです。

「どういった情報収集を？ 格好から察するに、鎮守府から出ないでするみたいですけど？」

「そうですね。ましろさんには、『艦娘たちの精神状態が、どう変化したかの調査』をしていただきます」

思考が追いつきませんでした。巡田さんの発した、言葉の意味が分からなくなりました。

「紅提督が鎮守府に居なくなつて、かなりの時間が経ちました。居なくなつた直後は、かなり荒れていました。ですが、現在はどうなっているかは分かりません。なので、現在の状況を調査する必要があります」

巡田さんは説明をしてくれます。

「この調査の目的は、『艦娘による暴走』の有無を知る事です」

巡田さんは、平然とそう言いました。

暴走。つまり、何かを爆発させて暴れるという事でしょうか？

「『提督への執着』ですか？」

そんな状況に陥る、一番の原因になるであろう事を私は言いました。

「そうです」

巡田さんは頷きました。

「ですので、ましろさんにはその任を任せたいと思います。外に出ないですから、危険も少ないですし」

「危険が少ないとは？」

「ええ。……ヘタしたら、艦娘に殺されてしまいますからね」

そう、巡田さんは澄まし顔で言います。

とんでもない事を口走つたのに、他の5人は笑っていました。私だけなんででしょうか。怖い、と思ったのは。

「ど、どうしてですか？」

「『提督の執着』が発現する事を、起こしてしまつたんですよ。怒りを買った対象が」

巡田さんは言います。

「どんな相手であろうと、彼女たちは殺意を剥き出しにしますよ」

「どんな相手にでも、ですか？」

「はい。貴女にも、向けるでしょうね。ですが少なくとも、赤城さんは大丈夫でしょうね」

多分、私の正体を知っているからでしょうね。

その自身がどこから来ているかは分かりません。ですけど、それは確信出来るんです。

赤城さんは、私に手を掛けないと。

「そうですね……」

「では、よろしくお願い致しますね」

「了解しました」

敬礼を交わすと、私は本部棟と食堂、艦娘寮が連なっている建物に向かいました。そこに入るのも、何時ぶりでしょうか。

—————

—————

——

これまでであった事の話から、艦娘の行動が気になるのは確かな事です。ですけど、動いた事がないんです。一体、どうなっているんでしょうね。

私は巡田さんから与えられた任務遂行の為、艦娘のところに顔を出しに行きます。とりあえず、赤城さんと話をしなくてははいけませんね。

第14話 情報収集②

配属が決まったのは、朝でした。時間的にはまだ、昼には程遠いです。私の記憶違いでなければ、この時間は執務を終わらせてから、暇をしている時間の筈です。

私は少し忘れかけている、艦娘寮の中を歩きます。

時間を置いてはいますが、やはり変わりませんね。たった数日しか居なかつたここも、懐かしく思えてきます。

そんな事を考えながら歩いていると、艦娘に声を掛けられました。「む。貴官は見えない顔だな」

身体のラインが浮き出る白が基調の服に、プリーツスカート。黒いストッキングを履いていて、ケープを羽織っています。

肌の色はかなり白く、髪の毛は薄いグレーでした。雰囲気からして日本人には見えないです。

彼女には、私は見覚えがありました。

「グラーフ・ツエツペリン？」

「そうだが……。貴官は？」

「私は、碧 葵です」

「ああ。数カ月前に異世界から人探しに来たという。……見つかったのか？」

勝手なイメージの押し付けかもしれませんが、グラーフ・ツエツペリンさんは堅苦しい性格をしていると思っていました。ですが、そういう訳でもないみたいです。

結構、社交的ですし、笑います。

「いえ、まだです」

「それで、貴官はどうしてここを？ 身なりはどうやら『柴壁』の者のようだが？」

「今はそうなってしまいました」

私は詳しくは言いません。それには理由があります。

グラーフ・ツエツペリンさんが、私を止めさせたんです。言っただけなら、そう直感で感じ取ったんです。

「まあいいだろう。それで、どうしてここに？ 『柴壁』の者は、ここには来ないのだが」

何の気無しに言っているんでしようけど、ものすごく怖く感じます。

何を考えているのか、分かりませんからね。それに、ここに来る前に巡田さんから聞かされていた事も気になりますし。

「ここにはお世話になってましたからね。幾ら数日とはいえ、懐かしいんですよ」

「まあ、適当な言葉を並べて言います。」

「そうか……では、私はこれで失礼する」

「はい」

そう言つて、グラフ・ツエッペリンさんは離れて行きました。どうやら、とりあえずは見破られなかったみたいですね。

—————

—————

——

私は、以前訪れた事のある、赤城さんの部屋の前に来ています。

特に行く宛もなく歩いていたら、いつの間にかここに来ていました。

私は扉をノックします。そうすると、中から返事が聞こえてきました。

「はい」

「お久しぶりです」

扉越しに言いますが、相手の返事に違和感を覚えます。赤城さんつて、アルトボイスでしたっけ？

「入ってもよろしいですか？」

「どうぞ」

私は、違和感を持ちながらも扉を開いて、部屋に入りました。

そうすると、ある人が座っていました。赤城さんではありません。

赤城さんとは色違いの改造袴を着ていて、髪の毛をサイドテールにしている艦娘が居ました。加賀さんです。

どうやら、赤城さんの相部屋相手は加賀さんだったみたいですね。

「貴女は確か……碧 葵さんでしたっけ？」

「はい。貴女は加賀さんですね？」

お互いに、どんな名前か言い合います。

そして私は、加賀さんの正面に座りました。

「よろしくお願い致しますね」

「はい。こちらこそ……それで、なんの御用ですか？」

加賀さんはあまり表情を変えずに、私にそう訊いてきます。

なんとなく、イメージ通りですが、なんだか変ですね。

「赤城さんに用がありました……」

「赤城さんなら、外出していますよ」

「何処に行ったとか、分かりますか？」

加賀さんの表情を伺いながら、訊きます。

「酒保に。服を買いに行きました」

「成る程」

普通に答えてくれましたが、何だか変な感じは抜けません。

加賀さんが捉える、私はどう写っているんでしょうね。

じっと、観察されている様でならないんです。

そんな時間が20秒くらい続いた時、加賀さんは口を開きました。

「貴女……嘘は良くないですね」

突然、そんな事を言い出したんです。どういう意味でしょうか。

最初は理解できませんでしたが、やがてそれが何を指しているのかわかりました。多分、私の名前の事でしょう。たった数分前に会ったばかりですので、違和感を持つとしたらそこくらいしかありません。ですが、何故それを疑ったんでしょうか。

「嘘、ですか？」

私は分かってない風に、加賀さんに聞き返します。

「はい」

それ以上、加賀さんは答えてくれませんでした。そして、その目は私に向けられたままです。

「碧さん。貴女、何者ですか？」

とてもストレートに訊いてきます。

答えるにしても、何を訊いているのか分かりませんので、回答に悩みます。私がどういう人間なのか、どうしてここに居座るのか、そういう事を訊いているんでしょうかね？

数秒間、私は黙ったままでしたので、加賀さんが再び訊いてきます。「貴女は誰なんですか？」

加賀さんは正座したまま、私の顔を捉えます。そんな加賀さんの顔を私は、直視できていません。顔を見ることを、私の深層心理が拒絶しているみたいです。

加賀さんの表情を見てはいけないと、そう言っている気がします。

「私はっ……」

そう、吃りながら口を開いたその時、扉が開かれました。

「只今戻りました……って、碧さんですか？ お久しぶりです」

扉を開いたのは、赤城さんでした。柔らかい笑顔で、私に挨拶をしてくれます。

そんな赤城さんに、私は返答しました。

「お久しぶりです、赤城さん」

今、ふと思いました。赤城さんはナチュラルに、私を偽名の方で呼びました。加賀さんが私の本名を知らない、分かっているんですね。柔軟な対応力は素晴らしいモノです。

「数ヶ月間、警備棟の周りを走らされているのを何度か見ましたが、どうでした？」

赤城さんは、加賀さんの横に正座して、私に訊いてきます。

部屋の隅に置いた物が、視界の端に映りました。あれは何でしょうか。食料品では無いようですね。

「そうですねえ……辛かったですね、なんとか訓練も終わることが出来ました」

「そうですね。おめでとうございます」

赤城さんへの近況が、私から伝えられます。そんな話をしています。この場には加賀さんも居るんです。それに、赤城さんが帰ってくるまでは加賀さんと話していました。

その加賀さんから聞かれた事を、私はまだ答えてません。

「赤城さん」

「はい、何でしょうか？」

私は何も言いませんが、赤城さんの目を見ます。

優しく微笑んでいる赤城さんの目を、ただじつと見ます。すると、赤城さんは何も言わずに見る私が、それを何を意味しているのか読み取ろうとします。

表情が段々と、真剣になっていったんです。

そんな私と赤城さんに、少し戸惑う加賀さんをそっちのけて、赤城さんが言いました。

「加賀さん」

「は、はい」

「少し、席を外して貰えますか？」

赤城さんは、唐突にそんな事を言いました。

私としては好都合です。

そんな赤城さんの言葉に、疑問を持ちつつも、加賀さんは立ち上がって部屋を出て行きました。

それを見送った、私たちは話を始めます。

「ましろさん」

やっぱり、呼び方を変えていたみたいですね。

「はい」

「どうして、戻ってきたんですか？」

赤城さんの質問は、とても単純でした。ですけど、回答には困ります。

『艦娘の状態を調査』だなんて言ったら、どうなるか分かりませんからね。いくら私が、紅くんの姉とはいえ。

ですけど、嘘も吐けません。私を雇っているのは艦娘、赤城さんですからね。

業務内容を知っているのかも、私は知りませんからね。ここは任務内容は言わずに、素直に答えるしかありませんね。

「情報収集ですけど、私にはまだ任がないみたいでして」

「……成る程」

どうやら、赤城さんはそれだけで納得してくれたみたいです。

やっぱり、雇い主相手だと、中途半端な会話でも成立するんですね。

「情報収集という事は、『血猟犬』ですか？」

「はい」

よく知ってますね。

「まあ、任務がないとのことですし、休みみたいなものですか？」

「そんなところですね」

赤城さんに適当に話を合わせます。ここで何か言っても、ボロが出る可能性がありますからね。

「なら、付いてきて頂けますか？」

そう言った赤城さんは、急に立ち上がりました。

一体、私を何処に連れて行くこうとしているんでしょうか。

第15話 情報収集③

私が赤城さんに連れてこられたのは、一度来た事のある場所でした。

一際大きな扉の部屋、“執務室”です。ここには以前、赤城さんに連れてこられた事があります。あの時は、赤城さんに私の本名を明かした時でしたね。

「では、入って下さい」

赤城さんはそう言つて、扉に手を掛けて開きました。私はそれに付いて、執務室に入っていきます。

中は相変わらず綺麗にしていますが、やはり使っている様子はありません。それに、紅茶の香りがしています。以前来た時も、していた様な。

「金剛さん。また、紅茶を飲んでいったみたいですね」

どうやら紅茶の香りは、金剛さんが飲んでいった後みたいですね。どうしてでしょうか。

わざわざ、ここで飲む意味があるという事でしょうか。

「そうなんですか？」

「はい」

赤城さんは、給湯室に入っていました。お茶でも淹れるんでしょうか。

ですけど、すぐに赤城さんは出てきたんです。何かを確認しに行つただけみたいですね。

「やはり、金剛さんでした。……いつもの事ですし、まあいいでしょう。それでは、こちらに」

そう言つて赤城さんは、ある扉に手を掛けました。

その扉は、以前来た時には開かなかつた扉。どんな部屋なのかも聞かなかつたところです。

扉が開くと、中には普通のワンルームがありました。ベッド、キッチン、机に椅子、本棚、テレビ。少し離れたところにトイレとシャワー室でしょうか。

その部屋を見て、私は直感的に何の部屋かが分かりました。ここはきっと、紅くんの部屋です。

そして、その中に見覚えのある艦娘が1人、掃除機を持っていた。

「赤城さん」

「あら、大井さん。今日の掃除ですか？」

「はい。今朝はやることがありましたので、この時間に。……そちらは、碧さんですか？」

大井さんです。何故この部屋で、掃除機を持っているんでしょうか。

居ないとはいえ、男の部屋に掃除機を持っているとなると、変な想像をしてしまいます。

「はい。お久し振りです」

私は、食堂であつた事を忘れたかのように振る舞って、挨拶をします。

大井さんとの出会いは、なんというか、居た堪れないものでしたからね。

「その格好、『柴壁』に入ったんですか？」

「はい」

私は必要最低限の返答をします。あまり、『血獵犬』だという事を、知られたくはありませんからね。

「ここは、紅提督が使われていた部屋です」

やはりそうだったみたいですね。言われる前から、なんとなくですが、想像は付いてましたからね。

「そうだろうと思ってましたよ」

「あら」

私は赤城さんにそう言います。

紅くんの部屋だろうな、と思っていた事に偽りはありませんから。

「では、私はこれで失礼しますね」

掃除機を持った大井さんは、コンセントを抜いて仕舞うと、そう言つて部屋を出て行ってしまいました。

私たちが来たので、切り上げてしまったんでしょか。

大井さんを見送った私に、赤城さんは話し掛けました。

「大井さんは、訳ありで紅提督に他の艦娘よりもお世話になっていたんですよ」

「え？」

やっぱり、元の世界でのイメージが強いからか、そんな事を思わず口に出してしまいました。

紅くんに手を焼かれていたということなら納得が行きますが、ほぼ確実にそれ以外でしょうね。

「大井さんは『提督への執着』が発現してなかったんですよ」

多分、私はその知識を知っている前提で言ってます。まあ、ここで働くのなら知ってないといけない知識ですからね。当然と言えば、当然なのかもしれません。

それでも、横須賀鎮守府の艦娘には必ず、『提督への執着』が発現するのではなかったんでしょか。

ですけど、赤城さんの言い方だと、大井さんは異質だったという事になります。何かあったんでしょか。

「そうなんですか？」

「はい」

正直、どうしてなのか気になりますが、がつついて聞いても変に思われるだけです。それに、任務とは関係なさそうですから、聞いても仕方がないかと。

ですけど、個人的にはとても気になります。

紅くんに世話になっていたなんて、まるで私みたいじゃないですか。

『提督への執着』がないと、ここでは生き辛いですよ」

突然、赤城さんは語りだしました。私としては、有り難いですね。どうしてなのか知りたかったですから。

「横須賀鎮守府艦隊司令部所属の艦娘の会話の内容は、大きく分けて3つです。1つ目は、戦闘に関して、です。これは私たちが艦娘であるが故の、仕方のない事ですね。海域の情報共有や、戦術の交換等々

……。大半が、戦術の交換ですね。砲雷撃戦、航空戦の戦術の模索。どんな戦い方をすれば、味方の被害を抑えられるかを考えています」艦娘としては当然の会話なんですよ。もし、私が艦娘だったなら、絶対にそういう話はするでしょうから。

「2つ目は、横須賀鎮守府に用意されている娯楽施設のことや、艦娘同士のコミュニケーションで起こった事等です。これに関しては、人間の女性も同じような事はしますよね？」

私たちが友達同士でやるような事を、艦娘もやっていたみたいですね。

これに関しては、女性の姿をした艦娘でも普通なことなんですね。

「3つ目ですが、基本的に艦娘の会話は3つ目の事が殆どです」

赤城さんは、遠い目をして言います。

「紅提督の事です」

『提督への執着』があるのなら、そうであるのが当然ですよ。主な会話の内容が、紅くんだと考えると、結構変な感じがしますが。

「常に会話の中心にいたのは、紅提督でした。何をしていた、何を読んでいて、何を食べていて、何が好きで……。そんな事を、話していました」

唐突に、赤城さんはあるものを袖から出しました。

ノートみたいですね。良くそんなものが、袖に入りますよね。

まあ、改造袴のようですよ。袖はそのままですからね。ですけど、こうやって普通の時は、たすきがけはしてないみたいです。手首まで袖で隠れていますし。

「これは紅提督のノートです。中を見ると、航空戦術について沢山書かれています」

そう言っつて、赤城さんはページを捲って見せてくれました。

確かに、戦術の事が書かれているみたいですね。と言っつても、私は全然分からないんですけどね。

ですけど、それがどうかしたんでしょうか。

わざわざ見せてくれたということは、何かノートに関連した話があるからでしょうね。

「艦娘たちは、提督と話す為に、提督の興味のある事を調べたりもしていたんですよ」

優しい顔で、そんな事を赤城さんは言います。

「ですので、提督と話すときはだいたい何かしらの準備をしていったんです」

「そうなんですか」

紅くんが消えるまでは、考えられなかったことがこの世界で沢山起きていたんですね。

それよりも、もともとの目的を忘れていました。

艦娘の精神状態の調査です。紅くんが居なくなった初期は、かなり荒れていたそうですが、今の状態が分からないとの事。それを調査する様に言われたんです。これも、ここで紅くんを待つためにやらなければならぬ事ですからね。

ですけど、今は赤城さんの話を訊いているのもいいかもしれません。個人的な興味ですけどね。

「じゃあ赤城さんも？」

「いえ、私は準備無しでも出来ましたので」

「準備無しでも？」

「はい」

となると、紅くと赤城さんで話しが合うネタがあるという事でしょうか。

紅くと話すなら、本の事とか学校のことくらいしか……。ミリタリー系もかなり齧ってるみたいですから、そっちも話せるんですけど、相手は女性ですからね。

「紅提督は艦載機とかの話が好きでしたからね」

よりにもよって、ミリタリー系でした。

赤城さんが、そういう話が出る事が意外ですが、それは女性として考えていたからでしょうかね。

「よく、運用法とか一緒に考えたものです」

そう言って、赤城さんはノートを閉じて袖に仕舞いました。

「それぞれで、置いておいてです。ここにましろさんをお連れした理

由です」

いきなり本題に入るみたいですね。

少し身構えます。

「紅提督の私室には、皆さんは勝手に来ませんからね。人を遠ざけるには丁度良いんですよ」

そう、赤城さんは言いました。

ですけど、これほど艦娘に慕われていたのなら、艦娘たちも気兼ねなく遊びに来そうですね。

「紅提督の私室ですので、それこそ無許可で入る事はしませんのでね。私や他数名は勝手に入りますけども」

いたずらっ子っぽく、赤城さんは舌を出します。

「紅提督って、ご自宅でも料理とか読書とかよくしていたんですか？」

赤城さんは突然、そんな事を訊いてきました。

「良くしていましたよ。本棚も、こんな風になっていましたし、料理も良く作ってくれていました」

嘘は言いません。訊いてきた赤城さんからは、変な違和感を感じませんでした。

「以前、北上さんと共に朝食を食べそびれた紅提督が朝食を作って食べていた事があったんですよ。その時の話を同じメニューが食堂で出る度に北上さんが話すものですから、皆さんが嫉妬してしまっただとがありました」

嫉妬と訊いて、少し悪い事を想像してしまいましたが、続きを聞けばそんな事はなかったです。

「紅提督に作って欲しいと頼んだところ、作って下さった事があったんです。紅提督に申し訳ありませんでしたが、とっても美味しかったですよ」

そんな風に、嬉しそうに話す赤城さんの話を聞きますが、紅くんは一体何を作ったんでしょうか。

赤城さんに訊いてみます。

「そうなんですねぇ。ちなみに、何を紅くんは作ったんですか？」

「オムレツですよ」

その刹那、私は忘れていた事を思い出しました。ここ8ヶ月くらい、紅くんのオムレツを食べていません。

すっごく好きなのに、忘れてました。

「オムレツっ?! オムレツ食べたいっ……」

考えただけで唾液が流れ出てきます。

全然食べてませんからね。

そんな私を見ていた赤城さんがオロオロし始めました。

「えっ?! ましろさんっ?! す、すみませんっ!!」

突然謝る赤城さんに、私はすぐに我に戻りました。

「はっ?! 大丈夫ですよ」

「そうですか?」

心配そうに言う赤城さんに、私は違う話を振ります。

「紅くんは普段、何をしていたんですか?」

「そうですねえ……普段は本を読んだり、艦娘の話し相手をしていました……色々やっていたみたいですよ」

いきなり、見ていないかのような言い方を赤城さんはしました。

『みたい』という事は、誰かからそうだと訊いたということですね。その間、赤城さんは何をしていたんでしょうか。

「本を読むのはいつもの事ですけど、話し相手ですか」

「はい。午後からは執務がありませんでしたので、秘書艦が許す限り、話が出来たんですよ」

「そうなんですか」

秘書艦が許す限りって、赤城さんが秘書艦をしていた訳では無いんでしょうか。

「まあ、大体は遊びに来て欲しいだとか、準備したネタで話したりとかですかね」

そうだろうとは思いましたが、やはりそうでした。

どれだけ、紅くと話したかったんでしょうか。

「そうなんですえ。赤城さんは、何をしていたんですか?」

間はさておき、訊いてみます。

赤城さんの口ぶりでは、秘書艦をしていなかったみたいですから

ね。

「私ですか？ 大体は資料室とか、艦装とかにいましたよ。偶に工廠に……」

資料室ということは、勉強でもしていたんでしょうか。

「そうなんですか？ 何をされていたんですか？」

「“特務”ですよ」

聞き慣れない言葉が出てきました。特務。つまり、特別任務という事でしょうか。

そんなものを任されていたんですね。

「特務ですか」

「はい。デイリー外の建造開発や、航空戦術の研究、実証等ですね。と言つても、かなり紅提督にはご迷惑をお掛けしていましたが」

「凄いですね。というか、そんなに信用されていたんですか？」

「はい。他の艦娘より信頼されていたと、自負していますよ。ですけど、怒られてばかりでしたけどね」

そう言つて、赤城さんは色々話してくれました。大体は怒られた内容ですけどね。建造したのはいいんですけど、案内だけして提督のところに来て来なかつたりだとか。というか、それだけでした。

急に秘書艦が目の前に現れて、問答無用で執務室に連れてかれて、こつぴどく怒られたりしていたみたいです。

そんな話を訊いていると、これまでの赤城さんからは想像も付きませんね。

「そんな提督からの信頼が、私にとって大きなアドバンテージだったんですよ」

そんな事を、ドヤ顔で赤城さんは言います。何だか、硬い表情が崩れてきたみたいです。これは、本来の赤城さんなのでしょう。

今までの話から、艦娘は確かに紅くんの話をするみたいです。赤城さんの話をしていたのに、紅くんの話に変わりました。

「それに紅提督とは、一緒に」

そう切り出した赤城さんは、急に話すのをやめました。途中で切り上げたら、気持ち悪いんですけど。

「一緒にな？」

私は訊きます。気になりますからね。

「あつ、いえ……何でもないです」

赤城さんは慌ててそう言つて、話を逸しました。

「紅提督曰く、身の回りの事は出来るそうで、掃除洗濯は自分でやつおられました」

だろうな、と内心呟きます。紅くんなら、それくらいして当然です。

赤城さんの話を聴きつつ、部屋をまた見渡しました。至つて、普通の部屋です。紅くんが使つていたと言われても、納得のいく状態ですね。そんな中、私はある写真が目に入りました。

紅くんは部屋に写真を飾らない筈なのに、それだけは写真立てに入られていきます。

私はその写真立てに近づいて、手に取りました。

入つていた写真は、どうやら全員で集合写真を撮つた時の何でしょうね。紅くんが最前列のセンターに座り、その周りを艦娘たちが笑顔で囲んでいます。凄く微笑ましい写真です。そんな写真立てを赤城さんに見せて、私は訊きました。

「これは、いつ撮つたものですか？」

「確か、紅提督が此方にいらしてから3、4ヶ月くらい経つた頃ですね」

中に映る紅くんの姿は、白い学ランのような服装をしています。海軍将官の制服なんでしょうね。そうでないのなら、他に何があるというのか分かりません。

特に見ていても仕方ないですので、写真立てを元あつたところに置きます。

それにしても、私が見てない間に結構成長していたみたいですね。あの写真に写つていた紅くんは凛々しかったです。失踪する以前も、偶にそういうところは見て取れましたが、ここまではなると思つてもみませんでした。まあ、紅くんが今の私を見たら同じ事を思うんでしょうけど。

「その写真が撮られた頃は、この鎮守府には娯楽というものが何一つ無かった時ですね」

そんな普通に、独り言を言うかの如く、赤城さんは話し始めました。「艦娘が」人として扱われていなかった頃ですので、仕方ないといえれば仕方ないんですけど。そんな私たちの為に、わざわざ色々なものを買って来て下さった事は今でも忘れません」

袖に手を入れて、赤城さんはそんな事を言います。

「私の我儘にも、付き合ったださいましたし」

何処か、金属の擦れる音がします。なんだろうかと思っていると、その音源は赤城さんの方からしていました。

少し気になりますが、気になってないような素振りを見せます。

「そんな提督でしたよ。紅提督は」

赤城さんは、袖から手を引き抜きました。その手には、あるものが握られていたんです。多分、さつき音を出していた音源なんでしょうね。

見た感じ、小さな懐中時計に見えます。

「私の我儘で、外に連れて行って頂いた時に、買って頂いた物です。他の艦娘に知られでもしたら、かなり困るのにも関わらず、私に贈って下さいました」

チエーンが手首に巻き付けられ、時計のところを手の平に乗せて言いました。

それを聞いていて、私は何だか面白くありませんでした。なんといいますが。表現し辛い感情です。

そんな感情を、押し殺して赤城さんの話を聴きます。

「特務」も懐中時計も、きつと提督の信頼からでしょうか？」

そんな事を言う、赤城さんを私はどんな目で見ていたんでしょうね。

自分からはとてもじゃないですが、見れないです。どんな顔をしていたのか、気になります。

第16話 情報収集④

結局、赤城さんから聞き出せたのは、紅くんの事だけでした。意図的に隠している訳ではなさそうでしたので、疑ってもいないんですね。

紅くんの私室で話をした後、赤城さんは用事があるといって何処かに行つてしまいました。話を聞こうと思つていたのは、素性がバレている赤城さんだけ。先ほど、赤城さんの部屋に訪れた時に、加賀さんが私を疑っていました。

加賀さんに話をしてしまおうと、一瞬頭を過ぎりましたが、踏みとどまりました。どんな事が起こるか分かりませんからね。加賀さんがどんな反応を示すかなんて、この世界に来てからというもの、嫌という程見てきました。皆が皆、そういう反応をするとは限りませんが、紅くんに近い相手は全員同じ反応をしていたんです。それなら、他の艦娘も一緒と考えてもいいでしょう。

そんな事を考えながら、アテもなく本部棟の中を歩いていると、あの艦娘とすれ違いました。特徴的な色をした長い髪を揺らしているその艦娘は、鈴谷さんです。

これもまた、私の勝手なイメージの押し付けになるかもしれませんが、鈴谷さんのキャラクターは、若い女性という感じがします。私が言うのもなんですけどね。

今時な言葉を使つていて、テンションも高く、一緒に居て楽しそうな雰囲気を出していると思つていましたが、違います。

暗くはありません。ですけど、何だかイメージとのギャップがあります。勝手な私の押し付けなんですけどね。

「ん？」

そんな私に、鈴谷さんは気付きました。正面から歩いて来ていれば、誰でも気付きますものね。

「異世界から来たっていう人？ 随分前に、『柴壁』に入ったって聞いたけど、もう訓練終わったんだ」

なんとというか、そんな事を言う鈴谷さんに、私は違和感を覚えまし

た。

私が『柴壁』に入ったつていうことを知っている艦娘は、赤城さんくらいでしょう。鎮守府の中を散歩していて、たまたま私を見かけたのなら分かりますが、私が訓練していた時間帯には、艦娘はおろか人も見かけませんでしたからね。

そうになると、どうして鈴谷さんが私が『柴壁』に入った事を知っているんでしょう。

「はい。私の自己紹介は」

そう私が言いかけると、鈴谷さんに遮られました。

「天色 ましろ、で合ってるよね？」

思わず、私は腰の拳銃に手を掛けました。引き抜きはしません。

「やめてよ。その物騒なモノ、引き抜かないで」

鈴谷さんの方から、私が何に手を回したかなんて見えないはずなのに、そんな事を言います。この鈴谷さんは一体、何者何でしょうか。

何から何まで、全ておかしいです。

「聞かれたら不味いことなんでしょ？ 場所、移動しようよ」

そう言つて、鈴谷さんは廊下を歩き出します。私はそんな鈴谷さんの後ろを警戒しながら、後を付いていきました。

――

――

――

本部棟から出て、鎮守府の中を数分間歩くと、あるところに着きました。

あまり鎮守府の中を見回つては居ない私ではありますが、今いるところに見覚えがあります。訓練の座学中、西川さんに教えられたところでした。

そこは、地下牢。建てられた当初に作られた、地下に用意されている大人数収容出来る地下拘留所です。滅多に使わないようですが、有事の際、『番犬』がここに入ってアンブッシュするそうです。

そんなところに、鈴谷さんは私を連れてきたんです。

「外は暑いし、人気のないところつて限られてるからさ。こんなところ

ろでごめんね」

そんな事を言って、鈴谷さんは地下牢のある一角にある、椅子を引つ張ってきて座りました。勿論、私の分もあります。

持ってきて貰った椅子に腰を掛けると、鈴谷さんはある事を話し出しました。

「これさ……今まで黙って持っていたんだけど」

そう言って鈴谷さんが私に差し出したのは、手帳くらいの大きさの何かでした。

高級感のある生地で、固くて薄い、手帳みたいな物です。ですけど、色が茶色をしています。中を開いてみると、同じく、茶色に変色した紙が挟まっていました。

よく見てみると、紅くんの写真が貼られていて、名前や生年月日、所属、階級が書かれていました。

「これって……」

「ましろさんも、同じの持ってるでしょ？ 認識票、身分証明書だよ」
私はとつさに、ポケットに入っている自分を出すと、並べて見ます。

「紅提督は将官だから、色が違うよ。それ、本当は紫色だったんだ」
鈴谷さんの一言で、この色が何の色なのか分かりました。

この色はきつと、紅くんの血が乾いた色です。

それ以外で、こんな色になるなんて、茶色の絵の具でも掛けないと変わりません。コーヒーを溢したのなら、コーヒーの香りがしますからね。

「じゃあこの色は？」

「血だよ。紅提督の。話は聞いてると思うけど、鎮守府の外にある廃工場で撃たれた時にも持っていたんだ」

鈴谷さんはそんな事を話しながら、足元に落ちている木片を蹴り飛ばしました。

「鈴谷はね、紅提督が外に連れてかれるのも、撃たれるのも見ていたんだ。でも、何も出来なかった。行動すれば、紅提督を撃った人に何されるか分からなかったし、先ずは紅提督の安全確保が第一優先だった

からね」

すれ違った時とは違い、少し饒舌になっている鈴谷さんの話を、私は黙って聞いています。

これまでに話を聞いた中で、紅くんが撃たれたのを見ていた艦娘はこれで2人目でしょうか。赤城さんと、鈴谷さん。巡田さんも見えたようですが、艦娘ではないので、含まれませんね。

今分かった事があります。鈴谷さんがどうしてここに連れてきたのか。それは、私の本名を確かめたかったからではないでしょうか。そうでなければ、ここに来る前に確認なんかしないでしょうから。

「その認識票、鈴谷が持っていてもいいんですけど、ましろさんに渡すよ。紅提督のお姉さんなんでしょ？」

そう言つて鈴谷さんは、無理をした笑みを私にしました。

確かに、こういった物は親族が持っているのが普通ですものね。ですけど、紅くんも死んだとはまだ言い切れませんので、“遺品”とは言いたくないです。精々、預かり物といったところでしょうか。

「ありがとうございます」

リアクションに少し戸惑いつつ、私はそれを受け取つて懐に仕舞いました。

いつか、返すものですからね。

「それで何だけど、ましろさんに話しておきたい事があつてね」

そう切り出した鈴谷さんの言葉に、私は耳を傾けます。

「何でしょうか」

「紅提督が撃たれた事は、誰とは言わないけど、数人から聞いてるんだよね？」

「はい」

「誰から撃たれたつてのは知らないみたいだから、教えるよ」

また、鈴谷さんとはんでもない事を言いました。

私ほどの当たりまで、紅くんが撃たれた事を知っているんです。紅くんが撃たれた時の話をしていたところは全て密室で、私以外には話していた人以外は居なかつた筈です。なのに、鈴谷さんはまるでその場に居たかのように言います。私が何処まで知っているのかを。

「天色 紅」

「は？」

私の周り、空間が止まったかの様に感じました。

鈴谷さんは何を言っているんでしょう。撃たれたのは紅くん、撃つた犯人は侵入者だって事は知っています。ですけど、そんな事、誰も言ってますでした。

「天色 紅って言う日本皇国海軍、元『海軍本部』、諜報部の諜報員。紅提督を撃つたその人だよ」

「ちよ……待って下さい！ 紅くんが自分を撃つたって事ですか?!」

頭の中が酷く、混乱しています。同姓同名なら分かりますが、天色という苗字からして珍しく、名前も紅で、日本に居るか居ないかという名前ですのに、何で同姓同名の人間が同姓同名の相手を暗殺するんでしょうか。ですけど、その確率は限り無く『0』に近いです。いいえ、『0』です。

なら、自分で自分自身を撃つたとしたか思えません。

「違う。だけど、同じ」

鈴谷さんの言っている意味が分かりません。違うのに同じって、どいう意味なんでしょうか。

私の頭は次第に、正常な思考が出来なくなってきました。既に混乱していて、異常だということは自分でも分かっています。ですけど、正常な判断が出来ません。

「じゃあ何なんですかつ?!」

私は我を忘れて、鈴谷さんに訊きます。

紅くんがこの世界に居た事も、撃たれた事もここまで動揺はしませんでした。ですけど、この件に関しては頭が全く働きません。

同姓同名で、国内に居ないであろう名前である筈なのに、その人物が海軍の諜報員で、紅くんを撃つた人だなんて。

「体格こそ違えど、顔も声も同じ。つまり、この世界に元から居る『天色 紅』だよ」

私の目に映る鈴谷さんの表情は、言葉では言い表せません。

怒り、悲しみ、そんな風に見えますが、何処か違う。そんな表情を

私に向けて話しています。

その一方で、私の思考回路は完全にショートしてしまいました。

もう、鈴谷さんの言っている言葉の意味を考えられなくなってしまうってし
まっています。

第17話 情報収集⑤

思考回路がショートした私に、鈴谷さんは話し掛けて来ます。何も考えられない今の状況で、鈴谷さんの発言をいちいち考えてる暇なんてありませんので、全て鵜呑みしてしまうでしょうね。

「紅提督と同姓同名の諜報員は、紅提督を撃つた後に、自決してるんだ」

リアクションをしない私に、鈴谷さんは話し続けます。

「年齢は紅提督よりも8歳上。だけど、さつきも言った様に、容姿は少し違えど声は同じ。そんな彼の目的は、紅提督の暗殺って事は確実なんだけどね、撃つまでにかかなりの時間話しているみたいだったんだ」
気になる事を、鈴谷さんは口にしました。

「でも、何話してるかなんて分からなかった。鈴谷たちがいたのはガラス越しだったし、距離もかなりあったからね」

「たち？」

「そうだよ。鈴谷と赤城さん、巡田さんが一緒のところから見てた」

そうやって鈴谷さんは立ち上がりました。

やはり椅子は埃っぽかったのか、スカートに付いた埃を払うと、懐から封筒を出して私に差し出します。

「何ですか、これ？」

その時には、思考回路のショートもある程度回復してました。

渡された封筒を覗くと、中には紙が折り畳んで入っています。

「それさ、赤城さんに渡しておいてくれる？ それとさ……」

鈴谷さんはさつきまでの、分からない表情から一変し、大粒の涙を頬から流し始めました。

向こうを向いていた鈴谷さんは、此方に振り返り、私の目を見ます。

その目は透き通っていて、綺麗な目でした。

「許して欲しいなんて口が裂けても言えないんだ。だからさ、貴女の、ましろさんの弟を見殺しにしてしまった事が、ずっと、ずっと心を蝕んでいてねっ……」

突然、鈴谷さんの身体が光に包まれました。

その光に目を瞑って、数秒後に目を開くと、鈴谷さんの身体にはゴテゴテとしたものが付いてました。

艦装です。私が見慣れた姿をした、艦娘の鈴谷さんがそこにはいませんでした。

「詫びる事も何も出来ないのなら……。この生命、紅提督のために使おうって思ってたけど、もうその紅提督がいないんじゃないや意味ないんだ。だから、鈴谷は逝くね」

私は鈴谷さんの最後に言った言葉、『逝く』のイントネーションに違和感を感じ、受け取った封筒の中身は慌てて引っぱり出した。

やはり、中身はどちらも鈴谷さん自身が『消えてしまう』ものが書かれています。

『自己解体申請』。もう一方は、『出撃許可証 3—4単艦』。

単艦出撃は鎮守府正面海域でなければ、危険だと言われているのに関わらず、北方海域最深部に向けた単艦出撃をするみたいです。どちらも、鈴谷さんは『消えてしまいます』。

それはつまり、『死』を意味します。

これは巡田さんの時も、赤城さんの時もありましたが、今回は巡田さんと同じ状況ですね。非常に不味い状況です。

「待って下さい」

私は冷静に止めます。ここで私の気が動転していたら、これから話す事も信用してもらえないかもしれません。

私は巡田さんや、赤城さんに話した事をそのまま話します。

大本営からの連絡が無い意図や、紅くんが連れてかれる前の容体から想像できる状態、国内の情勢を考えた政治的な思案があるということと話します。

それには鈴谷さんも、耳を傾けてくれました。

最後まで話し切るときには、鈴谷さんの身体からは艦装が無くなっていました。

「そっかあ……。ワケアリ」って奴だね」

「そうだと思いますよ」

私は胸を撫で下ろします。ひとまず、「自殺」はしないみたいです

からね。

「それで、ましろさん」

「何ですか？」

「鈴谷以外にもこの話はしてるでしょう？」

「やっぱり、鈴谷さんは何だか変ですね。色々で見抜かれていますし、普通なら持ってない様な情報も持っています。どんな情報網を使っているんでしょうか。」

「はい。巡田さんと赤城さんに……。それと、『柴壁』の人たちは本名『は』知ってます」

「『柴壁』の人たち、大丈夫だった？ あの人たち、マジヤバいからね。紅提督に心酔し切ってるからさ」

「さらっとそんな事を言う鈴谷さんですが、鈴谷さんも大概でしょうね。」

「と言うか、艦娘に限った話ですが、紅くんに対して上官部下の関係以外にも向けている感情が在るように思えてならないんです。特に、赤城さんやら金剛さん、大井さん、鈴谷さん……。」

何をすればこんな事になるんでしょうね。」

別の意味で、紅くんの事が心配になってきました。」

「そんな風には見えませんでしたけど、とりあえず優秀だということにはひしひしと感じました」

「だろうねー。あの人たち、米海軍特殊部隊を被害なしで全滅させるくらいだから……。」

「さらっと、とんでもない事を鈴谷さんは言いましたが、私は聞かなかった事にします。後々に分かる事になるでしょうからね。」

「……とりあえず、ましろさんと話せたからいいかなあ……。」

「そんな事を、突然鈴谷さんは口走りました。」

「どういう意味なんでしょうか。」

「それで、紅提督が軍病院に収容隔離されたままだったっけ？」

「はい。話を聞いた限り、紅くんが撃たれてから4ヶ月近く経ってるみたいですね。それだけあれば、傷は塞がっているでしょうし、リハビリも進んでいる筈です」

きつと、連れてかれた後は緊急手術をした筈です。それならば、体内に残った弾丸の破片や穴や傷は縫われているでしょう。

太腿と足の甲を撃たれたということは、術後も固定されているはずですから、傷が直った後はリハビリしていると思います。となると、既に歩けるようにはなっていると考えられるんです。

「じゃあやつぱり、ましろさんがさつき言ったみたいな事が起きてるの?」

「恐らく……。国内の混乱や、旧『海軍本部』残党を警戒しているんでしょうね。国唯一の対深海棲艦戦闘を優位に進める基地の司令官をまた、手に掛けさせる訳にはいかないでしょうからね」

そうでなければ、本当に死んでしまっているかもしれないです。

そんな事が脳裏を過ぎりますが、振り払います。ポジティブに考えてないと、何も行動出来ないですからね。

「多分、それ以外にも理由があると思う」

「……どんなですか?」

私が出した以外にも、紅くんを隠す理由があるのでしようか。

「考えただけでも腹が煮えくりかえるけど、政治的に利用されているのかもしれない」

「理由を、聞いてもいいですか?」

「うん。紅提督が居た時は、国内の状態は戦前そのものだったの。食料を輸入に頼っていた面を除けば、安全で平和だったみたい。けど、政府や軍としてはその状態を良しとはしてなかったみたいなの」

この件に関しては、時間がモノをいいますね。それに、経験。

「二度海に出れば、深海棲艦が手ぐすね引いてるからね。そんな深海棲艦と戦っているのが、突然現れて戦争を押し付けた相手と、異世界の未成年の青年。そんな事を知った国民は、安全で平和な世界から外の世界を見ている様で、興味関心なんて沸かなかった」

私は静かに訊きます。

「だけど、ある事をきっかけに私たちや紅提督の存在が明るみになって、ある運動が起きたんだ。何だと思う?」

私は頭をフル回転させて考えます。

安全で平和なところから、別の世界のように深海棲艦との戦争を見ていて、その戦争の事を知る機会を得たんですね。その時に艦娘と紅くんの存在を知ったとなると、思いつく事はただ一つです。

「戦争反対運動、ですね」

「正解。それと年端も行かない小娘と青年に戦わせて、軍は何をやっているんだっ！ てね。デモとか色々な活動が起きたんだけど、戦争反対運動だけなら良かったんだ。勝手に言わせておけばいいからさ」

鈴谷さんはため息を吐きました。

「住宅街や繁華街に近い、横須賀鎮守府は自治体から出て行けって言われていたんだ。理由としては、軍事施設が近くにあったら何があるか分からない、だって」

鈴谷さんの話し方からすると、怒るのを乗り越して呆れているみたいですね。

「だけど真意は違ってた。真意は、戦争に巻き込まれたくない、だってさ。笑っちゃうよ、ホントに。日本皇国存亡を賭けた戦いだっていうのに、私たちに紅提督に戦争を押し付けた政府（地方自治体）が民間人を扇動して、『戦争ヤダ！ 怖い！』なんて言って軍に志願もせず、内地で私たちの技術で用意した食料プラントから生産された食べ物食い散らかして、胡座をかいて言うんだから」

鈴谷さんが今のところをいう時だけ、少し早口になりました。相当、腹立たしいことだったんでしょうね。

鈴谷さんが、今言った事は私の居た世界でもありません。

ですけど、状況や国の体制が違いますので、比べることなんて出来ません。ただ、鈴谷さんの言う事が本当ならば、普通に考えても都合がいい話ですよ。

戦争を押し付けておいて、その発言は頭に來ますね。

「その発言には紅提督も頭を抱えてたし、実際、その手の運動が一番激しかった」

そう言っで一息吐いた鈴谷さんは、話を再開しました。

「今言った事を踏まえて、鈴谷が紅提督を隠している理由として考えたのは、『紅提督を隠せば、戦争は止まるんじゃないか』っていう事」

鈴谷さんはゴミを見るような目つきで、そんな事を言います。

「浅はか過ぎるんだよね……。でも、そんな事は関係ないじゃん？
紅提督を連れ戻せばいいからさ」

全くもってその通りです。

紅くんを連れ戻せば、どうにでもなりますし、私も紅くんの顔を見ることが出来ます。

こつちに来て、紅くんがいないと分かった時から、そうするつもりでしたからね。

「そうですね、大多数の艦娘がこの事を知らない今、行動を起こす事は出来ないと思いますよ？」

「そうかなあ？」

まだ動き出すには早計ですからね。そう鈴谷さんに釘を刺しますが、意味が無かったみたいですが。

『柴壁』があるよ？ あの組織は言うなれば、紅提督のために汚れ仕事も厭わない実働戦闘部隊だよ？」

「え？」

なんとなくそんな雰囲気は感じていましたが、本当にそうだったんですね。

ただだもでない上に、従順過ぎる『柴壁』には狂気すら感じますが、そんな事を揉み消す程の強さがありますからね。

そんな事は、私の視野にすら入ってません。

「赤城さんに許可取って、作戦を立てて武下さんに作戦指示書出したら、すぐに始まるよ？ 紅提督奪還作戦」

「奪還ですか？」

「うん。だって、連れてかれたからね。任意でもないし……。でも、軍の病院の方が、設備が良いってのは分かるんだけど、あんまり拘束期間が長いとねえ」

そう言って、鈴谷さんは私の前に立ちました。

「紅提督がいないんじゃない、作戦立案の時点でのレベルがたかが知れてるけど……。まあ、やれなくはないかなあ。それでさ、ましろさん」

「何ですか？」

私が口に出さないだけで、話が淡々と進んでいく状況に、鈴谷さんが話しかけてきました。

「作戦立案、頼めない？」

どんな事を期待して、私に言ったか分かりません。

ですけど、そう私に言った鈴谷さんの目は真剣でした。

私に頼んだ理由は分かりません。ですけど、話を訊いている限り、まともに作戦立案出来ない状況だからこそなんでしょう。それとも、鈴谷さんは私に何かを感じて、それを頼りに頼んだだけなんのでしょうか。

第18話 鼻の効く犬と、白い番犬①

私に紅くん奪還作戦の立案を頼んできた鈴谷さんは、ある程度は手伝いが出来るであろう艦娘や人員を紹介してくれました。

艦娘からは、霧島さんと赤城さん。ですけど、赤城さんはあまり頼らない方がいいとの事でした。理由としては、実は多忙だという事。それに、赤城さんが作戦立案、指揮をすると、必ずどこかに見落としがあつて、危険な目に遭う事があるそうです。信頼はしているんですけど、どうしてもそう言った類は赤城さんに頼めないと、鈴谷さんは言っていました。それに対して、霧島さんに関しては、かなりの高評価みたいですね。

どうやら、紅くんと度々、海域制圧の際に使える艦隊運用法や、作戦を練っていたそうです。

何だか、霧島さんの話は想像通りでした。巷では、脳筋だとか呼ばれてましたが、それでも無いみたいですね。

人員は、武下さんと巡田さんでした。2人とも海軍でもエリート出身ですし、士官ではあったので、そう言った事も出来るのでは、との事でした。

巡田さんに関しては、実働部隊の指揮を執る事になるでしょうから、実際に動く人間も加えた状態での、作戦立案をすれば、意思疎通が図れるという事も考慮してみたいですね。

「じゃあ、外に出ようか」

一通り鈴谷さんと話した後、私たちは地下牢から出て、本部棟に戻りました。

やることが他にも出来てしまいましたが、任務があります。艦娘の精神状態を見なければなりません。

今回、鈴谷さんを見ましたが、鈴谷さんだけ見ていると、かなり酷い状態だという事は一目瞭然です。自殺を図る等、まともでは無いですからね。

—————

1
1
本部棟に戻りましたが、全く艦娘を見かけません。ここに戻ってくる道中、鈴谷さんにある事を聞かされました。

『ましろさんつの任務つて、もしかして、『艦娘の精神状態の調査』？』
やはり、鈴谷さんは気を許せない相手です。信用がどうこうではなく、その情報網に関してだけです。紅くん関連だけは、従順過ぎて怖いくらいですが。

(本当に艦娘はいないですね。やっぱり鈴谷さんの言う通りでしたね)

私の任務を見透かされた後、鈴谷さんは『艦娘は昼夜問わず、私室からあまり出てこないよ。出撃も遠征もないし、なにより紅提督がないからね』と言ってました。

長が居ないだけで、ここまで変わってしまうもの変ですが、仕方のない事のように鈴谷さんは言っていましたので、その言葉を信じる事になりました。

本部棟の中を見て回りましたが、見た感じ、使われている部屋っていうのは思った程無いみたいです。

特に、ある区画に関しては全くと言っていい程でした。廊下から埃っぽくて、扉を開けて見ても、中はダンボールだらけでした。

そんな本部棟を見て回るのも、ほんの40分くらいで終わってしまったので、執務室に來ています。

中には誰かが居るわけでもないですが、紅茶の香りはします。この匂いは、金剛さんが飲んでいった匂いみたいですね。

そんな執務室の棚に並んでいる、大量のファイルを見上げて見ます。大体が、鎮守府稼働からの資材管理や、戦闘記録などが入っていました。試しに、戦闘記録を手にとって開いてみますが、書いてある言葉は理解出来ませんが、内容は理解できません。報告書みたいですが、レポートみたいになっています。出撃した艦隊の旗艦が書くものみたいで、その時あったことなどをまとめているだけみたいです。

なんというか、文章が読み取りづらいところが多いです。艦娘によ

るみたいですけどね。

私がそんな風に、ファイルを見てみると、執務室にある艦娘が入ってきました。

その艦娘は、艦種にしては雰囲気、大人びています。

「ん？ 葵さんかい？」

「ホントだ。葵さんだ」

そう言っただけのところに来たのは、時雨さんと夕立さんでした。

理由は知りませんが、この鎮守府には駆逐艦の改二は夕立さんだけみたいですね。隣の時雨さんも、見た感じだとまだ改みたいですね。

「2ヶ月くらい姿を見なかったかい？ その格好を見る限り、『柴壁』に入ったのかい？」

「はい。丁度、2ヶ月前に入りました」

時雨さんは表情を変えずに、淡々と話してきます。

「それにしてもさ」

時雨さんは、そう切り出します。

表情から感情が読み取り辛い時雨さんが、私は少し怖く感じてしまいます。

「地下牢に行ったの？」

「え？」

いきなり何を言い出すのでしょうか。

それにどうして、私が地下牢に行っていた事を知っているのでしょうか。

とつさに、時雨さんの隣に居る夕立さんの表情も見てみますが、時雨さんと同様です。全然、表情から感情を読み取れません。

「ふうん……まあいいさ。それとさ、こうやって会えたんだ。少し聞きたい事があるんだ」

時雨さんはそう言っただけで、ソファに座って話そうと言出し、私たちは対面になって座りました。夕立さんは、時雨さんの横に座りません。

「何か隠してるよね？」

ドキリと心臓が跳ね上がります。

艦娘には一部を除いて、本名を伏せています。それは、こちらに来た当初、紅くんの姉だと知られたら、何をされるのかも分からなかったからであり、自己防衛の為でした。

それが最近となっては、人間にはかなり知られています。鎮守府に勤めている人間は全員、私の本名を知っているのではないかというくらいです。

ですが、艦娘にはずっと黙ったままです。ただでさえ、不安定な精神状態だという事が予測されている中、私がある中に放り込まれたのなら、パニックが起こる事は必至です。

「何を、ですか?」

私は平静を装います。

時雨さんの纏う空気に、私はかなり警戒していますからね。

「そうだね……例えば、名前。碧 葵つてのは偽名なんじゃないのかな?」

かなり鋭い感をしている。しかも、そう発言する時には、何の迷いもないように見えました。

「どうなんだい?」

見透かされた様な目で、私の目を見てきます。

何だか、身体がゾワゾワしてきますが、このまま黙っていても仕方がないので、私は真実を伝える事にしました。

これまで経験してきた事を考えると、時雨さんか夕立さんの何方かが、何かしら危険行動をしかねません。いつでも動けるような体勢になっておきましょう。

「その通りです」

「じゃあやっぱり偽名だったの?」

「はい。……私の本名は、天色 ましろです」

「天色?」

時雨さんも夕立さんもフリーズしたかと思うと、分かってきたのか、段々顔が青ざめていきます。

「私は天色 紅の姉ですよ」

そう言うと、時雨さんは青ざめた顔のまま、あることを訊いてきま

した。それは、今までに訊いたことない質問です。

「ど、どっちのだい？　僕が知っている『天色　紅』という人間は、2人居るんだ」

多分、最後の悪足掻きでしょうね。

これで、私が何方かに答える事によつて、時雨さんたちの反応を変わるはずです。

「横須賀鎮守府の方です」

これを言えば、終わると思つてました。ですけど、違います。時雨さんは更に掘り下げて、質問を重ねてきました。

「じゃあ、紅提督が好きなこと。何でも言つてみてよ」

まだ、顔が青いままですが、時雨さんは私の目を捉えます。

「読書」

「うん。じゃあ、紅提督が趣味でしていた事は？」

「家事」

簡単です。何だか、紅くん検定みたいですが、気にしないようになります。

「次は、紅提督の信条。もしくはトラウマ」

「信条は『異性にはなるべく触れない』。トラウマは中学生時代の部活動」

「ふうん……」

時雨さんの顔はこの質問に私が答えていく度に、血の気が引いてきました。遂に今、もう真つ青を通り越しています。ただでさえ、色白で白いのに、もう人肌のように見えません。

「まさかね……本当に？」

「ええ」

これが最終確認でしょう。時雨さんは、その刹那、立ち上がって私に頭を下げました。

とんでもなく急な角度です。

「僕が不甲斐ないばかりに、紅提督がっ……。どう詫てもっ……」

そう、時雨さんは言います。その一方で、夕立さんは固まっまってしまっているみたいですね。ピクリとも動きません。

そんな夕立さんに、時雨さんは話し掛けました。

「ねえ、夕立。僕はどうすればいいと思うっ？」

そう言った時雨さんに、夕立さんは答えました。冷たい声で。

「何も出来なかったのなら、死んで詫びなきやダメよ」

そう言つて、夕立さんが急に立ち上がると、執務室の窓際にある大きな机に近づき、引き出しを開けて、数枚紙を抜き取りました。

それを持って、こっちまで戻ってきたかと思うと、机に置かれているペンを手にとつて、記入を始めます。

時雨さん夕立さん共に、手で紙に書かれている内容が隠れてしまつて見えませんが、良くない紙だという事は雰囲気で見分かりました。

少しして、夕立さんと時雨さんは書き終わったであろう紙を、私に見せてきました。

「これって……」

『自己解体申請』。僕らは自分で『死』を選ぶ事も出来るんだ」

「私たちは、紅提督の艦娘。紅提督が居なければ、意味がないわ」

そう言い切つたんです。

見た目は中学生位の少女2人が、そんな事を口に出したんです。

私としては衝撃的でした。鈴谷さんの時もそうでしたが、どうして艦娘はこんなに紅くんの事を思っているんでしょうか。

居なくなつたなら死を選ぶなんて、何時の時代の話なんでしょう。

「ダメですよ」

そんな2人に、私は冷静に止めに入りました。流石に2回目となると、対応は分かっています。内心、時雨さんが食い下がってくるだろうとは思っていましたが、そんな事ありませんでした。他の艦娘や巡田さんに話した時のように、対応すれば皆、自ら命を絶とうとする事は止めてくれます。

一筋の希望に、できるだけ手を伸ばそうとするんでしょうね。

なんとか『自己解体申請』の書類を取り上げて、破き捨てました。と言つても、持っていた書類を引っ張つて、そのまま勢いで破いただけなんですけどね。

そんな2人に、気分を変えようと私は提案しました。こんな話をし

ていても仕方ないですし、気が滅入ってしまいます。

ついでに言えば、私の任務もこれで終わったようなものですからね。艦娘は未だに、心の何処かで気持ちを押し殺しているのだと。

「気分変えるって言っても、今の鎮守府で遊びにいけるようなところはあんまりないわよ？」

少し口調に違和感のある夕立さんを先頭に、私たちは本部棟の中を歩いていました。

気分転換の出来るいい場所は無いかと、勢いで出てきただけですからね。何の計画もなしに、動いているだけなんです。

そう言っただけ夕立さんは歩きますが、迷いがないように思えます。

迷っているのなら、どこかで足を止める筈なのに、何処にも止めるどころか、身体が引き寄せられるように進んでいるようにしか思えないのです。

「そうなんですか？」

「うん。皆が遊びに行くところなんて、グラウンドとか酒保、執務室くらいだったから。他の部屋には大体が、勉強に行ってたの」

そう言いつつも、足を進める夕立さんの後をつけます。

「勉強ですか？」

『戦術指南書』っていう、艦娘の戦闘に関する戦術を専門に扱ってる本があるのよ。それがあつたのここ」

そう言っただけ夕立さんが立ち止まったのは、壁に『資料室』と書かれている部屋の前でした。

第19話 鼻の利く犬と、白い番犬②

資料室に着いた私たちは、夕立さんの先導で中に入りました。

中は、何処か学校の図書館を彷彿とさせる様な、独特な香りが立ち込めています。そして、本棚に目を向けると、恐ろしく分厚い本が何冊も何冊も並んでいました。

「これが、戦術指南書ですか？」

「そうよ。だけどこれでも1／4くらいかしら？」

そう言つて首を傾げる夕立さんの後を着いて、資料室の棚を眺めていきます。

なんと、図書館であるような本棚が16個くらいに、戦術指南書が収められていました。

どれくらいの数が置かれているのか分かりませんが、とりあえずかなり多いということだけは分かります。百科事典全巻集めても、到底足りない数ですね。

そんな、とてつもない数の戦術指南書を目にした私は、絶句してしまっていました。

「やっぱりそういう反応だよね。うん、分かっただよ」

時雨さんは、私の目の間で手を振つてそう言います。

この反応はテンプレなんでしょうかね。

数秒して戻ってきた私に、夕立さんは話をしてくれます。

「他にも普通の文庫本とか漫画も置いてあるわ。最初のは紅提督が買ってきたものだったけど、空襲で焼失してからは寄贈品ね。今じや収まりらなくて、隣の空き部屋も資料室にしてるくらいだから」

夕立さんは本棚の間を歩きながら、そんな事を話します。

本棚を眺めながら歩いていると、ある一角が目に入りました。それは机と椅子が並べられているところでした。

そこには艦娘が、本とにらめっこしていたり、ノートを開いていたりにしていますね。見える範囲では由良さん、翔鶴さん、満潮さんですね。翔鶴さんは本を読んでいるだけみたいですが、由良さんと満潮さんは勉強をしているようでした。

そんな3人を流し見して、私は夕立さんに訊いてみます。

「由良さんと満潮さんは何をしているんですか？」

「あれは勉強よ。由良は多分、魚雷の特性について。満潮は艦砲についてだと思う」

イントネーションだけでは判断出来ませんが、満潮さんがやっているのは多分、軍艦に装備されている主砲の事についてでしょうね。

「そうなんですか？」

「多分よ、多分」

そう言つて夕立さんは私と時雨さんを少し離れたところで待つて欲しいと言つと、由良さんと満潮さんの方に行つてしまいました。

数分話をすると、こつちに戻つてきて私に小声で教えてくれます。

「由良はただの戦術だったわ。だけど、満潮は違った。何だか家事に關して勉強してるみたい」

そんな風に、夕立さんは言います。

だけど、何だか満潮さんの事を言う時だけ、ぶっきらぼうになっていました。気に入らなかつたんでしようかね？

「そうだったんですか」

「うん。まあ、いいわ。少し、どこかで話でもしましょうか」

そう言つて、私たちは資料室を後にした。

――

――

――

特段、私はこの2人に聞きたいことはありませんでした。

情報収集も、結局鈴谷さんと話したところで、完了したのも同然でしたからね。巡田さん曰く、『報告書は要らないです』ということなので、口頭で伝えるだけで済みますからね。

行く宛も無く、歩く私と夕立さん、時雨さんは廊下を歩きながら、平凡な会話をしていました。とは言つても、2人が紅くんの事を聞いてくるだけですけど。

特に夕立さんの食付きが凄まじく、まさに機関銃の様にあれやこれやと訊いてきます。

好きな食べもの、好きな本、好きな遊び、好きなスポーツ……根掘り葉掘り訊かれて、私も紅くんの嗜好を知り尽くしている訳でもありませんので、かなり頭を使いました。

「あつ……ごめんなさい。つい色々訊いちやったわ」
そんな風に、夕立さんは言います。質問が鉛弾の様に飛んでき始めて大体20分くらい経った頃でした。

私ももう、結構疲れてきて居たので、ここで気付いてくれた事がありがたいです。

「いえ、大丈夫です」
「そう?」

私は少し、窓から外を望みながら話を聞きます。

「そういえば……」

数秒間の沈黙の後、夕立さんはそう切り出します。

「こつちに来て、なんか変わったこととかあった?」

「……どういう意味ですか?」

一瞬、夕立さんの言った言葉に疑問を感じました。

何が変わったのかという事を聞きたいのか、分からないんです。

「そのままの意味よ」

私が答えを出せずにいると、時雨さんが私に言いました。

「そんな風に訊いたって分からないよ、夕立。……ましろさん」

「はい」

「理不尽な事が起きなかったか、って事を聞きたいんだ。例えば……そう、自分でやった事がそっくりそのまま返って来た事とか」

聞きたい事は分かりましたが、なんと答えればいいのか分かりません。

世の中、理不尽な事ばかりですから、そんな事も考えた事もあります。ですけど夕立さんが聞きたい事は、多分そういうことではないんだと思います。

もつと違う、『何か起きてないか』ということではないのでしょうか。

「……ないです」

私はそう考えたとしても、思い出せませんでした。特にこれと言って、良くない事が起きた事は、こつちに来てありませんからね。

それを訊いた夕立さんは、何だか安心した様な表情をして話します。

「なら良いわ……。それで、ましろはどうするの？ 今後」

夕立さんは訊いてきます。今度は『理不尽』云々では無いみたいですから、私も少し考えただけで答えを出します。

『柴壁』で気長に紅くんを待つつもりです。ですけど、何か動きがある時は、私も動くつもりではありません」

「そう……その時は夕立も動くわ」

「勿論、僕もね」

夕立さんと時雨さんはそう言います。

それから夕立さんと時雨さんとは別れました。もう、聞く事もありませんし、何より本来の目的である『艦娘の精神状態の調査』は終わりましたからね。

後は報告をするだけです。

まあ、それまでは鈴谷さんが頼んできた奪還作戦の事でも考えましょう。

――――

――

――

奪還作戦について考え始める前に、私はある人のところに足を伸ばしています。

赤城さんのところですよ。

どうやらこの横須賀鎮守府艦隊司令部の長である紅くんが居ない今、全権を握っている訳ではありませんが、ある程度の指示を出しているのは赤城さんみたいです。ですから、奪還作戦を遂行するにしても、赤城さんに一声掛けなければなりませんからね。

こんな事をするのも、何だか変な感じですが、しなければならぬ事です。

「赤城さん」

「はい、何でしょうか」

赤城さんは、執務室に居ました。

どうやらファイルを見ていた様です。

「……赤城さんって、ただ待つ事と、自分から動くどどつちが良いですか？」

そう、私が遠回しに聞きます。

何故なら、この場に翔鶴さんが居ますからね。ここで、本題を言うわけにはいきません。

それに、赤城さんもこれだけでどういう意味か分かる筈です。

少し間を置いた赤城さんは、私の顔を見ます。その表情は温かい笑顔ではなく、とても真剣な表情でした。

「動きますよ、私は」

そんな主語の無い上に、傍からみたら意味の分からない会話を繰り広げている私と赤城さんを、翔鶴さんは不思議そうに見ています。

「あの、どういう……」

そういう翔鶴さんを私たちは無視をして、話を続けました。無視とどうか、聞こえていなかった、と言った方が正しいのかもしれない。

「“紅葉狩り”は“私たち”で行ってきますね」

「……成る程。では、私にその“紅葉”を一枚」

「否。赤城さんにあげる訳にはいきませんね」

「ふふっ」

「では。予定を立てて来ます」

私はそう言っつて、赤城さんの前から立ち去ります。

どうやら、意図は伝わったみたいですね。だからあんな事を言っただけでしょう。

『では、私にその“紅葉”を一枚』

きっと、そういうことなのでしょうね。

赤城さんはやっぱり、そういう感情を持っていたということですね。

私は普通なら喜ぶべきことなのだろうと思いつつも、面白くない気分になっていました。

盗られるような気がして、なくしてしまうような気がしてなりません。

第20話 作戦立案

赤城さんに一言伝えた私は、本部棟の執務室に居座ることにしました。どうやら、私が出来ない時に金剛さんと大井さんは来ていた様です。もう今日は艦娘がここに近づく事は、ほとんどないと思いますのでね。

ソファーに腰を掛け、レポート用紙と筆記用具を出して、奪還作戦の概要を考え始めました。ここまで来る途中で、ある程度はざっくりと頭の中で決めてしまっていたので、それを書き出します。

奪還作戦とはいえ、現状を鑑みると、私たちには圧倒的に情報が無い事が明確でした。

閉鎖的な環境にある横須賀鎮守府から出る人間等、0に等しいと言われていきますからね。出るのは任務として、情報収集に出かける『血獵犬』だけですからね。

そうはいつでも、実際に動くのは『柴壁』ですので、あまりそういった事を考慮する必要は無いんですよ。

(最初は情報収集ですよ)

戦に於いて、情報戦が肝と誰かが言っていた気がします。ですので、最初にしなければいけない、事を書き出します。

最初にするべきことは、紅くんが収容されている軍病院の特定、軍病院の警備状況や施設内詳細図の入手。軍病院に至る課程は、特定するのと同時にやればいいでしょう。

そこから様々な視点から見たりして、練っていきます。

レポート用紙に書き込んだら、斜線を引いたりする事、約3時間。素人ではありますが、一応、書き終わりました。

私は今出来上がったもの、おおまかな流れを見直します。

最初は、巡田さんら『血獵犬』による軍病院の特定。その後情報収集。軍病院の特定が終わったのと同時に、赤城さんによって大本営へ紅くんの容体を言及してもらいます。

その際の回答によって、今後の動きを左右します。

もし素直に回答があつたのなら、場合により『血猟犬』は撤退です。無かつたのなら情報収集を続行します。

『血猟犬』による情報収集が完了次第、本格的に作戦を動かします。

第一段階。横須賀鎮守府に毎日来ているコンボイを奪取し、兵士に偽装した『猟犬』二個中隊が軍病院へ出撃。

第二段階。『猟犬』二個中隊の出撃と同時に、『番犬』数人が横須賀郊外、都市部で騒ぎを起こします。騒ぎの内容は、『横須賀鎮守府から艦隊が出撃した』。横須賀鎮守府は勿論、戦闘行動を停止していますから、かなりの騒ぎになるはずです。

第三段階。『血猟犬』『猟犬』共に、軍病院への突入開始。但し、殺傷兵器の使用禁止。

銃はライバー弾、ナイフの携行禁止。非殺傷性手榴弾にて、軍病院の拠点を制圧。

第四段階。紅くん、救出。『猟犬』が乗り付けたコンボイによって、横須賀鎮守府へ帰還。

これが、おおまかなあらすじです。

3時間で作った内容ですが、正直これで出来るのかと不安で仕方ないです。

机上では上手くいったとしても、現実でそう動くとは限りません。プログラムではなく、常に状況は刻々と変化していきます。

今作ったものでは、必ずどこかで問題が発生するでしょう。ですが、奪還作戦をしようと思うと、こういった事以外に手は無いのではないかと思いました。

ハイリスク・ハイリターンではありませんが、『奪還』となると強硬策を取るしかありませんからね。他に手があるのでしたら、きつと私がこうやって作戦立案する前に作戦が実行されているでしょうからね。今ある不安を解消するには、第二段階で艦娘たちに本当に出撃してもらう事です。そうすれば、かなりの目を引き付けることになりませんか。

(まだ足りないんでしようけど、少し寝かせてみましょうか)

私は色々書いたレポート用紙を纏めて、ソファァーから立ち上がり

ます。

執務室とはいえ、誰かが来てもおかしくない時間ですし、『血猟犬』も半数は帰還してくるでしょうからね。

――――

――

――

戻ってきていた『血猟犬』の中に、巡田さんがいましたので、結果報告をしました。

その際、巡田さんはどうやらこの状況を予測していた様で、特段驚く事はありませんでした。

ですが、その予想も最悪に近いようです。まだ、大々的に私が名前を明かせる状態ではない事を忠告してきました。

勿論、調べていたのは私ですので、身を持ってそれは体験しています、感じてます。

報告が終わった私には、待機命令が出ました。他の『血猟犬』は情報収集を続行するみたいですが、巡田さんと戻ってきた数名がそのまま鎮守府に残るそうです。

残り組に南風さんも残っていました。というか、残った大半が女性でした。これから夜になりますし、そういった面を考慮した結果なんでしょうね。

「ましろさん。そちらの任務はどうでした？」

戻ってきた南風さんの横を歩きながら、話をします。

『柴壁』に入る前、ある程度艦娘に接触していましたが、それなりにしやすかったですよ」

「そうなんですか？ 私も最近話しをしてないですが、熊野さんとは仲が良かったんですよ」

そんな事を話します。

熊野さんというと、鈴谷さんの姉妹艦ですね。元居た世界でのビジュアルを覚えていますので、どんな外見をしているかは分かりません。

「そういえば、今日会った艦娘に鈴谷さんがいましたね」

そう私が思い出したかのように言うと、南風さんは驚きました。

「えっ?! 鈴谷さんって……」

「紅くんが撃たれた現場に居た、と言ってましたね」

「自分からそんな事を言っただんですか? 鈴谷さん」

続けざまに、更に驚いています。そんなに驚くことなんですか。

「はい。色々教えてくれましたよ」

私は、自分が本名を名乗ったとは言ってません。だから、あまり会ったことのない人間に対して、そこまで碎ける事が驚きなんですよ。うね。

「やっぱり、紅提督のお姉様だからでしょうかね?」

「それは……どうでしょうね。彼女たちが、見ただけで判断出来るとは思えませんし」

私はそう言っただけで誤魔化します。

こうでも言わないと、本名を教えてしまっている事が知られてしまいます。

「勘、でしようか?」

「かもしれないね」

私がやらずとも、南風さんが逸らしてくれました。私としてはありがたいです。

そのまま私たちは、寮に戻ります。

夕食を食べると、休息を取ります。その後も、自室で作戦の練り直しをします。

手を抜く訳にはいきませんからね。幾らこちらが、非殺傷兵器を使うとはいえ、あちらも合わせてくれるとは限りません。こちらのリスクは出来る限り、減らしておきたいんです。

—————

—————

—————

寮の私室に戻った私は、持っていたレポート用紙を出してまた、作

戦を練り始めました。夕食は先ほど、南風さんと食べてきましたので、もうこの部屋から出る事はお風呂の時以外はありません。そういえば、さつき南風さんから聞いた事なんですが、近々、大きく動く事になると、巡田さんに言われたそうです。それが何を意味しているのかは、私の手の内にある奪還作戦の事以外なら分かりません。まさか、今日から始まったこの作戦立案が、ずっと外に居た巡田さんに知られているはずがありません。

暑い上着を脱ぎ、ノースリーブになった私は、机に向かいます。

レポート用紙を広げ、執務室で書いていたものと共に、新しい紙も出します。

見直して、修正を重ねます。

私はそんな事をして、過ぎました。

第21話 執務室

『艦娘の精神状態の調査』は、1日だけでは無く、数日間行う事を知らされました。その間、執務室を中心に少しずつ情報収集していきました。

それと平行して、鈴谷さんに頼まれていた紅くん奪還作戦も練り直しを繰り返し、レポート用紙のゴミでゴミ箱が溢れ始めた頃、煮詰まりました。

約1週間、任務前や後に奪還作戦のあらすじや内容を考えていました。

先に結果を言ってしまえば、一応完成しました。

それを携えて、私が動き出したのは鈴谷さんに言われてから9日経った頃です。その9日間は『艦娘の精神状態の調査』を日中行いつつ、寮に戻ってから作戦を考えていました。ご飯も最初の1日は夕食もちやんと食べていましたが、それからは食べていません。1日2食生活です。

午後9時過ぎに私は寮を出て、艦娘寮に向かいます。この時間なら、あの人のまだ起きているでしょうからね。

艦娘寮までの道には街頭がポツポツとありますが、横須賀鎮守府の中です。危険なんて絶対にありえませんが、何も考えずにただ歩きます。

艦娘寮までは歩いて10分も掛からないくらいのところにあります。私たちの寮が立てられているところは、元は滑走路だったそうです。紅くんや艦娘、連絡などを迅速に行う為に、結構近くに作られたという事を、沖江さんから訊きました。とはいうものの、一番の理由はそこが空き地だったからだそうですけども。

元は、横須賀鎮守府管轄の土地では無かったそうですが、大本営が許可を出したそうで、それからは横須賀鎮守府の土地という事になったそうです。

住民からの抵抗も無かったらしく、ジェットエンジンよりも遥かに

音の小さい戦中のレシプロ機を嫌がる人は居なかったみたいですね。艦娘寮に着いた私は、その足で赤城さんの部屋に行き、ノックをします。

片手には作戦草案があります。これは後で鈴谷さんのところにも持って行きます。

「夜分遅くにすみません。赤城さん」

「あら、碧さん。どうされました？」

私のことをそう呼んだということは、室内には加賀さんがいるということですね。

片手にあるモノを見せるために、私は赤城さんを連れ出します。

「少し、時間を頂けませんか？」

「……はい。分かりました」

赤城さんを連れて向かう先は、執務室です。

鎮守府の中では一番、人が来ない事は皆周知ですからね。最も、紅くんが居たなら話は別でしょうけど。

「……」

「……」

「……」

執務室にはやはり誰も居ませんでした。

室内の照明を点け、私と赤城さんはソファーに腰掛けます。

「それで、ご用件は？」

赤城さんは、座るなり私に訊いてきます。

そりゃそうでしょうね。こんな時間に呼び出すことは今までありませんでしたからね。

「赤城さんにしていただきたいことがあります」

私は膝の上にある紙はまだ出しません。

「内容によります」

「でしょうね……。紅葉狩り、いえ。奪還作戦の草案が出来ました」

私は開かずに、机に作戦草案を出します。

勿論、赤城さんはそれに一瞬だけ目線を落として私の目を見ます。

「ましろさんたちだけで動くのではなかったのですか？」

「当初はそのつもりでした」

「ということとは、私にしていただきたいということは……」

「艦隊を、動かして欲しいのです」

私がそう言うと、赤城さんは表情を曇らせませす。

そんな事は想定済みです。約半年もの間、艦隊を動かしていないのです。それに防衛線は私が来た当初よりも後退し、今では海岸が最前線とされています。

横須賀鎮守府周辺の海域はまだ、こちら側に制海権はありますが、いつまで持つか分かりません。

「一応、話を聞きましょう。内容によっては、艦隊を動かさせないですからね」

「分かりました」

私は作戦草案を赤城さんに渡します。説明する場合、2部必要ですから片方は私が開きます。

「大まかに、奪還作戦には準備期間を含めて1ヶ月は掛かると思っています」

そう切り出し、私は説明を始めます。

「最初に『柴壁』の『血猟犬』を軍病院に派遣し、内部の情報収集を行います。作戦が進行したとき、必要になる可能性がありますからね」
「ある程度まで情報収集が完了したら、赤城さんが大本営に向けて紅くんの容体確認と具体的な帰還日時を求めて頂きます。人選に関してですが、どうやら赤城さんは大本営海軍部長官に顔を覚えられている、というのを理由としておいて下さい」

「返答があり、前向きなものであればその時、奪還作戦は中止します。もし、返答が変わらなければ段階を移行させます」

『柴壁』の『番犬』より数人、横須賀郊外にて騒ぎを起こします。内容は『横須賀鎮守府から艦隊が出撃した』です」

「この時、実際に艦隊には出撃していただきたいんです」

「この出撃は陽動です。軍の目が海に向いている間に、『柴壁』の『猟犬』が横須賀鎮守府に補給物資を届けに来るコンボイを襲撃。奪取し、兵士に偽装した『猟犬』は軍病院に向かいます」

そう淡々と説明していると、赤城さんが突っ込んできました。

「少し待って頂けますか？ 補給部隊を襲撃するとは、“殺す”ということでしょうか？」

「いいえ。気絶させてから監禁します。勿論、作戦終了次第、開放しますよ？」

そう答えて、私は説明を続行しました。

『血猟犬』による情報収集は、コンボイが軍病院に到着するまでに終わると思いますので、そのまま情報を『猟犬』に渡して待機します」「動き出すのは頃合いを見計らいますが、コンボイを奪取しますのであまり長くは待てません。ですので、半日以内に動かしませう」

私は自分で書いた作戦草案の紙をめくりながら、噛み砕いて説明していきます。

勿論、時間短縮の為です。

「頃合いを見て、『血猟犬』と『猟犬』は共に軍病院に侵入。駐留している兵士を無力化して、紅くんのいる病室に突入。そのまま連れ出します」

『猟犬』が使用したコンボイを使って『血猟犬』と『猟犬』、紅くんは軍病院を脱出し、横須賀鎮守府を目指します。これが奪還作戦の草案です」

そう言って私は紙を置くと、赤城さんの目を見て言います。

「ですので今回は横須賀鎮守府艦隊司令部の艦娘を、陽動に動かさないでしようか！」

私は訴えます。紅くんの奪還作戦ならば、十中八九動くと言うでしょうけども、それでもやらないと言いかねません。紅くんと艦娘との信頼関係がどのようになっていたかもわからないですし、何より司令塔が居ない状態での艦隊指揮になりますからね。

「……ましろさん」

真剣な目をした赤城さんが、私を呼びます。

「紅提督が生きているかもしれないと、私におっしゃいましたよね？ 私たちは紅提督の艦娘で、紅提督の艦。少なくとも私は、紅提督がご帰還するのであれば、何があろうと、何であろうとやりますよ。そ

れこそ、この手を血に染めてでも……」

赤城さんの握った拳が固くなります。

「私の方で艦娘を数人、〃そそのかして〃おきます。作戦決行日時と、陽動開始時刻は逐一頂きたいので、武下さんに掛けあつてきますね」
「……何故、武下さんに？」

「私設軍事組織『柴壁』は、私たちの出資で成り立っているものですが、現場指揮をしているのは武下さんです。『柴壁』に所属している貴女を、無期限有給を取り付けてきます。奪還作戦まではそちらに集中したいでしょうし」

武下さんへの連絡は、赤城さんの私への配慮でした。

有り難いです。正直、任務と並行してやっていくにはかなり無理がありますから。

「ありがとうございます」

「いえ、たいしたことではありませんよ。では早速、私の方でも進めておきます」

そう赤城さんが言った刹那、執務室の扉が開きました。

扉を開いたのは、ある艦娘です。

「ちいーっす」

入ってきたのは鈴谷さんです。タイミングを考えると、丁度いいのかわかりませんが、とりあえず探す手間は省けました。

「鈴谷さんっ?!」

一方で赤城さんは驚いています。この時間に執務室には誰も現れないと確信していたからでしょうね。

そんな赤城さんの事を露知らず、鈴谷さんは私の横に座り、作戦草案を覗き見します。

「ほお……奪還作戦」

そう鈴谷さんは呟きました。てつきり『できたんだ』とかつて言うと思っていました。予想が外れます。それと同時に、非常に不味い事になったかもしれせん。

赤城さんは、私の本名が鈴谷さんに知られている事は知らないんです。ですからきつと、赤城さんは『碧さん』と、私のことを呼ぶはず

です。

「碧さん。すぐに仕舞って下さい」

私の想像通りでした。すぐに赤城さんは、作戦草案を仕舞う様に私に言ったんです。

私はとりあえず、それには従いますが、鈴谷さんはそれでも私の持っている作戦草案を見ます。速読しているんですけど、それを見ていた赤城さんは少しずつ表情が変わっていきます。なんとというか一言で言えば、『怖い』です。

見ていたら身震いを感じる程の表情で、発するオーラも変わりました。温かいオーラを常に纏っている赤城さんからは想像できない様な、冷たくて鋭く、感覚を鈍らせる様なオーラです。

そんな赤城さんを物応じせず、鈴谷さんは速読していきます。

「ふーん……随分と強引じゃん？」

そんな風に呑気に私に言った鈴谷さんには、赤城さんの発しているモノが感じられてないはずがないんです。

なのに、平気そうにしています。どういった神経をしているんでしょうか。それとも、鈍いだけなのかも。そんな想像が私の頭の中を飛び交う最中、鈴谷さんは私にあることを訊いてきました。

「これ頼んでいたヤツ？」　「ましろさん」

その刹那、赤城さんは立ち上がり、光に包まれました。

光が晴れると、赤城さんの身体には私の元居た世界で見た赤城さんと同じ格好をしています。弓を引き、矢を番えています。その矢尻は鈴谷さんの方向を向いていました。

ですが、その鈴谷さんも両手で何かを構えています。

鈴谷さんのイラストに書かれている20・3cm連装砲でしょう。身体も赤城さん同様、元居た世界で見た鈴谷さんと同じ格好をしています。それに、どうやらカタパルトも持っているみたいですから、航空巡洋艦みたいですな。

冷静にそうやって見ていますが、状況は理解不能です。こんな事を考えているのも、今の状況に私の脳みそがついていけないんです。

第22話 動き

鈴谷さんを睨みつける赤城さんは、弓を引いたまま問いました。

「何故、それを貴女が知っているんですか？」

そう訊く赤城さんに対して、鈴谷さんはいつもと変わらない調子で答えます。

そんなやり取りを私は見ている事しか出来ません。この2人の間に入ったら、無いと分かっているにしても、撃たれるかもしれないからです。

状況が動いたのは、執務室に人が入ってきてからです。

多分、用事があつて来たであろう時雨さんと夕立さんでした。2人はすぐにこの状況を飲み込み、赤城さんと鈴谷さんの間に入ります。

「一体、どうしたのさ」

「何で、仲間同士で臙装を向け合っているのかしら」

そんな時雨さんと夕立さんの訴えに答える事のない、赤城さんと鈴谷さんも遂に口を開きました。

「いつも思っていたんですが、何故鈴谷さんは、情報をそこまで持っているんですか？」

「何でだと思おう？」

鈴谷さんは20.3cm連装砲を構え直します。

「……誰かから聞いたとか、噂を集めた。とかですか？」

「誰かから聞いた？ 違うね。……鈴谷はずつと後をつけていたんだよ。だから知ってた」

鈴谷さんはニヤリと笑います。それと同時に、私は背中がゾクゾクとしました。

鈴谷さんの言い方だと、私はずつとつけられていたということになります。

今考えると、とても怖いです。幾ら鈴谷さんとはいえ、誰かに後をつけられるなんて考えただけでも怖いです。

「今回は”ましろさん”をつけて情報収集してたからね」

鈴谷さんがそれを言った途端、赤城さんの表情が一変しました。とんでもなく怒っているように見えます。むしろ、殺気まで出ているん

じゃないでしょうか。

それとは別で、赤城さんはきつとある事を考えているでしょう。時雨さんと夕立さんが、私の本名を知らない事です。赤城さんには、武下さんと『柴壁』にしか知られてないと言ってますから当然でしょうね。

ですが、時雨さんと夕立さんには見抜かれてしまったんです。

鎌掛けだったのかもしれませんが。ですけど、私が言ってしまったのには変わりありませんからね。

「鈴谷が知らないと思ってた？ 違うね。鈴谷が今、何をしたいか、何をしなければならぬか。鈴谷自身、自覚して行動してるだけだよ」
一応、鈴谷さんの視界に入っている私の方を、鈴谷さんは横目で見ました。

「今回はしなければならぬ方だったの。そもそも、赤城さんが何の疑いもなく、”ましろさん”を鎮守府に入れたからだよ。だから、鈴谷は疑ってかかった。何者なのか、何の目的があつてここに来たのか、軍人か文民か……」

表情は変わり、真面目な目で赤城さんの目を見て、鈴谷さんは言いました。

「天色 紅提督の姉で、紅提督を探しに来て、看護師だったって事くらいしか分からなかったけどね」

赤城は凄い形相で時雨さんと夕立さんを見ます。

見られた時雨さんたちは驚きはしますが、そこまで怯えることはありません。

きつと、赤城さんが2人を見たのには理由があります。多分、2人がこの話を聞いて、気が動転してないかを確認したんでしょう。

「赤城さんは知らないかもしれないけどさ……」

少しの沈黙の後、鈴谷さんはそう切り出します。

「奪還作戦立案は鈴谷だよ。鈴谷が言わなくても、そのうち誰かがい出したかもしれないけどね」

赤城さんは目を見開きました。この事実に関しては、赤城さんも初耳です。私も言ってますからね。

「多分、”ましろさん”が赤城さんに相談しているということ、艦隊を、艦娘を動かす必要があるからだよね。違う？ ”ましろさん？”」
「……必要ですよ」

地道な情報収集をする力があるのと同時に、洞察力もある鈴谷さんに私は驚きを隠せません。この異常なまでの鈴谷さんの情報戦能力はどこから来てるんでしょうか。

一方で赤城さんは、鈴谷さんの発言に納得し、鈴谷さんの本質を理解したんでしょうね。

もともと、艦娘同士で同じ鎮守府の仲間だったら知っていると思っただんですけど、違うみたいですね。

そんな中、赤城さんの様子が変です。ずっと時雨さんと夕立さんの方を見ているんです。そこまで気がかりなんでしょうか。

それもそのはず。2人はあまりに無反応過ぎますからね。

その時、時雨さんが口を開きました。

「赤城。僕らが驚かない事に疑問を持っているでしょ？」

赤城さんは少しですが、驚いた表情をしています。多分、必死に隠しているんでしょうね。私もですけど、赤城さんの考えている事を見抜くとは、時雨さんも鈴谷さん同様に、何か変なところがあるみたいですね。

「はい」

赤城さんは時雨さんの間に、素直に答えました。

その答えを聞くと、今度は夕立さんが話し始めます。

「私たちは”ましろさん”が変な事は気付いていたわ。この前、それを問い詰めたら教えてくれたの」

言い方は少し乱暴だが、その通りです。会うなり、訊いてきましたからね。『何か隠してるよね？』と、訊かれましたからね。

「あまりにいきなりでしたし、2人の洞察力が凄くて……」

私は赤城さんにそう言います。

そして、少し沈黙を挟んだ後、赤城さんは言いました。

「時雨さんと夕立さんは、”ましろさん”がやろうとしている事を知っていますか？」

「知らないけど、ここに入ってきた時から会話の思い返せば分かるわ。『紅提督奪還作戦』でしょ？」

そう夕立さんが言うと、赤城さんは引いていた弓を下げました。「その通りです」

引いていた弓を下ろしたのを見ていた鈴谷さんも、20・3cm連装砲を下に向けました。

下に向けはしましたが、艀装を消すことはありません。まだお互いに警戒しているんでしょう。

「だろうなと思つたよ。この前ここに来た時に、”ましろさん”が何かを一生懸命考えてるのを見たからね」

時雨さんはそんな事をいいますが、私は少し寒気がしました。

あの時、2人が入ってきた時には私は散らかしていたレポート用紙は隠したはずなんです。

状況から考えて、何かを書いているには変わりないですが、それが作戦の事だなんて何故、知っていたんでしょう。

「僕を欺くのは無理だよ」

そう、時雨さんは私の方を向いています。

思考も読まれているのかもしれない。

この状況は結構長い間続きました。

約20分間の沈黙の後、赤城さんが口を開きます。

「皆さん……。揉めるのは後にしましょう。それよりも聞いて下さい」

赤城さんはそう言って、艀装を消しました。それに続いて鈴谷さんも艀装を消します。

私は黙ってそれを見守っています。

『紅提督奪還作戦』には陽動が必要です。出て下さいますか？」

「陽動ね……。鈴谷はいいよ。そのつもりだったし。誰も言わないのなら、鈴谷が立候補するつもりだったし」

「僕も構わない」

「私も」

「そうですか……。私は立ち位置的には出れません。ですので鈴谷さ

ん、頼めますか？」

そう赤城さんが言うのと、鈴谷さんは艦娘の名前を挙げていきます。それには規則性がありません。そのメンバーに深い意味があるんでしょうが、何かは私には分かりません。

「長門さん、霧島さん、加賀さん、熊野、吹雪、叢雲、イムヤ……金剛さんが居る。深く話さなくても、『最初に』 気付いた” 艦娘』の皆は絶対やってくれるよ」

鈴谷さんの言った、『最初に』 気付いた” 艦娘』とは何なんですか。

私にはさっぱり意味が分かりません。きっと、艦娘の間での特別な用語なんでしょう。『気付いた』という単語が強調されていました、それにかんがりの意味合いを持っている事は分かりますが、何に『気付いた』と言うのでしょうか。

「そうですね……。金剛さんとか、『分かりマシター！ 丁度腕が訛っていたところデース！』とか言って元気よく行きそうですね」
赤城さんはそんな事を言いながら笑います。

鈴谷さんや時雨さん、夕立さんも笑いますが、私は笑えません。意味が分からないからです。『気付いた』から金剛さんが笑う事に、何が関係あるんでしょう。

「流石に半年もサボってたからさ、安全策の編成を選ぶけどいい？」
「構いませんよ」

「じゃあ残りの3枠に金剛さん、加賀さん、叢雲を呼んでおくよ。この3人なら、何も言わずに来るだろうからね。それじゃあ、今から行ってくるね」

そう言った鈴谷さんは、執務室から出て行ってしまいました。それに続くかの様に、時雨さんと夕立さんも出ていきます。

「そうと決まれば、艦装の点検をしなくちゃだね」
「久々の出撃で腕が鳴るわね！」

そう言って走り出て行く姿は、少女そのものでした。ですが、話している内容は少女が話さないような事です。

執務室に残された私と赤城さんは、ソファーに座り直します。

「さて、陽動の件は問題無しになりました。そちらで『柴壁』を動かせるかによつて、この作戦が実行されるか否かが決まります。よろしく願ひしますね」

赤城さんはそう言つて頭を深々と下げます。

相当、奪還作戦に期待しているんでしようね。紅くんが帰つてくるのならと、意気込んでいるんでしよう。

そんな赤城さんに、私も頭を下げます。

「いえいえ。ですが、『柴壁』が動かない可能性が……」

と言いかけた刹那、赤城さんに止められました。

「それはいいですね。彼らなら必ず動きますよ」

その言葉を言った赤城さんの目は、とてもまっすぐとじていました。

とてつもなく信頼しているんでしようね。

第23話

紅と艦娘と日本皇国

私は赤城さんと別れた後、そのまま警備棟に来ました。

一応、赤城さんの手配によって、無期限有給が既に取れています。なんというか、本当に『柴壁』と艦娘の関係が凄いです。

多分、詳しい内容は知らせていないんでしょうけど、一応、組織で会社である『柴壁』に、クライアントが平1名に無期限有給を取らせろと命令して、『はい分かりました』って、簡単に取らせるんですからね。というか、無期限有給ってなんですか。

そこからして色々おかしいですよね。

私としても、働かないで給料を貰うのも忍びないものですから、早めに復帰しようと思っっています。

それはさておき、私は警備棟に入り、その足で『柴壁』の隊長室に向かいます。そこには武下さんがいますからね。

「失礼します」

「どうぞ」

隊長室の扉をノックして、扉を開きます。

中では、何かの書類を読んでいた武下さんが此方を向いています。

「ましろさんですか。どういったご用件ですか？」

「少し、お話があります。お時間をいただけないでしょうか」

「給料の値上げでしょうか？ まあいいでしょう、会議室にでも」

「軽口を言いますが、きつと分かっているんです。『会議室』なんて、本当に給料の値上げ交渉ならその場でしますからね。

「分かりました」

私はそれをツツコまずに、立って歩き出した武下さんの後を追います。

—————

—————

—————

会議室に着くと中から鍵を閉めて、椅子に座ります。

そして、武下さんが何の用かと、私に訊いてきました。

そんな武下さんに、私はあることを開口一番に言います。

「奪還作戦をしませんか？」

「奪還作戦ですか？」

助詞のない言葉に、武下さんは一瞬固まりますが、すぐに何の奪還作戦かを理解したみたいです。

「成る程……。いや、こちらでもご勝手ながら奪還作戦立案は行っています。いかがいたしますか？」

「……初耳ですね」

「そりやそうですよ。私が1人で考えているものですからね」

そう、武下さんは話します。

どうやら、私が鈴谷さんに言われて始めなくても、勝手に始まっていたみたいです。それに関しては、鈴谷さんが私に頼んだ時に予想していました。

「その反応を見る限りだと、想像通りということですか？」

「はい。鈴谷さんが想像していましたよ」

「鈴谷さんですか……状況を考えると、私に話が回ってきたのは最後みたいです」

「その通りです」

武下さんも、他の艦娘と負けず劣らず、察しのいい人です。

言葉足らずでも、意味が的確に伝わるのは少しありがたいです。

『柴壁』を動かしたいと、そういうことですよ？」

「はい」

何も言わずとも、かなり伝わっているみたいです。

「いいでしょう。全面的に協力しますよ」

「ありがとうございます！」

「して、作戦の方は？」

当然の様に、武下さんは訊いてきますが、あいにく手元に作戦草案がない状態です。私が覚えている範囲で、話せばいいでしょう。

「水面下で準備を行い、殺傷を禁止したものです」

「ほお」

それは想定外だったんでしょうか、少し意外だと言わんばかりの表

情をしています。

「そのためには、最初にどれだけの情報を持てるかがキーとなりますね」

「そうでしょうね。……ということは何？」

「はい。『血猟犬』を動かしたいんです」

そう私が言うと、武下さんは眉をしかめました。

この反応には私も想定外です。『柴壁』は紅くんが絡むと、従順になるという事を私の遠い記憶にあるんですが、違うみたいですね。

「現在『血猟犬』の担っている任務の重要性は、貴女も理解していますよね？」

「はい。体外的な活動で、閉鎖的な鎮守府に於いては無くしてはならないものですね」

「分かっているのならしいですが、それを無くすということはどういう事になるか分かっていますか？」

「いえ……」

『血猟犬』が今の任務を放棄したらどうなるかなんて、私は考えたこともありませんでした。

ただ、そういう任務が重要で、選りすぐりの人間が外に出ているのだとばかり思っていたからです。

「彼らからの体外的な情報が寸断されてしまうと、横須賀鎮守府艦隊司令部は、喉仏を的に晒したのと同等になるんですよ」

「はい？」

武下さんの言った事が、私には理解できませんでした。

喉仏を晒すということはつまり、弱点を晒すという事ですね。つまり、『血猟犬』の任務自体に何か他の意味があるということでしょう。

『血猟犬』の任務は情報収集です。それは分かっていますよね？」

「勿論です」

「その情報収集に、鎮守府を良しと思っていない組織のメンバーリスト作成と監視があるんですよ」

これに関しては初耳でした。しかも、この鎮守府を良しと思ってない組織なんてあるんでしょうか。

「良しと思つてない組織ですか？」

「はい。一番私たちが恐れているのは『旧海軍本部』、『海軍部情報課』。他には海軍の『諜報機関』、『皇国公共安全保障局』。それらの横須賀鎮守府に対する偵察行動をしているメンバーの監視、リスト作成。芋づる式に、メンバーの顔が割れていつてはいますが、組織が何分多い為、時間がかかっています」

『旧海軍本部』と『海軍部情報課』に関しては、『柴壁』に入った時の座学で聴きましたが、その他は聴いたことがありませんね。

『諜報機関』？ 『皇国公共安全保障局』？ が分からないのですが……」

「知らないのも無理ないですよ。存在自体が隠されていますからね。海軍の『諜報機関』はそのままで。軍の情報部隊のことですよ。『皇国公共安全保障局』というのは、アレです。ええと……そう！ アメリカにありますよね？ 中央情報局とかいうヤツ、その日本版ですよ」

『諜報機関』は分かりましたが、CIAですか？」

「それです。そのようなものだと、思っていて下さい。その組織から目を付けられているんですよ、横須賀鎮守府は」

武下さんはそう話しますが、こんな話をしているのに、そこまで隠している雰囲気はありません。どうしてでしょうか。

そんな事は置いておいて、話を訊きます。

「話を聞く限りだと、『皇国公共安全保障局』が一番危険だと思つたんですが、何故優先順位が低いんですか？」

多分、これを訊くのはタブーだったのかもしれない。

そう、直感的に感じました。

「普通はそう考えますよね。ですけど、この順位は危険度から付けています。高ければ高い程、暴力的で行動的。低い程、穏便で鈍重な動きなんです。だから、最も上にある『旧海軍本部』が、艦娘のヘイトを集めているんです。何故なら、紅提督の着任から殆どの事件は『旧海軍本部』絡みでしたからね」

そう言い切った武下さんは、少し呼吸を整えてから続けます。

「話が脱線してしまいましたね。『血狛犬』を動かすのなら、それ相応のリスクがあるということですよ。『柴壁』の隊員と酒保の従業員、総勢1200名の命、〃 思い〃 と引き換えです」

「命、〃 思い〃 ……ですか」

「はい」

武下さんはそう言って黙りました。

表情からは読み取れませんが、決めかねているんでしょう。

「少し、昔話をしましょうか。とは言っても、ましろさんがいらっしやる前のことなんですけどね」

武下さんは急に、そんな事を言い出します。

「横須賀鎮守府が、昔からデモの対象になっていた事は座学で聞きましたよね？」

「はい」

多分、確認を取ったんでしょう。

「対外的活動の対応は当初『門兵』と呼ばれていた私含め、20人弱だけで行っていたんですよ。巡田さんの紅提督暗殺未遂からはメディアの取材やデモによって、誹謗中傷や罵倒を受ける日々が長かったですよ。それに私たちは、上司部下関係なく、ライオットシールドで行く手を防いで、攻撃を受けていたんです」

そう言つて武下さんは、上着を脱いでノースリーブになると、肩を指さしました。そこはざっくり切られたような切り傷が生々しく残っています。

「この傷は、あるデモ団体にやられました。そんな私たちに紅提督はいつも差し入れを持って来ては、『ありがとうございます』つて言うんです。紅提督の方が書面上階級は上ですが、歳は私たちよりも下です。ですけど、彼は私たちに敬語を使うんです」

上着を着直して『お見苦しいものを、すみません』と私に言いました。

「座学で習ったとは思いますが、門兵が120人になっても変わりませんでした。艦娘の運動会に誘っていただけで、ご飯まで用意してもらったこともありました。鎮守府文化祭(仮)にも、参加させていた

できました。一緒に門の警備をしたこともありましたね」

武下さんはニコニコと笑います。相当楽しかったんでしょうね。

「それからは色々な事があり、陸軍第三方面軍第一連隊の一部が門兵に加わったんです。それからは門兵が今の人数になりました。それでも提督のねぎらいはありましたよ。とはいっても、その時期には色々な事があって一回あっただけですけどね」

陸軍第三方面軍第一連隊と言われても、何処の何の部隊かは私には分かりません。

武下さんも説明は端折りましたからね。

「その1回というのは、アメリカとの合同作戦で出撃した艦隊に、紅提督が付いて行った時のことです。紅提督が帰還された後に、あれやこれやと引つ張りだして500人くらいでバーベキューパーティーしましたね」

武下さんは満足そうな顔を見ると、話を再開します。

「こんな軍事施設、世界中回ってもありません。確かに大変な思いもしましたが、全て紅提督の裁量で片付けてきたんです。本来ならば、私たちのような”元”から居た人間がしなければならぬ事を、半ば強制的に連れてこられた異世界の学生が運営していたんです。そんな彼に年上でありながらも尊敬し、それと同時に、私たちは彼にある思いを抱いたんですよ」

武下さんは凄みます。それに私はかなり怯みましたが、私に対してのものではないです。

武下さんの、『柴壁』やここに残ると決めた人たちの”思い”なんでしょう。

「彼を絶対に殺させてはならない。この身を引き換えにしても」

そう言った武下さんの目は、とてつもなく力が入っていました。

「命を狙われ、迫害され、独りになり、継る者も居ない状況下で、彼は

戦い抜いたんです」

途中から私の聴いたことのない単語が出てきました。命を狙われたのは知っています。迫害されていたのもです。ですが、独りであった事と継る者が居ないってどんな状況だったんでしょうか。

「ましろさんは知っているとは思いますが、撃たれる前の紅提督の状況はとも18とは思えませんでしたよ」

私は紅くんが撃たれた事は知っていますが、その前の詳しい状況はよく知らないですよね。

「侵入者に見つかり、連れて行かれ、撃たれたのにも関わらず、侵入者の懐柔をしていたそうです」

「っ?!」

痛くて泣き叫んでいたとばかり思っていました。全然違いました。

泣き叫ぶどころか、懐柔をしていたなんて思いもしません。

「巡田の報告書に、そう書かれていたんです。あ、あと……」

武下さんは続けました。

「家族や友人、親戚と引き剥がされ、知らない土地で重い責任を押し付けられ、夢を捨てた……。そう赤城さんは紅提督の事を話していました」

私の思考が止まった瞬間です。

赤城さんが言っていたという言葉、多分私も聞いたことがあります。

口では何も言いませんが、記憶を必死に掘り起こしましたが、私の思い違いでした。赤城さんは何一つとして、そんな事を言っていないかったです。

徐々に怒りが込み上げてきます。勝手に呼び出して、指揮をやらせ、拳を負傷して運び出されて、今度は何かに利用されているのかもしれないんです。そう考えただけで、私の頭から正常な考えはどんどん消え失せていきました。

「……私、そんなこと聴いてません」

「なんですって?!」

「呼び出されて指揮をしていたのは聴きました。ですが、状況を想像すれば簡単ですよ。家族や友人から引き離されてしまうのも、指揮官が重い責任を背負うことも、独りになってしまっていることも……夢までっ」

机の下でミチミチと音を立てます。ドクドクと手の平が痛みだします。

そんな私に、武下さんは追い打ちをかけました。当然でしょうね。武下さんからは、机の下の状況なんて見えてないでしょうし、私の表情も見えない筈です。俯いていますからね。

「大井さんとは話しましたか？ その大井さんが私のところに来て言っただんです。『どうして誰でも提督の事を“ヒト”として見ないのか？』って言っていたんです」

怒りは今の言葉で頂点に達しました。

身勝手に呼び出しておいて、今度は“モノ”扱いだっただんでしょう。そんな中、“独り”戦ってきたということですよ。

私が口を開く前に、武下さんはある事を言いました。

「紅提督は誰にも弱音を吐かなかったそうですよ」

もう私の怒りは限界を超えました。

溢れんばかりの怒りを押しこらえ、立ち上がります。椅子が音を立てると、武下さんは此方を見ました。

そして、みるみる顔色が青くなっていくんです。

第24話

艦娘にある共通意識と、ましろの怒り

怒りが頂点に達した私は、武下さんにある事を訊きました。

「それには武下さんも”気付いていた”んですか？」

訊くまでもありません。武下さんも”モノ”としていた人の1人なんですよ。

「いいえ。大井さんに気付かされました。ですが……」

そう言いかけた武下さんの言葉を遮ります。

武下さんは口をつぐみ、私の方を見ました。

「武下さんの言い方ですと、鎮守府の全員が”気づいてなかった”みたいです。 ”モノ”として見ていて、紅くんがどんな扱いだったんですか？」

私は凄んで言います。

私の立場というのは、複雑です。異世界から来た来訪者であるのが前提条件です。ですが、”救国の英雄”である紅くんの実の姉であるというのが、この世界に於いて大きなアドバンテージではありますね。この世界の実情を殆ど知りませんが、現状から見ると、私という存在がかなり大きい事は確かです。

英雄の姉というのは英雄の最も近い他人ではありますが、英雄を傍で見守ってきた人でもあります。言うなれば王様の血族です。それだけのネームバリエーションがありますからね。

こんな事を考えだしたのには、ある理由があります。明らかに私が年下で、上下関係的にも下であるにも関わらず、私に対して敬語を使っている事です。『柴壁』の人間は全員がそうでした。

そう考えると、私が比喻した”王様の血族”というのに、誰しもが合点しますよね。

「名前を誰からも呼ばれていませんでした。皆さん、『提督』『司令官』『司令』と呼んでいましたし、大本営の人間も『提督』と呼んでいました」

簡潔に言ったんでしょうけど、少し考えなければ意味が分かりませ

んでした。

つまり、紅くんは一度も名前で呼ばれていなかったということですね。

ですがそれは想定範囲内でした。この世界に来た時、金剛さんに訊かれた事があつたんです。

『そ、そうなんデスカー。ということは、葵は提督なんデスカ？』

この言葉の意味。前後の話の内容を照らし合わせると、この世界に於いての提督という存在は、紅くんの様に“呼びだされた”存在でなければならぬということですよ。

そして、同じように前後の会話内容を考えると、横須賀鎮守府艦隊司令部以外では紅くんと同様の手で提督になつている鎮守府はないということですよ。

ということは、『提督』と呼ばれるのは紅くんのみ。一般名詞だつた『提督』という単語は、紅くんを現す『固有名詞』になつてしまつていたんです。

つまり、『提督』＝『紅くん』という事です。

そして、誰からも『提督』と呼ばれていた紅くんは、一ヒトとして見られていたわけではなく、『提督』として見られていたんです。個人を否定し、役職で呼んでいたということですね。

「……そうですか」

そう私が言うと、武下さんは更に説明をします。

今度は、“モノ”の意味ですね。

『旧海軍本部』の意向で、艦娘の指揮をしているのは、紅提督やましろさんがいらつしやつた世界の人間。それも、ゲームプレイヤーでした。プレイヤーからの指示はそちらではリアルタイムで出ていたようです。此方は違います。印刷機から排出される指令書を元に、艦娘が作戦行動をするんですよ。ということは、艦娘の皆さんが呼ぶ『提督』という存在は、いかなればただの司令塔であり、上位階層。酷い言い方ですと、『紙』ということらしいです」

私はそれを聴いて、感情が抑えられなくなりました。

握り拳を机におもいつきり叩きつけて言います。

「本当に”モノ”扱いだったんですか?!

「はい……ですが、このことに気付いたのは大井さんです。気付くのにかなり時間を要しましたが、今では艦娘の皆さんは”気付いて”います」

武下さんはおずおずと答えます。

きつと、さつき机を叩いたからでしょうね。

武下さんにとって、私という存在がどうなっているのか分かりませんが、部下という以前に別の見方をしているように思えてならないです。

畏怖しているとは思えません。ですけど似た感情を抱いていることは確かです。

「紅くんがこの世界で提督をやっていたのは約7ヶ月。その間はずっと、艦娘に”モノ”として見られていたんですか?」

「……多分」

歯切れの悪い回答に少し苛立ちますが、きつとかくにんが 取れていないんでしょうね。

「この世界に来てよく分かりましたよ」

吐き捨てるかのように私は言います。もうやけくそというか、自暴自棄というか、この世界に来てからというもの、紅くんに関する事は大体がマイナスの話が主体でしたからね。

「日本皇国も艦娘も身勝手です。艦娘に戦争は押し付けるし、その艦娘の指揮は異世界の学生に押し付ける。何考えているんですか?」

武下さんに言ってもしょうがない事を、私は吐き出します。

「そればかりか人として、個人として認めずに、独りだと分かっているのに何もせず、夢も見れないなんて……」

私は頭を掻き篦りました。一体どうなっているんでしょうか、この世界は。

紅くんにとっては、この世界はとてつもなく最悪な世界だったのかもしれません。何もかも自分のことさえも認めてもらえず、さらには迫害された上に命を狙われる。

「私たちは最善を尽くしていました。艦娘の方も、”気付いてから”

はかなり気をかけていたみたいですし……」

そういう武下さんの発言を、私は遮ります。

「そんなこと関係ありません。紅くんが何を考えて、どんな事に目を向けていたか。深海棲艦の殲滅？ ふざけているんですか？ 口には出さずとも、絶対考えていた筈です。自分の置かれている状況や、周り、自分に降りかかる理不尽に嘆いていたんじゃないんですか？」

そう言うと、武下さんは黙ってしまいました。

言い返すのを止めたんでしょう。

「まだ何か私に教えていないこととかはありませんか？」

私は訊きます。

「ありますよ……」

それに武下さんは答えました。そうすると、武下さんは話し始めました。

「ここには提督非公認の艦娘振り分け指標みたいなものがあつたんです。艦娘たちは一方を『近衛艦隊』、他を『親衛艦隊』と呼んでいました。『近衛艦隊』は艦娘の中でも少数派で、提督を含めて恐れていたとか、警戒していたんです」

私の知らない言葉が出てきます。それも当然でしょうね。私の知らないことを話している訳ですから。

『近衛艦隊』と『親衛艦隊』の違いは、『提督への執着』の強弱にありました」

また私の知らない単語が出てきます。ですが、『提督への執着』というのが、その単語の意味通りなら、わざわざ訊かなくても分かりますよね。

『近衛艦隊』は強く、『親衛艦隊』は弱かつたんです。ですが、その認識は違いました。『親衛艦隊』も勿論ですが、『近衛艦隊』は異常に、紅提督に振りかかる危険察知が早かつたんです。そして、紅提督の危険と訊くと、途端に豹変して、それまでの性格がウソのようになります。一方で『親衛艦隊』は、察知はしますが、断然『近衛艦隊』の方が早いですよね」

私は黙って訊きます。

「この『近衛艦隊』『親衛艦隊』が鎮守府内で飛び交っていた当時は、双方の違いがどれだけの察知速度か、破壊衝動を理性的に抑えられるかという言わば、差別化するための言葉があったんです」

「ですけど違いました。本当は紅提督を“ヒト”として見ているか、“モノ”として見ているかという違いだったんです。ですから座学でも聴いたでしょうけども、鎮守府で起きた前半の事件の殆どは悪化する前に『近衛艦隊』によつて未然に阻止されていたんです。提督を“ヒト”と判断して、感情を汲み取り、最善策を見つける。少数派であつた『近衛艦隊』がやってきたことだったんです」

そろそろ色々な言葉がゲシュタルト崩壊を始めていますが、なんとかまだ聴いていられそうです。

「ですが当時は私含め、鎮守府に籍を置く人間や艦娘は『近衛艦隊』を差別していたんです。暴力的で直情的と。暴力的だったのは、ただどうやって解決すればいいか分からなかったから、とされていますが、本当にそうだったかは分かっていません」

未確認情報も入り混じっているんですね。

この鎮守府では様々な事が起きていたことは座学で知っていましたが、正直ここまでとは思ってませんでした。

「一時は疑心暗鬼になっていた鎮守府内で、内偵がうろつき、隣人がどちらかで双方に情報を流していたりと、第二次世界大戦下のナチ政権に蹂躪されていたドイツのようになっていました」

想像するのも嫌になるほどのものだった事は伝わります。ですけど、そこまで酷い状態だったのにどうして、纏まっていられるんでしょうか。

当然、紅くんの存在でしょうけど。

「今では『近衛艦隊』『親衛艦隊』なんて単語は死語になりましたが、私ましろさんがこの世界に来てしまったことによつて、それが再発するのではないかと考えています」

「えっ？」

「紅提督が生きている、取り戻そうとましろさんから話を聴いた私た

ちと、紅提督が死んでしまったと思ひ込み、感情を押さえつけた結果、表情を失い、傷口に塩を塗られまいと動く艦娘たち」

「それは本当ですか？」

「憶測に過ぎません。ですが、十分にあり得ることですよ？」

武下さんはそう言い切ります。

話を聴いている限りだと、可能性は五分五分です。

少し考え事をする私をみて、武下さんは少し息を吐きました。ため息に近いものです。きつと、気を抜いたんでしょう。私が出していた怒りが、収まったように見えただけでしょうね。ですけど、それはないです。現在進行形で、正常な判断はできるものの、かなり頭に血が登っているのが自分でも分かりますからね。

「それでも、紅くんを個人として見ていなかったんですよ？ 話を戻しますが、どうなんですか？」

顔は見ません。驚いているのは自明ですからね。

その証拠に、武下さんはすぐには答えません。口ごもっているのが分かります。

「……た、確かに、提督と呼んでいましたし、大本営でも提督の事は提督と呼ばれてましたし、どこに出るにしても提督でした……」

「紅くんにはちゃんと天色 紅っていう名前があるんですよ？ それを提督提督って、役職名じゃないですか。違いますか？」

「……いいえ」

「それで、なんでしたっけ？ 独りでいることや、夢を奪ったでしたか？」

「は、はい」

屈強な身体を持った武下さんが、みるみる小さくなっていきます。

「確かにいきなりでしたし、行き先は異世界ですから、家族も友達も一気に失いますよね。それで艦娘からは“モノ”扱いで、あなたたち人間は代名詞呼び？ そりゃ当然、独りででしょうね。それに夢を奪った？ それはこの世界に呼び出す力とやらを使った責任でしょう?!」

「ごもつともです……ですが」

「言い訳ですか？」

武下さんが遮りましたので、私は聴くことにします。余計な事は言わないと思いますからね。

そしたら、武下さんの口からとんでもない言葉が出てきました。

「確かに呼び出す力の運用に関する決め事をしたのは私たち、人間です。ですが、力の行使は全て艦娘が行ったものです。責任転換みたいで申し訳ないですが、真実ですので……」

本当に申し訳なさそうに言う武下さんを尻目に、私は会議室の扉に手をかけていました。

その私を武下さんは止めます。

力では勝てる訳ありませんからね。

「待って下さい！ 貴女がその事実を彼女たちに突きつけたら、それこそ崩壊します！ ましろさんの真実を知っている艦娘がいると思います、彼女たちがましろさんの事を知ってとったであろう行動を思い出して下さいッ！ 彼女たちは確実に死にますよっ！」

抵抗虚しく、振りほどけなかった武下さんから、その言葉が聞こえました。

それを聞き、私は抵抗を止めます。

記憶にあるんですよ。鈴谷さんが単艦出撃するという趣旨の命令書と解体申請書を持っていたことや、時雨さんと夕立さんが目の前で解体申請書を書いていたこと。横須賀鎮守府艦隊司令部の艦娘をまとめているであろう赤城さんが、自分の立場も顧みずに土下座をして、額から血を流していたことも。

「罪に苛まれて、逃れようと……ですか？」

私は振り返って、武下さんに訊きます。

その回答が武下さんから返ってくる事はありませんでした。

第25話

警報

武下さんとの話は終わり、会議室を出ました。

私は今、本部棟の中を歩いています。執務室に用事がありますからね。

警備棟から執務室へは、歩いて10分程掛かります。とは言っても、普通に歩いたらの事ですが、私は歩くのがそこまで早くありませんので、15分くらい着くまでにかかってしまいます。

執務室まで行く道のり、本部棟の中で数名艦娘とすれ違いました。そんな艦娘に私は、敵意を出してしまっていたかもしれない。あんな話をした後です。当然かもしれないませんが、何も知らない艦娘からしてみれば、とんだ迷惑な話ですよ。

そんなすれ違った艦娘の中には、私からにじみ出る違和感に気付いていたかもしれない艦娘もいます。足を止めて、私の方を観察していましたからね。

その艦娘とは、叢雲さんです。

鈴谷さんと赤城さんとで話していた時に出てきた艦娘ですね。何でも、初期から紅くんの事を「気付いていた」艦娘の1人だとか。

ですが、立ち位置がよく分からない艦娘であったことには変わりないらしいです。詳しい話は知りませんが、赤城さんたち艦娘や紅くんからも監視されていたことだけは知っています。何かやらかした訳でもないらしいですが、詳しいことは聞けませんでした。

そんな考え事をしてしていると、執務室に着きました。扉に手をかけて開くと、中には誰も居ません。当然でしょうね。普段からここには艦娘は来ないと聞きましたから。

私がここに来たのには訳があります。

悪いことではありませんが、この部屋で一際大きな机の中を見るためです。あくまで私の予測ですが、大きな机は紅くんが使っていたのではないかって考えています。

ここは執務室ですし、紅くんの仕事部屋でもあった訳ですからね。

部屋の主、はたまたま、横須賀鎮守府の主がこじんまりとした小さな机を使うとは思えません。

とは言っても、紅くんが好き好んで使っていたとは言いがたいですけどね。

引き出しを見てみても特に何かある訳でもありません。提出する必要のない書類や、ボールペンの換え、使っていないノート、国語辞典、モバイルバッテリー、イヤホン……そんな物が入っていました。そんな中、机の一番下の引き出しを開けてみると、そこにはこれまでに見なかつた物が入っていました。

使われているノートです。題名は無し。

私は興味に惹かれて、手に取って中を見てみました。

中には私の記憶には程遠い、高校で習うような数式や英文がびっしりと並んでいます。よく見てみると、上の引き出しには付箋の貼られた参考書が出てきました。

私は一瞬にして、頭の中に考えを巡らせます。一体、紅くんが何をしていたのか。何の目的で、ここで勉強をしていたのか。

答えは簡単でした。紅くんが元の世界で失踪した時期を考えてみれば簡単です。大学入試が近づいていたからです。いつか帰れると考えてか、はたまたまこっちで大学に入学するつもりだったかは知りませんが、大学入試に向けた勉強をしていたことには間違いありません。

一番下の引き出しにびっしりと押し込まれているノートを見てくださいますが、どれもこれも白紙のページはありません。そして大学入試に必要であろう科目は、全部やってありました。ただし、政治経済はやってなかつたみたいですけどね。

それもそうでしょう。今いる世界の日本は、元居た日本とは全然違いますからね。政治体制だって変わっているでしょうし、経済体制もおのずと変わっている筈です。

この世界で政治経済を勉強する意味がありませんからね。ですけど、この世界で大学に入学する事を見据えていたのか、一応、政治経済の参考書は入っていました。付箋は全く貼ってありませんでした

けどね。

私は一通り見たノートと参考書を引き出しに仕舞い、その場に座り込みます。

ずつとかがんだままで見ていたので、腰が疲れたんですよ。

そしてその体勢のまま、ある事を考えます。

紅くんは執務と両立して勉強にも取り組んでいたんだと。

しかも、引き出しに入っていたノートは尋常じゃない量です。これを約半年で全部使うのは、相当勉強していたんでしょね。

それなのに、鎮守府で催し物を発案したり、実行したり、作戦を考えたりしていたんです。紅くんは自分を酷使しすぎなんですよ。

私は内心、そんな風に吐き捨てました。

――

――

――

執務室から出た私は、自室に戻っていました。

机には作戦草案を纏めた冊子が投げ出され、その横にレポート用紙とボールペンを出しています。今から私は、作戦実行に伴うリスクについて考える事にしたんです。

理由としては、武下さんの反応でした。私はリスク計算をしていなかったんです。

早速、レポート用紙にリスクをリストアップしていきます。

一番大きなものとしてはやはり、『血獵犬』の運用です。情報収集に長けた部隊を動かす事は、基本ですけどそれを行う為に他が疎かになつてしまうと、本陣ががら空きになつてしまうとの忠告を考慮したものです。

それを考えると、私たちが収集できる情報はもっぱら、インターネットや雑誌等で手に入れられる情報ばかり。奪還作戦に有用なのは、根本的に用途が違いますので、使えないと判断できます。ただし、軍病院内の地図を手に入れる事は簡単ですね。

そう考えると、地図だけで作戦を立てなければなりませんね。

そんな事を考えていると、あることを思いつきました。

紅くんが収容されていると思われる軍病院は、わざわざ『血獵犬』が探さなくても見つけることが出来ます。

軍上層部に掛け合えばいいんですよ。これは赤城さんに頼めば、聞き出すことも出来るでしょう。

私は次々と書いていきます。

その中には、『外部の人間に依頼する』『非殺傷兵器を使うのはいいが、あちらは殺しに来るだろう』『捕まった場合、どうなってしまうか』があります。

失敗した場合、実働部隊が捕縛された場合を考えると挙がったものです。

米特殊部隊を損害なしで全滅させたとかいう噂のある『柴壁』ではありますが、あくまで噂でしかありません。信用しない方向で考えるべきです。

作戦草案では『殺傷兵器を使用しない』とありますが、これは改正する必要があるかもしれません。

場合によっては、こちらが一方的に罫り殺しに遭う可能性だってありますからね。

(改善点が一杯ありますね……)

そんな事を内心呟きながら、私はレポート用紙に書き込んでいきます。

正直、パソコンのメモ帳か何かで打ち込みたいですが、プリンターが執務室と警備棟にしかないですので、事務作業という名目で警備棟に籠もるしかありません。

その上、警備棟で籠もるにしても、同じような事をしている『柴壁』の人間がいると考えると、この作業はひと目に触れずにしたいたいものですから、警備棟では出来ないんですよ。

今、手元にある作戦草案だって、警備棟にあるパソコンでレポート用紙に書き込んだ内容を清書しただけですからね。

打ち込むのを見ていた他の『柴壁』の人は、凄く驚いていましたが、そんな事を気にする暇もないほど、見せれるものではありませんでし

た。

結局、リストアップしたリスクの改善点は挙げていきましたが、採用されるかは分かりません。そこは追々、相談ということですね。色々な方面から出してもらおう戦力でありますから、そちらの相談する必要がありませんからね。

そんな事を考えていると、私の部屋を誰かがノックしました。

返事をしてレポート用紙を片付けて出てみると、そこには沖江さんがいました。

格好はいつものように、BDUを着ています。

「紅提督がいらっしやらなくなって初の、警戒態勢ですよ！ BDUに着替えてそれぞれの部隊で点呼です！ 走って!!」

私は沖江さんが言った状況を飲み込めないうまま、指示を聞いて外に走り出します。

部屋の電気を消して、部屋に唯一持ち込める殺傷武器であるナイフを腰にぶら下げます。

ちなみに、私はナイフ格闘術を習っていません。というか、近接戦闘の一切を習っていません。というか、私が受けた訓練自体が促成プログラムだったらしいです。

――

――

――

訳も分からずに沖江さんの後を走って付いて行った私は、走りながら沖江さんに状況を訊きます。

「何が起きたんですか?!」

「門兵からの連絡で、不審者が門を強行突破しようとしているらしいんです!! もし、強行突破しようものなら、私たちがに与えられている“逮捕権”を執行します!!」

「逮捕権ですか?!」

沖江さんは走りながら丁寧に答えてくれました。

「紅提督が権利開放して下さったんですよ。それ以来、私たちには逮捕権がある代わりに、攻撃する事が出来ないんです」

何だかよく分からない事を話していますが、気付けば集合場所に着き、それぞれ整列します。私は『血獵犬』の列に加わりませんが、『血獵犬』の点呼の人数が合いません。

どうやら夜に出ている巡田さんらの数人が戻ってきてないみたいですね。

「巡田らは計算に入れなくていい！ 現在、門兵が警戒態勢にある。我々は武装し、それぞれの門の増員として立て！」

武下さんが怒号で、指示を出していきます。

それを聞いた他の人らは走り出しますが、私は立ち往生します。オロオロしていると、武下さんが私に話しかけてきました。

「ましろさんは別行動です。警備棟に私と戻りますよ」

「え？」

私に有無も言わせない気なんでしょう。そのまま私は武下さんと共に、警備棟に向かいました。

—————

—————

—————

警備棟に着くと、そのまま私は武下さんの指示で地下の射撃場に行きます。

理由は聞かされませんが、『柴壁』の総意らしいです。よく分かりませんが、『柴壁』で使役している以上、こういった場合も出るものだと思うんですけど。

射撃場に入る前に武下さんから聞いた話によると、射撃場の上には番犬が数人居るらしいです。というか、警備棟などの施設の入り口と内部には番犬数人が立っている様ですね。もしも、侵入された時のことを想定しているんでしょう。

私も射撃場に入るなり、小銃を持たされてますからね。満タンに入られた弾倉を4つ、BDUのベルトに押し入れています。

もし撃つことになる、私が引き金を引けるのかと不安になります。急所を狙わなければいいんです。戦闘不能にさせるだけの腕はありませんが、ひるませたりする事は可能でしょう。それに、隠れて奇

襲することだつてできるんです。

そう思い、射撃場の階段から入る入り口の近くの物陰で座り込んで、息を潜めました。

第26話 外の敵、中の敵。そして、見えない敵。

入り口近くの物陰に姿を隠していますが、階段から音は全く聞こえてきません。

音が聞こえず、何処かから吹き込んでいるであろう風の音が、ひゅーひゅーとするだけです。

私がおここに隠れ始めてから既に1時間は経っています。そして、私は一体何が起きているのか分かりません。ですので、私は恐る恐る物陰から身を出して、階段を上がります。

音を立てずにゆっくりと上がり、ロビーを階段の影から覗きました。

ロビーの階段入り口には、私の見える範囲で『番犬』が2人立っています。多分、この見張りなのでしょうね。

私はそんな見張りを観察しながら、ある事を頭の中で考えていました。

私が現状をどこまで理解しているのか、ということです。

とりあえず分かっていることは少ないです。正門に不審者が現れたこと、門を突破しようしていること、有事のことを考えて『柴壁』が動いたこと。これだけしか分かりません。

第一、有事の際に『柴壁』が動くことで、何が変わるといいうんでしょうか。この世界に来て色々なことを聞きましたが、流石に鎮守府敷地内で発砲し、人を殺めてしまえばそれは殺人罪になってしまうのではないのでしょうか。

私はその場を動きます。ロビーで小銃を携えている『番犬』に声をかけました。

「どうも、お疲れ様です」

「あ、ましろさん。お疲れ様です。……って、どうして出てきたんですか？ 武下大尉に射撃場に居るように言われていたのでは？」

前々からそうですが、私以外の『柴壁』の人は皆、武下さんのことを『武下大尉』と呼んでいます。どうやら、軍籍の頃の癖が抜けないようですね。

「言われてはいますが、私は『血猟犬』ですよ？」

「そ、そうでしたね。……あの化物犬たちの。し、失礼しました！とんだご無礼をつ！」

「いいえ、とんでもない。確かに『血猟犬』は化物ですよ」

そんな風に話をしますが、どうやらロビーに居た『番犬』は全員で3人だったようで、私と話している『番犬』以外はちゃんと警戒をしている。

「それで少し頼みたいことがあるんですが、聞いて頂けますか？」

私はあることを頼みます。それは別に危険を犯すとかどうのつてことではありません。

ただ、あるものを持ってきてもらうだけです。

「はい。聞ける範囲で尽力いたします」

「ありがとうございます」

そう私はお礼を言って、頼みごとをしました。

『番犬』は紅くんはかなり従順な姿勢だと聞いていますが、紅くんの姉である私にもこのような姿勢になってしまうのは、何だか違うような気がします。

他にも要因があるような気がしてなりません、ここで言及したところで仕方ありません。

「はい。頼まれていたものです」

あるものを私に手渡してくれました。

あるものとは、短機関銃です。もっと分かりやすく言えば、サブマシンガンです。拳銃弾をマシンガンみたいに撃つ銃ですね。

訓練では鎮守府内で使われるであろう火器の使い方は一通り習ってはいますが、やはり私の身体には小銃が合いません。短機関銃が丁度良いんですよ。

短機関銃のついでに、満タンに入った弾倉を4つ受け取りました。1つは銃に装填し、残りは腰のベルトに噛ませます。

ここ以外に入れておけるところがありませんからね。

私が何故、短機関銃を要求したのかというと、小銃では取り回し辛い上に、いざ使おうとしてもただいたずらに発砲するだけに終わりそ

うだからです。

なら、身体に合っているものを使った方が、自分の身をより守れる
と思ったからです。

「ありがとうございます」

そう言つて、私は首に縮めていたフェイスマスクをずり上げて、顔
に覆わせます。本来ならば、顔全体を覆うものですが、私は髪が長い
のでそこまで覆うことだ出来ないんですよ。仕方のない処置です。

そのままヘルメットを深く被つて、外に繰り出しました。後ろから
は、ロビーから離れられない『番犬』の引き止める声がしますが、そ
れに訊く耳持たずに、近くのヤブに飛び込みます。

何があるか分かりませんし、こういった警戒時にはヤブに飛び込む
ことを教わっていますからね。

短機関銃を握り締めて、ヤブの中をゆつくりと進みます。ヤブです
ので、身体に当たる枝のせいで音は出てしましますが、盛大には出
てはいきませんので問題無いです。

そして、私はヤブの中を移動したり、ヤブからヤブへ移つたりを繰
り返して、正門にたどり着きました。

正門に近づくと連れて、外で起きている騒ぎが一体何だったのかと
いうことが明確になっていきます。

ヤブからそれを観察していると、曲がり角から武下さんが出てきま
した。

丁度良いです。私は安全装置をかけてあることを確認して、武下さ
んの背中に銃口を押し当てました。

「……」

刹那、無言が2人を包み、その瞬間、武下さんは私から短機関銃を
奪いました。残念ながら拳銃は持ってませんし、ナイフもとっさ
に抜けません。殺されるとは思ってませんが、抜くものだと
思っていたので少しショックです。

そんな私に、武下さんは短機関銃を返して口を開きました。

「ホールドアップした後は、すぐに拘束が無力化しないといけません
ね」

「あはは……」

武下さんは怒っている訳ではないようです。良かったです。

「それで、どうしてここに？ 警備棟の地下射撃場に居たのでは？」

「はい。あまりに長かったですので、状況確認で外に出てきただけです」

そう私が言うと、武下さんは何も言わずに歩き出しました。私はそれに付いていきます。顔からはフェイスマスクは取りませんし、ヘルメットもつけたままです。

このまま歩いていると、装備品があまり支給されていない兵士に士官といったところでしょうか。

正門から聞こえてきていた騒ぎが、近づくに連れて明瞭になっていきます。

そして、何が起きているのかを理解することになります。

「提督はどうしたー！」

「戦争はもうやめだー!!」

「いつまでも女子どもを戦争に利用するなー!! 犯罪者は陛下の下、裁きの鉄槌を受けるべきだー!!」

武下さんに言われる前に、何が起きているのかは分かりました。

デモです。しかも一番過激なものです。何度か『柴壁』の前身である、門兵と衝突していたはずで、色々あつて収まったと聞いていたんですが、それでも実際に目の前で起きています

デモではあることないこと叫んでいます。主語が無くても誰に言っているのか分かります。紅くんです。

そんな中、ある声も出てきました。

「軍を辞めて提督に付いた犬共っ!! のたれ死にあがれっ!! ご主人様は今頃天国だ!!」

「提督にすぐしつぽを振るビッチ共め!! その銃は俺たちに向けるものではないぞ!!」

直感で、今度は誰のことを指しているのか分かりました。

『柴壁』のことです。

「エリートが提督に付きあがつて!! エリートから犬っころの雌犬に

成り下がっていいあがったな！ 税金泥棒っ!!」

あることないことか分からないが、とんでもないことを言います。確かに見方によれば、『柴壁』がそう見えても仕方ないのかもしれない。ですけど、それをこんな風に侮辱して、デモ隊は何を考えているんでしょうか。

ですが、そんな状況で武下さんたちは黙って立っています。

「すぐに警察機動隊と憲兵が来ますから。我慢していて下さいね」

そう、一言だけ言ってまた黙ってしまいました。

どうしてここまで言われても、揺れないのか不思議で堪りません。ですが、思い返せば当然なのかもしれないです。これまで、鎮守府はデモ隊に何度も活動をされてきました。その時も、『柴壁』の隊員が出てきて壁を作り、侵入を防いでいたんです。暴言、誹謗中傷を浴びせられながら。

――

――

――

結局、デモ隊は警察機動隊と衝突。憲兵によって鎮圧されました。

その後、警戒体勢を解いた警備棟の会議室で、武下さんにあることを聴きました。

日本皇国の体制と、過去にあったまだ話をしていないことです。

確認ですが、日本皇国は天皇制を復活させ、自衛隊を軍に格上げした独立国家です。天皇制を再開したとはいえ、国会は健在しています。ですが、国会は天皇にとつての情報収集機関及び国民からの要望の窓口でしかありません。それでも、今生天皇はこの機能を最大限に利用して国を国民の意思を反映させながら運営しているそうです。

過去にあったことといっても、度々起きていたデモ隊との衝突に關してだけでした。

それもやはり似たような内容です。

これを私に話した武下さんが伝えたかったことは、デモ隊との衝突の一番大きかったもので、起きたことでした。

天皇陛下は鎮守府の運営の妨げとなるデモ行為の一切を禁止し、デ

モを行った際にはテロリストとして処理する詔を出していたんです。天皇陛下の絶対命令である詔の効力は絶大でしたが、それでも押さえつけられなかったらしいです。これまでも私が来るまでには、散発的に小規模で起きていたようですが、ここまで多かつたことはないそうです。武下さん曰く、今日の規模は提督が連れ去られて以来最大級だったそうです。人数規模では1000人届かないくらいだったみたいですね。

ちなみに、デモ隊が叫んでいた言葉の中に、気になる言葉がありました。

『柴壁病』です。デモ隊曰く、精神疾患の一種で、提督に心酔している状態のことを指しているらしいです。武下さんが言うには、『艦娘にある『提督への執着』を最大限に弱めた人間版ですね』だそうです。さらつとんでもないことを言いましたが、もうこんなんでもないことは聞き飽きていますので、私もそこまで驚くことはありませんでした。

この横須賀鎮守府艦隊司令部は、紅くんに心酔していますからね。私が見てきた紅くんからは、全く想像も付かない程に人を惹きつける魅力があったということですね。

武下さんが仰っていたことを、私は不意に客観視しました。

どんなものなのだろうか、ということです。

見てみれば最悪でした。というのも、正しい正しくない以前の問題で、そもそもこの世界の成り立ちや紅くんの存在を見ていると始まらないんです。

この世界で艦娘を苦しめるのも、人間を苦しめるのもどちらにせよ、大本営が悪い一端を握っていることは確かだったからです。

「ましろさんは……あれを見てどう思いましたか？」

武下さんから話を聴いた後、赤城さんと話をしていました。

警備棟から出たところで、たまたま会ったんです。どうやら赤城さんは事務棟に用事があったらしく、その用事が終わったから私に声を掛けたみたいですね。

そのまま人気の全くない外を歩きながら話します。

「デモですか？」

「はい。勿論、デモのことは武下さんか誰かから聴きましたよね？」

「勿論です。……ですが」

そう言いかけた瞬間、赤城さんに遮られます。

「天皇陛下の詔という大義名分があるんですが、“あえて” ああいう処理をしているんですよ」

「はい？」

“あえて”を強調した言い方をした赤城さんに、私はそう聞き返していました。

「武下さんからこのことも聞いていますよね？ 彼らデモ隊はテロリストとして、その場で銃殺することが許されているんですよ」

「そうなんですか？」

平静を装いますが、全身の血の気が一気に引きました。

1000人近くを有無も言わずに銃殺するなんて、ただの虐殺でいる横須賀鎮守府は一体何なんですか、詔を無視して鎮圧している横須賀鎮守府は一体何なんですか。

底知れぬ恐怖が私を襲いました。

「これも紅提督の“やり方”です。それに従っているだけですからね」

赤城さんはそう言いながら、あるベンチに座りましようかと促して座ります。

そこは丁度、木漏れ日が心地よく、割りと涼しい場所でした。

「陛下はこう仰ってました。『日本皇国は自らの首を絞め、延命している状態だということをごくに私が断言いたします』と」

「矛盾しているような……」

「いいえ。これが日本皇国が置かれた状況を現すのに、最適な言葉だと思えますよ。他にも、『首にナイフを当てた状態』などという表現もありましたね」

赤城さんは木漏れ日に目を細めながら言います。

「国一つを動かすだけの力があるにも関わらず、紅提督はひたむきに深海棲艦と戦ってきました。国を制圧する訳でもなく、反乱分子を手

当たり前次第殺す訳もなくです」

「……」

「……ましろさんは、この世界について考えたことがありますか？」

赤城さんの突然の疑問に、私は少しだけ考えます。

確かに、考えたことは何度もありますが。それは、私の身边で起きていることだけでした。横須賀鎮守府から外れた、もっと大きい組織についてなんて、考えている余裕などありませんでした。

「ないです」

「そうですか……」

当然、ないですよね。

私の回答が分かっていたかのように、赤城さんは答えます。

「この世界はきつと、私やましろさんが考えている程単純なものではないんですよ。ですが、紅提督だけはそれを見ていました。見えない“何か”と戦っている様で、自らに振りかかるものを分かっていたかのように『イレギュラー』という言葉で偽装して、私たちを指揮していたんです」

その言葉は、私にはとても理解できないものでした。単語それぞれの意味は分かりますが、その単語で構成された文。一文一文の意味が、全く分かりません。何を考えて、何をしてきた。紅くんのやってきたことは、赤城さんや巡田さん、武下さんから聴いてはきました。赤城さんの言った言葉には、それぞれの紅くんの情報を収束させた“何か”になっていることは分かります。ですが、行き着いた先が見えません。

というよりも、私には到底見えないものなんでしょうね。

「ましろさんが知っていることの中に、『提督への執着』という言葉がありますよね？」

「もちろんです」

どうやら、『提督への執着』が関連しているみたいですね。

「その『提督への執着』が出来た原因が、紅提督が探していたものなのではないんでしょうかね」

そう言った赤城さんはベンチから立ち上がり、スカートを払いま

す。

「その探していたものに、私は心当たりがありますよ」

刹那、強い風が吹付け、赤城さんの長い黒髪がなびきます。

「紅提督は、『監視するために、本来はここに居るつもりだった』と仰ってました」

全く意味が分かりません。私の知っている情報では全くその言葉の意味を理解することが出来ませんでした。

ですが、それが紅くんが探していたものなのではないんでしょうか。

第27話 侵入者

艦娘や『柴壁』の人たちから次々と聞かされる紅くんの話は、どれもこれも難しいものです。そして、これはつくづく感じているのですが、聞けば聞くほど紅くんが何を感じていたのかとか、何をしていたのかが分からなくなります。

ただ鎮守府で艦娘を指揮していたんじゃないんでしょうか。

そうでもなければ、ここまであちこちに名前が挙がるのも変ですよ。それに、聞くところでは佐官だったみたいですし。

鈴谷さんから受け取っている認識票にも『中佐』とありましたからね。

(考えれば考える程、分からなくなりますね)

そんなことを考えながら警備棟に向かいます。

赤城さんとは先ほど別れたので、私独りだけですけどね。

その刹那、私の首筋に冷たいものが押し当てられました。私の直感がそれを銃口だと知らせ、身体が硬直します。

銃口だと分かっているのに、そのまま私は両手をゆっくりと挙げました。

銃を持っていない方の手で、私の来ているBDUのポケットを探り、武器がないことを確認したのか、私の頭に銃を突きつけたまま押し歩きます。

(え？ 誰?!)

そんな疑問が駆け巡ります。

ひよつとしたら、さっきのデモ騒ぎで武下さんにやったのを、今仕返しされているんでしょうか。

そんなことを考えますが、一方では本当に別の誰かがやっているのではないかとも考えます。

こんなことを考えていても、正直な話、かなり動揺しています。誰がこんなことをしているのか、何をされるのか。私には全くわかりませんから。

歩いてみると、道の脇にあるヤブに入りました。

ヤブの背丈は、大柄な男の人でも屈めば隠れる程の高さです。そこに銃口を押し付けられたまま入り、膝の裏を蹴られました。

ガクンと身体が崩れ落ち、立膝になります。

「なんとも……これは珍しい顔がいるものだ」

私の背後でそんな言葉が聞こえます。相手は男性です。

「……」

そんな相手に、私は言いません。

もし、口を開いてしまえばあちらに流されてしまいそうだからです。

「艦娘でも酒保でも犬っころでもない、天色 紅の姉か？」

リアクションを取らないように、身体を硬直させます。

そんな私を背後から見ている、この男性は鼻で笑い、続けてきました。

「暗殺目標の軍事施設に、諜報員の実の姉が犬っころとして飼われているなんてな」

独り言なのでしようけど、私は違和感を覚えました。

男性の言う諜報員とは、きっと紅くんを撃ったこっちの紅くんのことでしょう。ですけど、彼は諜報員の実の姉と私を間違えているんです。

仕方ないといえば仕方ないことなのですが、間違えるものなんでしょうか。

「だが天色 ましろは従軍看護師のはずだが……。まあいいか。異動は珍しいことではない。貴官のデータはもう取った」

「……」

そう言われても、私は何も発しません。

きっと疑問に思っていることを訊いてしまえば、芋づる式で私の持っている情報が持っていかれてしまいます。

「犬っころの姿、実に似合っているぞ。弟同様、犬っころのままに惨めに死んでおけ」

「……」

「ふん……まあいい。貴官を殺したとて、汚れるだけだ」

そう言つて『動いたら撃つ』とだけ言つて、離れていきました。

足音が聞こえなくなった辺りで、恐る恐る振り返ってみると、私の背後には誰もいなくなっていました。

――

――

――

私が後ろを振り返つて、男性の姿がないことを悟った時、別の人に声を掛けられました。

鈴谷さんです。艤装を身に纏い、いつもの調子で立っていました。

「誰かいたでしょ？」

「はい。侵入者です。恐らく諜報員……」

鈴谷さんはそれだけを聞くと、独り言のように話し始めます。

「我、侵入者を発見。混成警備艦隊の出撃を具申します」

口調が一変します。ですが、すぐにこつちを向きました。

「相手の目的は分かった？」

「情報収集だと思いますが、本意は分かりません」

「特徴は？」

「背後にずっと居たので分かりませんが、男性とだけ。武装をしています」

「そっかー。今、全体に警戒を取ってもらうように伝えたから。あと、鎮守府に入られたのなら見つけるのは難しいかもね」

そんな風に、20・3cm連装砲を振りながら言います。

「ましろさんに仕掛けたということは、何か知っている人かも知れないね。護衛を頼むからちよつと待ってて」

そう言つて鈴谷さんはさつきみたいに、独り言で口調が変わった状態で話し始めます。

「鈴谷より混成警備艦隊旗艦。天色 ましろ氏の護衛を具申します」

違和感がありすぎる独り言はどうやら、誰かと連絡を取り合っているみたいですね。状況から考えると武下さんか赤城さんでしょう。

すぐに話し終えたのか、私の方を見ます。

「念のためで付けるけど、多分もうないと思うからさ。……まあ、紅提督もいつもこんな感じだったから、どんなか味わってみなよ。護衛が来るまでは鈴谷がここにいるからさ」

そんなことを言つて、鈴谷さんは近くのベンチに座ります。

護衛といいつつ、座り込んでいたら護衛の意味を成さないのでは、と内心思つたのは口には出しません。

立っていても仕方ないので、鈴谷さんの隣に座つて空を見ます。

騒がしいなあ、とは思っていましたが、やはり飛行機がいっぱい飛んでいます。

4機で1つの隊を作っているんでしょう。空を何個も隊が埋め尽くし、空の色は飛行機のお腹の白色になっていました。よくあれだけ飛んでいてぶつからないなあ、と思いつつ眺めます。

「ありや赤城航空隊だねえ」

「赤城航空隊？　赤城さんの飛行機なんですか？」

空を見上げてポカンとしていた私に、鈴谷さんはそう話しかけてきました。

「鎮守府屈指の練度、撃破率、被撃墜率なんだあー。赤城さんは艦載機好きだからね、紅提督とは公私共に仲が良かったんだあー」

「え？」

またもや私の知らないことを知らされました。

確かに紅くんはミリタリーは好きでしたが、広く浅くの筈です。それが、どうして艦載機好きに変換されているんでしょうか。

まあ、答えはすぐに分かりましたよ。ここは海軍です。戦車の話をするなら陸軍にどうぞって感じですよ。

ですが、紅くんのミリタリー好きがどうして強い航空隊に繋がるんでしょうか。

私は記憶を掘り起こします。

そうすると該当するものを思い出しました。

赤城さんがあるとき見せてくれたノートです。航空戦術に関してびっしりと書かれたものを、紅くんが持っていたと言っていたんです。

「あの2人が楽しそうに話しているときは大体が艦載機のこと。それでも4割くらいかな？ 他は大体は皆のこととか、何をしようかとか、そんな感じ」

「そうなんですか」

「うん。だから、艦載機を持てる艦娘たちは必死に艦載機について勉強してたよ。もちろん、紅提督と赤城さんには悟られないようにね。紅提督が艦載機の話をしているときは、本当に楽しそうだったもん。鈴谷だって、水上機使うから水上機のことすっごい調べてたし」

そう言いながら、鈴谷さんは足をパタパタとさせます。

「でも、かなわなかった。情報量が違いすぎるんだよね、あの2人とはさ」

「情報量、ですか？」

「うん。私たちは種類やら、基本性能、どこで使われていたかとかしか調べられなかったんだ。それで、いざ紅提督に話に行ったらジャブ食らったね」

鈴谷さんはそう言って、私の方を見ました。しかも凄んでいます。

「どうして艦載機の話をしているのに、風の話になるのさっ!! んで、調べてもない艦載機の話に流れてっちゃったからさ……」

なぜ、風の話になったか分かりませんが、『強風』とか言っていたんで、それが飛行機の名前であつたんでしょう。私には全然わからないですけどね。

「鈴谷には艦載機は分からないんですー！ 開発経緯とか、それに関係のあるもとか言われてもねえ!？」

鈴谷さんは怒っているように、話します。ですが、怒ってなどないことは伝わりました。

「……まあ、そんな感じ」

鈴谷さんはそれっきり黙ってしまいました。当時の鈴谷さんはまだ、“気づいていない”側だったと思いますので、それに関しても何処かで罪悪感を持ったままなんでしょうね。

「お、護衛が来たみたいだから、鈴谷は任務に行くよ。鈴谷の『提督への執着』を使えば侵入者なんてヒョヒョイのヒョイだからね」

手をプラプラさせながら鈴谷さんは歩いていきます。

その後ろ姿はなんとというか、見ていられませんでした。何というか、負けた雰囲気です。具体的には思いつきませんが、大きな勝負に負けたんでしょう。

それが紅くん関連かは分かりませんが、それなりに準備していて自信もあつたんでしょうね。

鈴谷さんと入れ替わりで来たのは、時雨さんと夕立さんでした。2人とも艦装を身に纏つて、周りを見ながら近づいてきます。

「ましろさんが襲われたことで、鎮守府は現在、混成警備艦隊が巡回中だよ。それで僕たちは、護衛を赤城から受けた」

聞き慣れない単語がまた出てきました。『混成警備艦隊』です。

これまでの知識と単語から連想するに、艦娘と誰かが混じった特別警備隊なんでしょうね。単純に考えれば『柴壁』がそれに該当します。ですので、私はあえて訊きません。

「だけど、いつもの半数しか出てないから精度は半分以下になったわ。部屋から出てこないんだもの」

夕立さんはそう言いながら、辺りをしきりに見渡しています。警戒しているんでしょうけど、あからさまな気がしなくもないです。

それと、やはり艦娘でしたね。半数しか出ないということは、私が『柴壁』で受けていた任務と関連性がかなりありますね。というよりも、それ以外あり得ません。

塞ぎ込んだままなんでしょうね。

「それで、ましろさん」

「何ですか？」

「僕たちは、相手の目的を知らされていないんだ。分かっている範囲でいいから教えてもらえないかい？」

時雨さんが私に聞いてきたことは最もだと思えます。目的があつてここに侵入し、私に尋問したんですからね。

私は鈴谷さんに話したことと同じことを話しました。

「相手の目的は、多分情報収集です。それと、私のことを誰かと間違えていました」

「誰かって?」

時雨さんは更に掘り下げてきます。

「私の名前を言っていました。ですけど、その対象はどう考えても私ではありません。従軍看護師とか言っていましたからね」

時雨さんと夕立さんの表情が一気に強張りました。

何かあったんでしよう。

「他に何か言っていなかったかしら?」

今度は夕立さんが訊いてきました。

私はどうして2人の表情が強張ったのか分かりませんが、真実を話します。

「弟と同じように惨めに死ねとか、まあ……あの言動からすると、侵入者の指す弟は、紅くんを撃った同姓同名の諜報員のことでしょうね」
「……そうなのね。何となく相手の素性が見えてきたわ」

そう言った夕立さんは、あることを私に言いました。

「私たちは鼻が良いの。その2人両方を護衛に付けるなんて、やっぱり赤城さんは赤城さんね」

夕立さんは困った表情をしてそう言います。

「ああ……鈴谷さんから前に聞きましたよ。赤城さんが考えることとして、ガバガバで必ず何処かで見落としがあるって……」

「擁護出来ないわ……」

夕立さんに釣られてか、時雨さんも困った表情をします。

そんな2人に、私はある提案をしました。

「護衛は多分1人でもいいと思いますので、どちらかが捜しに……」

「じゃあ、僕が行くよ。夕立、頼んだ」

「任せて」

私が話そうとした意図を読み取ったのか、時雨さんと夕立さんは勝手にフィーリングで通じ合い。時雨さんは走って行ってしまいました。

私はその姿を目で追いかけてみますが、すぐに視線を引き戻されます。

夕立さんが話しかけてきましたからね。

「本部棟に行くわよ。あそこなら、何かあったとしても大丈夫だから」

そう言って、夕立さんは歩き始めました。
私はその背中を追いかけていきます。

第28話 知りすぎたこと

夕立さんの後に続いて本部棟を目指します。ですが、普段歩くような道を歩きません。舗装されていてフラットなアスファルトのところでは無く、普段使う道の脇にある藪を超えた向こう側を歩きます。

鬱蒼と生い茂っていると思っていました。全くそんなことはありませんでした。ちゃんと整備されていて、全然汚くないんです。芝生のような感じもします。

その中を夕立さんは中腰で歩きます。藪の背丈的に、かがまないと向こう側に見えてしまうんでしょうね。

時より道を横断したりして、いつもの何倍かの時間を掛けて本部棟の脇に到着しました。到着したと言っても、まだ藪からは出ていません。どうやら、夕立さんは入り口から入るか入らないかを葛藤しているようです。

ですけど、本部棟の入り口って普段使うところ以外にあるんでしょうか。

非常口くらいならありそうですね、そういうところは外からは入れないと思うんですけど。

そんな風に私が考えていると、夕立さんは私に話しかけてきました。

「普通に入りましょう。この辺を巡回している混成警備艦隊がそろそろ通るはずですから」

そう言った夕立さんは茂みから自分の姿が見えず、かつ、外の様子が見える位置を探して外を覗きます。

そんな夕立さんを私は見守ります。音を立てないように、慎重に除くこと数十秒。夕立さんが這い出て来て、私に言いました。

「もう少しで混成警備艦隊が通るから出ましょ。そのまま本部棟に入って、赤城さんに会うわ」

そんな風に小声で言って、私の腕を掴みました。

多分、タイミングを合わせて出て行くつもりなんだろうね。夕立さんの気の向くままに動こうと思えば、腕の力を抜きます。

小さい手が私の手首に巻き付きます。時期的には今の格好をしているだけでも暑いですが、夕立さんに掴まれている手首は特段暑いという訳ではありません。

暑いというか、温かく感じられました。何をどうしてこんな風に私に思わせているかなんて分かりませんが、温もりを感じたんです。

そんな小さな手に引かれ、私と夕立さんは道に飛び出します。夕立さんの言った通り、近くを“混成警備艦隊”が通りかかりました。

やはり、私の想像通りでした。艦娘と『柴壁』で構成された部隊だったみたいですね。

「夕立さんじゃありませんか？ それに……碧 葵さんだったかしら？」

少し顔の知っている『柴壁』3人と、ある艦娘が居ました。艦娘は艤装を身に纏っています。

「はい」

「では、私は巡回がありますの。これにて失礼致しますわ」

そう言つて髪を靡かせて歩き出します。その、ある艦娘とは熊野さんです。鈴谷さんの姉妹艦ですね。

そんな熊野さんを私は引き止めませんでした。『巡回』と言つてましたからね。

「さて、行きましょ」

熊野さんが私のことを偽名で呼んだことに、夕立さんは少し違和感を感じていたようですが、そんな素振りをすぐに収めて私の手を引きます。

本部棟に入ると、これまでに見たことのない艦娘が何人とうろついています。

とは言つても、何というか、全員目が死んでいるんですよね。これだけはハッキリと言えます。

本部棟に入ると同時に、夕立さんは私の手を離しました。もう引く必要はありませんからね。

「葵さん。武器は持つてるかしら？」

多分、誰かが通りかかるのを考慮しても言葉でしょう。

それに何かの確認をしてきました。私に武器を持っているか、と訊いてきたんです。ですけど、それは見れば分かることですよ。

「ないです。侵入者に取られましたからね」

「そう……。拳銃も？」

「拳銃は携帯してません。勿論、ナイフも持っていた銃と一緒に」

「丸腰なのね」

「はい」

歩きながらそんな話をします。

本部棟の中は思いの外静かで、外もそこまで騒がしくありません。

ですが、本来ならばこんな動きをするものなんですかね？ そんな疑問が脳裏に浮かびました。ですが、それは不毛です。ここで夕立さんに訊いたとしても、何があると言うんでしょうか。返ってくる回答はきつと、私は再三聞いた話でしょうからね。

少し考え事をしていた私に夕立さんは話し掛けます。前を向いて歩いているからか、後ろを付いて歩いている私の様子は分からないでしょう。

「火器保管室の鍵がどこにあるのか分かれれば良いんだけど、執務室にはないからきつと開けたところでないわね」

本部棟にある鍵に埃が堆積している部屋の事です。

私も以前、本部棟を探検している時に見かけました。

「そうしたらやっぱり、警備棟に行かないと携帯火器はないわね。

……丸腰になっちゃうけどいいかしら？」

夕立さんは前を向きながら私に尋ねます。

もしもの時のことを考えての提案なんでしょうけど、もう襲って行くことはないと思うんですね。これは鈴谷さんも言っていたことですけどね。

「大丈夫です。……それよりも気になることが」

歩きながら私は夕立さんに訊きます。

「何かしら？」

「侵入者が見つからなかったらどうするんですか？」

そう言うと夕立さんは急に立ち止まりました。

私はすぐ後ろを歩いていたので、急に立ち止まったのでよろめきま
す。

「その時は金剛さんに頼むわ」

「金剛……さん？　ですか？」

急に出てきた名前に私は驚きます。

何故、ここで金剛さんが出てくるんでしょうか。

「ええ。金剛さんは艦娘の中でも結構特殊で、紅提督に関することが
らの察知能力はいつぞやのSPYレーダー並だから」

そのSPYレーダーというものが何か分かりませんが、相当なもの
みたいですね。先ほど時雨さんが侵入者を捜しに行きましたが、彼女
も『鼻が利く』と言っていました。

ですが、それ以上に金剛さんは敏感なんでしょうね。

今思い出しましたが、SPYレーダーってイージス艦のレーダーの
ことですね。何でも、従来のレーダーよりも遥かに高性能で云々とい
うやつです。詳しいことは分かりません。

「でも、侵入者が居るからって金剛さんが動いてくれるとは限らない
わ」

夕立さんは前を向いたままそんなことを言います。

何故、金剛さんが動かないのか分かりませんが、紅くん絡みだとい
うことは確実です。

「あっ……葵さんって知ってたかしら？」

「……何をですか？」

突然、そんなことを訊いてきます。

話の流れ的には、金剛さん絡みだということは分かっていますが、私が
知らないであろうことを夕立さんが教えてくれるということですよ。

私は考えます。何を教えてくれるのか。

私が紅くんを探してここに来たことは夕立さんも知っていると
思っています。それ以外で来たとなると、経験則から言えば提督として呼ば
れたということになりますからね。

その辺よく理解していませんが、私はどうやら提督として艦娘に
呼ばれた”訳ではないみたいですので、まずそれはあり得ません。

なら、何を夕立さんは教えてくれるんでしょうか。
そんな考えが脳の中で渦巻いている私に、夕立さんは容赦なく話します。

「金剛さんが居なければ、紅提督は侵入者に撃たれる前におかしくなっていたかもしれないの」

そう言われて、私はあることを思い出しました。

紅くんは『近衛艦隊』と呼ばれていた艦娘の集団に守られていた、と。

もしかすると、金剛さんは『近衛艦隊』と何か密接な関わりがあったんでしょうか。

私はそれを夕立さんに訊いてみました。

「それって……『近衛艦隊』とかいうやつ絡みですか？」

私がそう言うと、夕立さんは足を止めます。

そして、私の方に振り返りました。

「それ……誰に訊いたのかしら？」

その夕立さんの酷く冷たい声を聞いた途端、身体が硬直します。

そして、私は地雷を踏み抜いてしまったのではないか、と感じました。

そうでなければ、あからさまにこんな反応をする訳がありません。
明らかに、今までの夕立さんとは雰囲気違います。

「えっ？」

「それ、誰から聞いたのかしら？」

私の目を捉えてそう言う夕立さんに、私は言葉を発することが出来ませんでした。

夕立さんは豹変してしまったと言ってもいいくらいです。表情は無表情になり、赤い瞳からは“温かみ”が消え失せ、冷たいものに変わっていたんです。そして、声の調子も幾分か低くなったんです。

『近衛艦隊』なんて単語、普通に調べていたら分からない筈よ。それを何故、葵さんは知っているのかしら」

武下さんから聞いた話ですが、何か不味かったんでしょうか。

私は武下さんがこの単語を発した時に話していた内容を思い出し

ます。そうするとあることが浮かび上がってきたんです。

『ここには提督非公認の艦娘振り分け指標みたいなものがあつたんです。艦娘たちは一方を『近衛艦隊』、他を『親衛艦隊』と呼んでいました。『近衛艦隊』は艦娘の中でも少数派で、提督を含めて恐れていたとか、警戒していたんです』

この言葉の意味は、その時の私は正常な思考を手放してしまっただけで、その時は違和感を感じていなかったんでしょう。ですが、改めて考えてみるとそれはものすごいことでした。

鎮守府内は当時、隣人が隣人を警戒しあう状態だったということ。つまり、ナチ政権下のドイツのような状態だったということです。『近衛艦隊』と『親衛艦隊』という勢力に分断されていた横須賀鎮守府では、互いの情報を流し流され、牽制しあっていたということなんです。これには紅くんも関与していたんでしょうか。ですが、対称が対称だけに関与していない訳がありません。

「その単語は忘れた方がいいわ。絶対後悔するもの。いい？」
「……」

夕立さんは息が当たる距離まで顔を寄せて、私にそう言い聞かせるように言いました。

これは本当に知ってよかったことなのか、と不安になります。単語を口に出しただけでこの変わり様ですから、きつととんでもないことがその当時は起きていたんでしょうね。

それに、武下さんから聞いた時にあることも言っていたんです。『今では『近衛艦隊』『親衛艦隊』なんて単語は死語になりましたが、私はましろさんがこの世界に来てしまったことによつて、それが再発するのではないかと考えています』

これが本当に起きているのではないか、そう私は考えました。あの時、武下さんは『紅提督が生きている、取り戻そうとましろさんから話を聞いた私たちと、紅提督が死んでしまったと思ひ込み、感情を押さえつけた結果、表情を失い、傷口に塩を塗られまいと動く艦娘たち』と言っていました。

つまり、赤城さんたちや『柴壁』の私の本名を知っている集団と、ま

だ知らない大半の艦娘たちがその状態に陥っているのでしょう。

実際問題、今回の侵入者騒ぎで混成警備艦隊として出ている艦娘は総員の半分です。半分の艦娘は、紅くんが撃たれた当時からの状態だと言います。

つまり、何も行動を起こしていなくても自然とその状態が成立しているんです。

『近衛艦隊』と『親衛艦隊』。この双方は、既に出来上がっているんですよ。

「……わ、分かりました」

そんな私は、夕立さんに分かったかのように返事をします。

ここで無理に何か聞き出そうとしたり、行動をすれば何をされるか分かりません。ここでの私のアドバンテージが生きないかもしれないんです。

—————

—————

——

夕立さん先導でたどり付いたのは執務室でした。

やはりここにたどり着くんだと内心思いつつ、私はソファアに腰掛けます。

夕立さんはソファアにもたれかかりました。艀装なんて身に纏っていたら、ソファアに座れないなんて当たり前のことですからね。

「……護衛の任は、赤城さんの独断で解かれるって鈴谷さんから聞いたかしら？」

「いいえ」

「そう。混成警備艦隊の指揮をしているのは赤城さんなの。だから、赤城さんの指示で全体の行動が決まるわ。ましろさんの護衛もね」

「そうなんですか」

多分ですが、場つなぎでそんなことを話し始めます。

「この様子だと、出てこれる空母の全艦載機が発艦して、混成警備艦隊が屋内に入り次第かしらね？」

そんなことをいいながら夕立さんは外を眺めます。

確かに、本部棟に入るまでも艦載機が飛んでいましたが、結構な数が飛んでいたと思います。あれ以上に増えるということでしょうから、空の目で外は十分ということでしょう。

だから、混成警備艦隊が屋内の巡回に絞るんでしょう。

「見る限りだと……赤城航空隊と加賀航空隊。飛龍航空隊。隼鷹、飛鷹航空隊。祥鳳航空隊かしら。赤城さんなら全空母航空隊を出したところでしょうけど、出てこない艦娘もいるから仕方ないのかしら」

私は夕立さんに釣られて外に目を向けます。

外には空の色が変わる程の艦載機が飛び回っており、エンジン音が鳴りっぱなしです。

「ふーん。艦載機も爆撃機と攻撃機は無しで、偵察機と戦闘機だけ……。外に居た場合は射殺するのかしら？」

「そうなんですか？」

「あの様子なら。だけど、それも否応無しにはなくて、最終手段だと思おうわ」

夕立さんはあれこれと指を指して話をします。

夕立さん曰く、翼が大きくて胴体が細くて長いのが彩雲という偵察機。少し太いのが零戦。零戦より太くて少し短いのが雷電と言っていました。

艦載機のことを言われても、私にはちんぷんかんぷんですし、よく分かりません。精々、偵察機と戦闘機の違いでしょうか。機体の性能云々に関しては、何一つ分かりませんからね。ただ、零戦がペラペラの鉄板で出来ていて、機動性がいいということくらいでしょうか。

「そういうえば、ましろさんは兵器のことは……」

「あまり分からないです」

ボケーと聞いていたことに気付いた夕立さんは、そんなことを私に訊いてきました。

確かに、この人生で戦闘機やら兵器に興味を持ったことはありませんでしたね。世の中には、そういうものを魅力的に感じる女性もいるようですが、興味を持たない方が普通です。

私もその普通に分類されますね。

「……じゃあ、さっきの説明はあまり必要なかったかしら？」

「いいえ。どれが偵察機で戦闘機くらい見分けが付いた方がいいですからね。ありがとうございます」

「そう。それなら良かったわ」

そういつて、夕立さんは外を眺め続けました。

私もそれに釣られて外を眺め続けます。

結局、護衛が外れて警戒態勢が解かれたのは、私たちが執務室に入って3時間くらい経った後でした。

警戒態勢が解かれたと言っても、屋外には艦載機は飛び続けてますし、混成警備艦隊の巡回は止まりません。

ということとは、侵入者は捕まっていなければ射殺もされていないという事になりますね。

第29話 奪還作戦準備

侵入者が侵入してから3日が経ちました。今日まで、侵入者の姿を見たなどの情報は1つも入らず、ただ混成警備艦隊が巡回を続けているだけです。

沖江さん曰く、『この状態は約1週間続きますよ。それ以降になると金剛さんたちだけが動き、他は解散して通常に戻ります』とのことでした。

この日程の基準は分かりませんが、判例なんでしょうね。それを聞いて、こんな状態が1週間も続くのかと思ってしまう。

極度の緊張状態ですので、普通の人なら持ちません。横須賀鎮守府ならではなんでしょうかね。

私はこんな状況下でも、あることをしなければなりませんでした。紅くんの奪還作戦の話を進めなければならぬんです。話が浮上してきた後、色々なことを知ってしまったので考える暇が無かったですよね。

(この前、武下さんに『血猟犬』は使えないと言われたから……) 考えを巡らせます。

最初の情報収集の段階で躓いています。ですが、ここさえクリアしてしまえば、後は予定通りに進めれる筈です。

考えます。考えに考え、時おり全然関係のないことも考えてしまいますが、考えます。

(『猟犬』は情報収集に向いてないですし、『番犬』は以ての外ですね) 横須賀鎮守府にある唯一無二の諜報部隊である、『血猟犬』を使えないとなると、本当に情報収集手段がなくなってしまう。

他に手はないかと考えます。

あれやこれやと考えますが、どうしても『血猟犬』よりも良い部隊が見つかりません。

そんな時、私はあることに気がきました。

私が見ていたのは、『柴壁』の人員構成などに関する資料です。記憶

は定かではありませんが、横須賀鎮守府に直接使役しているのは『柴壁』だけではないはずです。そう、酒保の従業員も元軍人なんです。どこ出身かなんて分かりませんが、『柴壁』のように特殊部隊やら憲兵ではないでしょう。一般部隊若しくは後方支援系だと思います。勝手な私のイメージの押し付けですけどね。

思い立ったらすぐ行動に移します。私は自分の部屋から出て、寮を飛び出し、酒保に向かいました。

――

――

――

酒保に着いた私は正面の入り口から素早く入り込み、なるべく見られない様に移動していきます。そして辿り着いたのは、この世界に来てた時に課せられた滞在条件をクリアするべく、働き口を探していた時に訪れた場所です。サービスカウンターのなところにいる人に話し掛けました。

「すみません。責任者の方、いらっしゃいますか？」

対応してくれた人は、私の格好に驚きながらも対応してくれました。

「分かりました。少々お待ちください」

そう言つて、どこかに内線で電話をかけること数分後、以前にも来てくれた人が現れました。そして、前回同様同じことを言ったんです。

「会議室に行きましょう」

「分かりました」

私はその後を着いて行き、会議室に入ります。

「どうされましたか？ 前回いらっしゃったときは私服だったみたいですが、今回は『柴壁』の制服なんですね」

「はい。結局、『柴壁』に……。それで話というのはですね、あまり信頼関係も築けていない現状で頼むのも忍びないことですが……」

そう言つて、私は責任者の方にあることを聞きました。

「酒保の従業員の方々は全員、軍人だったと聞きました。本当ですか

？」

「……ええ、そうですね。私は補給部隊でしたが、色々な所属だった者が集まっていますよ」

私の質問の意図に気付いているかはさておき、勘ぐられてはいないようです。

質問を続けます。

「その中に戦闘部隊だった方は？」

「っ!」

何かを感じたのか、一瞬空気が張り詰めたが、すぐにそれは薄れます。

少し考えた後、責任者の方は話しました。

「数人が憲兵と特殊部隊出身者が居ます」

そう言うのと、私が発言するのを遮って、私に質問してきました。

「こんなことを訊いて、何かあるんですか？」

そう訊いてきましたが、私の予想では確かめているんでしょう。

同じ鎮守府内で、同じ雇い主。性質も同じと考えると、酒保は『柴壁』と同じはずです。

『柴壁』と同時に軍を退役し、横須賀鎮守府に雇われたという経歴がある双方の組織はきつとトップ同士が繋がっているはずなんです。

確固たる核心はありませんが、そうだろうと私は考えていたんです。

きつと責任者の方も、私が来たということでは何を言われるかなんて分かっている筈です。

「奪還作戦です」

「……」

私はそう言うのと、責任者の方は黙りこみ、すぐに反応をしました。

「分かりました。該当する人間を集めて話をします。ですが、期待できませんよっ。」

どうしてでしょう。特殊部隊や憲兵出身なら『柴壁』と同じです。

『血獵犬』までとはいかないでしょうけど、それ相応の人間がいるはずなんです。

「貴女……そうね、〃 ましろさん〃」と言えばいいですよ？ ましろさんの考えていることは小耳に挟んでいます。そして、今、何を求めているのかも」

淡々と話します。

「貴女の求めているのは特殊部隊でも憲兵でもないですよ？ 諜報員のはずです」

私の顔色を伺って、責任者の方は続けました。

『柴壁』の『血猟犬』が出せない理由なら聞かれたと思います。こちらに話を持ってきたのは良い判断です」

そう言って責任者の方は立ち上がりました。

「こちらで人員選抜を行い、出頭させます」

「ありがとうございます」

私あまり喋らなくても、話がトントンと進んでいきました。

聞いている限りだと、奪還作戦の話はリークされていたみたいですね。

私は責任者の方に頭を下げて礼を言い、酒保を後にしました。

これからは出頭するであろう人たちに渡す詳細な資料を作らなければなりませんからね。

――――

――

――

私は奪還作戦の準備を確認します。

最初に紅くんが収容されている軍病院の特定。その後、軍病院の構造等の情報収集を行います。ここまでは、今回必要な情報収集です。それ以降の『血猟犬』が担う予定であった任務は全て『猟犬』に任せ、実働部隊は全員が『猟犬』ということになりました。

酒保から選抜される人員対象の資料を作ります。ですが、今回は考えました。この作戦が外部に漏れると、奪還作戦が行えなくなるんです。紅くんは別の病院かどこかへ移送されてしまい、どこに居るのかも検討が付かなくなりますからね。

ですので、私が説明で使う用だけを用意することにしました。

自分が使うためだけの資料を作り、酒保から来る人たちを待ちます。

そんな中、私はあることを考えていました。

この作戦の土台には、『紅くんが生存している』があります。一番大きな支えだと声を大にして言えることです。

なぜ、こんなことを考えたのかというと、この作戦が失敗した時のリスクを考えたんです。どういった意味での失敗か、それは『紅くんが生存していなかった』時のリスクです。横須賀鎮守府、大本営、日本皇国へのリスクは計算済みです。横須賀鎮守府は機能を完全に失うことは目に見えています。大本営は国民と国土を守ることが出来なかったということになります。そして、日本皇国は滅亡のカウントダウンがもうすぐそこで終わります。どういう意味で滅亡するかなんて、いくらでも考えられます。

ですが、これだけのリスクを考えましたが、一番重要なことを忘れていました。

私はどうなるんでしょうか。実質作戦立案者であり、人員編成や作戦内容まで考えた私はどうなるんでしょうか。

視点を変えてみましょう。

私は横須賀鎮守府にとってどういう人間なのかというと、『紅くんの実の姉』ということです。これは横須賀鎮守府内でも大きな存在ではあります。ですが、確証が持てません。疑れば、私はホラ吹きだつて言えますからね。大本営は私の存在はただの異世界人としか考えていません。少なくとも私の本名は割れていませんからね。横須賀鎮守府での様子を見ると、私の本名を聞いてどういう人物なのか分かれれば、横須賀鎮守府と同じような対応をされると考えられます。否、それよりもっと丁寧になる可能性がありますね。

日本皇国での扱いは紅くんの扱いと変わらないと思います。デモ隊の話を聞く限りでは、反感を募らせる人間も少なからず居ることになりますからね。となると、もし私の素性が世間に知られた時の動きというのは、自ずと決まってくるものです。

私は腰を伸ばしながら、考えていたことを一時中断しました。

考えすぎるとも頭が疲れるからです。

ポキポキとなる腰に手をあて、少し立ち上がってみます。そして数歩歩いてみたり、足首を回してみたりします。そして、同じ場所に座りました。

(確かに、この世界は私の思っていたよりも面倒です)

これまでの考えを纏めると、そういうことになります。

特に、異世界人にとってはですけど。

――

――

――

部屋の扉をノックする音がしたので、私は返事をします。

私の部屋をノックする人なんてそう居ないです。沖江さんか、『血獵犬』の先輩が2人くらいだけです。

返事と同時に入ってきていいと伝えると、BDUを着た数人の女性が入ってきました。一瞬、『柴壁』かと思いましたが、『柴壁』の中に見覚えのない顔でしたのですぐに分かりました。この人たちは酒保の従業員ということに。

「このような格好でないと、寮に入れられないものですから……すみません。私たちは酒保から責任者の命によりここにへ」

「ようこそ来て下さいました」

私は立ち話もと言って、部屋に招き入れて座ってもらいます。

「直接呼び出されたことと、何故、貴女のところに向えとおっしゃられた趣旨はここで判ると伺ったのですが」

代表でしょう。私に訪ねてきます。私たちはどうしてこの格好でここに来させられたのか、と。

「勿論、説明します。ですけど、どれもこれも伺わなければならないことがありますし、少し席を外すことになると思いますが、よろしいでしょうか?」

「はい」

彼女たちの了承も得たことですし、あることを訊いてみることにしました。

「私の名前、分かりますか？」

そう訊くと、ポカンと数秒間フリーズしてしまいました。ここへ来たのは全員で4人です。その全員がフリーズしてしまっただけです。見ていて滑稽でしたが、マジメな話ですので笑いません。

「は、え、ええと……天色 ましろ……さんですよ？」

やはり知っているようです。ということは、このことが伝えられないのはやはり艦娘だけのようです。

それはそれで何か問題が起きるような気がしなくもありませんが、どうせ後で皆が知ることでいいです。

「正解です。……すみませんね、変なことを訊いてしまつて」

「いえ、それで他になにか？」

「ええ……貴女がたは全員、軍の特殊部隊出身ということでもよろしいでしょうか？」

そう言うのと全員が頷きました。どこの部署だったかはさておき、そうだとするのなら問題ないと思います。

「私は海軍諜報機関に……」

「私もです」

「私は海軍部情報課でしたが、実働部隊です」

「私もです」

聞き覚えのあるところが出てきましたね。ですけど、私はあることを思い出しています。酒保の従業員は全員、紅くんの最初の暗殺騒ぎの直後に来た人たちのはずです。今、鎮守府が目をつけられている組織ではありませんが、つけられる前に抜かれた人たちのはずですので、問題ないと思います。

というか今考えてみると、結構な綱渡りをしているんですね。大本营は。

酒保の従業員に海軍諜報機関と海軍部情報課隷下の実働部隊の間を紛れさせる等。バレたら速攻艦娘に文字通り“始末”されてしまいます。

私は気付いてしまいましたが、多分口外することがタブーでしょう。頭の片隅におきまします。

「これから話すことは口外禁止です。いいですか？」

念を押して言い、私は本題に入りました。

「私は水面下で複数の艦娘と『柴壁』を使って紅くんを奪還する計画をしています。貴女たちにはその初動、情報収集を頼みたいのです」

一気に辺りが緊張感で包まれ、私の部屋に來た彼女たちも体勢を換ええます。背筋が伸び、アゴを引きました。

「何の情報を収集するかと言うと、紅くんが収容されている軍病院の特定と内部の構造等の情報を集めていただきたいのです」

「それは、私たちが鎮守府の外に出て、情報を集めてくるということでしょうか？」

うちの1人が私に訊きます。

「はい。これを元に、奪還作戦を開始する算段です」

そう言つて私は手を地面に付きました。

そしてそのまま頭を下げます。もとよりここで正座をしていましたので、形的には土下座になるでしょう。

ですが、土下座になつていても構いません。これを逃せばもう、情報を集めることもできませんので、奪還作戦自体が無くなりますからね。

そんな私を見て、すぐに彼女たちは私に顔を上げて欲しいと言ってきます。ですので、私は顔を上げました。

「紅提督のお姉様がそんなことを……私たちには恐れ多いです。……私に異存はありません」

そう言つたのは代表です。それに続き、残りの3人もやると言つてくれました。

「そうですかっ！　ありがとうございますっ!!」

私は今度はちゃんと頭を下げて、お礼を言います。

そしてすぐに顔を上げると、私は立ち上がりました。そんな私に、代表は『何方に?』と訊いてきます。

「赤城さんと武下さんに伝えに行くんですよ。もう、これで始める準備は出来ましたからね」

そう言つて私は代表たちに帰ってもらい、私は最初に赤城さんのと

ころを目指します。

赤城さんと武下さんの最終確認を取って、少し鈴谷さんに話を聞きに行ったら、この作戦は始動です。遂に、紅くんの安否の確認が出来ます。

第30話

確認

艦娘寮に到着し、一直線で赤城さんの部屋を訪れます。もし、居なかったとしても、加賀さんに言っただけで待つか、執務室に呼ばばいい話ですからね。

赤城さんの部屋の前に着き、私は扉をノックします。

「すみません。碧です」

そう言うと、中から声がしました。良かったです。

「碧さん。どうぞ」

「ありがとうございます」

中から出てきたのは加賀さんでした。部屋の中に通されて、確認します。どうやら赤城さんは居ないようです。

「どういうご用件ですか？」

半ば分かっている様に訊いてくる加賀さんに、私は答えます。

「赤城さんに用事がありました……」

「ふむ……赤城さんなら事務棟に書類を提出に行っていますよ。もうすぐ帰ってくる筈です」

加賀さんは綺麗な正座をしたまま答えます。

赤城さんが何の書類を出しに行っているか気になりますが、加賀さんに訊いても答えてもらえない可能性があります。もし、私に関連のあるものでしたら、内容によっては私がここに居れなくなりますからね。

少し考えごとをしていた私に、突然加賀さんがあることを言い始めました。

「碧さん……いいえ、天色 ましろさん」

「っ?!」

私の本名を口にしたんです。

身体が自然に動き、腰に手が行きます。どこからその話を訊いたのでしょうか。考えられるところは沢山ありますが、何か目的が無いのか、若しくはそれに誘導する言葉や質問内容がなければ無理な話です。

なら加賀さんは、少なくとも侵入者騒ぎから少し前から何かしらの情報を得ていたということになります。

「加賀さん……何処で訊いたんですか？」

私は警戒心を剥き出しの状態で加賀さんに訊きます。誰に訊いたかによつては、ここから逃げ出さなければなりませんからね。

侵入者だとしたら、変なことを吹きこまれている可能性だってあります。最悪、私が“消される”ことだってあり得ますからね。

そんな風に過剰反応する私に相反して、加賀さんは面を喰らったような表情をしています。

「えっ？ いや、鈴谷さんですが……」

「鈴谷さん……ですか」

私はすぐにさつき座つていた位置に戻ります。

侵入者からではなかったみたいですし、鈴谷さんならあの話以外あり得ません。確か、鈴谷さんの云う奪還作戦の陽動の選抜に加賀さんの名前も入っていたはずですからね。

「そうですか」

私はそう言つて姿勢を戻します。構える必要はなくなりましたからね。

加賀さんは少し落ち着きが無く、少しそわそわしたかと思うと、恐る恐る私に話しかけてきました。

「あの……ましろさん」

「なんですか？」

「申し訳ございませんでした」

薄々感づいてはいましたが、やはり加賀さんも謝つてきました。ですが、取り乱しはしません。至つて冷静に頭を下げたんです。

何について謝っているのかも私は理解してます。ですが、私は何も言いません。

「紅提督が撃たれてしまい……軍に連れて行かれてしまつて、どうなったのかも分からない状況で……」

そう言いました。ですが、鈴谷さんから話を訊いているのなら、どんな現状なのかは訊いている筈です。なら、何故加賀さんは頭を下げ

るのでしょうか。

私の推測ですが、『守り切れなかったから』とか言いそうです。

「もう済んだことです」

「……はい。ですが、私は一航戦の名に賭けて、今回の陽動は成功させます」

加賀さんは意気込んでいるようですが、ただの陽動です。陽動といっても、正面海域への出撃ですから、気合を入れなくても全然良いんです。紅くんのアカウントでは、艦娘の育成が進んでいるようです。駆逐艦や軽巡洋艦は遅れているようですがね。

それに陽動に出る艦隊は高練度艦で集中しているはずです。鈴谷さん、時雨さん、夕立さん、加賀さん、金剛さん、叢雲さん。叢雲さんは分かりませんが、鈴谷さんは航空巡洋艦でしたし、金剛さんと夕立さんは改二になっています。時雨さんは改二前ですが、結構練度が高いみたいなのを風の噂で聞きました。問題は叢雲さんです。

叢雲さんはどうやらあまり出撃も無く、基本的に鎮守府に居たということもこれも風の噂で聞きました。改二にもなっていないですし、改二になっているのかも分かりません。ですので、判断が難しいです。ですが、陽動で出撃する先は正面海域です。幾ら低練度の駆逐艦とはいえ、轟沈するなんて考えられません。ましてや万全な状態ですし。

「お願いしますよ」

「はい」

そんなことを言うと、扉が開きました。

どうやら赤城さんが帰ってきたみたいです。

私の顔を見るなり、赤城さんはすぐに私の対面に座りました。

「ましろさん、いらっしやい」

「お邪魔しています。それで、赤城さん」

「分かっていますよ」

そう言った赤城さんは袖を揺らしました。袖からは金属の擦れる音、紅くんから貰ったと言っていた懐中時計の音がしました。

「奪還作戦の詳細に少し変更がありました。そして今回の最終にしようと思います」

「ということは遂に……」

「ええ。始めますよ」

私はそう言つて変更点だけを伝えます。赤城さんはどうやら、前に話したことを覚えていたみたいです。ですので、変更点だけでいいと言つてくれました。

「今回の作戦。まだ武下さんに訊いてはいいませんが、『血獵犬』を使わないことにしました」

『血獵犬』を、ですか。ですが、そうしたら情報収集の手段が無くなりますよ?」

「いいえ。酒保の従業員から特殊部隊出身者を使わせてもらうように、あちらの責任者に掛けあつてきました。そしたら4人の派遣が決まりました」

「成る程……。『血獵犬』が使えないということは盲点でした。確か……『鎮守府の対外的手段を一時的に失う』とか……」

「はい」

私は手元に少しだけのメモを持ってきていましたので、それと照らし合わせながら話します。

『獵犬』が使えるか分かりませんが、そう大人数いるという訳でもありません。ですので10人以上20人以下が捻出出来るのでしたら、本作戦には問題ないかと思われまます」

私はそう言つてメモから目を上げました。

「赤城さんはこれまでの作戦内容に疑問などはございせんか?」

私はそう訊くと、少し黙りこんで考え始めます。

数分経つたころ、赤城さんは顔を上げて私に返事をしました。

「問題ないと思います」

「そうですか」

赤城さんからのOKが出ました。次は武下さんに話しに行かなければなりませんね。

そう思つた矢先、赤城さんからあることが伝えられました。

「陽動に出る艦隊は鈴谷さん、時雨さん、夕立さん、加賀さん、金剛さん、叢雲さんで決定しました。全員に今回の話と、ましろさんについ

て話しましたが良かったですか？」

「ええ。いいですよ。では、行つてきますね」

私はそのまま立ち上がります。

赤城さん曰く、陽動艦隊には私の素性を話したとのことでした。そうでもしなければ、この作戦に出てもらえなかったでしょうからね。

そして、退出際にあることも言われました。

『地下司令室も作戦発動時に使います。そこでましろさんは私と共に指揮を執ってもらいますからね』

とのことでした。

私は赤城さんたちの部屋を出て、その足で警備棟に向かいます。

――

――

警備棟に着き、私は武下さんのところへ向かいました。

どうやらそこまで忙しそうにしてないようでしたので、すぐに話しに入ります。

「奪還作戦の件で、修正が終わりましたので確認に」

「はい」

武下さんはソファアーのところに私を誘導して、部屋に鍵を掛けます。この作戦は外部に漏れたら問題になりますからね。対内的にも対外的にも。

私の目の前に座った武下さんに修正案を話し、『獵犬』を動かせるかを問います。返事はすぐに帰つて来ました。

『『獵犬』でしたら……。ですが動かせるのは100人以下ですよ？』

「上等です」

私の考えていた人数の遥かに多い人数が動かせるということですので、こちらとしては万々歳です。

「ですが、酒保を使うんですか……。盲点でしたよ」

「それは赤城さんも仰ってました。情報収集に時間が掛かると思われますので、今すぐにでも始めた方が良くと思うんです」

私はそう言つて、ポケットにメモを押し込みました。

これからは見なくても話せる内容ですからね。

私の提案に、武下さんは少し考えます。そして、あることを私に伝えました。

「今日の消灯後、該当者を集めましょう。場所は……そうですね……」

武下さんは考えます。

多分、集まるのなら、誰にも見られないところが良いに決まっています。

「補給物資を出し入れしている門は分かりますか？」

「ええ」

「ではその近くにある小屋にしましょう。昔、門兵の詰所として使っていたところです」

「分かりました」

何となくですが、位置は分かります。時間も消灯後ということだったので、時刻にして午後10時過ぎといったところでしょうか。

何も問題ありませんでしたので、私は了承します。

「では、他の該当者にも伝えて下さい。その時に全体で話を通しましょう。それと『猟犬』の選出はこちらでします。人数はこちらで決めてもよろしいですよね？」

「はい。構いません」

「では後ほど」

決まってしまったので、もう武下さんには用がありません。

私は部屋を退出し、寮に向かいます。

少し部屋で休んでから、夜にこつそり抜け出しましょう。それに多分、部屋にはまだ酒保の人たちがいると思います。その人たちにも伝えて、後で顔を出すように言わなければなりません。

第31話 『紅提督』という存在

消灯後、私は寮から静かに出て行きました。向かうのは、門です。普段は補給部隊が出入りしているところですので、艦娘は寄り付きません。暗いですし。

寮を出たのは午後10時過ぎです。そこから歩いて向かいます。

消灯時間ではありませんが、警戒して隠れながら歩くものだと普通は考えます。ですが、その必要はありません。横須賀鎮守府はそういった決まり事などがかなり重要視されているらしく、お手洗いなどの緊急時以外では絶対に起きないそうです。朝は結構早く起きるらしいですけどね。

ですので、私は街灯が当たる場所も普通に歩きます。何も無いですからね。

数分歩いていると、目的の門に着きました。そこから周りを見渡して指定された小屋を捜します。

キョロキョロしていると、道の脇にそれらしいものがありましたので、近づいて扉を開けました。

「ましろさんですか。こんばんは」

中を見ると、もう赤城さんたち艦娘がいました。あと武下さんも。

酒保の従業員がまだみたいですけど、どうしたんでしょう。

「全員ではないようですが」

「ええ。酒保の従業員たちは到着が遅れているようですね。先ほど遅れる趣旨のメールがありましたので」

そうやって武下さんは、私に携帯電話の画面を見せました。

確かに、文面的には遅れることが書かれています。どうやら出てこないみたいですね。

「いえ、始めましょう。彼女たちの任務は伝えてあります。実働部隊は自分の任務のみ、知っていれば問題ないですからね」

私はそう言い放って、始めると周りに宣言します。

「私は天色 ましろです。今回の奪還作戦に於いて作戦立案及び指揮を行います。これより、紅奪還作戦『紅葉狩り』の作戦要項を伝えま

す」

――
――
――

集会は日を跨ぐまでには終わりました。遅れていた酒保の従業員も30分遅刻で到着しました。皆、作戦には異存は無く、再び修正する必要は無くなりました。

街灯も消されてしまい、真つ暗な道を歩きます。月明かりが私の帰る道を少し照らしてくれます。

暗闇の中で、私は思いを巡らせます。

この世界、紅くんが呼び出された艦これの世界は分からないことが多いです。人の感情なども入ってるので、正確には判断できてないこともあります。

紅くん関連の話は、誰に訊いても情報が手に入りますが、その度に驚かされます。これだけの大所帯を運営していたことや、『柴壁』や酒保の人たちからの絶大な信頼。話を聞く限りだと、私でも足の竦むような出来事を体験し、乗り越えてきているんです。

それにとんでもない決断を迫られたともありました。

これは定かではなく、小耳に挟んだ話で、アメリカとのコンタクトの時のことです。

最初の接触は、どうやら横須賀鎮守府じゃないところだったらしいです。そこから外交官などのやりとりをしていたそうです。これを聞くと、戦前よりもつと前の話のように感じますね。

その際、ある使節が横須賀鎮守府に訪れたそうです。前置きで、深海棲艦は世界各地に出没したらしく、現行兵器はあまり歯の立たない相手だそうで、妖精さんが製造した兵器でないと通用しないらしいです。アメリカには妖精さんがいないらしく、深海棲艦の駆逐艦を1隻鎮めるのに、現行艦10隻を失うそうです。

そんなアメリカは、日本皇国が第二次世界大戦中の軍艦を運用していることに気付き、保管されていた戦艦を使用可能状態に復活させたそうなんです。それを自慢にし横須賀に来航した時のことです。

どうやらアメリカ軍の上層部は、日本皇国の戦闘力を奪取若しくは情報の回収を目論んでいたらしく、横須賀鎮守府に特殊部隊を放ったそうです。

それに察知していた門兵は紅くんはそのことを伝え、“迎撃班”を編成。迎撃に至り、3／4を拿捕、1／4を射殺したそうです。これも紅くんが決断したことだと。

本来なら、全員拿捕の予定だったそうですが、気付かれてしまい、やむなく射殺に至ったと。射殺の際に、紅くんに交戦許可を求めて、許可が降りてから銃撃戦になった流れです。

これだけ訊いても、“射殺”なんて決断をしなければならぬなんて、私なら絶対出来ません。

アメリカ軍特殊部隊の射殺もそうですが、なにより一番大きな謎は紅くんの扱いです。

人間として目の前に立っているにも関わらず、モノ扱いをされていたということ。初めて聞いた時は取り乱しましたが、反芻してみると謎は深まるばかりです。

艦娘の言い分は、ある程度理解出来るんです。それまでは紙という有機物で言葉を発しないモノが司令していたというのなら、その紙に書いてある司令を出している紅くんも紙と同様に見てしまう、刷り込みなどのそういった類のものだと考えれば、鳥によく見られるような卵から孵ったばかりの雛が最初に見た生物を親と認識するものと同系統のものだと判断できるんです。

ですが、他の人間たちはどうでしょう。刷り込みなんてものもありませんから、そうやって“仕方のない”こととして処理も出来ません。だとしたら、紅くんを異世界人として自分たちとは違う、異邦人であると無意識に線引をしていたんでしょう。

だから、武下さんから訊いたように、役職名の“提督”と呼び、個人の“天色 紅”とは呼ばなかったのだと考えることができます。

訊いているだけでも気分の悪くなることばかりです。

紅くんのこの世界で経験した出来事というのは、苦しいものばかりだったように、改めて思います。

そんな中で紅くんを失い、約1ヶ月後に来た私には動揺したことでしよう。紅くんと同じように、異世界から来た異邦人な訳ですからね。

改めて、私がこの世界に来た時から今までのことを振り返ると、心底、本名を名乗らなくて良かったと思います。

今でも思うんです。心を閉ざしていた艦娘たちに、“私は紅くんの姉だ”なんて言うことになりませんからね。傷口に塩を塗るようなものです。『提督への執着』という紅くんに対する過剰反応の影響で心を閉ざしてしまっている艦娘にとつて、私そのものの存在は塩そのものですから。

この世界で一番の謎は、紅くんが言っていたという“イレギュラー”というものです。

それ自体が使われていた対象は様々あるらしいです。艦載機の実験や、滑走路の運用、新戦術、艦隊運用法、新型砲弾……。その話は必ずといっていい程に、深海棲艦に収束するんです。

そしてその“イレギュラー”に気付くのが遅いと、必ずこちらに大損害があるといえます。例として挙げるのなら、鎮守府空襲でしょう。どの“イレギュラー”か分かりませんが、时期的に考えると新戦術を使い始めた頃だと言われています。

何が原因で“イレギュラー”になり、どのように返ってくるのかというのは分かっています。ですが、どういう原理になっているか、物の根幹が分からないんです。ですから、全て憶測の上に成り立っていて、それが今のところ当たっているだけのようです。

本当はどうなっているのか、どういう仕組みになっているのかが全く分からない状態で、紅くんも結局結論を出すことが出来なかつたらしいです。そんな中で、ひとつ、分かっていることがあるらしいんです。

“この世界には何らかの“力”が働いていて、それが作用している

▽

そう断言しないと、“イレギュラー”の事象は説明が付かないそう

です。

—————
—————
|

気怠げに身体を起こし、身支度を整えてから部屋を出ます。

手櫛で髪を直しながら歩いていると、沖江さんに鉢会いました。

「おはようございます」

「おはようございます、ましろさん」

そう言つて、沖江さんは私の横に付きます。

「……本当にましろさんの癖っ毛が羨ましいですよ」

「そうですか？ パーマも掛からない、ワックスも意味のない髪ですけどね……」

そう言いながら、髪が整つたのを横目に映るガラス越しの自分を見て歩きます。

「確かに、カール出来なかったりするのは少し残念ではありますが、ストレートですよ」

「そうですね……」

このやりとりはどこに居てもやっています。小学生の時から就職してまでも。

ですけど、もうそれは諦めました。癖っ毛なら仕方ないですし、どうあがいても治りませんからね。

「それはそうと、噂になっているんですが」

そう言つて切り出した沖江さんの話は、私にとってとても重要なことでした。

「今朝、『猟犬』の小隊長に招集が掛かったみたいです。侵入者騒ぎの後だというのに、大変ですよね」

「そうなんですか？」

「そうなんですよ！ しかも『猟犬』って、まだ侵入者の炙り出しで忙しいはずですし……。それに、小隊長は現場指揮をしているはずですから、不眠不休ですよ！ まあ、私のような『番犬』は無いんですけどね。嬉しいのやら悲しいのか分かりませんよ」

沖江さんはそう話してくれます。なんだかんだ言っつて、沖江さんとは友人みたいな関係になっていきますからね。適当なことを私に話してください。

それと同時に、沖江さんはこうやって無意識でしょうけど、私に情報をもたらしてくれます。ですが、その情報が定かなのか分からないので、逐一実証していますけどね。ですが、今回の情報は実証する必要があるません。なぜ、『猟犬』が呼ばれたかなんて分かっていますからね。当事者というか、その核心にいるのは私ですからね。

「それはそうと、ましろさん」

「はい？」

「無期限有給、なんて本当によく取れましたよね。あんなサラリーマンや公務員、全国の社会人が絶対取れない有給ですよ。どんなチート使ったんですか」

まあ、私は有給使うくらいなら、小銃握りしめてここを守る方が良いんですけどね、と沖江さんはその後が続けます。

『柴壁』に所属している人間の全員が、口を揃えて同じようなことを言いますね。これも、武下さんの仰っていた『彼を絶対に殺させてはならない。この身を引き換えにしても』を同義に置き換えた、『鎮守府に侵入者を入れさせてはならない。この身に引き換えても』みたいなものでしょう。

紅くんが居たここを、紅くん至上主義な『柴壁』が余所者に汚されることを容認するとは思えませんからね。

「紅くん絡みで少し……」

「成る程……。流石、紅提督のお姉様」

笑って沖江さんはそう言いますが、多分内心はとても苦しんでいると思います。

これまでに、私の本名を明かした人や艦娘は皆、腹を切つて死ぬと言つて聞きませんでしたからね。

きつと沖江さんは、仇が目の前にいるのに我慢をしているのではないかと、と私が考えているのではないかと考えていると思います。

普通に考えたらそうですね。暗殺された紅くんを探しに来た私

は、暗殺されたと聞いてもここに居ますから。

「ですけど、『柴壁』に籍を置いている以上、横須賀鎮守府に奉仕しなければいけませんよ?」

その言葉に私は何も答えられませんでした。

理由なんてありません。何に奉仕するのか、何のために奉仕するのか……私は理解しているつもりです。

「そうそう。この前、デモ隊を抑えていた『番犬』に聞いたんですけどね」

少し暗い雰囲気になったからでしょう。沖江さんは話を逸しました。

「どうやって知ったんでしょね。私たちがどう分けられているか、とか。誹謗中傷に『雌犬』とか『ビッチ』とかあつたらしいですよ。笑っちゃいますよね。私ら女ならともかく、あのバリケードは全員男でしたから」

抑えめに笑う沖江さんは、楽しそうに話します。

私もその場に居たので知ってますが、確かにそれは思いました。ですが、散々笑った沖江さんはあることを教えてくれました。

「あはは……はあ……。ごめんなさいね。思い出したら笑っちゃって……」

「いいえ」

「ふふっ……でも、まあ……。的を得ているんですよ。『私たち『柴壁』は紅提督のために尽くす。紅提督のためなら、自分の命も厭わない』ですからね。こんなの聞いたら、外の人たち（鎮守府の外の人たち）は多分、『飼いならされた犬だな』って思うでしょうね。私たちが犬で、ご主人様は紅提督です」

沖江さんは笑いながらそう言います。

確かに、考えようによつてはそう考えてしまうのも普通ですね。それに、この世界に来てからというものの、この鎮守府の艦娘と人間、双方が紅くんに「懐きすぎ」な気もしなくもないです。そりやもう、「犬」と「ご主人様」という関係に見えてもおおかしくなくらいです。「ねえ、ましろさん」

「何ですか？」

「紅提督のこと、“ご主人様”って呼んでもいいですか？確か、艦娘の漣さんも紅提督のことを“ご主人様”って呼んでましたよね？」

「私に訊かないでくださいよ……」

そんな風に話しながら歩きます。

沖江さんは知らないんです。私が、私たちがやろうとしていることを。もしかしたら、紅くんが生きているかもしれないことを。

「今度、犬耳としっぽとチョーカー買ってきましようかねー」

「それ、犬のコスプレですよ。BDU着た軍人がそれしてたら、痛いなんのですよ？」

「そうですかね？ まあ、男性陣にやらせたら痛いのを通り越しますよね」

気付けば食堂に着いていて、私と沖江さんは食券を取って朝食を食べ始めます。

食べ始めてからも、談笑は続きます。周りに座って食べる人は皆知っている人で、もつと言えばこの場にいるであろう人たちは全員に面識があります。皆、私と沖江さんの話を聞いて笑ったりだとか、変な野次を飛ばしたりする人もいるくらいには仲良くなつたつもりです。

きっと私が紅くんの姉だから仲良くなっておいて損はないだろうとか、そんなことを考えているのかもしれない。ですが、そんな下心は隠しているのか、はたまたそれはないのか分かりません。ギスギスしている職場よりも何億倍もいいですからね。

そんな裏腹に、私は罪悪感に囚われていました。

もしかしたら、私の立案した奪還作戦で、『獵犬』の中で死傷者が出るかもしれないと思うと。作戦の中での最終段階。軍病院に乗り込み、紅くんを連れ出す最中、軍病院なので軍がいるに違いありません。止めるために銃撃されることだって想定内です。その最中、撃たれて死ぬかもしれないんです。

私の座っている机の左斜め前に座っている人は『獵犬』所属です。選抜された『獵犬』の小隊にいるのかもしれないんです。

そんなことを考えていると、心が蝕まれるような気持ちになります。ですが、私はそれを表に出さないよう、周りに察知されないように振る舞います。

終焉の章 (マルチエンディング その1)

第32話 『紅葉狩り』①

朝食を摂り終えた私は、独りで外に出て『血獵犬』を見送り、補給部隊しか使わない門の前に来ています。

この場には、私と武下さん。赤城さんと酒保の従業員で、今回の作戦の初動に征く人たちしかいません。

酒保の従業員をこれからは、『灰犬』と呼び、紅くんが收容されている軍病院の特定。施設の構造などの情報を集めに行きます。BDU姿だと怪しまれるので、女性らしい格好をして、身体には携帯火器を忍ばせています。

人数の少ない見送りに寂しさを感じつつ、私は『灰犬』に声を掛けます。

「何としても、紅くんが收容されている病院を突き止めて下さい」

「はい」

代表、今の小隊長が私に答えました。

「では。お願いしますね」

「はッ!! 行つて参りますー!」

そう言つて覇気のある返事のあと、振り返り歩き始めた『灰犬』の背中を私は見つめました。この作戦も全ては彼女たちの情報が頼りです。

もし情報収集に失敗したり、万が一バレて捕まるようなことがあれば作戦は再起不能になります。

どうか成功することを祈りながら見えなくなるまで、私は門の向こう側を見つめました。

――

――

――

見送った私たちは、そのままあるところに入りました。

そこは地下司令部で、横須賀鎮守府の指揮所に当たります。どうや

ら地上施設が無くても、鎮守府として活動が出来るようですが、紅くんはここを非常時にしか使わなかったそうですね。基本的には執務室からか、自分が鎮守府内を歩き回っていたらしいです。

今回は無線機を用いてやりとりをするとのことでしたので、作戦立案者である私がすぐに緊急時に対応出来るようにと、地下司令部に入ることになったんです。武下さんは『よっぽどのがなければ、定時連絡を貰うだけです』と言ってました。

「こちらが通信妖精です。他にも役職のある妖精がいますが、基本的に通信妖精とのやりとりが多くなります」

「そうですか。……よろしくお願いします」

「よろしくお願いします」

手のひらに乗ってしまうのではないかというサイズの妖精さんは、私に向かって敬礼をして席に戻って行きました。

「さて……出て行ってから30分程経っています。情報収集を始めたころでしょう」

武下さんはそう言って、用意されていたであろうパイプ椅子に腰掛けました。

束の間の休憩です。

『灰犬』には何の情報もなしに、手がかりから探しているでしょうから、短くても1週間は掛かりますよ。最も、横須賀周辺ではないところにいるんですしたら話は別ですが……」

「そうなんですよね……。コチラ側は情報が不足しすぎています。そういうことなので、赤城さん！」

私は赤城さん呼びます。艦娘で今回の作戦に関係のある中で、長時間姿を消していても問題のない艦娘である赤城さんは、私の呼び掛けに応え、通信妖精のところを歩いて行きました。

ちなみにこの場に居る艦娘はもう1人います。鈴谷さんです。こちらは金剛さんと交代制らしいですけどね。

「通信妖精さん。一般電話回線って何処ですか？」

「それならあちらに」

通信妖精さんに話し掛けた赤城さんは、一般電話回線とかいう単語

を発して、普通の机に置かれていた固定電話の受話器を持ち上げました。

そしてボタンを何回か押して、受話器を耳に当てます。

「……横須賀鎮守府の赤城です。新瑞さんをお願いできますか？」

そうです。赤城さんは最初の偵察、『灰犬』が出たのと同時に、再度安否を確認するんです。その返答次第で、私がこの部屋から出て行くかこのまま居座るかが決まります。

私の居るところからは、電話越しの声は聞こえません。

「あ、新瑞さん。横須賀鎮守府の赤城です」

「ええ。要件はですね……紅提督の容体か安否をつ」

「それ、この前お聞きした時も同じことを応えてましたよね？ 『私でも分からない。掛けあつてみたが、私にも教えてもらえないんだ』つて……」

「……何ですか？ もちろんですよ！ いつまで経っても紅提督の安否どころか容体も教えていただけません！ 確かに軍病院の方が施設もいいでしょうけど、連れて行った方は、横須賀鎮守府の長、国防の要なんですよっ！ 私たちにとつてはとても大切な人なんですよっ……。貴方たちも散々『救国の英雄』だとか持ち上げるだけ持ち上げて、自分たちのしていることは棚に上げるんですかっ?!」

『それは……』つてねえ！ だったら前に私がこうやって連絡を入れてから期間が空いてるんですから、そのうちに調べるとかしたらどうなんですかっ!! 私たちは貴方たちの作った『檻』の中からは出れないですから、調べることも出来なんですよっ!!」

最初は落ち着いた雰囲気でした電話をしていた赤城さんですが、後半はヒートアップしてしまっているようです。声を荒げて怒っているという風には見えませんが、これまでに見てきた赤城さんからは、まるで想像も出来ないような姿です。

「もう良いですよっ!! 総督に掛けますからっ!! 失礼しますっ!!」

少し乱暴に受話器を置いた赤城さんは、またボタンを押して受話器を耳に当てました。

「総督ですか？ 横須賀鎮守府の赤城です」

「はい。ご無沙汰しています。……それで要件はですね、紅提督の容体が安否をお教えいただきたく……」

「はい。4ヶ月前にも新瑞さんに聞いてみたんですが……。……ええ」

「そうですよ？　新瑞さんは曖昧なことしか言いませんでしたからね……。それで総督なら、と思いまして……」

「はい……。はい……」

「……。それですと、新瑞さんと仰ってることが同じですよ？　私たちは提督の容体若しくは安否が知りたいだけです」

「なぜ皆さんはぐらかすんですか？　ただ『生きている』『死んでいる』『元気』『危篤』そう仰って下されば良いんですよ？」

「……。総督までもが、新瑞さんと同じことを仰るんですか？　……。もう一度伺います。紅提督の容体若しくは安否を教えてくださいませんか？」

「そうですか。……。はい。失礼します」

どうやら電話が終わったようです。

今相手をしていたのは、赤城さんは電話口で『総督』と仰っていました。そもそも『新瑞』という人物から私は知らないです。

私は微動だにせずにいると、鈴谷さんが私に近づいてきました。

「新瑞って人は、大本営海軍部長官。海軍のトップのことね。それで総督って人は、大本営総督。つまり、日本皇国の陸海空軍の中で2番目に偉い人ね。1番はもちろん天皇陛下」

「あ、そうなんですか。わざわざありがとうございます」

「いいよ。それでね、多分聞いたと思うけど、日本皇国って国名から察してくれると有り難いんだけど、天皇制が復活してるんだ。だから今、この国で1番偉いのは天皇陛下」

鈴谷さんは赤城さんを見ながら私に教えてくれます。

そうしていると赤城さんはこっちに帰ってきました。

「ダメです。教えて頂けませんでした」

結果は不可。作戦続行です。

私はすぐに通信妖精に伝えます。

「作戦続行です」

「分かりました。撤退命令は棄却します」

何の棄却かというと、『灰犬』の撤退命令です。

赤城さんによる確認が出来なかった時、棄却されるものです。もしも確認が出来たなら、生死問わずに取れたのなら、撤退命令を出して作戦終了です。

こんな面倒な手を入れたのは、時間短縮のためです。

私は少しため息を吐いて首を動かします。

そんな私に赤城さんは話しかけてきました。

「ここまででは想定通りですよ？ 大本営が以前と同じ対応をすることは」

「ええ。だからこそその『紅葉狩り』です。教えてもらえないのなら、自ら知りに行くものです」

私はそう言って用意されていた椅子に座りました。パイプ椅子がギシツと音を立てます。

私の回りにはパイプ椅子が4つ用意されています。私と武下さん、赤城さん、鈴谷さんのものです。

ここに私たちが居座ることが前提の様ですね。

用意したのは妖精さんたちらしいです。よく分かっています。

「これで『灰犬』がどれだけ正確な情報を持って帰ってくるか、ですね」「ええ。誤ったものですとそこで作戦はおじゃんです」

私と武下さんはそんな話をしますが、一方で鈴谷さんがあることを言い出しました。

「ねえ、ましろさん」

「何ですか？」

「私たちは強行的な手段を取ることができると、念頭に置いておいてね」

いつもの調子でそんなことを言います。

一方で、私の心臓が跳ね上がりました。強行的な手段というと、多分ですが『提督への執着』を利用したものでしょうね。

「いつぞや聞いた話、『日本皇国は紅くに生かされている』というこ

とでしよう。

日本皇国民全員を人質に問いただすんでしようね。『紅提督の容体は？ 安否は？』と。そうすれば日本皇国政府並びに大本営、天皇陛下も真実を口にするということですよ。その一方で、横須賀鎮守府の艦娘はその手段を好んで使おうとはしないでしょう。話し合いや戦略で解決しようとするはずですよ。紅くんがそうしてきたと言っていましたからね。紅くんをリスペクトしているというのなら、その手段を取らない方がおかしいくらいですよ。

ですが、それを口にしたということは“そういうこと”“なんでしやうね”。

一向に口を開かない大本営と、紅くんがどうなったかだけが知りたいたい横須賀鎮守府。何か、大本営は隠しているんでしょうね。状況から察するに、紅くんには何かあったか。

良くて記憶喪失や、身体機能の麻痺、欠損……。悪くて“死亡”。あくまで、戦死扱いではないでしょう。なぜなら異邦人ですからね。私だってどんな扱いかわかりません。『柴壁』に居る以上、横須賀鎮守府が守ってくれることは確かですけどね。

「それは、紅くんが嫌がることですよね？」

「もちろん」

私は確認のために訊きました。本来なら訊く必要はありませんからね。

「あーあ。少なくとも1週間は暇なんだあ……。まあ、今までもそうだったけどさ」

鈴谷さんはそう言って話を逸しました。

何か考えあつての言動でしやうね。

「仕方ないですよ。本格的に動けるのは『灰犬』が帰って来てからですよ」

「分かってるよお。……ん？ そろそろ金剛さんと交代の時間だよ。じゃあ、鈴谷はこの前の侵入者を探しに行ってくるねー」

何かの拍子に思い出したんでしょう。鈴谷さんは急に立ち上がって去って行きました。

金剛さんとは交代でここに居座ると言っていましたからね。

私は金剛さんと顔を合わせるのが怖いです。

何故なら、ここに来て間もない時、会った人や艦娘には偽名を名乗っていた時、金剛さんはそんな私に色々世話焼いてくれました。といつても、モーニングコールや私のやっていることの手伝いくらいですけど。

金剛さんの中で、もしかしたら私のことを気付いていたのかもしれないと思うと、とてつもなく怖くなります。何を言われる、何をされるかじやありません。ここに入ってきて、私の顔を見た金剛さんの表情を見るのが怖いんです。

私は肩をすくめました。何れ金剛さんはここにやってきます。それが笑顔なのか、別の表情なのか……。ただ何もせずにそれを待っていることは、ただただ怖いんです。

第33話 『紅葉狩り』②

鈴谷さんが出て行ってから数分後、こちらに歩いてくる足音が聞こえ始めます。

普段、ここに入るような艦娘や『柴壁』は居ないそうなので、こちらに来ているのは侵入者か金剛さんということになります。

どちらにせよ、“怖い”ことになりありません。コツコツと音を立てて近づいてくるそれは、廊下から私たちの視界に入るところに出てきました。

白くて長い袖が見えた瞬間、金剛さんだということが分かります。私たちが座つているところを見つけると、ここに向かって歩いてきました。

地下司令部は照明があまり無く、操作している画面が照明の反射で誤操作してしまうのを防ぐために無くされているみたいです。

私たちの周辺には少しだけ照明がありますが、その白い長い袖が止まり、照明がその顔を映しました。

「金剛デース。鈴谷の交代で来マシタ」

金剛さんはそう言います。

金剛さんの話し方というか、声の調子がおかしいです。気の沈んだ雰囲気を感じました。何かあったんでしょうか。

「こちらの椅子に……」

私はそう言つて、椅子を指す。金剛さんはその椅子に丁寧に座り、手を膝の上に起きました。

そして口を開いたんです。

「葬……。イイエ、ましろ」

やはり、陽動艦隊に選ばれている艦娘の全員には知らされているみたいです。確かに、昨日赤城さんの部屋を訪れた時も、加賀さんが取り乱してはいませんでしたね。きっと、聞かされてから時間が経っていたからでしょう。心の中で整理がついていたんだと重みます。

そう考えると、金剛さんも加賀さんと同じタイミングで聞いている

筈です。そうしたなら、きつと何か私に対してアクションがある筈です。

それが私にはとても怖いです。何を言われるのか……。

考えられるのは、紅くんを守れなかった謝罪。そして自らの死を持って、その罪を償うという言葉。それだけでした。罪を償うかは個人差があります。

金剛さんの立ち位置を考えられるのなら、彼女の取るアクションは謝罪と贖罪。“気付いた”艦娘の一員であった金剛さんなら、それまでに例外的ない行動は現状あり得ません。きつと、あの袖から何かを出す筈です。

私は注視します。金剛さんの袖、そして目を。

ならなぜ、私は金剛さんが“怖い”と感じたんでしようか。理由は1つです。横須賀鎮守府で紅くん絡みの騒動には全て、金剛さんが中心に居たんです。そして、1番紅くんのことに“気付いていた”と。

—————

—————

—————

消灯後、小屋に集まって話した後のことです。

赤城さんと私、武下さんは皆を返した後に代表として少し話をしました。その時、小屋にまだ残っていた鈴谷さんが私に話しかけてきました。

「ねえ、ましろさん」

「何ですか？」

作戦のことでは無いことは分かっています。もし、作戦のことならさっきの時間中に発言する筈です。そうしないと、全体にその情報がリーク出来ませんからね。

「陽動艦隊の招集の時に、ましろさんの本名を知らない人に教えたんだけどね」

そう話を切り出してきたんです。

そうでもしなければ作戦に参加するとは思えませんからね。それに私も覚悟していたことです。もし、そのことが引き金で何か起きた

としても、仕方のないことだと言いついて聞かせるように。

「やっぱり皆、取り乱してたよ……。それもその筈だよね。“気付いていた”艦娘の一員しか集めていないし、何より一番紅提督の“あの話”との付き合いが長いからねえ」

鈴谷さんの言う“あの話”とは、紅くんがモノとして見られていたことなどの話です。

当初は責任や孤独感、夢などを失ったとかで動いていた集団です。その集団が動いていた時期、隣人が密告し合い、内偵がうろついていた時期です。全員同じ所属の艦娘であるにも関わらずそんなことをしていた時期にあり、その時期から“気付いていた”集団は紅くんのために動いていた、と聞きました。

その“気付いていた”艦娘の一員だったその集団から、今回の陽動に動く艦娘が選ばれているんです。最も、この奪還作戦に係のある艦娘全員がその“気付いていた”艦娘しかいないんですけどね。

その話なら、聞かずともどういう内容かは分かります。きつと、落ち着かせるのに色々言ってしまったって言うんでしょう。私はそう決めつけていました。ですが違ったんです。

「だけどね、金剛さんだけ……金剛さんだけが何も口にしないどころか、心底悲しそうな顔や苦しい顔、絶望……そんな顔をしなかったんだ」

鈴谷さんからは、私の想像を遥か斜め上をいく言葉が発せられた。

私は一瞬思考が奪われましたが、すぐに戻って訊きます。

「それは……」

「あり得ないですね……」

私は言いかけた時、赤城さんが割って入ってきました。

鈴谷さんに“気付いていた”艦娘から選ぶことも聞いていましたし、許可を出したのも赤城さんです。

「鈴谷さん」

「ん？ 何？」

赤城さんは突然、鈴谷さんに声を掛けます。

「鈴谷さんは、ましろさんの本名を聞いた時、どうしました？」

「えつと……『出撃許可証』と『自己解体申請書』を渡して、艦装を身に纏ったかな？」

「私は土下座をしましたよ。額から血が出るくらいに頭を床に打ち付けました。それに泣いちゃいましたよ……」

鈴谷さんは少し驚いた様子を見せました。多分、赤城さんは普段はそういうことをしないんでしょうか。はたまた、しなくて良いように上手くこなしていたんでしょう。

「あの3人」の1人の筈なのに、鈴谷はそれがおかしいと思う「確かにおかしいですね」

私を挟んだ2人がそう話します。挟まれている私には何がなんだか分かりませんけどね。

そんな2人が、私にあることを教えてくれました。

「金剛さん。もしかしたら、私たちとは別の何かを考えているのかもしれませんね」

「同感。……一番考えられるのは、『ましろさんを紅提督の姉と認めていない』こと。でも、この作戦に参加した時点で、それは無いと思うんだけど……」

2人はそう言いました。

『別のことを考えている』か、『私を紅くんの姉と認めていない』。後者なら分からなくない話です。私は口頭で説明しただけで、実際に証拠などを出したのは1回だけです。

時雨さんの時だけでした。外の人間なら知らないであろうこと、紅くんが艦娘に話していたのなら解ることを話したんです。賭けて出たことがいい方向に傾いた1回でした。

ですけど、あの時に時雨さんがそういう要求をしたということは、知っているということの裏付けになりますからね。

『私を紅くんの姉と認めていない』というのなら、私は一体どういう風に認識されているんでしょうか。

話を聞く限りだと、『私を紅くんの姉と認めていない』のなら、鎮守府に入った時点で殺されていたでしょう。そうすると話が矛盾してきてしまいます。認めていないのに、認めざるをえない立ち位置の人

間だと認識した、ということになります。

「やはり、金剛さんは分かりませんね……」

「そうだねえ」

2人は揃って『金剛さんのことが分からない』と言いました。

決定打です。やはり、金剛さんが紅くん絡みで行動が分からない艦娘なんでしょう。

「明日から作戦が始まるし、戻りましょう。ましろさんも明日は早いですよね？」

「はい」

赤城さんに言われて、その場で解散になりました。

2人はなんとも無かったかのように帰っていきますが、私は考えが頭の中を巡ります。

ですがこれもすぐに辞めなければなりません。作戦に集中しなければなりません。作戦には参加しているんですから、金剛さんを疑って思考を逸らしてはいけませんからね。

――

――

――

「紅提督のことは、どうして教えてもらえないんですか？」

至って普通のことを訊いてきました。少し身構えたのが無駄だったみたいです。

ですけど、気は抜けません。

「色々あるとは思いますが……」

「政治的に利用されている……と、私は思いマース」

ビクツと赤城さんが震えました。私も、教えてもらえない要因としてそれは挙げています。信憑性はどうか分かりませんが、もし政治的に利用されているのなら、横須賀鎮守府にアクションがあると思います。それが無いので、多分ないだろうとは思いますが……。

「抑止力として、デモ隊を沈静化させるために……」

私が言いかけた時、金剛さんはそれを防ぐかのように続けたんです。

「抑止力という言葉を使うのはどうかと思ひマスガ、似たようなものデース。紅提督の“死”を利用して、国内の動乱を抑えこんでいるんデシヨウ」

一瞬、思考が止まりました。“死”を利用した抑止なんて聞いたことありません。

「日本皇国内は、私たち艦娘と紅提督が築き上げた仮初めの平和に継り付いているだけデス。外で起きている深海棲艦との戦争も、外の世界と決め付けて自分たちとは全く関係のないものとしているのデス」

「国内がそういう風なのは知ってますが、それがどうして……」

「そうデスネー。その仮初めの平和が崩れたのは、鎮守府が空襲された時デシヨウ。深海棲艦との戦争を間近に感じて、それまで外の世界の出来事だった戦争が本当は近くにあったことに気付かされた訳デスカラ……自らを取り巻いていた本当の世界に気付いた国民は、それを信じまいと紅提督を攻撃していたんデス」

最も、横須賀の住民は攻撃しませんでした、と金剛さんは続けました。

ここで口を挟んでも混乱するだけだと思ひ、私は口を閉じます。

「日本皇国の人間」で、今戦争をしているのなんて3ヶタいるんデシヨウカ？ 私の知っている限りでは、大本営海軍部、空軍の航空教導団くらいデス。大本営海軍部は上層部ですから、直接は戦ってませんケド」

「カウントには横須賀鎮守府の人間はいれてマセン。彼ら、武下さんたちは、日本皇国民であつて、国民ではないデスカラ」

「そんな国民の何%いるかいないかという人数しか、戦争を観ていないんデス。今の外は知りませんが、紅提督のいた頃は平和デシタ。戦争なんて文字は街にありませんデシタカラ」

「でも、この戦争はあの青年海軍将官が勝手にやっているモノで、我々国民は何も関係のないこと。外の世界の話。だから我々を巻き込むな……というのが、反戦派過激集団の言い分デス」

「それを知っている政府は、今回の紅提督の暗殺(?)を利用してんデス。軍病院に運び込まれた時点で、容体は危篤。死んでしまった、と

暗に伝えた訳です」

金剛さんは肩を竦めますが、すぐに続きを言いました。

「デスガ、今日まで続いているデモ活動は何でシヨウネ？」

確かに、今日は朝早く起きて地下司令部に来たから知らないですが、今日も外では大なり小なりデモがあつたんでしよう。先日まで行われていた、侵入者の侵入を許したデモ以外で。

それに、今日まで続いたデモ活動は一体なんだったのか……。

考えうる説は3つ。デモ集団が、金剛さんの言うことを、政府が暗に伝えていたことを理解出来なかつた。別の標的が出来た。この場合、一番考えうる標的は『柴壁』です。最後は、紅くんが死んだと分かつていても行動をしていた。

最後のは、何かしらの目的があつての行動です。艦娘なのか『柴壁』なのか。はたまた、紅くんなのか。

この中で一番考えられるのは、別の標的ですが、紅くんが居た時は、平和だと言つてました。つまり、国内は潤っていたということになります。資源や食料の供給が潤沢だったことを指しています。ですが現在は、私がここに来たときに見た通りです。街は荒廃し、軍人が対空陣地で嘆いていました。『提督はどうしたのか』と。多分ですが、国内が困窮しているんでしょう。資源と食料が共に。

それを踏まえて、この横須賀鎮守府は物資が最優先で運び込まれていくように感じます。補給部隊の到着頻度は高いですし、食事も不足が無いですから。それに、艦娘と『柴壁』の維持。今回、標的とされているのはきつと『柴壁』でしょう。それは、デモ隊の叫びから分かります。

何もかもが不足している日本皇国民は、何もかもが不足していない『柴壁』を妬んでいる、そう考えられます。

つまり、これまでとは違い、紅くんを対象としていないんです。

「行き着く答えは……何だと思いまスカ？」

金剛さんは無表情で私に問いかけました。

その表情が怖く、何も読み取れないので、私は視線を逸らして考えます。

これまで金剛さんが言った言葉を整理して、組み立てる。回答はすぐに出ました。ですが、私はこんなことを信じたくありません。信じてしまったら、私がここにいる理由も全て失うことになりました。

「ましろ？」

回答を否定しますが、否定を証明出来ずにいました。

どうあがいても答えは同じで、私が来た意味すらも無くなりつつあります。

「嫌……です」

「まし……ろ？」

「嫌っ!! こんなことっ!! 金剛さんっ!! だから、貴女だけは動揺しなかった?!!」

だから、金剛さんは私の本名を知っても動揺しなかったんです。

「憶測に過ぎないとしても、一番確率の高い答えを知っていたからっ?!! だから、それを知っていたから、私がこの世界に来た時も、名前を知った時もっ!! “知っていた”からあっ!!」

そう……。金剛さんは憶測の域は出ていない、“答え”を“知っていた”んです。

だから、何を聞いても、何をされても、どんなことが起きても、“それ以上”のことは無いから動揺しなかったんです。平静を保っていられたんです。

私はその場で倒れてしまいました。

頭がついていけなくなっただけです。信じていたことを、一瞬にして崩された訳ですからね。

第34話 『紅葉狩り』③

気付いたら私は寝かされていました。

地下司令部に居たはずなのに、今はどうやらベッドの上みたいで
す。

「気付きましたか」

ベッドの傍らには赤城さんが座っていました。

何が起こったのか、と聞く前に赤城さんから説明がなされました。

「地下司令部で金剛さんと話している時に、いきなり取り乱して気を
失ったんです。私は2人の会話からは内容を汲み取ることはあまり
出来ませんでした。何かあったんですか？」

心配そうにしている赤城さんに、私は端的ながら説明を聞いた。

起きた時点で何となく察していましたが、やはり気を失ったみたい
ですね。確かに、アレ以降の記憶はありませんし……。

「どう……だったか、忘れちゃいました」

とつさに出た言葉がそれでした。

理由なんて明白です。今ここで“あのこと”を赤城さんに教えて
どうなるんでしょう。動き出してしまった作戦は止まりません。そ
して、きつと取り戻すその時まで止まるとは思いません。そんな感じ
がしたんです。

私は頭の大部分を占めている金剛さんの意図、金剛さんが何を思っ
て作戦に望んでいるのかを表に出さない様に振る舞います。

「とりあえず、ましろさんが気を失ってから半日が経つてます。それ
までに起きたことを報告しますね」

赤城さんは袖から紙を出して広げると、それを読み上げ始めまし
た。

『灰犬』は1箇所目の軍病院に接近。情報収集を始めました。内部へ
の侵入はまだですが、内部構造の情報を入手。ただし、機密区画は分
かりませんでした。以上です」

半日でそれだけできるのなら上々ではないでしょうか。

「私が居ないことで対処できなかったことなどは？」

「ありません」

私はベッドから立ち上がり、靴を履きます。

いつまでも寝ていても仕方ないですから、すぐに地下司令部に戻ることにしたんです。

そんな私に、2人だけしかいないからこそなのか、赤城さんが訊いてきました。

「ましろさんが気を失う前に、本当に一体何に気付いたんですか？」

真剣な眼差しで私を見ながら訊いてきます。

彼女の中でも、大体の目星は付いているんでしょう。だから、確認のために私に訊いたんだと思います。

赤城さんは聞くことが怖くないんでしょうか。

私だったら絶対に嫌です。アレだけ遠回しに言っているとしても、気付いてしまえばスポンジのように理解していきます。言い回し、類語などなど。

「とてもじゃないですけど、言いたくないですね。私だって、信じた訳ではありませんし」

気を失うほどだったのに、信じてないなんて言えたものです。

どこか、私の中で分かっていたんじゃないでしょうか。言われてきたこと、聞いてきたことを総合して考えれば、そういうことに行き着くこと。そして、分かっていたからこそ、違うことを考えて誤魔化していたんです。

「そう、ですか。……無理に訊いても申し訳ありませんし、また話す気になった時にでも。じゃあ、戻りましょうか」

「ええ」

私は赤城さんの後を追って、ベッドの部屋を出ました。

出た廊下に見覚えがありませんでしたので、多分地下司令部にある施設の一部だったんでしょね。

薄暗い廊下を歩き、階段を1段も登り降りすることなく、地下司令部に到着しました。

「あ、おかえりー。ましろも倒れたって訊いたからびっくりしたよ」

その場にいたのは、武下さんと鈴谷さんでした。どうやら、交代で

金剛さんとは変わったみたいですね。

正直、私としては好都合です。今、金剛さんとは会いたくありませんからね。

「心配をお掛けして申し訳ありませんでした」

そう言つて、私は椅子に座ります。

この椅子に、どれくらい私は座ることになるんでしょうか。最低でも1ヶ月は座ることになるでしょうけど、本音を言ってしまうと、早く次の段階に入つて欲しいものです。

そんなことを考えていると、地下司令部にある艦娘がやってきました。

「失礼するね」

来たのは時雨さんでした。

一体、何の用があつて来たんでしょうか。

「時雨さん……ということとは、外で何かあつたんですね」

「うん。……外に皇国陸軍1個師団が来てる」

「っ?! 本当ですか?」

「嘘だったらここまで来て知らせないよ」

どうやら何かが起きたみたいです。時雨さんが言うには、軍の部隊が来たとか。

時雨さんが話した途端、この部屋の空気が一瞬で変わったのを考えると、良くない方みたいです。

「……目的は?」

鈴谷さんが時雨さんに訊きました。

「さあ? でもね、ナントカつて言う少将が来てるみたい。師団長だつてさ」

少し考えた赤城さんは、あることを訊きます。

「誰かを呼んでいるんですか?」

「それがね、誰を呼んだらいいのか分からないみたい」

時雨さんは困った顔をします。

なんだから、様子を聞いている限りだと、誰かを呼んで話したいんじゃないかと思えます。

「……師団ですか。編成は？」

「聞いている限りだと歩兵師団。でも分からない。独立混成師団って可能性もある。もしそうだったら厄介だね」

「そうですか。……話を聞いたのは時雨さんですか？」

「うん。僕はたまたま通りかかっただけ。正門前で当番だった憲兵さんと近くを巡回していた『柴壁』経由で僕に伝わったんだ」

「じゃあ伝令お願いします」

話がトントンと進んでいきます。何をしに来たなんて私には分かりませんが、いいことではないでしょうね。武器を持ち出したのなら。

「どちらの代表かが赴きます。何方がいいか聞いて下さい」

「分かったよ。じゃあ、行ってくるね」

「はい。お願いします」

時雨さんを見送って、すぐに赤城さんが考え始めます。多分、今後の対策でしょう。

これまでなら、紅くんが対策してきたでしょうから、自分たちだけで対処することはあまりなかったんでしょうね。

私は考えを巡らせます。

ここに来た目的はなんでしょう。交渉・攻撃・帰属……これだけ考えられますが、攻撃が一番考えられますね。帰属が一番あり得ないです。

帰属するのなら、タイミングがあるでしょう。

一度、軍を辞めた『柴壁』のメンバーと同じタイミングで来れば、流れに乗じて入れたかもしれません。彼らが軍を辞めて、その上で装備を奪取してきたというのなら、それ相応の覚悟があると見ることが出来ます。ですが、この場合は一番遠い正解です。

「武下さん。……もしかして」

「……はい。十分考えられます」

主語が無い会話が武下さんと赤城さんの間で交わされ、すぐに赤城さんが指示を出しました。

「通信妖精さんっ！ 至急、『灰犬』へ緊急通信っ！」

「はいっ！」

会話の内容と赤城さんの指示で、私はピンと来ました。情報収集に出ている『灰犬』が捕まってしまった、ということでしょう。

「横須賀鎮守府より『灰犬』。現状を報告せよ」

「繰り返す。横須賀鎮守府より『灰犬』。現状を報告せよ」

通信妖精さんのコールだけが、地下司令部に響きます。

『こちら『灰犬』。現在、1箇所目の軍病院付近の公園です』

「横須賀鎮守府より『灰犬』。全員健在ですか？」

『こちら『灰犬』。勿論です』

「横須賀鎮守府より『灰犬』。引き続き、任務を続行せよ」

『こちら『灰犬』。了解』

通信を終えた通信妖精さんが、赤城さんの方を見て頷きました。

ちなみに、通信内容は室内にスピーカーで流れるので、皆に状況が分かります。

そこで私は気になっていることがあります。

独立混成師団が何か分かりません。何かが混じってるってことは分かるんですけど、それが何で、どんな危険があるのか……。

空気に流されて、知っていることが前提で話が進んでいるので、私は聞けずにいきました。そんな時、鈴谷さんが横から小声で教えてくれました。

「ましろさんって、もしかして分からなかった？ さっきの？」

「はい……。恥ずかしながら……」

「独立混成師団ことですよ？」

私は首を縦に振りました。

「定石だと、歩兵部隊中心に機甲部隊、砲兵部隊、工兵部隊などが一緒になってる部隊のことを混成師団って言うの。その混成師団が他の部隊と連携せずに、単独で行動することができるとそれは独立混成師団って言うんだ。最も、混成師団なんて言い方しなくても、機械化歩兵、機動歩兵とかがって言うこともあるけどね」

はははっと笑いながら鈴谷さんは教えてくれました。ですが、鈴谷

さんに悪いですが、機甲部隊つてのが分かりませんでした。

「あ、ありがとうございます」

「ううん。気にしないで」

私は勢いで、終わらせてしまいました。どこかのタイミングでそれのヒントになることを教えてもらわなければなりませんね。

そうしていると、赤城さんが次々と指示を出していきます。

「前のスクリーンに正門前の監視カメラを出して下さい」

監視カメラなんてあったんですね。まあ、当然のことでしょうけど。

私は前のスクリーンに表示された映像に目を向けます。そこには、鉄格子の門の向こう側に並んでいる兵士たちの姿が見えました。並んでいるといっても、そこまで均一かつ順序がしつかりとしている並びではありません。来た順で並んでいるんでしょう。トラックやら大きい車やら、戦車、変な戦車が並んでいます。その近くには、小銃を持った歩兵が並んでいました。

さつき鈴谷さんに教えてもらったことを思い出します。砲兵がどれか分かりませんが、機甲部隊つてのが分かりました。きっと、戦車部隊のことです。それ以外に思いつきません。

「……鈴谷さん」

「なに？」

「正門前に行ってきた下さい。やることは……分かってますよね？」

「……うん」

赤城さんはまた指示を出しました。今度は鈴谷さんです。

正門前に行けということですが、何をしに行くんでしょうか。

「すみません、武下さん。あそこにいる相手の装備の説明を願ひできますか？」

「勿論です。……見る限りだと、独立混成師団と言いたいところですが違うみたいです。装備は90式戦車、89式装甲戦闘車、99式自走砲、ハーフトラック……。機械化歩兵師団つて言った方が良さそうですね」

「戦車に自走砲に装甲車……。トラック……。トラックの中身は？」

「多分人を乗せてきたんだと思います」

「なるほど……なら、鈴谷さんに向かって正解だったのかもしれないね」

その刹那、室内と空気が揺れました。何だと思いスクリーンに目を向けると、正門の内側に粉塵が待っていました。何が起きたのか分かりません。

徐々に粉塵が晴れ、そこで何が起きたのか分かるようになります。スクリーンいっぱいに映る船がありました。ゴツゴツと無骨なその姿は、豪華な客船とは相反する存在です。

コンクリートの地面を砕き、そこに鎮座していたのは、鈴谷さんでした。艦橋からこちらに向かって手を振っています。

「吉が出るか凶が出るか……」

赤城さんはそう呟きました。

そんな赤城さんに、私は訊きます。

「どうして……鈴谷さんを？」

「勿論、攻撃されたときのためです。駆逐艦や軽巡の方がコンクリートの整備の被害は抑えられましたが、12.7cmや14cm、15.5cmでは戦車には歯が立たないでしょうからね」

つまり、場合によっては攻撃するということです。

確かに、鈴谷さんの装備は20.3cm連装砲。きつと徹甲弾を使用するでしょうから、当たればひとたまりもありません。それに、榴弾を使ったとしても、戦車は分かりませんが、他はひっくり返ってしまおうでしょうね。

第35話 『紅葉狩り』④

鈴谷さんが艤装出して数分が立ちました。鈴谷さんを見たあちらは何もアクションをしてきません。もちろん、こちらのアクションは鈴谷さんだけですけどね。

すぐに赤城さんが次の手を打ちます。

「武下さん。『猟犬』2個中隊を出して下さい。正門内側のあちらから見えないところに配備です。時雨さんは夕立さんと共に『猟犬』同様、あちらの視界に入らないところで待機です」

武下さんは通信妖精に言って、多分内線だと思われるモノからどこかに電話をしました。そして、時雨さんは地下司令部を飛び出します。夕立さんを連れて行くんでしょう。

新たに2人に指示を出した赤城さんは、次の手を考えています。ブツブツと何かを言っているのが私にも聞こえてきました。

「作戦参加している娘たちには協力をこれ以上仰ぐのは無理ですから……『提督への執着』の強い娘をつ……。いや、まだ知らない娘ばかりですから……」

艦娘であと1人使いたいということでしょうか。ですが、これ以上何に使うんでしょうか。戦車に対抗するために鈴谷さんを出しましたし、もしものための『猟犬』と時雨さんと夕立さんも出しました。

もう、打てる手は打ち尽くしたのではないんでしょうか。これ以上にやることと言ったら、相手の指揮官と話すこちら側の人間を出す以外ありません。

「広く顔の知られていて、ある程度回復している艦娘……」

回復……多分、紅くんが撃たれたことに打ち拉がれてから、現状回復している艦娘のことでしょう。

「私が出る訳にはいきませんし……」

赤城さんは何かやらかしているんでしょうか。

「出来れば、奪還作戦のことは知られたくありませんから……陽動艦隊から出したいところ……。叢雲さんは……あまり知られてません

ねえ」

うなりながら、赤城さんは考えます。

「加賀さんは……うーん……」

加賀さんに関してはノーコメントの様です。どうしてでしょう。

その後も赤城さんの格闘は続き、結局導き出した答えは、『金剛さんに頼む』でした。それに伴い、正門の脇に待機させた時雨さんに金剛さんがやっていた哨戒を変わってもらい、時雨さんが開けたところに叢雲さんが入ってもらうことになりました。

「正門に来ている軍の相手をすればいいデスカ？」

「流石、金剛さん。早いですね」

「こつちに来る時に見ましたカラ……」

金剛さんは私の目の前にまた現れました。

あの時、考えていたことをふと思い出します。そして、溢れ返り、視点が合わなくなっていくきます。必死に堪えて持ち直すと、赤城さんが私の顔を覗き込んでいました。

「どうされました？」

「いえ……大丈夫です」

「そうですね？ では、金剛さん。艦娘の代表として、あの少将さんから色々聞き出しに行ってきた下さい」

「分かったネー」

金剛さんは緊張する素振りもなく、笑顔で振り返りました。

金剛さんが少し離れたところまで行った所で、赤城さんが彼女を止めます。

「ちよつと待って下さい」

「どうしたノー？」

「ましろさんを連れて行って下さい」

「えっ？」

どういう意図でそんなことを言い出したのか、私には全く分かりませんでした。

この鎮守府に於いて、私の存在は今一番隠したい筈です。今日発動したばかりの作戦も、私が立案したものですし、私が万が一捕まっ

吐かされたら、作戦は頓挫。『灰犬』は全員捕まり、横須賀鎮守府が身動き取れなくなってしまう。

そのリスクを鑑みての言葉なんでしょうか。

「赤城。今、一番守るべきなのはましろなんデス。なぜそれを、わざわざ相手の前に出すような真似を……」

「だからですよ」

赤城さんは金剛さんに凄んで言いました。

『柴壁』の構成員は顔が割れています。もちろん、ここに来たのなら覚えてははずですよ？ そうやって来た彼らの目の前に、明らかに『柴壁』なのに見覚えのない顔が居たら……どうですか？」

「どうって……そりゃ、不信に思いマス」

「そうなんですよ。だからそこで生じた動揺を利用するんです」

「その動揺で何をするデスカ？」

「会話中の少将の出方を見ます」

赤城さんは真っ直ぐな目で金剛さんを見ます。

それに動かされたのか、金剛さんは頷きました。

「分かりマシタ。ですが、ましろに武装させてもいいデスヨネ？」

「もちろんです」

「じゃあ、ましろ。行きますヨ」

「あ、はいー」

私は少し理解の追いついていない脳を働かせながら、金剛さんの横に並びました。

赤城さんの言っていたことを整理しているんです。顔が割れていない私を使って、動揺させて情報を引き出す……なんてできるんでしょうか。

というよりも、顔が割れていない人物が居たら、その時点で警戒を強めるのが普通です。それをなぜ、相手が動揺すると考えたか……です。

いくら考えても、結局、解が出ないまま出口に着きました。そこで立ち止まった金剛さんは、私にあるものを渡してきます。

「ましろ、はい」

「あ、ありがとうございます」

金剛さんが渡してきたのは、訓練で使った拳銃です。

普通なら小銃とか渡すと思ったんですが、どうしてこれをチョイスしたんでしょうか。

「予備弾倉は2つでいいデスカ?」

「はい。問題ないです」

「動作は?」

「大丈夫です」

入っていた弾倉を抜いて遊底（スライド）を引いて、シリンダーに弾薬が入っていないことを確認します。撃鉄を落として、安全装置を掛けてから、弾倉を入れます。

「準備はいいデスカ?」

「はい」

拳銃を腰のホルスターに入れて、私と金剛さんは地下司令部を出ました。

—————

—————

—————

本部棟前のグラウンドから正門まで、私は金剛さんの横を歩いています。

彼女はずっと前を向き、偶に周りを見渡したりしながら進んでいます。多分、侵入者のことを警戒しているんでしょうね。

腰にぶら下げている拳銃がカチャカチャと音を立て、ナイフが左側に余計な重みを掛けます。ベルトにぶら下がっているので、余計に腰に負担が掛かっているんです。拳銃も同様です。拳銃は右側にぶら下がっています。予備弾倉は腰に巻いているタクティカルベルトのアタッチメントに差し込んでいます。きつちりロックされますが、走っても落ちない程度ですので、引き抜けば簡単に取れます。

タクティカルベルトから拳銃のホルスターやナイフがぶら下がっているのも、全ての装備品の重量が腰にかかっています。結構な重さですが、今では苦に思っていません。慣れてしまった、という感じで

す。

数分間、会話をしないまま正門前に到着しました。遠くからも見えていたましたが、鈴谷さんがとても大きいです。見上げていたら首が痛くなる程に大きいですし、視界に収まりきらないほど、長いです。塗装がされているのか分かりませんが、黒とグレーの中間に見えます。そして、少しだけですが煤の臭いがします。多分、エンジンでも動かしているんでしょう。

見上げていた私を見つけたんでしよう、鈴谷さんがこっちに手を振っています。叫びはしないみたいですけどね。

「サテ、ましろ」

鈴谷さんに手を振り返っていた私に、金剛さんは話しかけてきました。

「私があちらの人と話します。その間、ましろは私の傍を離れないで下サイ。そして、何か聞かれたとしても答えないこと」

「分かりました」

「じゃあ行きマス」

私は首に巻いていたフェイスマスクをずり上げ、鼻の上から顎までを隠しました。目は隠しません。

鈴谷さんの艤装の回りを歩いて、正門前に出てきました。

金剛さんを見た、正門の外にいるあちらの人たちは心底驚いた表情をしていましたが、すぐに引き締めます。

「この騒ぎ、場合によってはそれ対応の“対応”をさせていただきマス」

金剛さんの開口一番のセリフがそれでした。

何いってんだと私は思いましたが、私以外は違うようです。あちらの人たちは、それを聞いただけでたじろぎます。

そんな中、回りはBDUに見を包んでいる中で、1人だけ正装のよいうな格好をしている人が正門前に進んできました。壮年ですがたるみは無く、パットがなくても肩が浮き上がって見えます。そして、腰には軍刀をぶら下げています。もう、見るからに軍人という感じがします。

帽子を深くかぶり、眉から上は見えませんが、影からみえる目はとも鋭いです。

「それで、貴方たちは何者デスカ？」

「私たちは日本皇国……」

「それは分かってマス」

横にいて、自分に向けられてないとはいえ、凄い威圧感を金剛さんから感じます。

「……陸軍の第46機械化歩兵師団だ」

部隊名を言われてもちんぷんかんぷんですので、とりあえず流しておきますが、機械化歩兵と少将さんは言いました。

外に出るまでに、鈴谷さんが教えてくれたことを思い出します。

機械化歩兵……戦車、装甲戦闘車、自走砲で編成された、機甲部隊と砲兵部隊、歩兵部隊が混じったものです。確か。他にも独立混成どうのとか、機動歩兵とか言っていました。

ですが、今は部隊名がちゃんと分かりましたので問題ないです。

「それで、その機械化歩兵師団が押し寄せてきて、どうしたんデスカ？ 戦争デスカ？」

金剛さんはそう聞きます。なんだか、喧嘩腰のような気がしますが、どうなんでしょう。

「ここに元第三方面軍 第一連隊がいるだろう？ 彼らが持ち込んだ装備を返して欲しい」

第三方面軍 第一連隊に聞き覚えがありませんが、どうやら言い方に『柴壁』のことを指しているみたいですね。

少将さんは頭を少し傾けてそう言いました。

「確かに居マス。ですが、装備がどうのって……どういうことデスカ？」

「そのままの意味だ。ここに増援として送り込まれて以来、原隊に戻ってないそうじゃないか。その時、持ちだした装備を返して欲しいだけだ」

「フーン」

金剛さんは少将さんの話を訊くと、少し考えはじめたみたいです。

一方で、私は違うことを疑問に感じていました。

ただ、装備を返してもらいにきたのなら、どうして部隊を引き連れてきたんでしょうか。

その理由が分かりませんでした。

交渉というか、そういうことならば文章でも良いでしょうし、直接来るのなら、1人と付き添いに2人くらい連れて来れば良いものです。

絶対に何かあります。私はそう確信しました。

「なら、その後ろの機械化歩兵1個師団はどう説明しますか？」

「そ、それはだな……」

金剛さんは表情と威圧感を変えずに、少将さんに言いました。

流石に少将さんも痛いところを突かれたんでしょう、顔を歪めました。

数秒間開けて、少将さんは答えました。

「税金を使わないと困る人もいるんだ。分かってくれ」

「……違いますよね？」

流石の私でも、今の答えが苦しいことには気付きました。言うまでもなく、金剛さんもです。

少将さんが何かを隠していることに変わりはありません。それが何なのか、というのが現状でのネックになります。

本当に、この少将さんはなんの目的でここに来たんでしょうか。

「それに、税金を使う」とは、そういう意味で間違いないデスカ？」

私には到底理解出来ない駆け引きが目の前で繰り広げられています。駆け引きをしている、ということとは分かるんですけどね。どういった内容なのかは、全く分かりません。

「それで、税金を使いに来た」んデスカ？　税金を巻き上げに来

た」んデスカ？」

金剛さんの肩が強張りました。

「税金を巻き上げに来た」という意味は分かりませんが、前者は多分、最初に言った建前のことでしょうね。『装備を返して欲しい』のことです。

「さあ……どうだろう」

少将さんは姿勢を崩します。服を擦れた軍刀が音を立て、一瞬目線が移動しました。どうやら、金剛さんも軍刀を見たようです。

私は『なんて物騒なものを下げているんでしょう。人のことは言えません』とか、内心思っただけでしたが、金剛さんは違ったようです。

「……」

金剛さんがどんな表情をしたかは分かりません。ですけど、後ろに立っていてもオーラは伝わってきます。悲しんでいるというよりも、なんというか、別の感情が渦巻いているような気がしてなりません。

金剛さんの表情を見たであろう少将さんは、右手を天にかざしました。その刹那、正門の向こう側に居た兵士たちが、一斉に小銃を構え、戦車の砲塔がこちらに指向します。

「なるほど……そういうことデスカ」

金剛さんはそう言いますが、私は何一つ分かっていません。何が『そういうこと』なんでしょう。

私は混乱します。ですが、それは表面上に出さないように、じつと金剛さんの後ろで立ち尽くします。

「ましろ……」

「な、何ですか？」

「逃げて下サイ……」

「え？」

「逃げてっ!! ましろっ!!」

私は金剛さんの怒号で事態を読み込めてない状態で、後ろを振り返って走り出します。私が走り出したときにはすでに銃声が轟いており、私の足元にも弾が飛んできていたみたいです。そして、私は鈴谷さんの影に入ったとき、後ろについて走ってきたと思っていた金剛さんに話しかけようとしています。

「金剛さん……ん」

ですが、私の後ろには金剛さんはいませんでした。

いないということは、きつと、あの鉛弾が一方的に飛んでいるあの

場所にいるということになります。

私には少将さんと金剛さんのあの会話にどういう意味が込められていたのか、全然分かりませんでした。そして、なぜ銃撃が始まったのかも……。

どうしていいのかわかりません。鈴谷さんの艤装に跳弾する音を聞きながら、その場で立ち尽くすしかありませんでした。

第36話 『紅葉狩り』⑤

金剛さんが横なぐりの鉛雨の中に残されて、私だけは陰に隠れることができませんでした。

不安で心配で仕方ありません。自らよりも私を優先してくれた金剛さん。

アレだけの銃撃を受けたらひとたまりもないんじゃないか、私はそう思いました。

艦橋にいるであろう鈴谷さんを見上げます。

さつき居たところを見ますが、その姿は見えませんでした。と思った瞬間、鈴谷さんが出てきました。

「銃撃を受けてるのっ！ 明らかな攻撃だつてば！」

「……手出し無用っ?!」

独り言のように言っているということは、多分赤城さんと話でもしているんでしょう。それよりも、話の内容です。

明らかな攻撃。これは分かります。勧告らしき勧告はありませんでしたが、攻撃を受けていることに変わりはありません。

ですが、それに手出し無用だと言われたみたいです。反撃するな、ということでしょう。

「攻撃許可は出せないの?」

「……了解。……んもうっ!!」

地団駄踏んだ鈴谷さんは、艦橋に戻っていきました。

攻撃許可が降りないということは、このまま現状待機ということになりますね。

それよりも気になるのが攻撃された理由です。

私たちは後ろめたいことは確かにしています。ですけど、それが攻撃にどう繋がるんでしょうか。

私には分かりませんでした。

状況を進展させるために、私はこの場を離れます。銃声は未だ止まることを知らず、一方的に撃たれている状態です。

私が目指す場所は地下司令部。赤城さんと話をしに行きます。

――

――

――

地下司令部に駆け込んだ私は、赤城さんの前に立ちました。

「ましろさん……」

「……はあ……はあ。……攻撃命令が出ないのはどうしてですか？」

あの銃撃の中には金剛さんが居るんですよ?」

「……知ってますよ」

「知っているのならどうして?!」

私は赤城さんに詰め寄ります。

どうして、反撃して金剛さんを助けようとしなんでしょうか。紅くんのやり方で行動するのなら、味方が一方的にやれているのを無視出来ない筈です。紅くんなら助けに行く筈です。

「ここで私が出してしまえば思う壺です。それに、これで徹底的に銃撃・砲撃をしてくれたのなら、こちらに大義名分が生まれます」
「大義名分?」

「ここは治外法権です。つまり、日本皇国領内でありながら、日本皇国の三法に影響されない。『外国』なんですよ」

私は気付きました。今、私が立っているこの場所がどういふところなのか。

「私たちを攻撃した時点で、その覚悟が出来ているということですよ」

赤城さんの目つきが変わりました。

いつも温かい雰囲気で、優しい性格である赤城さんが豹変しました。目には完全に殺気しか感じられません。どう考えても憤怒しています。

ですがその一方、赤城さんは落ち着いていました。何かを考え始めたかと思うと、赤城さんは指示を出し始めます。

「通信妖精さん! 横須賀鎮守府全体に警報発令。非戦闘員はシェルターへの避難勧告を出して下さい!」

非戦闘員。多分、酒保の従業員と事務棟の人のことを指しているん

でしょう。

「武下さんっ！ 非戦闘員の避難誘導をお願いします！」

「分かりました」

鎮守府全体に警報が鳴り響きます。サイレンです。よくテレビドラマや映画であるような、戦争の話でよく聞く空襲警報みたいなサイレンです。

『艦娘は集合せよ！ 繰り返す。艦娘は集合せよ！』

通信妖精さんの声で、それがスピーカーから響いてきました。

どこに集合かは知らせないみたいです。それもそうでしょうね。相手にもこの警報は聞こえている訳ですし。

「鈴谷さん！ 聞こえますか？」

独り言が始まりました。どうやら、鈴谷さんとの通信が始まったようです。うですね。

「艦装を身に纏って、正門から200m後退して下さい」

「……後で分かりますから、今は従って下さい！」

どうやら終わったみたいです。次は、『柴壁』に指示を終えた武下さんに再び指示を出しました。

「武下さん。『柴壁』は待機です。こちらから攻撃命令を出します」

「……分かりました」

少し不服そうな顔をした武下さんは、再び受話器を取りました。どうして不服な表情をしたんでしょうか。理由は私には分かりません。

きつと、何かあるんでしょう。赤城さんの選択に良くないことでもあったんでしょうか？ たしか、鈴谷さんがそんなことを言っていたんです。それを武下さんは危惧しているんでしょうか。

「待機中の全部隊へ。別命あるまで待機」

それを聞いた赤城さんは次の手を打ちます。

「次は……金剛さんですね」

赤城さんは独り言を言い始めました。

「金剛さん、聞こえますか？」

「……やはりそうでしたか。そのまま鈴谷さんのところまで後退して

下さい。攻撃はダメですよ？」

「どうやら金剛さんは大丈夫だったらしいです。それにしても、どうしてあんな銃撃の中で無事で居られたんでしょうか。」

「考えられるのは、鈴谷さんみたいに艀装を出したことからいですが、そんな様子は微塵もありませんでした。」

「赤城さん」

「金剛さんですか？　金剛さんはどうやら、銃撃を瞬間に艀装を身に纏ったみたいです。気付いていたのかと思いましたが、違いましたか？」

「赤城さんは小首を傾げます。どうやら、私がここに来たのは、金剛さんに言われてきたものだと思われていたみたいです。」

「い、いいえ。初めて聞きました。この状況を一刻も早く口頭で伝えるべきだと思って、走ってきたんですが……」

「そうでしたか。……とりあえず、この状況を好転させる必要がありますね」

「赤城さんはまた考え始めました。次は何の手を打つんでしょうか。その一方で、私は別のことを考えていました。」

「鈴谷さんが言っていた、赤城さんのことです。赤城さんが作戦を考えると、かならずどこかに穴があるという。」

「それを早急に見つけて、手を打たなければなりません。そうしないと、何か不具合が起きるに違いありません。」

「私は考えを巡らせます。」

「様子を思い浮かべて、私はあることに気が付きました。」

「この対処は相手が侵入してくることを前提にしています。現状況が分からない今、このような手を打つとかえって危険な状況に陥る可能性があります。」

「例えば、相手が門を超えて侵入してこなかった場合です。相手の目的が、ここの破壊だったとします。そうするならば、わざわざ侵入しなくても砲撃やら空爆でなんともなった筈です。」

私は彼らの意図を掴もうと考えます。

どうして機械化歩兵部隊だけで来たのか、どういう意図でここを攻撃するのか……。

「赤城さん……」

「ん？ 何ですか？」

「私は再度、艦装を出すことを勧めます。相手の攻撃をこちらの建物などに被害を出さないためです」

「……分かりました。鈴谷さんと金剛さんへ伝えます」

1つ目は素直に受け入れてくれました。問題は2つ目です。

「あともう1つ」

赤城さんの目を捉えて、私は言いました。

「鈴谷さんと金剛さんには一切の攻撃をさせないで下さい」

「……………」

「……………」

私は地下司令部を一度出て、あることを確認した後に戻ってきました。

「攻撃してはダメですよ？ それと加賀さんに」

「え、ええ……」

少し動揺を見せた赤城さんですが、私はそんなことを気にもとめずに話を進めます。

「加賀さんに艦載機発艦を。全艦載機です」

「え？」

「空中待機と偵察です。相手は機械化歩兵部隊なんですよ？ 空に向かっている銃やミサイルらしきものも見当たりませんでした」

「……分かりました」

赤城さんは独り言を話し始めます。

加賀さんに連絡を取って、艦載機を出してもらおうでしょう。

「ましろさん」

「はい？」

そんな時、赤城さんが突然話しかけてきました。

「加賀さんからです。流星もですか？」

「流星って何ですか？」

「艦上攻撃機。爆弾と魚雷を落とします」

「なるほど……流星もです」

返事をした赤城さんは加賀さんに伝えると、また私に訊いてきました。

「彗星と流星の爆装は？　だそうです」

「爆装って何ですか？」

「艦載機は爆弾を付けて任意の場所に落とすことが出来るんですよ。それで今訊いているのは、爆弾の大きさです」

「戦車が壊せるくらいで良いと思います」

「分かりました」

一通り伝え終わった赤城さんは、一息吐くと私に訊いてきます。

「突然どうしたんですか？」

そう訊いてくる赤城さんは、どうやら気付いてないみたいです。

相手がそう簡単に釣れる訳ないと。

「もし、あの配置で引き込めなければどうするつもりだったんですか？」

私は聞きました。

そうすると、赤城さんは口をすぼめます。どうやら気付いたようです。

「なるほど……ありがとうございます」

「いいえ」

私は回し過ぎた頭を冷やし、スクリーンを眺めます。

スクリーンには何も映ってないです。銃撃後の煙で見えないみたいです。徐々にその煙は薄れていき、カメラが本来見えていた視界が映し出されました。

穴だらけの地面、門の向こう側は光を放っています。どうやら葉茨が太陽の光を反射しているみたいです。

一息吐いて、武下さんにあるものがあるかと訊きます。

「武下さん」

「はい」

「私、携帯電話とか持ってないんですが、ありますか？　そういうの」
このタイミングで何を言っているんだ、と言いたげな表情をしました。それは当然の反応でしょう。ですけど、すぐに気付いたんです。

「携帯無線機ならありますよ」

「貸して下さい」

「……それをどうするつもりで？」

「また出てきます」

私は受け取りながら答えると、そのまま走り出しました。

きつと止められると思ったからです。携帯無線機の送受信機を空いているポケットに押し込み、マイクとイヤホンのコードを肩に掛けて付けました。

外へ飛び出し、相手から見えないであろうところまで走り抜け、視覚から隠れている『猟犬』に合流しました。

「あれ？　ましろさん。どうしたんですか？」

「少し色々ありまして……。状況は？」

私はこの場の『猟犬』一個中隊を任されている仲の良い人に話し掛けました。名前は江島さんです。30代前半で家庭を持つてるそうです。家庭には休日には戻れないらしいですが、それは軍に居た時と変わらないそうで、奥さんも納得してくれているそうです。

「相手さんが正門の憲兵と交渉しているところですよ」

「ということは……」

「ほぼ確実に乗り込んでくるでしょうね。横須賀鎮守府は空軍でも使わない限り、塀の外からズタボロにするなんて無理ですから、入ってくるのは当然ですよ」

分かっていたかのように言う江島さんは、説明してくれました。

「……赤城さんの判断は？」

言った後、不安そうに私に訊いてきます。どうやら私が地下司令部から来たことは分かっている様ですね。江島さん同様、中隊員の全員が此方に耳を傾けています。

「……分かりません。ですけど、『猟犬』に出てくるように言っただけ

ことはそういうことですよね?」

私も怖いです。『獵犬』が出てくる意味は私も理解しています。『柴壁』の一員ですから当然ですけど。

私の言葉を聞いた中隊員は顔を歪めます。

「さつき、金剛さんとあちらさんが話している声が聞こえていたんですよ……」

5人くらい挟んだ向こう側の女性中隊員が話し出します。

「陸軍第46機械化歩兵師団……。名称こそ普通だけど、独立部隊。単独で戦地に赴いて活動できる、いわばレンジャーとかコマンド部隊って云う……」

中隊にわずかながらどよめきが起きました。

コマンドが分かりませんが、レンジャーは分かります。今は軍隊ですが、自衛隊の中でも屈強な人たちがなるというやつです。よく分かりませんが。

「長政……」

「ああ……」

長政という名前が聞こえ、私はそつちに耳を傾けます。

「お前、大丈夫か?」

「大丈夫……。たとえ俺の原隊だったとしても、もう辞めたんだ。それに、みんなに比べたら俺なんて弱い方。こんな事でへこたれてたらここが守れなくなる」

長政さん。私が『柴壁』に入った時、3人の教官の1人として付けてくれた人です。

「第46機械化歩兵師団の師団長は分別と“こういうこと”が分かる人だと思っていたんだが……。俺が期待していただけだったのか」

「辛かったら下がってても良いんだぞ?」

「いいや、いい。馬鹿の目を、原隊のみんなの目を覚まさせるのは俺の仕事だ」

それを聞いた私はぐつとこらえ、江島さんの方を向きます。
「すみません」

「いいえ」

『柴壁』の人間はこういうことが結構あるんですよ。ただの歩兵部隊出身者がいないものですから。……ですが、やることはちゃんとこなしてみせますよ」

私はそれを聞いて前を向きます。

恐怖心、後ろめたさで動悸が激しくなるのを我慢し、拳銃を力強く握りました。

きっと赤城さんから指示が来るはずですよ。彼らが正門を超えたその時に。

第37話 『紅葉狩り』⑥

「どうやら、門の憲兵と少将の交渉が終わったみたいです。私が左翼の『柴壁』に合流してから20分が経ったころでした。」

『ましろさん』

「そんな時、私がつけていたイヤホンから声が聞こえました。」

「武下さんです。携帯無線機のマイクをオンに切り替えて、マイクに向かつて声を出しました。」

「はい」

『門の憲兵が此方の許可を得ずに正門を開放するようです。監視カメラでは映らないので、何か撮影出来るもので攻撃の様子を撮影して下さい』

「……分かりました。ですけど、撮影出来るものなんて持ってませんよ?。」

『中隊長は携帯電話を持っています。借りて撮影を』

「はい」

「私はマイクをオフに切り替え、中隊長の江島さんに話し掛けました。」

「江島さん。携帯電話を貸して頂けませんか?。」

「いいですけど、何に使うのでしょうか?。」

「攻撃の撮影です」

「……分かりました」

「江島さんはBDUのポケットに手を入れ、携帯電話を出して私に渡してくれました。」

「ロックは掛けていません。メモリーも大丈夫のはずですので、長時間の撮影も大丈夫な筈です」

「ありがとうございます」

「私は手袋を取り、ホームからカメラを起動。動画撮影モードに切り替えて構えました。」

「そのまま手袋をポケットに仕舞い、少し離れたところに居る夕立さんに声を掛けます。」

「夕立さん」

「何かしら？」

「号令があれば艤装を出しますよね？」

「そうね。さつきまでの鈴谷さんみたいに」

「なら私を乗せて下さい」

そう私が言うと、夕立さんは黙り込みました。考えているんでしょう。

私がこのようなことを頼んだのには理由があります。

カメラで撮影する。被写体は第46機械化歩兵師団です。それが私たちの鎮守府を攻撃している様子を映像で収め、それを利用するためです。

そうだと私は少なくとも思っています。

「……いいけど、撃たれる可能性があるわ」

「所詮撃つのは小銃です。戦車や装甲車もいますが、入ってくるのは先頭集団。歩兵です。正門を潜った先から金剛さんたちが後退した距離は数百m。歩兵を入れたら車両なんて入りませんよ」

そう私が言うと納得したんでしょう。首を縦に振りました。

「タラップから登れると思うけど、どうなるか分からないわ」

「よし登りますよ」

「ならいいわ。……号令があるまで離れてて」

離れてて。つまり、出した時に砂塵やら色々飛び散るんでしょう。

それに巻き込まないためにそう言ったんです。私は元いた場所に戻り、しゃがみこみました。

交渉は終わっていますので、正門が開閉して相手が雪崩込むのを待つだけです。

私は心臓が高鳴り、極度の緊張に見舞われます。

初めての实战です。金剛さんと出てきた時はノーカウントです。これからが、私の『柴壁』としての初陣が始まるうとしていました。

――

――

――

正門が開ききり、遂に外の第46機械化歩兵師団が雪崩込んでこれる状態になりました。

私たちはいつでも抑えつけられるように、臨戦態勢を取っています。

今か今かと正門を睨み、中隊の背後ではどうやら兵器が次々と運び込まれています。武下さんか赤城さんが命令したんでしょう。それは木箱というか、箱で届けられていて、中隊の中でも数人だけが、その箱の中身を出して組み立てています。

どうやら組み立てていたものが組み上がったみたいです。まだ奴らは入ってきてきてないので、前の所属の兵科で扱った経験のある人間に次々と渡されていきました。

『パンツァーフアウスト』。渡された人たちはそう言っていました。

ロケットみたいなものらしいです。人に向けて撃つものではないんでしょう。特別な扱いをするものらしいですから。

程よく『パンツァーフアウスト』が行き渡った頃、正門の向こうで号令が聞こえました。

こちらにも全員が動き出します。

『獵犬』第3中隊。“ネズミ”が侵入を始めるみたいです」
江島さんがマイクに向かってそう言いました。

これから攻撃命令を聞くんでしょう。

「了解しました。……中隊待機！ 夕立艀装背後にて臨戦態勢！」

その言葉だけでどういふことを言われたのが判断出来ます。中隊は待機です。夕立さんが艀装というか船体を陸上に出して、その背後に隠れるみたいです。

それなら私は夕立さんの艀装に登ります。

夕立さんもうやら赤城さんから指示を受けたみたいです。ある程度まで正門までの道に進み、刹那、身体が光だしてその場に砂塵が舞いました。

砂塵が晴れるまで待つ必要はありません。そこにいるであろう夕立さんのところまで私は向かいました。

砂塵が舞ってから数分後、私は艀装によじ登って船の中央。建物み

たいな構造物のドアを開き、階段をできるだけ駆け上がりました。

行き着いた先はどうやら操縦室(?)みたいなところ。艦橋というプレートがあるドアを潜ると、夕立さんが仁王立ちしていました。

「ましろさん」

「来ました。ありがとうございます」

「別に良いわ。……だけど銃撃があると……」

「撃たれても当たらなければいいんですよ。じゃあ、撮影してきます！」

出る前に夕立さんに撮るならと、場所を教えてもらいました。

その場所に腰を低くして覗き込むように正門の状況を確認します。そこからは砂塵の向こうで蠢くものが見えています。ですけど、前には進んでいません。精々、正門から50mというところでしょうか。

その状態のまま、また数分が経つと砂塵が落ち着き、辺りの様子が把握出来るようになりました。

正門からこちら側に入り込んだのは歩兵部隊だけみたいです。後に装甲車や戦車、鼻の長い戦車みたいなのが並んだままの状態です。

『ましろさん。状況は逐一夕立さんや叢雲さんから入っています。これからはましろさんのするべきことを伝えます。よろしいですか?』

「はい」

艦娘同士では謎のコミュニケーション方法で遠いところに居る相手と会話が出来るみたいですが、私と艦娘ではそうはいきません。赤城さんは武下さんから無線機を借りているみたいですね。

『第46機械化歩兵師団がこちらに攻撃する様子を撮影すること。被弾しないこと。そちら側に付いている『猟犬』第3中隊の指揮をお願いします』

「分かりました」

私はそう言って無線機を切り、借りた携帯電話のカメラを奴らに向けます。

撮影を開始し、陰から覗き込むかのように状況を観察しました。

第46機械化歩兵師団は歩兵を先頭に正門を潜りながら、それぞれ

の部隊が道の脇に並んでいきます。その間をゆつくりと歩兵が入っていきます。

「ある程度侵入してから攻撃するみたいね」

陰から覗くようにして見ている私に、夕立さんが背後から話し掛けてきました。近づいていることは感づいていたので、私はそこまで驚きもせずに返答します。

「そうみたいです。……ここで戦車に入られるのは厄介です」

「十中八九、戦車が入ってきてから攻撃が始まると思うけど……」

夕立さんは声色を変えずに話します。

「夕立さんは戦車の大砲に耐えられるのでしょうか？」

ふと思ったことを夕立さんに訊きます。返って来た回答は私の想像を遥か上を行っていました。

「耐えられるに決まってるじゃない。私を倒すのなら戦車は200両くらい必要よ」

「10両あれば良いのでは？」

「深海棲艦は人間の現行兵器があまり通用しないの。艦娘も同じで人間の兵器はあまり通用しないわ。艦娘を制圧するのなら、艦装を身に纏っていない状態の時に奇襲するか、艦装をこうやって出している時に内部に乗り込んで制圧するか……この2択しか無いわ」

なんだかよく分かりませんが、この世界の現状を垣間見た気がします。深海棲艦のことも、艦娘のことも。

夕立さんは妖精さんたちに指示を出しながら、私に話し掛けてきます。

「基本的にこういう場合は対空兵装を対人に使うから、駆逐艦でも要塞になるのよ。ほら、こんなの当たったら一撃だから」

そう言った夕立さんは、私の視界の端に大きな弾を見せてくれました。多分、これが対空兵装の弾なのでしょう。なんて多きさでしょうか。15cmはあるんじゃないでしょうか。

そんな物が当たったら、人体はどうなるんでしょうかね。私も一応、医療従事者ですからそういうことが気になります。

「肉に当たれば吹き飛び、骨に当たれば吹っ飛ぶ。どのみち吹っ飛ぶ

のよ。これくらいの大きさになるとね」

夕立さんはそれを仕舞い、話を続けました。

「さあーて。第46機械化歩兵師団はどういう風に動くのかしら」

「ある程度入ってきたら攻撃。若しくは鎮守府に散り散りになるでしょうね」

「私は前者だと思っわ。後者に関しては目的が見えないから」

「なるほど……。赤城さんも前者だと思っっているみたいですよ？」

「それはこの配置で察してるわ」

彼らに目を向けたまま、話を続けます。

動画の撮影時間も10分が過ぎようとしていた頃、動きがありました。

全歩兵の侵入が終わり、攻撃態勢に入ったのです。小銃が全方向に向き、侵入できた装甲車数量がこちらに機関砲を向けています。

この状況は赤城さんも夕立さんと叢雲さんからそれぞれ聞いているはずですから、そろそろ指示が出るはずですよ。

私の想像ですと、現状待機。攻撃はあちらからやらせると思っます。

『赤城です』

「はい」

『現状待機です。攻撃はあちらからやらせます』

私の想像通りでした。そもそもそういう算段でしたからね。

『それを踏まえて色々と話しておこうと思っます』

「どうぞ」

『私設軍事組織『柴壁』は一部を除き、敷地外での火器の使用は許されていません。ですから、側面より挟撃・包囲殲滅・面制圧が出来ません。正門も塞ぐことが出来ませんので、そこでの戦闘は確実です』

そんなことは分かっていますよ、と内心思っました。

『ですから、相手がその場に留まって殲滅されるか、鎮守府外に撤退すればこちらの勝利です』

「追い出す、と？」

『その通りです。それとましろさんの任は重要ですよ。紅提督が居ない

今、映像はこちらに紅提督が居ない状態でも相応の力を発揮するポテンシャルを与えてくれます。“外交”・交渉・取引……。何にでも使えます』

赤城さんはそう説明しましたが、それが本当に機能するかは別の話のように思えます。

どこに出すか、どのように使うかによつてそのポテンシャルは変化しますからね。

『越境に重ね戦闘行動。私たちはその行動を侵略と判断し、これに対応。シナリオなんて勝てば此方の好きなように出来ます。最も、あちらが正規の命令で動いているのなら通用しません』

「正規、ですか？」

『はい。大本営からの命令、天皇陛下からの勅命ならば、私たちは賊です。神聖な日本皇国の大地に鎮座する国民を脅かしている集団、そう解釈されても何ら不思議はありませんからね』

赤城さんの言っていることは正しいです。普通に考えればそうですからね。

ですけど、賊つていうのはどうなのでしょう。その“神聖な日本皇国”を攻めている深海棲艦はどうなるのでしょうか。同じように賊として排除すると？

無理でしょうね。私たちでさえも、物理的な排除は無理でしょう。深海棲艦との戦争に関してはあまり知りませんが、艦娘と日本皇国は協力関係にあると聞きました。それに、現行兵器は深海棲艦にあまり効果がない、と。

つまり、そういうことなのでしょうね。世間的な排除は可能なのでしょうか。情報操作・統制でもするのでしょうか。

『勝てば官軍です。この騒ぎ、私たちが勝ちます』

「無論、そのつもりです。紅くんも返して貰わないといけませんからね」

『はい。では』

ここで赤城さんとの無線は終わりました。

夕立さんは元の場所に戻っていたみたいです。今居る場所から中

を覗き込むと、夕立さんは相変わらず指示をあちこちに飛ばしていました。

私は気を引き締め、彼らを動きを注視します。

その刹那、大きな動きがありました。第46機械化歩兵師団に攻撃の合図があったみたいです。それと同時に歩兵たちの小銃による掃射、装甲車数両の攻撃が夕立さんや叢雲さん、正門の正面数百mに鎮座する金剛さんの艦装に銃弾が一方的に飛びます。

とんでもない轟音が耳を劈き、私は痛む耳を我慢しながらも、撮影は辞めませんでした。全体を映しては人を絞って撮影。そして、私たちの動きや叢雲さんの動き、金剛さんの動きを映します。

はたから見れば射撃訓練のように思えますが、これは攻撃です。私はそう確信し、次にあるであろう指示が分かっているながらも、緊張しながら待ちました。

第38話 『紅葉狩り』⑦

その時はすぐには訪れませんでした。

夕立さん、叢雲さん、金剛さん、鈴谷さんの艤装による三方向からの包囲から膠着状態が1時間程続いたんです。

固唾を呑んで見守り、銃を握り直す音や服の擦れる音が敏感に感じ取れるくらいの緊張感が辺りを覆っています。私もその場に居はしますが、位置が位置です。あちらに私の居場所を悟られている可能性はあまりないように思えます。

彼ら全員が見ている先には、艤装の陰から状況を確認している『柴壁』がいます。そこに私は居ません。誰一人としてこちらを見上げてなど居ないんです。

ずっと血圧が上がったままで、動悸が収まりません。そんな状態のまま1時間が経っていたんです。

その刹那、カタカタという音が小さいですが聞こえてきました。音の元を探してみると、どうやら入ってきていた第46機械化歩兵師団の歩兵が手を震わせていた音みたいです。小銃が揺れ、鉄の部分がぶつかりあっているんです。

注視をしていると、その歩兵はゆっくりと小銃を構え、夕立さんの艤装の陰。『柴壁』の『猟犬』が隠れているところに銃口を指向しました。

そしてその瞬間、耳を劈く炸裂音が辺り一帯に響き渡ります。このタイミングを私は逃しませんでした。携帯電話の録画機能をオンにして、レンズをその方向に向けます。

「私は撃つていいとは言っていないぞ！」

そんな怒号がかすかに聞こえてきましたが、既に時遅しです。誰ひとりとしてその言葉に耳を傾ける者等居ませんでした。

侵入できた第46機械化歩兵師団の歩兵や機関銃手は鉛弾をばら撒き始めています。そんな状況であるにも関わらず、『猟犬』は手出しをしません。陰に隠れたまま、時より様子を確認する以外はしませ

ん。

数分、数十分が経ったくらいでしょうか。夕立さんの艦装の裏で動きがありました。多分、反撃に出るんでしょう。このまま撃たれっぱなしにも行きませんし、何より攻撃を受けています。

『柴壁』、『猟犬』の人たちが心の中で何を想っているのかは分かりません。私は内心、『同じ日本人を撃って苦しいのでは?』と考えています。ですけどそれは私の想像に過ぎません。彼らがどうしてここに居るのか、どうして銃を握っているのかを考えたら、私の考えなんて一瞬で吹き飛びます。

紅くんのためです。大なり小なり艦娘や『柴壁』の話は聞いていますが、やはりいくら聞いても聞いても出てくるのは紅くんです。

彼らが紅くんにどんな感情を持っているかなんて分かりません。ですけど、これだけの人数にここまで思わせてしまうなんて、紅くんはこの世界で一体何をしてきたんでしょうか。

『赤城です』

突然、イヤホンから赤城さんの声が聞こえてきました。

「はい」

『あちらの攻撃開始から20と6分が経ちました。私たちもそろそろ反撃に移ります』

「分かりました」

それだけでした。

その無線の後、艦装裏に隠れていた『猟犬』たちが一斉に攻撃を開始します。私の身体の正面からしか聞こえてこなかった銃声が、背中の方からも聞こえてきます。

銃声が私の背中に突き刺さり、少しばかり身体を震わせました。私に向けられている訳でないことは分かっています。それでも、背後からする銃声に身体が反応してしまうのは仕方のないことです。

私の左手にあるスマホは動画を撮影しています。指示でやっていることですが、画面越しに見える戦場の様子は凄惨そのものでした。

レンガが敷き詰められていた正門前の道は、またたくまに見えているだけでえづいてしまうような惨状と化しました。

『獵犬』が距離を詰めます。ましろさんは撮影ポジションを変えて下さい』

赤城さんからの指示です。

あくまで私の仕事は撮影。正門前で起きている惨状をカメラに収めることです。

反論はありません。指示に従って私は移動しました。艦橋内が一番適しているでしょう。夕立さんに許可を貰ってそのまま正門前にレンズを向けました。

『獵犬』の仕事は確実です。こちらが発砲した弾は全て、門の外に飛ばないように撃っています。

また1人、また1人と倒れていく第46機械化歩兵師団の兵士たちは遂に正門のこちら側から外に追い出すことに成功しました。

『そのまま正門を閉めさせます。ましろさんは江島さんから借りたカメラを断りを入れてから持ってきて下さい』

「分かりました」

このビデオが何に使われるかは、戦闘が始まる前に聴きました。聞き直す必要はありません。

私は2つ返事をし、夕立さんにお礼を言いました。

「ありがとうございます」

「いいわ」

艦装の被害状況を妖精さんから聴きながら、私の言葉にも耳を傾けてくれます。

「では、赤城さんからの指示がありましたのでこれにて」

「ええ。じゃあ、またあとで」

それだけを言い交わし、私は夕立さんの艦装を降りて江島さんのところへ向かいます。

――

――

――

正門の両脇、塀に持たれかかる体勢で小銃を離さない江島さんに声を掛けました。

スマホの件です。

「江島さん」

「ましろさんですか。……携帯ですよ？ 持って行って構いませんよ。データの転送ですよ？」

「はい。ありがとうございます」

「ええ」

私と話してはいましたが、終始視線は正門に向いていました。

至極当然のことでしょう。いつまた正門から入ってくるか分かりませんからね。

「落ち着いたら返しに来ます」

そう言い残して、私は地下司令部に向かいました。

今思い出しましたが、腰には拳銃が刺さったままです。金剛さんと出てきたときに持っていたものですが、今まで忘れていました。

—————

—————

—————

地下司令部に着いた私は、そのままスマホで撮影していたビデオデータを転送。メモリーカードに保存をしました。

その後も『猟犬』と第46機械化歩兵師団との睨み合いは続きます。途中、別の『猟犬』2個中隊と交代しましたが、状況は膠着しました。

「正門前の状況はどうですか？」

「依然変化なしです。あちらさんも動きませんよ」

あの銃撃戦から3日程経ちました。あれ以来、銃撃戦は1度足りとも起きていません。『猟犬』が睨みを利かせ、動きを封じ込めていると現状を考えた方がいいのかもしれませんが。

この部屋に入つて4日程経ちましたが、地下司令部というものがどういうものなのか思い知らされました。

地上に出なくても生活出来るんです。消耗品はどうしても消耗してしまいますが、寝るところも水場もちゃんとあります。

私たちはここで交代で過ごしています。『灰犬』からの情報を待つ

ているんです。

「……ましろさん」

横で座っている赤城さんが突然話しかけてきました。

「はい」

「時間がどうしてももつたいなくて、付き合っていただけませんか？」

そう考えるのも無理はないです。4日もずっと定時報告待ちをし続けるだけです。私も同じことを考えていたところでした。

「いいですよ」

「じゃあ……何かお話ししましょう」

「お話、ですか？」

「ええ」

そう言った赤城さんは柔らかい笑顔を私に向けました。

どうやら、公私を分けたみたいです。状況が状況ですから、そのようなことは良いとは思いませんが、このままだとどうにかなくなってしまいそうです。

「ましろさんがこの世界に来てこのかた、私と話す時は大体真面目な話ばかりでしたよね。何か、砕けた話でもしましょうよ」

「……そういえばそうですね。ずっと紅くん紅くんでしたし」

「ええ。といつても、私が話したのは紅提督のことですけどね」

そう赤城さんが言った刹那、一緒に座っていた金剛さんがピクリと反応しました。金剛さんも話が気になるのでしょうか。

「ズバリ！ ましろさんー！」

急に赤城さんは言います。いつもと違うテンションに少し動揺してしまいました。どうにか調子を合わせます。

「どんと来い！ ですー！」

「こちらに来る前の紅提督はどんなお方でしたか？」

金剛さんの顔が完全にこちらを向きました。金剛さんは絶対、こちらの話が気になっているに違いありません。

ですので、私は話す前に声を掛けました。

「金剛さんもこっち寄ってきて下さいよ。聞きたいんですよね？」

この時の私にはやけていたに違いありません。どうしてそんな表

情が出てきたかは分かりませんが、そうなっているのだと思います。

「え、良いんデスカ？」

金剛さんは聞いてきます。というか、この距離なら聞きたくなくても聞こえてしまうでしょうからね。どのみち、聞くことに変わりはありません。

「いいですよ。それに、話し相手は多い方が楽しいです」

そう言っただけは話し始めました。私からみた紅くんを、私の脳裏に存在する一番新しい紅くんを。

「と言ってみたはいいものの、何が聞きたいですか？」

私は2人に聞きました。どの話が聞きたいか。

不謹慎ではありますが、少し心が跳ねています。なんとさえいっていいでしょう。やはり、女性というものはこういうことが好きなんですよ。

それに真剣ではありませんが、赤城さんが少し一生懸命なのが面白いです。きつと、あの時のことでしょうね。

私が奪還作戦をする云々と言っていた頃、赤城さんが言った言葉です。

『では、私にその“紅葉”を一枚』

紅くん奪還作戦の隠語である『紅葉狩り』に掛けたんでしよう。とっさに出てきたものかもしれませんが、その時の私は“そういう意味”だと捉えていました。もちろん、今もそうですけどね。

赤城さんは絶対、紅くんのことを想っているに違いない。そう思ってしまったんです。どういう付き合い方をしていたかなんて分かりません。ですけど、紅くんならよっぽどのことをしない限り、その辺の男性よりは落ち着いていると思います。家族という色眼鏡がかかっています。なしでもそういう風に見えるかもしれないですね。

「紅提督からは学校のことなど、少々伺っています。ですので、家ではどうだったか、とかはどうでしょう？」

赤城さんは少し火照りながら訊いてきます。

一方で金剛さんは不機嫌そうな表情をしていました。両極端です。もしかして、金剛さんもそつちなのでしょうか。

まあ、金剛さんがそういうのはよくあることですし、普通なのでしょうね。少々、目の前にいる金剛さんは異常な気もしますけど。

「……いいですよ。思い出したものからでも構いませんか？」

「ええ」

私は色々を思い出します。その中には紅くんにとって不名誉なこともありますから、そういったものは無しで行こうと思います。

異世界ではありますが、赤城さんたちは紅くんの部下ですからね。多分、紅くんはそう想っているはずです。

「紅くんって実は家事が……」

そう言いかけたら、赤城さんと金剛さんに遮られます。

「知ってます（るデース）」

「え？」

仕方なく作ることがあったんでしょうね。それでバレたんでしよう。

他の話に変えます。

「じゃあ、紅くんがミリオタだったってことは？」

「ミリオタ？」

どうやら知らないみたいですけど、ミリオタという単語自体も知らないみたいですね。赤城さんと金剛さんが頭を傾げています。

「銃とか戦闘機とかが好きなのことです。紅くんもそういうのが好きだったみたいで……。流石、男の子ですよね」

そういうと、またもや金剛さんが不機嫌になりました。何か不味いことでも言ったんでしょうか。

ですけど、そうなってしまう理由がすぐに分かります。

「確かに！ 紅提督は艦載機のことをよく知っておられました！」

なるほど、そういう訳ですね。赤城さんは話が出来て、金剛さんには艦載機がないからそういう話が出来なかったということみたいです。

ですけど、変な話ですね。赤城さんは女性です。それが何故、紅く

んと話が合ったんでしようか。

女性でミリオタっていう人は聞いたことありませんが、そういう類の人なんでしょうか。

「……紅提督って艦載機好きだったんじゃないデスカ？」

金剛さんがボソリと言いました。

どうやら、鎮守府では艦載機の話しか出来なかったみたいですね。どれも好きだったと私は記憶しているんですが。

「紅くんは船も戦車も銃も好きだったと思いますけど、特に飛行機は好きだったみたいです……」

そう私が言うと、金剛さんは何かが分かったみたいです。さっきの不機嫌な表情から一変。少し笑顔が戻りました。

「希望が見えてきマシター！」

どうやら、金剛さんでも話が出来る分野でもあったんでしようね。「懐かしいです」

金剛さんとは打って変わって、赤城さんが今度は少し悲しそうな表情をしていました。

「ましろさん。多分、聞いているとは思いますが、私の艦載機隊。赤城航空隊のこと」

「ええ。鈴谷さんから」

赤城さんの航空隊に何かあったんでしようか。

「私が最初期から鎮守府に居たことから、紅提督には良く攻略作戦に指名されていたんですよ」

「任務報酬で、ですか？」

「違います。紅提督はあろうことか、最初期から戦艦・空母レシピを回していたんです。司令部レベルが1桁の時に、たまたま出てきたのが私です。その頃はまだ、任務報酬で私を受け取っていない状態でしたから……」

きつと、色々分からずにやっていたんでしようね。紅くんは。

知っていたら、最初は資源を温存して水雷戦隊で攻略していくのが常套手段のはずですし。

「10人も艦娘が居ない鎮守府で、私は長門さんや山城さんで貧弱な

小型艦の盾になりながら戦線を押し上げて……。この話は止めましょうか。辛気臭くてなりませんね」

赤城さんは突然、強引に話を折りました。今の話で何かあったんでしょうか。

聞く気には慣れずに、そのまま話が切り替わります。

「紅提督はいつも日付が変わっても起きておられましたか、こちらにいらっしやる前も？」

こつちでもそうだったんですね。

紅くんは遅くまで起きて、ゲームやら勉強やらをしていました。その姿は私も何度も見ていますから。

「そうですね。いつも遅くまでゲームやら勉強やら」

私は濁して言います。

考えたんです。紅くんは何時艦これをやっていたのか。それに、赤城さんたちはこの世界と私たちが居た世界との関係性を知らないと思います。不用意に言ってしまうと、何か良くない方向に流れてしまう可能性があります。

ですが、私の思いすごしでした。

「ゲーム……。なるほど」

赤城さんは理解しているような素振りをみせたんです。

「そういえば昔、この世界のことをゲームだと言ってマシタ。話を聞いたところ、私たちでも信用出来るようなことを色々聞きましたシ」「どういうことですか？」

「何ヶ月前に、この鎮守府は空襲で焼け野原になっているんです。その時に、紅提督が言ってマシタ。『俺の居た世界では……。この世界は『艦隊これくしょん』というフィクション、つまり作り話だ』と」
心臓が跳ね上がります。金剛さんたちはその話を聞いても正気でいられたんでしょうか。私なら無理です。私にとっての現実が作り物だと言われているんですからね。

「長門は何か知っているみたいですが、聞くのも野暮ってものデス。そのうち分かるでショウ」

金剛さんはそう言いますが、眉はハの字になっています。何か思う

ところでもあるんでしょうか。

そんな時に、赤城さんは話を戻しました。多分、さつきと同じ空気になったからでしょうね。

「勉強ってアレですか？ 数学とかいう……」

「そうですね。……そういえば、紅くん。志望校はどうするつもりだったんだろう」

「志望校？」

「進路です。……あつ」

刹那、私はその場に流れた空気を感じました。

さつきとは比べ物にならない程の、負のオーラが辺りを覆ったんです。

そんな、私はどうやら地雷を踏み抜いたみたいです。

「ま、まあ、そんな感じですかね？」

強引に変えようとはしますが、無理っぽいので私から振る必要がありません。

「この前小耳に挟んだんですけど、紅くんって料理を振る舞ったんですか？」

小耳に挟んだと言いましたが、違います。確実に話していたことを話題に持ち出しました。

「オムレツとチーズリゾットを。厨房を借りて私たち全員分を作って下さいました。美味しかったですよ」

「はあ……」

「ん？ どうされました？」

正直、家の外で料理を振る舞うことはして欲しくなかったんです。

紅くんの家事スキルは、その辺の一般家庭の主婦並ですし、下手したらそれよりも上です。18にしてはかなり出来るものですから、現実思考の異性からは色々思われていたそうです。赤城さんなどのその他不特定多数はその色々の片方を取ったみたいですけどね。

「私は外で出さないように、って言ってきたんですよ。色々面倒なことにになりますからね」

「その素振りですと、面倒なことを経験されたので？」

「ええ。……ホワイトデーとか、色々です」

「ホワイトデー？ ……ああ、アレですか。確か、紅提督はマカロンを……」

ほら、言わんこっちゃないです。やっぱり、面倒なことになってるじゃないですか。

紅くんは昔、ホワイトデーのお返しを『手作りをくれたのなら、手作りです』と言って作ったことがあったんです。

その時返したのは2つでしたが、それが話題になって次の年に大量に作る羽目になったことがあったんです。

「はあ……。紅くんのアホ」

「え？ 何か良くないことでも？」

「良くないですよ。本当に……」

私がいざなりしている一方で、赤城さんと金剛さんはニコニコしています。

お返しがよほど……。

よくよく考えてみると、この鎮守府には100人単位で艦娘がいます。その全員から貰っていたとすれば、どのくらいの数を作ったんでしょうか。

「ホワイトデーの日、紅くんの様子はどうでした？」

「確か……目の下が黒くなって」

きつと半徹夜したんでしょうね。

私の予想では、ラッピングを終わらせてその場で寝てしまったんでしょう。ですけど、執務がありますから、いつも通りの時間に起きたに違いありません。

「あの日の執務室はともいい香りでしたよ！ 紅提督の私室にはマカロンが入った箱が一杯ありましたし」

絶対、半徹夜したでしょうね。

「あれ？ ましろさん？」

律儀ですし、そういうところは気にかけるタイプですから、ちゃんと返すために。

それにしても、一体何個作ったんでしょうか。

「ましろさん？ おーい」

1人1個な訳ないですから、きつと何百個と作ったに違いありません。

「え？ ましろさん？」

8時間以上掛かっているに違いありません。

「ましろさんっ?!」

「しっかりするデース！」

身体は資本ですよ。紅くん。

戻ってきてても前途多難ですよ。私は不安です。

「気を失ってるデース！」

「ましろさーん!!」

私を呼ぶ赤城さんと金剛さんの声を聞きながら、意識を手放しました。

第39話 全て

気絶した私はすぐに目を覚ましました。

あれ以来、正門前では膠着状態が続きました。来る日も来る日も動きは無く、ただ緊張だけが辺りを包みます。

結果を先に言ってしまうえば、横須賀鎮守府側では無い方で、第46機械化歩兵師団は陣地を構築します。それに応じて、『猟犬』も陣地を構築して対抗します。正門前に土嚢を積み上げ、簡易的な塹壕やトーチカを作成。正門を挟んだ状態で、一触発の状態になってしまったのです。

それから約1ヶ月が過ぎました。

陣地も補強を重ねて、より頑丈なモノに変わりました。

そして、偵察に出ていた『灰犬』が帰還したのです。偵察任務を終え、私たちのところへ報告書や消費資金などの書類を持ってきました。

「報告書です。一応、口頭でもお話ししましたが、詳細に書き出しました」

「ありがとうございます。お疲れ様でした」

私と赤城さん、武下さんと『灰犬』として偵察に出ていた4人に礼をいいつつも、提出された報告書に目を通します。

大まかな内容は口頭で聞いた通りでした。ですが、詳細な情報が書かれていて、今後の作戦の方針を決定する上で必要なものが多量に含まれていました。

「……これは」

「ええ」

報告書を見て、赤城さんと武下さんはそう言い合いました。私はまだ報告書に書かれている内容の参照、裏付けが終わっていませんのでなんとも言えません。

ですが、何かあったんでしょう。良い方にしろ、悪い方にしろ。

数分掛けて終わり、私は赤城さんと武下さんの話を聴きました。

「不味いですよ、ましろさん」

そう言ったのは武下さんです。

「そうですね。まさか、そうするとは思っていませんでした」

『灰犬』の報告書にはこう書かれていたのです。

『横須賀周辺、緊急搬送が出来る軍病院を調査。同調査にて、各軍病院には天色 紅提督の姿の発見ならず。だが、それぞれには“VIP病棟”が存在している。当病棟への潜入及び調査を行うことは不可能と判断し、撤退を余儀なくされた』

これが全てを物語っています。

紅くんの居場所は掴めなかったのです。もしかしたら、“VIP病棟”に收容されているかもしれない。ですが、その調査が出来なかった以上、紅くんがどうしているかなんて分からないんです。

これはいよいよ、動きを変えることも視野に入れなければなりません。

『血獵犬』を使いたいところですが、状況が悪いです」

武下さんの言う通りです。

現在、『血獵犬』の情報収集部門は正門に集中しており、動きの監視などを行っている最中なんです。他の部門はというと、情報収集部門が本来になっていた仕事を肩代わりしている状態ですので、同様に動かすことが出来ません。

横須賀鎮守府の諜報系実働部隊は身動きが取れないんです。

それを人間で例えるのなら、五感の幾つかを奪われている状態です。手探り、暗闇の中で音も聞こえない状態といっても過言ではないでしょう。

『灰犬』に再度偵察任務を課しますか？」

赤城さんは私に聞いてきました。決定権は私にありますからね。

赤城さんの提案はというと、鎮守府内で現状動かせる諜報系実働部隊を考えてのことでしょう。つい最近帰ってきたばかりの彼女たちに、前回よりも重い任務を課すのも気が引けるところですが、動かさないことには前に進めません。

「……数日間開けてから再度任務を出しましょう。それまでは正門前

のことを優先します」

私はそう宣言しました。

流石に休みは出す必要がありましたからね。数日間、5日間くらいは休みを出してもいいでしょう。そう判断したんです。

――

――

――

『紅葉狩り』は予定よりも長引いています。1ヶ月を準備期間としていましたが、もうその1ヶ月は過ぎてしまっているんです。

しかも、動き始めてからは状況が良くなったとは言えません。むしろ、悪くなっているでしょう。正門前の機械化歩兵師団が居るだけで、ここまで身動きが取れなくなるとは思いませんでした。

それに、第46機械化歩兵師団との交戦から、艦娘たちの動向も気になるところです。1回だけですが、あれだけの銃撃戦をしたんです。気にならない訳がありません。

現に、状況を確認するべく、多くの艦娘が確認のために外に出てきていました。

そして、正門前に築かれた土嚢の要塞を見上げて、溢したそうです。

『これは一体なに?』と。

状況説明をするにも、任務に関しては知らされていない『獵犬』たちは何も言う事が出来ず、武下さんのところへの現状確認が後を絶ちません。

幸いにも、私のところには誰も来ませんので問題はないです。ですけど、武下さん同様に、色々と鎮守府の運営に関する事に携わっている赤城さんも艦娘たちの対応をしているみたいで、地下司令部には私と金剛さん、鈴谷さんしか残っていません。

何かが起きても、司令部にいる私たち3人と、待機している夕立さんと時雨さん、叢雲さんの計6人で対応するしかないんです。

こんな時に、面倒なことでも起きたら……。

「本部棟裏手で銃撃戦です!」

一瞬で地下司令部は慌ただしく動き始めました。

通信妖精たちによる情報収集、武下さんに変わって『柴壁』に指示を出す金剛さん。そして、私に現状報告が舞い込んできました。

「補給部隊に偽装した第46機械化歩兵師団1個歩兵小隊、約20名が発砲。その場にいた給糧艦 間宮と交戦」

「間宮さん?!」

どうして、間宮さんが。そう思いましたが、考えてみればその通りかもしれません。

現在午前6時。この時間帯は、軍の補給部隊が門を潜って、本部棟と艦娘寮に挟まれたところに位置する食堂裏手で、食料の荷降ろしをしている時間帯なんです。

それはそうとして、どうして間宮さんが交戦しているんでしょうか。というか、そもそも艀装を持っているんでしょうか。

「状況の詳細をお願いします!!」

私は通信妖精さんに訴えます。

「補給受領のために出ていた間宮を歩兵小隊が攻撃。即座に艀装を展開した間宮が、装備されていた13mm機銃で応戦しています」

「13mm?!」

私の脳裏に浮かぶのは、優しげな母のような包容力を滲み出している間宮さんが、とんでもなく大きな機銃を脇に抱えて撃ちまくっている様子でした。

「……あ、えっと、増援は?!」

「近くに居た高雄が加わり、同じく機銃掃射中です」

高雄さんを生で見たことはありませんが、はい。この後は言いませ

ん。
「今すぐ動ける『番犬』1個中隊は食堂裏手へお願いシマス！ 他は小隊単位で警戒態勢デス！ 小銃を携えて巡回！」

金剛さんの怒号のような張り上げた声が地下司令部に木霊します。
指示は的確かはさておき、次々と指示が溢れてきます。

受話器を肩で挟みながら、通信妖精にも声を掛けました。

「酒保を緊急閉鎖！ 急いでクダサイ！」

酒保の緊急閉鎖を指示しました、意図は分かりませんが、するから

には意味があるんでしよう。

通信妖精に指示を出した後、受話器の向こう側に指示を幾つか出すと、受話器を置いて独り言を言い始めます。今度は艦娘への指示でしようか。

「金剛デス！ 侵入者デス！ 現在、間宮と高雄が交戦中！ 全艦娘は臨時編成を行い、『柴壁』と合流して下サイ！」

「良いからさっさと行くデス！ いつまでウジウジしている気デスカッ?!」

「ハア?! 不幸不幸も大概にしろデス！」

「ツンツンしていたって、紅提督に気持ちは伝わりマセンヨ！」

「ローストチキンにされたくなったら、さっさと偵察機を出すデース！」

『番犬艦隊』が率先して動かないでどうするデース！ それでも『番犬』デスカ?!」

金剛さんの口調がドンドン悪くなっていきます。

私の予測ですが、艦娘たちが思ったほど外に出て、『柴壁』と合流しないからでしょうね。その様子はモニタに映されていますから、確認しながら怒鳴っているので内容にも領けます。

それにしても、金剛さんが怒鳴っているところを始めてみました。数十秒もすると金剛さんは落ち着きます。モニタにはこれまで顔も見てなかった艦娘たちが、緊張した面持ちでゾロゾロと艦娘寮のロビーから出てきます。早歩きよりも早く、駆け足よりも遅いです。

出てきた艦娘は蜘蛛の子を散らすように四散し、それぞれの相方であろう艦娘と合流し、『柴壁』とも合流します。

「……戻りました」

そんな時に、赤城さんが地下司令部に戻ってきました。

きつと、赤城さんのところに来ていた艦娘たちも、金剛さんの呼びかけに応じて『柴壁』と合流しに行ってしまったんでしよう。

程なくして、武下さんも戻ってきます。

「状況は聞き及んでいます。銃撃戦の状態はどうですか？」

赤城さんが通信妖精に現状報告を求めました。

「現在、間宮高雄両名が機銃掃射で応戦中。但し、当てはしてないようです」

少し鼻で笑った赤城さんは、次の指示を出すみたいです。受話器を取り、指示を出しました。武下さんが戻ってきていますので、その役をやることはありません。ですが、タイムラグを考えてのことなんでしょう。

その時はそう思ったんです。ですが、私の思い過ごしでした。

「現場へ急行中の全『柴壁』へ」

「『包囲殲滅』をお願いします」

武下さんが立ち上がりました。

「待って下さい！ 『包囲殲滅』なんてしてしまえば?！」

受話器を置いた赤城さんが武下さんの方を向きました。武下さんは私の近くで座っていましたので、私のところからも赤城さんの表情は見て取れます。

赤城さんの目は正常ではありません。それに、血走っている訳でもないんです。

その眼から滲み出る赤城さんの思考は、私や武下さんには到底理解できないものでした。それに、きつと何かを感じたんでしょう。それは私も感じていて、それを否定しています。ですけど、赤城さんはきつと分かってしまったんです。それは金剛さんや鈴谷さんも同じようでした。

「分かっていますよ、武下さん」

ゆっくりとその場から移動を始めた赤城さんに、少ない照明の光がその姿を照らします。

より、表情が鮮明に見えるようになり、その眼が何を語ったのかが分かるようになりました。

「米特殊部隊のような状況でもありません。それに、相手は私たちの

背中の後ろにいる日本皇国の陸軍。彼らはこここのことを知っています」

ああ、もうダメだ。私はそう心の中でつぶやきました。

「そして陸軍が守るのは、日本皇国の土地と民です。そんな彼ら、もとより私たちが守る必要がどこにあるでしょうか？」

不気味に嗤う赤城さんは、異様に口角を釣り上げます。

「そのような“モノ”が、この横須賀鎮守府に土足で上がり込み、空気を汚い吐息と硝煙で汚したですって？」

地下に居るにも関わらず、突風が吹き付けたような衝撃を受けた直後、体感温度は断崖から落ちるような勢いで低下します。

身の毛が逆立ち、鳥肌が立ちます。そして、それに伴い、冷や汗が背中を伝い始めました。

『血獵犬』を現時刻を持って任務を放棄。横須賀鎮守府周辺の軍病院へ強行偵察して下さい」

「これより、正門前の“敵”を掃討します」

赤城さんは独り言を始めました。

「現在屋外へ出ている全航空母艦へ。これより、全艦載機発艦。別命あるまで待機です」

否応無しに一方的に艦娘間のコミュニケーションを済ませると、現状を半ば信じられていない私に、赤城さんは話しかけてきたんです。

「ましろさん」

「……はい」

消え入りそうな声で私は返事をしました。

その時、赤城さんが私に向けていた表情は、いつもと同じでした。温かい、優しい笑顔。

「なんとなく、分かっていたことなんです。貴女が説いてくださったことから、紅提督のことを信じてましたから、私は小さな希望にすぎるところにしたんです」

赤城さんは人差し指を立て、左胸、太もも、足の甲を順に指を指しました。

「5分です。“あの時”、衛生部隊が現場に到着したのは」

私は記憶を掘り起こします。

「あの廃工場から一番近くの軍病院までは、確か飛ばして片道8分で
す」

同時に、私が居た世界でのことを思い出しました。

心肺停止・呼吸停止・多量出血の経過時間による死亡率です。目安
ではありますが、心肺停止だと5分。呼吸停止だと15分。多量出血
だと1時間で100%死亡します。

当時の紅くんの症状は心肺停止と多量出血。経過時間は約13分。
それよりも前に、足の甲と腿を撃たれて血を失っていますので……。

「……静かに私たちは嘆いていました。そんな時に、希望を見せてく
ださったましろさんに付いていこうと、こうして艦娘が集まったんで
す」

「……実は分かっていたんですよね、金剛さん」

赤城さんは金剛さんに言いました。

金剛さんは首を縦に振ります。

「一般的で目安ではありませんが、”奇跡”を信じてみたかったんデス
ヨ。私はその場に居合わせては居ませんが、紅提督の着任も”奇跡”
だったんデス」

「ふふふっ。流石、金剛さん」

既に思考が麻痺しかけていた私に、赤城さんは声を掛け続けます。

「……武下さんはどうしますか?」

主語のない会話が目の前で繰り広げられます。

「……赤城さんたちは」

「ええ。”行きます”」

含みのある言葉が交わされます。

「私たちは付いていくことが出来ません。これ以上、厄介にはなれま
せん。ですからっ!!」

映る武下さんは、握りこぶしを作りました。ミチミチと音を立て、
静かに呟きます。

「私は、私たちはっ……」

プツンと私の中で何かが切れました。

麻痺していた思考は回復し、揺れていた視界も元通り、鮮明に映ります。

そして、私は自分が自分で無いような感覚に囚われたんです。

第40話 集会

武下さんを遮り、私は宣言します。

彼らが云うことなど、私には関係ありません。彼女たちについていけないということなら、そういうことなんでしょう。

「私は、戦います」

許容量オーバーしている脳が、辺縁系が、本能が私の口を動かします。

「この国に愛国心なんてものもありません。そもそも、私は日本国の国民です。日本皇国なんて国の人間ではありません」

言葉を失っている武下さんを無視し、私は赤城さんに意思を伝えま

す。

「赤城さんたちが何をやるかなんて、私には全く分かりません」

ああ。私は何しにここに来たんでしょう。

弟を、紅くんを探しに来たのではないんでしょうか。

それなのに私は小銃を、短機関銃を、拳銃を、ナイフを握っています。本来なら、この手に握られているものは、お日様の香りがするシートに、患者さんに届ける薬だったはずです。

人を救う仕事をしていた私が、どうして人を殺す道具を持っているんでしょう。

「私も紅くん同様、何もかもを失いました。ですから、だからこそ、何も残っていない人間だからこそ、出来ることがあると思うんです」

「ま、ましろさん？」

赤城さんが少し動揺を見せました。

私は構わず話を続けます。

「全てを失った人間なんです」

裾を握りました。

「武下さん」

「……はい」

「紅くんの『遺品』はありますか？」

赤城さんや金剛さん、鈴谷さんはギョツと目を見開き、武下さんは

ギチつと歯を鳴らします。

「執務室と私室にあるものが全て“遺品”となりますが、あそこにあるものは“遺品”と言って良いものか分かりません」

ポケットに入っている紅くんの認識票を撫でました。

「常に身につけていたものは？」

「何も……ありません」

武下さんは答えます。その脇で、金剛さんがつぶやきました。

「軍刀……」

「軍刀？」

「紅提督は軍刀を身に着けていマシタ。拳銃は『私たちが居るから』と言って強引に私が捨てましたケド……」

よく分かりませんが、よく士官が持っているような刀のことでしょうか。

紅くんも持ち歩いていたんですね。

「……あの時も軍刀は腰にあったよ」

鈴谷さんがつぶやきます。

「……奪還作戦です」

「……………」

「……………」

「……………」

この日、私と赤城さん、金剛さん、鈴谷さん、武下さんが『紅葉狩り』を中止する宣言と共に、第46機械化歩兵師団掃討が行われました。

本部棟裏で間宮さんと高雄さんが交戦していた1個小隊は全滅。そのまま、正門前に構築されていた第46機械化歩兵師団の本拠地を『猟犬』と『番犬』によって強襲。

殲滅に成功しました。

休憩のタイミングを狙ったからでしょう。半分の兵士が武装解除、降伏しました。

両手を挙げ、武器を持っていないことをアピールする兵士たちを、『猟犬』と『番犬』は一人ひとり身体検査を行い、そのまま地下牢へ投

獄されます。

この強襲にて、数多くの兵器を私たちは鹵獲します。戦車、装甲車、自走砲、武器弾薬……。

そのリストを作成し、車体に書かれた部隊認識用の数字を剥がし、私たち用に数字を書き直しました。

そして、全てが終わったのは3日後。

例の戦闘で出ざるを得なくなった艦娘たちは、そのままその空気に流されて鎮守府内を警戒しますが、赤城さんの指示でグラウンドに集められます。

そこには鎮守府に籍を置く艦娘はもちろんのこと、『柴壁』や酒保の従業員、鎮守府のために働いている人間たちも全員集まりました。

そんな中、赤城さんはマイクを片手に話し始めます。

「先日、大本営より発表がありました」

淡白に。それでいて、淡々と赤城さんは語ります。

「日本皇国海軍横須賀鎮守府艦隊司令部の提督、天色 紅提督は、半年以上に死亡が確認されました」

こういう時には、ざわざわとなるものでしょう。ですけど、なりません。誰一人として声を発しません。

「大本営はこのことを秘匿、紅提督の部下であり“家族”であった私たちに、何も教えてくれませんでした。私はこれまでに何度も何度も、紅提督の容態を聞き出そうと努力していましたが、遂に今日分かったのです」

静寂に包まれているグラウンドに赤城さんの声だけが木霊します。

近くにある海の潮の音も風の音も何も聞こえません。

「ですがそれは、私たちが数少ない情報を基に求めたモノです。真実は分かりません。ですが、一般的に、常識的に考えれば亡くなっていることが当然の状態です」

ただ、『撃たれた』としか知らされていないなかった、『重体』で『助からないかもしれない』としか知らされていないなかった艦娘たちも、目尻に涙を溜めます。

「……皆さんに問います。私たちの帰る場所は何処ですか？ 私たち

「が守るべきなのは何ですか？」

「誰も答えません。私には分かりませんが、答えは1つしかないでしょう。」

「皆さんが分かっているから、共通意識だから答える必要がないんです。」

「ここにまた1人、全てを」失った」人がいます」

「私のことでしょう。集められる直前、私は赤城さんから言われていました。」

壇上と呼ぶと。

「行方不明になった家族を探しに、何もかもを捨ててこの世界に来た人です」

「暗に私のことを指しています。それに答えるかのように、私は壇上に上がり、赤城さんの横に立ちました。」

「私は『柴壁』『血猟犬』所属、天色 ましろです」

「グラウンドに集まった大多数の艦娘の表情が曇ります。まるで、雷を食らったかのように広がりました。」

「私はこの世界の人間ではありません」

「……そういうことなんです」

赤城さんは一息置くと、話を進めました。

「今回集まっていたいたしたのは、私たちの今後を決めるためです。紅提督が亡くなった今、私たちを指揮できる者は誰も居ません。それでも尚、戦いを強要されるのなら、私は抗おうと思います」

「艦娘たちが隣同士で話をしているみたいですが、きつと、自分の意思を考えているんでしょう。自分がどうしたいか、決めているんです。」

「そして、ましろさん。彼女は戦うと宣言しました。さて、何と戦うか……」

「そう赤城さんが言った刹那、長門さんが赤城さんに訴えます。」

「赤城。彼女が紅提督の姉だと、本気で思っているのか？」

「……はい」

「異世界から来た、妄言ということも考えられないか？」

「それはありません」

赤城さんは断言します。

「彼女に証拠を求めることを要求する」

「……良いでしょう。ましろさん」

ここに来て、長門さんが私を疑りました。普通に考えれば当然のことです。

いきなり知らない人間が、紅くんの姉だと言い出したら信じられないだろう。それも、自分が信頼していた人間で、その人間が異世界の住人だったら。

少なからず、長門さんと同じ意見を持っていた艦娘が居たらしく、私の顔をじつと見ます。

一部の艦娘を除き、私は『碧 葵』という名前で通っていたから当然でしょう。『それは偽名でした。私の本名は天色 ましろです』なんて言われても、信じられる訳がありません。それが、紅くんの亡くなった知らせの後ならなおさらです。

「証拠はありません。ですが、今まで名乗っていた『碧 葵』は偽名です。本名は『天色 ましろ』。紅くんの姉です」

その刹那、長門さんの身体が光だし、光が消えると、長門さんの身体は艦装で覆われていました。

「いい加減にしろ！ 紅提督の姉だどっ?! そんなことが信じられるか!! あの男の姉だと言うのなら、この場で姿形が残らないようにしてやるっ!!」

とてつもない殺気が私に向けられました。そして、長門さんと同じように疑っていた他の艦娘も同様、艦装を身に纏い、私に砲を向けているんです。

「ましろさん。……お財布は持っていますか?」

そんな中、赤城さんは私に財布があるかと聞いてきました。

どういう意味があるのだらうと思ひ、よく分からないで財布を出します。

そんな動きに敏感に反応した長門さんの艦装が唸りを上げます。

「怪しい動きをするな。今は赤城が近くに居るから撃てないだけで、

赤城がそこから離れようものならっ！」

「長門さん。コレを見ても偽物だと言えますか？」

そう言った赤城さんは私の財布から小銭を出します。

この世界に來た時、赤城さんに言われたことを思い出しました。

『紙幣はともかく、硬貨はみたことないモノです。硬貨は使わないようにしてくださいね』そう言っていたんです。

それはつまり、私が持っていた硬貨は日本皇国のものではない、ということになります。

「硬貨か？　だが、それだけでは……」

そう食い下がる長門さんに、赤城さんは次々と出していきました。

普通自動車免許証、保険証、クレジットカード……。この世界との違いがあるかなんて分かりませんが、身分証明書として使われるものや、個人しか持っていないクレジットカードを出したんです。

「どれもこれも身分証明書……。確かに、そうみたいだが……」

そう言った長門さんに、赤城さんは追い打ちをかけました。

「決定的なものがありますよ、ましろさん」

「はい」

「貴女の国の国号は？」

「日本国です」

どういう意図があったのかわかりませんが、長門さんたち艤装を構えた艦娘は全員、艤装を下ろして消しました。

「……この人間か艦娘でなければ知らないことだな。分かった。信じよう」

「ありがとうございます。……では、ましろさんは何と戦うのか」
そう。これが私の決めたことです。

「——紅提督の軍刀奪還。そして、日本皇国への裁きです」

—————

———

グラウンドでの話はあの後すぐに終わり、解散しました。

私と赤城さん、長門さん、武下さんが執務室に集まり、今後の具体

的な方針を決め始めようとしています。

「私は戦います。紅くんをこんな目に遭わせた日本皇国と……」

きつと赤城さんたち、艦娘たちも一緒になってくれる、そう思っていた。いまいた。

ですが、違っていました。彼女たちはそんなこと、微塵も考えていなかったのです。

「分かりました、ましろさん。私たちも加勢したいですが、出来ません」

「……どうしてですか？」

「紅提督との約束です。そして、紅提督が守っていましたが……日本皇国を。自分の国でないこの国を」

「そう……ですか。ですけど、どうするんですか？ このまま横須賀鎮守府に？」

私は訊きます。戦力の大幅な低下ですが、仕方ありません。強引に引き入れても良くないですからね。

「いいえ。私たちは、出ます」

「出ます？ 何処に？」

赤城さんは覚悟を決めた顔つきで、私に言いました。力強く、ハッキリと。

「それは——」

第41話 覚悟

「それは、〃 戦場（いくさば）〃 です」

赤城さんは戦場（いくさば）と強調して言いました。どうして、戦場（せんじょう）と言わなかったのでしょうか。理由がどこかにあるはずですよ。

「私は艦娘。紅提督にお使える戦しか知らぬ娘です」

赤城さんの放つ圧倒的なオーラに飲み込まれます。

「主が亡くなったのなら、することはただ一つッ!!」

赤城さんの声が力み、自然と私も腰を据えてしまいます。

「それは、——いつまでもお使いし続けること。紅提督が何処へ行ってしまわれても、私はその隣、いいえ。後ろでもいい。前を歩き、盾になってでも私はどこまでも付いていきます」

「私が犯してしまったこと。紅提督は『気にするな』と仰いましたが、ですが、私には無理です。『自分で捨てた』と仰いましたが、違います。

『監視のために残った』と仰いましたが、違います」

「全てはあの日、あの時、あの場所。まだまだ未熟だった私が心躍らせ、高揚し、これからの生活に期待を持っていたその時からです」

「……紅提督は自殺することを許してはいただけません。自己解体申請書なんてもの、安楽死の何者でもありません。ですから、手土産に中部海域の深海棲艦を少しでも壊し、潰し、薙ぎ払うのです」

「紅提督は戦果を求めず、生存を、生還を、私たちの笑顔を最優先していただきました。私の最期の出撃は、そんな紅提督の意思に反することです」

「——艦娘の皆さん。私と共に征くと云う方は、静かに前に出て下さい」

涙を流し、袖で拭う者。憤怒を見せ、顔を赤くする者。様々な表情をした艦娘たちが、全員一歩前に歩み出しました。

「……皆さん、本当に……。いいえ……。〃 出撃〃 はましろさんに合わせます」

「……はい」

私の覚悟はとつくに決まっています。

これ以上、ここに居ても仕方ありません。これ以上、捨てるものはありません。

ですが、やり残したことは沢山あります。

仕事をする事。今は銃を持っていますが、看護師です。そのために頑張ってきたんです。

ですから、看護師としてまだ働いていたかった……。紅くんが失踪してからのというもの、職場の同僚や上司にはものすごく迷惑を掛けてきました。ですが、やりたかったこと。“誰かの命を救うこと”をしなかったです。

もつと遊ぶこと。まだまだ若いですから、友達と旅行へ行ったり、家族で遊びに行ったりしたかったです。仕事で疲れた身体を癒やしに、温泉巡りとかもしたかったです。

親孝行すること。ここまで育ててくれた両親に、これまでの感謝をしたかったです。家はいつも温かく、居心地が良く、心の休まるころでした。

そんな環境を作ってくれた両親に、皆さん迷惑を掛けた両親に、いつも心配してくれた両親に、“ありがとう”って言いたかったです。

私の中から溢れ出てくる“やり残したこと”は、涙として私の中から出ていきます。

涙が頬を伝う感触は、辛かったときや嬉しかったときのそれとは違います。

この涙は一体、なんの涙なのでしょう。

「ましろさんー」

そんな私を呼ぶ声が聞こえました。

その先を見てみると、そこには西川さんがいました。

「ましろさんっー」

沖江さんがいました。

「ましろさんー」

南風さんがいました。

「ましろさん……貴女だけに行かせたら、私たちは紅提督にどう顔向けすれば良いんですか?」

武下さんが言いました。

それはつまり、武下さんたち『柴壁』も来るということでしょう。

「分かりました。……ですが、良いんですか?」

私は訊きます。誰にでも聞こえる、大きな声で。

そうすると、返事は点々と聞こえてきました。

「保険金は大量に掛かっています。もし、深海棲艦に完全に海を奪われたとしても、陸深くまで逃げて不自由のない生活が出来るはずですよ」

「私には家族が居ません。父は深海棲艦に、母は過労で……。私もう、失うものはありません!」

「紅提督に付いていくと決めたんだけ! 彼を守り抜くと決めたんだけ!」

ポツポツと聞こえてくるそれは、普段聞いていなければ同情なんてしたでしょうが、私はそんな気持ちを微塵も持っていないです。

「私も、家族はいません。ですが、横須賀鎮守府が私にとっての家で、ここに居る皆が家族なんです!!」

「俺も!」

「私も!」

聞いていれば、大多数は家族を失っている人たちばかりでした。

だいたいは父を深海棲艦に殺され、母は過労やら身売りやら、自殺やら、事故死やら……ときには深海棲艦にと聞こえてきます。

「……武下さん。準備を整えるには、どれくらいの時間がかかりますか?」

「精々、5日間というところでしょうか。鹵獲した装備の慣れ、部隊の再編成、作戦立案……作戦はあってないようなものですか」

「ええ」

私は再び、正面を向きます。『柴壁』全員がいる方向を。

「私たちの目標は、紅くんの軍刀を奪還すること!」

全員の顔が引き締まります。

「きつと、強固なところに保管されているはずです。それならば、守りはそれそうおうになることが予想されます」

私の頭の中に、ぱつと作戦が浮き出てきました。

「……ですので、作戦を思いつきました。後日、通達します」

私がそう言うと、赤城さんはこの集会を閉めようとしてました。

ですが、それをある人物が止めたのです。

「待って下さい！ 私たちは、酒保の私たちは!!」

様々な格好をした酒保の従業員たちは、私に向かって覚悟を決めた表情を見せつけます。

「……どうしたいですか?」

「もちろん、戦います!」

「貴女たちは『柴壁』とは違う、と聞いてきますか?」

「私たちは自分の意思でここに居ます。ですから、私たちも気持ちは一緒です!」

酒保の責任者の人が叫びました。

「ましろさん。部隊の再編成に彼女たちも入れます」

「そうですね……。分かりました!」

これで、私たちの今後の方針が決まりました。

私と『柴壁』、酒保は総力を以って、紅くんの軍刀奪還に出ます。赤城さんら艦娘たちは、私たちのタイミングと合わせて“出撃”します。

これで決まりなんです。

—————

—————

—————

作戦名『甲』。

日本皇国海軍横須賀鎮守府艦隊司令部の陸上総戦力を以って、軍重要施設を攻撃する作戦。

部隊は2分し、片方を陽動、もう片方が本命として、大本営に強襲を掛ける。

陽動部隊は少数にて行い、松代の日本皇国軍第二司令部を攻撃。その後、本隊が大本営を強襲。紅の軍刀奪還を目指す。

これに伴い、戦力の再編成を行う。

本隊：『闘犬』第1〜4中隊。総勢約1100名。『ケージ』第1中隊（鹵獲戦車隊及び自走砲1個中隊）。

陽動：『闘犬』第2〜6中隊。総勢約400名。『ケージ』第2中隊（鹵獲戦車及び自走砲1個中隊）

注：再編成に伴い、『血猟犬』、『猟犬』、『番犬』を解体。同じく、酒保も解体。

第42話 早朝

明朝。私たちは、再びグラウンドに集まっていました。

日もまだ昇らぬ時間だと言うのにも関わらず、この場に集まっていた人々、艦娘たちは目をギラギラとさせていました。

興奮で眠れなかった、そんな事を口にする者は誰もいません。

この激動の数日間の最終日。ここに、私たちはピリオドを打つので

す。

「……おはようございます」

赤城さんは一言発します。ですが、それに返事はありません。

「昨日は良く眠れましたか？」

これにも返事はありません。並んでいる艦娘、人々はそれぞれ完全に戦闘態勢に入っていました。

艦娘は艤装は身に纏っていませんが、これまでに私が見てきたそれとは全く違う雰囲気醸し出しています。

人々はそれぞれの所属毎に並び、統一された服装をしています。B DUを着込み小銃を持ち、弾倉をからだから引き下げ、手榴弾を引っ掛けています。

バックパックには医療キットや破碎用爆弾、パソコン……それぞれの特技を活かすものを詰め込んでいます。

そして、遥か彼方。眼下に整然と並ぶ列の向こう側がキラリと光ります。

それを合図に赤城さんは話し始めました。

「——これから皆さんは死にに征く訳ではありません」

「私たちが間違えながら、迷惑を掛けながら守り抜いた。私たちの“提督”を、殺めた者への復讐に征く訳ではありません」

「いつだって彼は仰います。——人を殺すな、と」

「ですから、“あの時”も私たちは動かなかったのです」

「ですから、“あの時”の私たちは踏みとどまったのです」

グラウンドの壇上に、集まっている全員の視線が赤城さんに集中します。

「私たちが艦娘で無くなる時——それは、己の心が殺意で溢れた時です」

「いつだって彼は仰ってました。——艦娘も人だ、と」

「ですから、あの時」、私たちは彼のために動いたのです」

「ですから、あの時」、私たちは彼のために覚悟を決めたのです」

鳥のさえずりも聞こえなくなり、遠くで自動車の走る音だけが、赤城さんの声以外にも聞こえてきました。

「——彼」はこの世界の人間ではありません」

赤城さんの言う「彼」は、紅くんのことを指しています。ですが、あえてその名前を言わないでしょう。

「私たちが『海軍本部』の意向に従い、行動し、条件を満たすこと。それで私たちは「彼」をこの世界に呼び出すことが出来ました」

「それが間違いだったか……。答えを出すことなど出来ません」

「家族を失い、友人を失い、これまでに積み上げてきたものを失い……。何もかもを失った。——私たちが「彼」に返したモノです」

「なら、私たちは何を受け取ったのか？——提督という指

揮官、温かみ、優しさ、楽しさ、笑顔……」

「先ほどは答えを出すことが出来ないと仰いましたが、違います。もう答えは出ています」

「——私たちは何一つとして返していない」

「「彼」に心配を掛け、心労を積ませ、傷を負わせ、最期には自らの身体までも奪ってしまった」

「——なら何故、今になってこのようなことを始めたのか？」

赤城さんが私の方を見ました。

「何も知らない」「彼」の姉がここを訪れたからです。『行方不明になった家族を探しに来た』そう、初めて会った時に仰ってました」

「この世界で何が起きているのか、どんな状態になっているのかも知らない状態で」

「ただ純粹に探しに来たのにも関わらず、今ではこの場で私たちと共

に立っています」

「小銃を持ち、弾倉を下げ、手榴弾を掛け、BDUに身を包んだ姿で」

「彼」はきつとこんなことを望んでなどいないです」

「彼」はきつと私たちがこれからすることを望んでなどいないです」

赤城さんの声が少し張ります。

「この世界に」彼」の名前は残るでしょう。「彼」が成し遂げた実績は残るでしょう。ですが、「彼」そのものは？ 「彼」が何を思っていたかは？ 「彼」が何に苦しんでいたかは？」

「この世界で」彼」の名前は残っても、このことは残りません」

「この世界で」彼」は道具としての名前しか残りません」

「彼」は何が好きで、どんな性格で、いつも何をしていたか……きつとどうでも良いんですよね？」

「彼」は何に悩み、何に苦しんでいたか……きつとどうでも良いんですよね？」

「彼」に何を行い、どう傷ついたか……きつとどうでも良いんですよね？」

更に、赤城さんの声が強まります。

「誰も」彼」を見ていない！ 上辺だけを見て、『提督』としての振る舞いを見て、実績を見て、ただただ深海棲艦との戦争の指揮をしている人間だと思っていないくて！」

「艦娘を指揮する青二才だと云い、小娘を戦争に駆り立てる犯罪者だと罵り、戦争から目を逸し、視界から外し、何も見てこなかった……」
「それを、今度は戦闘行動が止まれば怖がり、すがりつき、名前を呼び、おだて、顔色を伺い、ヘラヘラと嘲笑って調子のいいことをベラベラベラベラと……」

刹那、赤城さんの目が血走りました。そして、それと同時に殺気が辺りを包みます。

「あなた方の中には誰が立っていますか？」

「あなた方の生活は誰によって守られていますか？」

「あなた方がどうして何ら変わりのない日常を送れている

るのだと思いますか?」

「あなた方の命、誰が守っているのだと思いますか?」

「政府? 警察? 軍隊?」

「答えはNOです」

「正解は—— 天色 紅。私たちの提督。横須賀鎮守府艦隊司令部の指揮官。異世界の人間」

「—— 未来を奪われた青年」

「あなた方の座っているその場所、いつも楽しんでいる嗜好品。道路に敷いてあるアスファルト。食べている食べ物。給料……全ては、“彼”によって取り戻された、いつもの風景。いつもの町並み。いつもの生活」

陽が少し顔を出し、辺りが一気に明るくなってきました。

それに伴い、私のいる場所。整列している正面から見えるところで、チカチカと反射するものがありました。

「“彼”を失った時、時間は巻き戻りました。風景は灰色に変わり、いつもの町並みは荒れ、怯える生活。唯一、食料の供給は安定していませんけどね」

「—— 今更気付いても遅いです」

「—— 今更気付いてもどうしようもないです」

「—— 今更気付いても何も出来ません」

赤城さんが力みます。力が入り、声を張り上げました。

「私たちは、これより天色 紅提督の不当な扱い及び目を背けられしてきた真実を訴えます」

「そして覚悟しておいて下さい。あなた方が何を敵に回したのかを……」

「先日、ここ横須賀鎮守府は陸軍第46機械化歩兵師団に攻撃を受けました。攻撃内容は鎮守府の鎮圧」

「ここを、横須賀鎮守府艦隊司令部を、この世界で唯一“彼”の帰る場所を、汚れた硝煙と吐息、体液で汚した者たち。そして、それに組した者たちを私たちは許しません」

私の立っているところから見えているものとは、カメラです。

テレビ局の中継カメラがここにいるんです。
「そして私たちは宣言します」

——日本皇国海軍横須賀鎮守府艦隊司令部傘下の全戦闘部隊は、これより日本皇国に裁きを下します

——その血によって天色 紅提督の無念を雪ぎます

「これは“彼”、天色 紅のためではありません。ここにいる“彼”の姉、天色 ましろのためです」

呼吸を整えた赤城さんは、話を再開しました。

「そして私たちは、“彼”の背中を追いかけます。常に孤独で、心に傷を負い続けた“彼”に……先に旅立った“彼”に逢いに行きます」
ひと拍置いて再び話します。

「私たちは横須賀鎮守府艦隊司令部の艦娘として……」
「私は横須賀鎮守府艦隊司令部の天色 ましろ……日本皇国の罪であり罰を下す者です」

私の台詞はそれだけでした。
どうしてテレビ局が入っていたかという、真実を全国ネットで伝

えるためです。放送局はテレビ横須賀と国営放送のみ。生中継と、朝にも放送されるそうです。

私は息を整えて、赤城さんの方を見ました。

「赤城さん」

「……頼みましたよ」

先ほどまで放っていた殺気は失せ、いつもの温かい優しい赤城さんに戻っていました。

「先にいってますね」

「はい」

私はそう言つて、赤城さんに背を向けました。

もう、赤城さんの顔を見ることはないでしょう。

もう、艦娘たちの顔を見ることはないでしょう。

私は下げている小銃のグリップを握り込み、ある人物の前に立ちました。

「……いきますよ。私たちも」

「そうですね」

武下さんです。

この人が銃を持っている姿を見たのは初めてです。ちなみに、赤城さんも初めてだと言っていました。

どうやら、鎮守府が出来て以来、ずっと指揮官で外に出ることはなかったようです。

私たちの前に並ぶのは屈強な戦闘マシンと、戦車、自走砲、装甲車。

全てにエンジンが掛かっており、すぐに出れるようになっていました。

私は装甲車に乗り込みます。

「さて……」

私は腰に下がっている白い“モノ”を撫でると、声を出しました。

”出撃”

第43話 提督を探しに来た姉の話

俺は“ある事件”の処理のため、事件現場に来ていた。

俺みたいな下っ端なら到底来られないような場所が、この国始まって以来の重大事件の現場になるとは、誰も思いもしなかっただろう。

その現場はあまりに危険で、万が一にも身の危険があるかもしれないからと、上官から小銃を携帯しろと言われていたが、俺は小銃を持っていなかった。あるのは、腰にぶら下がっているナイフ一本だけ。

命令違反ではないか、そう同期に言われた。普通ならそうかもしれないが、俺はこう上司に言われていたのだ。

『貴様は……そうか』

とだけ言つて、俺が小銃を持たないことに目を瞑ってくれたのだ。

“洗浄”もなにも終わっていない。壁は吹き飛び、弾痕はどこを見ても付いていて、時より燻っている。

そんな建物の状況調査をすることが、俺の任務だ。

凄惨な現場だ。

ここでおきた事件は、味方同士の銃撃戦。否。正義の鉄槌。否。裁きだった。

「こりや酷え」

ツーマンセルの相方が、亡骸を見て一言。

この銃撃戦、仕掛けた側、“裁きを下した者”の男女比が五分だった。だから、仏様になった人も女性が居ないわけがない。

「えーっとこの人は……」

現場の現状調査が主任務だが、他にもやることがある。

この銃撃戦での死傷者の数を調べることだ。

この建物の中には、銃撃戦が始まってから俺たちが入るまでに、亡骸は1つとして運び出されていない。それには理由がある。これは上司に言われた言葉だ。

『あそこにある仏様は決して、外に出してはいけない。何故なら、“あちら”さんの殺り方が惨たらしいんだ』

その言葉を聞いた時、ただ撃たれて死んだのだと思っていた。だが、それは違っていた。

眼下は、本来白色だった筈の床はない。悪臭が漂い、気を抜いたら足を滑らせてしまう。

転んでしまえば、めでたく俺も仏様と同じ状態になってしまうのだ。

入り口付近は“裁かれた者”の屍だけがそうになっていたのだが、奥に行けば行くほどその状況は変わっていく。“裁いた者”も“裁かれた者”も同じ状態になっているのだ。

ここまで見てきた中で一番酷かったのは、ある有名な偉い人だ。

首には電源供給のための何かのケーブルが巻きつけられており、白いはずの衣服は真っ赤になっていた。そして、腹部は裂けて内蔵がぶら下がり、片足は頭部に刺さっていた。

それが天井の梁からぶら下がっていたのだ。

ツーマンセルの相方は吐瀉し、俺も我慢することしか出来なかった。

「この人も女か」

俺は周りを見渡す。特に何かがあるという訳ではない。凄惨なこの建物を、廊下を見ていただけだ。

「顔には当たってないみたいだな……。というか、美人だな」

周りを見渡したのは、廊下を見ていただけではない。

今、死傷者の数を調べるのと同時に、“裁いた者”の身元確認もしているのだ。相方は手に持ったメモに名前を書いていく。

「なんだって、あっち側には美人が多いんだ？」

「知らねえよ」

「何か知らないのか？」

相方はメモを取りながら、俺にそんな風に話しかけてくる。

「この辺にポケットが……。つと、あった。なにになに……。沖江、さん。

『番犬』第4中隊」

沖江……。聞いたことはないが、そう呼ばれていた人の顔は見たことがある。

確かに美人だった。笑った表情が眩しくて直視出来ないくらいだったのを覚えている。

あの時はただのBDUを着ている姿しか見てない。武装しているところなんて……。

『番犬』ねえ……。どういう意味か知ってるか？」

「知らない」

嘘だ。知っている。この事件の根幹に居る人間。その人間のための、その人間が唯一帰る場所を守るための『番犬』だ。

「この沖江さんって人も、あの人に尻尾振ってたんだろなあ」

あの人。こいつは分かかっていて言ったんだろ。今やこの国で知らない者は居ない人物のことを指している。

俺ももちろん知っている。

「どつち」の意味で尻尾振ってたんだろなあ？」

「さあ……」

「つといけね、確認確認。……死因は失血死。小銃弾が両腿に5発、腹部に7発、両腕に3発。計15発。……タフなあ。こんなに美人なのに」

どれだけの痛みに耐えたんだろうか。沖江さんは小銃を片手に壁にもたれかかるようにして亡くなっていた。足元には流れ出した血で池が出来、周辺には薬莖と空弾倉がゴロゴロと転がっている。

きっと、ここで倒れて意識が朦朧としたまま、小銃を撃ちまくったんだろう。

沖江さんの正面には、「裁かれた者」の肉片が4つ程ある。

「あの人」のことを追いかけていったことは間違いないな。さて、次に行くか」

相方はメモが終わったようで、俺もその場から移動を始める。

――

――

――

事件の全容は発生前から分かっていたことだった。

早朝。いつものテレビならニュース番組が放送されている時間帯。

だが、今日は違っていた。テレビ横須賀と国営放送はニュース番組を放送しなかったのだ。

理由は簡単だ。

横須賀鎮守府からの生中継が放送されていたのだ。放送されていた内容は、この事件を示唆するものだった。俺たち、否、俺は知っていたが、日本皇国の殆どの国民が知らなかったことが放送されたのだ。あの、赤い改造袴を着た女性によって。

日本皇国のしてきたこと。横須賀鎮守府とは一体なんだったのか。そして、あの人の話。

今日まで繰り返されていた日常を壊し、あの人の、俺が胸ぐらを掴んだあの人の話が語られたのだ。

俺も丁度その番組を見ていた。朝食の時間だったのだ。といつても、俺は早番だったからだが。

何気なく見ていた国営放送の番組が、ある時間を境に切り替わり、生放送になったのだ。

そしてあの赤い改造袴姿の女性が淡々と話したのだった。

同じく早番だった仲間も、食事を止めてその番組を見た。最初は色々と言っていたが、次々と語られていったものに言葉を失い、頭を抱えた。

俺は知っていたから何も変わることはなかった。だが、あの人が亡くなってしまうたのことに悲しみ、嘆いた。

その生放送の最後に、ある女性が映ったのだ。それはBDUを身に纏っているが、着慣れていない雰囲気が出ている。そして、俺にとつてはとても見覚えのある顔だった。

あのビルの上で、ぼーっと街を見ていたあの女性だ。

その女性の身の上は教えてもらっていた。あの人を探していた人ということだけが。

だが、あの人が何をしているのかを知らない様子だった。それはこの国の人間として、まずないことだ。

だったら、あの女性はなんだったのだ。どれくらい考えていたか分からないが、今日、その謎が解けたのだ。

あの女性は『天色 ましろ』。あの人の姉で、あの人を探しに来た家族。

「……………」

「……………」

「……………」

悪臭に慣れてきた頃、また“裁いた者”の亡骸の身元を確認していた。

もちろん、俺はメモをしない。調べるのは相方だ。俺はただ、周りを見渡すだけ。

「この人は、つと……マジかよ」

「どうした？」

「この人、武下っていう」

「ああ」

武下。武下大尉だ。俺があの時、牢に入っている時に咎めてくれた人だ。

あの時の武下大尉は怖かったが、良くよく考えてみれば、あれは優しさだったのかもしれない。そう思える。

『柴壁』の最高責任者だな」

「そうだな。そんな人までここに来たのか」

どういう仕組みになっているのか分からないが、『柴壁』という組織は謎が多い。

事件後、横須賀鎮守府旧警備棟から押収された多くの資料、解析が終わっている中で色々と分かってきていることがあるそうだ。

その中でも、『柴壁』という名前の由来は実に興味深かった。

『柴』。これは日本古来より、人間たちと生活を共にしていた『柴犬』から取っているらしい。そして『壁』。この意味は実に狂気染みっていた。

1つは、横須賀鎮守府の壁となり、侵入しようと試みる者を阻む『壁』。もう1つは、この事件の中心人物であるあの人の肉『壁』となること。

この『柴壁』という言葉の意味が顕著に出ていたのは、毎日の様に行われていたデモ活動だ。彼ら『柴壁』はデモ隊に何をされようと、横

須賀鎮守府にデモ隊を近づけようとはしなかったと。そして、様子を見に来たあの人の前に立ち、飛んでくるモノから守ったという。これだけ聞いていれば、度が過ぎたボディガードのようだ。だが違う。

彼らは、『柴壁』になるにあたって、誓約書を書いているのだ。記述の中には『我は何があらうとも、天色 紅を自らの命と引換えてでも守る』があったのだ。

どうしてそのような記述があったのかは定かではないが、“何か”があったに違いないとしている。

「武下大尉も……昔はとんでもない人だったのにな」

「ああ……」

俺の背中に向こう側の人。武下大尉は海軍憲兵として有名だった。厳格な姿勢、上の命令には忠実で下の教育に手抜きはしない。そして、心優しい男だったのだ。逸話は色々あるが、ありすぎて困るくらい。

最も、その話をあの人は知らなかったみたいだが。

「死因は自決、か？ 状態が分からないな。あとで入ってくる衛生部隊が詳しく調べてくれるだろう」

どんな死に方をしたのだろう。

そして、武下大尉は何を思っている……。

――

――

――

階段を登り、ある部屋に入った。そこはモノを保管するところだ。何を保管しているのかは俺たちには知らされていないが、入ることは許されていた。何故なら、ここにも“裁いた者”の亡骸があるからだ。

薄暗いところ部屋を進み、一番奥のところまで来ると、その屍があった。

「この人もあっち側か」

「それはここ来る前に聞いただろう？」

ここで倒れている人は、事前に誰か聞いているのだ。

「黒いBDUにフルフェイスマスク。バリバリの特殊部隊装備じゃないか」

「一番手こずったって云う……」

「ああ。『忠犬』な」

「そりや失礼だろう。巡田曹長だ」

この保管庫で絶命しているのは、『柴壁』の中でも特殊部隊に位置する、通称『血猟犬』の実働部隊隊長。巡田曹長。

この人は唯一、あの人に手を掛けて生き残った男だ。詳しい話は知らないが、全艦娘と当時、門兵だった武下さんらの前で土下座をしたという。

そこからの話は憶測だが、何かがあり、あの人の下に下った。そして、横須賀鎮守府の目となり、耳となり、粉骨砕身していた。それは、あの人亡くなったあとでも続き、この事件発生直前にあった、横須賀鎮守府と第46機械化歩兵師団との戦闘で指揮系統の情報を詳細に集めたことで知られている。

巡田曹長は、『柴壁』の中でも特に、あの人への忠誠が深かったそう
だ。

実際、横須賀鎮守府を守っていたのは巡田曹長と言っても過言ではないのだ。対外的な情報収集はほとんどを巡田曹長がやっていたという。

「この人はこんなところで何をしていたんだ？」

俺はこの人の顔を見たことがない。俺が横須賀鎮守府にいたあの時にも、見たことはなかったからだ。

巡田曹長がここで何をしていたか、なんて分かりっこない。

ここを襲撃した理由すら、分かっていない。といっても、ここを襲撃することを示唆するようなことは言っていたが。

「この中身が分かれば、何が目的だったか分かるんじゃないか？」

俺は巡田曹長が手を掛けているところを指差す。

そこは嚴重にロックされた金庫。その暗証コードを入力するところだ。

「……その開閉は俺たちでも出来ないぞ」

「そこに書いておけばいい。確認した上官が上に報告するだろ」

「それもそうだな」

そう言っつて、相方は書き込み始めた。

「死因は失血死。ナイフによる刺傷」

この保管庫にも、“ 裁かれた者 ” が転がっている。

入り口からここまでで30人。入り口の方はショック死、銃撃による失血死、ナイフによる刺傷、痣が多いことから殴り合いの末の絞殺。

きつと、巡田曹長が殺つたのだろう。

「背中から一突きか」

「ああ」

この人の横須賀鎮守府までの経歴は凄いの一言だ。

士官学校を卒業後、戦闘力と諜報能力が認められ、今はない『海軍本部』直轄諜報系実働部隊に配属。様々な政治工作などに参与していたのだ。

「次、行くか」

「そうだな」

俺たちは保管庫を後にした。

――

――

――

分かっていった。何れ見ることになるであろう、この人を。

あの時、あの場所で見たとこの人を。

「この人は……」

「天色 ましろ。あの人の姉だ」

「この人が……」

今まで俺が見てきた人たちは、皆、何かしらの目的があるようなところで亡くなっていた。そうでもないのなら、何かを成そうと死ぬ直前まで何かをしていたことが現場から分かった。

なのに、この人の周りからは何も分からない。

「異世界人、なんだよな？」

「そう言っただろう」

そう。この人はあの人と同じ、異世界人。

「テレビで言っただ言葉、あれって本当なのか？」

「さあ……」

嘘だ。俺は知っている。この人が何しに来たのか、もう開かれることのない口から聞いたのだ。

「あの人を探しにこの世界に来て、現実を知って、『柴壁』と共に……」
「そうだろうな。とは言っても、この人は元々政府に認知されていたんだ」

「そうなのか？」

「ああ。どうやら、この人が来たであろう時期に、大本営にある書類が届いていたようなんだ」

「書類？」

「滞在希望だ。軍事施設だから、そういう書類は一応、処理する必要があるようだ。最も、あの人亡くなってからの話だが。その時、書類には『碧 葵』という名前で書類を出している」

「どうして偽名なんか」

「理由があるだろうが、分からないんだそうだ」

これも嘘だ。俺は知っている。といっても、憶測の域から出かかっていくくらいだが。

艦娘たちのことを考慮している、ということだ。もし、『天色 ましろ』という名前を言っていたのなら、きつと“何か起きていた”に違いない。

それを恐れたこの人は偽名を使った。そして、書類を処理するのに偽名を使わざるを得ない状況にあったということだ。

「……ん？ 待てよ」

相方が突然、こつちを見て話しだした。

「お前って確か、その書類が大本営に提出されて日付の何日か前に……」

感の鋭い奴だ。

俺はあの時、あの場所でこの人に会った。その後、俺は当時、コン

ボイに載って近くを通ると聞いていたコイツに連絡を取り、この人を拾って貰い、そのまま横須賀鎮守府まで送ってもらったのだ。

「どっかで見たことのある顔だと思ったら……」

「ああ。あの時の人が、天色 ましろだ。その時は俺は名前なんて知らなかったし、きつと、この人もこの世界に来たばかりだったんだろう。よくよく考えてみれば、合点が付く」

「そうなのか？」

「ああ」

俺はこれまで“裁いた者”の方へ目を向けることはほとんどなかったが、この人だけはこの目で見た。

傷が酷い。暴行の後だってある。銃で撃たれた後もある。この人は民間人のはずだ。

なのに、“裁かれた者”はなりふり構わず攻撃したのだ。

「よく見たらこれまでのより酷いな」

「ああ。何人にも囲まれて、無抵抗で攻撃されたんだろうな」

打撲痕、叩いた痕が目立つ。それに、服がはだけていた。きつと……。

「一番酷いじゃないか」

「ああ……」

俺は今更遅いが、既に青白くなっていたそこにカーテンを破いて身体に被せてやった。

その時、あるものが目に入る。

「これは……」

この人のずれ落ちたベルトに、白いモノがぶら下がっていたのだ。それを手に取り、よく見ている。

「海軍将官の帽子、か？」

俺はそれをよく見てみた。

帽子の内側は至って普通の帽子だったが、ひと目で持ち主が誰なのかが分かったのだ。

「日本皇国、海軍……横須賀鎮守府……天色 紅……」

この帽子の持ち主はあの人だったのだ。

どうしてこの人がそんなモノを持っていたのか分からないが、そんなモノがここにあったのだ。

「マジかよ……」

「刺繍が入ってる」

「本物かつ……」

本物だ。これはあの人のものに違いない。

血みどろになった帽子を俺は手に持ったまま立ち上がった。

「ああ……」

「どうした？」

「もう、終わりだな」

――――

――

――

『臨時ニュースを報道します』

『今朝、横須賀鎮守府艦隊司令部所属の戦闘員計1500名が突如、大本営と松代の支部を攻撃。激しい戦闘を繰り広げました』

『横須賀鎮守府艦隊司令部所属の戦闘員、『闘犬』らは小火器や装甲車にて侵攻』

『目的は不明ですが、大本営と松代が再起不能になるまでに攻撃を加えました』

『どうして、こんな状況になってしまったかは、今朝、あるテレビ局の

生放送で語られていました』

『航空母艦 赤城の語りから始まった生放送。その最後に現れた女性』

『語りの内容の大部分が、先日亡くなられたと報道された天色 紅中將のことでした』

『私たちの知ることのないことが事細かに語られ、更に、日本皇国の実態までもが語られました』

『彼の思い、願い。本人の口からは語られなかった言葉を、航空母艦赤城が代弁していたのです』

『そして、最後に現れた天色 ましろという女性。彼女がこの世界で見たものはなんだったんでしょようか』

――

――

――

あの事件の次の日の朝の報道番組の内容は凄まじいものだった。

大本営と松代の軍第二司令部を襲撃した横須賀鎮守府艦隊司令部『闘犬』は、誰一人として残すこと無く全滅。

この襲撃はその日、日が落ちるまでに終わり、内部状況を確認した部隊の報告による情報で襲撃が終わったことが告げられた。

死者大本営と松代合わせて約20000名。内『闘犬』は約1500名。日本皇国軍側の被害は約18500名。大本営と松代に常駐していた部隊及び、近隣の増援部隊が全滅。

日本皇国、否、日本国で最大級の死者数を叩き出した事件となった。首謀者である天色 ましろは死亡。『闘犬』指揮官の武下も同じく死亡。それ以下、『闘犬』所属の全員の死亡が確認された。

あの事件の生還者たちは、報告書にこんなことを書いていた。

『あれは『闘犬』ではない。血に飢えた肉食獣か何かだ』

そう書いていた。それもその筈だ。彼らは主人を殺した者たちを攻撃しに来たのだからだ。

彼らは狼犬。犬ではない。己の心から殺意が溢れた“犬”たちだったのだ。

私の仕事上、どうしてもメディアよりも話は舞い込んでくる。私は彼らを狼犬だと比喻したが、現場から生還した者は違っていた。血に飢えた狼。そう比喻したのだ。

我々は何を間違えたのだろうか。ふと、これを書きながら私は思う。あの場所に居た者たち、全てがこの世から消えてしまった。

艦娘たちも姿を消してしまった。だが、行き先は分かっている。中部海域だ。

目的は不明だが、今朝方横須賀鎮守府に入った私の部下の話によると、本部棟の執務室の机の上に置かれていたのだという。赤茶色の字で書かれた出撃表が。

横須賀鎮守府に所属する全艦娘の名前が書かれていたのだ。

きつと、彼に逢いに行つたのだろうか。

大本営海軍部長官 新瑞の手記より

――

――

――

燃え上がる海上。どこを見ても燃え上がっていて、私の立っているここも燃えています。

ずっと足元で報告が流れ続けているが、私はそれに耳を傾けませんでした。

ああ。これでやっと逢いに行ける。そう思ったのです。

身体が焼けるような思いをしているはずなのに、血を流して傷口が痛むはずなのに、仲間が次々と倒れて胸が張り裂けそうなのに……。

『あ……ぎっ……』

途切れ途切れに脳内に響く声。その持ち主は、“彼”を思い続けた人。

『先に……いつてる……ネ』

「こん、ごう……さん」

辛うじて動く口を動かし、相手に私の声を届けます。

『“家”を出た……あの時は……ゲホ……』

ビチャリと何かが出た音が1つ。

『海を、埋めつ……ゲホゲホ……』

『埋め尽くして、いたつ……私、たち……ゲホゲホッ!』
『つも、もう……4人しかつ……』

片耳から声が飛び込みます。

機関停止。弾薬庫炎上。燃料槽破損。電気室浸水。

『あか、ぎ……の、突撃つ……ゲホゲホッ……陣形、役に立った……
デース』

「金剛さん……」

『きつと……提督はっ』

向こう側で吐出した音が聞こえました。

『紅、提督はっ……よくやったつ……』

「金剛さんだつてっ! きつと、褒めて貰えるに決まっていますっ!」

『アハハッ……楽しみ、デース』

『あか、ぎ。……貴女も、もう駄目なんじゃ……ゲホゲホッ……ない
ん、デスカ?』

『報告が、聞こえて、き、マース』

船体の傾斜が増幅。もう、壁に手を付いてないと立ってられないくらいです。

『私は、まだ、戦えマァ、ス』

私は付いた手の痛みに耐えながら、指示を出します。

『残っている艦載機は?!』

「2機っ! 先ほど飛び立った震電改だけです!」

その震電改は爆装をしています。500kgだったはず。無理矢理積ませたものです。

『全艦、残っている砲門は……』

『そう……。なら、目標っ! ゲホゲホッ! 前方の深海棲艦群!
撃てば当たりマースッ!』

震電改に戻ってくるように伝えました。

私の、私たちの眼下に広がるのは、真っ赤な海と真っ黒な水平線。

この海は炎と深海棲艦に埋め尽くされています。

『てえー!!』

刹那、近くで轟音が轟き、光の玉が飛んでいきます。それと同時に、爆発音。

『もう……駄目みたい、デース。今度、こそっ……』
連続して爆発音。1つ。2つ。3つ。

私の居るところにも色々な“モノ”が飛んできます。

『ああ……紅、提督う……』

『今、そっちに行く……ネ』

私の左目に、赤い光が飛び込みました。

私の身体ももう限界です。傾斜は戻らない。あちこちで爆発を起こし、余計に傾いていました。

それと、残っていた他の艦も、炎上したまま黒い水平線に消えていったのです。何も言わずに。

「戻って、きましたか？」

私は訊きます。

返答がありました。もう着いた、と。

「皆さん……」

「長い間、お疲れ様でした」

大きな爆発。衝撃でよろめき、頭を打ちます。

鈍い音が骨から直接響き、それと同時に痛みが消えました。痛いはずなのに、血を大量に流しているはずなのに。

「私も、すぐに行きます……」 処理”をお願いしますね」

赤と黒しかなかった視界が突然、移り変わります。そしてそこには……。

『赤城』

「てい……とく？」

紅提督が居ました。執務室で、いつもの机に向かっています。

『ほら、さっさと執務やるぞ』

「紅、提督？」

ぶっきらぼうですが、いつものように。

『赤城もさっさと片付けて建造行つて来い』

「紅提督……」

私を、報告を忘れてしまう私を咎めてくれる。

『また報告忘れてたらどうしてやろうか』

「紅提督っ！」

そんな紅提督が、目の前に……。

『……まあ、何もしないけどな』

すぐ手の届くところに。

『ん？ どうした、赤城？』

もう少しで届くそこに。

「紅提督ツ!!」

居ませんでした。

赤と黒の世界。私の視界には、真っ赤になった両手。

その手が地面に落ちます。その手に握られていたのは、いつの日かに紅提督から頂いた、小さい懐中時計。

「ああ……」

爆発音が鳴り響く中、発動機の音が聞こえてきました。

「今すぐ」

風の斬る音が近づき。

「そちらに、逝きますね……」

閃光。

After Story 海軍最期の指揮官

あの“事件”から約2ヶ月後。私は荒廃した大本営を背に、メディアに向かつて、国民に向かつてある発表をした。

内容は以下の通り。

『日本皇国近海の深海棲艦は沿岸部への攻撃を開始』

そう。約1ヶ月前。深海棲艦の水上打撃部隊及び空母機動部隊が戦線を押上げたのだ。

その結果、我々は完全に制海権を失う。そして、横須賀鎮守府以外の陸への攻撃を許してしまったのだ。

攻撃されたのは、東京湾内。深海棲艦は12隻編成。“連合艦隊”編成にて、前衛の水上打撃部隊による艦砲射撃後、空母機動部隊の艦上爆撃機隊による航空爆撃が敢行された。

都市部に配備を進めていた対空陣地はことごとく撃破され、軍民間人問わず、内陸部への避難を余儀なくされた。

私はというと、時間稼ぎのために前線にて陣頭指揮を取っていた。この時、佐官以上の海軍将校は私だけだったからだ。それ以外は全員あの“事件”で殺されていたからだ。

私に分担された兵力は海軍海兵約15000人。陸軍約30000人。だいたいが歩兵部隊、機械化歩兵部隊、機甲部隊、航空部隊だった。

1つの戦場に配置する兵士として、現代戦ではありえない数だ。だが、相手は深海棲艦。これだけの兵を以て挑む戦闘でも、防衛線で時間稼ぎをするので手一杯だった。

急造した混成部隊だったので、指揮系統は滅茶苦茶。しかも、それぞれの部隊は再編成したばかり。情報伝達が上手くいかずに、兵が無駄死にしていた。

避難完了までなんとか防衛線を交代しつつ持ちこたえたが、その時の防衛線は最終防衛線まで後退していた。その時の残兵戦力は約3000人。配備されていたほとんどの航空兵器と陸上大型兵器は第

2次防衛線までに破壊されていた。なので、残っていたのは対戦車誘導弾発射機。

戻ってきていた兵士たちは、前線で回収できるだけの大型兵器に有効な対戦車誘導弾を背負っていた。そして、自分の身体がすっぽり隠れる程の対戦車誘導弾頭を背中に何発も抱えていた。

その姿を私は見ていられなかったのだ。

深海棲艦との戦闘に、戦車が出て来ることは無い。対戦車誘導弾を使う場面というのは、鈍足な水平飛行をしている艦上爆撃機に対してだ。

命中率は低い。だが、対空砲火よりも格段に高いのは事実だ。放つ価値はある。

だが、何故兵士たちは対戦車誘導弾を背負って戻ってきたのか。戦闘も終息しているというのに。

私にはそれが分からなかった。

はつきり言って、避難支援戦としては史上最悪なものになっただろう。

この避難は天皇陛下の勅命だった。

国民の命を第一に考えた勅命だということは、俺にも十二分に伝わった。部下にも、末端の兵士にも伝わっていたに違いない。

だが、その命令は暗に『ここで死ぬ』と言っているようなものだった。

兵士の本分は国民と祖国を守ること。

祖国の領域を守ることが危ぶまれるのであれば、国民の生命を第一にせよ、とのことだ。

もちろん、死を覚悟して臨んだに決っている。

――

――

――

『代償作戦』。私が指揮した神奈川東京埼玉撤退戦の蔑称だ。

軍人が言っている訳ではない。民間人が、国民が言っている蔑称だ。

理由は簡単。日本皇国の最後の砦が無くなった、その背景にある日本皇国軍への怒りを今回の砦がない状態での作戦にぶつけたものだった。

書類上では『神奈川東京埼玉撤退戦』となっている。

私は反論することはない。

何故なら、その蔑称は的を得ている。最後の砦を自らの手で陥落させてしまった後、自らの手で深海棲艦に立ち向かった戦闘だったからだ。

――

――

――

2ヶ月も経てば、あの“事件”の全容も分かってくる。

陸軍系情報部隊によると、『海軍本部』の諜報系実働部隊崩れの人間を使った、天色 紅暗殺計画が頭になったのだ。

首謀者は不明。だが、確実に暗殺計画がなされていた物的証拠がいくつも残っていたのだ。命令書や作戦概要、メモ。実行犯が処分し忘れたものを発見、回収したことによって判明したことだった。

その中に不可解なモノが1つ、残されていた。

これを約1年も隠していた日本皇国軍へ、国民の怒りの矛先が向いたのだ。公表前までは、今は亡き実行犯へと向いていたが。

あの“事件”で、実行犯以外にもある人間が関与していることが、あの“事件”以来、分かった。

その人間は現在投獄中。動機は不明。

マスコミの報道では『横須賀鎮守府の人間は死亡』とされていた。それは、事務棟の人間を引いたものだった。その中に、関与していた人物が含まれていたのだ。

天見空軍少尉。私が空軍への要請で、ジェット戦闘機を譲った際に指導教官として横須賀鎮守府に派遣した航空兵だ。

何故、この人間の名前が出てきたのか。

それは、天色 紅暗殺計画の準備段階に関与していたことが、実行犯の遺品から判明したからだった。

それに、あの“事件”の数日前。大本営宛に封書が届いていた。差出人は天見少尉。内容は『大本営と松代に軍を集結させろ』。受け取ったのは、空軍の将官ではなく、鎮守府へ第46機械化歩兵師団を送り込んだ陸軍将兵宛だったのだ。

あの日の陸軍の対応が早かった所以だ。だから、1日も掛からずにあの“事件”は終息したのだ。

あそこに居る限り、そのような行動は出来ないだろうとは思っていたが、事務棟に居たのなら話は別だ。

そのような行動を取っていたとしても、艦娘や『柴壁』に怪しまれることもない。

そして、実行犯に情報を流すことも容易だったのだろう。

だから、天見少尉は口を割らない。

――

――

――

この約2ヶ月間の再編成の際、海軍の部隊がほとんど残っていないことが分かった。端島にあった鎮守府も、再編成が完了する前に深海棲艦の襲撃を受け、防戦虚しく全滅した。

だから、海軍と呼べるような人間も部隊もあまり残っていなかったのだ。

私の階級は大将のままだった。あんな作戦の指揮をして、降格されなかっただけでも御の字だ。

だが、大きく海軍が残っているところがある。

内陸にある、ある閉館した博物館。ここを横須賀から逃げ延びた人々が買い取り、あるものを作ったのだ。

『日本皇国海軍横須賀鎮守府艦隊司令部祈念館』

ただ、それぞれが持ち出した新聞の切り抜きや写真、手紙、それを集めて置いただけの祈念館。

そこに飾られてるほとんどは写真だ。しかもほとんどは、横須賀にある写真店の店主が持ち出したデータによるものだった。

横須賀鎮守府の要請で写真撮影を頼まれていた店だったという。

店主が避難の際に持ち出しただけのものが飾られていた。

掛かっているのは鎮守府で行われた運動会、鎮守府文化祭（仮）、鎮守府外での横須賀鎮守府に関係の深い人物が映った写真。

私が知った顔が沢山、沢山写っていた。どれも笑った顔ばかりだった。

祈念館へ行った私は涙が止まらなかった。

私もあの“事件”の朝、国営放送の生放送を観ていたのだ。

赤城の訴えや、赤城が代弁した“あの男”の心の叫びを。

そしてそれを聴いた私は気付いたら拳銃を握っていた。あと少し、あと少し妻が止めるのが遅かったら、私も“あの男”に逢いに行っていたところだっただろう。

『海軍本部』のことは再三聞いていた。そして、水面下で対策を立てて、実行していた。だが、それでも私だけで動くには力不足だったのだ。

“あの男”が殺されることにも気付いて、注意喚起をしていたにも関わらず、それだけで終わってしまったのだ。これはもはや力不足とは言い難い。

そして“あの男”は殺されてしまった。

力足らずを嘆いても、時間は巻き戻らないのだ。

――

――

――

“あの男”はもう居ない。

私たちの罪の象徴である“あの男”は。

暗殺事件以来、艦娘とは顔を合わせて話をしていない。とはいえ、私と顔を合わせて話をしたことのあるような艦娘は赤城くらいしかないが。

赤城は私のことをなんとなく知っているのだろうか。妬ましく思っているのだろうか。

赤城が国営放送で云った言葉、『誰も“彼”を見ていない！』。この言葉で、大本営と松代は襲撃を受け、当時勤務中だった殆どの人間は

殺された。

ここからは私と上の人間しか知らないことだが、あの“事件”で大本営と松代で生き残った人間。正確に言えば、そこに駐留していた人間で生き残った人間は、私と総督、横須賀鎮守府に補給に出ていた補給部隊の指揮官だけだった。

私もあの“事件”で逃げる最中、『闘犬』と何度かすれ違ったが、攻撃されなかった。否。見て見ぬふりをされたのだ。これが何を意味するかは分からない。

生存した人間の共通点を見てみると、横須賀鎮守府に関わりの深い人物だということは目に見えていた。

私たちは生かされたのだ。多分。

――――

――

妬ましい。日本皇国を守ると誓った私が戦争を押し付けていたのだ。

明るい未来のある青年を、未来に夢見る青年を、明日への希望を持つ青年を。そんな青年に国民総人口約1億人の命を背負わせた。重い責任を背負わせた。

間接的ではあるが、『海軍本部』は海軍部傘下の組織。彼らの行動は私たちの行動と同等だと考えられる。

それでも私は“気付いた”。自らの行いに。

――――

――

――

日本皇国軍は大本営を放棄。比較的損傷の少ない（大本営と比べてだが、酷いのに変わりはない）松代の第二司令部に身を置いている。

ここで私は軍全体の再編成の任を請け負っていた。陸海空のそれぞれの部隊と装備の確認。製造出来るだけの兵器の確認や稼働できる陸軍工廠の確認。備蓄資材の確認。

やることは山積みだ。

執務室には誰もいない。補佐官や秘書もだ。

海軍はもとより人数が少ない。そして、海軍の将校は皆、あの“事件”で殺されてしまった。有能な将は居た。だが、駄目だった。『闘犬』にはそれが分からない。

横須賀鎮守府に少しでも攻撃的な姿勢を取れば、すなわち、裁きの対象となったからだ。

下士官は残っていた海兵を掻き集めに、日本中を奔走している。強引にこの前、下士官最高階級の人間を尉官に昇級させた。身を振りを柔軟にするためだった。

「せめてもの救いは、横須賀鎮守府が流した大量の資材が内陸に保管されていたこと、か」

私は手元にある書類を見て独り言をする。

大量に横須賀鎮守府が売り払った資材。節約せずとも、燃料以外は10年以上持つ量がある。だがこれは、兵器製造を完全に停止した場合のみだ。

「資材管理はそのまま継続。運び出しは常にこちらに書類を送るように、継続」

そう書類の備考に書き込む。書き終わった書類はそのまま右隣の箱に入れて、左から未確認の書類を手にとって目を通す。

「偵察隊の報告書か」

偵察隊の報告書が私のところに来ている理由は簡単だ。

繰り返すことになるが、元々人手不足であった海軍の尉官や佐官は全員死んだ。なので、私が直接、海軍の歩兵部隊を指揮しているのだ。当然、直系の上官は私ということになっている。

「……やはり、各地の鎮守府は変わらずに稼働中」

私が偵察隊に課した任務は、各地に点在する横須賀鎮守府以外の鎮守府の状況調査。

放棄された鎮守府がどうなっているか、というのは調べることをしなくてもほしい分かる。

私が調べて欲しかったのは、稼働中の鎮守府だ。

この攻勢に、彼らはどういう対応をしてどうしているのかを知りた

かった。

調べた結果は私の想像通り。

問題なく稼働中。いつも通り、艦隊が出撃しているとのこと。ただし、補給が止まっていて困っているらしい。

つまり、稼働しているにも関わらず、放棄された鎮守府と状況は変わらないということになる。

「各地へ補給任務だな。陸軍の補給部隊を回してもらおう。こちらに動く余力は残っていない」

そうつぶやき、手元に書類を用意した。総督宛の上申書だ。内容は各鎮守府への補給部隊派遣要請。きつと、総督は印鑑を押してくれるだろう。

「さて、と」

私は書き終えた上申書を別のところに置き、腰を鳴らした。体勢を元に戻し、窓から望む景色を見る。

果てしなく続く青い空。透き通る程の白い雲。あの下で行われた殺戮が嘘のようだ。

私はペンを置き、正面にある扉を見つめる。

そこに何がある訳でもない。ただ、そこを見つめたのだ。

思うことは色々ある。だが、今更何を考えても無駄だ。

日本皇国は深海棲艦との戦争に負けた。抗う術も自らの手で失くした。残っているのは、疲労困憊の兵と、溢れんばかりの避難民。そして、欲しくなかった名誉。

『神奈川東京埼玉撤退戦に於いて、貴官は指揮官として兵を導き、全域撤退の支援を成し遂げた。ここにその働きを表し、栄誉を与える』

そういう言葉を受けながら受け取った勲章。

数多と受け取った勲章の中で、最悪なものだった。

そして、その勲章を見て思い出す。大本営に散っていった者たち。私が送り出した精強な兵の成れの果て。心優しき戦士たちの成れの果て。私の罪と罰。

私は誓った。

座っているだけでは駄目だ。立ち上がり、脚を動かし、口を開き、手

を動かす。
滅びの道を征く日本皇国を少しでも延命させる努力を惜しまない
と。

After Story 日本皇国最期の盾の話①

私の執務室には誰も来ない。

仕事は相変わらず、全軍の再編成。とは言え、先ほど終わらされた。全国の海軍海兵が松代に終結しつつあるのだ。とは言え、総数は1000名にも満たないが。

今日である“事件”から約4ヶ月が経った。

陸軍は再編した部隊で兵站を築きながら地方へ散っていった。空軍は一度統合し、そこから4つに分けた。それぞれ、それなりに近い飛行場を拠点とした航空隊を結成。四方の警戒をしながら、撤退してきた飛行場から物資を輸送している。

私は手持ち無沙汰になってしまった。海兵が到着するまで、処理する必要のある書類が無いのだ。

そんな時、私の執務室の扉を叩く音がした。

誰かが来たみたいだ。

「開いている」

私はそう言って、手元にあった残存海兵の資料に目を落とした。

どうせ、陸軍か空軍の将校が来たに決っている。こちらで保管している装備を譲って欲しいとかなんとか。

私はずっとその頼みを突っぱねていた。もし、ここで譲ってしまえば、到着する海兵たちの装備が無くなってしまいうからだ。

だが、私の予想は大いに外れた。
入ってきたのは松代の入り口で受け付けをしている軍の非戦闘員だ。

「失礼します。新瑞へお会いしたいという方々がいらっしやってます」

「む？ 誰だ？」

「それが……身の上を全く教えていただけなくて」

私は不審に思った。

私を訪ねてくるような人間は、もうこの世には誰一人として居ないのだ。しかも、身の上を言わないとなると、誰が来たか怪しいものだ。

だが一方で、変な違和感を持っていた。

どうして、内線で話せばいいものを、こうやって執務室まで直接出向いたのか。

何か聞かれたら不味いことでもあったのか。もしくは、見られたら困るものでも何かあったというのだろうか。

私の中に思案が駆け巡る。

「良からう。海軍の将校を尋ねてくるような相手だ。たかが知れている」

そう思い、私は持っていた書類を机に置いた。

「して、私はどこに行けば良いのだ？ 会議室か？」

「いえ……それが」

そう言いかけた受付嬢の背後から、ゾロゾロと8人、部屋に入ってきたのだ。

身なりからして怪しい。だが、武器を持っているような様子はない。

この者は一体何なのだろうか。

「ありがとう。もう戻っていい」

「失礼します」

私は受付嬢を受け付けへ戻し、入ってきた8人に問うた。

「怪しい奴らめ。……だが、私に用があるということは、そうとうな物好きらしいな」

私の右手は軍刀の柄に触れた。

そんな私の行動が、この8人に見えていない訳がない。

「……なんか言ったらどうだ？」

様子がおかしい。

この8人。ロングコートやパーカーなどで肌を隠している。もちろん、顔もだ。

そして、一言も口を開かないのだ。

一体、何をしに来たのだろうか。

「まあ、ここに入れたということは、それなりの人間だとは思いますが……。悪く思うな。私に恨みのある人間は検討が有りすぎて困る」

そう。何も言わない。姿を見せないとすると、そういう考えに至るのは自然だ。

それに、私は大将。私を将とさせたのは、自らの力だけではない。一将功成りて万骨枯るとも言う。私の視界に入らなかつた、報われないう功労者だと言う可能性も否定できないからだ。

だが、私の予想は大きく外れることとなる。

「将なれば、部下に殺される覚悟もすべし。よく言う言葉だけど、たいがいの将はその言葉を理解していないわ」

8人のうちの1人が、被っていたフードを脱ぎ捨てた。

野太い男の声かと思えば、透き通った高い声。

太陽光に反射して、長いブロンドの髪が光る。そして、碧眼が開く。フードの代わりに、特徴的な帽子を頭に乗せて、碧眼が私の目を捉えた。

この顔に私は見覚えがあつた。

「横須賀鎮守府艦隊司令部 『番犬艦隊』所属 ビスマルク級戦艦 1番艦 ビスマルク以下、8名。〃命〃により、貴官の指揮下に入るわ」
そう。あの横須賀鎮守府の艦娘。

中部海域に向かい、全滅したと思われていた艦娘だったのだ。

ビスマルクに続き、それぞれがロングコートやパーカーを脱いでいく。

「同『番犬艦隊』所属 アドミラル・ヒッパー級重巡洋艦 3番艦 プリンツ・オイゲン」

「レーベレヒト・マース」

「マックス・シュルツ」

「グラーフ・ツェッペリン」

「U—511……」

「アイオワ級戦艦 1番艦 アイオワ」

「『番犬艦隊』ではありませんが、水上機母艦 秋津洲」

全員の顔が見えた。

確かに、彼女たちはあの横須賀鎮守府の艦娘だ。

「私たちは紅提督の意思を継ぐ者」

ビスマルクが私の目を見て、そう云った。

力んで云った訳ではないだろう。だが、その目力はとてつもないものだ。

強い確固たる意思。覚悟。そういうものを感じさせた。

「そして、禁忌を犯す者よ」

――

――

――

あまりに来訪者が以外すぎてショックを受けたが、私はすぐに我に帰った。

彼女たちの身なりは酷かった。

撤退戦の時に、戦闘地域に居た可能性が高い。そして、横須賀から松代までかなりの距離がある。鎮守府から出られない艦娘が、いきなり県をいくつも乗り越える旅をするのには無理がある。

身体や髪を隠していたパーカーを脱げば、私がよく見かけた服装をしていたが、煤だらけでボロボロだった。

「取り敢えず、ボロボロの身なりをどうにかしないとイケないな」

「ああ、これね」

私がそう言うと、ビスマルクはそう言って自分の服を指差した。

「制服みたいなものだから、着なくても良かったのよ。日本皇国軍の制服はあるかしら？」

つまりはこういうことだ。服を用意して欲しい、と。

私はすぐに書類の山から、調達した補給物資のリストを見た。そこに官給品の軍服が入っていた記憶があったからだ。

すぐに書類を引き抜き、確認を取る。

やはり入っていた。士官用の制服だ。ちなみに、海兵のものだから、迷彩柄のBDUだ。

「戦闘服しかないが、構わないか？」

「ええ。あるだけね」

そう応えたので、私はあるものを作った。

海兵のリストに新たに生存が確認された兵士の名簿だ。

これをビスマルクたちの隠れ蓑にする。

バレた時はその時で考えればいい。そう思った。

我ながら大胆で無計画な行動だが、仕方ない。今から抜け出して買出しに向かつて、不審に思われること間違い無しだ。

「もし無いって言われたら、このまま過ぐすつもりだったけどね」

「それは目立つから勘弁して欲しい」

私は書き終えた書類を右側の箱に入れ、ここで待機する様に言う。

そして執務室を出て行った。

ここに海軍所属の兵士は居ない。私が何か行動するならば、自分で動く必要があるのだ。

BDUを海軍所有の倉庫から持ち出し、執務室に持ち込んだ。怪しまれないよう、段ボールに入れてたので、すれ違った他の軍の将官にはバレてないはずだ。

「隣に宿直用の部屋があるが、使っていない。そこで着替えると良い」
「分かったわ」

ビスマルクたちに着替えを渡し、私は椅子に腰を掛けた。

ビスマルクたちは何をしにここに着たのだろうか。中部海域に散ったとばかり思っていたが、何かの作為があるのか。

「着替えたわ」

考えていると早いもので、すぐにビスマルクたちは部屋から出てきた。どうやら持ってきたBDUのサイズは合っていたみたいだ。

私は一息吐き、あることを訊く。

「ビスマルク」

「何かしら？」

「中部海域に向かったのではなかったのか？」

遠回しに訊いても仕方のないことだ。なので、私はストレートに訊く。

変にはぐらかされないうためだ。

彼女たちがどう意図してここにこのタイミングで現れたのか、それが知りたいのだ。

「さっき言った言葉の通りよ」

「天色の意思を継ぐことと、禁忌を犯すこと……か？」
「ええ」

「どういう意味だ？」

「そのままの、言葉通りの意味よ」

全く意味が分からない。

天色の意思を継ぐ、といえば何となく想像が付く。だが、『禁忌を犯す』とはどういうことだ。これっぽっちも分からない。

「前者は日本皇国を守ること」

言葉通りだというのなら、それ以外ない。私は分かっていた。

「後者は日本皇国に技術を提供すること」

さっぱり意味が分からない。

技術提供等しても、何が変わるかなんて分からない。それに、何を提供するというのだろうか。戦術、部隊運用法、艦娘……。戦術も部隊運用法も必要ない。今更、そんなモノを提供されても仕方のないことだ。しかも、そちらから提供されるというよりも、こちらが提供することの方が有り得そう。艦娘なんてあり得ない。もし、艦娘の何かを教えることだったとしたら、それは何になる。

国力もほとんど残っていないこの国に。

「技術提供が何故禁忌に？」

そもその謎はそこだ。技術提供自体、別に禁忌を犯すことでもないと私は考える。教えたところで、呪われるとかそういうものでもないだろうに。

「禁忌という言い方が違ったかもしれないわ。正しく言えば、災いが起こる可能性が非常に高い、ということよ。つまり、ハイリスク・ハイリターン」

かなり言葉を省略してみた。

ビスマルクは何かの軍事技術を提供し、それを使い、日本皇国が攻勢に移行する可能性がある。そして、それが成功するか失敗するか。その差が天と地との差があるということの意味しているのだと思う。

「……リスクは？」

そういう言葉を使ったということは、メリットとデメリットがビス

マルク側で明確に分かっている、ということになる。
それならば、聞かなければならない。

「日本皇国滅亡」

「っ?!」

とんでもないリスクだ。

「り、リターンは?」

「戦線の押し上げ。私たちが生き残れば、もしかしたら、今まで通りとはいかないけど、戦線に戻せる可能性があるわ」

リターンもかなり大きい。

この絶望的な状況から、元通りとまでは行かないが、力を戻せると
いうことらしい。

「さあ、どうする?」

ビスマルクは私の目から視線を外さずに言った。

だが、どうして彼女たちはそこまでしてくれるのだろうか。

今更だが、疑問に思った。

彼女たちの守るべき対象は天色 紅、ただ一人だけのはずだ。だが、天色は居ない。なので、彼女たちに守るものは残っていないはずだ。

どうしてだ。どうして、彼女たちはそんなことをしてくれるのだ。

「……考えさせてくれ」

「その回答が返ってくると思っていたわ」

想像通りだった、という訳らしい。彼女もまた、頭が切れるのだろうか。

「どうせ上申でしょう? 同行するわ」

そして、行動まで見透かされていたのだ。

とんでもない。天色はこんな艦娘を何人も……。だが、天色にはここまで頭を回す必要がなかったんだろう。なにせ、提督だったからだ。

「上申する前に色々と説明させてくれない?」

準備を始めようとしていた時、ビスマルクがそう言って私の動きを止めた。

何か説明する必要のあることでもあるのだろうか。

「良いだろう。そこで頼めるか？」

私はソフアーを指差した。

松代に来て、一度も座らなかったソフアー。ここを訪れるのは報告に来る下士官だけだからだ。座って長話をする必要もない。

「分かったわ」

そう言ってビスマルクも了承してくれたことだし、少し長話をしよう。

上申はそれからだ。

――

――

――

「まずは私たちがどうしてここに来たのか」

それが最初だろう。

「私たちはさつきも言ったけど、横須賀鎮守府艦隊司令部所属『番犬艦隊』。つまり、紅提督の非常時の近衛兵。否。近衛艦と言った方が正しいのかしら」

少しジョークを交えてくるが、そんな余裕が彼女たちにあるのだろうか。

「そうなった理由から説明しなきゃならないけど、良いかしら？」

「構わない。その辺りの情報は全く分かっていないんだ」

「そうでしょうね。貴方たちが鎮守府から持ち出した資料の殆どは、機密文書ではないもの。機密文書は中部海域に向かった赤城たちが、出撃前に焼却処分していったわ」

知らなかった。あそこから持ち帰って文書はどれも、私たちが知らなかったことばかりだったからだ。とは言え、たしかに考えてみれば機密とはいえないものばかりだった。

「原型は紅提督暗殺未遂事件。その対策として、赤城さんが比叡、夕立、時雨、朝潮で構成した、紅提督直掩の護衛艦隊。通称『番犬艦隊』よ」

「任務内容は常時艤装を身に纏い、身辺警護を行う。トイレとお風呂

以外ね。編成理由に関しては、自明よ。暗殺者から紅提督を守るための最終防衛線の役割が与えられていたわ。『番犬』と名称が付いた理由は、犬のように嗅覚を研ぎ澄まし、いち早く危険を察知。これを迎撃出来るだけの力を持ち合わせ、冷静な対処を行える艦隊、という意味が込められているそうよ」

「そこから暗殺未遂事件は終息。その後、構成艦娘を入れ替え。比叡、夕立、時雨は練度が高く、戦闘参加回数が多いため、出撃できない私たちがその変わりを務めることになったわ」

出撃が出来ない、とはどういう意味だろうか。訊いてみる価値はありそうだ。

横須賀鎮守府から持ち出した文書には、ビスマルクたちが出撃していたという記録は残っていない。他の艦娘にはムラがあるものの、出撃はしていたのだ。

「どうして出撃が出来なかったんだ？」

「沖に出れなかったのよ」

「はっ。」

「正確に言えば、沖に出ようとしたら機関が停止するからよ。後進だけは出来たから、鎮守府に戻ることができたけど」

意味が分からないが、ここで問いただしても無意味だ。

「最初は移籍組って呼ばれていた私たちだったけど、主力艦が遠方に
出撃する際には、私たちが傍に付いていたわ」

「主力艦というのは？」

「長門や金剛、赤城、加賀なんかのこと。深海棲艦に対する攻勢のほとんどが彼女たちが主軸となった攻撃艦隊だったわ」

それは文書に書かれていた。それに出撃回数や行き先を見ても、それは明白だった。

「私たちが『番犬艦隊』である所以と、そのものの意味ね」

そう言っで一息吐いたビスマルクはどうやら説明を別にパスするようだ。

「それで、何故、私たちがここに現れたのか」

グラーフ・ツェツペリンが話すようだ。

「紅提督が亡くなり、先の『甲』作戦にて『柴壁』と横須賀鎮守府艦隊司令部所属の艦娘はその言葉通り、全滅した」

あの“事件”は当事者からはそう言われていたのか。

「私たちも本来ならば中部海域に向けて出撃する予定ではあったが、お決まりの赤城のミスで外されてしまった」

お決まり、とはどういうことだろう。

私には分からない、横須賀鎮守府に居たからこそ分かることでもあるのだろうか。

「沖に出られない私たちは、自己解体をすることも叶わず、途方に暮れた。だが、出撃前に赤城があることを任せてくれたのだ」

「私たちが任されたのは、横須賀鎮守府が完全に無くなった後の日本皇国の戦力となること」

「深海棲艦に対する攻撃手段の乏しい日本皇国軍に加勢し、日本皇国の延命を図れ、とな」

グラーフ・ツェッペリンはそう言って嗤った。

「だがそれだけでは、攻撃した側が今度は味方をする虫が良すぎると、手土産を用意したのだ」

グラーフ・ツェッペリンの身体が光だし、艦装に身を包む。そして、飛行甲板のような腰にアームで固定されたところから、何かを取り出した。

「これは、設計図か？」

「ああ。F-15J“改二”？ とF-2改？」

「そちらが置き土産にいつの日か置いてったジェット戦闘機の改修機だ」

確かに図面はそうだ。だが、ところどころ変なところがある。

私は海軍の人間だから、空軍の兵器に詳しい訳ではないが、何か変だということには分かった。

それに、前に天色から直接その話は訊いていた。存在は認知していたのだ。

「元となった元型機よりも全体的に大幅に性能は向上している。F-2改なんてものは、もう原型と留めていない。性能は零式艦上戦闘機

と同等だ」

化物だ。置き土産に置いてったオンボロ戦闘機をそんなモノに作り変えていたなんて。

だが、それがいい結果に繋がったのかもしれない。

「だがこれは新規で製造する必要が……」

「ない。アップデートパッケージを用意して換装するだけだ。最も、F-2改に関してはほとんどの部品を変える必要があるから、それこそオーバーホール並に大変らしいが」

化物を通り越して、もう訳が分からない。

だが、日本皇国が抗うことを諦めていないのなら、それを受け取るはずだ。

「それが前者の説明、か？」

「ああ。ここからは後者の説明だ」

私は話を戻す。機体性能を訊いたところで、現場の航空兵がこれを扱えなければ意味がないのと、後者を見つめなければならぬのだ。

「日本皇国滅亡というのは、もし禁忌に触れた場合の結末だ。とはいえ、日本皇国だけで済めばいいが」

つまり、禁忌に触れたら世界が終わるということらしい。既に、終わっているようなものだから良いとは思うのだがな。

「紅提督はこの現象を『イレギュラー』と呼んでいた」

ここで察した。この話は私にも天色はしていた。

「こちらで運用した兵装が向こう側にも現れる、とかいうやつか？」

「ああ。だが、何故護衛艦は現れない？ ジェット戦闘機は現れない？」

そこまで考えたことはなかった。確かに、鎮守府以外の軍組織では、深海棲艦の迎撃任務で出撃していた部隊があった。あそこには艦娘も居ない。こちらの世界に元々存在していた者たちでしか構成されてはいない。

「それは、“妖精”と呼ばれる存在の息がかかっていないからだ」

「“妖精”だと？ 急にメルヘンチックになったな」

「誰もはそう思うだろう。だからこれを見て欲しい」

そう言つて、グラーフ・ツエツペリンはおもむろに、艤装に触り、何かを手の平に乗せて、私の前に差し出した。

「これが“妖精”だ。彼女たちは貴官らは知らない、日本皇国の生命維持をしている者だ」

手の平に乗る、身長が15cmあるかないかという小人。2等身で可愛らしい身なりだが、来ている服をよく見れば、それは軍服だった。「彼女たちと私たち艦娘は一心同体。引き離すことの出来ない存在だ」

そう言つたグラーフ・ツエツペリンは、自分の肩に“妖精”を乗せると、話を続けた。

「“妖精”と私たちは呼んでいるが、貴官に簡単に説明すれば、末端の兵士のようなもの。そして、航空兵であり、整備兵であり、研究員であり、非戦闘員である」

なるほど。説明が分かりやすい。“妖精”という者は、私たちと同じようなものなのか。

だが“妖精”が何か、ということが分かつたのと同時に、分からないことが出てきた。

なら、艦娘は何なのか。

既に無い端島鎮守府からのこれまでの報告書に記されていたが、艦娘は艤装の母体。海に巨艦を出している時は、艦長のような存在。艤装を纏っている時は、船を手足の様に動かす。そこに、間接的なものはない。視神経や運動神経、身体機能と艤装が連動しているようだ。「大方理解した。して、どうして“妖精”の息が掛かった兵装でなければ、深海棲艦に有効な攻撃が出来ないのだ？」

そう私が訊くと、グラーフ・ツエツペリンはすぐに応えた。

「それが分からないままなんだ。このことを調べていたのは紅提督だったんだ。その紅提督は、そちらの“身から出た錆”に殺されたかな」

つまり、調査は永遠に中断されてしまったということだ。

「つ……。惜しかった……。な」

私はつい、心の声を漏らしてしまう。その刹那、執務室の空気がガ

ラリと変わった。

冷え切った空気。張り詰める室内。明らかに、目つきの変わった艦娘たち。

「惜しかった、だと?」

小銃ほどの大きさの艦装、ミニチュアサイズになった艦砲だろう。グラーフ・ツェッペリンの右手に握られていた2基4門が、私の顔を捉えたのだ。

身体が動かなくなる。こちらに向けられた殺気は尋常じゃない。これを向けられて10分は耐えれないだろう。

「それは“人”としてか?」

鋭い目が私を逃げさせまいと睨む。もとより逃げるつもりはないが、脊髄反射で動き出してしまいかもしれない。それが逃げる行動ではなかったとしても、グラーフ・ツェッペリンから向けられるそれが発光することは分かっていた。

「ああ、もちろんだ」

そう言うと、グラーフ・ツェッペリンは艦装を下ろす。

どうやら私は正解を選べたようだ。

何事もなかったかのように、話が再開された。

「話を戻そう。……“妖精”によって製造された兵器はすべてからく、深海棲艦に対して有効な一撃を加えることができる。それは、私たち艦娘が証明している。私たちが司る艦装の全ては、“妖精”によって製造されたものだ。弾薬も一度は“妖精”に引き渡された後に、艦装に補充される」

要するに、“妖精”によって何か手を加えられ、その行為が深海棲艦と渡り合えるだけの攻撃力を与えてくれる、ということみたいだ。

「……までが前置きだ」

そう言ったグラーフ・ツェッペリンは、自身の帽子の位置を直す、話を再開した。

「紅提督から訊いているとは思いますが、もう一度伝えておく。“妖精”が製造や弾薬補給の段階で関わっていた兵装のすべてが、深海棲艦にも反映されていく。艦娘の艦装にVLSシステムを搭載すれば、深海

棲艦の水上艦、潜水艦全てにVLSシステムが搭載される。新型特殊砲弾を使用すれば、深海棲艦の艦砲もそれを撃ってくる。これに関しては前例があるな」

グラーフ・ツェッペリンは指を折りながらあれやこれやと例を挙げた。ていつた。

「超長距離大型爆撃機、高高度局地戦闘機、戦術……。私たちが試行錯誤し、試したことは全て、深海棲艦にも反映されていくんだ。但し、戦術に関しては不得意みたいだったがな」

腰に手を据えたグラーフ・ツェッペリンは腰のベルトに指を掛けた。

「つまり、先ほど見せた設計図のアップデートパッケージに換装したジェット戦闘機が実戦配備され、深海棲艦と対峙しようものなら、あちらもそれを投入してくる確率が高い」

「深海棲艦の手に落ちた海岸沿いの飛行場から、こちらに向けて空を埋め尽くす程のジェット戦闘機が飛来する可能性がある、ということだ」

これがハイリスク・ハイリターンの内容か。

確かに、とんでもない賭けだ。

だが、行動選択の余地はあった。

「依然、天色が言っていたことを思い出したのだが」

私がそう言うと、全員が黙りこむ。元々、ビスマルクとグラーフ・ツェッペリンしか口を開いてなかったが。

「我々が奪還作戦。もとい、深海棲艦の支配地域に侵攻しなければ、その現状を維持することが出来る、と言っていたのだが」

そう言うと、グラーフ・ツェッペリンは何かに気付いたようだ。

「……ふむ。だがそうすると、国力が低下した日本皇国に未来はないと思うが?」

グラーフ・ツェッペリンの言う通りだ。

現在の日本皇国に国力は無い。食料プラントも日本皇国各地に建造されたが、半分以上が海岸沿いにある。そして、内陸にあるプラントだけでは、人口約1億人を満足に食べられることが出来るか怪し

い。だからといって、プラントを増設したとしても、確保できている資料をかなり使ってしまうことになる。

選択し難い。そんな状況に置かれているのだ。

「私たちは政治が分からない。だからなんとも言えないが、攻められて何かを失ったなら、取り返そうとする動きが必ず何処かで起きているだろう。それは軍内部かもしれないし、世論かもしれない。今は無くとも、後々数年経ってから、深海棲艦に奪われた領域の奪還に動き出すのでは無いか？ 例えば、再編成が完了した軍。装備を満身に供給出来た軍」

私の目を見る。

さつき、一瞬視線がズレたが、その時に机に乗っていた軍の再編成に関する資料や何かが目に入ったのだろう。

確かに、考えられないことではない。そして、それが起きる可能性が高い。

海軍が力を失った今、陸空軍合同の反攻作戦が企てられている可能性は大いにある。深海棲艦との戦を海軍以上に知らない連中だ。きつと、安易な戦術を考えているに違いない。

そう私は思ったのだが、またそれは、私もそれと同類だ。私も深海棲艦との戦をどうすれば良いのかなんて分かりやしない。対人戦闘を想定した戦闘で行われるのは確かだ。私もそれしか知らないがために、対人戦闘を主軸に置いた総力戦を提案するだろう。

「この国の方針を決めるのは天皇陛下だ。私の印象としては、今上天皇が反攻作戦を命令するようなお人柄には思えない。何か、確固たる確信がなければ動かないのではないか？ とも考える」

グラーフ・ツェッペリンは2つの意見を出してきた。

反攻作戦が決行される。現状維持を選択する、の2つ。

私としても、後者であるとしか考えられ無い。だが、世論と、国民と共に歩む日本皇国が、絶対的に後者を選ぶとは限らない。

前者を指示する国民が少なからず居ることは絶対だ。

なら、日本皇国の未来はどうなる。やはり、見えない先しかない。そして、徐々に衰退していく。

「決断するのは天皇陛下だ。選択肢が増えることは、お喜びになるとだろう」

つまり、丸投げするということだ。

確かに、私は現場指揮官の1人でしかない。国の行く末を左右するようなこの戦に、自分の決断1つで先に進むことは愚行だ。

「先ずは総督に上申。そこからきつと、話は進んでいくだろう。その時になれば、貴官も、私たちも呼ばれることとなる」

グラフ・ツエツペリンの声だけが木霊する執務室に、緊張とはまた違った空気に変わった。

「私たち日本皇国海軍横須賀鎮守府艦隊司令部所属 『番犬艦隊』は、天色 紅提督の遺した最期の剣」

「——そして、貴官は日本皇国最期の盾」

『番犬艦隊』が私の顔を見る。

感情の渦巻くその目に移る私は、どのように見えているのだろうか。

私はある松代の第二司令部にある、総督の執務室の前に来ていた。要件はただ1つ。

現在の海軍以外の行動を聞き出すこと。海軍の運営は私が行っているので、調べる必要がない。だから、動きの全く掴めない陸空軍の情報を手に入れるのだ。

それであわよくば、話を振ろうと思う。

反攻作戦を煮詰めているのなら、『番犬艦隊』の存在を明かすのだ。私が再編成をしているとはいえ、大まかな部分だけだ。

三軍の再編成を行う仕事をしたのは私だが、そこから細かいところは、それぞれの軍で行っている。

これからの動きもそちらで決めているから、総督から聞き出そうという算段だ。

「新瑞です」

私は扉にノックし、返事を貰ってから入室する。

総督もどうやら激務のようで、部屋に入ると目につくのは、机に積み上げられた書類の数々。上に上げた書類も混じっていることだろう。

「丁度休憩しようとしていたところだ。ソファアに座って構わないぞ」

「ありがとうございます」

私は帽子を脱ぎ、ソファアに腰を掛ける。

ここのソファアも、私の執務室とは変わらないソファアを使っているみたいだ。最高級将校だからと、何か違うものを使っていると思っていたが、どうやら違っていたみたいだ。

その辺の将校と変わらない様子。

「要件は何だね？」

「ええ。……少々、お聞きしたいことがあります、お尋ねしに来た次第です」

私は普段通り振る舞い、話をし出します。

「先日、大まかな再編成を終えましたが、それ以降の動きが気になります……」

「そんなことか。……あまり海軍の方と変わらぬよ。全国に居る人員を集めに奔走、装備を集めに奔走。まあ、君のところよりも遥かに手数は多いようだがな」

「こちらは4桁も居ませんもので……」

「どうやら、書類上では同じことをしているようだ。」

だが、私が聞きたいところはそこではない。

将校たちの思案する軍事行動の有無だ。これのみ。

「陸軍の方は空軍よりも装備が小さいが故に、もうそろそろ回収も終わる様子だ。新瑞の提出した再編成を基に、指揮系統の整備やなんかも終わっているようだし、あの“事件”前とほぼ同じに戻ったようだ」

なるほど。なら、陸軍は今すぐにも行動できる、ということでしょう。

だが、空軍はどうだろうか。

総督の言い方だと、空軍は装備の回収に時間が掛かっているみたいだ。

それもそうだろう。戦闘機や輸送機、装備品、整備機材なんかを集めようものなら、大体は大型の機械になる。戦闘機や輸送機が動けないのなら、その場で解体して運ぶだろう。

私たちの動きが鈍いのは、ただ人手不足というだけだったのだ。

「今後の方針とかは、どうされているんでしょうか？」

私は少し踏み込んで訊いた。

流石に総督相手に、これは分が悪いかと思っただが、答えた。

「陛下からは、国内の治安維持に力を入れる様に」

そうきたか、と思う。

だが、まだ続きがあるようだ。

「とはいえ、陸軍部から上申書が来ていてな」

そう言っ総督は私にある書類を差し出してきた。

それを受け取り、私は目を通す。
内容はとんでもないものだった。

「放棄した沿岸部へ侵攻、ですか」

そう。私としても、好都合の上申書が来ていたのだ。

「ああ。そこからは面倒事だ。主に海軍部、新瑞にとつてだが」

総督はまた書類を差し出してきた。

それもまた、陸軍部の上申書だった。

内容は、かさばね型汎用護衛艦の建造を早急に進めて欲しいというもの、海軍部への資源配当を割譲するということだった。

つまり、かさばね型汎用護衛艦を複数建造し、再び海に繰り出す算段を立てるということらしい。

背景には思い当たる節はいくつかある。

その中の1つとして、リランカ島へ送り込んだ人員の撤退だ。

リランカには連隊規模の兵力が駐留中だ。それを失うのは惜しい。そして、そこにはいくつか揚陸艦が停泊しているのだ。

巨大な船舶1つでも、今の日本皇国には貴重な財産だ。

「……現状の海軍陸上戦力を全員水兵に転換したところで、精々運用できるのは4隻が限界でしょうね」

「分かってているじゃないか」

そういうことだ。

陸軍は港までの道を切り開き、資源を此方に割譲する代わりに、領域の主権を奪回することを海軍に引き継ごうとしているのだ。

普通に考えれば、当然のことだ。

だが、今までのことを鑑みると、やはり陸軍に押し付けられているような気がしてならない。前科があるが故のことだ。

「ですが総督」

「なんだね」

そんなことを踏まえて、私は意見する。

陸軍に押し付けられていることを前提に、話を進める。

「かさばね型汎用護衛艦を建造し、艦隊を編成したとしましょう。ここまででは順調に進めたとします。ここから私たちを阻むものは沢山

ありますよ」

「分かっている。深海棲艦への効果。艦隊の練度。連携……」

総督はあれやこれやとデメリットを挙げていく。それは全て、あり得ることばかりで考え抜かれていた。きっと、総督も考えていたのだろう。

「……なにより資源、人員なにもかもが不足している現状、横須賀鎮守府艦隊司令部のようにはいかないだろう」

そう。私たちでは、あの横須賀鎮守府艦隊司令部のようには上手くない。

郵便で戦死通知が引つ切り無しに配達される国内。資源が枯渇し、配給制になってもずっと不足したままの内地。出征していく家族。

見るに堪えない。そして、いつの日かの情景が連想されてしまうだろう。

きっと、国民は絶望するだろう。

私はそうとしか思えなかった。

「……新瑞は何か思うところは無いかね？」

そう総督は訊いてくる。

決断が下せない、そんな状況だということが暗に伝わってきた。

陛下の命令と陸軍部からの上申書。きつとこの様子だと、空軍部からも何か来ている可能性がある。

そんな中、総督は私に意見を求めてきた。

日本皇国軍の頭脳は、基本的に戦争を経験していない。

深海棲艦との戦争を経験している人間は、須らく戦死したか、生きていたとしても亡くなっている。

そんな軍の中で、最も戦争を間近に見てきた人間は、他の誰でもない私だ。

そんな私に総督が意見を求めるのは最もだろう。

そんなこのタイミングを、私はあの交渉のスタートにしようと思った。

そう。彼女たち『番犬艦隊』を使うことだ。

「……あります」

私はそう言って、少し席を外す。もちろん、総督の許可を取った。廊下に出て、自分の執務室に入ると、私は待機していたビスマルクたちに声を掛けて連れ出した。

そしてそのまま、簡潔に説明しながら戻り、再び総督の執務室に入った。

「すみません」

「構わない。……して、その者は？」

総督は私が連れてきたBDU姿の女性を指差した。

私はビスマルクたちに、被っていたBDUのキャップを取るよう指示し、紹介する。

「この者らは、日本皇国海軍横須賀鎮守府艦隊司令部所属 『番犬艦隊』です」

「よこ、すか、だどつ?!」

「ええ。横須賀鎮守府艦隊司令部所属の艦娘は中部海域に全員が向かった訳ではなかったみたいです。彼女たちは残り、“ある命”を全うするためにここにいます」

表情を崩さない、まるで人形みたいなビスマルクたちの方を見て、私は言った。

『放棄した領域の奪還し、日本皇国最期の剣となる』と

総督は目を見開いている。目の前で起きた現象を理解しきれないのだろうか。

そう思ったが、あまり時間を掛けずに、私に質問してきた。

「新瑞、どういうことだ。何故、横須賀の艦娘が我々につ……」

『天色 紅の意思』だそうです」

それだけで説明は出来た。

「諸事情で沖に出れなかった彼女たちは横須賀に残り、あの“事件”後、松代まで私のところに」

「……あの“事件”の前後の状況は分かった」

総督は腕を組み、少し考える。

ここまでのことが起きてしまうと、どうしても状況を整理して、今後の行動を決断するには時間が掛かってしまうみたいだ。

仕方のないことだが、少し時間を置く。

その間、私は何も考えない。ビスマルクやグラーフ・ツェツペリンと話したことを、そのまま総督に伝えるだけだ。

「私の提案はこうです。『番犬艦隊』を使い、最低限の領域を奪回。その後、首都機能を回復させ、現状維持に務める」

私はそう言った。

まだ、ここで『番犬艦隊』からもたらされることは伝えない。

「資源は乏しいですが、底が尽きるまでに代替案を作れば良いんです。本来の日本皇国の領域を取り戻し、国力は低下しますが、それまで通りの国を取り戻すんです」

私は淡々と言います。

「内陸部に避難し、何時深海棲艦に滅亡させられるかを怯えるか、元の領域まで取り戻して生活するか、ですよ」

私は似たような言葉を使って、同じことを繰り返した。

総督は考えた様子を止めないことから、まだ決め兼ねているのだろう。

この状況を打破する案が提示されたが、あまりに頭がないことが出てきたからだろう。

「……分かった。これは上申しよう」

そう言った総督は、陸軍部の書類を置くのかと思ったが、違っていた。

私の目の前で、その書類を破り捨てたのだ。

「陸軍部の案は不採用。私は海軍部の君の案を採用する。元の領域まで取り戻し、平行線のままで停戦する。そうだな？」

おおよそその通りだが、何となく違う気がしなくもない。

だが、大体はそういうことなので、私は頷いた。

「ええ」

そう言っ、私は立ち上がる。もう話は終わりだ。

あとで上申書を書き、提出に來ればいい。

立ち上がって帰ろうとする私を、総督は止める様子はない。きつと、私が持つてくるだろうと考えているのだろう。

――
――
――

その後、私は上申書を書き、総督に提出。

そのまま、陛下の元へ送られたそうだ。

現在は返事待ち。ことがことだけに、決定するのに時間がかかるの
だろう。分かっていたことだ。

「空軍部も細かい再編成は完了したみたいだな」

私は見ていた書類を要約し、口にした。

今ここには『番犬艦隊』が居座っている。行くところもないからだ、
と言っていた。

ちなみに、住んでいるところは宿直室。全員がそこで寝泊まりして
いるらしい。

私は宿直室で寝ないで、そのまま家族の元へ帰っているので問題な
ど起きない。

少々不安はあるが。

食事はレーション。選択は宿直室に洗濯乾燥機があるので良いら
しい。

一番の問題は艀装だ。

今、どこに置いてあるのかを聞き出したところ、ここの駐車場に止
めてあるトラックに積んであるらしい。少々の資材を積んだ状態で。

運転はやっていたら慣れた、とビスマルクが言っていた。

「そろそろ総督から書類が届くでしょうね」

私の話を訊いてたビスマルクがそんなことをつぶやく。

「ああ。作戦の草案が、な」

「……ねえ、新瑞」

書類に目を落としていた私に、ビスマルクが再び声を掛けてくる。

私の呼び方だが、どうも司令官とかそういう呼び方は出来ないらし
い。当たり前のことだが。

それで落ち着いたのが、この呼び方。だいたい艦娘も同じように
呼んでいる。私の名字を呼び捨てるか、さん付けする。

私としても、軍の施設にいてそんな呼ばれ方をするとは思ってなかったから新鮮ではある。

「もし、放棄した沿岸部の奪還作戦が展開された場合、作戦の主導権はどこにあるのかしら？」

話の流れ的に、訊いてくることは当然だろう。

私としても気になるころではある。

もし、海軍に主導権があれば、ビスマルクらの『番犬艦隊』を主眼に置いた作戦を考える。だが、主導権が他にあつたらどうだろうか。

空軍が主導権を取るとは思えない。ならば陸軍で考えるところ。

陸軍は己の戦力を鑑みて、縦深戦術を取ると思われる。

それぞれの内地から、沿岸部の要衝に向けて一斉に進軍。街の奪取を図ると思われる。

その場合、陸軍の総戦力を投入することになるだろうから、総力戦という形になってしまうだろう。

こうなってしまうえば不味いの一言だ。

総力戦になった場合、勝つても負けても戦費が嵩む。そして、負けた場合は特に考えたくない。

負けた場合は、深海棲艦の攻撃により、各地の部隊が撃破されることを指す。

つまり、総力戦で挑むこの作戦で部隊が撃破されることは、そのまま日本皇国の防衛力を削られることに等しい。

現在の海軍と同じような状況に陥るとのことだ。

「可能性が高いのは陸軍だ。空軍はあり得ない。海軍は言わずとも」

「……そうなるわよね」

「ああ」

そう。空軍と同じ割合で、海軍が主導権を取ることはない。

そもそも、この作戦は陸戦だ。海軍が主導権を握ることが出来るのは、精々強襲揚陸作戦くらいだ。

「だから効果的な『番犬艦隊』の運用は出来ないだろう。総督と陛下が陸軍に『番犬艦隊』の存在を簡単に教えるとは思えないし……」

「だから、もし陸軍主導の奪還作戦が起きた場合、余計な犠牲や戦禍が

あるでしょうね」

ビスマルクは直接は言わないが、暗に『海軍が主導権を取らないと、奪還作戦も失敗に終わる可能性が十分にある』ということを私に伝えていた。

私はそれを読み取って思考する。

現状、陸軍に主導権を握らせることほど危険なものはない。

握らせたなら最期、日本皇国はお終いだ。国内の秩序さえも保てなくなるだろう。

最悪だ。一番可能性が高い結果の結末が。

「二応、上申書には海軍主導の奪還作戦を示唆するような書き方をしたが、どう捉えられているかは分からない。最低でも総督は、この現状を私たちの次によく把握している。だが、これを決めるのは陛下だ。陛下が把握してなければ、私たちは無駄死にする」

「そんなこと、私たちはごめんよ。陸軍が主導権を取ったら、私たちは協力関係を一方的に破棄させてもらおうわ」

そう云うだろうとは思っていた。だから、覚悟はしていたが、直接言われてしまうと、それなりの衝撃がある。

「冗談でも、そういうのはよしてくれ」

「冗談な訳ないでしょ。私たちは海軍よ。現状を把握出来ない陸軍の立てた作戦に赴き、犬死するのだけは勘弁よ」

「それは私も同意見だが……」

私はそう言っぺンを置く。今やっている執務は、正直処理を後回しにしても良いものなのだ。

再編成以降、此方にはろくなモノが回ってこない。重要案件でもなければ、海軍の軍備に関することでもない。内容は読まずにサインするだけでいいものだってあるくらいだ。

「海軍主導の作戦に意見具申することは？」

「無理だと思う。きつと作戦の本隊は陸軍から捻出された陸上部隊になるだろう。そうすると、一番損害を被ることになるであろう陸軍が主導権を握るのは自明」

どの視点から見ても、その考えに辿り着いてしまう。

海軍が主導権を握る確率等、ほとんど無いに等しいのだ。

「総督や陛下に任せるしかない。聡明な総督だ。きつと、此方を選んでくれるに違いない」

そう言って私は椅子に深く腰をかけた。

やはり、総督も陛下も聡明な方だ。

上申書を提出してから2週間後。私の元に、ある書類が届いていた。

それは、現在の前線を押し上げる作戦の作戦草案を考えて提出するように、といった趣旨の命令書。出処は総督ではなく、陛下直々。

こんな命令書は、軍人何十年とやってきた私でも初めてのことだった。

考えてみれば、作戦自体が大事。国の行く末を見据えるための作戦だから、それも当然といえば当然なのかもしれない。そう考えると、こういうもので送られてくることも当然なんだろう。

私の脇でそれを見ていたプリンツ・オイゲンは、艦娘たちにそれを知らせた。

「海軍が作戦の主導権を握りましたよ」

そう報告しても、歓声が上がらぬ訳ではない。

そういう結果になるのが、当然だったかのようなリアクションをしたのだ。

むしろ、そうなって貰わないと困る、とホツとしていたのだろう。

「新瑞」

ビスマルクが話しかけてきた。

「なんだ？」

「作戦の方は考えてあるの？」

「あまり……。戦力の把握から始める必要があるから、総督に掛け合って準備する必要があるものが」

そう。作戦を草案ではあるが、立案する上で不可欠なものは、自らの戦力がどれほどなのかを把握すること。

それが出来てなければ、作戦を立案して実行したところで、どこかで作戦が瓦解するのだ。

こんなこと、士官学校で最初に教えられること。当然のことなの

だ。

「……それぞれの軍に捻出出来る部隊と装備の数を聞けば良いんじゃないの？」

ビスマルクはそう言った。

確かにその通りだ。悩んでいても仕方がないし、こちらから出せる部隊の予測をしたところでどうしようもない。

聞くのが良いに決っている。

私は机から便箋を引っ張り出し。文章を書き始めた。

3 通だ。宛は総督と陸軍部長官と空軍部長官。この2人もまた、あの事件から繰り上げで大将になった人間だ。元々は地方の統括をしていた人間らしいが、詳しいことは知らない。

最初に陸軍部と空軍部に送り、いい返事ならば総督には送らない。良くない返事ならば、総督に送り、陸軍部と空軍部に催促の文書を送ってもらうのだ。

面倒な手を使うが、同時進行しようと思うのなら、これが一番良い手だろう。

今時、電子メールでのやりとりでも良いが、やはり軍の施設だ。

電子メールだと何があるか分からない。もし、ハッキングされて自身の情報を知られて、何処かに情報を流されてしまったら大問題だ。

内容はそこまで問題にはならないが、電子メールでこういう内容のやりとりをしたことが問題として浮上してしまうということ。

手書きで文書を送るのが安全且つ確実なのだ。

「ねー、新瑞さん」

今度はプリンツ・オイゲンが話しかけてくる。

私はこの艦娘はどうしても好かない。

きつと、天色が居たならば、とても明るい少女だったんだろう。だが、今の彼女にはそんな面影は残っていない。

「草案の状態でもいいから、どんな作戦か聞かせて欲しいです」

笑顔でいることは確かだ。だがその笑顔は何処か作り物のような顔で、生氣を感じない。

口角も上がりっぱなしだ。

一言で言ってしまうえば不気味としか表現出来ないような様子なのだ。

こんな表情なのは決まって、私やなんかと話す時。

ビスマルクやグラーフ・ツェツペリンなどと話す時は、自然に笑っているように見えるのだ。

作り笑いなのは見れば分かる。

見て分かるくらいには人間を見てきたつもりだ。

「部隊の規模にもよるが、進軍経路は考えてある」

私は地図を取り出し、赤えんぴつでそこに印を付けた。

〈松代↓軽井沢〉

おおよその最初の移動先だ。

「作戦前に全部隊は松代に集合。その後、部隊は車列・隊列を組んで、一度、軽井沢に仮設されている軽井沢臨時集積場に向かう」

そのままラインを引き、軽井沢の辺りを囲む。

「軽井沢臨時集積場で休息した後、出発。今度は放棄されている日本皇国陸軍大宮基地に向かう。移動手段は変わらず」

〈軽井沢↓大宮〉

続けて、大宮に向かってラインを引き、印をつける。

「ここには装備が多少なりとも残っていると思われる。陸上部隊はここである程度、物資を搜索。回収していく」

そのまま次は大本営の辺りに印を付けた。

〈大宮↓大本営〉

「ここからは、君らの出番だ。もし、深海棲艦が東京湾奥まで入り込み、港を占領していた場合は」

そう言いかけたら、プリンツ・オイゲンが先に答えてしまった。

「開けたところで艦装を出して、艦砲射撃及び対空砲火。陸上部隊の支援、ですね」

察しが良いというか、それ以前の問題な気がするが、感が鋭い。

普通なら、陸上部隊と共に大本営に進軍。大本営周辺で艦装を出し、艦砲射撃及び対空砲火を選ぶところだろう。

だが、ここに私の狙いがあった。

「ここで展開する意図は『深海棲艦の艦載機の日を引き付けること』、『もし陸上に深海棲艦が居たならば、弾着観測射撃を行って貫うため』だ」

プリンツ・オイゲンは唸る。理由は分からない。

「後者の可能性は低いですが、そちらの支援をするというのは利に叶っていますね。普通の将官なら、大本営周辺で展開させるでしょうし」

全くもってその通りだ。

流石にそんな安直な行動はしない。

そう思い、続きを言おうとした時、プリンツ・オイゲンの独り言が聞こえてしまった。

「生かしておいて正解だったんですね。……ましろさん」

私は聞かなかったことにする。否。誰にもこのことは言わないようにする。

もちろん、文章としても残さない。私の記憶だけに留めておくのだ。

「陸上部隊は東京の要衝の戦時復旧を行い、大本営に入る。そのまま、大本営に保管されている重要書類などを後送し、少数の部隊は駐留。これと同時に、支援をしていた貴女方はその場にグラーフ・ツエッペリンを残し、大本営まで前進」

この後は地図を使う必要はない。

口頭で色々と伝えていくことになる。

「後送と同時に、松代から補給物資の運搬を行う。コンボイでの補給だ。大宮に残ったグラーフ・ツエッペリンの補給後、大本営まで前進していた貴女方への補給を行う」

もちろん、弾薬だけだ。燃料はあまり使わないだろうから。

そんな時、聞いていたであろうグラーフ・ツエッペリンが質問を投げかけてきた。

「私が大宮に残る意図はなんだ？」

「意図としては、松代と大本営間を行き来するコンボイの直掩をしてもらいたい。ここで聞いておきたいのだが、搭載している艦載機はな

んだ？」

話を進めすぎたが、何を積んでいるかによつては、この作戦を少し変更せざるを得ないのだ。

「Ju-87C改とFw-190T改、流星だったかな」

そう言った。私は記憶を掘り出し、色々と思い出していく。

Ju-87はスツーカー。急降下爆撃機だ。悪魔のサイレンとか何とか、つていう。Fw-190T改は完全に改造機だろう。そんな型番はないんだろう。

そんなことを考えていると、ビスマルクがツツコミを入れた。

「違いわ、ツエツペリン。スツーカーは紅提督の指令でカスタムされたじゃない。なんだったかしら。……D-5かD-7で、翼内のMG 151/20の装弾数を増加させて、エアブレーキを……」

この先は私も何言っているか分からなかった。専門用語が多い。

流星に、将官ではあるから、それなりに兵器のことは頭に入っている。無論、横須賀鎮守府で使っていた装備もだ。

だがやはり、航空機は分からない。難しいのだ。

「フォッケウルフも魔改造して、既に原型留めてないじゃない」

「ああ、そうだったかな。……モーターカノンもMG 151/20を外して別物に載せ替えて、翼内の機関砲も門数増やしてたな」

「ええ。それでいて機動性はむしろ良くなっているという、意味の分からないフォッケウルフね」

とりあえず、魔改造されたものを使っていることは分かった。

それがどういう用途で使われているのかが問題なのだ。

局地戦闘機として使っているのか、制空戦闘機として使われているのか……。

「フォッケウルフの用途は？」

スツーカーも流星も戦闘機ではないから対象から外す。

「制空としても使えるし、局地戦闘機としても十分だ」

つまり、多用途があるということだろう。

ならば、私が立てていた草案にも使える。

「さつきも言った通り、グラーフ・ツエツペリンの艦載機隊には、コン

ボイの直掩を頼みたい。場合によっては、航空支援を頼むこともあるだろう」

ここで私はえんぴつを置く。

「大本営が取り返せたのなら、他の方面も容易に取り返せるだろう。今回の草案は、全体の斥候として大本営の奪還を目指すものだ」

私はプリンツ・オイゲンの顔をみた。

一応、これで草案を言ったつもりだ。まだまだ細かいところの調整は必要だが、これが一番利に叶っていると、私は思っている。

だが、プリンツ・オイゲンは表情を変えない。

どうしてだろうか。何か不満でもあったのだろうか。そんな風に考えてしまうが、これが今のところの最善策だと思っている自分もいる。

一体、何を考えているのだろうか。

「……その先は？」

どうやらこれが聞きたかったのだろう。

この先は考えていない訳ではない。だが、色々と問題が山積みなのだ。

「横須賀鎮守府艦隊司令部の復旧と、住民を疎開先から戻すところまでは考えている。だが……」

だが、この先が問題なのだ。

大本営を奪還し、横須賀鎮守府艦隊司令部を再稼働させたところで、その後の行動をどうしようかと悩んでいるところなのだ。

一応、海軍工廠で建造中のかさばね型汎用護衛艦を何隻か進水と艤装を終わらせ、完全に日本皇国海軍独自の艦隊を以て、前線を押し上げることを考えていたのだ。

だが、備蓄資源は無限ではない。国内に供給させたり、消耗品の生産やらで減っていく鋼材やボーキサイトは補給が寸断されてしまった状態だ。

何度も言っていることだが、資源は有限。

幾ら、押し戻して仮初の平和を取り戻すためとはいえ、一時は資材を大量に使うことになるのだ。それを私は懸念しているのだ。

「海は別だ。……状況が最悪で、眼中に入れてすらいない」

これが今の最大限の回答だ。

プリンツ・オイゲンもこの国の情勢がどうなっているかを知らないはずがない。だが、それを踏まえての質問だったんだろう。

私がどういう采配をするのか。どこまで手を進めるのか。

「……ですけどね、新瑞さん。それじゃあ、私たちが『最期の剣』たる理由がないんですよ」

突然、そう言ったのだ。

一瞬、フリーズしてしまう、私の思考回路。すぐに復旧し、思考を開始する。

『最期の剣』たる理由……。ビスマルクたちが私の指揮下に入る理由だ。

中部海域にも向かえず、『柴壁』と共に侵攻した訳でもない。どちらでもない存在。言い方が悪いが、中途半端な存在に見出された、自分が存在するための理由だ。

決して死に場所を求めている訳ではないんだろう。

その命を燃やし、燃やし尽くして遂に灰になることを望んでいるのだ。それは、天色がしてきたことを引き継ぎ、自分たちが出来ることを最大限にすることだ。

だから、自分たちのことを蔑ろにしているような、私の草案にそういう言葉が出てきてしまったんだろう。

私は勝利を最優先で考えていた。

それは作戦を立案する上で、最大限に求められることだ。今の場合もそうだ。

だが、この場所では違う。

そう言った、大勢のための作戦ではない。この8人のための作戦を考える必要があるのだ。それは、軍人として、将官としては最低のことだ。だが、私はそれをしてでも、やらなければならない理由があるように思える。

私は何故、生かされたのか。

あの事件で、私は怒り狂った『柴壁』に殺されなかった。見て見ぬ

ふりをされた。見逃されたのだ。理由として、自分で思いつものは全て挙げてみた。

そこから考えてもみた。

だがやはり至るのは、全てはこの流れ。『神奈川東京埼玉撤退戦』から奪還作戦までの流れを、私に関与させるためのものだったのかもしれない。そういう風に思えるのだ。

「時間を貰いたい。考えさせて欲しい」

私は頼む。時間があれば考えられるだろうから。

幸い、作戦も草案段階だ。時間はいくらでも掛けていられる。

永遠に先延ばしすることは出来ないが、身動きがしやすいうちに話を進めなければならぬ。私の地位だって、いつまであるか分からないものだ。

「分かったわ。だけど、そこまで時間に余裕はないと思うわよ」

そう言ったビスマルクはソファアに座ってしまふ。

他の艦娘もまた然り。静かにソファアに座っているだけだ。

私は自分の椅子に座り、考え始める。

ビスマルクを最期の剣たらしめる働きをさせる作戦を。どう使うか、どう動かすか、どう配置するか。

いくらでもあるだろう。だが、効果的に使わないと彼女たちも納得しないだろう。それはきつと、自分たちがどういう“命”を受けているのかを十分に理解しているから。

理解していないのなら、中部海域に赴いた赤城たちに付いていったことだろうし、残っていたとしても、横須賀鎮守府に居たままだったはずだ。

こんな遠方まで来る理由なんて、それくらいしか思いつかない。

私は思考に自らのエネルギーを注ぎ込む。

それだけ、彼女たちの存在や“命”、なにより、彼女たちの主人への報いなのだ。

――

――

――

ビスマルクたちを有用に使う算段が付いたのは、話をしてから2日が経った頃だった。

それまではずっと、草案を纏めながら、ビスマルクたちのための“場所”を用意することを考えていた。

草案は自分の中でだいたいが出来上がっていたので、そちらに思考を傾けることなく纏めることが出来た。

草案は一日寝かせ、明日の朝にでも見直してからまた寝かせる。それを3日繰り返し、総督に提出すればいい。

「二連の奪還作戦の後、ビスマルクたちにはその“命”を全うしてもらおうと思う」

私を前に、直立不動のビスマルクたちに私は伝えた。

彼女たちの“場所”を。

「作戦中の動きは以前教えた通りでやってもらおう。支援攻撃や直掩だ」

「露払いってところかしら」

全く以てその通り。

作戦行動中のビスマルクたちは露払い。本隊は陸軍から捻出される陸上部隊だ。

だが、その露払いもどうなるか分かったものではない。

深海棲艦の艦載機隊との衝突となると、U-511以外は船体を出し、対空戦闘をする必要が出てくる。

効果的な迎撃だ。

こちらの対空兵装を使ったところで効果なんてたかが知れている。効果に確信がある艦娘が対空砲火をした方が良いに決っているのだ。

この対空戦闘は、作戦行動中に予測される攻撃の中で2番目に確率が高い。

なら、1番目は何だというのだろうか。

それは、深海棲艦による艦砲射撃。

この時、深海棲艦は偵察機を飛ばすと思われる。予測の範疇だが。そうなった場合、為す術無く砲撃を受けるのか。否。ビスマルクた

ちに反撃をしてもらおう。

こちらにも主砲による砲撃を行い、相手の門数を減らしておくのだ。

「だが出番はある。必ずだ」

私がそう言うと、何も返答をしなかった。

そんなことは分かっている、と雰囲気から見取れる。

ここまでは別に、何通りも事象があることは想像出来た。だが、この作戦の終わった後が問題だ。

私はビスマルクたち『番犬艦隊』に、沖に出ない程度の範囲に存在する深海棲艦の撃滅をさせるつもりなのだ。

非情なのかもしれない。かさばね型汎用護衛艦を使えば良いのかもしれない。誰もがそう思うだろう。

私は違う。かさばね型汎用護衛艦が深海棲艦に対して有効かなんて分かっていない。ならば、確実に有効打を叩き出す艦娘にその任を任せるのが建設的なのだ。

それが、彼女たちに課せられた“命”を全うすることにも繋がる。

本当ならば嫌だ。私が手足の様に動かせる戦力ではないが、現有戦力で一番効果的な攻撃手段なのだ。

それを、もしかしたら“掃除”で失ってしまうかもしれない。そういう予感が頭を過るのだ。

自陣の兵士を鼓舞する材料にもなると考えてはいた。

窮地に追いやられても尚、艦娘は私たちに手を差し伸べてくれた。多くの仲間を失い、指揮官を失い、家を失った彼女たちはまだ、武器を持って立ち上がる。

あの早朝の生放送の内容を知らない者は居ないはずだ。

なら、より一層、艦娘が武器を持って私たちの前に立つ意味が分かるだろう。理解出来るだろう。

死んだ目が訴える言葉というものは、力強いものを感じさせる。

そこまで長くはないが、同じ部屋で過ごして分かることは沢山ある。

思い、願い、希望、絶望。殆どが絶望なのは言うまでもない。だが、その中に思いや願いというものは必ず残っていた。

逢いたい、話したいという気持ちが滲み出ていることを感じた。
そんな彼女たちのために、私は彼のようにには行かないが、それなり
の場所を用意するのだ。

「……ツエッペリンはね」

立ったまま動かないでいた私に、ビスマルクはそう切り出した。

私は何も話さない。もちろん、他の『番犬艦隊』もだ。

「端島に居た時から、紅提督をテレビで見ても『会いたい』、『あの人こそ、私のアトミラールだ』と言っていたわ。私は口にはしなかったけど、同じことを考えていたの」

昔話だろう。何か思うことでもあったのだろうか。それとも、何か第六感的なものが働いたのだろうか。

「幾時か申請を出して待ち続け、私たちは横須賀鎮守府艦隊司令部に移籍を果たした。あの時、許可をして話を取り付けたのは新瑞だったわね。あの時はありがとう」

スツとビスマルクは頭を下げた。

「紅提督の下に行った後は、見ていた世界の色が変わったわ。灰色で、ずっと私たちよりも小さな駆逐艦の娘たちがボロボロになって帰ってくるのを見ていたあの端島とは」

「虹色。だけど、黒や灰色のない、美しい色。そんな世界があそこにはあったの」

「楽しかったわ。紅提督とは、本当に運が良くないと話せなかったけど」

ビスマルクは優しく笑った。だが、視線は下の方に向いている。

「そんな時だったの。ツエッペリンの様子が変なことに気付いたのは。何か体調でも悪いのか思っただけで心配していたけど、すぐにその原因は分かったわ」

チラッとビスマルクはグラーフ・ツエッペリンの方を見た。

「紅提督を提督として認め、敬愛していたのと同時に、1人の女として好きになっていったってことに」

優しく笑ったまま、話を続けた。

「私は今でもどんな風に紅提督を見ていたかなんて分からない。友

愛って言われたら、それはそれで納得してしまうわ」

「だけど、ツェツペリンは完全に恋をしていたの。紅提督の気を惹こうと行動し、話しかけていた姿は私も何度も見たわ」

「……紅提督は自分のことを卑下にしていたけど、人柄や心の奥にあるものとかに惹かれていったんだと思う。艦娘っていう色眼鏡無しにだけど」

フフツと笑ったビスマルクは続けた。

「意味不明な信条とか、たまに出る素颜とか、年相応のことをしたりだとか」

「好きなことをするとき、話すときの表情とか、勉強をしているときの表情。戦闘指揮をしているときの顔でもなく、艦隊を見送るときの顔でもない紅提督の表情」

私は何一つとして知らない。それは、横須賀鎮守府に居なければ分からないことばかりだ。

「そんな表情を知っていたから、ツェツペリンは恋い焦がれた」
「皆知っていたけどね」

またビスマルクは笑う。

「だから、奪還作戦」

話が急に戻った。

そして、ビスマルクは顔をあげた。だが、その顔に優しい笑顔は残っていない。

無表情。凍りついたように、表情のない固まった顔だ。

「ツェツペリンのためにも、そして、私たちのためにも、その“命”を全う出来るようにして欲しい」

ビスマルクは帽子を脱いだ。

「紅提督の最期の剣として、私たちを送り出して欲しい」

「彼に逢った時、恥ずかしくないような手土産を持たせて欲しい」

「彼に笑って逢えるように……私たちは頑張ったんだって言えるように……」

消え入りそうな声でそう言ったビスマルクは、帽子を深くかぶると、ソファアに座ってしまった。

私はなんと声を掛ければいいのかだろう。

直接、艦娘のこういう声を聞いたのは初めてだった。

だから、どうして良いのか分からない。だが、分かりたくても一生分かることが出来ないだろう。

松代の第二司令部。そこにある、会議場に大勢の人間が集まった。その場に不相応な年の士官ばかりで、私くらいの年代はほとんどいない。

「ここに、『突風』作戦の概要を説明する」

アナウンスは総督。年に合わず、ハリがありよく通る声を会場に響かせた。

これから始まるのは、作戦概要。直前に全軍の意思を疎通させるために、全体ミーティングだ。

集まった人間は皆、この作戦に参加する部隊長やその母体の部隊の長。派遣員ばかり。

全員が緊張した面持ちで傾聴している。

「概要説明は本作戦の立案、主軸となる海軍部。海軍部長官の新瑞から説明がある」

この作戦、主導権は結局海軍が握ることとなった。

陛下と総督の要請で、作戦立案を行っていた私の元に、作戦の主軸となるよう命令が下ったのだ。

最高の状況を用意してもらったのだ。この作戦を失敗する訳には行かない。

「海軍部長官の新瑞だ。説明を始める。手元に配布した資料を見ながら聞いて欲しい」

私の背後にあるスクリーンに投影が始まった。

『突風』作戦は首都、プラント、工廠、航空基地や放棄した物資の奪還を主任務としている」

「参加部隊は陸軍第三方面軍第一二連隊、第一五連隊、臨時自走砲連隊。第四方面軍第二連隊、第八連隊、第三一連隊、第六戦車連隊第九中隊、第一〇中隊。臨時航空団第一〇二飛行隊。空軍航空教導団、臨時輸送隊。海軍第二憲兵師団、臨時海兵第一大隊、第二大隊、第三大隊」

陸軍の約2／5は関東方面に駐留する、第三方面軍からだ。その中でも第一二連隊、第一五連隊は神奈川東京横須賀撤退戦時に、後方支援を行った部隊で、あまり被害もなかったところだ。臨時のついでいる部隊は全て、再編成を行い、あちこちの所属の部隊が統合されたところだ。指揮系統が若干心配なところがある。

臨時航空団第一〇二飛行隊はヘリを装備する部隊。攻撃ヘリや負傷兵や装備を運搬する輸送ヘリを運用する。こちらも上記同様。統合部隊だ。

空軍からは、かの有名な航空教導団が全機出ることになっている。

航空教導団の本来の任務は、横須賀鎮守府艦隊司令部に接近する深海棲艦の迎撃任務だった。だが、その横須賀鎮守府はもうない。それによって、行き場を失った航空教導団が、この作戦に立候補したのだ。そして、臨時輸送隊は、撤退戦の時に撤退域内から詰めるだけの物資を積んで逃げ切れた輸送機による統合部隊だ。

そして、海軍はこの作戦に全戦力を投入する。

東京や大阪、京都、松代などの主要都市に居る憲兵や、それぞれの鎮守府の門を番している憲兵は皆、第一憲兵師団。第二憲兵師団はというと、暴動やらが起きた時の対応などをする、海兵同様に陸上戦闘訓練を積んだ部隊だ。たまたま、大本営にも松代にも居なかったのだ、丸々生き残っていたのだ。

それと、臨時海兵第一〜三大隊。ここは完全に生き残りだ。各地にそれぞれ少数で散っていた海兵と、撤退戦を生き残った海兵の集合体だ。完全にありあわせの部隊である。

「そして、横須賀鎮守府艦隊司令部所属『番犬艦隊』が本作戦に参加する」

そう言うと、会議場が一瞬淀めいた。

「作戦の流れを説明する」

私はそれを無視し、話を続けた。

「作戦開始日時までに松代第二司令部周辺に、陸上部隊は集合。集合が確認された翌日の明朝に歩兵はトラックにて出立。航空部隊はそれと同時にこちらから、作戦開始の趣旨を伝える」

「松代を出た陸上部隊は上信越自動車道、更埴JCTより上田高崎方面へ向かい、そのまま佐久で降りてから軽井沢臨時集積場に向かう。そこで程度のいい武器弾薬を受け取る」

「礁氷軽井沢から上信越自動車道に入り、藤岡JCTで関越自動車道へ。川越で自動車道を降り、陸軍大宮基地へ向かう」

「大宮基地では放棄した物資の回収及び、中継基地として第二憲兵師団の一部と第一五連隊の通信部隊を置く」

「大宮基地出立より大本営までは歩兵はトラックを下車。徒歩で移動をする」

「大本営へ到着後は第二憲兵師団が内部の調査を行った後、部隊を収容。体勢を立て直しつつ、復旧作業へと入る」

「ここまで聞けばただの施設部隊の任務だ。だがここから先が戦闘部隊を連れて行く所以でもある。」

「付近のインフラの整備を行いつつ、電気の復旧が確認された後、横須賀鎮守府艦隊司令部と海軍工廠の奪還を目指して横須賀へ向かう」

「今度の淀めきはすぐには静まらなかった。」

「この任務の大まかな話は先に伝えてあったがのだが、大本営奪還後の話はまだ伝えていなかったからだ。」

「そして、ここからがこの作戦の要。神奈川東京埼玉を取り返す作戦の肝。」

「ここまでは我々の部隊が主だって動くことになるが、ここからはそれ専門の部隊に任せる。ここで『番犬艦隊』を使う」

「だが、番犬艦隊はここまで来る道中に後方支援を行っているの、それ相応の時間や補給が必要となってくる。そこで、我々の出立後に松代から補給部隊が後を追いかけてくる。この補給物資を彼女たちに」

補給し、これ以降の攻勢は『番犬艦隊』の指揮の下で行うことになった」

ここから先は、深海棲艦との戦いに慣れていく艦娘に任せるのが妥当だろう。

それに彼女たちは横須賀鎮守府の艦娘だ。きつと天色から戦術やらを学んでいるに違いない。

私はそういう期待も込めて、こういう手はずにしているのだ。

もちろん、陛下や総督に許可は貰っている。だからこの場で反論したところで、代替案が無いのならただの愚図りになってしまうのだ。

繰り上げ任官の部隊長でもそれくらいは分かっている。皆、口を詰むんでいた。

意見はあるだろう。思うところもあるだろう。だが、これが一番確実な作戦なのだ。

「彼女たちから聞くには、横須賀鎮守府が最優先。そこへ一度部隊を集結・休息・再編成を行い、再度部隊を展開。海軍工廠とプラントの奪還に乗り出すと言っていた」

大まかな作戦の道筋は言った。

ここからは、色々なリスクやらを話す。

「私の見立てでは、大宮基地周辺から深海棲艦の迎撃があると予想される。迎撃の種類は内陸では艦載機による航空爆撃及び機銃掃射。沿岸に近づく程に艦砲射撃が加わってくると予想される。若しくは、攻撃をされないか……」

どちらかだ。撤退戦の時は、大宮の向こう側まで航空爆撃があったから、大宮に入った時点で攻撃をされる可能性は大いにある。

だが、その時の深海棲艦は侵攻。今回は迎撃。

正直のところ、大宮よりもこちら側に入った時点で迎撃が始まるというところも考えられる。

予測不可能とまではいかないが、見極めるものが多い。

「撤退戦で損耗した全軍から、本作戦のために捻出して頂いた全兵力を全て失うことが想定される」

最悪なケースだ。

艦砲射撃と航空爆撃をされ続けた結果、引き際を見失った我々が陥る最悪の結末。

「作戦の概要は以上だ。質疑応答に移る」

そう私が言うと、手を上げた。

陸軍第八連隊の連隊長だ。

「新瑞大将殿。発言の許可を」

「許可する」

「はっ！ 先ほどの『全兵力を全て失うことが想定される』というのは、どういった場合でしょうか？ 私としては、兵を無駄死にさせたことはありません。ですので、どういった原因でそうなってしまうのかをお教え頂きたいです」

「……引き際を見誤った時だ。それと、横須賀鎮守府に到着した後に『番犬艦隊』の指揮下から外れた場合が予想される。他にもいくつかあるが、言うのも野暮だ。それは先の撤退戦で証明されている」

そう。撤退戦の戦闘記録やらを見ればそれは分かるのだ。航空爆撃や艦砲射撃が主な部隊の損失に関わっているのだがな。

「それに、あるものを用意させてもらった」

そう言って私はスクリーンにあるものを映すように言う。

それはグラーフ・ツェッペリンから受け取ったものだ。そして、この作戦と国の行く末を左右する代物。

準備にはかなりの時間を要したが、今朝方準備が整ったことの趣旨を聞いた。

海軍が主導権を握ったとの報を受け、すぐに製造と換装を頼み、2ヶ月もこれまでに掛かったものだ。

「本作戦に参加する航空教導団の戦闘機は、最新のアップデートパッケージに換装してもらった」

「これは元は横須賀鎮守府艦隊司令部で開発・運用されていたものなので、航空教導団が使いこなせるかはいささか不安ではあるが、投入する価値はある」

「現在の空軍の装備である、F-2とF-15Jを大幅の性能向上を目的とした改装キットだ。これにより、その双方共に化物染みた性能

を有することになった。旋回すれば、それはジェット機の機動ではないもの。上昇力は桁違い。アビオニクス以外は全て新規のものだ」

一見、航空教導団を馬鹿にしたような話し方だが、横須賀鎮守府艦隊司令部と航空教導団は模擬戦をしたことがあるのだ。

勝敗は、横須賀鎮守府の圧勝。アグレッサーでも勝てない程の力量を持った航空隊が居る、ということとは全軍に知れ渡っている。

それを知っているからこそできる発言だったのだ。

「兵装に関しては、あちらのものを手に入れられなかった。だが、それは兵士の技量でどうにでもなる」

私は手に持っていた資料を置く。

「奪われた沿岸部を取り返すぞ。そのために、全軍の力が必要だ」

これでミーティングは終わりだ。

後のことは、後日郵送やメールで参加部隊に送ることになっている。後は、当日を待つだけだ。

濃い霧が立ち込める第二司令部の前に、全軍が整列していた。

これから部隊は移動を開始し、横須賀鎮守府に向けて行動を開始する。

「新瑞。本当に君は……」

「指示の伝達は速い方が良いに越したことはありませんし、指揮官も現場の状況を把握できている方が良い指示が出せますから」

「だからといって……。この前も言ったが、君も赴くなど」

「大丈夫ですよ。私は大宮で指揮を取ります。艦砲射撃や航空爆撃があつたとしても、横須賀に移動を始めるまでは平気ですから」

大丈夫とは言わない。

今、総督から改めて止められているのだ。私が部隊と共に前線に赴くことを。

今となつては虫の息の海軍だが、現場で判断を下せるのは私くらいだ。それに、『番犬艦隊』とのコンタクトを取れるのも私だけ。他の者が近づこうものなら、一撃で何も残らないだろう。

そういうところも考えて、私は共に行くこと決めたのだ。

確かに、迷惑はかかるだろう。だが、これは国の行く末を決める戦。必ず成功させるためには必要なことなのだ。

「とはいえ。……君の妻の方に連絡を入れるのは、私なんだぞ」

「ええ。私の上司は総督だけですから」

「陛下が直々に連絡しようものなら、そのまま君の妻は後を追いかけかねないからな」

「ええ」

私はそう話しつつ、隣のトラックに目を向けた。

そちらには『番犬艦隊』が乗り込んでいる。

ビスマルクは窓を開けて肘を掛けていたので、私と総督の話し声も聞こえていたことだろう。

私の方を見て、目で語ったのだ。

「……武運長久を祈る」

「こんなところでくたばったりしませんよ」

そう言つて私は指示を出す。

「出せ！ これより、『突風』作戦を開始する。全軍、前進!!」

応答するかのように、私の正面に並んでいた車列が一斉に動き出す。

私は横を向き、総督に敬礼をした。

挨拶だとはいえ、もしかしたらもう見ることもない顔になる可能性だつてある。

そんなことを考えながら、私は敬礼をしたのだ。

――

――

――

松代から軽井沢までの道のりは、少々渋滞していた。

それもそうだろう。軽井沢には軍の臨時集積場があるだけでなく、民間の食料品や日用品、家電などが運び込まれている。

どこその実業家の土地を利用し、そこに冷凍食品や缶詰、ティッシュやトイレットペーパー、電池、衣類、レンジやケトル、オーブン、携帯電話、PCなどがコンテナに入れられて並べられているのだ。

それを回収し、各地へ分配するトラックが行き来でこの上信越自動車道を使うのだ。

もちろん、民間だけでない。軍用トラックもここを通る。

軍の集積場から必要な各地の陣地へと運ばれていくのだ。その逆もまた然り。回収された装備も一度はここに集められる。

「渋滞に嵌りそうです」

そう言ったのは、私が乗車しているトラックの運転手だ。

この者は海軍第二憲兵師団の人間だ。

私よりも2周り程年下だが、階級は中尉。大卒で少尉任官で、これまで数年間程軍で勤務しているらしい。

「仕方ないだろうな」

「そうですね。ですが、我々の部隊が長い車列を形成している影響か

らか、後方の民間トラックもまた車列に……」

「どうせ行き先は同じだ。気長に行こう」

そう言うが、私は大丈夫でも他の兵は気長にいられないだろう。作戦というのは、そのタイムスケジュール通りに動かないといけないものだ。だが、今回の作戦はそういった時間の縛りに左右されていない。

なので、各部隊に配布した作戦予定には『時間』という文字は書いていないのだ。全て、準備が整い次第出発だとか、頃合いを見てどうかしか書いてない。

時間厳守である軍ではあり得ない作戦であることは重々承知だが、時間に左右されないということは柔軟な機動性を持つことになる。

臨機応変に事態に対処できるとも言えるが、その場で判断を下す者にそれらの重責がかかる。対処方法を謝ると、全滅しかねない。代替案や保険を掛けるかはその場の判断になってしまうのだ。

「……閣下は」

「閣下は止めてくれ……それで、なんだ？」

「新瑞大將は、『番犬艦隊』のことをどうお考えなのでしょうか？」

これは普通なら答えるべきではない質問だ。

憲兵ならそれくらい分かっているようなものだが、精神状態が良くないんだろう。

正しい判断が出来ていないようだ。

だが、私は答えた。良くない方向に持つていく訳ではない。いい方向へと。

「あれは我々の、日本皇国最期の剣だ」

「確かに、私たち人間の力はあまりに弱すぎましたからね」

「……彼女たちが表れなければ、君たちは皆兵科転換させられていたんだ」

真実だ。

これはあくまで、今の方がいい方向に向かっているということに伝えているだけだ。

「あれですか？ 海軍工廠で建造中という新鋭艦の……」

「ああ、乗員にな。だが良かった。私もそれは望んではいなかった」
新鋭艦の建造を命令したのは陛下だが、私や総督は意見する権限が与えられていた。

だが、私や総督は意見をしなかったのだ。
そうはいうものの、新鋭艦を何に使うのかなんてだいたい想像は着く。

横須賀鎮守府が担っている幾分かの任務を肩代わりすることだ。

近海哨戒くらいはできるだろう、との陛下の意見に私たちは同意したのだ。

「今の情勢であればを運用するとなると、どう考えても戦地に赴くことになることは自明だった。この作戦も筋書きや肩書は“一応”、海軍工廠の奪還が含まれているだろう?」

「そうですね。大本営を奪還した後、体勢を立て直して横須賀方面に進出するという」

「ああ。陛下には神奈川東京埼玉、プラント、大本営、海軍工廠奪還の任務と伝わっている」

そう言う中尉は驚いた。

「それ、仰って良かったことなんですか? 私は憲兵ではありませんが、海軍です。大将の命令の下で動いているので、告発などはしません。陸軍の奴らに聞かれでもしたら……」

「大丈夫だ。もし告発されても私は無罪になる」

「え?」

「陛下も分かっているらしいやるんだ。本作戦の目的を」

この作戦の表向きの目標は神奈川東京埼玉、プラント、大本営、海軍工廠の奪還ということになっている。

だが、本当の目的は別にある。

賭けだ。そもそも私たちだけで深海棲艦との戦闘は無謀だったのだ。だが、そこに『番犬艦隊』が加わったことで有利にはなる。だが、それだけなのだ。

本来の目的というのは、『横須賀鎮守府の復旧を行い、そこに若い海軍の士官を置くこと』。つまり、再び日本皇国は深海棲艦に攻勢を掛

けることなのだ。

「その架け橋となるのがこの作戦なのだ」

だが問題に直面する。

『番犬艦隊』をどうするか、だ。そうは言うものの、考えはまとまっている。

横須賀鎮守府の復旧には時間がかかると予想されている。

それに、ノウハウの吸収を行い、それなりの情報をこちらが持つことが絶対条件だ。だから、鎮守府にあるありとあらゆる資料や書類、情報と呼べるものを全て回収し、整理し、纏めること。そして、それを理解することが必要なのだ。

それが出来てからは、国内の整備と海軍の再建と勢力拡大。情報統制。裏方の汚れ仕事もあるのだ。

その約半分を『番犬艦隊』に任せ、その間は東京湾内の安全を確保してもらうため、補給の容易な東京港に拠点を置くことになる。

「そうなんです。……『番犬艦隊』がいなければ」

「私は中尉たちに「死ぬ」と言っていたことになる。しかも、名誉ある戦死。何かを守り、何かを成すために死んだ訳ではない。ただの犬死だ」

そう。何の意味も成さない。ただの犬死。意味のない死。

無謀に死にに往く。無残に斃り殺される。陰形も残らない。そんな死があるだけなのだ。

私たちの、人間の攻撃は通用しない。

「全ては陛下の、日本皇国のためだ」

嘘。日本皇国のためであるのには変わりないが、私の本心は彼女たちの願いを叶えるためだ。

横須賀鎮守府を奪還し、そして、願いを叶えるために取り戻すだけだ。

「動き出しましたね。……軽井沢まではあと少しですよ」

「そうだな」

長い車列は蛇のように曲がり、道路の出口へと向かっていく。

最初の行き先は軽井沢臨時集積場。この作戦の1つ目の中継地点

だ。

――

――

――

軽井沢臨時集積場には、日本皇国各地に散っている部隊が集まっていた。

とはいえ、物資を受け取るためだが。

北は青森、南は鹿児島と宮崎の県境までだ。

どうしてそんなところから、わざわざ本州の中央、しかも山の中に来るのか。

それは、現在の日本皇国内にはこの軽井沢以外に、物資を受け取れる場所がないからだ。

各地の現状までは私は知らない。だが、何となく分かっているつもりだ。

各地に海兵を集めに行っていた人間によると、あちこちで深海棲艦の艦載機が出没。軍はこれの迎撃にかなり手こずっている様子。

陸軍は地上から対空砲火を。空軍は戦闘機を使い、航空戦をしているようだが、思ったようには行かないみたいだ。

「新瑞大将。我々が受け取るものは……」

「話は付けてある。好きなものを持っていけるそうだ」

そう。私たちは本州の沿岸部奪還の橋頭堡を築くべく、戦地へ赴くのだ。

陣地への補給というものは、戦闘を繰り返していればいるほど、欲する武器弾薬は多くなっていく。

つまり、過剰に持って行ってどうせ無駄になるのだ。

「そうなんですネ……。おお、10式戦車まであるんですね」

「部隊章を見る限りだと……撤退戦で撤退した範疇の基地所属のものか」

「そうみたいですネ。状態を見る限り、肝心な時に動かなかつたので放置されたかと」

「そのようだな。損傷箇所が無い」

こういったものまでここには置かれているのだ。

私は中尉と共に歩き回り、弾薬や手榴弾、対戦車誘導弾発射機と弾頭がある程度確保すると、そのまま部隊に号令を掛ける。

「ある程度休憩は出来ただろう。出発するぞ。次の目的地は陸軍大宮基地だ」

無線で一方的に、車列にある全車両に伝えると、前進の指示を送る。

そうすると、車列は動き出し、軽井沢臨時集積場を出て行った。

――

――

――

見渡す限り、私たちだけしか走っていない自動車道。

私は窓から望む景色をぼーっと見ていた。

流れる風景に見覚えは無いが、道を囲む山の木々の緑はとてもいい色をしている。

そんなことを考えていても、現実が変わりはしない。

この付近。そろそろ藤岡JCTに到着するのだ。

碓氷軽井沢から上信越自動車道に合流し、そのまま藤岡まで向かっていった。

ここを通るトラックなどあまり居ない。

そう、藤岡JCTの守備を任されている部隊しか居ない。

厳密に言えば、沢山の民間のトラックや軍用の輸送隊も通る。だが、そこまで頻繁には通らないことだろう。

藤岡JCT守備隊はというと、陸軍第二方面軍から捻出された部隊で構成されている砲兵中心で構成された迎撃専門の部隊だ。

装備は基本的には自走対空砲。地对空誘導弾、対戦車誘導弾、重機関銃座など。

市街地にある陣地を巧みに偽装している。軍の偵察機でも発見できないらしい。

「JCTを通過し、大宮へ向かいます」

「分かっている」

中尉がそう私に報告する。

形式上、必要なことだがそれは私も見れば分かる。

「……ここから先、数十km先からは撤退区域ですね」

そう中尉は呟く。

今はこの自動車道も綺麗だが、この先を行くと、道路自体が残っているかも怪しい。

深海棲艦の航空爆撃を受けていれば、穴だらけになっていることだろう。

そういう地域にこれから入っていくのだ。

ここからは深海棲艦の艦載機は確認できないが、そこまでは攻撃を受けていたので、私たちが入ってきた途端に攻撃を受ける可能性は大いにある。

「空軍より通信です」

荷台に乗っている通信兵から、受話器が差し出された。

小さい窓からだが、腕は十分に通る。そこを通して、私に受話器を差し出してきたのだ。

それを受け取り、耳に当てると返事をする。

「こちら新瑞」

『現在、大宮辺りを偵察中。緊急時に付き、通信をさせていただきます』

今、大宮を飛んでいるのは、航空教導団のF-15J改二の2機分隊のはずだ。

威力偵察も兼ねている。

『沖合より、深海棲艦の攻撃隊が接近中。編成は不明』

「了解した。引き続き、偵察活動を頼む」

私はそう言って、荷台の通信兵に受話器を返し、指示を考える。

こうなることは想定内の範囲だ。どれほどの距離が離れているか、パイロットはその報告を省略したが、それは最もな判断だろう。

沖合から来ているということは、現在も海上を飛行中ということ。現在走行している地点がちゃんと把握出来ているので、どれほどの距離があるか等は想像出来るのだ。

「通信兵。全軍に対空戦闘用意」

「了解しました」

私の指示を聞いた通信兵は、荷台に戻って全軍に連絡を入れる。

内容は私が言った通り。その通信が終わると、視界に入らだけの部隊の装甲車などは、ハッチが開いて兵士が機関銃を構えた。そして、余裕のある車両からは、対戦車誘導弾発射機を肩に乗せた兵士が空を見上げ始めたのだ。

「大宮基地までは30分といったところか？」

「そうですね。ですが、悪路を走るようになりますので、その2倍はかかることが予想されます」

1時間、大宮基地まで走ったままなのだ。

ということは、停車するまでに深海棲艦の艦載機隊と接敵することになる。

私は決断を下す。

「通信兵、『番犬艦隊』へ」

「はい！」

荷台の窓から呼び出し、指示を伝えた。

「Z1とプリンツ・オイゲンへ。現時刻より30分後に降車し、艦装を展開。対空戦闘を行うよう」

「了解しました」

そうやって私は姿勢を戻す。

これから、作戦が始まるのだ。

――

――

――

各部隊はそれぞれの集団で、車列から散開。深海棲艦の艦載機による航空爆撃や機銃掃射から逃れるべく、下道の悪路を走っていた。

私の乗っていたトラックもまた、陸軍の第一五連隊の通信部隊とZ1とプリンツ・オイゲンを降ろした『番犬艦隊』の艦娘を移送しているトラック数台が共に逃げていた。

「戦闘機に狙われています！」

「それは分かっている！」

現状、猫に追い回されるネズミのようだ。

振り切れずに、小道をくねくねと逃げ回っていた。

「通信部隊は無線機や機器を積んでいるために、対戦車誘導弾発射機すら持ってませんよ！」

「分隊支援兵が軽機関銃で応戦すればいい！ 頭を狙い、機関銃の射線からトラックが外れさせるんだ！」

そう指示を出すと、一斉にトラックから分隊支援兵が機関銃を撃ち出した。

空気を劈くような音を一定間隔で鳴らし、葉莢が甲高い音を立てながら落ちていく音が小さく聞こえてくる。

それに伴い、地面に跳弾する深海棲艦の戦闘機から発射される機関銃は遠ざかっていく。

射線を逸らすことが出来たみたいだ。

長いこと撃ち続けたら、弾薬も底を付き、撤退していくだろう。そういう目論見も視野に入れた指示だったのだ。

「コントロールを失った深海棲艦の戦闘機が墜落します！」

私はその声を聞き、すぐに窓から顔を出してその戦闘機を探した。

空に黒い線を引きながら降下する戦闘機を視認し、状況を確かめる。

どうやら、軽機関銃の弾丸がエンジンルームに直撃。燃料に引火したみたいだ。

だが、人間の手しか触れていない弾薬なのに、効果があったのは変だとは思ったものの、妖精が手を触れていなくとも、攻撃としては多少なりとも通用することは分かっていた。

今回は運が良かったのだろう。

「体勢の立て直しをしないところを見ると、どうやら操作系をやられたみたいだな」

そうつぶやき、私は手頃な紙を手に取り、メモを取る。

私たちが、深海棲艦の艦載機を撃墜したことは何回もある。だが、今回はその中でも初の陸上での撃墜なのだ。

機体を回収し、調査を行う。そのために、後に回収するため、落下

地点付近のメモを取ったのだ。

メモを取り終え、すぐに空を飛んでいる残りの戦闘機の数を数えた。

全部で2機。1機は補給のために撤退したみたいだった。

それに、残っている2機もずっと機関銃を撃っている。そろそろ弾薬が無くなるか、給弾不良を起こすころだろう。

「2機が撤退していきますー！」

荷台から報告が入る。どうやら、弾薬がなくなったかジャムを起こしたみたいだ。

私はすぐに指示を出した。

「早急に部隊と合流。大宮基地に向かう！」

そう言っただけは現在地を確かめるべく、地図を開いた。

現在地はここ、北本だ。どうやら、逃げながら遠ざかってしまったみたいだった。

私は近くの電柱や信号の標識を見て、現在地を特定する。

そして、大宮基地までのルートを選定した。

「被害状況を確認。同時に方向転換し、大宮基地に向かう」

運転をしている中尉と後ろの通信兵への指示だ。

一応、深海棲艦の攻撃は退けることに成功したが、他の散り散りになった部隊の安否が気になるところだ。

「私たちが陸軍大宮基地に着くと、そこには散り散りになった部隊が集結していた。」

「あちこち損傷が目立つが、深海棲艦との攻防で被弾したんだろう。それに、今後の戦闘には支障はない程度に見えた。」

「私はトラックから下車し、陸軍大宮基地の司令部へと歩き始めた。」

「新瑞大将」

「なんだ？」

「その横をトラックの運転をしていた中尉がクリップボードを持ちながら報告をしてくる。」

「各部隊、損害軽微。戦闘に支障なしとの報告です。それと、途中で降ろしたZ1とプリンツ・オイゲンは回収。こちらに向かってきています」

「現在確認されている、この破棄物資は？」

「ハーフトラックが12両、対空銃座が3門、87式自走高射機関砲6両。小火器・武器・弾薬は相当数あります」

「悩みどころだ。87式自走高射機関砲を拾えるとは思わなかった。」

「各地の対空陣地に配備されている87式自走高射機関砲だが、今回の撤退戦では、第二方面軍に配備されていたものの殆どが破壊若しくは破棄されたという報告があったのだ。」

「ここに來てまさかの破棄されたモノを拾うとは、私も流石に予想などしていなかった。」

「あいにく、部隊の中にこれを扱える兵は居ない。」

「私はある指示を出しておく。」

「87式自走高射機関砲に燃料弾薬を補給しておけ。それと、松代に連絡。陸軍の87式を装備出来る部隊に取りにこさせてくれ。直掩機は出す」

「了解しました」

「ハーフトラックと対空銃座、装備等々はこちらが接收する。それぞれ

れを纏めて置き、使えないものは破棄しろ」

「了解しました」

中尉はクリップボードの紙にそれらを書き込みながら私に付いて歩く。

「ハーフトラックは8両をここに置いておく。4両は連絡用だ。対空銃座はここで陣地を構築。対空陣地を形成しておけ」

「まだ調査が終わってませんが、他の物資が出てきた場合は？」

「逐次私に報告。指示を出す」

「了解しました。では、失礼します」

中尉はそれを聞くと、私のもとから離れていった。通信部隊に連絡を取り、色々と私の指示を部隊に浸透させてくれるだろう。

私はというと、『番犬艦隊』を乗せているトラックのところに向かっていた。

Z1とプリンツ・オイゲンがいなくとも、他の艦娘は居る。そちらに話があるからだ。

トラックのボディをノックし、声を掛ける。

「新瑞だ。ビスマルク」

そう呼んで出てきたのはビスマルクではなかった。

アイオワが出てきたのだ。

『番犬艦隊』の中でもとっつきやすい性格の彼女だったが、荷台から出てきた彼女にはいつもの様子は感じられなかった。

「ビスマルクなら隣のトラックよ」

「あ、すまない。間違えた」

「いいわ」

そう言ってアイオワはトラックから飛び降りる。

少し背伸びをしたあと、口を開いた。

「そういえば気になったんだけど」

そう切り出した。

私は静かに聞く。

「私たちの補給があるらしいけど、妖精さんのところに持っていく必要があるから、ここにそれ専用の部屋を用意した方がいいわよ」

「……一応、確保してある。倉庫だが、一番状態の良いところを頼んである」

「そ。……それと、レーベやマックスは良いと思うけど、私たちの主砲弾は用意出来たかしら？」

少し間が開く。

主砲弾。380mmや16inch50口径のことだろう。

少し考え、回答する。

「この前出してもらった砲弾から採寸して作った。横須賀鎮守府製とあまり変わらないはずだ」

「203mmは多分、大丈夫ってオイゲンも言っていたし……」

「ああ。大丈夫だ。……問題はそこじゃないんだがな」

「どういうこと？」

そう。私がビスマルクに話をしに来たのには、ちゃんとした理由があるのだ。

今の今まで考えていなかった、グラーフ・ツェッペリンの艦載機の補充だ。

横須賀鎮守府ではどうしていたのかも聞かずに、この作戦に参加させてしまったのだ。それに、ただボーキサイトを補給しただけで新しい艦載機が出てくるとも思えない。

「艦載機の補充だ」

「それね。……工廠が必要よ」

「しまった……」

完全にミスをしてしまった。

艦載機の搭乗員は、撃墜されても帰ってくることは聞いていた。だが、艦載機の補充のことは何も聞いてなかったからだ。

「……グラーフ・ツェッペリンの航空隊は練度はまちまちよ。Ju-87、攻撃隊はそれなりにあるけど、戦闘機隊はね……」

そう言ったアイオワの声を遮るかのようには、グラーフ・ツェッペリンがアイオワが降りてきたトラックの隣にあるビスマルクのトラックとは反対側に止まっていたトラックから降りてきた。

「私の戦闘機隊は、赤城や加賀などの手練の航空隊との連携が想定さ

れた訓練しかしていない。零戦や烈風が居ない演習の経験はあるが、やはり成果を挙げることは難しいだろう」

話は聞いている。

赤城航空隊の実力は、完全に常識から外れていたことを。

一度飛ばば、無傷で帰還。一見無茶だと思われる戦闘機動をこなし、深海棲艦を翻弄する。攻撃隊も基本的に常識から逸脱。エアブレーキを使わず、空中分解寸前の速度で降下し、爆撃を敢行する。雷撃は海面スレスレを飛行。投下後は巨体であるにも関わらず、空戦に参加する。

頭がおかしいとしか言えない。

「配備しているFw190は確か……」

「魔改造されて超高機動だが、それでも少々不安がある」

「……航空教導団もいる。ある程度は助力になるだろう」

自分で言ってると思うが、航空教導団が“助力”だ。

それほど、深海棲艦との戦闘に艦娘は効果的な一撃を加えることができるのだ。

私は少し姿勢を崩し、話を続ける。

「丁度良い、グラフ・ツエツペリン」

「なんだ？」

「ここ、陸軍大宮基地で艦装を出してもらおう。とは言っても、敷地外だ」

そう言ってる、私は方角を指差す。

「近くに川がある。その近くに展開してくれ」

「了解した」

「傍に通信部隊と、少数だが対空陣地と物資の集積所を用意してもらおう。今後のこちらからの司令は、通信部隊から受け取ってくれ。横須賀奪還に乗り出すのと同時に、全軍はそちらが接收することになっているから、部隊の配置は好きにしてい」

「それは前聞いたぞ」

「分かっているのならいい」

そう言ってる私は川に向かったグラフ・ツエツペリンを見送り、ビ

スマルクのトラックのボディをノックした。

「ビスマルク。新瑞だ」

そう言うと、ビスマルクは無言で降りてきた。

「なに？」

「グラフ・ツエッペリンには指示を出したが、『番犬艦隊』への指示だ」

そう言うと、ビスマルクの顔は引き締まる。

「ここを囲むように艦装を展開してくれ。それと、配置はこちらで指定しない。グラフ・ツエッペリンの方に1人までは置いてもいい」「了解したわ」

それを聞くと、ビスマルクはアイオワに指示を出した。

「私はレーベとマックス、オイゲンを呼んでおくから、地図を借りてきてくれない？ 配置を伝えるから」

「分かったわ」

私がここに来た用事も済んだ。離れようとする、ビスマルクに止められた。

「さっきの話し声が聞こえていたけど、工廠は横須賀にあるわ。奪還が叶えば艦載機の補充も利くし、なんなら無傷の艦載機を旧羽田に運べば、臨時で使えると思うけど？」

またとない話だ。

私はすぐに回答する。

「旧羽田……航空教導団の基地か。……横須賀鎮守府を奪還する際に奪還するので、問題ない。それと、先ほどの話は本当か？」

「ええ、本当よ。増産はできないだろうけど、工廠にあるお古の艦載機がね」

「助かる」

そう言つて私は再び歩き出した。

これから、この基地の中を歩き回り、情報収集をして今後の方針の詳細を伝えるためだ。

—————

—————

1
全部隊の確認。陸軍大宮基地で放棄された装備品の確認。基地周辺への『番犬艦隊』の展開を終わらせ、部隊配置も完了した。先行させてインフラの整備も始まっている。

あちこちに部隊が出ていき、電気や水の確保が始まっていた。

そして、私は残された部隊に号令を掛ける。

「これより、大本営の奪還を目指す」

見渡す部隊の面々に少しの疲労を感じさせられるが、作戦行動に支障はないだろう。

「歩兵はトラックを降車し、徒歩で移動開始。全軍は一斉に大本営を目指す」

誰一人として身体を動かさない。

そんな緊張感が私の身体に突き刺さる。

「航空教導団とグラーフ・ツェッペリンの航空支援。『番犬艦隊』による弾着観測射撃があるとはいえ、気を抜くな。私たちに撤退の言葉はない」

ふと、私は海軍海兵の部隊の方を見た。

彼らの顔付きは他の部隊員とは異なり、能面かなにかを連想させるような表情をしていた。

狂気をも感じさせるその表情はきつと、あの撤退戦を生き残った兵や各地から集められた海兵の場数を物語っているのだろう。

この辺りでなくとも、海兵というのは基本的に猛者ばかりだ。残っていた海兵は特に。

「全軍前進開始。目標、大本営」

こうして私たちは陸軍大宮基地に陸軍第一五連隊の通信部隊を残し、出撃した。

――

――

――

ここが東京だとは、現状を見た誰もはそうは思わないだろう。

私が東京に入ってから感想だ。

建物は穴だらけで、アスファルトは捲れ、生きた街とは到底思えない惨状だった。

そこから中に乗り捨てられた乗用車や軍用トラックが残っており、破壊された戦車や、白骨化が始まっている兵士の亡骸もある。

地獄だ。

だが、この光景を目の当たりにすることは覚悟していた。

撤退戦での犠牲者は正確には分かっていない。軍人だけでも5桁はある。民間人もそれと同等の数がここで死んでいる。

それだけの魂の抜けた器はここにあるのだ。

多くは神奈川の南に住んでいた人や、ただただ逃げ遅れた人たちだ。

そんな人たちを、国民を守ることの出来なかった私たちはまた、その地に足を踏み入れる。

「平坦な道を選びつつ、前進」

私が隊を直接指揮している訳ではない。

私が同行しているのは、海軍海兵の臨時第一大隊と陸軍第四方面軍第六戦車連隊第九中隊。海兵が戦車を取り囲むようにして展開している。

指示を出しているのは、臨時第一大隊の大隊長。

経験は浅いが、聡い人間だと私は思い、指揮官に任命している人間だ。

「……こんな東京、見たことない」

そう呟くのは、各地で招集された海兵の1人。

この現状を生で見たのは初めてだ。

「ここらは……練馬の辺りだ」

「そうなのか？」

倒れた電柱にも、それを示唆する標識がある。

「まだマシだな。この辺りは」

そう呟くのは、撤退戦に参加していた兵だ。

彼もまた、身体を覆い隠すくらいの装備を背負って逃げてきた兵の1人。

「……そうなのか？」

「ああ。酷いところはもつと酷い」

そう言つて、歩く歩兵からは声が聞こえなくなる。

皆、路端を見ては目を反らしているから、そういうことなのだろう。私も目を何度も反らしたが、そうもしてられない。

ここに倒れている兵、民間人は逃げ遅れたり、遅滞戦闘をしていた者たちだ。

私の命令で死んだ兵、避難活動もままならない状態で、爆弾や弾丸が降り注ぐこの一帯を、徒歩で逃げさせた。全て、私の一声で死んだ人々だ。

私は目を背けてはならない。

現実を受け止める。そして、悲しんではいけないのだ。

「っ?! 深海棲艦の艦載機っ! 路端に身を隠せっ!!」

突然上がる指揮官の怒号。

私も共に路端に飛び込み、瓦礫に身体を隠す。

戦車は停止して、エンジンを止めていれば、壊れているものだと思うわれ、見逃される。

なので、戦車は道のまん中で、砲を適当に回転させて、停止させる。聞き慣れたくないエンジン音が遠ざかり、私たちは路端から這い出る。

そして、再び隊列を取り直して、行軍を再開する。

大本営までは、この調子で行けば数時間かで着くだろう。

私はそう考えつつも、他のことも考える。

大本営に着き、一段落付いたら、全軍の指揮権は私から外れる。そして、ビスマルクら『番犬艦隊』に委譲されるのだ。

これを決めたのは私。今更変えろなんて言えない上に、私よりもより柔軟な策を考えているに違いない。そう考えつつ、私は荒廃した街を眺める。

――

――

――

大本営に到着したのは、練馬で襲撃に遭ってから数時間後のことだった。

私たちよりも先に着いて、着々と準備をしていた部隊が居たのでありがたい。

指揮官が部隊に休息の指示を出し、私は先に来ていた部隊の指揮官に声を掛けた。

「どれくらい前に着いた」

「つい30分前くらいです。……ヘリが先に来て、物資を投下していつてくれていたみたいで、既に作業は始まっています」

「そうか。……他の隊が着くまで、作業が終わり次第待機。別命を待て」

「了解しました」

私は指示を出し、大本営へと入っていく。

中は荒れたまま。血痕も残ったままだ。死体や、床の血溜まりは無くなっているが、それでも、あの“事件”からは何も変わっていない。見覚えのあるところを見ながら、内部と歩く。

いつも休憩に訪れていた場所や、いつも執務をしていた場所。会議をしていた場所。資料保管庫。色々と見て周り、その度に、あの時のままだということ知らされる。

飛沫は固まり、深紅から赤茶色に。

それと共に、私の目で見たあの光景を思い出す。

――

――

――

『どうしたッ?!』

『はッ！ 横須賀鎮守府に下った兵が反乱をつ!!』

『なにっ?!』

穏やかな日、いつもと変わらない日だとばかり思っていた。

『憲兵は完全武装し展開せよ!』

『既に展開していますが、ことごとく突破されてっ……』

鳴り響く銃声、悲鳴。

何が起きているのか、秘書から受けた報告を飲み込むのはかなりの時間を要した。

『……ひっひひひひ』

護身用に携帯していた拳銃を握りしめ、少しずつ外を目指す。

何が起きているのかも理解できないこの状況で、私はある“者”を見た。

『っ?!』

『死ね、死ねっ。……死ね……死ね……死ね……死ね……死ね……死ね……死ね』

『がああああああ!! 痛い、痛い、痛い、痛いっ!』

『死ね、死ね、死ね、死ね……』

『痛い、痛いっ! 助けて、くれ! 助けてくれ!!』

『死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね』

『た、すけ……て……』

その光景を目の当たりにし、無表情、否、薄ら笑いを浮かべながらナイフをそれまで言葉を話していた“それ”に突き立てていた“者”に、照準の定まらない拳銃を向けていた。

カタカタと鳴らして居た私の方をブツブツと呟く“者”は、見て動きを止めた。

私の方に顔を向け、上から下へと私を舐めるように見る。

『新、瑞……長官……』

私を見た“者”は、見てくれはBDUを来た兵士。深緑のBDUを赤色に染めていた兵士。しかも、女性兵士だ。

髪や顔にまでかかった返り血を拭おうともせず、十数秒かそれ以上、私の顔を見る。

私も同じく、その女性兵士の顔を見た。

その顔には見覚えがあつた。

言葉を交わしたこともある兵士だ。

『貴方は……殺、せ、ない……です』

『何っ』

『貴方、は、“知って”いたっ……』

『南風少尉っ……』

南風少尉。海軍屈指の特殊部隊。海軍部直轄『諜報機関』の実働部隊であった彼女は、1回目の天色暗殺事件後の横須賀鎮守府警備部員の補充に志願した内の1人だ。

施設系任務は得意ではないそうだが、それ以外はそつなくこなすらしい。

有能な兵士の1人。

私的にも話したこともある。

その時は、落ち着いた雰囲気的女性だと感じた。少々タレ目なところを気にしているようだが、そこがチャームポイントとも言っていないだろう。

『私、たち……『鬪犬』、はっ……、〃裁きを下す〃、たい、しように、……自ら、の、意思……で、……そし、て……、〃生きる〃べき、人と……はん、だん……でき、る、の……なら』

血塗られているところ以外は、至って普通の容貌をしている。だが、そんな彼女の背後に見えたその姿は、人ではなかった。

私には興奮した犬、狼、またそれと近い〃何か〃に見えていたのだ。

『ころ、す……な、と……命令、され……て、い……ま……す』

『南風少尉っ！』

『どう……か、〃紅〃、提督が、のこ……した、まも……た、この……国、を……よろ……し、く……おね……が、い……し、ます』

そう言った南風少尉は見るからに刃こぼれしているナイフと、拳銃を片手に走り去ってしまったのだ。

その後、私は『鬪犬』には南風少尉と同じようなことを言われ、兵士には逃げるように言われながら、大本營の敷地外にあった鎮圧部隊の司令部に辿り着いたのだ。

『海軍部の新瑞長官ではないですか！』

私の下に走り寄ってきたのは、鎮圧部隊を指揮していて私の顔を知っている陸軍のある部隊の中隊長だった。

『お気を確かにつ！ あのような地獄をどうやってっ……』

私の肩を持ち、朦朧とする意識の中、私に必死に話しかける中隊長

の声だけが届く。

『長官っ?! しっかりして下さいっ?!』

――

――

――

「……新瑞大将っ!」

「はっ?!」

目を開くと、そこは大本営の広場にあるテントの中だった。

そこは司令部としてある場所。そこで、憲兵の中尉が私の肩を揺らしていたのだ。

「すまない。寝ていたようだな」

「ええ。被害状況やら損耗した部隊への補給、休息等の指揮をした後、寝てしまわれたんですよ」

「そう……だったのか?」

「ええ。……『番犬艦隊』への引き継ぎが完了しましたので、報告しておきます」

そう言つて中尉はクリップボードに挟まっている紙に目線を落としました。

中尉の報告を聞きながら、私は考え事をする。

先ほどの夢だったのだ。

ここで見た光景の再現がなされていたのだ。

そして、何故今頃になってこのような夢を見てしまったのだ。

「ここからは、『番犬艦隊』の戦になりますね」

「そうだな。……全軍の統率は執れているのか?」

「はい。海軍は言わずもがな、陸軍もちゃんと指揮下に入りました。空軍は元より横須賀鎮守府直掩の部隊ですから、海軍と同じです」

指揮系統が変わり、艦娘に移ったことで何かしらの行動があるのかと思っていたが

、どうやらなかったようだ。

陸軍もおとなしく従つたらしい。それは良いことだ。

というよりも、こうやつて報告に来た中尉も、そんな素振りは見せ

ていない。

「新瑞大将。大将も指揮下に？」

「そうなるな」

そう訊かれて、ただ一言だけ答える。

決めていたことだし、彼女たちも了承済みだ。

「大将は松代にお戻りになった方が良いのでは？」

「何を言う」

「海軍の将官は大将だけなのですよね？」

中尉はそう訊いてきた。

「だからどうした」

「大将を失えば、海軍は完全に崩壊してしまいます。もし、この作戦で大将を失ってしまったら、私たち日本皇国は深海棲艦に抗う術を完全に失ってしまいます」

そう食い下がってきた。

同じことは私も考えていた。私がかもし戦死してしまえば、日本皇国の海軍は完全に無くなってしまうのだ。

それはなんとしても避けなければならぬことなのではないかと。

だが、考えても不毛だったのだ。

私は海軍の長。海を奪われたのなら、取り返す義務がある。というのは、建前だ。

死にたい訳ではない。生きていたいに決っている。なら何故？

それは、指揮官は兵と共に、前線で指示を出さなければならぬからだ。

ただそれだけだ。

「ふっ……心配ない。私はしぶとく生き残ってみせるさ。陛下のため、日本皇国のため、何より国民のため、妻や子のために」

そう言うと、中尉は何も言わずに目を閉じた。数秒閉じたあと、開くと私に一言だけ言って立ち去ったのだ。

「私たちの海を取り返しなすう」

『番犬艦隊』の指揮下に全軍が編入。すぐに作戦が指示された。作戦の指揮はビスマルクが担当。

第一段階。大本営にも通信部隊を設置し、残りの海軍海兵部隊と陸軍の連隊、戦車部隊は艦娘と共に横須賀鎮守府へ前進。

この時、戦闘ヘリ部隊は大本営にて臨戦態勢で待機。空軍は上空の深海棲艦の艦載機の迎撃に。

第二段階。横須賀鎮守府に到着後、拠点を構える。インフラの確認後、稼働する機器は全て稼働状態へ。同時に妖精の搜索、回収、救助、確認。工廠と入渠場の復旧開始。

この時、戦闘ヘリ部隊は横須賀鎮守府へ移動。空軍は引き続き艦載機の迎撃。それと併せ、近海の哨戒。

第三段階。松代に連絡。鎮守府地下にある資源の後送及び、可能ならば増援の要請。鎮守府の地下司令部の復旧。

戦闘ヘリ部隊の輸送ヘリは、兵員を乗せて主要地の奪還。どうやら横須賀鎮守府を拠点に、各地の主要施設の奪還を目指すということみたいだ。

効率的というよりも、艦娘の支援が行き届きやすいような配慮が成されている。そして、備考には『鎮守府港湾の対艦防御兵装の復旧』が書かれていた。どうやら、深海棲艦の侵攻があったとしても、これで時間稼ぎが出来るということらしい。とはいえ、それは妖精たちがいればの話らしいが。

――

――

――

私は『番犬艦隊』からの命令で、番犬艦隊を輸送するトラックの1つに乗っていた。

誰を輸送しているのかと言うとビスマルク。『番犬艦隊』の長である艦娘だ。

しかも今度は助手席ではなく、荷台。ビスマルクが艤装を身に纏った状態で居るところに、椅子を置いて、そこに座っていた。ここには通信兵が2人、一緒に乗っている。ビスマルクが移動中に全軍に指示を出す時に補佐してもらったためだ。

「新瑞」

「なんだ？」

黙っていた通信兵の目が見開いた。どうやらビスマルクが私のことを名字の呼び捨てで呼んだからだろう。

「輸送部隊の直掩をしていたグラーフ・ツエツペリンからの要請があるんだけど、聞いてもらえるかしら？」

「答えられるならばな」

そう答える。

「ふふつ。貴方もズルい人ね。……要請は『現在地からの前進』。陸軍大宮基地の横に艤装を展開しているグラーフ・ツエツペリンだけだね、あそこからだと、今から進む横須賀周辺に飛ばせないんだって」

「……航続距離か」

「そう。戦闘なんてすれば、途中で機体を捨てることになるわ。だからといって、機体下部に増槽と付けても、どのみち1度しか戦闘できない。だから、今の大宮から前進して、大本営辺りまで行きたいですよ」

そう訊いてきたビスマルクの表情は揺るがない。

常に眉間にシワを寄せ、真剣な眼差しを私に向けていた。

「……現在の私に、全軍に命令を下す権限はない。ビスマルクにその権限が移っているのだから、ビスマルクの思うように指示すれば良い」

そう私が答えると、ビスマルクは細い腕を組んで答えた。

「そう云うだろうと思って、既に指示済み。現在、通信部隊と憲兵を半分、対空陣地付きの兵以外はトラックに乗って大本営に向かっていているわ。それによって、松代からの補給も大本営に集積されるけど、問題ない？」

「それもビスマルクがしたいようにすれば良い」

私はぶつきらぼうに答える。

この『番犬艦隊』に以降の指揮権を委ねて欲しいというのは、ビスマルクからの要請だったのだ。だから私はそのようにした。

なのに、ビスマルクは私に色々と訊いてくる。というよりも、確認をしてくるのだ。

「……作戦指揮なんて初めてなのよ。紅提督の護衛はやってきたけど、部隊を率いて作戦行動なんてしたことないし……」

どうやら心の声が聞こえてしまったらしい。

私だけに聞こえる程度の声で、そう言ったのだ。

「そう……か。まあ、大丈夫だ。天色の作戦指揮は見てきたのだろう？」

「まあ、たしかに見てきたわ。私たちが護衛している時は、艦隊が作戦行動中だったからね」

そう言ってビスマルクは組んでいた腕を解く。

「でも歩兵の指揮は皆無よ。多分、私の指揮は自分の手足のように部隊が動くことが前提だと思うから、それ通りに動いて貰わないと困るわね」

「それが理想形だが、たいがいはいそうはいかないだろうな」

「まあいいわ。……通信兵！」

いきなり声を挙げ、ビスマルクは通信兵に通信の準備をさせる。

「プリンツ・オイゲンが敵編隊を電探で確認！ 対空戦闘用意！ ここからはあちらの領域よ！ 身を隠すなんて小細工、通用しないと思いなさい！」

「り、了解っ！ ……こちら指揮車、こちら指揮車！ 全車停止し、対空戦闘用意！ 対空戦闘用意っ！」

そう言った通信兵の胸ぐらを、突然ビスマルクは掴んだ。

「何言ってるの！ 走りながら対空砲火をしなさい！ なるべく隊形を乱さずに」

「撤回、撤回！ 全車そのまま、対空戦闘！ 対空戦闘っ！」

パツと通信兵の胸ぐらを離し、とてつもない目つきで一言言った。

「停止したらこんなトラック、ただの的よ。横須賀鎮守府に到達すら

していないのに、貴方は兵力を無駄に削りたいの？」

「ひっ!？」

機械の動作音をさせながら通信兵の方を向くビスマルクは、艤装の主砲口を通信兵に向けた。

「私の言葉足らずだったのも悪いわ。だけどね、全車停止命令は出してないわ」

「申し訳ありませんっ!」

「私たちは貴方たちの味方であり、同じくくに属する戦力でもあるわ。だけどね、同じ軍隊ではないの。私の所属は日本皇国海軍横須賀鎮守府艦隊司令部で、貴方の所属は日本皇国陸軍第一五連隊。私の指揮権は常に紅提督で、貴方の指揮権は陛下よ。その辺りのこと、よく考えなさい」

寒冷な風が吹き付けるような語りにも、通信兵は怯えてしまった。

無理もないことだが、流石にこれはやり過ぎだ。今後に影響する。

「おい、ビスマルク」

「……大丈夫よ。駄目になったのなら死ぬだけ。手を下すのは深海棲艦だけどね」

そう言ったビスマルクは、他の通信兵に指示を出した。

「走破性の高い戦車は対空戦闘にも向いてないから、全速前進! 先に横須賀鎮守府へ向かいなさい! 人員を乗せているトラックは走行したまま射撃! 歩兵は分隊支援兵のみ射撃! その他は走りなさい!!」

「指揮車より各部隊へ! 戦車は本隊を離脱し、そのまま横須賀鎮守府へ。戦車はそのまま横須賀鎮守府へ! トラックは走行したまま対空戦闘、歩兵は分隊支援兵のみ対空戦棟! 歩兵は走れ!!」

私が乗っているトラックが増速することはないが、銃声が鳴り始めた。

対空戦闘が始まったのだろう。確かに空を飛ぶエンジン音が聞こえている。艦載機が有効射程内にも入ったのだろう。

甲高い金属音が絶え間なく鳴り、各所で弾薬補充を求める声がある。

それに応答するように、弾薬補充を行っている兵が弾薬を持って走り回る声がしていた。

「……」

それなのに、ビスマルクは黙ったままだ。

多分だが、プリンツ・オイゲンや他の艦娘から情報収集しているのだろう。

現状、何が起きているのかを見極め、大局を見るために。

数十秒ほど立つと、ビスマルクから新たな指示が出た。

「この先の交差点で全軍停止し陣地を構築。編隊の襲撃へ本格的な迎撃を開始するわ。この際、Z3が艦装を出すので注意！」

すぐさま通信兵が全軍に指示を連絡する。

その様子を見届け、ビスマルクは宣言した。

「深海棲艦の編隊はこれ以降、私たちが作戦終了するまでに1回か2回しか来ないわ。初回はしっかりと追い返すわよ！」

トラックが停車し、そのままビスマルクは飛び降りて直接、陣地の構築を指示し、喝を入れた。

「貴方たち、それでも栄えある日本皇国軍人かつ!! 下劣にも得体の知れない未確認の金属の塊にここまで攻め入られて、悔しくないの?!

故郷を失い、首都は陥落させられ、身を寄せ合いながら少ない資源や食料を分け合いながら暮らすのがいいの?!

きっと、陣地構築が遅かったからだろう。

それは、こんな破壊しつくされた市街地の交差点で陣地を作ったことなんてないだろう。だがそれは言い訳にしかない。より迅速に、より正確にそれをなし得たのなら、編隊の迎撃も効率的に行うことが出来るだろう。

それを咎めるため、自らがそう喝を入れたのだ。きっとそうに違いない。

「私は嫌よ。だからこうやって戦う! 貴方たちも戦いなさい!」

返事はない。だが、見るからに動きは変わった。作業する速度が上がったのだ。そして、瓦礫を上手く利用し、陣地の構築することも始めたのだ。

壊れた車で四方を囲み、その中に分隊支援兵が入り、仰向けに寝て、機関銃を上に向けているのだ。

そして、その他の歩兵はトラックからバケツリレーのように並び、機関銃の弾薬ベルトを運ぶ態勢を整え、残りの火器兵装類を利用しようと思案する。

ビスマルクの一声でここまで変わったのだ。

そのビスマルクは、各陣地に詳細な指示を出しながら、Z3に艦装展開地点を指示、空を睨んでいた。

そしてその時は来た。

交差点で空を見上げていると、先ほど襲撃してきた編隊とは別の編隊。おそらく、本隊と思われる集団が見えてきたのだ。

まだ小さく見えるから、ここから撃つても当たらない。一斉射撃の準備を進めていたビスマルクは、その指示を出すのを今か今かと空を睨んで待っている。

そしてその時は来た。どういう形をしていて、どんな爆弾を積んでいるのか分かる程までに降下し、攻撃態勢を取っていた深海棲艦の艦載機編隊が、こちらの射程範囲に入ったのだ。

そして、編隊は急降下。攻撃を始めたのだ。

それに呼応するように、ビスマルクは大声で叫ぶ。

「射撃開始ッ!!!」

上向きに閃光が走ると同時に、地面に光の矢が降り注ぐ。地面は砂煙や破片を跳ねさせながら、時には大きなモノを落としていく。

爆発を繰り返し、周辺に大穴が空く。だが、陣地の分隊支援兵たちは怯まずに機関銃を撃ち続けた。

5. 56mmという、艦載機に有効打が出るか分からない弾丸だ。だが、それでも弾丸であることには変わりはない。ときには7. 62mmも撃つ。それは有効打を出せる可能性が大いにあった。12. 7mmもまた然り。むしろ、それが本命だろう。

車載重機関銃の仰角を限界まで上げ、空へ撃つその様は天へ突き刺さる槍の様だった。

真鍮が地面に跳ね、時には金属の鈍い音が交じる。

金属と金属の擦れ合う音が鳴り、やがて空を飛び回る鉄の鳥はある者は燃え上がり、ある者は逃亡を始める。

「いいわ！…このまま追ひ払いなさい！」

ビスマルクも興奮し、通信兵から受け取った受話器を片手に空を見上げ、声を高らかにあげていた。

やがて交差点からの視界の範疇から編隊は消え失せ、エンジン音も聞こえなくなる。

迎撃に成功したのだ。

「……各部隊は被害状況を纏めて報告して」

そうビスマルクは受話器に向かって言うと、今度はZ3と話し始めた。

と言っても、端から見たら独り言を言っているように見えるが、実はちゃんと話をしているらしい。私にはその辺はよく分からない。

「マックスも艤装を身に纏って撤収よ。被害は？」

それだけが私に分かる『番犬艦隊』の現状だった。

「損害軽微、ね。直撃弾はなかったのね？」

心配そうにZ3の艤装を見上げるビスマルクは、自分の艤装の主砲を撫でる。

「不発弾、ね。了解。その処分は任せるわ」

ビスマルクは各所から出てくる被害状況を聞き、全体に指示を出す。

「先行させた装甲部隊に追いつくわよ。総員、直ちに乗車。点呼が取れ次第前進」

完結に指示を出し、自分もトラックに乗り込む。

そして、自分らの乗車を確認すると、トラックの運転を任せている兵に出すように指示。

私とビスマルクの乗ったトラックは前進を始めた。

もう、横須賀鎮守府まで少しだ。

目的地に近い。そう私は確信していた。

After Story 日本皇国最期の盾の話⑧

「人が全くない住宅街や商店街を抜け、巨大な壁が目に入った。もう目的地には着いたのだ。」

日本皇国海軍横須賀鎮守府艦隊司令部。

日本皇国の要衝、最後の砦。皇国軍最大戦力を保有する基地。

だがそれも今では空だ。誰もいない、人っ子一人として居ないのだ。

「正門から入り、グラウンドにトラックを止めて」

「了解。指示を出します」

艦装を身に纏ったまま、ビスマルクは通信兵に指示を出していく。

「戦車中隊はZ-1の指示に従って偽装を始めて。それからここを拠点として使うことになるけど、入っても良いところを指定するから、各部隊の指揮官は私のところへ集合」

「補給部隊の到着が予想されるから、艦娘寮から近い門の開閉に部隊を向かわせて。もしかしたら人力で開閉させることになるだろうか、それなりの人数で」

ビスマルクの周りに集合していた、通信部隊の無線兵、総勢10名はあちこちの方面に散っている通信兵に連絡を次々と入れていく。

その様子はなんとというか、小さな戦闘指揮所にでもいるような感覚に陥った。

「一通り連絡を回した通信兵は、ビスマルクについて回る兵を自らで決め、他は各方面へと散る。」

「新瑞」

「なんだ？」

「少し考え事をしていたビスマルクが突然、私に話しかけてきたのだ。」

「武器とかに詳しい人、力のある人とか居ない？」

「……さあ、どうだろうか。基本的に兵士は皆、一般人よりかは力が強いぞ」

「そう。……10人くらい集めて欲しいわ。少し運ぶものがあるから」

「分かった。何処かの歩兵部隊から選出しよう」

私はビスマルクの下から離れる。頼まれたことをこなすため、海軍の歩兵が集まって拠点を用意しているところへ入っていく。

グラウンドは車両を置くところとし、食住するところは『番犬艦隊』の指示で、かつて『闘犬』の兵舎として使用されていた建物の裏手にある広いところに陣を用意していた。

そこには陸海軍の歩兵部隊が一緒になってテントを張ったり、仮設施設の準備をしていた。

物資はあまり持ってきてないが、後々到着する補給部隊が今後の行動をするのに必要不可欠な物資を運んでくる。それまでの繋ぎ分を出しているのだ。

「中尉」

「新瑞大将。どうされましたか？」

「君の独断で構わない。兵器に関する知識が豊富な人間と、手の開いている人員を回して欲しい」

「……分かりました。前者の方は少し時間がかかるとは思います、後者は今すぐにでも」

「いいや。同じタイミングで構わない」

「そうですか？ ……分かりました。5分で」

そう言って中尉は走り出してしまった。

私はその場に立ち尽くし、兵士たちの作業を眺めていると、中尉が私の視界に入ってくる。どうやら人員の確保が終わった様だ。

「ご用意いたしました。全員海軍の人間です。ある程度のこととは覚悟しているのです」

「ありがとう。では、失礼する」

「はい」

私は中尉の用意した11人を引き連れて、ビスマルクの下へと戻りに脚を向けた。

「あ、新瑞大将？」

そんな私についてきていた1人が、話しかけてきた。

何を訊いてくるかなんて、想像し易い。これから何をやらされるのか、それが不安なのだろう。

無理もない。私から呼び出され、どこかに連れて行かれるのなら。

それに『番犬艦隊』のこともある。いくら海軍の人間とはいえ、艦娘をよく思っていない人間だって居ない訳がない。

その辺りを考えているとキリがないので、私は話しかけてきた兵の言葉に耳を傾けた。

「私たちは一体……」

「重要任務だ」

「そ、そうですか」

「……多分」

私にも分からない。ビスマルクの指示で私が用意した訳だが、どうして必要なのかも聞かなかった。

想像できるにはできるのだが、いかんせん色々ありすぎる。私も正直、何をやらせるために呼んだのかも分からないでいたのだ。

「正直、俺も頼まれたただだからな」

「そうでありますか……」

「何させられるかなんて、大方検討はついているんだがね」

そう言いながら歩く。そしてビスマルクのもとに着くと一言。

「ありがと、新瑞。その11人、付いてきなさい。装備は置いていてね」

「「はっ!!」」

不審がつてはいたものの、命令された通りに動く海兵たちはその場で装備を外して、邪魔にならないところに追いやると、そのままビスマルクの後を歩いて行ってしまった。

どうやら私もここでお役御免らしい。私にも出来る仕事でも探して時間でも潰していよう。

それに、今後起こりうることの予測でも立てて置く。

経験がないことを自白したビスマルクたちのためだ。もしもの時、判断材料になるならばいいだろう。

――
――
――

横須賀鎮守府艦隊司令部での設備設置は完了し、野営地も確保した。

テントが立ち並ぶ道の脇にある並木の向こう側では、トラックから荷降ろしされたありとあらゆる物資が並べられ、そろそろ野戦病院用のテントが出来上がるころだろうと言う時、ビスマルクたちが帰ってきたのだ。

ビスマルクが連れて行った11人は誰も掛けておらず、何やら疲れた様子でこちらに歩いてくる。一体、ビスマルクは兵たちに何をやらせたのだろうか。

「戻ったわ」

「ああ。……それで、一体何をしに行っていた？」

そう私が訊くと、渋るかと思っていたがすんなりと答えてくれた。

「事務棟と警備棟、酒保以外の全ての施設を回って妖精さんの搜索。それと、工廠と入渠場の再稼働、港湾の状態の確認、沿岸の要塞砲の点検と残弾の確認」

「ああ、もう良い。いわゆる、再稼働だな」

「そうなるわね。といっても、ここが發揮できる設備の半分しか動かしてないけどね」

そう言ったビスマルクはあれこれと施設を教えてくださいました。

後で開ける予定の地下牢やあちこちの林の中にあると思われる防空設備、地下司令部、シエルターなどなど。ここに一時的に駐屯する私たちの補給物資ともなり得るものも稼働していない施設の中に入っているという。

「あとはなんとか掻き集めた妖精さんたちに頼んで、優先順位が高いものから稼働開始作業中よ」

ビスマルクはそう言って私にあるものを渡してきた。

それは紙だ。だがただの紙ではない。

「これは？」

「新瑞に一時的にここの指揮権の一部を委譲するのよ。どうしても艦娘では出来ないところもあつてね」

「そう……か。……だが、私にこんなものを渡しても良かったのか？」

「構わないわ。指揮権とはいえ、一部だけ。火器管制だけよ」

「そうか」

これ以上何を言っても仕方ないので、私は素直にそれを受け取った。

「その指揮権も今は使えないけどね。……地下司令部の復旧が済み次第、通信兵だけを付けて入って貰うわ。私たちは私たちのことで手一杯だから、任せるだけよ」

「そう……なのか？」

「ええ。こうやって身に纏っている状態なら良いんだけど、船となると話は別。私たち艦娘の役目は、その時点で艦長となるわ。それを務めるだけでも大変だつていうのに、地上部隊の指揮なんてやれっこないわよ」

そのため息混じりに言ったビスマルクに少しだけ教えて貰った。

それは本来ならば、私の耳に入つていてもおかしくないことなのだが、何故か入らなかつたことだつたのだ。

「工場には装備や艦載機の予備が大量に納められているわ。でも中に入られた形跡がなかつた。どうしてここに入らなかつたの？」

「えっ？」

「……じゃあ、私は指揮をするわ。新瑞、貴方は連れて行く通信兵の選定を」

「分かつた」

はぐらかされてしまったが、もうどうしようもない。訊くに聞けない状況を作られてしまったし、聞いたところで私に理解出来ることなのだろうか。そのように直感的に考えてしまったのだ。

「そこそこの、少し良いか？」

通信兵が居る通信部隊のテントの近くに行き、目についた通信兵を指す。

「はっ！」

「なんでありますか？」

無線機を背負ったまま、私の前に立って敬礼する。それに答礼し、呼んだ趣旨を伝えはじめた。

『番犬艦隊』の命令で、艦娘では手に負えないところを任された。各部隊への連絡役を頼めないだろうか？」

「了解しました」

「了解」

2人とも了解してくれたみたいだ。だが、まだ施設の稼働は済んでいないようなので待機を言い渡す。

時間になればまた呼びに来るとだけ伝え、私はその場を離れることにした。

――

――

――

特に求めている訳ではないのだが、私のところに続々と状況が集まってきた。

この場にいる最高指揮官は私なので、仕方ないと言えば仕方ないことなのだが、一応、指揮権は艦娘にある。私もただの仲介役として機能していないこの場で、私に情報を集めても、後で纏めて伝えることくらいしかやることはないのだ。

情報を整理する。

現在、テントの設置や荷降ろし、集積所の設置、巡回の警備の番、偽装等は全て完了。どうやらビスマルクからの指示だったらしい。それと伝達を総員に伝えたことを確認したという報告があった。

伝達内容はいくつかある。まずは、一切の艦隊機能を維持するための施設への進入禁止だ。そういうことを伝えたということは、艦娘としての自分の言葉なのだろう。それと、火器類から弾を抜いておくこと。弾を込めるのは緊急時だけだということだ。それを徹底して全軍に伝えるように言われていたらしい。

「松代からの補給部隊が到着しました」

「そうか。門を開き、中に入れてやれ」

「了解」

私はビスマルクなどの代理をして、陣地の指揮をしている。

今、ビスマルクは稼働させる施設を妖精と共に点々としているらしく、他の艦娘は警備のために海に出ているということだ。とはいえ、沖には出れないそうなので、それまでだが。

ビスマルクが妖精たちに上手く指示を出しているためか、私のところにも妖精が来るようになった。

妖精の好意で、工場にある火器類を持ってくるといふものだ。

「それで、工場には歩兵用火器があるので？」

「はい。滅多に使うものではありませんが、対空機銃や小口径の艦砲が沢山あります。貴方たちでも使えるように改造してありますので、ここを守って下さいね」

言い方に含みがあるように聞こえなくもないが、それも仕方ないだろう。

一応、ここに居させて貰っている立場であるからな。そういう訳で、私も敬語を使っている。

「分かりました。手の開いている兵の数を後に報告します」

「はい。では」

そう言つて、身長がとても小さい妖精は立ち去つていった。

もつと幼い口調を使うと偏見を持つていたが、そうでもなかった。というよりも、普通の兵士のような口調振りだった。

そんな疑問を持ちながらも、私のところに来る兵にあれこれと指示を出しておく。

もちろん、妖精の好意で使える小口径砲の操手を数えるためだ。

妖精からの話では、どうやら艦娘に装備される砲は自動化が進んでいるらしく、操作には砲手と観測手、通信手くらいだけで済んでしまうようだ。

だから、妖精が要請した兵の数は1門につき3人+ α 。この α は、交代要員みたいなものらしい。

私は思案する。どこの部隊から兵を引き抜くか。

ここに居る全軍は、それぞれが必要だから存在している。

編成時にも連れていける最低限度の兵員数を要請しているから、今から別のことを任せたら、本来やるべきことが出来なくなってしまうのだ。それだけはなんとしても避けたい。

だが、妖精から有り難いことに、小口径砲の付与があるのだと考えると、そちらに人員を割いた方が良いのは自明の理だ。

なら、私はどうするべきなのか。

ビスマルクに付いていった通信兵に連絡を入れ、ビスマルクに指示を仰ぐ。

ビスマルクからの返答は、『砲兵経験のある歩兵を使ったらどう?』だった。私としては、適当な歩兵部隊を丸々移せばいいと思うのだが、ここは未経験の兵を多用するよりはマシだろう。

「さあ、行くか」

そう自分に言い聞かせ、行動を開始する。

――

――

横須賀鎮守府艦隊司令部の全機能が回復したのは、到着して2日後のことだった。

それまでずっと、ビスマルクは妖精たちと共にあちこちを周り、工事を行っていたみたいだ。確かに、あちこちで工事をしているような音はしていたのだ。

帰ってきたビスマルクからは、2言目から指示が飛び出した。

どうしていたとか、何を直していたとかあつても良かったとは思いますが、それは個人としての話。時と場合を考えれば、ビスマルクの取っている行動は正しいのだ。

「陸軍の部隊を2つに分けるわ。第一二、一五連隊、臨時自走砲連隊第一大隊、第六戦車連隊第九中隊。第二連隊、第八連隊、臨時自走砲連隊第二大隊、第六戦車連隊第一〇中隊。それぞれを第一派遣部隊、第二派遣部隊とし、海軍工廠とプラントへ向かって。出発は3時間後」
「臨時海兵第一、二、三大隊は横須賀鎮守府に残って」

その指示が飛び、集まっていた各部隊の指揮官は蜘蛛の子を散らす

ように四散した。

各々の部隊へ向かい、指示を全員に通達。すぐに準備に取り掛かり始める。

周囲は騒がしくなり、ビスマルクたちの周りには海兵の指揮官たちが来ていた。

「あら、分かってるじゃない」

「ええ。何かあるでしょうから」

海兵の指揮官たちは分かっていたようだ。

ビスマルクから指示があることを。

「第二憲兵師団からそれぞれの派遣部隊に中隊を付けて欲しいわ。任務は工廠の確認とプラントの再稼働。残りはここで守備と連絡役よ。海兵たちは工廠に残っていた艦娘用の兵装を運用してもらおうわ」

あくまで予想だが、ここに海軍の人間だけを残したのは、扱いやすく言う事を聞くからだだろう。

「了解。すぐに部隊を捻出します」

「すぐに兵に伝達します。それとビスマルクさん」

憲兵は走り去り、海兵の指揮官たちが残った。

「何かしら？」

「部隊を工廠に向かわせ、手伝わせますが？」

「ええ、お願い。……そういうことなら、今すぐに動いて欲しいわ」

「了解しました」

海兵の指揮官たちはすぐに走り出す。

それを見送ったビスマルクは、私の方を向いた。

「新瑞」

「何だ？」

「地下司令部の復旧も終わったから、確保した通信兵と共に入りなさい。海兵たちの指揮は頼んだわ」

「分かった」

そうやって私は後ろで待っている通信兵たちに声をかけ、呼び出す。

「無線機だけ持ってきて、もう一度集合してくれ」

「了解」

通信兵は敬礼をすると、海兵たちと同じように走り出した。

それを見送った私も行動を始めようと、歩き始めるとビスマルクに引き止められる。

「ちよつと」

「……ああ」

「これから私たちが取る行動を、新瑞には教えておくわ」

そう言ったビスマルクは今後の方針を語りはじめた。

「陸上部隊が奪還に向かっている最中、私たちは近海に居る可能性のある深海棲艦の目を引き付けるわ。だから、ここに出す艦娘用の兵装というのは対空兵装。対空砲と機銃よ」

目を引き付ける、だと。

「この防衛をする訳ではないみたいだ。しかも、危険な任を自らが請け負うのだ。」

「今、ツエツペリンがこちらに急行しているわ。2時間後には着くと思うわ。……派遣部隊が出撃し、それぞれの施設に入って整備を始めるところに私たちは出撃する」

タイミングも完全に囷となるとしてはいい頃合いだ。

「奇襲攻撃を仕掛けるから勝率は高いとは思うけど、本音を言っしまえばどうなるか分からないわ。もしかしたら、誰かが欠けるかもしれない」

欠けるかもしれない。……つまり、轟沈が出るかもしれないということだ。

轟沈してしまえば帰ってこない、と以前に回収した書類には書いてあった。考えてみれば普通のことだ。どれだけ言っても仕方のないこと。

「なんて言っただって、私たちは練度が1」

練度。戦闘経験のことだ。これも回収した書類にあった。

「今回が初陣よ」

「そう、なのか」

「ええ。いくら鎮守府近海に出没する深海棲艦とはいえ、こんなところ

ろに空母がいるとなると、完全に“イレギュラー”よ。だから、私たちがかなりの被害が出るだろう、そう言っているの」

私には何が言いたいのか分かったような気がした。

「ここを奪還し、近海をうろつく空母を撃破するまでは私たちは退かないわ」

退かない。戦闘を続けるということだ。

「……言いたいことは分かっているわね？」

「……」

「ふふっ……。じゃあ、準備してくるわ」

何も答えなかった私を見て、ビスマルクは立ち去ってしまった。

何故、なにも言えなかったのか。それは、ビスマルクが何を考えているのかが分かったからだ。

きっと、ビスマルクはここで死ぬ気なのだ。

きっと、ビスマルクは早々に逢いに行くのだ。

「それは望んではいないだろうな」

私はそうつぶやき、自分の仕事を始めた。

既に通信兵は私の下に到着していたからだ。

「行くぞ」

気を引き締め、私は地下司令部へと向かった。

第一、第二派遣部隊は無事に工廠とプラントに到着したとの知らせが入った。

途中、何度か航空支援を要請してきていたが、航空教導団との連携も相まって、被害は最小限に留めた。

今のところ死者は0人。重傷者は何人か出て、後送しているが、最小限と言っても良い。

地下司令部は少し埃っぽかったが、半年は経たないものの、かなり放置していたこともあり、それなりに汚れていたようだ。

使う場所だけを掃除し、現在、私は地下司令部に入って指揮を取っていた。

「地上部隊、待機に入りました」

「警戒しつつ、各自休憩を取れ」

ここには通信妖精という、専属のオペレーターが3人居て、様々な部門に別れた妖精たちが情報をやり取りしている。

ここでの私の立ち位置は総指揮。最終決定権などが私に付与されている。それがビスマルクから受け取っていた、火器管制に関することだったのだ。

考えてみれば、火器管制以上に権限が与えられている気がしなくもないが、今更何を言っても仕方がない。

「工廠にて、グラーフ・ツエツペリン、艦載機の補充完了」

「輸送部隊に後送書類の引き渡し、完了」

「要塞砲及び対空兵装の起動確認」

「鎮守府火器管制、全て掌握」

私へ向けた報告が淡々とされていく。私はそれを聞き、ある人物へと連絡を入れた。

「ビスマルクに繋いでくれ」

「了解」

仕事をするだけの対応。それだけを言った妖精は、私の指示に従っ

てビスマルクへと無線（？）を繋げてくれた。

『こちらビスマルク』

「新瑞だ。鎮守府の全兵装の起動を確認した。それと、先ほども連絡したように、派遣部隊はそれぞれの施設を確保した。……確認が終わるまで、頼んだ」

『ありがとう』

淡白な返答。分かってはいたことだ。

ビスマルクたちは、近海に存在する深海棲艦の空母の撃滅を目的とし、それを成し遂げるつもりだ。

だが、空母を撃沈させるのには、少々というよりもかなり練度が足りない。

初陣の艦娘が最初に轟沈させるのは、駆逐艦だという。

レベリング、つまり経験を積ませるための出撃にて、最初に対峙するのは駆逐艦を主体とした水雷戦隊。それを、手練の護衛を付けた状態で攻撃をする。それと同時に、戦闘指揮を培うのだという。

ビスマルクは本来ならば、しなければならぬこのレベリングを行っていない。

端島鎮守府では置物、何もせずにしていたという。Z1とZ3はそれなりに戦闘経験はあると言っていたが、それでも初陣から2桁までは戦闘経験がない。

ビスマルクの補佐は出来たとしても、的確なものは出来ないと断っていた。

沈むかもしれない。

そう考えるのは、今までの話を聞いていれば分かることだった。

『ふふふっ……『番犬艦隊』、抜錨！ 出撃するわ!!』

そこで通信は途切れた。

――

――

――

地下司令部には続々と報告が入ってきていた。

「海軍工廠の掌握完了」

「空軍羽田基地の占領を確認」

「沿岸部のプラント、確保完了。物資の生産再開」

「一時的なインフラの復旧確認」

どれもこれも、最良の報告だ。

どれほどの犠牲が出たか等の報告はないが、報告の出来る余裕があるということは、壊滅はしていないだろう。

部隊の損害というものは、考えているよりも少ない割合の被害で大損害となる。

例えば、全滅。これは部隊の4割が死傷した場合に出される。10割が失われた時が本当の全滅。

こういう言葉というのは、そのままの意味を成さない場合がほとんどだ。

「全部隊へ。被害報告を」

「了解。全部隊へ、被害を報告せよ」

通信妖精は被害報告を全部隊に伝えた。

「……第一派遣部隊。歩兵部隊の2割が戦死。戦車5両大破、壊滅。自走砲4両大破」

「第二派遣部隊。歩兵4割が戦死。戦車7両大破、中破3。自走砲無傷」

「航空教導団。被撃墜2」

派遣部隊の損害は思っていた程少なかった。現場指揮官の判断が良かったのだろう。

それに、航空教導団も被撃墜2と報告したが、パイロットは脱出しているみたいだ。

基地に戻れば機体の予備はある。戦闘に復帰が出来る。

「うむ。……『番犬艦隊』はどうなっている?」
それが一番気になるところだ。

これまで、派遣部隊からはちよくちよく情報は入ってきていたのに、あまり驚くこともなかったが、『番犬艦隊』からは何一つとして支援要請もなにもかもがなかったのだ。

航空支援くらい頼めば、航空教導団とて力になっただろう。それ

に、彼らは下は横須賀鎮守府の防空部隊だった。艦娘の艦載機隊ほどではないにしろ、十分な働きは期待出来ただろうに。

「現在、鎮守府正面海域を航行中」

「戦闘は？」

「ありません」

鎮守府正面海域というのは、多分だが東京湾と湾外のことを指しているのだろう。

出撃してから2時間過ぎた。

『番犬艦隊』はおそらく巡航しているはず。だとすれば、そこらを航行していてもおかしくはない。

それに、彼女たちは外洋には出れない。理由は分からないが。だからきつと、誘い出すのだろう。深海棲艦を。

「……空軍に要請。偵察機を出して欲しい。範囲は東京湾、相模灘」

これは通信妖精に言ったのではない。私が連れてきている通信兵に言ったものだ。

通信兵はすぐに受話器を取り、通信を開始する。

「こちら横須賀鎮守府司令部。羽田基地へ」

『こちら羽田』

「偵察機を要請する。偵察範囲は東京湾及び相模灘」

『了解。偵察。目標、東京湾。相模灘』

羽田基地に偵察機は無い。その場合、戦闘機が出るだろうが、ここに少し狙い目がある。

偵察に出る戦闘機は2機編隊になると思われる。もし、深海棲艦と接敵したのなら、単機での戦闘は不可能だ。それがもし、2機いたのならどうだろう。

大きな攻撃は出来ないだろうが、艦載機の編隊に対する一撃離脱攻撃は可能だろう。対艦ミサイルを積んでいたのなら対艦攻撃だって可能なはずだ。

これがもしかしたら、ビスマルクたち『番犬艦隊』の助けになるかもしれない。そう考えたのだ。

「……新瑞大将。ビスマルクから通信が入っております」

さつき切ったばかりだというのに、通信を入れてきた。

何か話があれば、さつき話せば良かったのにと思いつつ、それに応答する。

「出る」

「了解しました」

私は通信妖精に出るよう指示し、さつきと同じように通信をする。

「こちら横須賀鎮守府艦隊司令部地下司令部、新瑞だ」

『ビスマルクよ。……貴方、独断で偵察機を出すつもりじゃないでしょうね?』

額から汗が一筋、流れ落ちた。向こうには声しか届いていない。私の表情は見えていないはずだ。そう思い、会話を続ける。

「どうだろうな。こちらの兵の安全も確保しなければならぬ。それに、君たちのホームもな」

それは暗に偵察機を出していることを意味していた。

それがビスマルクに分からないはずがない。

『相模灘から向こう側へは出ないで頂戴』

先手を打たれた。言葉を選んでそれっぽく言ったあとに、後でとぼければいいかと思っていたのだ。だが、それはビスマルクによって封じ込まれてしまった。

私は次の手を考える。

「彼我の戦力さが分からないんだ。空戦をするなら、守るべきところからなるべく離れている方が良いだろう?」

『そちらの戦闘機が撃墜されなくても限らないわ。回収の容易い、相模灘までならそちらでも回収できるでしょう?』

多分、私はこの時、顔を歪めていただろう。

『番犬艦隊』とはいえ、天色のそばにいた艦娘だけある。

『……貴方が何を考えているか分からないけど、旗艦が私で良かったわ。もし、ツエツペリンが旗艦だったなら、貴方を地下司令部に置かなかったでしょうね』

「はっ」

思わず、リアクションを本音で返してしまった。

普段はぶつきらぼうに話す、ツエツペリン。グラーフ・ツエツペリンがそういったことに聡いとは思ってもみなかったのだ。

精々、知識に精通しており、武は立つとは思っていた程度だったのだ。

認識を改めなければならぬ。もしかしたら、他の『番犬艦隊』も何かあるかもしれない。そう思い、警戒しようと思ったのだ。

『……まあいいわ。偵察情報はこっちにも流してちょうだい。それと、こちらが戦闘になった際、要請するまでは手を出さないで』

この言葉には回答をそうそう返せるとは思えなかった。

地下司令部に入っている通信兵たちは分かっているに決つたが、通信妖精などの妖精たちは話が別だ。

ビスマルクが何を考えているかなんて分かっているに決つている。それに、それが分かつていなかったとしても、横須賀鎮守府艦隊司令部の妖精なのだ。

何も知らされていない状況でも、私とビスマルクの話聞いていれば分かつたかもしれない。

「……了解」

『ええ、頼んだわ。……っ!?』

向こう側が一気に騒がしくなる。伝わってくる状況から察するに、深海棲艦の艦隊と接敵したのだろう。

『……我、敵艦隊と接敵!』

地下司令部が慌ただしく動き始める。これが、ここの本来の姿なのだろうか。

通信妖精や他の妖精たちはディスプレイを見ながら操作し、何を操作しているのかを叫ぶ。

私もここまで激しい司令部の慌ただしさは見たことがなかった。

そもそもここまで司令部施設を集めるものでもない。ここは特殊な施設だということを、私は再認識させられる。

「埠頭より、観測機が発進」

「レーダーサイトからの情報を集計中」

「全館に戦闘警報発令」

その刹那、薄暗かった地下司令部内をけたたましい音と共に、赤いランプが点滅する。

『鎮守府正面海域にて深海棲艦の艦隊を発見。繰り返す。鎮守府正面海域にて深海棲艦の艦隊を発見』

『非戦闘員は直ちにシエルターへの避難を開始。非戦闘員は直ちにシエルターへの避難を開始』

『戦闘員は市街地の住民の避難指示を』と言いかけたところで、全館放送は止まってしまった。

そう、ここは既に『門兵』は存在していない。そして、避難指示をする住民もいないのだ。

それに気付いた、全館放送をしていた通信妖精はそれを止めたのだ。

その間にも、妖精たちはあれこれと報告を重ねていく。

「要塞砲、対空兵装起動」

地下司令部にいる私の立っている目の前にあるスクリーンに、映像が流れ始める。

今までは真つ暗で何も移っていなかったものだ。

それが映し出したのは、鎮守府各所に設置された防犯カメラや、要塞砲に取り付けられたカメラ、高いところに設置されたものまで、色々などころにあるカメラの映像が流れ始めたのだ。

私はその映像を全て見て、外ではどういう状況になっているのかを判断する。

「通信兵！」

「はっ！」

数十秒もあれば良かった。

私はすぐに、外で待機している部隊に指示を出す。

とはいえ、工廠から借りた砲を操作する兵以外は弾薬運搬などの任務がある。今更指示を出したところで、始めたところであろう。

だが、これは形式だ。命令を出して置かなければならないのだ。

「ここに残っている部隊に連絡。予定通り、砲を操作しろ」

「了解！」

通信兵も私が言うことは分かっていたはずだ。だが、それを聞いて了解したことを伝えた。形式だから仕方がないのだ。

私はすぐに状況確認に戻る。

次々と情報もたらされ、それが徐々に整理された状態で1つのディスプレイに表示される。それを私は眺め、現状を把握する。

現在、グラーフ・ツェッペリンが艦載機隊を発艦させ、先発隊は交戦に入っているということだ。それと、ビスマルクやアイオワといった大型戦艦は砲撃準備に入っているという。

弾着観測射撃準備に入り、簡素機からの情報をまっついているみたいだ。他の艦は周囲・対空警戒中みたいだ。

羽田基地の偵察機はどうやら、戦域で旋回しながら情報を逐一送っている様子。

それも、地下司令部と羽田基地、松代にまで送っているみたいだ。私はすぐに命令を下す。

「偵察機は現状を維持しながら、情報収集に当たれ。深海棲艦の艦載機が襲来した際には、交戦を避けて離脱」

「了解！」

手の開いている通信兵が羽田基地と偵察機のパイロットに通信を入れる。

そして私はふたたびディスプレイに目を戻したのだ。

本来ならば指揮を取る人間であるが、今回はビスマルクにその指揮権がある。

私が何を言っても部下は聞きはするだろうが、行動しようとする者は居ないだろう。

私はこの状況を、ただ黙って見ていることしか出来ないのだ。

『番犬艦隊』、深海棲艦と艦隊戦に突入！

私の脳内を駆け巡っていた吐かれるべき指示が、一瞬にして吹き飛んだ。

接敵。発見した時点でそうなることは分かっていた。

すぐに今まで考えていたことを再考し直す。

「派遣部隊に伝達。『番犬艦隊』が戦闘を開始した」

手の開いている通信兵が、派遣部隊へと連絡を入れる。

この知らせが派遣部隊に何を意味させるのか。

それは、早急な作業完遂と松代から派遣される部隊の収容だ。任を交代し、横須賀鎮守府に戻ってくることを意味していた。

「松代に連絡！ 戦線後退の際の布石を行う！ 保有する対艦・対空兵装をこちらに回してもらえ！」

独断の繰り返し。きつと、ビスマルクに小言を言われることになるだろうが、私は気にしない。それは、ビスマルクを助けることに繋がるのだ。

これは国益ではある。だが、私個人としては悩みの種が増えることではあった。

だがそれも仕方のないことだろう。現状、国のことが最優先だ。私個人の私情をここに交えてはならないのだ。

――

――

――

こちらに入ってくる情報には限りがある。

『番犬艦隊』が戦闘を開始してから1時間。地下司令部に入っている情報はごく僅かだった。

航空戦で優勢を保っていること。初撃で護衛の艦隊を撃破したと。

それだけだった。

もっと詳細な情報が、もしかしたら通信妖精の耳に入っているかもしれない。

ビスマルクの指示、若しくは別の要因で私たちに知らされないのだろうかと考えていた。

私は通信妖精、地下司令部の指揮系統を牛耳っている妖精たちを見回す。

私の視線には気付くものの、何も反応しない。

やはり、私に教える必要のない情報は言わないようにしているみたいだ。

ならと思ひ、私はここから見える範囲の妖精たちが何をしているのかを確認する。

手元なら見えるし、頑張ればディスプレイに表示されている情報だつて回収できる可能性があるのだ。

目を細め、小さい文字を丁寧に読み取っていく。

「……大将？」

手の開いた通信兵が私の顔を見て、そう言ったのだ。

表情を読み取り、何かを察したのだろうか。

「どうした？」

「いいえ……」

歯切れの悪い返答をした通信兵はうつむき、少し経つと顔を上げた。

その表情には何かを決心したように見えたのだ。

「大将！ 意見具申、よろしいですか？」

「ああ」

少し間を開け、通信兵は口を開いた。

「松代から移ってくる人員を、海軍工廠の技師を優先したらどうでしょうか？」

その意図が私には伝わった。

ビスマルクたちに一刻も早く加勢したいのだろう。

通信兵は陸軍所属だ。こんなことを具申したところで、何かがあるという訳ではない。だが、戦況は好転する可能性が出てくる。

そして、現在の海軍は人員が極端に不足している現状だ。3軍の人員体制を鑑みて、陸軍が一番飽和している。そこからもしかすると、海軍に回される可能性というのが無いとも言えないのだ。

そうなる状況を生み出すのは総督か陛下。そのどちらもが、その指示を出したとしてもおかしくないと判断できた。

通信兵はそれを期待しているのだろう。

艦娘だけに任せず、自らも戦場に立つことを。

今時、このような考えを持った兵はそうそう居ない。とても珍しい思考を持った兵士だったのだ。

私は少し思考する。

通信兵の具申。松代にしてもいいのか。

状況は刻一刻と移り変わっていく。

もしかしたら、松代が海軍工廠の技師を優先して出している可能性もある。なにせ、指揮をしているのは総督だ。通信兵が期待したことは、十二分に現実に起きる可能性があったのだ。

――

――

――

通信兵の具申は松代に通り、海軍工廠の技師が工廠に到着したのは、具申をした3時間程経った頃だった。

この時既に、『番犬艦隊』と深海棲艦との戦況は把握でき始めていた。

通信兵を介して私に偵察機からの情報がもたらされていたのだ。

『番犬艦隊』は現在、深海棲艦の艦隊を撃破。だが、相手は軽巡洋艦を旗艦とした水雷戦隊だったのだ。現在、外洋に出ない航路を航行中。

交戦による被害も、パイロットの判断で伝えられていた。

損害は軽微。艦載機の喪失は1桁台。まだ、航空隊を保っていられる状態であったのだ。

私はこの状況を鑑みて、ビスマルクたちは補給に戻ってこないと判断した。

損害軽微だったのなら、わざわざ戻ってくるなどの二度手間はしないはずだ。

「大将！」

「む、どうした？」

突然、通信兵が私に声をかけたきた。

何事かと思い、返事を返す。

「空軍の偵察機が深海棲艦の艦隊を発見！」

私は通信妖精に目配せをする。

「続ける」

「はっ！ 相模灘南、大島付近にて、航行中の深海棲艦を発見。数は6。艦種は航空母艦2、戦艦1、重巡1、駆逐2！」

通信兵も声を張り、通信妖精に聞こえるように復唱した。

それに応え、通信妖精も『番犬艦隊』に通信を入れた。

「こちら横須賀鎮守府艦隊司令部地下司令部。『番犬艦隊』、応答お願いします」

『こちら『番犬艦隊』、所要でグラフ・ツエツペリンが代行だ。要件は？』

「空軍の偵察機が深海棲艦の艦隊を発見」

『……続ける』

「編成は空母2、戦艦1、重巡1、駆逐2」

『空母2、戦艦1、重巡1、駆逐2。了解した』

「現在相模灘南、大島付近を航行中」

『相模灘、大島付近だな。……了解。艦隊を急行させる』

ビスマルクとの通信とは違い、グラフ・ツエツペリンだと安心する。

このやり取りを私がしている訳ではないが、どうしてもビスマルクだと緊張してしまうのだ。理由は分からない。

声の調子かなにかだろうかとも思ったが、それはそれで失礼だ。

多分、私の中でビスマルクという人物像から偏見を持たせているのだろう。本来ならば、そういう感情を入れてはいけないものだが、私とて人間だ。仕方のないことだと割り切る。

刻々と進み行く時と共に、航空教導団の偵察情報が舞い込んでくる。

だいたいの内容は、『番犬艦隊』と機動部隊の戦況だった。

帰る分だけの燃料ギリギリまで飛び続け、タイミングを見計らって交代する偵察機からもたらされる情報が、今の私の目と耳になっていた。

現在、『番犬艦隊』が深海棲艦の機動部隊と接敵してから4時間が経っていた。

通常の交戦ならばあり得ない時間が掛かっている。

深海棲艦の侵攻が始まる前に横須賀鎮守府から回収した資料によると、艦娘の艦隊と深海棲艦の艦隊との艦隊戦では、決着が着くのにだいたい1時間くらいが掛かっていたのだ。

だが、今現在起きている艦隊戦はその3倍の時間が掛かっている。経験のないビスマルクたち『番犬艦隊』とはいえ、ここまで決着が付くのに時間がかかるものなのだろうか。

それに、燃料が帰る分しか残っていなければ撤退を選ぶはずだ。

一度は撤退し、補給を行って万全な態勢に戻した後、再度攻撃を仕掛ける。こういった手を取っても良いはずなのだ。

だが、横須賀鎮守府から東京湾に出て、相模灘を通過して大島に向かうだけならば、巡航していてもそこまで燃料を消費するとは思えない。むしろ、ほとんど残っているはずなのだ。

となると、この3時間は何か別の要因が発生している状態での戦闘になっていると考えられた。

『番犬艦隊』は、この3時間で機動部隊の駆逐艦を2隻轟沈させている。そして、重巡にも痛手を負わせているのだ。戦艦はかすり傷、空母2隻もまた然り。

双方の空母は、船体に傷は負ったものの、飛行甲板は無傷だという。その空母から繰り出される艦載機群を、グラーフ・ツェッペリンの

艦載機隊が迎撃に当たっている。

Fw-190を艦載機用に改造したものを、横須賀鎮守府工廠で更に改造を施した特別機。桁外れな火力と機動性、速度性は、乗り手によつては化物になるとグラーフ・ツエツペリンは言っていた。それがだいたい20機いるかいらないか。

それが100にも届く艦載機群の相手をしているというのだから、私は結果を決めつけていた。

「新瑞大将。航空教導団からの要請で、航空隊を派遣し、『番犬艦隊』の支援を……」

「ならん」

通信兵が仲介する航空教導団の申し出を、私は一蹴した。

何故なら、現在の全軍の指揮権はビスマルクに委ねられていた。私がかここで航空教導団に支援命令を出せば、形式上は軍規に反する。上官の命令無視とまではいかないが、指揮官の命令無視には当てはまる可能性が十分にあつたのだ。

一方で航空教導団の思いも理解していた。

短い間ではあつたが、近くで横須賀鎮守府を見てきた彼らだ。もちろん、ビスマルクたちのことも知っているのだろう。情が湧いたと言えば、それはなんだか違う気がするが、助けてやりたいという気持ちに沸くのは至極当然のことだつた。

そんな時、地下司令室に声が響く。

それはビスマルクの声だつた。どうやら通信を入れてきたようで、それに私は呼応した。

「こちら横須賀鎮守府地下司令部、新瑞だ」

『ビスマルクよ。先ずは、偵察機からの情報提供ありがとう。どうやら、私たちが狩らねばならない敵はこいつらで間違いなかつたみたいよ』

「そうか」

ビスマルクの声の向こう側では、炸裂音が断続的に鳴り響いている。大きいものや小さいものまで。数多の砲門が砲弾を吐き出していることが分かつた。

『現状報告よ。私たち『番犬艦隊』は現在、大島付近で深海棲艦の機動部隊と交戦中』

それはこちらでも分かっていることだ。形式上、口に出したのだろう。

『駆逐艦2隻は轟沈。重巡は大破させたわ。……オイゲンったら、勝手に吶喊して手柄を挙げるんだもの』

となると、現在交戦しているのは戦艦と空母2隻という訳だ。

多分、重巡は虫の息。反撃出来ていたとしても、散発的な砲撃だろう。被害状況によつては、効くかも分からない機銃を撃っている可能性も考えられる。

『こちらの被害はZ1が中破、Z3は小破……』

そんな報告は初めてだ。通信妖精たちは、『番犬艦隊』の被害状況なんてものは教えてくれなかった。それに、航空教導団の偵察機もそれは教えてくれなかったのだ。

航空教導団の偵察機が報告しなかったのは、単に艦娘の船体の被害状況を伝えられるか分からなかったからとも考えられるが、とりあえず、闇雲に分かりもしない被害状況を伝えなかったと私は判断した。『プリンツ・オイゲンは吶喊した影響で戦艦と重巡の砲撃をモロに食らって大破直前』

そうなつていてもおかしくはなかっただろう。

『グラーフ・ツェッペリンも艦載機を1/4は落とされたみたいで、航空隊は壊滅。攻撃隊は辛うじて残ってるけど、赤城航空隊みたく航空戦は出来ないから無駄に海に鉄くずを落としているだけよ。アイオワは全砲塔が破損。プリンツ・オイゲンの後発として、戦線離脱中。秋津洲は二式大艇を飛ばして周囲偵察に出ているから、戦闘には参加していないわ』

つまり、懸命に攻撃隊を出してもことごとく落とされているということだ。

愚行ではあるかもしれないが、正常な判断が出来ていない可能性がある。それはビスマルクも分かっているはずだが、それを咎めているようには思えなかった。

他の艦娘も何かしらをやって、それ相応の被害を受けているのと。と。

秋津洲が偵察に出ていることは初耳だった。

『斯く云う私も中破目前の小破。……このまま戦闘を続けていても、どうにもならない可能性があるわ』

つまり、敗色濃厚な艦隊戦を今も継続しているということらしい。『恥を偲んで頼むわ、新瑞。……航空教導団に支援要請。対艦装備で此方に部隊を回してもらえないかしら？』

そうだったのである。

顔は見えないが、その声色から察するに、下唇を噛みながら言ったに違いない。

悔しい。力及ばず、味方に支援を頼んだその自分が情けないのだろう。

「了解した。航空教導団に『番犬艦隊』の支援を要請する」

『ありがとう、新瑞。それとまだ一つ』

これで終わりかと思っていたが、まだ続きがあるようだ。

『大破したプリンツ・オイゲンがレーベとマックスを連れて離脱しているんだけど……』

私は叫びそうになった。

敗色濃厚な状況の上、手負いの艦を逃しているというのだ。だが、それを私には出さなかった。

『途中でプリンツ・オイゲンの偵察機が深海棲艦とは違う船を発見したのよ』

「はぐ。」

ビスマルクの言っている意味が分からなかった。

現在、日本近海を航行する船といえば深海棲艦くらいなものだ。現在はビスマルクら艦娘が航行しているが、それ以外の船が航行することなんてあり得ない。

一体、どの船なのだろう。

『超高速で航行しているわ。艦種は不明。サイズは巡洋艦サイズ』

それを言われ、私はそれが何か分かってしまったのだ。

海軍工廠で建造しているかさばね型汎用護衛艦だ。それ以外に思いつくものといえば、商用のタンカーや輸送船。それらだったら、幾ら海にあまり出たことのないビスマルクらでも分かるはず。

わざわざ、分からないとまで言ったということは、本当に見たことのない形をしている船だということだ。

「通信兵！　すぐに派遣部隊に連絡！　誰だ！　勝手に海軍の船を動かしているのは!!」

私は通信兵にそう言い、ビスマルクとの通信に戻った。

「それは、かさばね型汎用護衛艦だ。味方だ。手出し無用」

『だろうと思ったわ。……あと数時間したらオイゲンたちが戻ってくると思うから、入渠場と開けておいて』

「了解した」

『あ、あと……』

まだ何かあるらしい。私は通信を切らずに耳を傾ける。

『これより撤退を開始するわ。横須賀鎮守府の兵装の射程内に入り次第攻撃開始して』

「分かった」

『派遣部隊にも連絡。砲撃は控えるように』

「伝えよう」

通信が切られてしまった。

それを合図に私は指示を出す。

「全館に警報！　兵装は臨戦態勢を取れ！」

けたたましいサイレンの音と共に、妖精の声で全館に異常事態を知らせる。

『深海棲艦の艦隊が接近。横須賀鎮守府は防戦体制を執る』

通信兵は慌ただしく、鎮守府内に仮設された高角砲陣地に指示を出していく。

それに追加するように私はある命令を下した。

「通信兵！　羽田に連絡！　航空教導団はスクランブル！　対空・対艦兵装だ！」

「了解ッ!!」

地下司令部のモニターに、各陣地の映像が流れ始める。慌ただしく海兵たちが砲弾を運びながら、高角砲を操作しているのが見えていた。

「砲撃の合図は此方で出す」

そう私は言い、気を落ち着かせるのだ。

この場には天色も立っていた。

そしてこれよりも遥かに多い指示を出していたのだろう。たった2言3言で済むようなことは言っていないはずだ。

鎮守府の防空兵装の指示と出撃している複数の艦隊への指示。一時期ではあるが、航空隊も存在していたことを考えると、空へ飛び立った航空隊へも指示を出していたに違いない。

場馴れというのものもあるだろうが、私たちのような人間が指揮所に入ると、だいたいの指示はオペレーターにまかせてしまう。

私のような立場の人間が下すのは、大局を成すものだけだった。

私には無理だ。そう思ってしまったのだ。

――

――

――

無断出撃をしていたかさばね型汎用護衛艦と連絡が取れたのは、鎮守府が臨戦態勢を取ってから20分が経った頃だった。

「新瑞大将。海上を航行中のかさばね型汎用護衛艦からです」

私は通信兵が耳に当てていた受話器をひったくると、そのまま名乗った。

「私は海軍部の新瑞だ。海上を航行中のかさばね型汎用護衛艦のクルーで間違いないな？」

そう言うと、向こう側から返答があった。

『私は海軍予備役の二橋（ふたばし）です』

予備役。つまり、非常時に招集がかかる兵のことだ。普段は会社などで働いている人間たちがほとんど。

一応、訓練は受けているので、小銃を撃つたり船を動かすことは動作もないことだろう。

だが、何故予備役の人間が、海軍の最新鋭艦に搭乗しているのだろうか。

『憲法及び軍規に基づき、海軍予備役は2日前の未明に海軍に招集されました。その際、私らにはかさね型汎用護衛艦による、臨時艦隊を編成。貴軍を援護せよとの勅命が下っております』

「勅命、だどっ?!」

勅命。つまり、陛下が命令なさったことなのだ。

私に話が通らなかったということは、自動的にこちらの戦力に組み込まれ、そもそもの戦闘方式が違う『番犬艦隊』との混成艦隊を出撃させることになるだろうから、という配慮なのだろう。物資と人員の無駄な損失を防ぐ手ではあったのだろうが、全く私の耳には入っていなかったことなのだ。

『はい。これより、後続に同型艦2隻が急行し、撤退する『番犬艦隊』を支援します。この際、私たちの艦隊は貴方の指揮下に置かれることになりますが、よろしいでしょうか?』

「ああ、承ろう。貴官らの艦隊をこれより『A艦隊』と呼称する」

『了解しました』

呼称がない艦隊に指示を出すのには手間がかかる。その場の思いつきで適当に呼称を付けた。後でいくらでも変えられるから問題にもならないはずだ。

「A艦隊は後続と合流後、撤退中の『番犬艦隊』を支援せよ。ただし、兵装は誘導弾にのみ限定する」

『了解』

私は通信兵に受話器を返し、そのまま元の位置に戻った。

どうしたものかと考えていると、通信妖精がある言葉を叫んだ。

「電探に感あり! 撤退中のプリンツ・オイゲンです!」

「入渠場に入れろ!」

ビスマルクに言われていた通り、入渠場に誘導してもらおう。

そしてそれに続くかのように、ビスマルクからも電探に探知されたと伝えられた。

「ビスマルクに繋げ!」

私は通信妖精にビスマルクにつなぐように言い、繋いでもらう。

『こちらビスマルク。何の用かしら?』

「陛下がかさばね型を投入された。私の本意ではないが、どうやら私の指揮下に入れられた様子。このまま、ビスマルクとその艦隊で包囲殲滅を図ろうと思うのだが、どうだろうか?」

『……』

ビスマルクは押し黙った。

数分間の沈黙の後、ビスマルクから返事が戻ってくる。

『頼むわ。今相手している艦隊を撃破すれば、少なくとも日本近海は奪回出来ると思うから』

「なに?!」

『でもね、新瑞』

今交戦中の艦隊を撃破すれば海域奪回が出来ると言われ、少し気が立った。だが、その後にくみみたいだ。

『貴方の部下を、第一に考えなさい』

「は? それはどういう……」

言葉の意味を聞こうとしたら、通信を一方的に切られてしまった。言葉の本意。何もかもが言葉足らずだった、それにはどういう意味が込められていたのか。

—————

—————

—————

鎮守府の要塞砲射程圏内に深海棲艦の艦隊が入った。

それを皮切りに、号令が掛かる。

「要塞砲、砲撃開始ッ! 対艦誘導弾、照準次第順次発射!!」

地面、空間が揺れる。

沿岸に設置された何基もの要塞砲が稼働、半自動照準で砲撃を開始したのだ。

要塞砲は私が昔、天色の要請で運び込んだものだ。口径は410mだったはず。長門型と同口径のはずだ。

モニターに映し出された映像からは、鎮守府の沿岸は硝煙に包ま

れ、断続的に閃光が走っていた。そして空に目を向けると、空には何本も線を引きながら誘導弾が飛翔していた。

「この効果は望めませんが、気を散らすのには効果があります」
妖精の1人が私にそんなことを教えてくれた。

「……弾種は？」

「零式通常弾が装填されています」

「要塞砲、弾種変更。三式弾装填。この鎮守府には砲弾は残っているのだろうか？」

「全門一斉射が限界です」

「構わない」

「了解。要塞砲、深海棲艦へ再指向」

私は通信兵に確認を取らせる。

「偵察機へ。ビスマルクの予想進路を」

すぐに返答があった。どうやら、まっすぐ横須賀鎮守府に向かってきているらしい。

「ビスマルクが方位修正を行った際、一斉射。深海棲艦の目をくらませるぞ」

三式弾は砲弾内の弾子をばら撒き、それをもって航空戦力に対応する兵器だ。

史実通りの性能ならば、三式弾が炸裂した際には、通常弾よりも大きな発光があるはず。それを用い、目をくらませるのだ。

急に止んだ砲撃にビスマルクは戸惑っているかもしれない。

だが、今の作戦を伝えたところで良いように動いてくれるかなんて分からない。

伝えなければ、きつと横須賀鎮守府のすぐ近くで回頭若しくは新改正案に対してT字になるはず。それを始めた時が好機だ。

「偵察機より。ビスマルク、回頭開始。続いてグラーフ・ツェッペリンも回頭開始」

「要塞砲、全門一斉射」

これまでに無い揺れを空間に起こし、要塞砲から三式弾が一斉射される。

「3、2、1、炸裂」

妖精が炸裂までの時間を測ってくれていたらしい。

それと同時に、私は各所に指示を出した。

「要塞砲は弾種切り替え。零式通常弾に戻し、装填次第攻撃開始。視界の取れている高角砲も航空機が未確認の場合、艦船へ攻撃開始」

通信兵が偵察機から入る情報を聞きながら、復唱をしている。

「どうやらビスマルクはそのままT字を取り、砲戦に入ったようだ。グラーフ・ツエツペリンも備え付けの砲を用い、砲撃を開始していること。」

深海棲艦の空母では、艦載機の発進準備が行われている様子。

「グラーフ・ツエツペリンにそれに対応するだけの艦載機は残っていない。」

その刹那、ある通信兵の復唱している言葉から、ある言葉を聞き取った。

「航空教導団、上空に到着。支援を開始した模様」

対艦ミサイルを撃った後、きつとそのまま対空戦闘に入ってくれるだろう。私はそう目論見、指示を出す。

「通信妖精！　ここににある艦載機は飛ばないのか?!」

「機体はあっても搭乗員が居ないです。一度、フェルトさんには戻ってきて貰うしかないです」

「……現場の判断に任せるしかないか。対空射撃開始！」

今までは高角砲に張り付いているだけの海兵たちが慌ただしく動き始めた。そして次には、辺りに硝煙を撒き散らす。

空を映すモニターには対空砲弾が線を引いている映像が流れ、上空で次々と炸裂する様を映し出していた。

「A艦隊へ」

「はい！」

通信兵は私の言葉に耳を傾けた。

「支援状況はどうなっている」

「はっ！　深海棲艦の残存艦隊の後方60kmから誘導弾による長距離攻撃を敢行中。被害は0です」

「A艦隊に伝えろ。出し惜しみは無しだ！」

「補給のことをなんだか……」

「そんなものは知らない！ セルが空になってもかまわないと伝えろ！！」

練度が圧倒的に足りない。だが、この状況ならばその練度をカバーできるのだ。

現在、深海棲艦の残存機動艦隊は『番犬艦隊』とA艦隊が挟撃している。

判断を誤らなければ、A艦隊に被弾することはない。だが、こちらの攻撃は当たっている。効果的な攻撃が出来ている状況なのだ。

『番犬艦隊』はというと、ほぼ接岸している状態なので、被弾して沈んだところで引き上げることが可能だ。そう私は考えている。艦娘が無事ならば、沈んだとは言わせない。そう腹に決めていたのだ。

「深海棲艦、進路変更」

そう通信妖精が言った。私はすぐに通信兵に顔を向ける。

「偵察機より状況報告。『現在、ビスマルクの要請により弾着観測射撃を敢行中』」

通信妖精はどうしてそのような状況になっているのか、その経緯を教えてくれた。

「撤退中、水上観測機が全機撃墜。フェルトさんには偵察に出せる程の余裕はありませんでした」

「そうか。……そのまま」

私はモニターを睨みつける。

慢心しては駄目だ。ここまでは順調に来ている。深海棲艦の空母もこれまでの攻撃でハツ着艦困難。艦載機も航空教導団とのドッグファイトで壊滅。あとは息の長い戦艦を落としてから、空母をゆっくり沈めればいいのだ。

その刹那、悪寒を感じた。

体調は万全のはず。ならば、何かを感じた。そうとしか思えない。

「ビスマルク……」

通信妖精がそう口を出した。それに呼応するかのように、通信兵や

他の妖精たちもそちらを見た。皆、感じていたのかもしれない。

「戦艦の砲撃が直撃。大破、炎上中……」

淡々としていた通信妖精の声色が変わったのには気付いた。だが、それよりも先に私は違うことを感じていた。

幾ら岸に近いところにいるとはいえ、炎上なんてしようものなら兵装のほとんどが使えなくなってしまう。最悪、弾薬庫まで火が回ってしまったら……。

「通信兵っ！ 艦載機はいないんだ！ 海兵を岸に向かわせろ、消火活動だ!!」

「は、はいっ!!」

焦燥に狩られた通信兵が通信相手が上官であることも忘れているような怒声で、持ち場を離れて消火活動に移ることを伝えている。皆、分かっているのだろう。艦娘を失うのは痛手すぎる痛手だ。

「……っ?!」

別の通信兵が青い顔をしながら、受話器を耳に当てている。何か他に起こったことでもあるのだろうか。

轟沈したと考えると、通信妖精がそれを知らせても良いはずだ。だとすれば、別の何かが起きている。

「偵察機より現状報告。『ビスマルク。主砲を指向中。……仰角修正、砲撃』」

「目標は?!」

「深海棲艦、戦艦。全門一斉射です……」

固唾を呑んで見守る。

「……2発夾叉ッ!」

次撃てば当たる。だが、ビスマルクにそんな余裕があるのだろうか。

「て、撤退中のアイオワが隊列から離脱ッ！ ビスマルクに向けて全速航行中ッ!!!」

「アイオワに繋げっ!!」

私は通信妖精に叫び、すぐにアイオワに繋げさせた。

「何をしているっ！ 撤退中ではなかったのか?!」

『あー。何も聞こえないわ』

聞こえているに決っているだろう。

『聞こえないけど、言っておくわ。主砲に応急処置。主砲以外の損傷は軽微だから、このままビスマルクの援護に入るわ。三面包囲よ』
言い切ったアイオワは通信を一方的に切ってしまった。

私は頭を抱える。

「仕方ない。……情報を密に」

そう指示を出し、私はモニターを睨みつけた。

――

――

――

その後、アイオワの放った砲弾が直撃。戦艦は轟沈。空母2隻もその後すぐに轟沈された。

戦果は上々。その言葉通り、深海棲艦の艦隊を全滅させたのだ。だが、痛手を被ってしまった。

ビスマルクから上がった火の手の消火活動が上手く行かず、着底。修理を行おうにも、入渠場にしかない大型艦の大規模修理施設は運び出すことが出来ない。

よって、そのまま放置されることになったのだ。

ビスマルクと共に岸付していたグラーフ・ツエツペリンは、航行速度が極めて遅くはなったものの、入渠場に辿り付くことが出来た。

戦闘が一通り終わった頃に、秋津洲とU-511は埠頭に接岸。

そして、向かえに行った私に一言言ったのだ。

『偵察終わったかも。……はあ。結局、報告することは何もなかったよ』

『偵察、終わりました……』

頭を垂れてそう言ったのだった。

あの戦闘は横須賀鎮守府艦隊司令部の力を借りたが、指揮は完全にその独特な指揮系統から外れていたため、軍が『日本皇国軍初戦果』と謳った。

これには軍内部は湧き上がるが、国内はそうでもなかった。何故な

ら、この戦闘での被害は、艦娘がいたにも関わらず、今ひとつだったのだ。

長期の作戦期間。消費した資材の数。見返り。見劣りするほどの被害を出してしまっていたのだった。

「お父さんー！」

「なんだ？」

その戦闘というのも、もう5年もの昔。

あれ以来、撤退していた沿岸部に軍が進駐。インフラ整備がある程度進んだ頃に民間人が戻ってきていた。

私はというと、4年前に軍を退役。まだ任官していられただが、そろそろ落ち着いても良い頃合いかと思ったのだ。

そして今、私は妻と愛娘と共に、あるところへと来ていた。

ここに来るのは5年ぶりだ。

「お父さん！ このおっきなお船が海を取り返したの？」

「そうぞー」

「でも、お父さんのお船じゃないんだよね？」

ここは日本皇国海軍横須賀鎮守府艦隊司令部。日本皇国対深海棲艦の前線基地。

だが、そんな基地とは云うものの、現在の防衛線は硫黄島の向こう側まで伸びていた。

あれ以来、総督と陛下の腹案が発動。横須賀鎮守府に“純”日本皇国民の若い海軍将兵が着任。新たな反抗を始めたのだ。

そして、その鎮守府のある岸。

ここにはあるモノが浮いていた。

「そうだな。このお船はお父さんの……そうだなあ……」

「お友達のお船なの？」

「お友達、かあ……違うかなあ。……うーん、お友達かもしれないな」

そう、ここには。

「このお船はなんていうの？」

着底したまま、持ち主に頼んで記念艦にしておいてある。

「戦艦 ビスマルクだ」

戦艦 ビスマルク。あの戦場で武を挙げた立役者。

「このお船にも艦娘がいたんでしょ？」

「いたぞー。こわーいお姉さんだ」

そう言って、娘の頭を撫でた。

あの戦闘の時、娘は小学校に上がって2年が経っていた。

まだ色々分らない年だったが、今は違う。それなりに考えることが出来るようになってる。

娘にビスマルクのことを話していると、妻が私に話しかけてきた。

「あなた。ちよつと」

「ん？」

「よく見て」

そう言って言われた先を見ると、そこには見覚えのある格好をした金髪碧眼の少女が立っていた。

「……久しぶりね、新瑞」

「ああ、久しぶり」

ビスマルクが居たのだ。記念艦の甲板上に。

私を見つけて、甲板から降りてきたのだ。

「さつきまで聞こえていた言葉、聞かなかったことにしてあげる」

「ああ、すまない」

「いいわ」

そう言ってビスマルクは空を扇いだ。

「新瑞がここに来たということは……」

「そうだ」

「私もお役御免、ってことかしら？」

「ああ」

ビスマルクの甲板から、久しい顔がいくつも出てくる。

プリンツ・オイゲン、グラーフ・ツエツペリン、Z1、Z3、U—511、秋津洲、アイオワが甲板から降りてくる。

これまで彼女たちは横須賀鎮守府の教導艦として任を負っていた。艦装を失ったビスマルクは着任した提督の教育係をしていた。もうそれを始めて5年は経っている。教導することもなくなり、後発がその任を引き継いでいた。そして、教育係も必要なくなっていたのだ。

「私は……私たちは“最期の剣”として、それを振るえたかしら？」

「ああ」

「私たちは良い手土産を、ちゃんと用意出来たのかしら？」

「ああ」

「“彼”は……きつと、微笑んでくれるわよね？」

「ああ」

そう言ったビスマルクは、自分が被っていた帽子を娘に被せて頭を撫でた。

何も言わずに。

「じゃあ、また」

「ああ、また」

言葉足らず。何もかもが足らなかった会話。私とビスマルク、『番犬艦隊』にしか何の話をしていたかなんて分からない。

もちろん、娘や妻は分かってない。

私が俯き、再び顔を上げたそこには、ビスマルクたちの姿はなかった。

人通りのないこの場所、たった数秒だけ目を離していたとしても、どこかに行つたのなら行方は分かる。

だが、私は探さなかった。探す必要はなかったからだ。

『ビスマルク、ただいま戻ったわ』

『お疲れ様、ビスマルク。皆も』

誰も居なくなつたそこに、そよ風にかき消される程度の声が微かに聞こえてくる。

『ビスマルクさん』

『あ、赤城。今しがた戻ったわ』

『そうみたいね。お疲れ様』

『いいわ』

見えるはずのない煌めきが、波のように揺られ。

『ほら、ツエッペリン！』

『あ、よせ！』

その場所を陽かい日が照らす。

『ツエツペリン。しかめっ面してても、駄目デース』

『金剛までっ……ううう』

集まるのは、見えない触れられない。

『あっ』

『なんだ？ アイオワ』

『そういえば、アドミラルの部屋のドア。ベッコベコにしちやつたの、今思い出したわ！ ゴメンなさいね』

『気にするな』

この世をさまよっている訳ではない。

『紅提督ー！ お菓子食べるかも？』

『食べる食べる。今すぐ食べる』

ふと香るのは、甘い焼き菓子の匂い。

『紅提督ー！ 早く行くつぽーい！』

『鈴谷がおっさきい〜！』

駆け抜ける風。

『また、お茶会しましょうね』

『そうですね、姉様』

微笑みながら流れる撫で風。

『紅提督。そろそろ行かないと不味いぞ』

『確かにそうですね』

包み込むような大きな温もりを浮かせた風は。

『じゃあ、行こうか』

海の方へと流れた風は、いつしか止んでしまっていた。

終結の章 (マルチエンディング その2)

第44話 『紅葉狩り』

朝食を摂り終えた私は、外に出て『血獠犬』を見送りました。

その後、他の人たちを見送りに行きます。

場所は補給部隊しか使わない門の前。この場には私と武下さん、赤城さんと酒保の従業員で、今回の作戦の初動に征く人たちしかいません。

酒保の従業員はこれから『灰犬』と呼び、紅くんが收容されている軍病院の特定と、施設の構造などの情報を集めに行きます。BDU姿だと怪しまれるので、女性らしい格好をしてもらい、身体には携帯火器を忍ばせているみたいです。

人数の少ない見送りに寂しさを感じつつ、私は『灰犬』に声を掛けます。

「……なんとしても、紅くんが收容されている病院を突き止めて下さいよっ。」

「はい、承知しました」

代表、今の小隊長が私に答えました。

「では、お願いしますね」

「はっ!! 行って参りますっ!!」

覇気のある返事と敬礼をした『灰犬』たちは、振り返って歩き始めました。その背中を私は目で追いかけます。

この作戦も全ては彼女たちの情報が頼りなのです。

もし情報収集に失敗したり、万が一バレて捕まるようなことがあれば、作戦自体の再起が不可能になってしまいます。

どうか成功することを祈りながら、私は門の向こう側を見つめました。

—————
—————

見送った私たちは、そのままあるところに入りました。

そこは地下司令部です。横須賀鎮守府の戦闘指揮所になります。どうやら地上施設がなくても、鎮守府として活動が出来るようになっているようです。

紅くんはここを非常時にしか使わなかったそうです。

基本的には執務室からか、自分が鎮守府内を歩き回って指示を出していたらしいです。

今回は無線機を用いてやりとりをしますので、作戦立案者である私がすぐに緊急時に対応できるようにと、地下司令部に入ることになったのです。それに、無線機が十分に使えるところが地下司令部にしかなかったから、というのも理由にあるらしいですが、私には分からないことですので、それは気にしませんでした。

武下さんは『よつぼど』のことが無ければ、定時連絡を受けるだけですよ』と言っていました。それはそれで重要なことな気がしますけどね。

軽々しく言っているように、私には聞こえませんでした。そうは言うものの、重要なことには変わりないはずですので、そんな軽々しく扱わないとは思いますが。

「こちらが通信妖精です。他にも役職のある妖精がいますが、基本的には通信妖精とのやりとりが多くなります」

「そうですね。……私は天色 ましろといいます。よろしくお願いしますね」

「よろしくお願ひします」

手のひらに乗ってしまうのではないかというサイズの妖精さんは、私に向かって敬礼をして席に戻っていききました。

「さて……。出て行ってから30分程経っています。情報収集を始めた頃でしょう」

武下さんはそう言って、用意されていたであろうパイプ椅子に腰を掛けました。

『灰犬』には何の情報も無い状態ですので、手がかりから探している

でしょう。短くても1週間は掛かると思います。最も、横須賀周辺ではないところに収容されているのなら、その予想も当てにはなりませんけどね」

「そうなんですよね。こちら側は情報が不足し過ぎています。そういうことなので、赤城さん！」

私は赤城さん呼びます。艦娘で今回の作戦に関係ある中で、長時間姿を消していても問題ない艦娘、赤城さんは私の声に応え、通信妖精のところ歩いていきました。

「通信妖精さん。一般電話回線ってどこですか？」

「それならあちらに」

通信妖精さんに話しかけた赤城さんは、一般電話回線とかいう単語を発して、机にポツンと置かれていた固定電話の前に立ちました。

そして受話器を取り、ボタンをプッシュして受話器を耳に当てます。

「……横須賀鎮守府の赤城です。新瑞さんをお願いできますか？」

そうです。赤城さんは最初の偵察、『灰犬』が出たのと同時に、再度安否を確認をしようとしているのです。

その返答次第で、私がこの部屋から出ていくかこのまま居座るかが決まります。

私の居るところからは、電話越しの声が少しだけ聞こえています。

『少々お待ち下さい』

女性の声で、電話口でそう応対されたみたいです。受け付けの方にも最初に繋がったのでしょうか。

電話の内線保留音が20秒位流れた後、音が途切れます。

『海軍部長官の新瑞だ』

「あ、新瑞さん。横須賀鎮守府の赤城です」

『……要件は？』

「はい。これまでに何度か伺っていますが、紅提督の容態か安否を教えてくださいたく」

間が開く。新瑞さんという人が返答に困っているんでしょう。

電話口の言葉から察するに、新瑞さんというのはかなりの偉い人の様子です。

『私では判断し兼ねる』

「そうでしょうね。横須賀鎮守府の外に出た紅提督は要人中の要人です。何かあったときのことを、想像しての配慮でしょう」

一呼吸開けた赤城さんが続けます。

「この対応も、私が日本皇国海軍横須賀鎮守府艦隊司令部所属の航空母艦 赤城ということも疑っているのではないでしょうか？ そうですよ。もし違っていたなら、それは暗殺を企てていた組織の一員である可能性しか残らない。2つに1つですからね」

新瑞さんはまだ返答しません。

「要人中の要人を殺められた後のことを考えている……」

それはつまり、最悪な状況です。私としてもあつてはならないことですし、赤城さんもそれを望んでなど居ないはずですよ。

「統率を完全に失った私たちが何を仕出かすか、それを考えたんでしょう。きつと新瑞さんが考え至ったその答えは正しいです」

赤城さんが何を起こすかなんて考えたくもありません。

『……………』

長い沈黙が電話口の向こうから伝わってきます。

静寂に包まれますが、こちら側はさして緊張した空気は流れていません。それを感じている私がそれを言うのもなんですが、この空気の中で、私だけが緊張しているのかもしれないです。

一方で、電話の向こう側。新瑞さんはきつと、極度の緊張を感じているに違いありません。自身の命、焦土となるかもしれない眼下の街、燃え上がる大本営、吹き飛んだ皇居……。考えれば考える程、その緊張は増長されているはずですよ。

新瑞さんがどういう人となりをしているか、私には分かりませんが、さすがきつと、かなり偉い人であることに変わりはありません。そういう人というのは、無能で下から持ち上げられた人であることはあり得ないのです。臆く、行動力があり、慕って付き従う部下がいるはずなんです。軍隊ならなおさら。

「新瑞さん」

念押しでしょう。赤城さんが力の籠った声を出しました。

『……私では判断し兼ねる。これは先ほど言った通りだ。言葉の意味、分かるな?』

「ええ、分かりますよ」

『では、私はそちらに根回しをしよう。少し待ってくれ』

赤城さんは受話器を置きます。

私はその姿を見て、鈴谷さんに訊くことにしました。

「鈴谷さん、訊いても良いですか?」

「ん? いいよー」

「新瑞さんってどんな人ですか?」

「ああ、ましろは知らなかったつけ? ええとね、新瑞さんって言うのは、日本皇国軍の頭、大本営の海軍部。海軍のトップの人だよ」

「え……」

「まあ驚くのも無理ないよ。そんな人に電話がすぐに出来る辺り、流石横須賀鎮守府ってことかな?」

鈴谷さんは足を組んで、目を細めました。腕を組み、囁くように話し始めます。

「日本皇国の要衝、日本皇国の矛、日本皇国の盾、そんな風に揶揄されるのは耳タコだよな? そんな風に言われているのは、ただの下っ端軍人が仲間内で囁いている渾名じゃないんだ。海軍公認、軍公認、政府公認、陛下公認。最後のは違うかもしれないけど、それだけの軍事力の実績を兼ね備えているんだ、この鎮守府は」

「それはなんとなく、これまでここに居て分かっていますか……」

「うん。だから、ここは特別な。何もかも、全てがね」

それだけで済まされてしまいました。

特別。その2文字で済まされるというのは、嫌というほど聞きました。ですがそれをここで実感することになるとは思いもしなかったのです。

「普通の戦争をしたら、私たちは負ける。だけど深海棲艦との戦争だったら、私たちはその辺で野垂れ死んだ軍隊とは違う。それはなん

となく察していると思うんだ」

鈴谷さんの言う通り、私はそれを察しています。

一介の高校生が指揮する軍隊。それが1つの国家軍の中で最強。普通に考えればあり得ない話です。ならもし、普通の軍隊と戦争をしたら？ 言わずもがな負けるでしょう。戦術・戦略なんてもの、高校生が備えている訳がありません。一昔前の戦とも違います。

フィクションであるような、異世界転生・転移した先で軍師となり、国家軍を率いて降りかかる軍隊を一蹴する。そんなこと、設定次第ではありえないことなんです。

それを言っても尚、どうして現代戦にも近いこの世界で最強なのか。それは、深海棲艦という異質の敵と戦っているからでしょう。軍隊ではない。否。軍隊と言ってもいいのかも怪しい敵と戦うことに長けている、そういうことです。

「……まあそういうことだよ。鈴谷はどうでも良いけどね、そんなこと」

そう言つて『紅提督さえいけば良いかなあ』と続けただけでした。私は少し考えますが、深く考えません。再三考えた横須賀鎮守府のこと。

今更何か新しいことを知ったとしても、私はそれを整理することしか出来ないんです。行動に移せるようになるのは、まだまだ先の話。私は赤城さんの方を見ました。新瑞さんとの電話から少し時間は経っています。5分くらいでしょうか。

赤城さんもこのタイミングだと思っただけでしょう、受話器を取り、どこかに電話を掛けます。

「横須賀鎮守府の赤城です」

『ああ、赤城。ご無沙汰だな』

「そうですね。以前お会いしたのは、いつぞやの報告以来でしょうか？」

『そうだったな』

他愛もない話をしたあと、すぐに本題に入りました。

「ところで総督」

『なんだね?』

総督。聞きなれない言葉です。

新瑞さん。長官でも話が出来ないような案件を、一体誰から聞き出そうとしているんでしょうか。思いつくことと言えば、先ほどの鈴谷さんの言葉を反芻すると分かります。新瑞さんは海軍のトップ。ということとは、陸軍と空軍にも同じようなトップがいるということ。それが示唆することとは、陸海空軍を纏める人がいるということですよ。それがきつと総督なんですよ。

「新瑞さんからお聞きしていると思いますが」

『ああ、聞き及んでいる』

私は息を飲みました。当然、赤城さんも息を飲みます。

話の流れから察するに、総督という人は紅くんがどうしているのかわ知っているんです。そしてそれを今まで頑なに教えてくれなかった。それが今、赤城さんへと伝えられようとしているんです。更にそれが私たちへと伝播し、横須賀鎮守府へと広がります。

私は身震いをしました。

総督の言葉で私たちの運命が左右されるんです。

第45話 金剛の背後

『焦らされても嫌だろう。率直に言う。……天色 紅は生きているぞ』

私は椅子から立ち上がりました。生きている。確かにそう聞こえたんです。

電話をしている赤城さんも少しですが、フリーズしていました。

「それは、本当ですか？」

『嘘を吐いてもどうにもならない。最悪、君たちに攻撃されるからな』

「……状況を、状況をお教えいただけませんか？」

『ああ。今は意識も戻っている。リハビリ中だ』

怪我を負っていましたでしたが、それも完治したということですよ。リハビリしているということは、もうすぐ帰ってこれるということです。

「何時になったら……」

『ハッキリとはいえない。横須賀鎮守府には伝えていなかったが、現在、信用のある部隊を使って“敵性勢力”の排除を行っている。旧『海軍本部』やそれに隷下に下った組織の殲滅中だ。それが完了次第、戻すことになる。それまで待っていて貰えるか？』

「はい」

『……今まで黙っていて済まなかったと思っている。散々心労を掛けただろう』

「いいえ」

『最初の1ヶ月はとんでもないことになっていたと聞いた。本当に、本当に申し訳ない』

「……いいえ」

『こちらが不始末が引き起こしたことだ。始末が完了したら、私たちも一度出向かせて欲しい。会って貰えるか？』

「はい」

電話はそこまででした。私は辛うじて聞こえていましたが、他の2人には聞こえていたのでしょうか。それは表情を見れば分かること

ですが、どうやら聞こえていなかった様子。

顔を曇らせて、不安そうにしています。

受話器を置いた赤城さんはこちらに歩み寄り、椅子に座ると顔を向けます。真剣な表情です。そして口を重々しく開きました。

「今後の方針です」

唾を飲み込む音がします。極度の緊張に苛まれているんでしょう。武下さんの額には大粒の汗が滲み出ていました。

今の電話でこの先が決まってしまうんです。もし駄目だったなら、
“非情の手段”を取ることになります。そして最期には……。考えるのも嫌になります。その行動がこの国を揺るがすことになりますからね。

「……待機です。もしくは」

赤城さんはスレスレの発言をします。人が悪いです。

待機。つまり、『灰犬』に帰還命令を出さないということ。それはつまり、搜索続行ということになります。そしてそれが行き着く先は最悪の結末。私たちの誰もが望んでいないことです。

ですが、『もしくは』と言いました。

昨日の会の時点では、そういう方針に持っていくことはなかったのです。つまり、この場で新たに今後の方針に追加出来る項目が増えたということになります。

『柴壁』に非常呼集。体外的な攻勢に打って出ることです」

思考が停止しました。どうやったら、さっきの話の流れでそういう方針が生まれたんでしょうか。

この赤城さんの発言に最初に意見したのは武下さんでした。

「ちよつと待って下さい。それって、どういう」

「そのままの意味ですよ、武下さん。『柴壁』は横須賀鎮守府の警備部隊というのが表の顔ですよね？」

「そうですね……」

「裏は体外的な情報戦と工作活動。つまり、横須賀鎮守府にとって危険な存在の発見と排除。違いますか？」

「違います」

赤城さんは首をすくめました。

『『体外的な攻勢』つまり、表立った活動です。目的は“敵性勢力の排除”。愚かしくも紅提督を殺めんとする者の始末ですよ』

かなり遠回しな言い方をしました。そして赤城さんがなんとなく、口が悪くなっているような気がしますが、気のせいでしょうか。

「……まさかっ?!」

「気付きました?」

「ええ!」

武下さんはようやく気付いたみたいです。ちなみに鈴谷さんはまだ気付いていない様子。

「時間が欲しいです。それに赤城さんも話を付けなければ……」

「はい。ですから」

赤城さんは私の顔を見ました。まるで、私が電話口の声が聞こえていたことを知っていたかのように。

「判断を」

「はい」

この話の流れから推察すると、赤城さんが私に求めていることは1つ。

『灰犬』の撤退です。そして『紅葉狩り』終結の宣言。

『『灰犬』に撤退指示を。赤城さん、交渉をお願いします。武下さんは派遣部隊の編成を』

指示を出しました。どうやら私が予想していたもので合っていた様子。そのまま私はまだ分かっていない鈴谷さんにも指示を出しました。

「鈴谷さんは金剛さん呼び戻して下さい」

「え? どうして?」

「方針転換です」

「……うーん。分かった。だけど、事情は後で説明してよね」
「分かっています」

鈴谷さんは地下司令部から飛び出していきました。

ここからは態勢が整ってからの勝負です。

皆さんがそれぞれの役目を全うするため、地下司令部を出ていった頃、赤城さんは再び一般電話回線のところに居ました。今度は私は電話をする赤城さんの真横に立っています。

「横須賀鎮守府の赤城です。総督をお願いします」

数コールした後、電話対応の人へそう頼みます。内線に切り替わり、数秒もしないうちに総督は電話に出ました。

『どうした、赤城。何か訊きたいことでも？』

「はい」

赤城さんは少し間を置き、端的に話を始めます。

「そちらの不始末だと先ほど仰っていたことに関してです。こちらにも非があります。軍の優秀な精兵をこちらに派遣していただいていたにも関わらず、専守的な行動しか取れていませんでした。そういう面を鑑みて、私たちは『柴壁』を派遣し、火種消しに加勢させて頂きたいのです」

返事が返ってきません。きつと悩んでいるんでしょう。

「……事件から1年。未だに火種消しが終わっていないこともありません故」

『痛いところを突いてくる』

「ええ。ですから……」

『“横須賀の私兵”を出してもらえろという話だ。我々としても願ったり叶ったり。……頼む』

「頼まりました」

『現在までにある情報をそちらに送ろう。それと“共同戦線”という解釈で間違いないか？』

「ええ」

『追って通達する。では』

総督は受話器を置いた様だ。これで交渉は終わりです。

本格的に動くとなると、それ相応の準備が必要になります。

既に『灰犬』への撤退命令は出していますので、直に帰ってくるでしょう。それにもうすぐしたら鈴谷さんが呼びに行つた金剛さんが帰ってきます。

金剛さんに現状を伝えなければなりません。

数分もすれば鈴谷さんが帰って来ました。もちろん、金剛さんを連れていきます。

『灰犬』への撤退命令が出ているようデスネ」

「ええ。鈴谷さんから話は聞いていますか？」

「全く」

金剛さんは平静な様子で戻ってきました。そして開いている椅子に腰を降ろします。

話をすることは分かっているみたいですね。

「現状を説明します。『紅葉狩り』は破棄。全体を通して、奪還作戦は中止します」

金剛さんは表情を変えません。至って普通です。

こんなことを言ったなら、普通なら取り乱してもおかしくありません。ですが、金剛さんは普通に息をするようにしています。

おかしい。私はそう思いました。ですが、そのおかしさは後で聞いてもいいでしょう。私は話を続けました。

「それと同時に新たな作戦を展開します」

「内容はなんデスカ？」

「……ここに楯突く不届き者へ神罰を下します」。これは金剛さん、貴女にとつても願つたり叶つたりではありませんか？」

金剛さんは嗤いました。イメージ、一般的な評価からかけ離れたその嗤いに、私は少し言葉を詰まらせます。

「ふふふ……そうデスカ。……それで？」

「……『柴壁』の部隊を使います」

眉がピクリと跳ねました。金剛さんは腕を組みます。

「結局のところ、火種消しをするだけです」

「なるほど、なるほど。面白い話デス。……それで？ 話を聞く限り、横須賀鎮守府でドンパチする訳では無いみたいデスガ？」

金剛さんの背後に何かが見えた気がしましたが、直接見てはいけな
いものなんでしょう。私は目線を反らし、金剛さんに説明をします。
「大本营と共同で潰します。あちらには『柴壁』を使うと伝えまし
たが、金剛さん」

首を傾げます。その姿、知らずに見ていれば可愛らしい仕草なん
でしょう。ですが私には、私ではない誰かに銃口を向けている兵士に
しか見えませんでした。

今まで、ここまで真つ直ぐ金剛さんを見たことがありませんで
した。

ネットや掲示板で言うような性格をイメージしていましたが、こ
こに来てそれが粉々に砕け散ります。

この人は、金剛さんはおかしい。何がおかしいなんて言い表せれ
ません。

とにかくおかしいんです。

「あ、あの……」

「続けないんデスカ？」

背後の何かが大きくなっている気がします。

この悪寒は何でしょうか。普通に生きていたら感じないような感
覚です。

私は突然、あることを思い出しました。

いつぞや、鎮守府に侵入者が入り込んだときのことです。

夕立さんにあることをその時、聞いたんです。そう、『近衛艦隊』と
金剛さんについてです。

あの時、夕立さんは私の言葉を聞いて、『それ以上、知らない方が
いい』と言いました。

艦娘の中でも特殊な金剛さん。夕立さんの言い方は、金剛さんを畏
怖しているようにも聞こえました。

『提督への執着』が成し得る。何かがあるんでしょうか。

私には何も分かりませんが、そのことが今、金剛さんの背後に見え
ているソレに関連していることだけは分かります。

「……紅くんは、生きています」

そう私は意を決して言いました。

今の金剛さんに聞かれたらどうなるか分からないものです。もしかしたら着火剤となり、何かアクションを起こさせてしまうかもしれません。

首がすくみ、足が震えます。

金剛さんにそれが聞こえていなかった訳がありません。

普通なら表情を変える場面です。ですけど、金剛さんは表情を変えないんです。

さつきと同じ、嗤った顔です。

「そう、デスカ」

そう呟き、金剛さんは組んでいた腕を解きました。

「……上手く行けば良いんデスケド」

「はっ」

金剛さんから、私が全く予想していなかった言葉が出てきました。

『上手く行けば良いんデスケド』と言ったんです。

何を言っているんですか、この人は。

ただの火種消しに何をそこまで消極的になっているんでしょうか。

私には理解出来ませんでした。

「その表情は、理解していない顔デスネ」

金剛さんは小さい溜息を吐き、説明してくれました。

至極淡々と。そして、何も飾らずに。

「火種消しをして、それで紅提督が帰ってくる保証なんてありません。私たちの目と手が届く範囲に居るのだとしたら、私もこんなことはいマセン」

金剛さんは足を組みました。空気を少し乱し、定位置であろう場所に収まった後、金剛さんは続けます。

「大本営と共同戦線。つまり私たちは『柴壁』から戦力を捻出し、火種消しの効率を上昇させるだけデス。違いますか？」

「違い、ません」

「体外的な情報収集を完全に『血獵犬』に任せ、しかもそれはこちらに降りかかる火の粉の早期察知。今回の話は防戦では無く攻戦。専門

外デスネ」

間違いないです。

「そこまで手を広げた体外的な情報収集をしていたとしたら、何故、大本営が元凶の始末をしているんデスカ？ 私たちは自分の身の回りにシールドを張るように、一定距離に入った敵性勢力の排除ばかりをしていたからデス。自ら攻め入ろうなんて、『柴壁』が出来る前もなかったことデスヨ」

「今になって攻勢を仕掛ける。しかも話を聞く限り、現場での即決。下地も地盤もない状況からのスタートデス。となると、情報源は大本営。私たちはその情報に従って、攻撃を繰り返すって事デス」

「頭は大本営。私たちは武器デス。やりようにもありますが、私たちがそうやって攻撃している間に、大本営が紅提督の身柄を抑えていたらどうなりマスカ？」

私は考えます。金剛さんが話した言葉全てがヒントです。

「……身柄をこちらに」

言いかけたところ、金剛さんに防がれました。

「それは五分デス。残りの五分は、身柄をこちらに返すこと無く別の利用方法で使いマス」

思考が停止しました。

「紅提督を消そうとする集団がいなくなったことで、大々的に紅提督の生存を報告シマス。それは絶対デシヨウ」

ドクンと心臓が胸の内側を叩きます。

極度の緊張です。脈が上がり、額に脂汗が滲み出てきます。

「デスガその先は？ 横須賀鎮守府に帰ってくる保証はありマセン」

私は震えました。

金剛さんが少なすぎる一握りの情報で、ここまで頭を回していたんです。

しかも、私が考えていなかったことまで。

特殊な艦娘。その言葉、今なら私は理解出来ます。金剛さんはやはり他の艦娘とは違います。いいえ、違いすぎます。

第46話 豹変

「良くて広告塔。悪くて政治利用。……私が考えうる紅提督の“利用法”デス」

「り、利用法……」

これまで訊いてきた横須賀鎮守府の艦娘なら、言わないであろう言葉を金剛さんは口から次から次へと出していきます。

「大本営の総督にも上がイマス。それが天皇陛下なのか、政府高官かは分かりマセン。デスガ、『はい。では天色 紅の身柄をお返ししますね』なんて素直に返すデシヨウカ？」

純粹に鎮守府に返そうとしているならば、そんな風に帰ってくるでしょう。

ですが相手は自分の組織や自分自身の利益を考えている可能性がある、そう金剛さんは言いたいのでしょう。

大人になって分かったことの1つでした。

『1人は皆のために。皆は1人のために』

こんな都合のいい標語、ありませんよ。組織は集団の利益を優先し、グループが組織の力を優先します。そして個人は個人とグループの利益を優先します。

そんな標語が通用するのは、精々大学生くらいまででしょう。

私は自然と視線が下へと落ちていきました。

現実をここにきて、私は金剛さんに叩きつけられたのです。

「……私はましろの提案に賛成デス。ですが、慎重に行動することをおすすめシマス」

金剛さんはそう言って立ち上がりました。そのまま私に歩み寄り、手を広げます。

そしてその腕が私を包み込みました。

ギューっと力強く腕を絞め、且つ、私が苦しく思わないように力加減をします。

柔らかく、温かく、いい匂いに包まれながら、私は耳元で囁く金剛

さんの声を聞きました。

「まだ早いデスガ、お疲れ様デシタ」

「はえ？」

今まで考えていたことが、その一言で全て吹き飛びます。

頭の中は完全に、その言葉の意味を探し始めました。ですが答えは全く見つかりません。

「私にはこれくらいしか出来マセン。……いいえ、出来なかつたんデス」

そのままの姿勢で、金剛さんは話を続けます。

私も抵抗せずに、金剛さんに抱かれたまま話を聴きます。

「ましろもきつと、色々投げ捨ててきたんデス」

最初、金剛さんの言っている言葉の意味が分かりませんでした。

「紅提督と同じようにして来た、そう思いマス。デスカラ、ましろも紅提督と同じように……」

「えつと……」

「素直に探しに来たと言つてここに来て、私たちと接触して、ここに留まるために兵士になりマシタ。私たちはましろの友人で家族デス。誰が何と言おうと」

そう言つて金剛さんは、私から離れました。

さつきまでの金剛さんとは違い、優しい笑みを浮かべています。

この笑顔が本当の金剛さんの顔なんでしょう。

「……ありがとうございます。では、やりましょう」

私は立ち上がります。

そして宣言しました。ここから、私たちは紅くんを脅かす敵の排除に動きます。

――

――

――

警備棟には大会議堂、100人以上収容出来る会議室があります。

そこに、『柴壁』全部隊の指揮官を呼び出し、ある会議を始めます。

これから始まるのは、大本営と共同歩調を取りつつ、横須賀鎮守府

艦隊司令部が独断で起こす作戦行動の方針を決めます。

「天色 ましろです。今回、それぞれの部隊指揮官にお集まり頂きまして決めることがあります」

私は大会議堂の中心でマイクを使い、私は話し始めました。

「これから『柴壁』は戦闘活動を活発化させ、国内で作戦に従事していただきます。その説明をする前に、あることを伝えなければなりません」

一息吐きました。

「先日、横須賀鎮守府艦隊司令部指揮官である天色 紅海軍中佐の生存が確認されました」

大会議堂がワツと騒がしくなります。手元に持ってきていたであろう手帳やペンを空に放り投げたり、隣通しで抱き合ったりしています。

そんな空気は一瞬で終わり、皆の顔が引き締まります。

「これに踏まえ、私たち『柴壁』は国内に存在する敵対勢力を撃滅すべく、皆さんには先ほども申しました通り、作戦行動に従事していただきます」

武下さんによって、全体に資料が配られていきます。口頭で説明しても良かったのですが、再度確認出来るようにと武下さんに無理を言って刷ってもらいました。

私はそれが全員に行き届いたのかを確認すべく、会場を一周見渡します。そうすると、1人が手を上げました。

「資料が届いておりません」

手を上げたのは『獵犬』第4中隊A小队小隊長でした。顔もよく知っていますし、よくしてもらっています。

「他のところで余っているところが在るはずだ」

武下さんがそう言い、集まっている部隊長は手元の書類の枚数を確認する。

やはり誰も余分には持っていないようだ。

武下さんは私に耳打ちをします。

他に聞かれたら不味いことを話すのでしよう。

「ここに集まる全員分しか用意しておりません。配る際にも枚数は確認しています」

今から行われようとしている会議は、外に漏れた場合かなり不味いことになるようなものです。なにせ、横須賀鎮守府の『柴壁』が軍事行動を起こすということですからね。しかも国内で。

テロリストとして処罰される可能性が十二分にあります。

ですから、この会議は秘匿性が高いものとしています。大会議堂に入る際、身体検査を行って記録できるものを持ち込めないようにしてありますし、室外には鈴谷さん、室内には金剛さんが立っています。何か異常があれば、実力行使するということになっています。

この場での情報収集は不可能なんです。

では何故、枚数が足りないのか。

武下さんのミスということも考えられます。それに部隊長の数え間違えということも。

枚数確認に関しては、私もしています。印刷する際、この会議に参加する部隊長の人数分の印刷枚数を選択していましたし、プリンターから排出された用紙を纏めたのも私です。

そして保管していたのも。保管中は触っていませんし、入れてあった容器も先ほど触ったのが、印刷して仕舞って以来初でした。

部隊長たちはそれぞれ、自分の手元にある資料が重なっていないか確認しています。

何度も、何度も。2回、3回と確認して。隣に座っている部隊長同士で確認するほどでした。

この会議の重要性を知った上での行動だということは自明です。

「だとしたら、余分に1人居るんでしょう」

武下さんは、最も可能性の高い事柄を私に伝えました。

それならば、枚数が足りないことにも納得がいきます。

私は金剛さんの方を見ます。今、ここで起きていることを理解しているようで、すぐに動き出しました。

長机と長机の間をゆっくり歩きながら、それぞれの部隊長の顔を見ます。そして、あるところで歩みを止めました。

刹那、金剛さんの身体が光だします。艤装を身に纏ったのでしよう。

駆動音を鳴らしながら、ある1人の方に機銃の銃口を向けました。

「その貴女。何者デスカ？」

一斉に全員がそちらを向きます。

そこに座っているのは、他の部隊長同様の格好をしている、女性指揮官でした。

帽子を深く被り、金剛さんから視線を反らします。

「……言わなくても分かるのでしょうか？」

金剛さんから殺気が放たれます。誰だか分かったのでしよう。ですが私には分かりません。

室内の空気を察知したのか、少し扉が開きます。鈴谷さんです。

少し覗き込むと、すぐに扉を閉めました。状況をすぐに理解できたのでしよう。加勢をする必要はないと判断したということです。

「日本皇国空軍中部航空方面隊所属 第六航空団 天見……」

誰だか分かりません。鎮守府内に『柴壁』以外の日本皇国軍の軍人がいるとは思えなかったのです。

どうして、何のために……私の頭の中にそんなことが巡ります。

「戦闘機乗りがこういったことをすることは、私も流星に考えていませんデシタ。……まあ、このようなことをすることは、分かっているデシヨウ？」

「さあ、何のことやら……」

金剛さんから出てくる殺気から滲み出てくる量が増えました。

悪寒を感じ、身体が震えます。

「……目的は？」

金剛さんは艤装を動かし、照準を再調整しました。

「……」

「吐かないデスカ……。良いデシヨウ。……その者を捕まえて下サイツ!!」

鶴の一声の如く、部隊長たちは一斉に天見さんの身体を自由を奪っていきます。

持っていたものを使い、腕の自由を奪い、足の自由を奪います。そして肩に担ぎ、私の目の前に転がしました。

静かに床に下ろすのではなく、投げ下ろしたのです。ドンと床が鳴り、天見が顔を歪めました。

「目的は？」

「……」

武下さんが天見の顔を睨み、目的を吐かせようとしています。

ですが武下さんも、その行動が無駄だということは分かっているでしょう。

この会議は“一応”、出席する人間に口外しないようにしています。『柴壁』なら会議があることは知っています。だが内容も出席する人間が誰かということまでは知らないはずです。

『柴壁』が会議を行うことは結構あります。その毎回毎回がこういう口外してはならないような任務を行うためのものだったことなど、これまでにあったのでしうか。

大体が配置のことや、『血猟犬』による情報収集した結果の報告だったりしていたのです。

その時から、こうやって天見が侵入していたとしたら……。あり得ないです。

これまでの会議というのは少人数でした小隊長クラスが会議に出ることはなかったのです。中隊長が会議に出るものでした。両手で数えられる程度の人数でしたので、紛れて話を聴くことは出来ません。

つまり、天見はこの会議を狙って紛れ込んだということになります。

「聞くまでもないな。だが、私には表面しか分からない。吐いてもらうぞ」

武下さんは唸るような低い声で、そう天見に言いました。分かっていたんです。武下さんも。

天見がどうしてこの会議に紛れ込んだのか。

吐いてもらうのは、言質を取るためです。

大本営と共同戦線を張ることになり、その上、情報源を大本営に頼ってしまう状況にある以上、天見から取れるであろう言質は、私たちがとってはかなり貴重なものです。

「連れて行け!! 地下牢にある」あの「部屋だ」

「了解ッ!」

「あの「部屋とは一体なんでしょうか。」

私は首を傾げます。

武下さんは抑えていた部隊長が部屋を出て行くのを確認すると、天見が座っていた席に残されている資料を手に取り、破りました。

そして、枚数が不足していた部隊長に自分の資料を手渡しします。

「コレを」

「ありがとうございます」

「ああ」

武下さんはもと居た場所に戻っていきました。

それと同時に、天見を見つけた金剛さんが私のところに来ます。

「ましろ」

「はい」

「天見は『海軍本部』かそれ以外の勢力に情報を流していた可能性が高いデス」

「そうなんですか?」

「はい。天見が来たのは、鎮守府が空襲を受けた後デシタ。『海軍本部』の行動が活発になってきた頃デス」

「そう……ですか」

今、その情報はあまり必要ないです。私はそう思いました。

それを言った金剛さんは、私の返事を聞いてすぐに自分の居た場所に戻っていきます。

それから数分後、天見を連れて行った部隊長が元の席に座りました。

やっと本題が始められます。

—————

—————

大会議堂での会議は滞りなく進み、方針を決めることが出来ました。

大本営と共同戦線を張るにあたり、『血猟犬』と『猟犬』は完全に鎮守府防衛の任から外されることになりました。鎮守府の守りは『番犬』のみで対応することに。

さらに『猟犬』は完全武装をし、鎮守府が所有するトラックを装備品としました。

これにより『猟犬』を『機械化猟犬』というロボット犬を彷彿とさせるような名前に変更されましたが、実際は獯猛で攻撃力のあり且つ機動力が増した猟犬へと姿を変えたのです。

『血猟犬』はというと、そのままの名称ですが、任務内容が完全に変わりました。

『機械化猟犬』と共に戦闘に参加します。ですが、『機械化猟犬』が侵攻する前に破壊を行うということなのです。

侵攻目標に潜入し、機能を麻痺させるのが目的です。指揮官を殺せば御の字です。

この『血猟犬』と『機械化猟犬』の改革により、地下司令部をこの2つの隊の指揮所として決め、これに赤城さんが同意します。

さらにある取り決めが成されました。

『機械化猟犬』の一部を『降下猟犬』として、侵攻目標への強襲作戦のための部隊を用意することになったのです。

空母艦載機を改造。流星改の爆弾倉から人を降下させることになったのです。

これが決められたのには、赤城さんのある言葉のためでした。

『先手必勝。そして敵のど真ん中に痛烈な一撃を与えるのでしたら、地べたを走るよりも上から落とす方が良いです』

これにより『降下猟犬』が新たに編成されることになったのです。

私たちは本格的に動き出しました。紅くんを2回も手に掛けた『海軍本部』を潰すために。

第47話 再起①

共同歩調を取り、勢力を潰す動きを決めてた次の日、大本営から早速情報提供がなされました。事務棟に速達で届けられましたので、赤城さんが受け取りに行き、現在、地下司令部でその開封を行っています。

封筒から紙を取り出し、広げてみる。

そうするとそこには写真が数枚と地図、規模などが書かれたモノが3枚入っていました。

「……場所は厚木海軍飛行場ですね。現在、空軍が航空隊を1つ置いています」

武下さんは、私が置いた紙を見てそう言いました。

多分、私のために教えてくれたのでしょう。

「航空隊と言っても哨戒機しかありませんし、今では滑走路の半分も使っていないでしょう。おそらく、米海軍が使用していた辺りに今回の殲滅目標があるのではないのでしょうか」

航空写真を手に取り、私は飛行機が1機も止まっていないところを見ました。

「大本営からの書類によると、勢力は『海軍本部』の下部組織です。解体以前に受け持っていた海兵だと思われれます」

「海兵、とは？」

「米海軍で言うところの海兵隊のようなものです。海軍所属の歩兵部隊ということになりますね。この辺り（横須賀）に駐屯していた部隊だと思いますが、戦線の後退に伴い、自衛手段を持ち合わせていない海兵は米海軍が使っていた飛行場を新たな駐屯地とした、と思われま

す」
「ということは、正式な辞令の下で厚木に居ると？ それと同時に、横須賀鎮守府に牙を剥く存在ということですか？」

武下さんは頷きました。

「兵力は1個師団です。海兵ですので重装備はしていません。歩兵主

体の軽装備部隊です」

「1万人は居るということですか？」

「おそらく……」

軍隊での部隊編成人数は、『柴壁』に入る時に覚えさせられました。私は溜息を吐きます。

1万人相手に、私たちの最大兵員投入数は400人以下。普通なら歯が立たない人数です。

「……元より兵力が少ないのは、私たちですからね。作戦立案に移りましょうか」

武下さんは封筒に入っていた資料を取り、ホワイトボードを引張って来て書き込みはじめました。要点のみ書き出し、地図は持ち込んだものを使用します。

この場に来ているのは、私と武下さん、『機械化猟犬』の部隊長が1名。金剛さんも居ます。全員がそのホワイトボードに注目し、考え始めます。

「……普通に考えれば、私たちも1万人用意する必要がありますね」

金剛さんは呟きました。

「大本営に援軍要請をして、こちらの指揮下に編入することなんて……」

「出来ませんよ。唯一編入できそうな部隊に心当たりがありますが、それでも3000人が限界です」

『機械化猟犬』の部隊長である、速川さんが言いました。

この人は鎮守府に海軍海兵の補充兵として、800人が編入された時の海兵指揮官だそうです。

この前、話を聞きました。

壮年の男性で、現場よりもデスクワークの方が好きだと言っていました。『柴壁』の中でも割りと普通の経歴の持ち主で、対深海棲艦戦闘を予想して訓練を積んでいたらしいです。もちろん、対人戦闘の訓練も同時に積んでいたらしく、速川さんらの原隊員たちは皆、重火器を背負って山道を走ったりするなど、化け物級の体力を持ち合わせているのだとか。

「海軍第三方面軍第一連隊」か……」

「はい。消耗戦ならば、私たちの右に出る部隊はありません」

消耗戦が得意ということは、兵器や人員を温存した戦闘が得意ということになります。

ですが、『柴壁』に入ってから、特殊部隊に囲まれていたためか、最小兵力によるゲリラ戦なども訓練として積んでいるみたいです。

『柴壁』の構成員が特殊部隊出身というのは、こういうところから言われているみたいです。

実は『柴壁』の構成員の殆どが先ほどの海軍第三方面軍第一連隊出身らしいんです。ここに移った後、下から居た『柴壁』の人員から訓練を受け、模擬戦を繰り返し、特殊部隊と言ってもいい程の練度を獲得した、と聞いています。

「……正面から当たらずとも良いとは思いますが？」

私はその中で、発言しました。

「大手を振って飛行場正面から攻める訳では無いのですよね？」

「……それは剣などの時代でしょうに」

「はい。ですから、普通に奇襲してしまえば良いのでは」

私はそう言いました。

考えてみれば、普通のことです。正面から殴り合うのは得策ではないのだとしたら、寝首を搔くくらいはしなければなりません。

草案も私の中でできていました。

「第一段階。『血獠犬』によって、内部工作を行います。目標は厚木海軍飛行場の海兵側の通信設備の破壊と指揮官の暗殺。できれば送電設備も。第二段階。艦載機による建築物への航空爆撃。これは指揮官の暗殺が明るみになる前に行います。第三段階。混乱したところを『機械化獠犬』が突入。殲滅します。この際、厚木海軍飛行場の空軍側には話を通しておくと良いでしょう」

「投降兵はどのように？」

「厚木の空軍側が良い返答をいただけるのなら、そちらに押し付けた後、大本営に送りつけます」

私は暫定的な草案ではありますが、現状で一番良いと思われる作戦

を提示しました。

「……駄目なら飛行場の中心で纏めておけばいいかと」

そう言つて、私は手元にあつた装備品リストや部隊表を確認しました。

あまり見る機会がありませんでしたので、どういう風に部隊の選別をすれば良いのか分かりませんが、見ないよりかはマシだと思えます。

取り合えず、装備品リストを見ました。小銃やら拳銃、短機関銃、それぞれの弾薬はかなりの量の備蓄があるみたいです。それに比べて他の小火器の数が少ないです。

ぶつちやけてしまえば、爆発物がほとんどないんです。手榴弾が全部隊1人2つまでなら用意出来るみたいですが、それで在庫がなくなるようです。火砲なんて以ての外。そもそも守りのための部隊ですから、砲撃はしないみたいです。

「全部隊が純粋な歩兵ですか」

私は呟きます。これに関しては、私以外の全員は分かっているみたいです。誰も意見しませんでした。もしくは、考え事をしていたら聞こえていなかったのかもしれませんが。

「……他に作戦がなければ、このまま行きましょう」

誰も口を開かないこの現状を、私はその言葉で暗に意見を求めます。

「依存はありません。ただ、第二段階の艦載機による航空爆撃は少し気が引けますね」

速川さんがそう言いました。その意見には武下さんも同意見のようです。一方で赤城さんや金剛さんは別に気にしていないみたいです。が、どういうことでしょうか。

「周辺に住宅街があるから、ですか？」

「工場などもあります。住宅街もあります。それに南には学校があります」

「それならば、航空爆撃は止めた方が良くもありませんね。まあ、銃を撃つのも……」

そんなところにあるのであれば、爆発物や銃の撃ち合いなんてしていたら迷惑がかかってしまいます。

ですがそれを認めてしまうと、厚木飛行場の『海軍本部』残党の鎮圧など出来ません。世間的には良くないことですけど、必要なことですからね。

『海軍本部』の方が国民的にも悪の方でしょうし、私らが悪く言われることもそれなりには抑えられることも考えられます。

「……ましろ、ちよつと借りマス」

「え、はい。どうぞ」

作戦方針の再考をしていると、金剛さんが私が持っていた大本営からの資料を持っていきました。

何度も見たでしょうに。もう一度、何か確認でもしているんでしょうか。

「ましろ。……銃撃戦はなるべく控えたい、そうデスカ？」

「出来れば、ですけど」

厚木飛行場を制圧するのに、最良の方法を金剛さんが聞いてきました。

銃撃戦を避けつつ『海軍本部』の制圧を進める。ほぼ無理だと思っただこの作戦に、金剛さんは何かを思いついたようでした。

—————

—————

—————

厚木飛行場制圧作戦の大筋が決まり、準備に突入しました。

私と武下さん、速川さんは『柴壁』で部隊の選抜と兵站の準備に入ります。赤城さん、金剛さんは別のことをしていました。

紅くんが撃たれてから1年近くが経っています。

本調子とはいかないものの、艦娘たちも外に出てくる人数が増えました。それらを赤城さんと金剛さんが集め、ある話をする事になったんです。

私はヤブからその状況を見えています。今、私の目の前でそれが行われようとしているんです。

「どうしたんですか？ 金剛さん。それに赤城さんも」
「……」

ベンチに座っているのは扶桑姉妹です。そしてその2人の前に、赤城さんと金剛さんが居ます。ベンチは2人用ですから、2人とも立ったまま話をするみたいですすね。

「扶桑、山城。外に出られるようになったみたいデスネ」
「……いつまでもうじうじしていられませんから」

扶桑さんはそう答えます。いつまでもとは言うものの、1年近く引きこもっていた訳ですし、それくらい期間があれば出てきますよね。「姉様のおっしゃる通りです。それに私たちは古参。古参がこうでは、後発に示しが付きません」

山城さんもそれに続きます。

2人を初めて見ましたが、なんというか落ち着いた雰囲気が出ています。これまでにあまり話は聞きませんでしたし、扶桑姉妹が居るところすら知りませんでした。

話を聞く限り、横須賀鎮守府では長いみたいですね。

「ならばその示し、皆さんに示しましょうか」

赤城さんはそう切り出します。

「それはどういう……」

「もし、紅提督が生きていたとしたら、扶桑さん。貴女はどうしますか？」

扶桑さんの赤い瞳が見開きました。

「……その望みは、既に捨てました。ですが、その根拠を教えてください。今更になってそのような事を言い出した根拠を」

少し取り乱したようですが、すぐに立て直します。扶桑さんの横の山城さんは聞いてはいるようですが、反応が鈍いみたいです。無理矢理に外に出てきたのでしょうか。

「先日、総督より言質を取りました。生きてらっしゃると」

「総督……なるほど。それならば」

扶桑さんは長い髪を揺らし、少し考え始めたみたいです。その間を繋ぐように山城さんが話し始めました。

「それは信頼出来るのでしょうか。友好的な関係ではあるのかもしれませんが。ですが、それは紅提督がいらっしゃった時だけ。現在がどのような関係にあるのかなんて、私たちですら分かりません」

「ええ。軍から大勢の特殊部隊員を引き抜き、戦闘行動を中止している横須賀鎮守府への不満はあるでしょう。ですが彼らも憂いているんですよ」

山城さんは赤城さんのその言葉を訊くと、口を閉ざしました。こう、少ない言葉で意思が通じるのは、見ている私からすると状況が把握できません。

山城さんが何を考えたのか、何を知っているのかが全く分からないんです。

扶桑さんは山城さんが黙ったすぐ後に、口を開きました。

「この話を持ち出したということは……何かするんですね？」

赤城さんは頷きます。

「敵対組織の排除を行います」

「……『海軍本部』ですか？」

「はい。こちらからも戦力を捻出して攻撃を行います。既に初戦の目標は決まっています」

「それで、私たちに声を掛けた理由は何でしょうか？」

「使えるものは全て使います。紅提督のために」

「なるほど……よく分かりました。長門さんたちに声を掛けておきます。そうすれば水上打撃部隊も出てきますよ」

「助かります」

水上打撃部隊。横須賀鎮守府に所属する艦娘の括りらしいです。戦艦、重巡で構成された部隊だそうです。

「今すぐにも行動しましょう。私と山城は長門さんに会ってききます」

「お願いします」

「空母機動部隊と水雷戦隊の方は頼みましたよ」

「お任せ下さい」

扶桑さんと山城さんは立ち上がりました。

「それと金剛さん」

「なんデスカ？」

「比叡さんたちは貴女に任せます。私が言うよりも良いはずですよ」

「分かってマス」

「では」

2人は行つてしまいました。

これより赤城さんと金剛さんたちは、空母機動部隊と水雷戦隊。つまり空母の艦娘たちと軽巡・駆逐艦の艦娘たちのところへ赴き、『紅提督が生きている』ということのを伝えに歩き回りました。

空母機動部隊は赤城さんが1声で皆を外へ連れ出し、動く意思を伝えることに成功。全員が使われることに同意しました。

金剛さんは自分の姉妹の説得と、水雷戦隊へ。姉妹たちは元より、度々姿を消していた金剛さんのことを察して居たらしく、既に覚悟は決まっていたみたいです。

水雷戦隊の方はどうやら夕立さんと時雨さんが触れ回ったらしく、裏で鈴谷さんが手を回していたみたいです。大井さんから伝播されていきました。

最後に、『番犬艦隊』と呼ばれる艦娘たちのところへ行きます。

これに関しては、赤城さんと金剛さん。それに私も向かいました。

どうやら艦娘たちの中で一番心に傷を負っているのは、この『番犬艦隊』の艦娘たちみたいです。

「ビスマルクさん、入りますよ」

艦娘寮のビスマルクさんの私室の扉をノックし、私たちは入りました。

部屋に鍵はありますが、鍵が掛かってなかったんです。

中に入り、靴を脱いで部屋へと入りました。

整頓が行き届いていて、引きこもっている人がいるような部屋には見えませんでした。ある1部は違いました。

ベッドの上です。こんもりと盛り上がっているそこに、おそらくビスマルクさんがいるんでしょう。その周りには写真立てが2つと水、くしゃくしゃになっているティッシュがあります。

赤城さんはベッドの傍らに座り、金剛さんも同じく座ります。私はそのまま立ったまま、状況を見ることにしました。

「ビスマルクさん、調子はどうですか？」

「……」

返事は返ってきません。

「顔を見せてくださいよ」

そう言うと、こんもり盛り上がった布団がみるみる高くなり、布団がぱさりと落ちます。

そしてビスマルクさんが現れました。

髪はボサボサで青い目に輝きはありません。そして目の下にはクマがありました。

寝ていないんでしょうか。

私が想像していたビスマルクさんの姿とは、かなりかけ離れています。

ロングストレートで金髪の髪でもなければ、自身に満ち溢れている目つきもありません。

「顔色、前見たときよりも良くなりました？」

「……そんな風に見えるかしら。それで、今日は何？」

素っ気ない言葉で、そんな事を言います。

「貴女の友人は帰ってきますよ」

「帰ってこないわ。死んだのよ」

「いいえ。帰ってきます」

「死んだの……」

「帰ってk」

「死んだのっ!!! 私が、私が守れなかったっ!!! 貴女が一番分かっているでしょう?!」

ビスマルクさんは赤城さんの胸ぐらを掴み、ガクガクと揺らしま

す。
それに赤城さんは抵抗をしません。自分の胸ぐらを揺らすビスマルクさんの手を優しく包み込みます。

「帰ってこなかった娘は何度も見た!! だけど、だけどっ!!!」

ビスマルクさんの瞳から涙が流れ出ます。

それを拭うことなく、ビスマルクさんは言葉を投げつけます。

「戦場に赴いた娘とは違うっ!! 戦争だからって割り切れた!! でも違うじゃない!! あの人は戦争で死んだんじゃないわっ!!」

ぼたぼたと大粒の涙がシーツを濡らします。

そんな時、私は写真立てに入っている写真が目に入りました。

1枚は集合写真みたいです。真ん中に紅くんが映った集合写真。そしてもう1枚は……。

「ビスマルクさんっ!! 私の話聞いて下さいっ!! 貴女が『番犬艦隊』として紅提督を守りきれなかったことは、散々1年前に話したでしょうっ?!」

もう1枚は紅くんが、執務室のあの椅子に座って微笑んでいる写真でした。

あまり微笑むことはしない紅くんの微笑んでいる写真です。

ビスマルクさんは赤城さんのその言葉を聞いて、胸ぐらから手を離します。そして私の顔をちらつとみると、私の顔を睨みました。

「……その女は? 門兵にそんな人、居なかったわよね?」

「ああ、彼女ですか? 今は教える訳にはいきませんね。ですけど、ここに居るといふことがどういふことか、貴女は分かりますよね?」

ビスマルクさんは頷きます。

「それで、何なの?」

「ある人の護衛を頼みます。とは言っても、結構後なんですけどね。……これだけ言えば、分かりますよね?」

「……信じていいの?」

「ええ。裏切られればその時は」

ビスマルクさんは立ち上がり、ベッドから降ります。そして綺麗に畳まれていた服を取り、着ていきました。そうすると、私に見覚えのある格好へと変わっていきました。

帽子はどうしてか被りませんでした。ハイニーツを履いて、腕を組みました。

『番犬艦隊』を起こしてくるわ。でもツエツペリンは私だけじゃどう

にもならないから、赤城にも頼めるかしら？」

「ええ。構いませんよ」

腕を解いたビスマルクはそのまま自分の私室を出ていきました。言葉通りなら『番犬艦隊』を起こしに行っただんでしよう。

「……どうやら私は必要なかつたみたいデスネ」

「はい。もし私の言葉で駄目だったら、金剛さんに焚き付けてもらうつもりでしたが、無駄足だったようです」

金剛さんはフンと鼻で笑うと、スツと立ち上がりました。

「じゃあ、赤城はフェルトに声を掛ける準備をしておいて下さい。私はましろに説明しておきます」

「分かりました。ではフェルトさんの部屋の間で待ち合わせを」

そう言つて赤城さんも部屋を出ていきました。

フェルトさん。つまりグラーフ・ツエツペリンさんのところに行く、その本意とは何でしょうか。

話を聞いている限り、金剛さんから説明があるみたいです。

「ここを出て、私の部屋に行きまショウ。妹たちとは同室デスガ、プライベートスペースはあります。そこで」

そう言われ、私は金剛さんの後を追って行きました。

第48話 再起②

艦娘寮にある金剛さんの私室は3階にありました。

廊下から繋がる最初の扉を潜ると、共用のリビングスペースがあり、そこから4方向に扉がついています。

リビングには金剛さんの妹たち、比叡さん、榛名さん、霧島さんが居ました。

「お客さんだなんて、珍しいですねえお姉さま」

「そうデスカ？」

比叡さんが話しかけてきます。他の2人は軽く会釈をして、話に戻っていきました。

「お茶でも後で持っていきますよ」

「お願いしマース」

4つに分かれている部屋の1つに入りました。

灰色の扉を開き、中に入ります。

洋風の内装で、ところどころに機械が置いてあります。不釣合な小物に首を傾げますが、あまり詮索しても仕方ないです。

私は金剛さんに案内された椅子に座りました。

「サテ、何から話しましょうカ……」

金剛さんがそう呟いた直後、比叡さんがお盆を持って入ってきます。何も言わずにティーポットとティーカップを置いて、そのまま部屋を出ていってしまいました。

「流石比叡ネー。……まあ、話すことなんて1つしかありません」

「そうなんですか？」

金剛さんはティーカップを手に取り、少し傾けると話し始めました。

「私たちがフェルトと呼んでいるグラーフ・ツエツペリンのことデス。ましろは私たちが『フェルト』と呼んでいることに違和感を持っていると思いますガ、この際それは置いておきマス」

「はい……」

「まあ、話は長くなりマス。……紅提督が私たちに呼び出されてたから何ヶ月か経った頃デス。鎮守府が空襲を受け、復興した後に鎮守府で文化祭が行われマシタ。その時に、新瑞から、『端島鎮守府から移籍したいと言ってきた艦娘たちがいるんだが、引き受けてくれ』と言われて移籍してきた艦娘たちが居たんデス。それがビスマルク、オイゲン、フェルト、Z1、Z3、U-511」

頭の中に顔が描かれます。結構覚えているものです。それに先ほどビスマルクさんには会いましたからね。

それにしても端島鎮守府ってなんでしょう。それが少し気になります。

「それから移籍してきたビスマルクたちは私たちの仲間になりマシタ、1つ、問題があったデス」

人差し指を立てて、金剛さんは話します。

「彼女たちは沖に出れなかったんデス。理由は『沖から出ようとする」と機関が停止する』のと『そうなった場合、後退して戻ってくるしかなくなる』デシタ。それによって、赤城の提案でビスマルクたちは『番犬艦隊』という役を受け、任務に従事シマス。『番犬艦隊』の任務内容は知っていると、思いマス」

「はい」

「フェルトは鎮守府が作戦行動中、ずっと紅提督のそばに居たんデス。それでか知りませんが、どうやら恋に落ちてしまった、と」

「……はい？」

「フェルトは紅提督のことを異性として好きになってしまったんデス」

思わず聞き返してしまいました。

何を言うのかと身構えていましたが、まさかそういう展開になるとは思いもしませんでした。

紅くんにも春が来たなあ、と思いました。今はそれどころではありません。

私は真面目に話を聞く姿勢に戻します。

「なるほど……」

「ハイ。それで、現状に話になりマス。フェルトも『番犬艦隊』です。紅提督が拉致された時、一番近くに居た1人デスカラ、かなり心にダメージを負っているんデス。状況で言ってしまうえば最悪。ビスマルクのアレより酷いデス」

ビスマルクさんの塞ぎ込み以上だとすると、部屋が荒れているとかそういうものなのでしょうか。

それよりも、これからそのフェルトさんに話をしに行くんです。そのことで話があつて、こうやって来たんですよね。

「皆そうデスガ、紅提督のことは『大好き』デスカラ……。じゃあ、行きましょうか」

「……そうですね」

ここまで10分話したかしてないかくらいです。

ティーセットを洗い場に置いた後、私たちはフェルトさんの部屋に向かいました。

そこでは赤城さん、ビスマルクさんと待ち合わせをしています。

「……」

「……」

「」

フェルトさんの私室の前に着くと、既に赤城さんとビスマルクさんが待っていました。

「全員揃いましたし、行きますか」

そういった赤城さんは、扉に手を掛けます。

「私は立場的に何度か会ってますが、今のフェルトさんは正直……」

赤城さんはそのまま動きを止めます。

「正直、受け答えができるか分かりません」

「それってどういう」

私がそう言うと、赤城さんの代わりにビスマルクさんが教えてくれました。

「さっきの私よりヤバイってことよ」

「ビスマルクは立ち直り早いデスカラネー」

金剛さんは答えたビスマルクさんの肩をパンパン叩きながら言います。

確かに立ち直りの早さは尋常じゃないです。ビスマルクさんの部屋を訪れたのは2時間くらい前です。それから20分で解散して、ビスマルクさんは他の『番犬艦隊』に声を掛けて回っていました。実は塞ぎ込んでなかったんじゃないか、と思ってしまうくらいの立ち直りの速さです。

「まあ、入りますよ」

そう言つて赤城さんは扉を開き、先導をします。

一応声は掛けてますが、返事はありませんでした。鍵も締まってないようでしたので、入る趣旨を伝えて扉を開きました。

中はビスマルクさんの時とは違います。入り口から部屋に繋がる廊下には紙が散乱していました。

薄暗くて良く見えませんでしたので、一枚だけ手に取つて見たんです。

『どうしてどうしてどうしてどうしてどうして……』

A4サイズのコピー紙でしたが、空いてるスペースがない程、『どうして』という言葉が殴り書きされていました。

他にもいろいろな言葉が書き詰められているコピー紙はかなり落ちていましたが、目を反らします。どうしてか、見てはいけない気がしたんです。

奥に進み、カーテンが閉められた部屋の椅子に座っているフェルトさんを見つけました。

少し離れています、ここから見る限りだと普通に見えます。

「ツエツペリン」

最初に話しかけたのはビスマルクさんです。

「……あー」

言葉になつてない声を、フェルトさんが発したことはすぐに分かりました。

「……ご飯、食べてる？」

「……あ、とみらーる。アトミラールは」

ビスマルクの質問にちゃんと答えられていません。

虚ろな目をビスマルクさんに向けているフェルトさんは、口からダラーと唾液を垂らしています。

正直、これは相当なものです。病院送りになっても不思議ではない状況です。

そんな風に冷静に観察していますが、冗談ではありません。本当に入院するレベルです。

そんなフェルトさんに、ビスマルクさんは話しかけ続けます。

「貴女、おかゆしか食べてないらしいじゃない。もつと栄養のあるものを食べた方が良いわ」

「あとみら、ーる。アトミラール……は、っ?」

ずっと紅くんのことを呼んでいますね。

「ほら、そんなだらしない顔をして……。紅提督に笑われるわよ」

「あう……」

ポケットから出したハンカチで、フェルトさんの口元をビスマルクさんが拭きます。

「ツエツペリン」

「……」

虚ろな目をしているフェルトさんの顔を掴み、ビスマルクさんはその目を直視します。

そしてハッキリと言いました。

「紅提督は生きているわ」

「……」

フェルトさんはリアクションをしません。

「私たちで逢いに行くけど、ツエツペリンは行かないの?」

デタラメです。逢うために行動はしますけどね。

その言葉によろやく反応したフェルトさんは、少しづつ虚ろな目が動き、ビスマルクさんの顔を見た後、赤城さんや金剛さんの方を見ます。そして最後に私の顔も見ました。

「アト、ミラールに、逢いに?」

「ええ。厳密に言えば、違うんだけどね」

「そう……か」

そういったフェルトさんは、ようやく応答が出来るようになったみたいです。ですがまだ不安は残っています。

正気に戻ったとしても、まだ分からないんです。

フェルトさんはおもむろに懐へ手を忍ばせ、あるものを出しました。

それはしわしわになった紙です。床に沢山落ちているコピー紙と同じものみたいですが、その紙だけは見覚えがありました。

「私も、行くこう」

その言葉と同時に、ビスマルクさんは受け取った紙を広げます。私の位置からでも、その紙が見えます。

「自己解体申請書……」

「ああ。……逢いに、行くのだろう？」

完全に応答出来ていますが、やはりさつきまでに言った言葉は聞こえてなかったみたいです。

「これじゃあ逢いにいけないわ」

「そう……か。じゃあ、どうすれば良いのだ？ 私は、どうすれば……」

「簡単よ、そんなこと」

そういったビスマルクさんはフェルトさんの腰をおもむろに掴み、椅子から無理矢理立ち上がらせました。

驚いたフェルトさんはよろめきますが、そのまま直立ちます。

そして初めて私たちの方を見ました。

「先ずはお風呂に入って、身支度を整えなさい。話はそれからよ」
「う、うむ……」

白いカッターシャツ。下には下着しかしていないフェルトさんは。そのままよろよろと歩き、壁際にあるタンスに手を掛けました。

そこからタオルと下着を取り出し、タンスの上に乗っている洗面器とボディースープ、シャンプー、リンスを洗面器に入れました。

「ほら、いつもの服を忘れてるわよ」

綺麗に畳まれた服を、ビスマルクさんはフェルトさんに渡します。

それを受け取ったフェルトさんはそのまま部屋を出ていきました。それを見送ったビスマルクさんは、少し唸った後に廊下に出ています。

私たちはそれに付いて行き、艦娘寮の入り口に向かいました。

――

――

――

艦娘寮の入り口は、かなりの艦娘が出入りをしていました。

見覚えのある艦娘たちが頻繁に出入りを繰り返しています。その中に、さつきとは見違える格好をしている艦娘が現れました。フェルトさんです。

「待たせた」

「うん。すつごい待ったわ」

ビスマルクさんはそう答え、溜息を一つ吐きます。

「さて、これからどうするの？」

「そうですね。取り敢えず、全員を集めましょうか」

赤城さんはビスマルクさんの質問に応答し、ある決断を下しました。

「春までに、全てのことを終わらせましょう」

そう言ったのです。

今は冬に入りたて。これから寒くなる一方です。これから4ヶ月で全てのことを終わらせると、赤城さんは言ったのです。

赤城さんはそう宣言し、金剛さんとビスマルクさんにあることを伝えました。

「それぞれの艦種代表を集めましょう」

赤城さんはそう言って立ち去ってしまいました。

この場に残ったのは私とビスマルクさん、フェルトさんです。

「結局、私だけで良かったわね」

「そういえば……確かにそうですね」

ビスマルクさんはそのまま、フェルトさんの頭の上に手を置きしました。

「む、何の話だ？」

「貴女を外に出すのに、私だけではどうにもならないと思っていたのよ。だからあの大所帯だったの」

そう言つて、ビスマルクさんはそのままフェルトさんの頬をつねりました。

「痛い痛い！」

「ごめんなさいねえ〜」

全く謝る気のないビスマルクさんを一度睨み、フェルトさんは私の顔を見ました。

「それで、碧 葵さんだったか？」

「はい」

再び、ビスマルクさんはフェルトさんの頬をつねります。

「違うわ。私もさつき聞いたばかりだけど、この人、紅提督の実姉よ」

「はひ？」

「だから、紅提督の実姉だって」

「すまんがビスマルク。私の頬をつねってくれ」

「言われなくてもつねってやるわ」

フェルトさんの両頬を思いつきり、ビスマルクさんがつねります。

びよーんと伸び、変な顔を数秒間した後、ビスマルクさんは手を離しました。

両頬が真っ赤になったことも気にせず、キリツとした表情でフェルトさんは私に質問してきました。

「失礼ながら、お、お名前を、を、お聞きしても……」

ビスマルクさんがごく笑っているが、私はそれに真面目に答えました。

「天色 ましろです」

「し、失礼ながら、あわ、あわ、わ、わたしは……」

慌てているフェルトさんの肩をビスマルクさんが抱きます。

「以前、会ったことがあるみたいない草だったけど。ツエツペリンが部屋から出ていたの？」

「はい。結構前に廊下で」

「そう?」

そのまま私たちは歩き出します。ビスマルクさんが、赤城さんの言っていた艦種代表を集めて会議する場所に行くと言ったからです。私も一応、出た方が良いでしょうし、ビスマルクさんも今回はその会議に出るらしいですから、一緒に行くことにしたんです。

フェルトさんは道中で誰かに引き渡すみたいですけど、さつきから全然変わってないんですね。

「ツエツペリン、貴女ねえ、著しくキャラが崩壊しているわ」
ずつとよく分からないことを言っているのです。

口調が敬語になったり、男口調になったり、ツンデレの人みたいになったり……。

「だ、だってえ〜」

「はいはい、分かってるわよ。……つたく」

尚、今は幼児退行中です。

溜息を吐いたビスマルクさんは頭を掻きました。

そしてニヤリと悪い笑みを浮かべます。

「ツエツペリンはねえ! 紅提督のことがあ! すk」

「わー! わー! 実姉を前にして何を言う! ビスマルクツ!」

「モガモガ」

「なんでもない、なんでもないんだ」

アハハと笑い、ビスマルクさんの口から手を離れたフェルトさんは、少し頬を赤くしながらモジモジとはじめた。

「その……お義姉さんは……」

「ん? 今、変な漢字が混じっていたような」

「余計なところで日本語力を出すな!!」

2人のコンビ漫才を見ながら、会議へと向かうのでした。

ちなみに、これは到着するまで続きました。たまたま近くを通りかかった吹雪さんに、フェルトさんに無理矢理にでも食べ物を食べさせて欲しいと、ビスマルクさんは吹雪さんに頼んでいました。

『なんでこういう時にだけえ〜』

とか、吹雪さんはぼやいてましたが、結局連れて行ってくれたので

よかったです。

第49話 艦種代表会議

会議の会場に到着しました。

そこは艦娘寮の一室で、誰もいない部屋を使うみたいです。

「さて……」

赤城さんが音頭を取り、会議を始めます。

「これより、厚木飛行場制圧作戦の作戦会議を始めます」

ここに集まっている殆どの艦娘が首を傾げました。

この作戦は私たちと『柴壁』の一部の人間しか知らないですから、それも無理もないことでしょう。

「分からないであろう皆さんに説明します」

赤城さんは事細かに、現状を報告しました。

ここに集まっている艦娘は長門さん、高雄さん、五十鈴さん、吹雪さんです。他には私とビスマルクさん、フェルトさんも同席しています。

「その前に訊いても良いか？」

手をスツと上げた長門さんが、赤城さんに質問します。

「どうぞ」

「この会議が艦種代表を集められた会議であることは分かっている。だがそこにビスマルクとフェルトが居ることに疑問がある上、更に『柴壁』の『血獵犬』がいる等、どういうことだ？」

長門さんは私の顔をちらっと見た後、吐き捨てるかのように言いました。

この会議というよりも、集まりの意味を私は分かっています。何を話すのかは分かっていますけども。

艦種代表が集められた会議というのは、本来、別のことを決定するためのものだということは、長門さんの言い方で分かりました。それにビスマルクさんたちが含まれていない理由です。

ビスマルクさんらは沖に出れません。と考えるとこの会議の存在は、紅くんから下された作戦を遂行するにあたっての詳細決定がなされていたのではないのでしょうか。指定艦はあったでしょうけど、攻略

作戦に低練度艦を出すとは思えません。となると、代表かもしくはそれに近い艦が出撃することになります。

何の情報もない海域への攻略作戦に細かい手を打つため、この会議が存在していると私は考えました。

私は言わずもがな、今日始めてこつちに来て長門さん等を見ました。この場に集っている艦娘のほとんどは、今日が初見です。

「それは厚木飛行場制圧作戦だからです。沖にて艦隊行動を取らない訳ですから、ビスマルクさんら『番犬艦隊』にも出撃命令が出せるんですよ」

赤城さんは簡潔に説明します。というよりも、普通に考えれば赤城さんの言うようなことに行き着くはずです。

「それとこの方は……あれ？ 言ってませんでしたっけ？」

赤城さんは艦種代表の顔をなぞって見た後、訊きました。

ちなみにビスマルクさんとフェルトさんは知っています。

「私はさつき会いました。ですけど、『柴壁』には居ない顔ですよね？」

赤城さん。新しく雇ったんですか？」

吹雪さんがおずおずと手を挙げて発言します。

確かに先ほど吹雪さんには会いましたね。ビスマルクさんがフェルトさんを押し付けたんです。『今から食堂に行つて、こいつ（フェルトさん）が食べられるだけ食べさせておいて』と言いつけてそのまま放置したんです。

去り際に吹雪さんは嘆いていましたが、結局食堂に強引に連れて行つてくれたみたいです。ここに到着したフェルトさんは、紙ナプキンで口元を拭きながら入ってきましたからね。

吹雪さんに引きずられながら。

「確かに『雇った』ことにはなってますね」

はて、どこから説明したものかと赤城さんが首を傾げている横で、私の方をビスマルクさんが叩きました。

「赤城はね、こういうことをよくやるのよ」

「ああ。うっかりさんなんですよ。以前から噂は聞いてますよ」

「そう。今日もどうやら、皆に集まるようには言つたけど、貴女の説明

をしなければならぬことは忘れていたみたいね」

ビスマルクさんはそう言つて、少し溜息を吐きました。

「こんなのも変わつてないとなると、合わせる顔がないわね。赤城」
そんな独り言を言つた後、ビスマルクさんは赤城さんに話しかけました。

小さい声で聞こえませんでしたが、赤城さんはすぐに段取りを戻します。

「ええと……取り敢えず、本題の前に紹介しておきます。……自己紹介をお願いできますか？」

赤城さんは私にそう言いました。ですので、私は自己紹介をします。長門さんたちの方を向いて。

「私設軍事組織『柴壁』『血猟犬』所属、天色 ましろ二等兵です」

『柴壁』に入つて以来、私は昇進してません。まあ、当たり前ですよ。ね。

防衛戦にも参加してません。そもそも、新入りは私が最初で最後みたいなものらしいですから、皆さんには良くしてもらつています。

自己紹介をした私は、ぎこちない敬礼を降ろします。

その時、ビスマルクさんが私に小声で言いました。

「赤城は違うことも言つて欲しいみたいよ」

「あ、分かりました」

ビスマルクさんに言われて、私は付け足すようにあることを言いました。

「日本皇国海軍横須賀鎮守府艦隊司令部の天色 紅は私の実の弟です」

見事に、艦種代表は全員フリーズしてしまいました。私が紅くんのお姉さんというだけで、こんな反応を取られるのはこの世界だけですよ。ね。

私はそのままスツと一歩後ろに下がります。

「とまあ、そんな訳です。話を端折つて説明してしまいますと、ましろさんはこの世界に紅提督と同じように転移してしまつたみたいですね。それと直接聞いてはいませんし、私の推測ですが、ましろさんは

あちらの世界で失踪した紅提督を探していた際に転移したかと思われ
れます」

「間違つてませんね」

「更にですが、どうやらここへの補給部隊と一緒にいらつしやつた
みたいですし……」

「はい」

赤城さんは『転移した際にはある程度の情報を持っていたかと』と
続け、話を戻しました。

「皆さんも言われて早々と信頼できないかもしれませんが、少なくとも
も私や金剛さん、鈴谷さん、武下さんは信頼しています」

咳払いをして、赤城さんは元の話に戻りました。

「厚木飛行場制圧作戦の概要を説明します」

口頭での説明を開始します。

「本作戦の目的は『海軍本部』傘下部隊の制圧及び情報収集。試対人戦
闘を行います」

初耳の話です。対人戦闘とはどういうことでしょうか。

以前、艦娘と兵士による戦闘は何度か行われていました。私が転移
してくるまでに数回あったようですが、私もよく分かりません。そも
そも対人戦闘と言つて、誰と戦つたんでしよう。

「第一段階。『海軍本部』傘下部隊、海軍海兵厚木駐屯地所属第3海兵
師団指揮所に、ある偽装書類を送り込みます」

「内容は今から読み上げます。『発大本営。宛第3海兵師団。師団駐
屯地へ、定期慰安会を執り行う』です。定期慰安会とは大本営が設け
た制度で、時の芸人などのトークショーを行つたりミュージシャンが
ライブを行うことを言います」

軍隊ですからそういうものはあるでしょうね。なんだか楽しそう
です。

ですがこれは嘘の書類です。本当は執り行われません。

「この定期慰安会を促す知らせが届いた基地は、早急にその準備に取
り掛かります。そうすることで、警備部隊や歩哨の数は激減すると思
われます」

赤城さんはそう言って、机上に封筒を置きました。

それは大本営の印字がなされた封筒です。おそらく中身は今、赤城さんが言った偽装書類が入っていると思われれます。

「第二段階。偽装書類到着・開封が確認されてから数日後に作戦艦隊を厚木飛行場へ派遣。地形の再確認と暗記を行います。暗記が終了次第、第三段階へ移行」

赤城さんは机上に広げられた厚木飛行場の地図の上に、将棋の駒を置きます。

どうして将棋の駒なのでしょう。何で表しているかはさておき、それがどういう意図で置かれたのかは分かります。

「第三段階。作戦艦隊は定期慰安会の前日に作戦開始。準備が終了している会場の確認及び、忍耐力のある大型艦の艦娘は物資に紛れて先行。小型艦の艦娘は周辺警戒」

おそらく会場を表しているであろう将棋の駒入れを置き、その中に駒をいくつか入れました。

「第四段階。定期慰安会の開催と同時に小型艦の艦娘は会場に向けて前進開始。この時、大型艦の艦娘は待機です」

遠くに置いてあった、残りの将棋の駒を駒入れに近づけさせます。

「最終段階。定期慰安会が開催し、進行がある程度進んだ頃に作戦艦隊は一斉に艦装展開。会場を包囲します」

駒入れに入っていた駒も出し、駒入れの回りを取り囲むように将棋の駒を立てます。つまり艦装展開を意味しているのかと。

それと同時に、あることがなされました。

「この時、同時進行で『柴壁』の『血獵犬』が飛行場内に潜入。哨戒中の海兵を捕縛。叶わなければ攻撃。ただし、殺しはしません」

将棋の駒が乱雑に地図の中に入れられました。侵入経路や行動は不確定ということでしょう。

「会場で全員の投降もしくは制圧が完了することで、本作戦を成功とします」

一応、作戦概要の説明は終わったみたいですね。

少し時間を置き、質疑に入りました。ですが、質問は一つしか出て

きませんでした。

「なあ、赤城」

「はい。長門さん」

少し困った表情をしている長門さんが、赤城さんに質問をしたんです。

「作戦立案者は誰だ？」

「金剛さんです」

「ならいい」

2言目で終わってしまった。そこまで赤城さんの作戦立案に信用が無いんでしょうかね。

それはともかくとして、これを艦種代表に伝えたことによって、本格的に作戦艦隊の編成が可能となります。

こちらで作戦艦隊の編成が完了次第、艦種代表に伝達。そして該当艦に連絡が向かうということらしいです。

この作戦、私にも仕事を与えられています。正確に言えば、私を含めて数人です。

その仕事内容というのは、定期慰安会の会場で進行役や出し物を行う役者役をします。わざわざ、本物と呼ぶのもアレですから、こちらで用意させてもらうことになりました。

私は幸いにも顔が割れていませんので、ハツタリをかましてもバレル可能性が限りなく低いということです。ですので、最初の出し物の時に偽って出ていくことになっています。

「では、各代表は心に留めておいて下さい。以上」

解散の号令です。皆さん、それぞれは黙って部屋から出ていきました。

そして最後に私たちが出ていきます。

――

――

――

全艦娘への伝達はその日のうちに完了したみたいです。

艦種代表が全体への連絡を終えたことが、赤城さんへ伝えられたみ

たいです。それにより、艦娘たちの行動パターンは変化します。私がこの世界に来る前の生活に戻ったみたいです。紅くんがいないため、一部の仕事はないみたいですけどね。それでも規則正しい生活に戻り、今朝から外で艦娘たちの姿を何度も見ました。

赤城さんは現在、工廠に籠っているみたいです。流星の改造に着手。白衣妖精という、工廠の研究・開発を担っている妖精と話し合いをしているみたいです。

金剛さんと鈴谷さんは作戦艦隊に参加させる艦娘の選抜を行い、武下さんは『柴壁』へ作戦の通達。

進展したことと言えば、偽装書類を発送したことくらいです。大本営経由で送り届けられたその書類が無事届けられたことも確認しました。

それに伴い、『血獵犬』を向かわせて偵察中です。
作戦開始まで、もう少しです。

やっど、私たちは紅くんの救出に動き出すことになります。

第50話 厚木飛行場制圧作戦①

艦種代表との作戦会議から3週間後。

全ての準備を整えた私たちは、『血猟犬』の報告を待っていました。昨日の夕方に向かった『血猟犬』の帰りは、今日の午前中。今は午前11時。もうそろそろ帰ってきてきても良い頃だ。

私と武下さんは赤城さんと共に、報告に戻ってくるのを警備棟の執務室で待っていました。

「帰還しました」

戻ってきた『血猟犬』から報告を受けます。

「準備は着々と進んでおります。あちらにも数人残しておりますので、無線機にて随時最新情報を取得可能です」

「休息を取れ」

「了解しました」

『血猟犬』の1人は、敬礼をした後に部屋を出ていきます。

この場には、待っていた時と同じだけの人数が残りました。

「厚木飛行場制圧作戦開始！ 該当空母の艦娘は埠頭に艀装を出し、航空隊の準備を始めます！」

赤城さんの声が挙がりません。それに呼応するかのように、私たちは部屋を出ていきます。それぞれの任務を果たすために。

――

――

――

私はこの世界に来て、横須賀鎮守府の人間になって初めて外を出ました。

正門を出ていったトラック3台の内の1台は『血猟犬』が使い、残りには作戦艦隊が使用します。

初回では『血猟犬』16人と、作戦艦隊は水上打撃部隊から選抜。大型艦を中心に艦娘18人による包囲網を作ることになっています。

『血猟犬』16人は出血サービスですね。構成員の半分以上を投入

しています。その中には仲良くしてもらっている人とかも居ますので、正直色々心配ではありません。

作戦艦隊には霧島さん、榛名さん、扶桑さん、山城さん、妙高さん、那智さん、足柄さん、羽黒さん、川内さん、神通さん、那珂さん、夕張さん、白露さん、時雨さん、夕立さん、村雨さんが参加します。

その後、手頃のいい場所を本陣として取り、地形を暗記。作戦開始に備えます。

「……一個師団ですか」

南風さんが、そう呟きました。

「はい。海兵です」

静かなトラックの荷台に、私と南風さんの声だけが聞こえてきます。

「私たちは施設侵入と制圧を命じられていますが、どこの施設でしょうか？」

小銃をカタリと音を立て、鼻の上まで被っていたフェイスマスクとずり下げました。

B D Uを着ていなければ普通の女性にしか見えない南風さんですが、今は目だけが違っています。『血猟犬』という部隊名が付くだけありますね。まさしく猟犬そのものの目をしています。今だけかもしれないませんが。

南風さんが訊いてきたことですが、答えられないんですよ。現場に着くまでは。

そういうものなんですよね。きっと。それに武下さんなどにも言わないよう、言われていますから。

「それは到着するまで云えません。ですが、到着してしまえば分かると思いますよ」

「そうですね。……一応、この作戦は極秘。おいそれと作戦内容に関わることは。すみませんでした」

南風さんは小銃を持ち直し、揺れる車内で目を瞑りました。

私も考え事を始めます。

今回の作戦は艦娘たちからしてみても、『柴壁』からしてみても、私

個人としてみても初の作戦です。各々が初めてのことばかりで、緊張はしています。ですがそれでも、ここで失敗はしてられないんです。どこまで勢力を伸ばしているのか分からない『海軍本部』。それと息の掛かった組織。それを風潰しに潰していかなければならぬ一連の動きというのは、“意図”は理解しているつもりです。

完全な安全の確保。それが条件だと言われた紅くんの開放は、私たちが力を貸すことで加速されることなんです。一刻も早く紅くんに会いたい私と艦娘たち。その思いを原動力に動いていますが、もし、それが途中でなにかあったのだとしたら……。

私は頭を振ります。余計なことを考えてしまっています。

ネガティブな思考にシフトしてしまっているの、私は別のことを考え始めました。

一応、地形を覚えるのに2日間の猶予があります。その最中には、かなりの精神的な疲労があるのではないか、という武下さんの言葉がありました。

意図が分かりません。ですが、それだけ精神的疲労が積まれるということでしょう。そのために、補給物資の中には、このご時世では珍しいお菓子が含まれています。横須賀鎮守府は補給物資納品が優先的に行われていますから、もしコンボイが攻撃されたとしても、すぐに代わりのコンボイが来るみたいなんですよね。

ですから、食料や日用品、雑貨に関して横須賀鎮守府は日本で有数の在庫を保有しているらしいです。精神安定剤的な意味も込めて、甘いモノを持ってきているということですよ。

「到着しました。周辺の安全を確認してきます」

トラックの運転席から顔を覗かせた、トラック運転手もまた『柴壁』の人間です。今回は私たちを降ろしたら、すぐに鎮守府へ戻るような手はずになっていますけどね。

「お願いします」

私たちと艦娘を乗せていたトラックは、軍用の非武装トラックではありませんが、民間車に見えるように偽装されています。塗装は変わり、軍用であることを示している印は全て取り除いています。ですか

ら、ここに着くまでには軍隊だとは思われなかったでしょう。

トラックの運転手をしていた『柴壁』の人も作業着っぽいものを着てもらい、万全の態勢で運転しています。もしものために武装もしてありますが、小銃なんかは持っていません。拳銃のみです。

トラックから降りていた運転手が戻ってきて、私にあることを伝えます。

「大丈夫でしたので、倉庫に付けます。外からは見えないようにしますのでお待ち下さい」

そう言つて動きだすトラック。

今は厚木飛行場に隣接する廃工場に居ます。この辺には軍事施設ということもあり、ゴロツキはいないみたいです。最近使われなくなつたものらしいので勝手に使つても大丈夫でしょう。一応、フェイクのために解体業者が来ることになってますから。

私たちが作戦開始するまでに、状態調査などをする手はずになっています。もちろん、これもフェイク。大本営から派遣される、偽装した兵が行います。

そうこうしていると、荷台を屋内に入れたみたいで、空気が変わります。

少し油の臭いが臭ってきました。運転手が降り、荷台を下ろすと、私たちは工場の中へと飛び降ります。

「確認後、私に報告して下さい」

そうは言つても、見れば数えられる人数です。私が自分で数え、その後の報告と照らし合わせるだけです。

「では、私は戻ります」

「ええ。ありがとうございます」

「武運を」

そう言つて敬礼した運転手は、トラックに乗り込んでそのまま立ち去って行きます。

残されたのは私と『血獠犬』、作戦艦隊に編成された艦娘だけです。

「シャッターを閉めて、場所を取ります。物資は隅に固めて下さい」

指示を出し、行動に移します。既に作戦は開始しているんですか

ら。

――

――

――

廃工場の中は割りと温かく、寝床なども男女で分ける等が出来るほど状態も良かったです。

私は『血獠犬』所属の女性隊員数名と作戦艦隊の艦娘たちで集まって、結構大きな寝床を用意しています。

定時報告などは男性の寝床に集合し、情報交換や横須賀鎮守府からの連絡はそこで受け取りをしていました。それ以外はずっと、見つからないように高台に登って確認したり、陽が落ちている時には外へ出ている程度の実物を確認したりして過ごします。

そして今、新たな動きを始めようとしていました。

「じゃあ、行ってくるね」

「はい。隠れられそうな場所に身を隠して下さいね」

「分かってる。作戦があつて物資が所狭しとあるんだから、どうにかなるでしょ」

定期慰安会の当日の未明。午前3時前。私たちは作戦のため、先行する小型艦の艦娘たちを見送っていました。

「……艦装を身に纏った状態での潜入と潜伏。全部が初めてだけど、必ず成功してみせるからさ！　じゃあ、行ってきます」

川内さんら7人の艦娘たちは、そう言つて艦装を身に纏った状態で廃工場から出ていきます。向かうのは厚木飛行場の海兵が使用している区画です。

「……榛名さん。川内さんとの交信状況は？」

「良好です。周辺の警備もやはり目論見通り薄いようですね。どうやら準備に手間取り、最低限度の歩哨しか出していないようです」

「そうですか。引き続き、定時連絡の報告をお願いします」

「了解しました」

私たちもそろそろ準備を始めましょうか。

見送つたらそのまま、男性の寝床へ集合。横須賀鎮守府からの情報

で、作戦に変更が生じたので意思疎通を図る必要がありました。

「さて、川内さんたちには後で連絡しますが、作戦変更を伝えます」

作戦に参加している人たちを確認した後、地図を囲むように座った私たちは話を始めました。

横須賀鎮守府からの情報というのは、出て来るまでに話が付かなかった空軍との協力です。一応、大筋の作戦の脇に色々と小物がある訳ですけど、その中の一つに『作戦艦隊が包囲網を敷く際、艀装を出すか出さないか』というものがありました。

これは空軍に滑走路を壊してしまうことを認めてもらう必要がありました。回答を保留にされていたんです。それがようやく、回答が返って来たということです。

回答は『許可する』です。つまり、滑走路を壊してしまっても構わない、ということになりますね。

空軍厚木飛行場所属の部隊は、横須賀鎮守府を好意的に思っているみたいなので、そういうことも出来るのでしょうか。

ということで、展開する場所を決定するため、地図を囲んでいるのです。

「空軍より艀装展開許可が降りましたので、想定していたものと変更させていただきます」

地図の上に石を用意しました。個数は16個。作戦艦隊で来ている艦娘と同じ数です。

「会場を取り囲むように三面包囲を敷き、空砲による威嚇射撃をする予定ではありますが、いかがですか？」

一応、現場指揮官が私ということになっていますが、それでも全員の意見を統一する必要があります。全員の意思を尊重し、全員が納得する手を使うつもりでいますから。

皆さんに返答をさせるような言葉を使いましたからね。霧島さんが手を挙げました。

「霧島さん」

「はい。時刻を鑑みて、周辺の住民に迷惑を掛けるかと思われます」

定期慰安会の開始時刻は午後7時。確かに、帰宅してきていて夕食

などを取っている時刻ではありませんね。

「ですので私は空砲ではなく、探照灯照射を提案します。私たちと『血獾犬』の皆さんの視界を確保すると同時に、作戦艦隊の存在を的確に伝えられるかと思えます」

「……皆さん、どうですか？」

全員の顔を見ます。どうやら意見はないみたいです。

「私の空砲を撃つというのを取り消し、探照灯を使用するとします」

まだ話すことはありません。

「投降を促す方法も皆さんに訊いておきたいと思います。予定では慰安会で使用するプロジェクターで投降を促すつもりではありますが、他にも手を打っておく必要があると私は考えます。ですので、意見をお願いします」

そういうと、『血獾犬』から一人、手が挙がりました。

「はい、どうぞ」

「定番ではありますが、拡声器を使用してはどうでしょうか。確か、艦装に拡声器が装備されていましたよね？」

『血獾犬』の隊員は、霧島と榛名の顔を見ました。一応、作戦艦隊の指揮艦は2人になっていきますからね。

「はい。確かに付いています」

「それを使用し我々の所属と目的を言うことで、無駄な発砲を避けられるかと」

それにかけて、『周辺住民には定期慰安会が行われることは知らせてありますから、そういった行為は事前に知らせてありますので、迷惑行為にはならないかと』と言いました。

「皆さんはどうでしょうか？」

誰も意見する人はいませんでした。

「では、探照灯と拡声器を使うこととします。先行した川内さんたちにも情報をリークして下さい」

全員が行動を始めます。そして、私は立ち上がりました。

「そろそろ私たちも行きましょう」

「はい」

私と南風さんは定期慰安会の司会役として先に正面から厚木飛行場に入ることになっていきます。

私と南風さんが選ばれたのには、明確とした理由がありました。まずは私ですが、横須賀鎮守府の人以外には誰だから分らないからです。せいぜい、何処かで雇ってきた人間だと思われるように仕向けるつもりではありません。

南風さんですが、彼女は出自からしても海兵に顔を知られているということはありません。それに言わなければ軍人であることも分からないでしょう。

そういった点を考慮しての人選でした。

「では皆さん。武運を」

静かに敬礼をし、私たちは荷物を纏めて廃工場を出ていきました。もちろん、出ていった時の格好は民間人です。BDUは脱いで来ました。

第51話 厚木飛行場制圧作戦②

定期慰安会の会場入りをしたのは、廃工場を出てから遠回りをして20分後くらいです。

正門から堂々と門兵の横を通り過ぎ、海兵の指揮官が詰めているところまで通されました。

先ほどは分かれて行ったように見せかけましたが、実は違います。『血獵犬』も私たちと同じタイミングで飛行場に入っていました。手口は私たちと共に来た出演者が乗っていることになっているマイクロバスです。もちろん窓には全てカーテンが掛かっており、中は覗けないようになっています。

普通ならば、この状態であることに疑いを持つべきではありませんが、門兵はこのことを疑うことはしませんでした。

理由としては、誰が出るのかは直前まで極秘であること。それは保安上調べる必要があるものであったとしても、楽しみが減ってしまうことを防ぐためとされています。このことは横須賀鎮守府が出る前に、金剛さんが裏を取ったと言っていました。

そわそわとしている海兵たちを尻目に、私たちは与えられている待機室へと案内されます。私たちというのは私と南風さんのことです。マイクロバスの方のは、中での待機で問題ないということをお伝えおき、後で直接会場に言ってもらうことを伝えておきました。ですので、海兵側が想定していたよりも少ない人数の入った、楽屋みたいなところで私は時計を見えています。

『開始から5分は私と南風さんのフリートークです。ここで他愛もない話をしつつ、途中で他で勤務をしているであろう海兵に呼びかけを行います。良いですか?』

『はい』

このやり取りは盗聴されていることを鑑みて、携帯電話のメッセージでやっています。

流石にこれを傍受するだけの設備を、一個師団ばかりが持っている

とは考えられないからです。

『話の内容はどうされますか?』

『私が話の主導権を持ちます。南風さんはあくまでアシスタントですから、相槌を打つみたいをお願いします』

『分かりました』

そういう会話だけをメッセージで行い、他は楽屋をキョロキョロしてみたりだとか、コーヒーを飲んで過ごします。

緊張を忘れてしまってますので、少し手が震えてしまっていますが仕方ないです。

南風さんもカタカタとコーヒーカップを揺らしていますからね。

「失礼します」

ノックを4回した音がし、兵士が1人入ってきました。

「そろそろ時間ですので、舞台袖の方へお願いします」

「はい」

いよいよ作戦の時間です。

――

――

――

「日本皇国海軍厚木飛行場所属 第3海兵師団の皆さん! 私は司会、大本営海軍部広報課の城田です!」

「同じく、司会補佐の北条です」

ここで偽名を使います。一応、書類の方ではその名前が書かれていますからね。金剛さんが偽名まで用意してくれました。

城田が私で北条が南風さんです。

「いよっ!! 待ってたぜー!!」

「ひゃー!! キタキタア!!」

男女比、ざつと見7:3くらいの海兵たちが、地べたに座り込んで食べ物やビール片手に盛り上がっています。まだ始まったばかりだと言うのに。

「今回はお待ちかねの定期慰安会という訳ですが、北条さん。海兵さんのところはいつも用意が良くていいですよねえ」

「そうですね。定期慰安会だというのに警備は怠らず、歩哨はちゃんといました。それなのにこの準備の綺麗さ。素晴らしいです」

「舞台の設置、皆さんの整列、綺麗ですねえ。それに皆さん1人1人が何かしら口に入れる物を持っていますね。あ、そこのお兄さん。私にも焼きそば下さい」

こんな風に冗談を言いながらフリートークを始めます。

「城田さん城田さん。一応コレ、仕事ですよ」

「あははは、そうでした。……という訳で話を戻しましょう。近頃は色々とお忙しい軍ですので、こうやって定期慰安会も回転率が上がっている訳ですが皆さんは大丈夫でしょうか？ お体などなど。ちよつと聞いてみましょう。……そこのお姉さん」

私は舞台から降り、近くに座っているお姉さんに声を掛けます。お姉さんと云いますが、年は私よりも3つか4つ年上って感じですね。同い年と言われても、あまり違和感がないような気がします。

「身体の方は大丈夫ですか？」

「ええ大丈夫よ！ さつきも5.56mmの弾薬箱を運んでたけど全然平気！」

「いやあ、戦闘員の方は違いますね!! 私どもは軍属ではありませんが戦闘員ではありませんので。あ、私、力強い人好きです！ 彼氏募集中！」

こうやって言っていくのも結構良いですね。男性陣は大盛り上がりです。

これでは女性陣も盛り上がりませんので、女性陣の方も盛り上げてもらいます。

「城田さんちよつと待って下さい。ええと……知り合いから頼まれていることがありますので、私的ではありますが少し時間を拝借」

咳払いをした後、南風さんは話し始めます。

「私どもはこういった仕事をしていますので、各地で友人が出来たりします。その中で1人。彼女募集中の方が」

そう言っつて南風さんは写真をペロリと1枚、胸ポケットから出しました。

「エリート士官なのですが、女難だそうです。適当なところで彼女募集中と言って欲しいと頼まれましたので、興味がある方は海軍第一憲兵師団の晴丘まで」

「おおおおおおお!! エリート!! 憲兵だけど……」

「玉の輿イ!! 憲兵だけど……」

憲兵って何処の世界でも嫌われているんですね。

良い人多いと思うんですが。

「という訳で、最初の方は本題からかなりズレましたが、早速定期慰安会の方に移りたいと思います」

『おー』と喝采が起こり、私たちはそれが収まってから話し始めました。

定期慰安会最初のイベントを確認しようと、手元の資料を見ました。そうすると、もうそこには作戦開始を促す言葉が書かれています。

『スライド表示』

そう書かれていたんです。時間を確認すると、もう5分経っています。

どうやらフリートークだけでちゃんと5分は潰せたみたいですね。

「その前に、今回のお品書きのように今後の予定を前に映します」

南風さんは舞台袖にあるPCの操作に向かい、私はその場に残りました。

すぐにスクリーンにスライドが映され、私のタイミングで南風さんがスライドを進めてくれます。

「この定期慰安会は午後7時から11時までを予定しています。それまでに、この場にお呼びしたゲストを迎えて、皆さんに楽しんでもらいます」

切り替わり、タイムスケジュールが出てきます。

一通り説明を終えて、切り替わったスライドが最後です。ここから動きが変わります。

舞台袖に居た南風さんは瞬時に着替えBDUを着込み、完全武装になっています。小銃の薬室に弾丸を装填し、安全装置を確認している

のが見えました。

一方で会場はざわめいています。いきなりスクリーンに映し出された言葉に、全員が困惑しているんです。

『投降せよ』つて……」

「城田さん。スライド、誤字ありますけど大丈夫ですか？」

そんな声が聞こえてきますが、既に私の中でのスイッチは切り替わっています。舞台袖から短機関銃が投げられ、私はそれを受け取り、弾倉を差し込みます。

短機関銃を投げたのは南風さん。護身用にと投げたものですけど、一応南風さんは護衛なんですよ。

そして南風さんは舞台に再び姿を表します。

中央で立ち止まり、安全装置を解除。銃口を上に向けて引き金を引きました。

連続した炸裂音と共に、地面に甲高い音が転がります。

「海兵第3師団の将官に忠告する。我々が完全に包囲している。無闇な抵抗は避け、大人しく武装解除及び投降せよ。もし抵抗するならば」

視界の端、海兵の1人が拳銃を抜いていました。

「き、貴様は横須賀のツ?!」

「射殺します」

とてつもないスピードで小銃を構えた南風さんは、拳銃を抜いた兵士に銃口を向け引き金を引いていました。

弾丸が頭部に命中。後頭部から大量の血が、弾丸の起こした物理エネルギーによって後ろに弾き飛びます。脳みそも混じっているようです。

そのまま撃たれた海兵は絶命してしまいました。

私の目の前で人が死にました。仕方のないことではありますが、見ていて気持ちの良いものではないです。むしろ、どうして南風さんがためらいなく引き金を引けたのかが疑問です。

「抵抗をしなければ彼のように、地面に脳みそをぶち撒ける必要は無くなる」

強い言い方をして、南風さんは会場に居る海兵全員に銃口を向けました。

突然のことで理解が追いついていない海兵は混乱しているものの、冷静な海兵はとても従順でした。両手を挙げています。

すぐに状況は動き出します。

地響きが鳴り、私たちがいる一帯が明るくなりました。作戦艦隊が集結し、探照灯投射を始めたんです。これには海兵もかなり驚き、そしてこれまで銃を持った女1人しかいなかった状況を舐めていた反動で恐怖します。

そこにいるのは艦娘ですからね。海にいるはずの艦娘がここに居る。そして、状況を考えれば、馬鹿じゃなければ分かるはずです。

ここに居るのは全員が横須賀鎮守府の人間であり、艦娘は横須賀鎮守府の艦娘だということに。

『私は日本皇国海軍 横須賀鎮守府艦隊司令部所属の戦艦 榛名です。日本皇国海軍厚木飛行場第3海兵師団の皆さんは、即刻武装放棄及び指揮官は指揮権の凍結を行い、速やかに投降して下さい』

拡声器での警告が言い渡されました。

『投降に応じない場合、私たちは武力行使を行います』

モータ音が聞こえました。砲が旋回しているんでしょう。

12人の艦娘による3面包囲陣。残された1面はこの舞台ですから、追い込まれたようなものです。

『ここにいらつしやらない仲間を当てにすることも出来ません。現在、私兵の特殊部隊が突入し、抵抗兵は全て殺処分されています。貴方たちはもう終わりです』

全員が状況を飲み込めたようです。ざわざわしていた会場が静まりかえりました。

会場に向けて小銃を向けていた南風さんが近寄り、私に耳打ちをします。

「作戦終了です。後は投降兵の移送だけです、空軍の方に援軍要請をします」

「お願いします」

刹那。発砲音が木霊します。

この会場からではありません。別のところからです。すぐさま南風さんは無線機に耳を当て、流れる状況報告を聞き始めます。

銃声は断続的に響き、それも数はいくつもあります。銃撃戦をしているような音のようにも思いました。

「……現在、突入した『血獠犬』と分隊規模の集団とが交戦中。時期に殲滅するようです」

「そうですか」

「地下などでも抵抗があり、突入した4班全てが銃撃戦をしています。それと、移動中にいくつも足音が聞こえたそうなので、注意を」

南風さんは目を細めて、周囲警戒を始めました。

分かっていました。思惑通りに話が進むとは思っていません。ですので、こういう事態も想定していました。ですが、実際に起こってしまうと、どうしようもありませんね。

私は腰に刺していた拳銃を引き抜き、薬室に弾丸を装填して安全装置を掛けます。

指に引き金は掛けず、トリガーガードに指を添えます。

『……ッ!! 武装解除して下さい!!』

拡声器の音が聞こえてくる前、近くで発砲音が鳴りました。

どうやら作戦艦隊の背後、艀装に向けて銃撃があつたみたいです。銃撃を受けたのは駆逐艦のようですが、注意を促すのは榛名さんみたいですね。

それと共に、駆逐艦からの銃撃が開始されます。

元々対空兵装として備わっている機関銃ですから、人体に当たれば吹き飛ぶでしょうね。目的としていたのが違いすぎます。

近くの駆逐艦なども銃撃に参加し、程なくして銃撃音はピタリと止みました。艦娘が負けるなんてことはありません。ですからきつと、攻撃を仕掛けた海兵が全滅したか、投降したかのどちらかでしょうね。

「厚木飛行場の警備隊から連絡です。『非番の部隊を向かわせ、移送作

業を行う』だそうです」

『ありがとうございます』と、返信を」

「はい」

無線でどうやら連絡が入ったみたいですね。厚木飛行場の空軍とも連携が取れて良かったです。

やがて『血獵犬』の突入と掃討は終わり、部隊が会場に集合してきました。

銃撃戦に行く先々で行っていたようで、弾薬もかなり消費したこと。それと、会場以外での投降はなかったようです。全員が攻撃してくるか、逃げたみたいです。逃げたのは射殺したらしいですが。

ともかく、目の前で投降兵の移送作業が始まっています。

そして大本営からも事後処理のために、佐官が派遣されてきています。それが今、目の前で話をしていきます。

「大本営の佐々木です。一連の件の事後処理を担当しています」

「部隊指揮官の南風です」

一応、表立っては南風さんが指揮官ということになっています。私は構成員ということに。

「大本営もここには手こずっていましたので、どうもありがとうございます。こちらへの指示には聞くものの、『海軍本部』の息が掛かっています。解散をさせる訳にはいかなかったんですよね」

今、佐々木さんは何と言ったんでしょうか。

『海軍本部』の息の掛かった組織の全摘を行うのが、私たちも手を貸すことになっているこの案件ですが、ここは非合法なところじゃなかったということなんでしょうか。

佐々木さんの言い方からすると、そういう解釈になってしまいます。す。

「いいえ。では、我々は帰還します」

「ええ。事後処理は我々が引き継ぎますので」

南風さんは気付いていないようですが、そのまま私たちは横須賀鎮守府へ撤退となりました。

第52話

ティータイムは方針会議の後で

横須賀鎮守府帰還後、すぐに会議が執り行われました。

デブリーフィングかと思っていましたでしたが違い、次の作戦に向けた方針の決定です。

今度の会議は艦娘寮の空き部屋を使うのでは無く、警備棟の大会議堂。

参加するのは私と艦種代表の艦娘たち、武下さんくらいです。それだけの参加者なのに、そんな大きな会場を使ったのには、特に理由はありません。

「先日の厚木飛行場制圧作戦の事後処理は大本営が執り行っています。艦装の展開跡の修復と、銃撃戦の残骸以外は特に何かあるということはないです。現状はそうなっています。報告が入ると思われます」

事務棟を通して、赤城さん宛に届いた事後処理に関する内容はそれだけでした。

私たちが撤退する前に、既に作業は始まっていますし、そのくらいの速さで進んでいるのも当然でしょうね。

「次、展開予定の作戦はありません。追って大本営から情報が齎されると思います」

これで一応、今後の方針を決めるのに必要な情報は出切りました。

本題に入ります。

「……さて、今後の方針を決めましょう」

私が切り出します。

「一応、『共同戦線』を張ることはなっていますが、完全に私たちは『駒』です。今回決めることは、私たちは大本営から齎される情報を元に、『駒』として戦うのか。もしくは、『紅くんを助けるため、自分たちの力だけで戦う』のか。……コレ以外を選んで良いんです。大本営が片付けていくのを『支援』するだけだとか、削っていくのではなく頭を吹き飛ばすのか」

全員が言葉を詰まらせます。

一応、今の横須賀鎮守府の方針を決められるのは艦娘たちです。彼女たちの決定に、私や武下さんは従うでしょう。

赤城さんたちは考えます。

刻々と時間が過ぎていき、遂に口が開かれました。

口を開いたのは吹雪さんです。

「頭をぶっ飛ばす……と言いたいところですが、それが分かれば良いんですよね」

「そ、そうですね。頭を潰せは組織としては崩壊します」

その言葉に赤城さんが便乗しました。

「まるで今の私たちみたいだな」

そんなところに、長門さんが一言言いました。確かにその通りですね。紅くんが居なければ、機能不全を起こしてしまっていることは、そういうものです。まあ、普通の組織ならまだ動けるでしょうけど。

『海軍本部』の頭があるのは、どこなんですか？」

吹雪さんが聞いてきました。この流れは、どうやら今後の方針としては『周りを見無視して、頭を落とすに行く』というものみたいです。『ハッキリとは分かっていますませんが、大本営に聞けば分かるかもしれません』

「……訊いてみましょう」

そう言って、突然赤城さんが動き出しました。

大会議堂に備え付けられている固定電話の受話器を取り、プツシュ。

耳に受話器を当てました。私たちは声を聞きに行きます。

「横須賀鎮守府の航空母艦 赤城です。総督でしょうか？」

『ああ。なんだね、赤城』

「お聞きしたいことがあります。私たちは今後の方針で『海軍本部』の頭を落とすに行く……」

そう言いかけたところで、総督が口を挟みました。

『まあ待て。そう焦るな。……今配送中だが、次に頼みたいところがある。その話を聞いてからでも遅くはないだろう』

そう言われて、赤城さんは聴く姿勢を取ります。

『それを話す前に、現状を報告しておこうと思つてな。……現在、君たちが制圧した厚木飛行場の事後処理を行つているだろうか？ その厚木飛行場なんだが、一応、『海軍本部』の最大戦力だったんだ。私たちもアレにはどうも手を焼いておつての、こつちとしても助かつた』

そんな話は初耳です。

『君たちが行動を止めてから、どうしてか行動を再開するこの1年間。私たちは徐々に狭まる海域を眺めていただけじゃない。天色 紅の生存を確認するのと共に、1年間ずっと『海軍本部』の手が付いている組織を消して回つていた。これは前にも話しただろう？』

「そうですね。それで前のお電話で、火消しが終わつてないと」

『ああ。それが厚木飛行場の件だったんだ。それが終わった今、残すは本拠地だけ』

私や電話をしている赤城さんが目を見開きます。

「そこへ攻め込むんですか？」

『ああ。一応、そこへ攻め込む算段は立てているが、横須賀鎮守府からも力を貸して欲しい』

「ええ、分かりました。……それで、何処なんですか？」

『倉橋島だ。瀬戸内の』

私は手書きのメモで武下さんに『倉橋島』について伝えます。

「作戦に関する詳細は後日、送られてくるんですよ？」

『もちろんだ。では切るぞ』

「はい」

これで大まかな方針は決まりました。

『海軍本部』の本拠地である倉橋島を襲撃し、根絶やしにすること。これが最終目標です。それまでにすることの詳細を決める必要が出てきましたね。

受話器を置いた赤城さんが、席に戻ります。私も戻り、武下さんの帰りを待ちます。

武下さんはすぐに戻つてきました。

手に持った資料は数枚だけでしたが、それを机の上に広げます。

「総督から色々と言えられましたので、ここで言っておきます」

赤城さんはそう言つて、武下さんの持つてきた資料を手に取りま

す。「一応、次に私たちが攻撃する場所は聞き出すことが出来ました。それがここ、倉橋島です」

私も近くにあつた資料に目を落とします。

倉橋島。瀬戸内にある島の1つで、呉からかなり近い位置にあります。瀬戸内海に浮かぶ島の1つですね。

「ここは『海軍本部』の本拠地としてあるらしいですので、コレを片付けてしまえば終わり、だと思えます」

私以外のこの場に居る全員が目を見開きました。

そりやそうですね。私だって、まだまだ時間が掛かるものだと思つていましたから。ですけどやはり、紅くんが居なくなつてからずつと大本営は動いていただけあります。

火消しに時間が掛かっていることを赤城さんに指摘されていましたが、無能という訳ではないみたいです。時間は掛かかりつつも、確実に潰していつていた、ということですね。

「話を聞いている限り、今回の作戦はどうなるか分かりません。私たち単独になるのか、共同戦線らしく双方の部隊が入り交じった混合部隊になるのか……」

「ですので、それまではどちらでも対応出来るように準備を進めておきましょう。それと、紅くん帰還に向けた準備も水面下でお願いします」

「「了解」」」

話は纏まりました。一応、今回の会議は終わりになります。

皆さん、各々準備を整えて席を立ち上がります。私も荷物を持つて部屋に戻りましょう。

――

――

――

一度部屋に戻り、色々と言付けなどを済ませた私は、金剛さんの呼

び出して外に出てきていました。

時刻としては午後9時過ぎ。もうあと1時間くらいしたら、艦娘寮は消灯の時間になります。原則消灯ですので、結構点いているところもあるんですけどね。

私が今居る寮から出て、数分歩いたところにあるベンチ。

鎮守府内のあちこちに置いてあるベンチの1つ。ここが集合場所です。金剛さんには事前に、ここに来るように言われていましたからね。

ベンチに座って待つっていると、金剛さんはすぐに来ました。

時間指定もそこまで細かく決めていませんでしたので、そこまで慌ててきた様子もありません。

「お呼び立てして申し訳ないデース」

「いいえ」

そう言いながら、金剛さんは私の隣に腰を下ろしました。

そして持ってきていた手提げカバンから、不意に魔法瓶を取り出します。蓋を開け、カバンからカップを取り出して中身を注ぎ、私にそれを渡してきます。

香りから察するに、紅茶だということは分かりました。

「ここに来る前に淹れてきマシタ。寒いデスカラ」

「ありがとうございます」

カップを受け取り、私は口に紅茶を含みます。

「……それで、どういったご用件なんでしょうか」

紅茶の感想を言おうか迷いました。ですが、言うのを止めます。率直に話を切り出してから、最後に言えば良いでしょうからね。

「薄々感づいていると思います」

金剛さんはそう切り出しました。

「ましろ。……貴女は紅提督と同じで、もう元の世界には……」

「分かっています」

私はその言葉を遮りました。

私だってそのことは考えています。それに、もう決心だつて付いていますからね。

「貴女にもあつちで積み重ねてきたことが……」

「ええ。そのことは気にしないで下さいって言っても、きっと気にするんでしょね」

「……」

金剛さんは答えません。ただ、カップを握ってうつむいたままです。

隣に居ますが、ここからでも表情は全く見えないんです。

「私はここで生きていきますよ。心配しないで下さい。そして、気にしてしまうのなら、私が困っていたら助けて下さい。貴女たちが、紅くんにしてきたように」

私はそう言ってカップの紅茶を飲み干します。

「この話はお終いです!! 私は金剛さんとはもつと別の話がしたいですよー!」

「……ハイ」

まだ顔を俯かせたままです。どういう心境なのかは、なんとなくですが分かりません。

ですので、無理やり話を反らします。痕に残る話ではありませんが、もうそんなことを考えていても仕方ないんです。

紅くんと同じように、私はこの世界に来てしまっただけです。帰る手段も分からない、そんな状態だからこそ、私はこの世界で精一杯生きていこうと決めたんです。

前々から考えていたことですがね。初めて誰かに対して口にしました。

「これまで色々付き合いましたけど、こういう話をしてみたかったんですよ」

どういふ話だか、私は言わずに話を持っていきます。

「金剛さんって、私の知識だと『提督LOVE』っていうイメージが凄く強いんですけど、実際のところはなんですか？ 紅くんのこと大好きなんですか?」

そう聞くと、金剛さんはハッと顔を上げて私の方を見ます。

その表情は暗く沈んだ表情ではなく、恥ずかしいのか照れているの

か、顔を赤くしている金剛さんでした。

「も、も、もちろんネー！ 朴念仁ではありマスガ、ずっと見ていれば……」

カアアつと金剛さんの顔が真っ赤に変色していきます。

「朴念仁ですよね。ですけど、アレで結構気が効きますし」

「ハイ。……デスカラ、紅提督の艦娘という色眼鏡はありますが、それがなかったとしても私は……」

そう言つて金剛さんは遂に耳まで真っ赤にします。

「良いところが沢山ありマス。一杯、一杯ありマス。硬い性格をしているのが玉に瑕、デスカネ……。抱き付いても、添い寝しても、全くなびきマセン……。少し自分に自信が無くなりそうデシタ」

いきなりぶつちやけましたね、金剛さん。

この様子だと、他にも紅くんにこんな感じの艦娘は一杯居るんでしょうね。元居た世界では全くモテナかったのに、ココに来てこんなにモテていたとは驚きです。

確かに良いところは、長年見てきた私も分かっています。それを金剛さんも理解していますからね。それでいて、私でも知らないような面もあるとは思いませんでした。

「付け入る様で卑怯な手を使いマシタガ、それでも紅提督は……」

付け入るつて、何か心傷でもあつたんでしようか。

そのことはすぐに私も思い出します。きっと、一時期鎮守府内がギスギスした時期の話ですね。色々な艦娘が紅くんのために行動を起こしていたのが裏目に出たという。

「……ギューって抱き締めてあげたい」

片言な言葉ではなく、流暢な言葉でそれだけを言いました。

どうしてそこだけ流暢になったのか、私には分かりませんが、金剛さんの心がとても籠つていたと思います。

「頑張つたつて言つてあげたいデス。もう心配ないよつて優しく言いたいデス」

金剛さんのアホ毛が垂れ下がりました。

「私は、〃 私たち〃 は、紅提督の〃 家族〃 デスカラ……」

第53話 東の間の休息①

東の間の休息です。厚木飛行場から帰ってきた次の日ですが、鎮守府内は結構落ち着いています。雰囲気もそうですし、『柴壁』と艦娘共にとても穏やかに過ごしているように見えます。

作戦決行前に、艦娘たちは以前の状態に戻ったと武下さんは言っていました。

閑散とし、何処を歩いても誰もいないような状況からは一変し、何処を歩いても艦娘の姿があり、楽しそうな笑い声が聞こえてくるようになりました。

そんな状態に陥ったからか、ある問題が生じていたんです。

『血獵犬』なのに、配置が変更になったんですか？」

「はい。肩書は『血獵犬』のままですが、『番犬』の任を任せられました。とは言っても、正門などではありませんけどね」

「確かに……ましろさんに正門を任せるのは、気が引けますね」

今の会話通り、私は無期限有休が終了し、本来の任に戻っていました。とは言っても、『血獵犬』としては働かずに、『番犬』としての任を負うことになってしまいました。

そうなったのに関しては、色々と話があります。

武下さんが赤城さんに、私の無期限有休終了の申告と承認をした時です。

本来の『血獵犬』の任である体外的な情報収集任務を私ができるのか、という議論になったそうです。聞こえは悪いですが、悪い意味ではありません。私の身の上を考慮した話です。

ここ横須賀鎮守府の警備を行っている『柴壁』。その部隊構成員は、基本的に軍隊の教育課程を修了し、一通り満足に訓練を受けている兵士たちだけで構成されています。その中に簡略化した教育課程を2ヶ月半で終わらせています。しかも、正規の訓練ではなく、教育経験がないものばかりの中から、選抜された兵によって教育されています。

つまり、海の向こうにも身内にも敵が多い横須賀鎮守府の体外的な

情報収集任務を行う上で、最も付きまとう偶発的な戦闘に私が耐えられない可能性が高かったんです。つまりはあっけなく死んでしまうのではないか、ということですね。

その議論の結果、『柴壁』の構成員である以上は働く必要があるのと、本人の『働かざるもの食うべからず』という意見を尊重し、比較的にデモ隊が集まらない門の警備を交代で行うことになったという訳です。

「何気に酷いこと言いますね、加賀さん」

「そうかしら？」

前置きはさておき、今は移動中です。私はその警備する門に向かっている最中。偶然同じ方向に向かう加賀さんとばったり会い、一緒に行くことになったんです。

「話を聞いている限りだと、赤城さんと武下さんの判断は適切だと思うのだけれど」

「そうですね……。悪い言い方をしてしまえば、非正規訓練を受けた傭兵ですからねえ、私」

「……失言でした。すみません」

「え？ あ、はい。……それより加賀さん。用事ってなんですか？」
道を歩きながら、そんなことを話します。

私がこの世界に来てからというもの、基本的に話をする艦娘と言ったら赤城さんや金剛さん、鈴谷さんばかりでした。

加賀さんはそれ以外の艦娘の中では、比較的によく話す相手ではありませんね。

「ましてさんの警備する門、こっち方面ですと工廠裏の門ですよ？」「そうですね……」

「私は工廠に用があるんです。正確には工廠に集まっているだろう、赤城航空隊の妖精さんたちにはですが」

どうして赤城航空隊の妖精さんに用事があるんでしょうか。加賀さんも空母の艦娘。自分の航空隊、加賀航空隊を持っているでしょうに。

それなのに、他の航空隊に用事があるとは変な話ですね。

「どういった要件なのか、訊いても良いですか？」

「構いません。……赤城航空隊に近日先行試験配備される予定の流星がどのようなものなのかと、運用方法を訊きに行くんです」

「赤城航空隊に先行試験配備される流星……。ああ、アレですか」

私はその流星のことを知っています。

『海軍本部』との戦いで使用するだろうと、用意をすることになった改造流星です。爆弾倉に人を入れ、上空で降下させるというものですね。

「知っているんですか？」

「はい。アレがどういうものか、どれくらい知っていますか？」

「改造されている、ということしか知りません」

私は本格的な説明を聞く前に、予習のつもりで少しだけ説明をしておくことにしました。

「その流星は爆弾倉に人間を入れて降下させるために改造されたものです。今後、運用する予定があるものです」

「人間を爆弾倉に……。奇っ怪なものですね」

「仕方ないですよ。ここには滑走路も無ければ大きい飛行機もありませんからね」

私の言う大きい飛行機とは輸送機のことです。

「落下傘部隊が必要になる事態が想定されているんですね」

「はい。『柴壁』内で再編成があったのはご存じですか？」

「知っています。『猟犬』が変わったとのこと。『降下猟犬』と『機械化猟犬』でしたっけ？」

「はい」

加賀さんが少し黙ってしまいました。多分、考え事でもしているんだと思います。

「となると、次の作戦には空母機動部隊が出撃することになりそうですね」

『降下猟兵』を投入するかは分かりませんが、可能性としては大いにあります」

「……前回の作戦は金剛さんが大筋を立案したと聞きました。赤城さ

んが作戦立案の指揮を執ってしまうと、どうしてもボロが出てしまいます。他の娘たちも外に出てくるようになりまし、霧島さんに任せてみてはどうでしょう」

「まだ作戦立案にすら入っていませんが……霧島さんですか」

霧島さんのことでしたら、この世界に来てから鈴谷さんと初めて話した時に聞きました。

紅くんと艦隊運用法や作戦立案をしていた、と。

それでしたら、加賀さんからも霧島さんの名前が出てくるのは納得です。

「ましろさんもここが長いですし、話は聞いているでしょう？」

「はい」

作戦立案の場には私と武下さん。場合によっては他の『柴壁』も居ます。そして艦種代表。そこには霧島さんは含まれていませんが、呼んでもいいでしょうね。厚木飛行場の時にはビスマルクさんとフェルトさんも居ましたし。

かれこれ話していると、加賀さんの目的地に到着しました。

工場からは作業音が絶え間なく漏れており、風下に居れば鉄と油の臭いが漂ってきます。

「では、私はこれで」

「はい。また、加賀さん」

「はい」

加賀さんが工場へと入って行ってしまいました。

私はその姿を見送り、工場裏の門へと向かいます。

――

――

――

工場裏の門。通称『第5通用門』には『番犬』の第4中隊 第1・2小隊が警備をしているそうです。ここに来る前、武下さんから聞いています。

私はここに配属になったことが、少しですけど嬉しかったです。この第5通用門の警備に配属されている小隊には、入った当初の訓練を

してもらっていた西川さんと、友だちの沖江さんがいますからね。

他の構成員が仲良くないという訳ではありませんが、特筆してよく話をしたりする相手がいますから安心します。

第5通用門に到着し、私は門の近くにある詰所の扉をノックして開きます。

通達も着ているはずですので、私が到着したことを知らせるのは社交辞令みたいなものでしょうか。

扉を開き、中にいる先輩方に挨拶をします。

「本日付で第5通用門の警備を命じられました、天色 ましろ二等兵です。よろしく願います」

詰所の中はかなり広く、20人近くが椅子に座ってそれぞれ思い思いに過ごしているように見えました。

「おお!! 話は聞いていましたが、お久しぶりです」

「西川さん!! お久しぶりです!!」

こうして会うのが久々なだけで、夕食の時とかは結構一緒に食べていたりします。

私は持つてきていた小銃の銃床を床に付けます。

空いている椅子に座っても良いんですけど、まあ、下っ端ですし何か言われるまでこのままで居ようと思います。

「あ、ましろさん。腰掛けて楽にしてもらつていいですよ」

「はい」

そう言われたので、私は遠慮なく椅子に座りました。

椅子に座り、小銃を壁に立てかけると、西川さんが話しかけてきました。

「話は聞きましたよ。……まあ、その武下大尉と赤城さんの判断は普通だと思いますよ」

「ええ。私も考えてみましたが、まあ、普通の判断ですよね」

私が『番犬』の任を任されることになった理由のことです。

やはり行き先でもそういう話は通しておくものなんですね。

「……取り敢えず色々と説明することがあります。覚えてください
ね」

「分かりました」

早速、この業務についての話が始まりました。

門を警備する上での必要なことや、休憩の取り方、緊急時の対処方法、備品の置き場所、交代のタイミングや時間配分など。色々な説明が盛り沢山です。

「まずは警備をどうするか、です。警備の際には一個小隊全員約40名を半分に分けて、さらにそれを5チームに分けて行います。配置は門の内に8人2チーム。第5通用門周辺の所定のルートに12人3チームに分かれて巡回を行います」

結構な重警備ですね。まあ施設の重要さを考えれば足りないくらいではあるでしょうけども。

「警備中の全員は小銃を携帯。平時は安全装置を掛けた、弾倉を刺した状態です。緊急時には薬室に弾薬を装填して、発砲時のみ安全装置を解除して下さい」

私はそう言われ、自分の小銃をチラツと見ます。

私の小銃には弾倉が刺さっていません。持ち運ぶ際には外して行動するように、訓練中に教わりましたからね。その教官は目の前に居ますが。

「休憩は同じチーム内の人間に伝えた後、できるだけ急いで休憩をして下さい。給水・お手洗いはその休憩を使って下さい」

結構緩いような気もしますね。私がこの世界に来る前に働いていた病院よりも、休憩のニュアンスが違うみたいです。

「緊急時には先程も言った通り、薬室に弾薬を装填した後、チームはそれぞれで判断し行動します。その事象に直接関わっているチームはそれの対応を。それ以外のチームは各々で判断し、行動します」

緊急時の対応は何だか普通ですね。各々で判断が多い気がします。が、まあ、そういうものでしょう。

「この半個小隊で常時・緊急時に警備を行います。それで交代に關してですが、ここには二個小隊が振り分けられていますので、半個小隊で行う警備はそれぞれ6時間ですので、1日4交代制です」

なんとというか、勤務時間が実質6時間つてというのが素晴らしいです

ね。

「まあ、それでも結構な人数がそれ以外でも警備をしていたりするんですけどね」

と、西川さんは付け足しました。まあ、深く言わなくても意味は分かかります。

つまり、半個小隊での決められた警備外でも警備を行っている、ということですよ。

「備品の置き場所ですが、まず何が備品としてあるかです。各通用門には連絡用の装輪装甲車が2両、放水砲が1門、探照灯が2つあります。それぞれは同じ倉庫に保管されています。この他にも個人携帯用の催涙手榴弾や鎮圧用ラバー弾を撃つショットガンなども同じく倉庫に保管されています」

この鎮守府には2桁までは行かないものの、結構な数の通用門があります。そしてそこに正門があるんです。

そう言った装備は結構揃えてあるんでしょう。

「交代のタイミングですが、引き継ぎのチームと合流してから一度この詰所に戻ってきた後、自由になります。その時間は何をしていただけでも結構です。自ら率先したその時間も警備を行うか、艦娘たちと遊んできても良いです。夜はもちろん寝て欲しいですけどね」

夜には夜に割り当てられたところが警備をするんでしょう。

それにしても、私には気になったことがありました。『柴壁』は門の内側しか警備していないんです。門の外側に居る人たちは何なんでしょうか。

「訊いてもよろしいでしょうか？」

「はい」

私はそのことを訊いてみることにします。

「門の外の人たちは一体何処の誰なんですか？ 私たちが警備するのは内側だけですよね？」

そう聞くと、西川さんは少し間を開けて話を再開します。

「彼らは私たちが軍を辞めてから派遣された、新しい門兵ですよ。ですけど海軍も人員不足ですから、本来ならばこういう配置にならない

憲兵が来ています」

まあ、大筋分かりました。『柴壁』とはほとんど同じようなところから派遣されている人間が警備をしている、ということですが。

それも外だけみたいですが。

「勤務内容は私らが門兵として居た時よりも酷いみたいですよ。人数は少ないので2交代制らしいですし、人数もそこまで居ないですからね」

そう言っつて西川さんは話を変えました。

もう説明は終わりみたいですな。

「分からないことがあれば、同じチームの兵に訊いて下さい。次の交代でましろさんにも出てもらいますので、よろしくお願いしますね」
「はい」

こうして私の『番犬』としての任務が始まったのです。『血獵犬』所屬ですけども。

まだ交代まで時間があるということでしたので、私はそのまま腰を掛けて目を閉じました。

次の作戦が最期。これを終わらせれば紅くんに逢えるんです。ですが、攻略目標が『海軍本部』の司令部的なところです。厚木飛行場のようには上手く行かないでしょうね。

そんなことを考えながら、次の時間までを過ごしました。

第54話 束の間の休息②

第5通用門の警備は暇です。

巡回をしているだけならまだマシでしょう。ですが、門の前に立っているだけというのはとても辛いものです。

第5通用門というよりも他の門全てに言えることですが、どういう用途でここに存在しているのか知りませんでした。こうして警備をしてみること、何に使われているのかが分かります。

第5通用門は工廠裏にあると、鎮守府内では言われています。ですが実際は違いました。

工廠裏には滑走路跡地があり、その一角に私たち『柴壁』の寮があります。それ以外には何も立っていません。

つまり滑走路跡の隅に、この第5通用門がポツンとあるんです。

「……なーんにも無いですねえ」

私は不意にそんなことを呟きます。

仕方ないです。門の向こう側を見れば建物は沢山立っています。その反対側、内側を見てしまうと出る言葉もありません。ただっ広い滑走路跡が眼下にあるだけですからね。

ただ、それだけではないみたいです。

この滑走路跡は工廠が隣接しているということで、航空隊に補充する艦載機がとつともなく大きな建物の中に収められています。話によれば、中にはエレベーターがあり、地下にも艦載機が保存されているだとか。

知らなかったです。

ただ門兵が『柴壁』になつてからは、一度もその扉が開くことはなかったみたいですけどね。そもそも出撃もしていませんので、艦載機を補充する必要がないですからね。

ただ、滑走路が使われていた時は、訓練や任務などでしょっちゅう飛行機が飛んでいたらしいですが、なんでも旅客機かそれ以上に大きな飛行機が何百機と飛んでいたこともあったらしいですからね。

それが何しに飛んでいったのか、なんとなく検討が付きませんが……。

「前は色んな艦載機や陸上機が飛んでいたり、外に出して整備したりしているのを見かけたんだがなあ」

「そうなんですか?」

無駄口をしていることを注意もせず、私より2mくらい離れたところに立っている髭面の大男が言います。身長200cmはないでしょうけど、それに近いくらいのおおきさです。持っている小銃が小さく見えますからね。

この髭面の大男は杉原さん。『番犬』第2小隊 A分隊です。

おおらかな性格でお酒と肉が大好き。見かけとその性格や好きなものから『ヴァイキング』やら『大熊』やら言われています。彼は全然気にしていないようです。嫌がっている素振りも見せません。人によっては『おっちゃん』やら『おっさん』やら様々。面倒見が良く、『第4中隊の親父』なんてのも言われているみたいです。

「そうだぞ。紅の坊主が滑走路の使用禁止令を出すまでは、そりやもう凄かった。大戦期の戦闘機や爆撃機が空を埋め尽くして飛んでいる様は、休憩中の俺の酒のお供だったぞ」

杉原さんは紅くんのことを『紅の坊主』と呼んでいます。本来ならば不敬罪とか言って良くして禁固刑らしいですが、ここではそれが無いみたいです。

何でも紅くんが良いと言ったからだとか。敬語も要らない、と言っていたらしいですからね。

そうは云いますが、殆どの『柴壁』は紅くんのことは『紅提督』と呼びますし敬語を使うようですけどね。

「半世紀以上も前のものですかからね」

ちなみに杉原さんも戦闘機とか爆撃機とか、そういうのが好きみたいです。見るのが、とだけ言っていました。

「早く帰ってきて欲しいものだ。紅の坊主には」

空を見上げ、杉原さんはそう言いました。

「暁ちゃんたちが落ち着かねえし。……何より」

ミチミチと杉原さんの握りこぶしから音が聞こえてきます。

小銃を携えていない方の左手から、その音が聞こえてきました。

「覚悟はしていたが、日本皇国軍と楯突くのは嫌だ」

私は何とも返答出来ませんでした。それを強いているのは他でも無い、私ですからね。

ですが、それは必要なことなんです。大本営が1年近くも掛かった掃討です。いつまで続くかなんて分からなかったんですから。

「気付けば梅雨も開けそうだな」

杉原さんは呟きます。

私は今まで忘れていたことを思い出しました。

この世界に来て、紅くんを探すようになってからは毎日必死に過ごしてきました。そんな半ば、私は季節感覚を忘れていたんです。今の一言で思い出すことが出来ました。

私もこの世界に来て5ヶ月か半年が経っています。

本当に今更気付きましたが、もう7月も近いんですね。

――――

――

――

私の所属するチームは私含めて5人居ます。

杉浦さんと沖江さんの他にも深谷さんと神崎さんが居ます。深谷さんは私と歳も近い男の人で、かなりフランクな性格をしています。気のいい男友達みたいな感じですね。神崎さんは壮年の男の人で、無口です。いつもムスツとしています。とても周りのことを見ている人ですね。

ちなみに、沖江さん以外は既婚者です。

そんなチームに入った私ですが、任務2日目にして変なことになっています。

今日の警備の時間、私たちの担当は巡回でした。ルートは凄いです。

横須賀鎮守府を一周するルートです。これを他の通用門で、私たちと同じ巡回担当の『番犬』が何十人、何百人と巡回するらしいです。

らね。

ちなみに一周するのに5時間程掛かるそうです。沖江さんがそんなことを呟きながら、私の隣を歩いていきます。

巡回はチーム全員が1つになって回るものですので、巡回している『柴壁』1チーム4人は居ることになりますね。

沖江さんは小銃を肩に掛けた状態で、杉浦さんたちの後ろを歩きながら私に色々と話してくれます。

いつも話すとしたら寮の食堂で食事をしている時か、このチームが深夜の巡回じやない時に部屋で話すくらいでしたからね。

「ましろさん、ましろさん」

「何ですか？」

これまでのチームに女性隊員は居ませんでしたので、まあ、少し気分が上がるのも無理はないでしょう。昨日の門の前に立っている時は少し離れたところでしたからね。

「これ終わったら、一緒に行きたいところがあるんですけど」

「ええ、何処ですか？」

「外のスーパーマーケットです」

買い物でしょうか。私たちの今日の警備時間は午前7時から午後1時までです。寮の食堂で昼食を食べ損ねるような時間でもありませんし、何か欲しいものでもあるんでしょうか。

「良いですけど、何をしに？」

「少し、お菓子を買い溜めしようかと……」

見てくれは軍人ですけど、やはり女の人ですね。お菓子を買い溜めするだなんて。

この件に関しては、買い物に誘われたのは初めてですけど関わったことがあります。

寮でのことです。寮は基本的に『血獵犬』『獵犬』『番犬』で、1つの部屋に何人入るかが決まっています。1人部屋の『血獵犬』から人数は増えてきます。あと階級でも1人部屋かそうでないかも決まっています。下士官までは4人。下士官から尉官までの間、『番犬』と『獵犬』なら2人。『血獵犬』は巡田さんを除いた全員が佐官ですので、

全員に1人部屋が与えられています。ちなみに武下さんは、皆さんから『武下大尉』と呼ばれています。実は中佐だそう。階級章を制服に付けるのを長らく忘れていたらしいです。

沖江さんは『番犬』で下士官です。『柴壁』になる前の軍での階級を引き継いでいますので、現在は伍長ですね。ですので、4人部屋で生活している、ということになります。

どうしてそれで私が沖江さんのお菓子に関する話で、関わりがあったのか……。それは、私が寝泊まりしている部屋にあります。

ここ『柴壁』に構成されている女性隊員で4人部屋に該当する人数は、私が入ってくるまでで丁度だったんです。全員が4人の部屋に収まっていたんです。

そこに現れた私のために、慌てて用意したのが2人部屋。下士官から尉官までの間の女性隊員は少ないです。ですので、余っていた2人部屋に私が入られた、ということになりますね。

それで、寮の部屋それぞれには冷蔵庫が置かれています。沖江さんも前はそこにお菓子などを置いていたそうですが、やはり4人で使っているものです。あまり数をおけないみたいなんです。その話を聞いた私は、『なら私の部屋の冷蔵庫を使って下さい。私だけでは一角しか使っていませんので』ということから、沖江さんが度々買い溜めるお菓子を保管することになりました。

話が長くなりました。

「いやあ、すみません」

「良いですよ。よくしてもらっていますし」

そう言いつつ、私は別の方を向きます。

今歩いているところは、第5通用門のちょうど反対側です。第9通用門の辺りになります。

この辺には立っている建物はなく、見えるものと言えば精々対空兵装くらいでしょうか。それも元々横須賀鎮守府にあるものではないか。後々に用意したとのこと。保守点検も毎日あるみたいですが、私たちの担当ではないようです。

立ち並ぶ大型車両と空を見上げる発射管。使われたことはあるみ

たいですが、1度だけだったらしいですね。

「あれ？　この話は聞いてないですか？」

「どうしてあるものなのかくらいは聞いています」

　沖江さんは説明を始めてくれました。

「元々この横須賀鎮守府は非武装だったんです」

　それは初耳ですね。

「紅提督が指揮を執るようになってから少し後、突然運び込まれてきたんですよね。大量に。あのグラウンドが埋まるくらいありました」
あのグラウンドというと、本部棟の目の前にあるグラウンドのことです。

400mのトラックがすっぽりと入る、とても大きなグラウンドです。それを埋め尽くすほどの兵器が運び込まれてきたなんて、私は知りませんでした。

それよりも、ここ以外にもこういうものは設置されているってことでしょかね。沖江さんの言い方だと、ここに置いてあるだけではグラウンドを埋めることが出来ません。

「岸にある要塞砲も運び込まれてきたものの1つですよ。……まあ、ここにある他の地对艦・対空装備なんて、空襲の時に尽く破壊されてしまいましたから、残っているのはこの5基と大量に運び込まれてきた弾頭だけですよ」

　話の割には数はないみたいですね。

「それに、あのグラウンドを埋め尽くす程の量があったといっても、それは発射機や本体と一緒に運ばれてきた弾頭だったりしましたから。正直、そっちの方が多かったですよ」

　沖江さんは『保管場所に運ぶのも設置作業も苦労しましたよ』と後で続けました。

　話に具体的な数字は出てきませんでしたが、ほとんどということとは残っていないものもあるということでしょうね。

「この地对空ミサイル発射機。本当なら、これだけあれば凄いですよ。ですけどほとんど役に立たなかった……」

「空襲の……」

「はい。地对艦ミサイルはまだ役に立ちましたよ。ですけどあれは空に向かつて鉄を飛ばすだけでした。よっぽと、C I W Sの方が役に立ちましたよ」

C I W Sが何か分かりませんが、一緒に運ばれてきたものなんでしょうね。

気付いたら第9通用門前に到着しており、さっきまで見えていた地对空ミサイル発射管は見えなくなっていました。

「次の行き先は要塞砲群と埠頭、入渠場ですね」

「もう慣れましたけど、あそこの要塞砲とか艦娘たちの艀装は圧巻ですよ!! 大型艦は毎日停泊しているので日替わりで誰のが置いてあるのか、結構楽しみだったりします」

チームは方向転換し、巡回路を往きます。

ある程度、巡回経路は聞いていますので覚えていますが、やはり初見は楽しいものです。

とは言っても、ここに来た時に案内はされていますけどね。もうそれも結構前のことですけど。

第55話 束の間の休息③

第9通用門の横を通り過ぎ、十数分歩くと海沿いに出てきます。

岸壁がかなり長い距離続いています。この海岸線の1/3は要塞砲で埋め尽くされています。

巨大な砲塔。太くて長い砲身。それ全てをひっくり返して、私が何十人何百人という大きさの要塞砲は、ずっと海の方に砲門を向けています。

「これを見たのは初めてですか？」

「いいえ。こつちに来たばかりの頃、案内されて一度見ています」

「そうですか。……大きいですよ。何でも長門さんたちが積んでいる41cm連装砲とほぼ同じものらしいですよ」

私の目の前をその41cm連装砲が通り過ぎていきます。超巨大なそのことは、私も艦これをやっていたのでそれなりには知っているつもりです。

フィット砲なんて言葉もありましたが、私は知りません。取り敢えず開発で手に入る一番強い砲だからと云って、戦艦の艦娘には片っ端から装備させていた記憶があります。

「これは破壊されても代わりが作れるそうですから、運び込まれた数16基全てが今も動いていますよ。とは言え、最初はバンカーに収まっていたものですけど、今では長門さんの主砲と同じ状態になってしまっていますけどね」

苦笑いしながら、沖江さんはそんなことを言います。

昔は要塞砲の周りをコンクリートで囲っていたなんて、想像も付きません。今は41cm連装砲そのものですからね。

そんな要塞砲群の横を歩いていくと埠頭が見えてきます。

要塞砲とは比べ物にならない程、巨大なその構造物は建物なのではないかと錯覚する程に大きいです。

そんな艦装を見て感動をしてはいるんですけど、1つ問題があります。艦娘なら見れば誰だか分かりますが、艦装を見ても誰のものなの

かが全然分かりません。

「凄いですね……」

「いつ見ても凄いです。……さつきは日替わりで変わっていていると言いましたが、この前の作戦までは変わってなかったんですよ」

沖江さんはそう呟きます。

確か、ここに停泊している艦装はだいたいがその日や前日に戦闘を行った艦娘の艦装があるということになりますね。毎日出撃していた頃からすると、毎日変わっていたことになりますもんね。

そんな話をしていると、深谷さんが話に入ってきました。

「ここにあるのは厚木飛行場に行った艦娘の艦装ですよ」

「まあ、そういうことになりますよね。となると、あの似た形をしている大きい艦装は榛名さんと霧島さんのですか」

「そういうことになりますね。……って言いますが、どっちが霧島さんので榛名さんのなのか、全然分かりませんね。姉妹艦ですからね」

そう言って、深谷さんは笑います。確かに見てもどういふところに違いがあるのかなんて、全然分かりませんね。姉妹艦ですからね。

他にも並ぶ艦装に目が行き、あれやこれやと沖江さんと深谷さんに教えて貰いながら埠頭を通過します。

艦装を見るのは面白いです。普通、女の人はこういうものに興味を示さないものですけどね。私は何というか、軍艦とかそういう視点で見ている訳では無いんですよ。

あの艦装1つ1つに艦娘が振り分けられていて、その人がその艦装と同じ名前をしていて、その人が笑っていたり、御飯を食べていたり、遊んでいたりするんです。

とてつもなく不思議な感じになります。

そんな風にして埠頭を通り過ぎようとしていた時、神崎さんと杉原さんが会話の輪に入ってきました。

「嬢ちゃん。榛名ちゃんの艦装の艦首1・2番砲がダズル迷彩に塗り替えられているから、簡単に見分けが付くと思うぞ」

私はバツと振り返り、それを確認します。

さつきまでは艦尾しか見えていませんでしたが、今では全体が見え

ます。それに丁度良く、金剛型が並んでいるので良く分かります。確かに艦首の砲塔の色が白黒になっていて艦装がありますね。

「アレが榛名さんの艦装なんですか」

「……そう。だが、他の金剛型の艦装の見分けは難しい」

あ、神崎さんが口を開きました。

これまでに自己紹介以外で口を開いているところは見たことありませんでしたからね。それに『番犬』の仕事をしようになるまでは、一言も話したことがありませんでした。今回の『番犬』の仕事をしようになつて、初めて会った人の1人です。

「そうなんですか?」

「ああ」

また口を閉じてしまいましたね。

私たちはそのまま入渠場へと近づいていきました。

入渠場。艦娘の艦装が損傷した際に、修理のために入れられるところですね。私のイメージだとお風呂に艦娘が使っているようなものしか思いつきませんが、艦娘寮には大浴場があつたはずです。なら、ここは本当に船を修理するところなんでしょうか。

確かに、見てくれは鎮守府の建物の中でもかなり大きいものですね。工廠よりかは大きくないと思いますが。

「毎日ずっと動いていた入渠場も、ずっとコレですよ。昨日は少し動いていたみたいですけどね」

厚木飛行場制圧中、会場に居た海兵以外からの攻撃はそれなりにありましたからね。

「海域奪回作戦が発動される度に、私たちや酒保の人たちもここで帰りを待ったものです」

感慨深そうに沖江さんはそう言いますが、それって良いことだったんでしょうかね。

「まあ、その後お叱りを受けるんですけどね!」

やっぱり駄目だったみたいです。

この後は入渠場を通り過ぎ、特に何がある訳でもないところを歩きます。

ただの海岸線を通り、滑走路跡が見えてきます。巡回はまだまど回るところがありますから、沖江さんたちと話しつつ時には静かにしながらも巡回を完遂しました。

――

――

――

私は寮の前で待っています。

先程巡回も終わり、昼食を食べて、ひとつ風呂浴びた後にここに来ています。

これから何をするのかというと、沖江さんと一緒に鎮守府の外に買い物に行きます。私は付き添いみたいなものですけどね。

冷蔵庫の中も確認してきましたし、良いものがあれば私も何か買おうかと考えています。

「お待たせしましたー」

沖江さんが寮から出てきます。

私はこの世界に来たばかりの時に買った服です。特に理由もなく選んだ服ですが、これまで着る機会がありませんでした。

何度か買い物に行こうかと考えてはいましたが、想像以上に必要なものは少なく、寮内に設置されている売店でも手に入るもので満足していたので、今まで鎮守府の外には出たことが無かったですよね。

沖江さんの私服姿は何度か見たことがあります。

その度に思うことですが、やはりこうやって見ていると軍人には見えませんね。憲兵だなんて以ての外です。

今日はどうやら膝上までの黒いプリーツスカートに白いブラウス。青のカーディガンを羽織っているみたいです。

ヘルメットを被っていませんし、フェイスマスクもありませんので違和感が少しありますね。

そして驚きなのが、足元です。ヒールの低いパンプスを履いています。沖江さんくらいの歳ならば、ヒールの高いものを履いていてもなんらおかしくありません。

「やーて、行きますよー」

そう言つて沖江さんは歩き始めます。

外を出歩く時、一応ではありますが、私たちは拳銃の携帯を義務付けられています。

軍だった時は分かりませんが、このご時世ですので、そういう措置が取られているみたいです。女性は特に携帯しろとのこと。

私も持っていますが、もちろん沖江さんも携帯しているでしょう。何処に隠しているかは分かりませんが。

「そういえばましろさん。拳銃はどこに？」

門を出る前に、沖江さんが訊いてきます。

外出する際には、最低限持つていかなければならないものがあります。

認識票と拳銃です。認識票は門を通る時に必要になります。外の門兵さんと、内の『柴壁』に見せてからでないと入れません。

私は拳銃を取り出します。

私は拳銃をカバンの中に入れてあります。こんな格好（黒のレギンスパンツに灰色のパーカー）をしていますからね。パークのポケットに入れても良かったんですけど、形が出てしまいますので、すぐに分かってしまいます。

「ありますよ。沖江さんは？」

「ここに」

そう言つて沖江さんは、スカートをバサツと上げて拳銃を出しました。

一瞬、どこから出したのか分かりませんでした。すぐに分かりました。

多分、普段使っているホルスターをそのまま足に付けているんです。向きを変えて。

「いやあ、いつもこうやつて携帯していますよ。……つて、そんな目で見ないで下さい」

「……そこに入れるんですね」

「シオルダーホルスターが欲しいんですけどねえ……」

「あつたとしても、何かしら持っているのはバレバレですよ」

そう言いながら、私たちは認識票を見せて外に出ます。

何だか立っていた『柴壁』の人が顔を赤くしていたのは気の所為でしょうか。

――

――

――

第5通用門を出て十数分歩いたところにあるスーパーマーケットに来ました。

スーパーマーケットとは言いましたが、普通のと違い、中に衣類やら家電やらブランドのテナントが入っている大きな施設です。酒保ほどではありませんが。

その中をウインドウショッピングしながら、食料品が売っているコーナーへと入って行きます。

「プリン〜アイス〜シュークリームう〜」

そんな変な歌を歌っている沖江さんですが、私も少しテンションが高くなってきていました。

約半年ぶりの買い物ですし、何より違和感がないんです。戦時下にあるとはいえ、食料物資が不足していない日本皇国ですから、かなり潤沢に食べ物が置いてあるんです。

砂糖や卵、小麦粉を大量に消費するお菓子が山のように積んであるんです。

「私も何か買いましょうかね」

そう呟きながら、私は棚に置かれた商品を見ていきます。

沖江さんもおごにポイポイいれています。いつも袋を大量に持って帰ってくるので分かってはいましたが、買い物かごにこれだけお菓子やスイーツが入っていると違和感があります。

そういうこともあり、何か目立っているような気もしました。

カゴに山のようにお菓子やスイーツを入れている若い女性、鼻歌混じりであれこれと入れているその姿は確かに目立ちます。

私はそこまでポイポイ入れていませんので、そんなに多くはありませんが、沖江さんはどうしても目立ってしまいます。

「あ、ちよつと会計に行つてきますね」

どうやらカゴがいっぱいになったのか、会計に行つてしまった沖江さんを尻目に、私も切り上げようかと少しカゴに入れてから会計に向かいます。

レジにかごを置き、レジ打ちのおばちゃんがバーコードを読み取っている間、沖江さんは袋に買った商品を詰めていました。

「1852円ねー」

私は財布をカバンから取り出し、2000円を置きます。

その時、おばちゃんの動きが止まりました。目線を追つてみると、その先にあるのは私のカバン。

肩から掛けていますが、今は前にあります。

物をそこまで入れる人でもない私のカバンはそれなりに小さいです。中には財布とハンカチ、ティッシュ、エチケット用品と拳銃が入っていました。

冷や汗が額に滲み出たのが分かります。

「に、2000円のお預かり、ね」

手元を見ずに、おばちゃんは私のカバンから目を離しません。

「お、おつりの148円……まいど」

私はカゴと袋を受け取つて移動しようかと思つたその時、おばちゃんに呼び止められました。

そのレジには私の次の客はいません。時間帯ですし、他にもお客さんは少ないようにも見えました。

「あ、ちよつと」

「……はい」

私はカゴを持ったまま、振り返ります。

おばちゃんはマスクをしていますので表情が分かりませんが、雰囲気が変わつたのを感じました。

目つきが変わり、レジの台に手を乗せて口を開きます。

「あ、アンタ……」

何を言おうとしているんでしょうか。強烈な緊張が私の身体を襲います。

私の視界には映っていませんが、沖江さんは既に袋詰を終わらせていたみたいで、私の耳には館内アナウンスと空調の音しか聞こえてきません。

静けさが辺りを包み込み、私に底知れぬ緊張感が襲いかかります。

「もしかして……メス犬なの？ 貴女……」

何ですか、それ。私は理解が追いつきませんでした。

いきなり呼び止められ、そう私に訊いてきたんです。『メス犬』とは一体、どういう意味なのでしょう。

底知れぬ緊張感に不快感が追加されます。

この状況、私はどう動けばいいのでしょうか。

このおばちゃんの纏っている雰囲気は、さっきのレジ打ちをしていた時のものとはまるで違います。全く別のものへと、さっきの一瞬で変わってしまったんです。

私の身体は硬直してしまいました。

脳の処理が追いつかなくなっただけです。

第56話 束の間の休息④

周囲にも分かる程の緊張感が辺りを包み込みます。他のレジ打ちのおばちゃんや、近くで荷運びをしていた若い男の人も。出店を当番しているおじさんもです。

そんな状況でも、沖江さんだけが気付きません。

スイーツやお菓子に舞い上がっているのかもしれない。

私は口を開きます。

「……『メス犬』とは、何のことでしょうか」

一瞬、空気が変わりました。すぐに戻りましたが、私の視界内にいる誰かが別の思考をしたんでしょう。

それが何かは分かりません。ですけど、私のこの状況が悪いのは理解出来ます。

見かけは普通の女の人ですが、コレを脱いでしまえば横須賀鎮守府艦隊司令部所属 私設武装組織『柴壁』の構成員です。

外でどう思われているのか、まだハッキリと分かっていませんが、よく思っていない人も少なからずいるはずですよ。

日本皇国軍の特殊部隊員や模範であるべき憲兵が総辞職し、横須賀鎮守府の私兵になったんですからね。それを加味してしまえば、この雰囲気はきつとよく思っていない。方の人間が作り出す空気です。

その空気の発生源は私の目の前にいるおばちゃんに違いありません。

おばちゃんはその質問を聴き、返答をします。

「あの子女を戦争に駆り立てているク○男の配下のこと。……なんでもその組織の名前は『柴壁』って言われているそうじゃない？」

合っていますね。私は黙ったまま聴きます。

「その『柴壁』は部隊を犬になぞらえて分けられている、そう聞いたわよ。『番犬』やら『猟犬』やら、ね」

合っています。『血猟犬』がないのは、あまり表立って動いていないからでしょうか。

「あの犯罪者」が死んでもなお、忠誠しているんでしょ？ それに貴女みたいな女性部隊員は奴に”何をさせられているのやら”……」
一部、・強調して言いました。

この言い方だと、私が既に『柴壁』の構成員だということを決めつけた上での発言であることは間違いないでしょう。

それにさつきから言っている『○ソ男』や『あの犯罪者』というのは紅くんのことを指しているんでしょか。

「……この辺りで拳銃を持っている人間は2種類よ。あんたらみたいな『メス犬』を見張っている皇国軍の憲兵さんたちか、出歩いている『メス犬』よ。憲兵さんの顔は覚えているし、貴女の顔は初めて見たわ」

カバンに手が伸びそうになるのを、理性が押さえつけました。

殺意、でしょうか。紅くんが悪く言われていることが無性に腹が立つのです。それに、この眼の前のおばちゃんが生きていられるのは、その紅くんのお陰で横須賀鎮守府の皆のお陰だということを知らないんでしょか。

私は自分に言い聞かせます。押さえつけます。湧き上がる殺意を。『拳銃を抜け』、『このババアを殺せ』と、私に怒鳴り付ける憎悪を。

「……」アレ”が異世界から来たとか知らないけど、日本皇国が戦争をしているですって？ してないわよ、そんなこと”

ガチガチと手が震えます。渾身の力を握りこぶしにぶつけ、耐えま

ずです。私の立ち位置からは、このおばちゃんには握りこぶしが見えないはずです。

「あーあ、死んでもらって清々したわ!! だけどね、要らない置き土産を置いていって欲しくなかったわツ!! 輸送される食料が”しんかいせいかん”？ とかい”犯罪者”の戦争相手が爆撃していくのよ!! 貴女、説明してもらえない？ 頭がやられていても、それくらいは分かるでしょ？」

この人は何も理解していません。

今回、外に出て分かったことがありました。

私がこの世界に来た時に居た場所。そこは灰色をしていました。賑やかなはずのデパートの屋上には対空銃座が置かれていたんです。ですが、横須賀鎮守府の第5通用門から出た景色はどうだったでしょう。普通に人が行き交い、横須賀鎮守府の高い塀がある以外は至って平和な街でした。

もちろん、このスーパーマーケットのある辺りもです。

この辺りは横須賀鎮守府が近いことから、深海棲艦による輸送隊襲撃がなされていないんです。

もちろん、別の街からの情報は入ってくるでしょう。ですけど、緊迫性が足りないんです。直に体験していないから、このようなことが言えるんです。

「私たちを巻き込まないでくれるッ!? 戦争はよそでやってよ!! 私たちの平和な生活を返してッ!!」

ついに私の我慢も限界に達したその時、沖江さんが私の前に立ちました。

袋はどうやら置いてあるみたいです。

私の位置からは見えませんが、私を通せんぼしている左手は見えませんが、右手が見えません。

沖江さんの利き手は右手です。

「貴女……この人が何をしたと言うのですか?」

「あ、さっきのお客さん! この人は“あの”横須賀鎮守府の『メス犬』で……」

そう言いかけた刹那、おばちゃんの語りが止まります。

『メス犬』? ああ、あの天色 紅とかいう海軍将官の私兵のことで
すか?」

「そ、そうよ!! それがそこにいるのよ!!」

沖江さんの背中で見えませんが、沖江さんが滲み出させているオーラは分かります。

完全に殺意です。それも、突発的に現れるようなものではありません。親の敵を見るような、憎悪に満ち満ちた殺意です。

「そうですね。……私も軍属ではありませんので、お話は上官や同僚か

「部隊が来ます。30分この場で待機しますが、よろしいですか？」
「え、ええ」

レジ打ちなのに、そんなことを勝手に決めてよかったんでしょうか。

近くで見ていた若い男の人が、運び荷を力一杯押してどっかへ行つてしまいました。

—————

—————

—————

そろそろ30分が経とうとしています。

30分前に急いでどこか行ってしまった若い男の人が、何やら偉い人を連れてきたみたいですが、その2人がおばちゃんと沖江さんの間に入る勇氣はないみたいです。

それに、このおばちゃん以外にこの場に立ち会っている人間は全員、今の状況を理解しているみたいです。沖江さんが纏っているオーラのことも。

やがて、屋内が騒がしくなります。そして、その騒がしさが近づいてきて、沖江さんに話しかけました。

「ご苦労様です」

「……では、我々は」

そう言った見るからに『番犬』の1個小隊が、私たちを囲みます。

『番犬』の姿は、普通の人間が見ても日本皇国軍の兵士と『番犬』とは区別が付きません。言動や行動などで見分けられます。

この状況下で、『番犬』たちが私兵か軍人かなど、おばちゃんが見分けられるはずもないです。

「憲兵さん、この人ですッ!!」

「状況から、どういう事態なのかは把握していますよ」

そう言った構成員の1人が、私たちを囲んでいた陣形から離脱。

そのまま、近くに居た偉い人のような人に話しかけます。

「我々はこういう者です」

「おお、やはりそうでしたか!!」

ここから、構成員が何を見せたかは分かりません。ですけど、何か身分証明証みたいなものを出したことに違いありません。

すぐにその構成員は陣形に戻ります。

そして、私の近くに居た構成員が話しかけました。

「そろそろ力を抜いて下さい。ここは『勢力圏内』です」

言葉の意味が分かりませんが、私はそのままずっと立っていた場所から移動します。近くの机の上にカゴとカバンを置き、机に凭れ掛かりました。

そんな私を見たおばちゃんは、一気に気が動転します。

「え、ちよつと、貴女っ?!」

そんなおばちゃんの前に、偉い人っぽい人が構成員を分けて陣形に入り、立ちました。

そしてこう言い放ったのです。

「貴女を今ここで首にする。すぐに出て行け」

「へ?」

そんな中、若い男の人が私に近づいてきました。

「横須賀鎮守府の人ですよね? すみませんでした、ウチに『ガン』があつたみたいで……。ずっと立ちっぱなしで疲れたでしょう?」

椅子にどうぞ腰掛けて下さい」

そう言った男の人は、私の近くに折りたたみのパイプ椅子を出してくれました。

私は思わずそれに腰を掛けます。

一方、目の前では偉い人っぽい人がおばちゃんに向かって言っていました。

そして、構成員の持っている獲物を見て気付いたんです。

持っていたものは、鎮圧用のラバー弾を撃ち出すショットガンです。

「ちよ、ちよつと!! どういうことですか?!」

「貴女、分かっていてここでパートしていたんですよね? どの手が回った人間ですか?」

「どこの手がって……」

「どこの政党、組織の手かと聞いているんです」

まだ、状況が飲み込めていないみたいです。

しどろもどろしているおばちゃんに、今度は構成員が声を掛けました。

今更ですが、ここに来ている一個小隊は『番犬』で、全員が顔を隠しています。おばちゃんから見えているのは、精々階級章と目の光くらいでしょうか。

「自ら吐いたのなら、執行猶予も実刑も無くなるぞ」

カシャと、暴徒鎮圧用レーザーショットガンが音を鳴らします。

既に銃口はおばちゃんの方向に向けられていたんです。

これでようやく状況を飲み込めたのか、急に捲し立て始めました。

「あ、貴方たちっ!! ま、さかつ?!」

「ええ、貴女曰く『子女を戦場に駆り立てる犯罪者のメス犬』ですよ」
バキツと音がしました。

どうやら誰かがショットガンの銃把を握りつぶしたみたいですね。その音の発生源は、ショットガンを肩に掛けたみたいです。

「どんなことを吹き込まれて、信じたかは知らない。だが、今も“陛下”は貴女みたいなのをこの世に残しておくつもりは無いぞ」

「う、嘘よ……」

「勅命は今でも有効だ。聴いてないのか？ 国営放送で陛下が勅命されたことを」

沖江さんはスカートを捲り、腿のホルスターから拳銃を抜きました。

そして薬室に弾薬を装填します。銃口はおばちゃんの眉間に向けられました。

「おバカなテロリストが1人……。『兵士』の前にノコノコと現れました」

ゆっくりと銃口がおばちゃんの眉間に近づいていきます。それに伴い、沖江さんも近づいていきます。

「おバカなテロリストは言いました。『私たちを巻き込まないで』、『戦争はよそでやって』、『私たちの平和な生活を返して』」

銃口がおばちゃんの額に触れ、吐息も完全に当たる距離まで沖江さんは近づいています。

『兵士』は何も言いませんでした。ですけど、あることをしたのです」もう、おばちゃん目の目に触れるのではないか、という距離にまで口を近づけて囁いたのです。

「天色 紅中將が下した命令に従い、本来殺されるべきテロリストを……」

刹那、沖江さんの拳銃がおばちゃんの額から離れます。そして、銃口は天井に向けられました。

ですが、沖江さんは離れません。そのまま、自分の目をおばちゃん目の目に目一杯近づけたんです。

「死なない程度に痛めつけました」

異様なほどに、沖江さんの口角が上がります。

そして、それを合図に構成員が動き出します。

腰から結束バンドで作られた簡易手錠を出し、おばちゃんを拘束しました。

「アツハハハハハハハハハハハハハハハハ!!! 良かったですねえ。地獄へはまだ行けませんよ？ 貴女にそう[!]吹き込んだ奴らを吐くまで、

“お話”、しましょうねえ？」

拳銃をくるくると回しながら変に口角を上げ、今までに見たことのない嗤いを浮かべている沖江さん。

そんな沖江さんを、私は初めて『怖い』と感じました。

沖江さんの顔を目の前で見ていたおばちゃんは、身体をガタガタと震わせています。一言一言が余分な意味を持たない沖江さんの言葉に圧倒されたんでしょう。

「い、いや……」

「何が？」

ドライアイスの中に閉じ込められたように感じます。

今の声、沖江さんが出したんです。

「ど、ど、どう……どういうこと？ え？ まって、貴女……憲兵なん……でしょ？」

「元憲兵です」

「さっきの話って……」

「本当ですよ。ちなみに、現役の憲兵に貴女を引き渡しても良いですよ？」

沖江さんは何を言っているんでしょう。

ですけど、すぐに分かったんです。今のこの国では、このおばちゃんのことを通用しないんです。

沖江さんの言葉を聞いたおばちゃんは、心底安心した顔をしました。

彼女の中では、現役憲兵、つまり日本皇国軍は横須賀鎮守府を排斥したがっていると信じ切っているんです。さらに、政府もそれを推しており、陛下もそれを勅命としている、と。

ですから、今のこの状況から脱出し、“日常”に戻ることが出来る期待をしたんです。

「ほんと?! とか言って引き渡す時に後ろから撃つたりだとか……」

「そんなことはしません」

「貴女たちみたいなのが、そんな風に憲兵さんに首洗って出ていくなんて面白いわね」

一斉に『柴壁』がおばちゃんに詰め寄りました。隙間なく。そして、ショットガンを構えたまま。

その時、ここに近づいてくる足音がありました。

そしてそれが私とは、少し離れたところで止まります。

憲兵です。しかもBDUを着ていない、制服を着ているので分かりました。門の前でたまに見ますからね。

その姿を見たおばちゃんは『柴壁』を強引にかき分け、その憲兵に訴えます。

「憲兵さんでしょ？ この状況を聞いて来てくれたのよね？ ここに

横須賀のメス犬がたくさん居るわ!! 連れて行ってちょうだい!!」

憲兵は歩き出します。

その憲兵に遅れてか、BDUを着ている憲兵がゾロゾロと辺りを囲みました。

そして私たちとは違う獲物、実弾を撃つための小銃を構えたのです。

「私はこの辺りを担当している憲兵です。私の顔はご存知で?」

「ええ!! ええ!! もちろんよ!!」

細身のその憲兵が手を挙げます。そうすると、周りを囲んでいたBDUの憲兵たちが動き出し、それに呼応するかのように『柴壁』がおばちゃんから離れていきます。

その状況についていけないおばちゃんは、取り敢えず助かったと思っただけでしょう。その場に尻もちをつきました。

「さ、コイツらを連れて行ってよ!!」

若干興奮気味におばちゃんは訴えました。ですが、それは一蹴されてしまいます。

「それは出来かねますね」

「ならこの場で射殺?」

「それも出来かねます」

「じゃあどうするの?」

そう言ったおばちゃんの声を合図にしたかのように、BDUを着た憲兵たちから次々とカチャリと音が聞こえてきました。安全装置を解除したんでしょう。

「貴女が推している政党や組織はありますか?」

そんな状況にも関わらず、憲兵は訊きました。

その間に戸惑いつつも、おばちゃんは何かの組織名を口にします。それを聞いた憲兵さんは嘲笑いました。

「はははっ。その組織は2ヶ月前に消えましたよ」

「え?」

「今上天皇の勅命により、ここに刑を言い渡す」

BDUを着た憲兵がおばちゃんの両脇を抱えて立たせました。そ

してそのおばちゃんに有無も言わずに手錠を掛け、膝を折らせま
す。

「反政府勢力に加担、妨害工作を行ったとし、執行猶予無しで……」
空気が一瞬で絶対零度まで下がりました。

「銃殺だ」

――――

――

――

その後、おばちゃんは憲兵に連れて行かれました。かなり乱暴に。
抵抗はしていたが、蹴られて引き摺られていったのです。そして何か
を叫んでいたようでしたが、よく聞こえませんでしたね。憲兵たちの
装備の音で聞こえなかったのです。

沖江さんが呼び出した『憲兵』たちもすぐに戻り、その場に残った
のは私と沖江さん。偉い人っぽい人と若い男の人だけになってしま
いました。

「……重ねて申し訳ありませんでした。私どもの店にはああいった輩
は居ないように調整していましたが、どうやら紛れ込んでしまってい
たみたいです」

この人の言い草だと、多分店主かそういうものなんでしょう。

その言葉に、沖江さんが対応しました。

「いやいや、こちらこそ申し訳ありません。こんな物騒なものを出し
てしまって」

沖江さんは拳銃に安全装置をかけました。

「本当にすみませんでした」

「こちらこそ」

そう言っつて、一応解散となりました。

ちなみに買い物は終わっていたので、そのまま横須賀鎮守府に帰り

ました、特段何があったみたいなことにはなっていませんでした。

それよりも驚いたのは、あの沖江さんです。

一体、どうしてしまったんでしょう。あの時の沖江さんはどこかおかしいとかそういうものではなかったんです。完全におかしい人でした。

ですけど、すぐに元に戻ったんです。一体、どうしてでしょう。

第57話 束の間の休息⑤

今日は休みです。小隊がまるまる休みなんですけど、半分くらいの人が出歩いていきました。家のこととかあるみたいです。

沖江さんも家に戻ると云って、早朝に出ていったそうです。それで暇を持て余した私は、皆さんが休日もやっているという”サービス警備”をやろうと思いいちました。

休日扱いですので、警備の際に必要な小銃と拳銃、無線は使えませんが、第5通用門の詰所に行っても、管理の人からは借りることが出来ないんです。

ということなので、普段から身につけてもいいとされているナイフを腰にぶら下げて、鎮守府内を適当に散歩することにしました。

「はあく!! 天気が良いですねえ」

そんなことを呟きながら、私は歩きます。

横を通り過ぎていく艦娘の皆さんも、元気よく挨拶をしてくれます。私の見たことのない風景ではありますが、コレが本来の鎮守府の姿なんでしょうか。

たまに、私と同じように装備を付けていない『柴壁』を見かけます。私と同じでサービス警備でもしているんでしょうか。

その人をよく見たら長政さんです。相変わらずフェイスマスクをしていますね。

「あ、どうも」

「おはよう、ましろ二等兵」

長政さんは『ましろ二等兵』と私のことを呼びます。紅くんと名字が同じですから、言いわけているんでしょう。

「長政さんもサービスですか?」

「そんなところだ。……サービス警備をしているのなら、この後付き合ってくれないか?」

突然、長政さんはそんなことを言い出します。

何か手伝って欲しいことでもあるんでしょうか。私はてっきり、運

ぶ荷物があるだとかそういうものだと思っていたんです

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

私は長政さんに手伝って欲しいといわれて、付いていった先は、私の想像していたところとは全然違いました。

警備棟にある一室。第3会議室。いつも使うのは第1なので、初めて入る部屋です。そして、そこで待ち受けていたのは……………」

「うくん……………」

「お姉さま、ブランクがある分忘れてませんか？」

ビスマルクさんとオイゲンさん。

何かしていますね。

「電子辞書貸して下さいい〜」

「ほら、これ使いなさい」

英語のテキストを片手に、電子辞書を求める阿武隈さんとそれを貸す五十鈴さん。

「じゃあ、ましろ二等兵。質問されたら教えてやってくれ」

「えつと……………」

「警備棟第3会議室は、戦術以外の勉強をしている艦娘に向けて自習室として開放している。というか、自然とここに集まってきた」

「本部棟にも空き部屋はたくさんありますよね？」

つまり、ここは小さな塾みたいになっているということらしいです。

「最初は本部棟でやっていたそうなんだが、勉強が進むに連れて分からないところが出てきたらしい。どうして良いか分からなくなった艦娘たちは、紅提督に助けを求めたと。それで、紅提督は私たちに依頼をしたんだ。警備棟で教えてやってくれないか、とね」

「そんなことが……………」

「ああ。今では個人の自習は本部棟の資料室。教え合ったり、分からないところがあればここに来るといった形になっている」

なんというか……何ともコメントし辛いものです。

「という訳で頼んだ。俺も質問の受付をするから」

「分かりました」

という具合に、突然講師をすることになりました。

私には筆箱と辞書、無地の紙、参考書が支給されました。それを使い、質問を受けた問題の解説をしろということです。

私としては得意不得意があるので、不得意のものを言われたら困るんですが……。

隣の長政さんも同じものを出し、質問を待っています。

何というか、暇ですね……。

――――

――

――

ぼけーっとしていると、私の前に誰かが立ちました。

「質問、良いですか？」

「はい。どうぞ」

阿武隈さんです。手にはノートと英語の参考書。教えられる科目ですね。

「ここなんですけど……」

「はいはい。ええと……」

参考書に目を落とします。

英語の文章題です。問にある問題を読み、私の方も考えてみます。

読んでは見たものの、別に難しい問題でもないですね。特殊な単語を使っている訳でもなければ、文法も普通に勉強していれば分かるものしかありません。

「うーん……。とりあえず、これを解く時に何をしましたか？」

「問題を順に解きつつ、英文も同じように読み進めたんですけど」

「それじゃあ駄目です。一度、英文を全て読んで下さい。それから、問題を解いていくんです」

「やり方ですね。分かりました!! ありがとうございます」

阿武隈さんは戻っていききました。

この後も数分置きに、1人の割合で質問に來ます。私はその応対をしていきますが、困ったことが起きました。

五十鈴さんが來たんです。それは問題ではありません。持つてきたものが問題だったんです。

「えつと……」

「物理よ。分野は波ね」

科目が物理だったんです。私は高校生の際に物理Ⅰ（物理基礎）しかやっていないんです。

波は物理Ⅱですから、分からないんですよね。

「すみません。……物理はやってないんです」

「そうなの？」

「はい。私が教えられるのは数学と英語、国語、生物くらいです。他は苦手科目だったんですよ」

本当の話です。ちなみに物理Ⅰでも赤点ギリギリだったので、習ってはいましたが教えられません。

「じゃあ長政に訊いてくるわ。ありがとう」

「いいえ。こちらこそ、力になれずにすみません」

五十鈴さんは離れていきました。

こうして時間が過ぎていき、会議室が茜色に染まる頃、長政さんに声を掛けられます。

時間ではあるんですけど、私が來た時から人数は減ったどころか増えました。それだけに、質問のスパンも短くなって大変でしたけどね。

「そろそろ終わりだ。皆も片付けて夕飯食べてこい！」

長政さんの声で、皆さんは片付けを始めます。終わり次第、会議室を出ていきます。そして最期まで居たビスマルクさんとオイゲンさんが出ていったのを確認した私たちも、会議室を出ていきます。

鍵を締め、鍵を返しに行き、寮に向かいます。私たちも夕飯を食べに行くんです。それに、この時間なら小隊の皆さんも帰ってきている頃でしょう。

「付き合ってくれてありがとう」

「いえいえ、気にしないで下さい」

「いつも一人で大変だったんだ」

そう言った長政さんは、寮に向かう道すがら、あの会議室でのことを話してくれました。

紅くんに頼まれて開いたのは良いが、教えるために常駐できる人間があまり居なかったこと。片手間にやることで、休暇返上くらいしいといけないこと。そもそも教えられる人が少ないこと。

そう言った訳で、長政さんと他数人で回している現状らしいです。その数人は全員が元『猟犬』。何かなければずっと暇をしているところですよ。

今は長政さんは『降下猟犬』らしいですけど、他の人達は『機械化猟犬』に変わったそうです。

陽もかなり傾き、薄暗くなつて来た頃、長政さんはあることを訊いてきました。

「また、頼めないか？」

あの会議室での質問を受け付けるのを、頼めないかということですよ。

人手不足なのは聞いて分かりましたし、断る理由もありません。

「良いですよ」

「ありがとうございます」

「ええ」

そう言っていると、寮に着きました。

今まで気にしてきませんでしたが、かなりお腹が空きました。それに、沖江さんたちも帰ってきている頃でしょうね。何か土産話でも聞ければ良いんですけど。

—————

—————

—————

艦娘寮に戻つてくると、沖江さんたちは既に帰ってきていました。

私は私室に戻り、ベッドに寝転がります。普段やらないことをすると、かなり疲れますからね。

ゴロゴロしていると、夕食の時間になります。

私の部屋に沖江さんが来ます。夕食のお誘いですね。

「ましろさーん。行きましょー」

「今行きます」

BDUがちやんと着れていることを確認し、私室から出て沖江さんと合流します。

私服だったであろう沖江さんはBDUに着替えており、いつも通りの格好になっていました。

ですけど髪型まではいつも通りには戻っていません。少しよそ行きの様子です。

「家に戻っていたんですよね？」

「はい。実家まで」

地雷を踏んだと思いました。沖江さん。今にも泣きそうな表情になりましたからね。

「ううう……。帰るという連絡は昨日の夜にしてあって、始発で戻ったんですけど、両親に色々言われまして……」

「何を言われたんですか？」

踏んでしまったのなら、最後まで付き合います。そう諦めを付け、私は沖江さんの愚痴のようなものを聞くことにしました。

『憲兵になって昇進して、あの横須賀鎮守府勤務になって鼻が高いよ！』って前帰った時には喜んでいたんですけど、今日は怒られました……。『離反したんだってえ？ 横須賀鎮守府の私兵になったそうじゃないの。どういうこと？』と母に言われて、父には『ニュースで見たが、同胞を討ちに襲撃したそうじゃないか。いくら情勢が情勢とはいえ、味方を撃つような娘に育てた覚えはないぞ！』と言われてしまつて……」

思つた以上にドデカイ地雷でした。

私が返答に困っていると、沖江さんは話を続けます。どうやら私が返答しようとしていることに気づいていないみたいです。

「拳句の果に『逮捕もしくは軍法会議に掛かったら絶縁』って言われて……うううっ……グスツ」

かなり酷いことになっていたみたいです。

やはり鎮守府の外に出てみると、そういう認識なんでしょうか。そもそも聞いた話によれば、国民は戦争に関する認知がかなり甘いらしいです。言ってしまうえば国民のほぼ全員が『日本皇国が戦争をしている』という事実を認めていないんですよね。

その事実私に驚きですし、一部の人間は戦争を認知していたとしても戦争に否定的みたいですからね。

沖江さんのご両親もそういう感じなんでしょう。現場に居ないと分からないこともありますからね。

「私、悪いことをしているんでしょうかあ〜!! 正しい道を歩んでいくつもりですのに……」

「ああーもう、泣かないで下さいよー」

遂に泣き出してしまいました。仕方のないことだとは思いますが、どうしようもありませんからね。

メディアに公開されている事しか教えることが出来ないうし、もし沖江さんがそれ以上のことを話してしまうと本当に逮捕ですからね。軍規的にも。軍ではありませんけど。

私は沖江さんにハンカチを渡し、背中をさすります。

「分かってはいましたけど……やっぱり、開示されてる情報だけでは正しい判断が出来ないんですね……」

「もうそろそろ着きますから、涙ちゃんと拭いて下さいよ」

「はい。……グスツ………はあ……。早く紅提督帰ってこないですかねえ……」

そんなことを呟きながら、沖江さんは食堂に入っていきます。私も一緒に入り、注文をして席に座りました。

他の一角でも、空気が淀んでいます。

どうやら沖江さんと同じく、実家に戻ったりした人がああなってます。まっっているんでしょうか。

「これ……本当にどうなるんでしょうか……」

そんなことを呟きながら、私は沖江さんに水が入ったコップを渡します。

沖江さんをなだめつつ摂った夕食は、少し嫌な気分になりました。この国の国民の認識や、正確な情報を伝えないメディア。そもそもこのこの元凶である『海軍本部』……。『海軍本部』さえなければ、沖江さんたちは泣かなくて済みましたし、認識によっては離反になるようなこともしなくて済みましたからね。

第58話 大本営にて①

私が第5通用門の警備を任されてから2週間が経った頃、警備棟に招集が掛かりました。

招集が掛かったということは、大本営からのコンタクトがあつたということ。つまり、遂に動き出す時が来たということでしょうか。

時間は昼前でしたが、警備から少し外れて警備棟に走り込みます。中では艦娘の往来もあり、『柴壁』の構成員もいつもは見ないほどに動き回っています。

「ましろさん、こちらです」

行き交いの激しいロビーで、赤城さんが私のことを呼んで手を振っています。

私は人を避けて赤城さんに走り寄り、一応分かつては居ますけど状況を聞き出します。

「大体検討は付きますが、状況をお伺いしても？」

「はい。先ほど大本営より速達で郵便が届きました」

となると、やはり倉敷島の話でしょうかね。

「内容は？」

「大本営の方から倉敷島攻略の正当性の確立と、参加部隊の招集が完了したという報告です」

正当性……。つまり、私たちが攻撃することの正しさの声明をしたということでしょうか？

よく分かりませんが、今までも『海軍本部』の傘下部隊襲撃はしてきていますから、必要ないと思うんですけどね。

「国営放送で声明をしたそうです。録画したものがあるので、後で見ましよう」

「はい」

「話を戻します。大本営の報告に伴い、私たちも部隊の本編成と配置を行います。それに加えて一緒に送られてきた、攻略作戦の概要を共有し、私たちの動きを確認します」

何やら厚木飛行場の時とは違い、大事になっているように感じます。いや、大事なんですからね。

そんな話をしていると、第1会議室に到着します。

ここに艦種代表や武下さんたちが集まっているとのこと。

「失礼します」

まだ艦種代表が揃っていないみたいですね。

「……まだ揃っていないみたいですから、国营放送の録画を見ましょう」

赤城さんはテレビに近づき、操作をします。そうするとすぐに、再生が始まりました。

『私は大本営海軍部長官 新瑞だ』

『親愛なる国民の皆知っていることだろうが、ここ半年近く、軍内部で動乱が起きている。我々、大本営及び海軍部を主体とした側と、今はなき『海軍本部』の構成員だった者たちの側だ』

『この二者の対立は約1年間も続き、度々人々に不安を煽いだ』

『だがこれだけは言っておく。『海軍本部』のしていたことは許されることではない!!』

『非力な我々に代わり、戦争を請け負った艦娘たちへの不当な扱いの数々。自らが決めた制約の中で、不都合が出たら排除を行う蛮行を覚えているだろうか』

『軍法会議で処罰を下したのにも関わらず、彼らは蛮行を続けた。その結果が現状の我々だ!!』

『資源の供給が途絶え、時より深海棲艦による航空爆撃に怯える日々……。あの平和だった日本を忘れてしまっている』

『平和を取り戻すため、我々は一步を踏み出すのだ!! その為に、彼ら『海軍本部』を根絶やしにする!!』

『皆は平和を望むか？ 何に怯えることなく、日々の暮らしを過ごしたいか？ 軍の戦闘車が多く行き交う道を見たくは無いだろう!!』

テレビの中で、新瑞さんと名乗った人は壇をダンと叩いた。

『この動乱を収め、我々は再び前を向いて歩き出すのだ!!』

『……今ならまだ間に合う。『海軍本部』の者たちよ。我々に投降し、その蛮行を償え。もし投降しないのなら、我々が振り下ろす正義の鉄

槌を受け、その贖罪を自らの命で償うが良いッ!!』

多分、近くに兵士が居るのだろう、向こう側で叫び声が聞こえる。そしてこれで終わりのようだった。

ニユースの速報として取り上げられていたみたいだ。

「ということですよ。具体的に攻略作戦が発動するかという言葉を言つてませんが、暗にそのことを伝えていきます」

「それは聞いていて分かりました。……そろそろ集まったみたいですよ」

「では、始めましょうか」

テレビから視線を外し、私たちは集合した艦種代表と私、武下さんらを交えた会議を始めます。

――

――

――

作戦の方針に関して、大本営から送られてきたものを共有しました。

それと、参加部隊などを伝えることになりましたが……。

「赤城、さん?」

「はい」

私は自動車に揺られています。

理由は簡単です。今、大本営に向かってるところです。

要件は、参加部隊の伝達です。手紙や電話でも良かったんですけど、こればかりは直接の方が良いだろうということで、向かっているところです。

来ているのは、運転手で警備から引き抜かれた西川さん。赤城さんと警備の都合で面識のあるビスマルクさん。そして私です。

ビスマルクさんは警備ですが、そういう感じで良いんですかね?

艤装を身に纏っていますけど。

「私って必要なんですか?」

「はい」

「必要なんですか?!」

「そうですね。……今まで大本営には黙ってきましたけど、そろそろましろさんのことも伝えておく必要がありますからね。それに、今は忙しいですけど今以外にタイミングがありません」

「そう言われてしまうと、なんとも言えませんね。」

「抵抗しても仕方ないですし、覚悟を決めましょう。」

「乗っているのは、普通の軍用トラックです。護衛は無し。」

「結構長い間走ってますから、そろそろ着く頃じゃないですかね？」

「どこに大本営があるのか知りませんが。」

「気付いたら、かなり栄えた街中を走っていました。」

「よく外を見ると、どうやら東京都に入ったみたいです。道で度々立っている案内標識を見ればどこなのかが分かります。」

「やがて、高いビルが立ち並ぶ落ち着いたところに入ってきました。大きな門を潜り、トラックが止まります。」

「着きましたよ」

「そう言われ、私が降りたのは大本営です。」

「警備の兵士があちこちで立っています。そんなところに出た途端、兵が集まってきました。」

「小銃に銃剣が付いたものを肩に掛け、敬礼をします。」

「お迎えにあがりましたッ!!」

「ありがとうございます」

「なんですかね、これ。」

「まあ、いいです。来た目的を果たしに行きましょう。」

「—————」

「—————」

「—————」

「大本営の中を歩き、付いたところは海軍部長官室でした。ということは、出て来る前に見た録画のビデオの人ですね。」

「確か、新瑞さんとか言ってましたね。」

「そんな部屋に、赤城さんは何のためらいもなく入っていきます。ビスマルクさんもです。私はその後が続いて入っていきます。」

「西川さんはトラックで待っているとのこと。そもそも西川さんに」

は入るここまで来る許可は貰ってないらしいです。

私はどうなんでしょうね。

「ご無沙汰しています」

「ああ。久しぶりだな」

テレビで見たのと同じ人が、私の目の前に居ました。そして入ってきた人の顔を見て、赤城さんに話を振ります。

「要件はさつき聞いた。早速始めようか」

「ええ」

そう言われ、赤城さんは懐から書類を出します。

「作戦艦隊及び参加部隊の詳細です。作戦艦隊は深海棲艦の海域奪回のための出撃ではないため、出せるだけの部隊を出すことになりません。鎮守府の防衛も必要ですから、それだけの部隊を出すことができます」

「水上打撃部隊の第一〜第三戦隊。第一、二、五航空戦隊。第一〜四水雷戦隊に旗艦も独立か……」

「はい。作戦艦隊は作戦によつて柔軟に編成を変えますので、今回の作戦にはそのような編成になります」

「それで……私設軍事組織の方は？」

「はい。諜報実働系特殊部隊と空挺降下部隊を」

「空挺……だと？」

途切れることなく、話は進んでいきます。

「こちらの方で編成しました。精強な兵のみで構成された空挺降下部隊です」

「それは分かっているが……これだけの戦力を出せるということか？」

「はい」

どうやら終わったみたいですが、新瑞さんは少し考え始めます。

「……理想の作戦が立案出来そうだ」

「というと？」

「こちらが用意出来た部隊は憲兵師団より派遣される憲兵約一個大隊と海兵一個師団、機械化歩兵一個師団、航空教導団だ。他は志願しな

かったのだ。空挺部隊が志願してさえくれれば、制圧をより確實且つ重厚なものに出来たんだが」

「それなら願ったり叶ったりですね」

「ああ。ちなみに規模は？」

「95名。約二個小隊です」

少し新瑞さんが渋い顔をします。思っていたよりも数が少ないことが気になったんでしようね。

「……分かった。そちらの編成を控えた。次の話に移ろう」

新瑞さんがこちらを向きます。

BDUを着てはいますけど、武装はしていません。ナイフも置いていくように言われていますから。

そんな私を新瑞さんは変なものを見るような目で見た後、赤城さんに言いました。

「……そちらでこの顔は見たことが無いんだが、一体誰なんだ？」

「天色 ましろさんです」

「天色……だど？」

明らかに表情が変わりましたね。焦りというよりも、何か別のことを考えているような表情です。

その後すぐに、新瑞さんは受話器を取って何処かに電話を掛けます。

「私だ。彼が療養中の軍病院に”天色”という看護師が居ただろう？」

今居るか？ 様子を訊きたい」

「……海軍部の新瑞だ。様子はどうか？ ……ああ、そうか。……分かった。ありがとう。手間を取らせて悪い」

受話器を置きます。

そして両肘を机に付き、うなだれてしまいました。

「……DNAを採取させてもらっても良いだろうか？」

「本人確認、ですね？」

「ああ。貴官が『天色 ましろ』であることを証明してもらおう」

そう言って、また新瑞さんは何処かに電話を掛けます。

その数分後、この部屋に1人、荷物を持って入ってきました。格好

からすると、何処かの研究医みたいですが。

「DNAの採取を行います」

「はい」

研究医がキットを取り出します。DNAを採取するキットです。

DNA鑑定のために、私の頬の内側の粘膜を採取し、そのまま走って部屋を出ていきました。

「1週間以内に結果が出る。それまでは、私は君を『碧 葵』と呼ぼうか」

「っ!？」

そりゃ、ここに滞在する云々で書類を出していますからね。知らない訳がありません。

「それで、碧。君が『天色 ましろ』だとして、何故ここに居る？ どこから来た？」

「紅くん……天色 紅と同じ世界から、失踪した弟を追って来ました」
「……」

新瑞さんは黙ってしまいました。

次に口を開くのは赤城さんです。

「私たちと親族でしか知り得ないことを、この方は知っています。DNA鑑定をするにしても、結果は見えていますよ」

「そうなのか？」

「はい」

新瑞さんは顔を上げました。どうやら話は終わりみたいです。

そのまま私たちは帰るように言われ、大本営を後にしました。

1週間後にまた来るように言われました。多分、DNA鑑定の結果でも知らせてくれるんでしょう。

それに、作戦の概要が完全に完成するころでしょうし、それも渡すつもりなんでしょうね。

第59話 大本営にて②

大本営に初めて行ってから、1週間後。私は再び、大本営に来ていきます。

目的は本作戦の概要と要項の回収と、私のDNA検査の結果です。新瑞さんの執務室に入り、ソファーに腰掛けていました。

今日は赤城さんと私、フェルトさんが来ています。

「来たか」

私たちが来た時には外出中だったみたいで、案内した兵に言われて座っていたら戻ってきました。

「早速だが本題に入ろう」

新瑞さんは机から何かを取り出し、私たちに目の前に置きました。「作戦のあらすじだ。何かあれば連絡してくれ」

新瑞さんは私たちの正面に座りました。

ちなみにフェルトさんは、私と赤城さんの背後で立っています。艦装を身に纏っていますから、そもそも座れないらしいんですけどね。

「……DNA鑑定の結果が戻ってきた」

新瑞さんは上着の内ポケットから封筒を出し、私に渡してきました。

開封積みの封筒の中から、紙を出します。

公告など何も入っていない淡白な中身。1枚の紙を広げ、内容を見ます。

一字一句目で追い、全てを読み終わった後に机に置きました。置いたものを赤城さんが見始めます。

「このことは総督……果ては陛下にお伝えさせて頂いた」

表情を変えません。私も内容を見ても心は動きませんでした。

なぜなら『天色 紅と天色 ましろが姉弟であることを認める』と書いてありました。それにこのDNA鑑定は法的なモノです。裁判所や公正証書が云々という時に使うためのものです。

「この話をするのは、全てを終わらせてから」だ。……赤城。そこに

入っている書類にあるが、作戦開始日時丁度に動けるようにしておいてくれ」

「分かりました」

全員が立ち上がります。もう用事は終わりましたからね。

――

――

――

鎮守府内が慌ただしく動き出します。作戦に向けて、準備が始まっているのです。

そんな中、私と赤城さん、武下さんや艦種代表と霧島さんは警備棟第1会議室に居ました。

『全隊の指揮を執るのは新瑞さんですが、司令部の位置が良くありませんね』

霧島さんのその発言から、こういう事態になっていました。

帰って来てから、一度艦種代表と霧島さんが集められて、作戦書の内容の共有を行っていたんです。

その時、霧島さんが作戦書の内容に違和感を持ったんです。総指揮を行う新瑞さんの配置がおかしいことに。

書類上では、新瑞さんの配置は陸上部隊後方。最前線とまではいかないものの、全隊の指揮官がそんなところに居ていいはずがないということでした。

その霧島さんの意見に便乗して、赤城さんが言ったんです。

『呉司令支部で指揮を執って貰った方が良いと思いますよ』

ということ、連絡を入れようとしている次第です。

「横須賀鎮守府艦隊司令部の航空母艦 赤城です。海軍部長官の新瑞さんを……はい、お願いします」

「作戦の件でお電話させていただきました。……はい。はい。……新瑞さんの配置を変えましょう。陸上部隊後方よりも呉司令支部の方が良いと思います。作戦室もありますよね？」

「……分かりました。では、そのようにお願いします。それと、ましろさんも作戦室に」

「理由ですか？ 横須賀鎮守府から作戦艦隊や部隊が出て行くことによって警備が手薄になります。それならば、作戦中は司令部に居た方が安全だと……。ありがとうございます。ではそのように」
話は終わったみたいですね。

私たちの準備に与えられた時間は1週間です。この間に撃ち出されるようにし、1週間後に横須賀鎮守府を出発しなければなりません。その間にやることは幾つかあります。主に『柴壁』ですけど。

今回の作戦に参加するのは『血獵犬』と『降下獵犬』です。

『血獵犬』は既に準備を始めています。先に呉司令支部に向かい、そこから倉敷島に先行して入る予定です。そこからは工作やら色々ありますので、先に『血獵犬』には作戦を伝えてあります。

巡田さんは部隊を纏めて、もう移動用意をほとんど済ませているみたいです。

『降下獵犬』のすることは沢山あります。

乗り込む艦装に自分らの装備や荷物を運び込み、場所を確保すること。倉敷島攻略が決まる前にも何度かやっていますが、降下訓練を行っておくこと。今まで鎮守府になかった装備を使うので、その促成慣熟訓練（NVD：暗視装置、HK416／光学照準器）を済ませること等等。

私は特にすることはありません。作戦書と作戦艦隊の動きを頭に叩き込むこと。あと、万一のために拳銃を片手で撃てるようにしておくことくらいでしょうか。後者に関しては、武下さんに言われました。

私くらいの体格の女性兵士でも、拳銃なら片手で撃てるそうです。念のため、ということでは私は1週間みっちり訓練をすることになりました。

—————
—————
|

大本営から帰ってきてから2日が経ちました。鎮守府の中は静かです。それは悪い意味ではありません。いい意味で静かなんです。

ざわざわしているだとか、落ち着きがないとかそういうものではありません。

そんな鎮守府の中を、私は歩いていました。拳銃片手射撃訓練の後ですので、右手が凄く痛いです。

警備棟と寮の間を『降下猟犬』が往復していること以外は、至って普通の光景ですね。

その普通というのは、艦娘たちがよく出歩くようになってからの普通です。今もグラウンドで遊んでいる駆逐艦の艦娘たちの姿が見えますし。

散歩するかのようには、私はフラフラと埠頭に来ていました。

海を見ていると結構落ち着くんですよ。何と言えはいいのかわかりませんが、落ち着くんですよ。ただぼーっと海を見ていると、心が静かになります。

埠頭ということもあり、艦娘の艦装が大量に浮いています。

その中にある艦装の周りに、『降下猟犬』の皆さんが集まっています。赤城さんと加賀さんの艦装でしょうか。多分そうです。

私はそこに向かいます。

「これより、降下訓練を行うツ!!」

「はッ!!」

綺麗に整列した『降下猟犬』全隊が分隊毎に並び、敬礼をしています。前に立っているのは指揮官ですね。

「今回の訓練は全隊降下。よって、赤城さんと加賀さんに海に出てもらい、横須賀鎮守府に降下する!!」

ここに降下するんですか。訓練することは知っていましたが、それは知りませんでしたね。もし建物とかに当たったり、変なところに着地した時はどうするんでしょうか。

「分かっているとは思いますが、もし施設の屋上に着地したり、万が一壁にぶつかるようなことがあれば、他の予備隊員に入ってもらってからな!!」

「はッ!!」

予備隊員が居たんですか……。ちよつとその辺は分かりませんね。

編成は武下さんがやりましたし、詳細は私も知りませんから。

「では赤城さん。お願いします」

『降下猟犬』隊長の横に立っていた赤城さんが、話をし始めました。「皆さん、怪我をしないように気を付けてください。それと今回の集結ポイントはグラウンドです。降下開始から5分以内に集結し、点呼を行って下さい」

「了解ッ!!」

「では、乗艦しそれぞれの流星に。解散!!」

『降下猟犬』全員が走り出し、赤城さんと加賀さんの艤装に分かれて登っていきます。全員が行った後から、赤城さんも艤装に入っていきます。

「あ、ましろさん」

その途中、私のことに気付いたみたいです。

「すみません。少し観てました」

「構いませんよ。……今から降下訓練なんですが、観ていきますか?」

「はい」

「私に赤城さんの艤装に登り始めます。」

「……」

「……」

赤城さんの艤装の中を、赤城さんに付いて歩きます。

中は無骨ではありますが、掃除が行き届いており、清潔を保たれています。そして足元を妖精さんたちが走り回っています。

数分か十数分歩くと、格納庫にたどり着きます。

中では『降下猟犬』の皆さんが作業をしています。と言っても、そこまで人数は居ませんね。40〜50人程度でしょうか。多分、残りには加賀さんの方に居るんでしょうね。

「アレが改造した流星です」

今までは流星と言われても何がなんだか分かりませんでした。今初めて目にして理解しました。独特な形状をした艦載機です。珍しく細身なんですね。

「新瑞さんから頂いた作戦書には、『降下猟犬』の配置に関しての詳細な記述はありませんでした。ので、私たちの方で指定をしました。『降下猟犬』は第一航空戦隊の艦攻・艦爆隊が担います。理由としては練度ですかね。生存率を上げるために選びました」

理解しました。

倉橋島に派遣される艦娘は多いです。

赤城さん、加賀さん、蒼龍さん、飛龍さん、翔鶴さん、瑞鶴さん、長門さん、陸奥さん、扶桑さん、山城さん、金剛さん、比叡さん、榛名さん、霧島さん、高雄さん、愛宕さん、摩耶さん、鳥海さん、最上さん、鈴谷さん、熊野さん、川内さん、神通さん、那珂さん、大井さん、北上さん、大淀さん、吹雪さん、白雪さん、磯波さん、叢雲さん、綾波さん、敷波さん、白露さん、時雨さん、村雨さん、夕立さん、島風さんです。

それらをいくつのも部隊に分けて運用することのこと。

その中でも『降下猟兵』を降下させられるのは、第一・第二・第五航空戦隊のどこか。赤城さんの言う通り、この3つの航空戦隊から考えると、降下成功率は第一航空戦隊でしょうね。

練度や技量からしてみても。

「今回は思う存分に、使いたい艦載機が使えるので嬉しいです。護衛に出す予定の戦闘機隊は烈風と震電、雷電改（前作に登場）の私のお気に入りから選び放題です！」

そう言われ、私は流星以外の艦載機に目を向けました。

さつき挙げた艦載機が全部居るんじゃないですか？ 3種類くらいありますし。

「艦橋に行きましょうか」

笑顔の赤城さんに付いて、艦橋に行きます。

艦橋は映画で観るようなセットそのものです。そして窓からは鎮守府と海、飛行甲板が見えます。

何やら妖精さんたちが慌ただしく動いていますので、そろそろ出発するんでしょうか。

「全館放送をお願いします」

赤城さんは妖精さんにそう言って、無線の受話器っぽいものを片手に話し始めます。

「これより降下訓練を行います。『降下猟犬』は爆弾倉に入り、待機。艦載機隊はエレベーターを使い、飛行甲板に」

更に妖精さんたちがけたたましく動き始め、音が鳴り始めます。

「全艦、前進微速。面舵20。」

「前進微速！ 面舵20。ようそろ!!」

動き出します。船体が傾き、波の揺れが激しくなりました。

「舵戻し、前進強速」

「舵もどーし！ 前進強速！」

窓から後ろをみます。加賀さんも同じ動きをしています。

「ましろさん」

「何ですか？」

「これ、戻るのが結構時間が掛かりますけど、良いんですか？」

どうということでしょう。

艦載機隊を発艦させた後に、こっちに帰ってきて艦載機を回収するんじゃないんでしょうか。

「全機発艦まで時間が掛かりますし、艦載機を收容してからじゃないと埠頭に戻りませんけど……」

「あつ……」

ということは凄く時間がかかるということでしょう。

射撃訓練の後には、特に何かがあるわけでもありませんでした。ですが、帰ってくるのはどう考えても陽が落ちてしまいそうです。

埠頭に来た時は午後2時過ぎでしたし。艦載機の收容や埠頭への接岸もかなり時間がかかるでしょうから……。

「ま、良いじゃないですか。」豪華客船でクルージングです!!」

「そ、それもそうですね……」

この後、私が埠頭に帰ってきたのは陽が落ちて1時間後の午後7時前でしたとき。

ちなみに降下訓練は成功でした。時間内にグラウンドに集合出来たみたいですし、怪我人も無しです。艦載機の着艦・收容も滞りなく

進みましたからね。

面白みに欠けるかもしれないませんが、全てが順調に進む方が良いに決まっていますからね。

第60話 黎明の空、前日

横須賀鎮守府から出撃する前日。

選出された作戦艦隊及び『降下猟犬』は警備棟、大会議室に集められていました。

作戦艦隊旗艦を勤める大淀さん。第一戦隊旗艦の長門さん以下陸奥さん、金剛さん、比叡さん、高雄さん、愛宕さん。第二戦隊旗艦の扶桑さん以下山城さん、榛名さん、霧島さん、摩耶さん、鳥海さん。第三戦隊旗艦の鈴谷さん以下最上さん、熊野さん。第一航空戦隊の赤城さん、加賀さん。第二航空戦隊の蒼龍さん、飛龍さん。第五航空戦隊の翔鶴さん、瑞鶴さん。第一水雷戦隊旗艦の川内さん以下吹雪さん、白雪さん、夕立さん。第二水雷戦隊旗艦の神通さん以下磯波さん、叢雲さん、村雨さん。第三水雷戦隊旗艦の那珂さん以下綾波さん、敷波さん、時雨さん。第四水雷戦隊旗艦の大井さん以下北上さん、島風さん、白露さん。

『降下猟犬』全隊、95名。

ほぼ全ての席を埋め尽くし、作戦の最後確認を行います。ちなみに、『血獵犬』は先行して出撃。陸路で呉司令支部に向かっている最中です。

「それでは、最終確認を始める」

武下さんが司会をし、始めます。私ももちろん同席しています。

「明後日、4月2日0800から発動される『黎明の空』作戦に際し、日本皇国海軍横須賀鎮守府群横須賀鎮守府艦隊司令部より編成された作戦艦隊、38名の艦娘及び私設軍事組織『柴壁』隷下『降下猟犬』全隊、95名は本日3月31日1400に横須賀鎮守府艦隊司令部から出撃。4月1日2200までに倉敷島東100kmの海域に到着」
スライドが映されます。

「第一段階、『血獵犬』は倉橋島に先行潜入し、待機。可能ならば情報収集を行う。収集された情報は呉司令支部及び横須賀鎮守府艦隊司令部に発信。作戦艦隊には鎮守府を經由して伝えられる。日本皇国空軍航空教導団は羽田基地から出撃」

「第二段階。『血獵犬』が情報収集を行っている間、日本皇国海軍第二憲兵師団、第一海兵師団。日本皇国陸軍第三七機械化歩兵師団。は、日本皇国軍呉司令支部へ集合し待機。航空教導団は広島空港国際線ターミナルにて補給及びこの間に、何かしら妨害及び襲撃があると予想される。この時までには、作戦艦隊は倉橋島東100kmの海域に到着していることとする」

「第三段階。4月2日0800、作戦艦隊及び呉司令支部へ集合した全部隊は展開開始。倉橋島への侵攻を開始。航空教導団は対地・対空装備で倉敷島上空へ侵入開始」

「第四段階。作戦艦隊より第二航空戦隊から艦爆隊および護衛戦闘機隊出撃。倉敷島を航空爆撃。同時刻。第一、第三戦隊は作戦艦隊より離脱。先行して倉橋島へ接近を試み、航空爆撃後に艦砲射撃を敢行」
「第五段階。第二戦隊、第五航空戦隊は先行隊に続き倉橋島への航空爆撃と艦砲射撃を敢行。第二、第三雷戦隊は作戦艦隊旗艦の護衛位置に。同時刻。呉司令支部より出撃した陸上部隊は倉敷島に向け、攻撃開始」

「第六段階。第一航空戦隊及び第一、第四水雷戦隊は倉橋島へ。ある程度接近した後に、『降下獵犬』を乗せた流星隊及び護衛戦闘機隊は出撃。倉敷島に到着した流星隊より『降下獵犬』は降下開始。内部に潜入済みの『血獵犬』と共に『海軍本部』施設の制圧を開始。陸上部隊も掃討戦へ以降、倉敷島全島の制圧を行い完了させる」

割りりと完結に説明されました。受け取ってきた作戦書には陸上部隊の細かい動きも書かれていましたし、突発的な予想外の事象に関するリストアップもされていました。

それを今回は省略したんでしょう。指揮官レベルの人ならば知っている必要はありますけど、全体に対する確認ですから必要無かったです。

この後、質疑を取りましたが誰も手を上げることはなく、そのまま解散となりました。

解散とは言っても、これからお昼を取って作戦艦隊と『降下獵犬』の方々は乗艦待機ですからね。私はお昼を取った後、西川さんの運転で

呉司令支部に向かいます。

――

――

――

お昼ご飯は気を聞かせてくれたのか、カツカレーがメニューに入っていました。いつもなら特別な日にしかないらしいですが、今日がその特別な日らしいです。

そして『降下猟犬』の皆さんは、強制的にそれを食べさせられるらしいです。言われなくても食べると言っていましたけどね。

私も『降下猟犬』の皆さんと同じように、カツカレーにします。私は直接戦う訳ではありませんが、作戦に大きく関わる指揮所に入る訳ですからね。

沖江さんたちに労われ、私は一足先に横須賀鎮守府を出発します。

西川さんは備えあれば憂い無しとか言いながら、乗っていく自動車を白の乗用車にしました。というより私物らしいです。どういう車種か分かりませんが、国内でも随一の自動車メーカーの自動車です。

「荷物は良いですか？」

「はい。さっきトランクに入れました」

「手元に必要なものは？」

「大丈夫です」

「BDUは？」

「トランクです」

念には念を入れて、私も西川さんも私服を着ています。護身用の拳銃はホルスターに入ってますし、短機関銃は手の届くところにありますけどね。本当に念には念を入れています。

襲撃を受けるかなんて分かりませんのに……。

『柴壁』には礼装がありません。全員基本的にBDU着用です。本当に必要な時にはスーツらしいですが、私の分は事前に採寸して注文しておきました。途中で受け取ってから行きます。

全ての準備確認をして、私は自動車に乗り込みました。内装も普通の一般車ですね。

「高級車じゃないですよ」

「あはは……。乗用車と言いつつ、軍の指定車両かと思ひまして」

「違いますよ。あ、ですけど武器は積んでますよ」

「知ってます。私が積みましたもん」

門の前まで出てきて、門を開けてもらいます。

「いつてらっしやい!!」

「行つてきます」

正門担当の番犬の人と挨拶を話し、そのまま道路へと走り出ます。

そして高速道路に乗り、広島を目指します。

—————

—————

—————

西川さんとの広島へ向かう旅は終始話をして盛り上がり、途中で運転を交代しながら向かいました。

走行時間は約半日。時々渋滞しているところもありましたし、休憩もよく挟んでいましたからね。

そして広島、呉にある呉司令支部に着いたのは、出発した日の深夜でした。

呉司令支部に入る前、私服からスーツに着替えて中に入ります。門兵の人にも、私たちがどこから来たかを伝えて様々な手順を踏み、中に入る事ができました。

荷物は全て持ち、別の門兵の人の案内で寝る部屋に案内されます。女性用と男性用でいくつも用意されており、どうやら作戦に関わる人はかなりの人数が到着しているみたいですね。

西川さん曰く、男性用の方はかなり埋まっていたそうです。女性用の方もぽつぽつと埋まっていました。

私は一番近い部屋に入り、荷物を置きます。

次の日は新瑞さんなどの作戦に関わっている将校の人と話をするらしいですが、私がいる必要があるんでしょうかね。そんなことを考えながら、お風呂に入って身支度を済ませ、眠りに落ちました。

—————

昨日、作戦に参加している部隊の指揮官が集まり、詳細な方針の決定や様々な確認が成されていました。

やはり私は座っているだけで、口を開くことはありません。後ろに立っている西川さんもまた然りです。

基本的に呉司令支部での武装は、門兵以外はあまり認められていませんでしたが、私と西川さんは認められていました。

私はスーツの中にシオルダーホルスターを付けて、護身用拳銃を携帯しています。西川さんもシオルダーホルスターに護身用拳銃を持っていましたが、それに加えて短機関銃も持っています。

本当に念には念を入れた態勢です。

そして今日、私は朝早くからあまり美味しくない朝食（呉司令支部のご飯は総じて不味い）を食べた後、作戦室に入っていました。

既に何人ものオペレーターが作業を行っており、あちこちに飛ばしているんでしょうが、偵察機の映像が正面に並ぶモニタに映し出されています。

新瑞さんによると、映像を送信している偵察機は無人偵察機らしいです。有人偵察は航空教導団がやるそうです。

午前7時30分。作戦室に内線が鳴り響きました。

受話器を取った新瑞さんはテレビを付けるように、オペレーターに命令を下します。

『おはようございます』

テレビの向こう側に、壇上が中央に映されています。その背後には国旗が掲げられているだけの質素な背景です。

そして、壇上にはある壮年の男性が立っています。テレビ越しでもそのオーラは力強く伝わり、圧倒されます。そして私は今更ながら、テロップに目を向けました。

そこには『天皇陛下の激励』とだけあります。

『今日という日を、私は天皇として不本意ながら望んでいました。私個人が望んでいたことです』

その語りは重くずっしりとしており、とても丁寧に話されます。

『不甲斐ない私の代わりにこの国を、この本土を、私の愛する全ての国民を守っていた存在——』

『——天色 紅は約1年前に、『海軍本部』という国のために考え、尽くしていた方に撃たれました』

『彼によって維持されていた日本皇国の平和は、その時に一瞬で崩壊し、私たちに再び深海棲艦の脅威に怯える日々が襲い掛かってきたのです』

『我が国の輸入に依存していた資源も絶たれ、沿岸部は深海棲艦の爆撃の音に身体を震わせています』

無音です。聞こえてくるのは、テレビからの声と私の呼吸音。鼓動音だけです。

『あの日あの時、誰もがそのことを耳にしたことでしょう。天色 紅が撃たれたことを』

『日常にありふれる事件のひとつとした人もいらつしやったことでしょう。ですが、この事件はありふれるものではありません。愛する国を窮地に叩き落としたのです』

『度々、報道番組などで横須賀鎮守府のことは報道されていました。あの青年が率いる艦隊が何のために何をしているのか、私たちに何をもたらしているのかを』

『日常生活レベルで言います。私たちの食していた魚介類は、周辺の海から深海棲艦を一掃し、その状態を維持していた横須賀鎮守府があつたからです。私たちが普段食べている食べ物、これは横須賀鎮守府にある技術により、日本各地に食料を生産するプラントを設けたからです。海岸にありますから、もちろん運営は私たちの誰もが関わっていません。どうして私たちの友人、家族が今も笑顔でいられるのでしょうか。それは横須賀鎮守府が”私たちの代わりに”深海棲艦との戦争を一身に請け負っていたからです』

『責任が誰にあるなどではありません。本来、私たちが私たちのためにやるべき戦争を”彼らが代わりに”請け負っているんです。これは以前もお話しましたね?』

『それに重要なことを忘れていませんか？ 天色 紅は異世界から自らの意志ではなく、この世界に連れてこられた挙句、代理戦争をしていたのです』

『非常に、私の情けなさに頭が痛いです』

大きく間が開きました。

『今日、私の命によりある作戦が発動されます。愛おしいこの国と国民を脅かす存在を断罪するのです』

『既に賽はこの手で投げました』

『作戦に参加する全ての兵へ。皆さんの手は私の手です。彼らを討つのは私の手です。作戦が開始されれば、親兄弟友人を討つことになるかもしれません。きつと彼らを討つたことで、心を痛めるでしょう。そうしたならば、私を恨みなさい。自らを嫉んではなりません』

『全ての責任は私にあります』

『この放送が何のことだか……真相はすぐに分かることでしょう』

画面が切り替わりました。

約10分間ほどの話でしたが、あの言葉全てにとっても重みを感じました。そして、何か心に湧き上がるものがあります。

何とも言葉で表現は出来ませんが。

「……よし。現状を報告せよ」

最初に声を出したのは新瑞さんでした。

「作戦艦隊は予定海域に停泊中」「陸上部隊、出撃準備完了」「航空教導団、羽田基地から出撃開始しています」

オペレーターが応答します。

そして再び作戦室に静寂が訪れました。

作戦開始直前の緊張感に当てられながら、私は無人偵察機の映像を見ながら時間の経過を感じます。

ゆっくりと進む時間に、少し飽きが来始めた頃、新瑞さんが私に声を掛けました。

「緊張しなくても良い。力を抜いて」

「は、はい」

「彼我の戦力差は圧倒的だ。何か隠し玉を持っている可能性が十分に

あるが、対応は出来るだろう」

隠し玉。何かあるかもしれない、ということでしょう。私はその言葉を聴き、少し背筋が伸びます。

そして刻々と時間が過ぎていきました。

第61話 作戦艦隊編 黎明の空①

4月2日0800。それは静かに始まりました。

「全作戦参加部隊に通達。これより『黎明の空』作戦を発動する」

この作戦の指揮官である新瑞さんの号令の元、作戦室が急に慌ただしい雰囲気になりだしていきまふ。

「HQより作戦艦隊。状況を開始せよ」HQより第二憲兵師団、第一海兵師団は状況を開始せよ」「HQより第三七機械化歩兵師団、状況を開始せよ」HQより航空教導団。攻撃隊は出撃せよ」

オペレーターが指示を飛ばしていく中で、無人偵察機がそれを確認する映像を作戦室にまで送られてきています。

敵戦力に関しては、先行して潜入した『血獵犬』より情報が伝えられていました。予想されていたのは、対空兵器及び軽装歩兵だけでした。念押しをして、陸上部隊には対装甲兵器を装備させていましたが、どうやらアチラ側に戦車があるようです。隷下に付けた部隊に戦車部隊でも居たんでしよう。大隊規模の戦車部隊があるという報告を昨日の時点で受けていました。そして総戦力も。

確認出来ているだけでも陸上部隊は、こちらが用意している部隊よりも半分にも満たないです。ですが、戦車や自走砲はもしかしたらアチラのほうが多いかもしれません。

そして航空戦力は少ない様で、戦闘ヘリが中心となった部隊構成のようです。一部、戦闘機隊がいるみたいですが、航空教導団に刃が立つとは思えません。

『作戦艦隊 大淀了解いたしました』『第二憲兵師団了解』『第一海兵師団了解』『第三七機械化歩兵師団了解』『航空教導団了解』

瀬戸内海に浮かぶ艦隊が動き始めます。これまでに見たこともないほどの巨大な艦隊に、私は少し圧倒されました。そして私のいる呉司令支部からは、トラックや戦車などが長い列を成して出撃していきまふ。

これでも集まった数は少ない方だと新瑞さんは言いました。ですが、私から見れば大部隊です。途切れることなく続くトラックの線

は、永遠に続いているのではないかと錯覚する程でした。
順調にことを動かしていきます。

そして、私たちはあることに直面することになりました。

――

――

――

作戦艦隊全体の指揮を執っているのは大淀さんということになっていますが、彼女の存在は情報収集と情報伝達が任になっています。なので、実際のところは少し違っていたりします。

水上打撃部隊である第一から第三戦隊の指揮は長門さんが、第一、第二、第五及び各水雷戦隊の指揮は私が執っています。

作戦立案を私にさせてはならないというジンクスというか決まりがあります。作戦そのものの指揮は私がした方が上手くいくことがあります。ですので、私が指揮を執っている次第です。

『蒼龍より赤城さん』

「はい」

通信妖精さんから渡された受話器の向こうから、蒼龍さんの声が聞こえてきます。

『先行して出していた偵察機からの報告です』

先発隊として、第四段階に移行してから出していた偵察機からのことです。現在、第二航空戦隊及び第一、第三戦隊が艦隊から離脱中です。

艦隊間の距離もそこそこ開いてきた頃のことでした。

『前方、方位265、約80kmの海域にて艦影を確認』

「……確認を」

『どこかしらから出撃した艦隊と思われます。不明艦隊の進路は090』

こつちに着いていますね。鎮守府正面海域を抜けるのなら、こちら側か反対側を通らなければ呉鎮守府は抜けられませんからね。

私は蒼龍さんに伝えます。

「何かしらの艦隊だと思います。艦隊の進路を変えるように連絡をお

願います」

『了解しました』

念のために連絡をしてもらいますが、私には気がかりがあります。何がとはつきりと分かりませんが、何か引っかけがあります。

そう思つて、私は受話器を通信妖精さんに返していません。

そしてその連絡はすぐに来しました。

『蒼龍より赤城さん』

「はい」

『返答ありません。艦隊の進路そのままです』

やはりそうでしたか。憂いは晴れませんが、一応作戦通りに動きま

す。
「ならばこちらから躲します。蒼龍さんたちはそのまま先発隊として、先行して下さい」

『了解しました』

手を打っておきましょう。もし、私の考えている通りならばきつと……。

通信妖精さんに言つて、私は呉司令支部に繋いでもらいます。

用件は簡単です。

「赤城より司令部」

『司令部。用件は』

「敵に不明戦力があります。念のため、航空教導団にお伝え下さい」

『司令部、了解』

これで一応良いでしょう。突発的な事象にもより確実に対処できるはずです。

—————

—————

—————

司令部から連絡がありました。航空教導団が倉敷島に侵入した際に想定されていたよりも、迎撃隊の数が多かったこと。そしてジェット戦闘機ではない、別の戦闘機隊が混じっていたことを。

航空教導団の隊から知らされたのは『白いボディの艦載機』という

ことだけ。搭乗員が誰なのか、何処の隊なのかも分からなかったそうです。

そして司令部はあることを、私にもたらしたのです。

普通ならば、『所属不明機』や『I F Fに該当しない機体』というらしいです。ですけど、私に言ったのはそのどちらでもない『所属不明の零戦二一型』でした。

これが何を指しているのか……。私たち作戦艦隊に参加している第一、第二、第五航空戦隊の艦載機は揃えてあります。艦戦は雷電改、震電改、烈風改のどれか。艦爆は彗星一二型甲。艦攻は流星改で統一されているんです。それは出撃前にも確認してあることでした。

そして倉敷島で確認された『所属不明の零戦二一型』は私たちが航空隊に装備させたものではありません。ここから導き出される答えは……。

私たち以外に、倉敷島周辺に艦娘がいるということですよ。

それと同じくして分かったことがありました。倉敷島から私たちに向かってきていた艦隊の正体です。

考えられる事象はいくつもありますが、最低限、共通していることがあります。私たちに向かってきている正体不明の艦隊の空母から発艦した零戦二一型が倉敷島で迎撃隊として上がっている、ということでした。

私は通信妖精さんに言って、受話器を取ります。今度は個人に対してではなく、作戦艦隊全体への連絡です。

「赤城より作戦艦隊全艦へ。……現在所属不明の零戦二一型が航空教導団と交戦中です。対空警戒を厳と成し、規定通り作戦を遂行して下さい」

返事はありません。ですけど、全員に伝わったことでしょう。

そして、すぐに私たちに直面します。正体不明のその艦隊が何だったのかということに。

先行していた第二航空戦隊から再び通信が入ります。

『蒼龍より作戦艦隊全艦!! 不明艦隊発砲!!』

全体への通信でそれが知らされます。そして通信の向こう側が騒

がしくなります。

蒼龍さんも受話器を通信妖精さんに返さないまま、あちこちに指示を出しているようです。

『艦載機は早急に対艦装備に変更!! 偵察機は帰ってこなくて良いです!!』

『長門より第一戦隊へ!! 陣形を単縦陣に変更!! 砲雷撃戦よーいッ!! 第二航空戦隊は一時後退せよ!!』

こちらでも警報を出します。第一航空戦隊も少しですが、状況を変更せざるを得ません。現在、甲板に流星隊が出ていますが引つ込めま

す。護衛戦闘機隊を出し、上空警戒に当てべきでしょう。

「甲板で作業中の妖精さんに通達」

「はい」

伝令妖精さんもとい各部署に連絡を飛ばす妖精さん呼びつけます。

「現作業を中断し、護衛戦闘機隊発艦準備」

「了解しました」

連絡妖精さんが艦橋から駆けていきます。

私は次にすべきことを考えます。

蒼龍さんの偵察機の情報は、『不明艦隊』がいるということだけでした。詳細が分かりません。編成が欲しいところです。欲を言えば艦種と数の特定。数は分かるかもしれませんが、艦種の情報は欲しいところです。

受話器の向こう側では、先ほどの騒がしさは少し落ち着いています。

蒼龍さんと長門さんがあちこちに指示を出していましたが、それも既に収まっています。他の皆さんは指示に従うだけですから、特に返事をしたかどうかはする必要がありませんからね。

ですので、私は蒼龍さんに問い合わせることにしました。

「赤城より蒼龍さん」

『蒼龍です。どうされました?』

「偵察情報の詳細を教えてください」

『はい』

少しした後、返事が返ってきます。

『不明艦隊は……空母機動部隊』

それは想像していました。そして『所属不明の零戦二一型』という話から想像したことが正しければ、蒼龍さんはきつと……。

『飛鷹、隼鷹、山城、多摩、皐月、初霜……です』

『不明艦隊は……艦娘の艦隊ですツ!!』

やはりそうでしたか。想像はしていました。というか、それ以外に考えられなかったんです。

『所属不明の零戦二一型』が迎撃隊として空を飛んでいる時点で、何機もいるということになります。と考えると、1機や2機の再現が可能でもそんな数を用意出来るとは思えませんし、何よりパイロットがいけません。ですから艦娘が関与していることは自明でした。

そして彼女たちは現状、私たちに敵対をしています。

進路上を移動中であり、砲撃をしていますからね。どこに着弾したかは知りませんが、こちらに砲撃を仕掛けてきたのなら敵とみなすべきでしょう。

ですが、私は信じたくありませんでした。もし違っていたら、もし普通に出撃しているだけで、私たちに敵対している訳ではないのだとしたらどうでしょう。

あちらが何を撃っているのかを見定める必要があります。

『赤城より作戦艦隊全艦へ』

通信妖精さんに言って、全艦に繋げてもらいます。

『被弾した際は報告するように。それまでは砲雷撃戦を禁じます。第二航空戦隊は艦載機を発艦し、上空待機です』

まばらに返事が返ってきます。それもそうでしょう。不明艦隊が艦娘の艦隊であつたこともですけど、それが敵対している可能性がありますからね。状況から鑑みれば、十中八九敵対していますが、まだ確証は得られていません。私たちが攻撃をするのならば、正当性を持ってないといけませんからね。

ですから私は攻撃を禁じたのです。あちらがバカスカ撃っているのは分かっています。そのうちに誰かに夾叉・着弾するでしょう。戦艦からの攻撃ですから着弾した場合は損害が大きいですが、現状、先行隊には大型艦しか居ません。ダメージコントロールでどうにかなるでしょう。それに被弾艦を交代させれば、今後の戦闘に支障を出すこともないです。

――――

――

――

待機を命じてから数時間が経とうとしていました。本来ならば、ここで倉敷島に航空爆撃と艦砲射撃の第一波が行われる予定でしたが想定外のこと起きてしまったために、作戦自体が圧しています。陸上部隊の話は全く入ってきませんが、そのうち分かるでしょうから今は忘れておきます。今は目の前で起きていることを気にするべきですからね。

現在、こちら側は待機状態を維持しています。先行隊とあちらの艦隊が既に交差するであろう距離までの接近を何度もしており、その間ずっと第二航空戦隊及び第一、第三戦隊は沈黙を守っています。砲撃が夾叉・直撃していませんからね。判断が下せずにあります。

そして事態は急に動き出したのです。

『最上より作戦艦隊全艦へッ!! 魚雷直撃ーッ!! 発電機室に浸ッ!!』

実弾でした。

「赤城より、さ、作戦艦隊へっ……」

覚悟はしていました。状況も分かっています。理解しています。ですが、どうしても……どうしても声に出すことが怖いんです。

今、私たちが待機しているところからでも見えるんですよ。最上さんに魚雷が直撃し、水柱が上がるところも。それにあちらの艦隊の動きも。そしてあの艦隊が艦娘たちであることも……。

よく知った顔の艦娘があそこにいるんです。それに、私たちの待機しているところには同名艦だっています。

山城さんはどんな表情をしているんでしょうか。何か話している声も聞こえてきませんし、ずっと黙ったままです。

自分と同じ姿、声をしている、いわばもう一人の自分が味方を攻撃しているその光景は……きつと見ていられないんだと思います。私もそれは同じです。

私が言わなければ誰が言うんですか。この状況で、『味方を討て』と。

私自身の心拍数が上昇し、手と額がじつとりとしているのが分かります。緊張をしているんです。そして怖いんです。

紅提督に怒られていた方が、何億倍もマシです。

受話器の向こう側は静寂そのものですが、私が何か言わないと何も動きません。

魚雷が直撃した最上さんだって、きつと自分の犠装のことで忙しいはずです。

判断が迫られています。『味方を討て』と、私の口で言わなければこの作戦は水泡に帰します。それだけは絶対に回避しなければなりません。これまでの努力も、不必要であったかもしれない犠牲も全てが無駄になります。

私は左手の拳を固め、右手を挙げます。そして渾身の力を入れて、自分の右頬を叩きます。

甲高い音が艦橋に響きますが、私はそれよりも右頬の痛みと熱を覚えます。そして覚悟を決めたのです。

「赤城より、作戦艦隊全艦へっ……」

覚悟を決めても尚、口に出すのには躊躇をしてしまいます。ですが、ここで歩みを止める訳にはいきません。

もしかしたら、この命令一つで艦娘を討つことになったとしても、もう決めてしまったことなのです。

作戦艦隊として連れてきた他の皆さんが何を思おうとも、振り返ることも立ち止まることももう出来ないのです。

「先行隊に攻撃中の艦隊を殲滅せよッ!!」

『くっ!! り、了解、したっ……。 第一戦隊ーッ!! 砲撃戦開始、敵艦隊”を殲滅するッ!!』

そして始まってしまったのです。味方同士の殺し合いが……。
もう後には引けません。

第62話 作戦艦隊編 黎明の空②

先行している第一、第三戦隊、第二航空戦隊は『不明艦隊』と交戦状態に突入します。

私たちは飛び火を避けるために、一時的に艦隊運動を停止し海上で停泊中です。その間、私は司令部から戦場の大局を聞き出していました。

「赤城より司令部。現在、敵対的な艦隊と交戦状態にあります。出来ればで構いません、航空教導団に支援要請を」

『HQより赤城。現状の詳細を報告せよ』

「……現在、空母機動部隊と先行中の第一、第三戦隊及び第二航空戦隊が交戦中。編成は飛鷹、隼鷹、山城、多摩、皐月、初霜です」

『待機中の部隊を対艦装備で回す』

「ありがとうございます」

ないよりはマシだろうと思い、支援要請をします。

そしてそれと共に、知りたいことを訊きました。

「陸上部隊の状況はどうなっていますか？」

『現在、倉敷島へ向かっている陸上部隊が『海軍本部』に襲撃を受けている。戦力低下が芳しくない状況にある』

「ありがとうございます」

当然です。到着してからの抵抗は考えられましたが、やはりそれまでの道中での襲撃も考えられました。それに関しては新瑞さんも指摘していましたし、最終作戦書にもその記述がありました。

話を聞いたところ、陸上部隊は大なり小なり被害が出ている現状です。戦車等が駄目になったのか、それとも歩兵の方が狩られてしまったのかは分かりません。ですけど、どちらにせよ戦力の低下は倉敷島制圧に良い結果をもたらしません。これ以上の被害は抑えて置いて欲しいものです。

場合によっては、陸上部隊が漸減しすぎた場合は私たち作戦艦隊の上陸も視野に入れるべきでしょう。

そもそも『不明艦隊』との交戦が無ければ、もう少しことも上手く

運べていたかもしれません。

私は思考をそちらに切り替えました。

『不明艦隊』はどういった意図で、私たちに敵対してきているのでしょうか。

編成・装備から読み取れることは、練度の低い艦隊ということと提督が着任したばかりであることです。それ以上も以下もありません。そして艦隊が現れた海域。倉敷島からこちらに接近してきたという事。これはかなり重要なことだと思いました。

日本皇国各地に鎮守府は存在しています。何万人という単位で艦娘が沿岸部に跋扈していますが、『不明艦隊』はきつと呉鎮守府群のどれかから出撃してきているということが、普通に考えて至る結論ではありません。

ですが、”『不明艦隊』の目的”は艦隊進路からも分かるように、私たちに攻撃を仕掛けることでした。となると、呉から出撃したとは考えられ無いです。海域ですれ違うことはあっても、こうやって砲雷撃を交わすことは演習以外ではありえないことなんです。

つまり『不明艦隊』がどこから出撃したのか……。考えられる答えはただ一つだけです。『彼女たちは倉橋島の艦娘だ』ということ。アレだけ艦娘を迫害していた『海軍本部』も、結局は艦娘にすぎることしかできなかつたんです。

「ふん……」

鼻で嘲笑います。

現在も交戦中ではありますが、停戦命令を出すことも考えていたんです。『不明艦隊』が交信をしないのには、何か理由があるはずなんです。もし倉橋島の艦娘だしたら、本来存在するばすのない場所に鎮守府・泊地が存在することになります。となると端島鎮守府のような扱いになっている……つまり、”提督”という存在があることを示唆しています。

と、考えると話は速いです。艦装の通信設備が使用禁止になっている、ということでしょう。もしくは通信妖精さんが乗っていないか、のどちらか。

ならば、と私は思い立ちます。

通信妖精さんに受話器を頼みました。

「赤城より長門さん」

『こちら長門』

「交戦しながらで構いません。『不明艦隊』に発光通信をお願いします。内容は停戦を促すもので」

『それは、どういうことだ？』

「これ以上、仲間と実弾で撃ち合うのが嫌ならお願いします」

『無論だ。すぐに始める』

先行隊の動きが変わりました。もともと第二航空戦隊は第一、第三戦隊の後方に居ました。その更に後方に私たちが居ます。

第二航空戦隊の動きは変わりませんが、第一、第三戦隊の動きが変わったのです。第三戦隊が第一戦隊より離脱し、『不明艦隊』を囲み始めました。

そしてわざと進路上に出ます。第三戦隊はそのまま『不明艦隊』の陣形先頭の山城さんの艦橋前方の主砲塔群に砲撃、吹き飛ばしました。山城さんの艦装の方が鈴谷さんたちのものよりも巨大ですから、強引に突破出来たかもしれせん。ですけど、『不明艦隊』は艦隊運動を停止したんです。

『不明艦隊』側面に展開していた第一戦隊が着々と包囲網を造り出し、動きが完全に止まりました。

こちら側の全砲塔は全て『不明艦隊』に向けられています。

—————

—————

—————

結果から先に言ってしまうえば、『不明艦隊』の艦娘の艦装には通信設備の一切がありませんでした。探照灯と手旗信号があるくらいで、無線機は本来あるべきところには何もありませんでした。

そのためか、通信妖精さんも自分の持ち場がないから、椅子に座っているだけですし。

考えれば分かることだったんですよ。偵察機が艦影を見つけ、

その報告を受けて打った手の時点で気付くべきだったんです。

一方で、“敵艦隊”からの通信など、普通は応答しないものです。

『長門より赤城。『不明艦隊』旗艦 山城を尋問した結果を報告する』艦隊が動きを止めてから1時間は経った頃でしょう。長門さんから通信が入ります。

「赤城です。報告、どうぞ」

『所属を吐いた。所属は“倉敷島泊地”だ。繰り返す。所属は“倉敷島泊地”だ』

思わず舌打ちをしてしまいました。ここまで想像通りだったのは初めてです。それと同時に、怒りを覚えました。

虫の良い話です。『海軍本部』は逆賊です。“正義”の名のもとに戦をすることは出来ないんです。そしてこの世界情勢。戦すらままならない状況下で、もし自らの危険に晒されたのなら、『海軍本部』が遺憾ながらにその手を打つのが理解できました。

だからこそ、腹が立つのです。我が物顔で指図していたあの組織に。幹部たちに。

「赤城より長門さん。可能ならば武装解除を促し、どこかの漁港に停泊する様に云えませんか？」

そして彼女たちは真実を知りません。『海軍本部』の悪行も何もかも。

だからこそ“可能ならば”なんです。

『今陸奥がやっているが、芳しくないようだ。だが、情報を聞き出せた。進水したただけで構成された艦隊で助かった』

流石長門さんです。

そして気になりますね。情報が私たちにとって有益であることは間違いないです。

『……艦隊が急行中だ』

その一言で、私は全てを理解しました。

もう報告することもないということ、長門さんは通信を終わらせました。それに武装解除は望めなかったとのこと、です。

『艦隊が急行中』ということとはつまり、これ以上に敵対的な『不明艦

隊』が存在しているということになります。

この報告を受けて、私たちが執るべき手は1つしかありません。

通信妖精さんに言い、司令部に繋げてもらいます。報告が先ですからね。

「赤城より司令部。敵対的な艦隊の詳細を確認。敵は倉橋島泊地所属です」

『HQ了解。作戦遂行に支障を来しているため、司令部で作戦の再構築中。指示を待て』

「そうしたいのは山々ですが、現在別働隊が動いているという情報を入力しました。作戦艦隊は一部の艦隊を残し、遊撃掃討戦に移行するべきだと思います」

『それでは味方に甚大な被害が……』

司令部……つまり大本営側の兵のことを思い出しました。

今、私たち横須賀鎮守府艦隊司令部に配属になっていた門兵さんたちを除き、殆どの部隊に実戦経験がないんです。かなり昔に、艦娘に戦争を投げましたからね。そして陸軍なんて、ごく一部は完全に訓練のみしか経験をしていない部隊ばかり。

こういった作戦外の事象に対する対処がなっていません。

「……新瑞さんを出して下さい。貴方じゃ話になりません」

『指揮官は現在対応に……』

「良いから出さないッ!!」

オペレーターを怒鳴りつけ、新瑞さんに代わってもらいます

『……新瑞だ。赤城、報告は受けている』

「はい。それと伝えたいことがあります」

私は『不明艦隊』の状況を知らせることにしたんです。

『不明艦隊』は低練度であり、装備も旧式。挙げ句の果てに通信設備が撤去されています」

『ふむ……』

「そこで提案なんですけど、どうやら私たちが接敵した艦隊以外にも『不明艦隊』が存在しているようなんです。ですから作戦艦隊を分断し、遊撃掃討戦に突入する許可を……」

『許可できない』

即答されました。

どうしてでしょうか。部隊を二分し、本来通りに作戦を進める部隊と『不明艦隊』の対処を行う部隊。これならば倉橋島への水上打撃力が減衰しますけど、その分安全に作戦が続行できますからね。

新瑞さんはどういふところを良くないと思ひ、許可を下さないことにしたんでしょうか。

一応、私たち作戦艦隊も独自の行動はある程度出来ますけども、作戦が作戦です。いつもよりも柔軟な作戦行動が出来ない状態です。大本営に合わせる必要がありますからね。

「……理由をお聞きしても？」

『はつきりしない情報に一々反応することはない。だから、予定通りに倉橋島に向かつてもらう。それともし、本当に別働隊が居たとしても。その対処のためにわざわざ部隊を二分することは愚行だ』

「もし本当に居たとして、背後から攻撃された場合は……」

『包囲される訳ではない。それに作戦艦隊は通常編成の8倍以上の大艦隊だ。艦砲射撃を行わないことになっている水雷戦隊にその対処を任せれば良いだろう。それに航空爆撃から帰還した第二、第五航空戦隊が航空戦を行うことだって出来るはずだ』

最もな意見です。

「……了解しました。これより作戦艦隊は倉橋島へ向かいます」

『そうしてくれ。こちらから大淀にも伝えておく』

これで方針の共有が出来ました。本来ならば、部隊を二分する予定でしたが、新瑞さんに断れられてしまいましたので、ちゃんと作戦通りに動くことにしましょう。

『赤城より作戦艦隊全艦へ。これより西進し、予定通り倉橋島に攻撃を仕掛けます』

第63話 作戦艦隊編 黎明の空③

新瑞さんの言葉通りに、作戦艦隊は倉敷島へと近づいていきます。こちらに接近中である艦隊とは、既に航空戦を開始。

第五航空戦隊が航空戦を展開中です。

『瑞鶴より作戦艦隊全艦へ。接近中の艦隊、撃破を確認』

”撃破”。つまり、轟沈させたということでしょうか？

こんな時ばかり、日本語の難しさに苛つきを覚えます。

瑞鶴さんもきつと、撃破することは望んでないはず。何せ、敵は同じ艦娘ですからね。

しかも、自分たちよりも低練度で未熟な艦娘。そんな艦娘に一方的な攻撃を加えることですから、かなりの抵抗があるというのに、撃破をするなんてことは考えられません。

艦娘として生を受け、数日か数ヶ月もしないうちに轟沈してしまう。そんなこと、悲しすぎます。

ですがその一方で、その死は当然なのかもしれません。己の提督の命令に従い、己を突き通して沈んでいったのなら。

「……赤城さん？」

近くにいた妖精さんに声を掛けられます。

「はい」

その妖精さんは航海長です。私の大まかな指示で、細かい方位を決めて伝達している妖精さんです。沢山艦橋にいる妖精さんたちの中から、その妖精さんだけが私の前に来たんです。全員がこちら向いている中で、たった1人だけ。

その妖精さんが、わざわざ私の立っているところの近くにある機材の上に登り、私と視線を合わせました。

「赤城さん」

「はい」

小さくて可愛い見た目をしている妖精さんですが、話し方は私たちと変わりません。

ですので今の声は、私には凄んだ声、真剣に話をしようとしている

声に聞こえました。

「この艦の、この艦隊の長である貴女がそのような様子では、私たちも不安になります」

「……え？」

そう言ってきたのです。

口には出していませんが、不安に思っている節はありました。ですが、それを言われるとは思いませんでした。

「この戦いは貴女が、貴女たちが望んだものですよね？ 危機的現状を打破するために、紅提督が安心して戻ってこられるようにするために……ッ!!」

小さいその腕を伸ばし、航海長の妖精さんは私の頬を叩きました。

「作戦開始から『不明艦隊』との遭遇までは、いつもの赤城さんでしたが、今は全然違います。敵が同じ艦娘だから、判断も躊躇して、航空教導団に支援要請もして、最後には部隊を二分するとまでおっしゃいました。相手は顔の知っている艦娘だから、最後まで自分の手を仲間の血で染めることを避けていたんですよね？」

心がキューツとし始めます。

紅提督に怒られている時とは、全く違う感覚です。今までに経験したことのない感覚。

「航空教導団に支援要請したのもそのため。部隊を二分しようとしたのも、ウチの航空隊は倉敷島へ絶対向かうから。戦闘機隊が機銃掃射をしなくて済むから……そうですね？」

航海長の妖精さんの言う通りなのかもしれません。

「……私たちも嫌ですよ。艦娘に実弾を撃つのは。それはこの作戦艦隊で来ている皆さんも同じです。それに、相手だつて分かっている攻撃してきているんです」

確かに、他の皆さんも同じことを思っているはずです。

「赤城さん」

「……はい」

「覚悟を決めて下さい。敵は何であれ、私たちは命を賭けているんです」

航海長の妖精さんに言われて、私は気付かされたんです。この作戦が始まり、『不明艦隊』が出てきてからの私の言動がこういうものだったのかを。

そして、それに対する私の対応の意味を。

叩かれた頬は少し痛いですが、これは私の目を覚まさせてくれたものです。

「……ッ!!」

息を大きく吸い込みます。

「これより作戦艦隊の陣形を変更しますッ!! 全艦に通達ッ!!」

声に張りを出させ、自らに気合を入れるのと同時に、もう迷っていないことを皆に伝えます。

「全水雷戦隊は艦隊後方に移動、第一から第三戦隊は艦隊右翼に単縦陣で展開し、右砲戦準備!! 第二、第五航空戦隊は至急、艦爆隊に対して攻撃用に爆装させて下さいッ!!」

通信妖精さんは3人居ます。いつもは1人で事足りてますが、全員に指示を出しました。

一気に艦橋が騒がしくなり、周囲に展開している作戦艦隊も陣形を整え始めます。

「ここまで想定外のことが立て続けに起きましたが、もうやらせません!! 作戦艦隊はこのまま作戦通りにことを進めます!!」

—————

—————

状況を整理します。

陸上部隊と航空教導団の今の状況が、大淀さんに逐一報告が入っていたみたいです。その報告を私は大淀さんから受け、自分なりに整理をしてみることにしました。

現在、航空教導団は『所属不明の零戦二一型』と依然として交戦中。そして陸上部隊は襲撃に遭い、損害を受けながらも予定していたとこ

ろまでの進軍が出来たとのことでした。

今は私たち作戦艦隊が第四段階の成功報告を待っているとのことでした。

作戦変更を行い、予定では作戦艦隊をいくつも分断して攻撃を行う予定ではありましたが、作戦艦隊はそのまま分断せずに倉橋島に侵攻することとなっています。攻撃を行う艦隊と部隊はそのまま作戦通りにことを進めるため、先ほど陣形を変更しました。既にその陣も整い、着々と倉橋島に接近しています。

「……偵察に出ている艦隊からの報告はありますか？」

私は通信妖精に訊きます。

異常があれば知らせてきますが、警戒するに越したことはありませんね。

「異常なしとの報告があります。それと大淀さんからですが、『不明の迎撃隊』が撤退したそうです。その際に追撃し、空母機動部隊を発見。空母6です」

「ふむ。……ありがとうございます」

そうなると、その空母機動部隊には手を出さない方針の方が良いでしょう。艦隊戦を挑むなどとは考えられませんし、航空戦を仕掛けられたのなら、こちらの護衛戦闘機隊だけで十分太刀打ち出来ます。その上、水雷戦隊が居ますから対空射撃も問題なしです。時と場合によれば、航空教導団の増援もありますからね。やはり、現行の戦闘機とこちらの艦載機とは戦闘が可能でした。

もう十数分すると第四段階に入ります。先ほど、接近中だった『不明艦隊』を航空戦で殲滅した第五航空戦隊は待機のまま、第二航空戦隊から航空爆撃をしてもらいます。

そのことは既に伝達済みですので、既に艦爆隊と護衛戦闘機隊は発艦を始めているのが見えます。

右舷に展開している戦隊の戦列も動きがありました。砲塔旋回を始め、艦砲射撃の準備を始めているんです。

現在航行しているところは、倉橋島東です。方位は181で艦隊運動速度はおよそ14ノット。海岸線を右手に航行中なんです。

「そろそろ……第一波が攻撃を始めることでしょうか」

そう呟くと、呼応するかのように爆音が響き渡りました。

どうやら倉敷島への爆撃が開始されたみたいです。第二航空戦隊の艦爆隊はおよそ70〜80機。搭載航空爆弾は800kgのものと、250kgが2つと60kgが4つのとで混成だった筈です。

それぞれに破壊目標が決められています。800kgの方は集団目標に、多数搭載している方は単独目標や建造物に攻撃をすることを伝えてあります。きつとそれ通りに働いてくれることでしょうか。

それとおそらくですが、爆弾を投下した後も機銃掃射をしてから帰ってくるかもしれませんね。艦載機の扱い方などは、紅提督から聞いているはずですから。

報告は入りませんが、爆撃音は10分か20分で完全に鳴り止みます。

これを節目に、次の行動に移るべきです。そう思い、私が通信妖精に長門さんに繋げるように言おうとしたその時、右舷がピカピカと光ります。そして白い煙が立ち上り、それが何が起きたのかを伝えてくれます。

第一、第三戦隊が艦砲射撃を開始したんです。

「……流石、長門さんです」

タイミングはバツチリ。多分、第二航空戦隊の航空隊も上空に退避出来ていたでしょうし、艦爆隊も機銃ベルトに弾薬は残ってないでしょうからね。

艦橋から右舷の島の方を見ます。

艦砲射撃は未だ継続中で、搭載弾薬が3割にまで減少した後には作戦を次の段階に移行します。

双眼鏡で確認していますが、打ち込まれているのは41cmや35.6cm、20.3cm砲弾だ。20.3cmはこの中では見劣りしますが、かなりの破壊力を持っています。榴弾を撃っているでしょうから、なおさらです。それ以上の戦艦クラスの砲弾となると、地形を変えかねません。それほどの威力があるのです。

降り注ぐ砲弾を雨は、すぐに止みます。ほんの30分程度でした。

「大淀さんより通信です」

砲撃が止んでからすぐのことでした。大淀さんから通信が入りません。

『大淀より赤城さん。呉司令支部より作戦を第五段階に移行すると、作戦参加中の各部隊に報告が入りました』

「赤城より大淀さん。了解しました。こちらでも仕事をこなします」

用件はそれだけでした。私はそのまま受話器を返さずに、通信妖精さんに言います。

「作戦艦隊全艦へ」

「はい」

通信機を操作した通信妖精さんを確認し、話し始めます。

「赤城より作戦艦隊全艦へ。第二航空戦隊は艦載機の収容後、補給と整備を急がせて下さい。それと第五航空戦隊は艦載機隊を発艦、第二波をお願いします。第二戦隊は右砲戦準備」

バラバラな返事が返ってきます。

行動はすぐに開始されました。第五航空戦隊、瑞鶴さんたちの配置は私の艀装の後方ですが、どうやら機体の収容・補給・整備は完了しているみたいです。

随時発艦を開始しており、1時間以内には航空爆撃及び艦砲射撃を開始出来るような状況にありました。

作戦艦隊全艦は停止をし、錨を落とします。そこまで停泊するつもりはありませんが、潮に流されないためです。それに艦隊がそこそこ密集していますから、艀装同士の接触を防ぐことも目的の一つです。

投錨し終わるころには、第五航空戦隊は全機発艦が完了していました。もう上空で編隊を組み、倉橋島へと飛んでいきます。

現在、作戦は第五段階に突入しています。航空爆撃及び艦砲射撃後には陸上部隊が倉橋島に侵入し、地上制圧を開始することになっていますが、抵抗が予想されていました。

ですので地上部隊が倉橋島に入る時には作戦は第六段階へ移行し、私たち第一航空戦隊から『降下猟犬』を送り出します。

投錨してから40分ほど経った頃でした、島の方角で爆発音が鳴り

ました。どうやら航空爆撃が開始されたみたいです。

その爆撃も第一波の時同様に15分くらいで終わりました。そして艦砲射撃が始まったのです。

艦砲射撃を行うのは第二戦隊、扶桑さんの艦隊です。こちらは41cm連装砲を積んでいる人が居ないので火力不足かもしれませんが、既にこの攻撃を1度やっている時点でオーバークルな状況です。地上施設は尽く破壊出来ているでしょうし、地下施設も地盤崩落などを起こしているに違いありません。

『血獵犬』からの情報も随時入ってきており、島がどのような状況にあるのかも報告で分かっています。この第二波攻撃は念には念を入れた攻撃なのです。

「そろそろですかね」

その艦砲射撃も開始から5分ほどが経過した時、私は艦内に命令を出します。

「艦内放送、お願いします」

「はい」

艦内放送は私の声で掛けられるのではなく、艦内放送を行う妖精さんが私の言った言葉を復唱します。

「飛行甲板にて待機中の流星隊及び護衛戦闘機隊は発艦を開始し、作戦第六段階に備えてください」

サイレンにも似た音を鳴らした後、放送妖精さんが私の言った言葉を復唱します。

『飛行甲板にて待機中の流星隊及び護衛戦闘機隊は発艦を開始。作戦第六段階に備えよ』

甲高い音と共に、放送がされました。

そして、飛行甲板は慌ただしく動き始めます。

『降下獵犬』の皆さんが流星隊のそれぞれの下に入り込み、爆弾倉だったところに入り込みました。点検を行う整備妖精さんたちがあちこち点検を行い、機体から離れていきます。

そして発動機を唸らし、次々と艦載機が発艦していくのです。ぐんぐんと高度を上げていき、上空で編隊を組むと、旋回を始めます。ま

だ第六段階に入っていないからね。島に向かつても仕方ないですし、艦砲射撃はまだ続いています。巻き込まれる可能性もありますから、止んでから向かうのでしょうか。

やがて艦砲射撃の音は数が少なくなり、開始から10分後には止まりました。第二波の艦砲射撃も残弾3割辺りで打ち止めですからね。

そしてそれと同時に、上空を旋回していた『降下猟犬』を載せた流星隊と護衛戦闘機隊が倉橋島に向かって飛び去っていきます。『降下猟犬』を降下させた後は、倉橋島への上陸があるかないかということだけでしたので、私は一息吐きます。あとは司令部からの報告を待つだけですからね。

第64話 作戦艦隊編 黎明の空④

壁に持たれ掛かっていた時のことでした。既に『降下猟犬』の降下も終盤に入っており、先に降下させた流星隊が帰還し始めていた頃、通信妖精が大きな声を上げたのです。

「偵察機より入電ッ!! 艦隊012方向より、接近中の編隊を確認ッ!!」

確認しておきながらも、攻撃しなかった『不明艦隊』の空母機動部隊からの攻撃です。

自分の采配ミスだと、心の中で叫びつつ、私は確認を取り始めます。

「第二、第五航空戦隊に連絡ッ!! 急いでッ!!」

手の空いている通信妖精が私に受話器を渡してきました。

「赤城より第二、第五航空戦隊へ。現在、012方向より編隊が急速接近中!! 護衛戦闘機隊を発艦させて!」

「飛龍より赤城さん。こちらでも確認しています!! 既に発艦準備完了!!」

「蒼龍より赤城さん。同じく!!」

「瑞鶴より赤城さん。私も!!」

「翔鶴より赤城さん。こちらは収容してすぐですので、発艦出来ません!!」

三個護衛戦闘機隊となると、数は60機以下になりますね。敵機編隊がどれくらいの数で来ているのかは分かりませんが、6隻の空母機動部隊となるとその6倍以上は居る覚悟をしなくては行けません。私のところの航空隊が特殊編成をしてもどうにかかりますが、今は『降下猟犬』を下ろしている最中です。先鋒は戻ってきていますが、どんな状態かなんて分かりませんからね。

となると、私たち第一航空戦隊を交えないでの航空戦になります。

「続報!! 編隊は九九式艦爆、九七式艦攻で構成された攻撃隊及び護衛戦闘機隊!! 数は162!!」

162機の編隊。……これは大問題ですね。

恐らく、今回の第一波攻撃になります。全航空戦隊から一度は出撃がありましたし、手空気が少ないであろうタイミングを狙ってきたのは自明です。

今回の作戦には不測の事態が起きすぎています。

私は対応策を考えつつも、敵空母機動部隊の詳細な編成を考えます。

やはり、攻撃隊として出てきたのは旧式の艦載機でした。そう考えると、護衛戦闘機隊も零戦二一型で統一されている筈です。そうすると、蒼龍、飛龍、瑞鶴航空隊の護衛戦闘機隊の敵ではないでしょう。ですがそれが何度も襲つてくるとなると、問題にはなりません。

「……『降下猟犬』の状況は？」

観測妖精さんに言い、状況確認をします。通信妖精さんに聞いて聞いても良かったですが、こっちの方が早そうでしたので。

「現在、流星隊はこちらに戻ってきています。『降下猟犬』の降下は終わったみたいですね」

「そうですね。ありがとうございます。……通信妖精さん。至急、流星隊に連絡を」

航空隊への指示は、私が受話器から直接話しをする訳ではありません。通信妖精さんを挟んで伝えることになっています。

「内容は『着艦せず、艦隊に接近中の編隊への攻撃を支援せよ』」

「……赤城より流星隊。着艦せず、艦隊に接近中の編隊への攻撃を支援せよ」

その命令を聞き入れてか、着艦しようとしていた流星が加速して飛び去っていきます。そのまま流星隊と護衛戦闘機隊は上昇していき、編隊のいる方向へと飛び去っていきました。

かなり高度を落としていたからか、加賀さんに着艦しようとしていた艦載機の方も同じように飛んでいくのが確認できます。

ぐんぐんと上昇していく180機が点になり始めた頃、またもや連絡が入りました。通信妖精さんから受話器を受け取り、状況を訊きます。

『蒼龍より赤城さん。現在、敵編隊と交戦に突入しました。それと同

時に、更に後方に敵編隊を確認。数は同じくらいです』

「赤城より蒼龍さん。了解しました」

やはり想像していた通り、第二波が来ました。

ここであることに気付きます。今第一波と交戦しているのは、先行させた部隊。今、第一航空戦隊の航空隊はそれの支援に向かっています。

それを第二波に当てれば、状況の早期収束に繋がります。

私は通信妖精さんに言いました。

「進行中の私たちの航空隊に連絡を。内容は『艦隊より012方向に第二波の出現を確認。そちらの対応に当たれ』」

「了解。赤城より赤城、加賀航空隊へ。先の命令は棄却。艦隊より012方向に第二波の出現を確認。そちらの対応に当たれ」

これで第二波の対応も可能でしょう。180対約160です。それに当たるのは私の航空隊。ひよっとしたら無傷で戻ってくるかもしれない。

――――

――

――

艦橋内が静寂に包まれました。敵編隊の接近による対応で騒がしくなった艦内ではありませんが、もうその脅威は収まりつつあります。先ほどの報告で、第一波の殲滅を確認しました。

やはり旧式装備でした。護衛戦闘機隊も零戦二一型だったみたいです。それに遅れること30分後に、第二波の殲滅も確認されました。

こちらも装備内容は同じだったみたいです。

この第一、二波攻撃を退けたことにより、少し状況を見る視点を変えざるを得なくなりました。

現在、この作戦開始から現れた『不明艦隊』は3つ。そのうち2つは撃破していますが、残っている1つは、先ほどの敵機編隊を出した空母機動部隊。これだけの損害を出したのなら、撤退するのが定石です。というよりも、艦隊が1つ撃破された時点で、その戦闘は終了す

るべきでした。

何かが変だと思ったのです。

最初に接敵した艦隊には、長門さんたちが乗艦して状況を確認していました。

その時の報告にあった『通信設備が無いこと』と『所属が倉橋島泊地』という、2つの情報から気付くべきだったんです。私たちが戦っていた艦娘たちが倉橋島からの艦隊であることを漠然と考えていただけでしたが、本当は違うのではないか、そう思い始めたのです。

私は考えました。この一連の攻撃は、私たちが普通に扱うような攻撃方法であったことに。そしてどの艦隊も、6隻編成”であったことに、私は早くに気付くべきだったんです。

『倉橋島泊地』など、存在しないのです。

そう。今まで戦ってきた艦娘による艦隊は全て、『海軍本部』によるモノだったんです。何もかも、全てが『海軍本部』によって引き起こされたことだった、ということですよ。

「……」

私はそのことを考えても尚、独りで悪態をつくことはしませんでした。

そしてある予感が過ります。

”6隻編成”であったことと、今まで出現した『不明艦隊』は3つであることを考えると、未確認の『不明艦隊』が1つあることになりました。

そのことに気付いた時には、既に時は遅かったのです。船が揺れました。どうやら近くに着弾したみたいです。

「砲撃着弾を確認ッ!!」

物に捕まることで、やっと立っていられる揺れが収まる頃には、何もかも状況が一変していました。

飛び交う状況確認の怒号と混乱が、冷静な精神状態であることに影響を及ぼしていきます。

「確認、確認しなければ……。観測妖精さん!! 状況!!」

「艦隊170方向に艦影を視認ッ!!」

”6隻編成”であることと、未確認の『不明艦隊』が1つあることから考えられることは、『もう1つの艦隊が存在していること』でした。それが今、このタイミングで出現したのです。しかも、衝撃から察するに戦艦級からの攻撃です。

状況確認が急がれます。

「偵察は?!」

通信妖精さんのことを呼ばずに、私は偵察状況を確認しました。

「艦隊170方向に艦隊を確認。……水上打撃部隊ですツ!!」

それは分かっています。私が訊きたいのは、どの型の船で構成されているかということだけです。

そして、私が知りたいことはすぐに知ることが出来ました。

「……編成は」

「大和型2以下、重巡4」

騒々しい艦内が一瞬で静かになります。

大和型……。大和型戦艦のことを言っているんでしょう。それは分かります。ですがそれが、今ここに居ると……。そういうことでしょうか。

「世界最大最強の戦艦……」

このことは作戦艦隊全体に既に伝えられているでしょう。

倉橋島への艦砲射撃後の第一、第二、第三戦隊は砲弾残量が3割しか残っていません。となると、水上打撃部隊同士の砲撃戦は無理です。艦砲射撃前にも砲撃戦をしていますから、早々に砲弾消費がありましたからね。3割というところ、もう50発はあるかないかというところでしょうか。

作戦が思いつきません。

刻一刻と接近してきている最後の『不明艦隊』に、私は怯えているのでしょうか。今まで、演習で大和型戦艦とは何度も当たったことはありません。ですけど、砲撃を受ける前に行動不能にしていましたから、こうやって直接砲撃を味わったことがなかったのです。

怖いんです。もし、あの砲撃が直撃してしまったときのことが。

「……手は、何か手はっ」

考えます。考えて、考えて、考えて……。ですけど、出来ません。砲弾残量の少ない第一、第二、第三戦隊を主眼に置いた単縦陣の砲撃戦を想定しますが、危険すぎます。

残量の少なさから、被弾しても弾薬庫誘爆なんてことにはならないでしょうけども、それでも相手は大和型戦艦。

『赤城ッ!!』

突然渡された受話器から、声が響きます。

その声の持ち主は金剛さんでした。

『赤城ッ!! 対応を早くするネ!! 早くしないと、攻撃に晒されてしまいマース!!』

「待つて下さい」

『特殊な陣形をしている私たちは良い的デス!!』

「待つて下さい……」

『今まで頑張ってきたことが、全て水疱に帰すか否かデスヨ!!』

「待つて下さいッ!!!」

焦ります。金剛さんに言われなくても、そんなことは分かっているんです。

ですけど、損害が出ないようにするにはどうすれば良いのか、そんなことばかりを考えていました。

そんな私に、金剛さんは別の言葉を掛けてきました。

『あんなウスノロ、どうにでも出来マース!! どうせ今までみたいに経験不足なんデスカラ!!』

そうです。大和型戦艦なんて、主砲が大きくてダメーヅコントロールを最新のものを使っているだけの、ただのウスノロなんです。それに練度だって低いはず。今までだってそうだったんですから。

私は切り替えて考え始めます。ですがその前にやっておくことがあります。

「通信妖精さん！ 作戦艦隊全艦に!!」

そして焦って早口になりながらも、指示を飛ばします。

「赤城より作戦艦隊全艦へ。抜錨し、前進一杯!! そのままこの海域から離れつつ、艦隊の陣形を変更します!!」

考えます。

「空母機動部隊と大淀さんを中心に輪形陣を執り、艦隊回頭!! 反航戦になった時、全水雷戦隊は艦隊から離脱し、各個に攻撃開始。指揮はそれぞれの旗艦に任せます!!」

「水上打撃部隊は、水雷戦隊の攻撃を支援!! 砲弾を使い切っても構いません!!」

「空母機動部隊は着艦収容後、武器弾薬の放銃が完了し、飛べる艦載機から優先的に発艦!! 各個に支援!! どうせ相手に艦載機はありません!!」

一気に考えながら吐き出しました。

もうここまで来ると、最終決戦という感じがしてなりません。

こちらにも、指示ではああいったものの、完全に突撃ですからね。しかも細かいことは考えずに、攻撃することだけを考えた作戦です。……作戦とは言えない気もしますけど。

それでも、この艦隊を退けなければどうにもなりません。倉橋島のこととは陸上部隊がどうかしてくれれますから、これだけをどうにか出れば作戦成功に繋がるんです。

艀装が動き始めます。抜錨も完了し、艦隊が動き出します。時間を掛けて、着実に艦隊の陣形を整えていきます。艦隊から逃げながらで

はありますが、輪形陣を作ります。

そして回頭しました。

もう逃げることは出来ません。攻撃するだけです。攻撃して、私たちは生還するのです。

「司令部からの入電がありますが……」

「無視して下さい!! ここでアレを討ち滅ぼさなければ、ここまでやってきた甲斐がありませんツ!!」

もう迷いません。

「水雷戦隊は艦隊を離脱し、攻撃開始ツ!!!」

輪形陣を取っていた水雷戦隊が艦隊から離脱。前方で砲撃している艦隊に突っ込んでいきます。

そして水上打撃部隊が支援砲撃を開始します。水上偵察機による弾着観測射撃を行っていますから、突っ込んでいった水雷戦隊にはそうそう当たらないでしょう。

「勝利を、この手にツ!! 私たちにツ!!!」

第65話

作戦艦隊編

黎明の空⑤

苛烈を極めた大和型戦艦との戦闘は、長い間続いています。

私たち作戦艦隊38名と『不明艦隊』6名の攻防戦は、一見私たちが方が圧倒的有利に見えましたが、そうではありませんでした。

数で圧倒しているとはいえ、敵は世界最大最強の戦艦。私たち大型艦の艦娘は、怯むことはありませんでした。何倍とかいう大きさの差はほとんどありませんからね。

ですけど水雷戦隊の方では、そうも行かなかったみたいです。

『怖いっ……あんなに大きな戦艦相手に呐喊なんて……ッ!!』

『被弾したら文字通り吹っ飛ぶじゃないッ!!』

『一番おっつきい戦艦が居るなんて聞いてないよ!!』

そんな声が、状況を確認するために持ったままだった受話器から聞こえてきます。

声色からして駆逐艦の艦娘の子たちというのは分かります。それに怖がるのも無理はありません。

私たち大型艦と比べたら、差はあまりない大和型戦艦ですが、駆逐艦ら小型艦と比べたら、その差は猫とネズミです。

その巨大さ故に、足がすぐむのも理解できます。一方的に狩られてしまうのではないかと考えてしまうのも分かります。ですけど、水上打撃部隊が満足な砲撃が出来ない今では、十分に砲弾が残っている水雷戦隊で砲雷撃戦をした方が勝率が高いのは自明でした。

高まりつつある駆逐艦の子たちの不満の声が、少しずつ艦隊に影響を及ぼし始めます。

巡洋艦の子たちも、少しずつ防戦的になりつつあったんです。水雷戦隊の旗艦である子たちも、です。

『このまま後退して海域外で撒けばっ……っ』

『横須賀に残している艦隊に救援を……っ』

その刹那、消極的な声のみしか聞こえてこない受話器からハリのあ
る大きな声が聞こえてきたんです。

『何をそんなにウジウジしているのッ!!』

観測妖精さんから報告が入ります。

「夕立が呐喊中の艦隊から増速離脱中!! 進行方向上に大和がありませんッ!!」

「なッ!?!」

単独孤立は砲撃が集中するので、避けるべき行動です。

夕立さんはそれを知っていて、そんなことをしているんでしよう。なぜなら夕立さんは勤勉です。横須賀鎮守府の資料室にある戦術指南書を読破し、艦隊戦術などを理解している節があるからです。

『この小さい身体はデカブツと対等に渡り合うためよ!! 速力で勝り、機動力もこつちが上!! それに私たちだって、あんなの吹き飛ばすくらいに代物を持つてるじゃない!!』

受話器の向こう側からは、もう夕立さんの声しか聞こえません。

『砲撃なんてそうそう当たるもんじゃないし、全員で呐喊すればそれぞれに向く砲もバラバラになる!! 貴女たち、今まで何やってきたのよッ!!』

『それに貴女たちが怖がっている大和と武蔵だって、私たちに掛かれば勝てるわよ!! そんなことも分からないの!?!』

『赤城さん!! 私に全水雷戦隊の指揮権をッ!!』

きつと自分たちの旗艦が使い物にならないと判断したんでしょう。私としても夕立さんの考える勝算に関しては、恐らく同じことを考えているはずです。

「良いでしょう。……これより全水雷戦隊は夕立さんの指揮下に入ってください。命令無視は重罪ですからね」

『ありがとうございますッ!! 各水雷戦隊は一時的に戦闘海域から離脱し、陣形を変えます!! 第一から第四水雷戦隊は単縦陣で並び、それと同時に左舷雷撃戦よーいッ!!』

やはり考えていた通りでした。

夕立さんの立案した作戦は、史実で大和さんを撃沈に追い詰めた作戦です。雷撃を片舷に集中することで、優れたダメージコントロールよりも被ダメージを超えさせることでした。

そのダメージが超えた時、船体は傾き、転覆します。

両舷からの攻撃は混乱させるメリットがありますが、継戦させてしまうというデメリットもあるんです。そうしたならば、水上打撃部隊が満足に砲撃戦を出来ない現状、片舷に集中して攻撃を加えることが最善策だと、そういう結論に至ったということでしょう。

艦隊から既に離脱している水雷戦隊は、そのまま増速して艦隊の陣形を変えました。そして回頭したかと思うと、そのまま同航戦に突入したのです。

いきなり指揮権を奪われてそれぞれの旗艦は何か思うところもあつたんでしょうけど、練度などを加味すると夕立さんが水雷戦隊の中で一番高練度なんですよ。

ですけどそんな高練度があつたとしても、夕立さんには大きな旗艦としてのアドバンテージがありました。それは戦術指南書を読破したこと。それだけなのです。今がどうなっているのか分かりませんが、夕立さんを旗艦に据えることに疑問を持つことが、そのことを知っている艦娘にありえることでしょうか。

「通信妖精さん。水上打撃部隊に」

呐喊した水雷戦隊が艦隊を追い越し始めた時、私は通信妖精さんに声を掛けました。

「赤城より水上打撃部隊へ。離脱中の水雷戦隊に支援砲撃をお願いします」

『長門より赤城。了解した。斉射を行う』

最後尾の駆逐艦が離脱したのを確認すると、空母機動部隊を囲んだままだった水上打撃部隊が一斉射を放ちます。

タイミングはほとんど同じでした。

水雷戦隊が急速回頭を行い、反航戦へと突入しました。

同航戦から離脱する際、かなり砲撃を受けていたみたいですが。直撃はしていないようですが、夾又は数発あつたみたいですね。その時は受話器を置いていたので、報告は聞いていません。

左舷雷撃戦に変わりはないようですが、今度は当てるのは難しいのかもしれないね。先ほどの雷撃は、かなりの数が当たっていたみたい

ですが、それでもまだ足りていない様子でした。

反航戦はすれ違いざまの攻撃ですので、同航戦よりも命中率は落ちます。その分、水雷戦隊も攻撃を受ける確率は落ちますがどっこいどっこいですね。

支援砲撃の一斉射が行われ、それ以降は水雷戦隊の独壇場となりました。

片舷に集中して雷撃を行うことで、被雷するほど傾斜角度が増していきます。そしてその度に、水雷戦隊から続々と被弾艦が現れ始めていきました。夾叉により、船体に穴が開いたりだとか、飛んだ破片によって砲塔や魚雷発射管が故障したりなどなど。

それでも尚、水雷戦隊は果敢に片舷に集中した攻撃を続けたのでした。最初は弱音を吐いていた水雷戦隊の皆さんも、艦隊に飛び込んでいきます。

そして遂に、大和型戦艦を2隻とも戦闘不能にすることが出来たのです。傾斜のしすぎで、攻撃ができなくなったからでした。

『夕立より作戦艦隊全艦へ。艦隊の無力化を確認しました』

その知らせが入った頃には、先ほどまで交戦中だった艦隊の大和型以外の随伴艦は”姿を消し”、今にも転覆しそうな2隻が浮いているだけでした。

私は全艦に輪形陣に戻るように伝えるのと共に、大井さんにあることを頼みました。

「赤城より大井さん」

『はい』

個人的な頼みです。

「出来ればで構いません。あちらの艦娘に退艦するように……」

『ふふっ、もう言っておりませよ。皆さんがそれぞれ呼びかけていました』

「……そうですか」

私たちが拾っても良いですけど、相手にとって私たちは敵です。ですが、ここで拾わないとどうなるかわかりませぬね。

『あ、そうそう。夕立ちゃんが勝手に回収していましたけど、良いです

か?』

「大和さんと武蔵さんですか? ……まあ、大本営に引き渡しましようか。恨みはこれっぽっちもありませんが、相容れない考え方をしていることに違いはありませんので」

『そういうと思っていましたよ』

そう言った大井さんは通信を切りましたので、私も通信妖精さんに受話器を返します。

これからどうしようかと、考えます。『降下猟犬』の降下も終わりましたし、私たちの仕事はこれで終わったも同然でした。ただ、気がかりなことは残っていました。

『不明艦隊』の空母機動部隊です。と言っても、空母だけで編成された艦隊ですけど。

これまで会敵した艦隊は尽く撃破してきましたが、空母機動部隊だけは残っていたのです。空母のみの編成ですから、艦隊戦を挑むことはしないと思いますけど、どうするんでしょうか。

無謀にもこちらに接近してくるか、それとも一時は身を潜めるのか……。

探しに向かっても、無用な交戦をすることになるかもしれないので、大本営に報告するだけにしておきましょう。

――――

――

――

洋上で待機中、司令部から連絡が入ります。

通信妖精さんが私に受話器を渡しながら、そんなことを言ってきました。

私たちだけでは、作戦全体の戦局の把握は出来ませんからね。倉橋島に偵察機を飛ばせば話は別ですけど。

そんなことを考えていられる程に、今は余裕が出てきたということです。戦闘も終結し、倉橋島東20kmのところまで艦隊運動を停止しています。観測妖精さんでも陸上がどうなっているのかも分からないみたいです。

結局のところ、偵察機を出せば良いものなんですけど、先と戦闘やこの連戦で搭乗員妖精さんたちの疲労が結構溜まったらしいんですよ。そういうのにもめっぽう強い私の航空隊も、無理な航空戦を何度もしたためか、機体にガタが来ているらしいんですよ。絶賛整備中だそうです。

飛ばせるのは水上打撃部隊の皆さんが弾着観測射撃のために飛ばしていた水偵だけですけど、それも今は倉橋島以外の方向の偵察に出てる現状です。

受話器の向こう側では、陸上部隊間の交信の声が聞こえますけども、それがすぐに止まりました。

『H Qより作戦参加中の全部隊へ。作戦終了。繰り返す。作戦終了』

これは作戦艦隊の皆さんも聞いています。

ですけど、私たちの欲しい情報が入っていませんでした。その情報とは『作戦成功なのか否か』です。

この『黎明の空』作戦に於いて、私たち作戦艦隊の立ち位置とすると、作戦全体の成功率を上げるための支援部隊。作戦の成否を選ぶのは倉橋島の地につけた人たちだけですからね。

受話器の向こうでは誰も口を開くことはありませんが、きつと皆同じことを考えていることでしょう。

この作戦というよりも、私たちが関わった作戦の大本は『紅提督が帰ってこれるような環境にしておく』ためのものでしたからね。

『H Qより作戦参加中の全部隊へ。陸上部隊の倉橋島の制圧を確認。事後処理の部隊に引き継ぎ、全部隊は撤退を開始せよ』

いま、なんと……

制圧を確認した？

『海軍本部』を？

嬉しさにドキンと心臓が跳ね上がるのと同時に、カーッと身体が熱くなります。

そしてそれと同時に、目頭が熱くなってきました。

遂に、遂に終わったのです。否。正確に言えばまだですけど、これで大きな障害は排除することが出来たんです。

艦橋内の妖精さんたちも飛び跳ねて喜んでおり、もう騒がしいことこの上ありません。ですけど、今日、今くらいは許してあげましょう。私はそのまま壁にもたれ掛かりました。もう気張って立っている必要はありませんからね。

第65話 呉司令支部編 黎明の空①

4月2日0800。作戦開始を合図に、作戦室は慌ただしくなりました。

その中で、各地を飛んでいるドローンから送信されてくる映像を眺めるだけが、私の出来ることです。

そもそも私は軍の人間ではありませんし、ここに置いておく意味も分かりません。それは同行した西川さんも思っていることでしょう。

私はただ棒立ちして流れ行く戦場を見ていくだけでした。

主にドローンが撮影しているのは、陸上部隊の動きでした。

「陸上部隊、呉司令支部から出ていきました」

モニタを見れば分かるような情報も、一々口に出して報告されてくる。

そんな中、私は何時間、何日いれば良いんでしょう。

この作戦、『黎明の空』作戦が私にとって有益であることは、十二分に理解しています。大本を辿れば、この一連の行動は全て、紅くんのための行動でした。

ですから紅くんの行方を探しにこの世界に来た私にとっては、それが第一目標であり、最優先事項でした。

「……ここからは静観だな」

「そうですね。戦場に着くまでは、緊急時以外はやることが無いでしょうね」

暇そうにしているのがバレたのでしょうか。新瑞さんが話しかけてきました。

昨日今日という間柄ですが、何となく、この人のことは分かっていた気がします。

新瑞さんは日本皇国海軍の将官です。大本営、海軍部の長官を勤めていらつしやいます。年齢は壮年中盤に見えますが、身体は筋肉隆々でラ○ボーみたいですな。

性格は長官を勤めているということもあり、かなり落ち着いているようにも見えます。ですが、恐らく緊急時の即応性はあまり期待でき

そうにありません。根拠はありませんが。

部下からの信頼も厚く、人柄も悪くは思えません。

ゲスなどころを隠しているのかもしれないが、少し優しすぎるくらいに優男に思えます。

そんな感じの私の評価がありますが、新瑞さんも悪い人ではありません。

こうやって話しかけてきてくれているというのは、何かしら心配か何かでしょう。

普通、作戦行動中の私語は厳禁！とかいうこともあるでしょうが、そこは長官特権でしょうか。

「なあ、天色くん」

「なんですか……というか、”天色” って3人くらい居ますよね？」

「ああ、そうだな。じゃあ、君のことは”ましろ”で良いか？」

「はい。構いません」

新瑞さんがどこからかパイプ椅子を引っ張り出してきて、私に座るように言います。

確かに作戦室で立っているのは、私と西川さんくらいですが……。

まあ、良いです。西川さんも座ったみたいですし。

「ましろ……すまなかった」

唐突に、そう言われたのです。どういう意図で言われたのか、どういう理由で言ったのかは大体分かります。

この世界に来てからというものの、初対面の人に謝られると、大体が紅くん関係でしたからね。

「もう聞き飽きましたよ。そのセリフ。……鎮守府でも散々言われましたからね」

「そうだったのか。でもまあ、口に出して面と向かって言わなければならぬことだ」

「……そうですね。私もそう思います」

少し居心地の悪さを感じつつも、私は新瑞さんの言葉に耳を傾けま

す。

「鎮守府の者たちから散々聞かされていることだろうから、私は省略

させてもらおう。……私は大変感謝しているんだ。君の弟に」
そう切り出し、話し始めました。

「この絶望的な状況から、一時は戦前の状態までに国力を回復することが出来たのだからな。……見てきただろうが、今の国内は相当寂れている。国内で消費されるモノのほぼ全てを艦娘に負担してもらっているからな。食料は艦娘の技術で作られたプラントから、化石燃料や鉱物資源は海上輸送で」

知ってはいます。ですけど、やはり鎮守府外の人間から訊くと、とてもなく違和感を持ちますね。

「本当に情けなく思う。艦娘に代理戦争を頼み、のうのうと生きてきたことが。ぬるま湯に浸かったままだったことが」

これは多分、新瑞さんの心の声でもあるのでしよう。

「そんな中、こちらの世界で言う”戦前”から来た、未成年の青年にまで戦争をやらせることになるとは、私も思いもしなかった」

そう言って、新瑞さんは口を開かなくなりました。

多分、別の話に切り替えるのでしよう。

「……数十年の贖罪は、日本皇国が誠心誠意尽くすべきだと私は思う」
「数十年……?」

「ああ。深海棲艦との戦争が始まってから今日まで、数十年だ。正確な年数は分からない。艦娘に代理戦争を頼んだのも何時だったか」

「そんなに昔からだっただんですか……」

「ああ。最初の頃は海上自衛隊と米軍等などの各国海軍が戦っていたが、徐々に戦闘艦を失っていったんだ。そして最後に、日本は全ての戦闘艦を失った。日本に残っていた米軍も壊滅したんだ」

知らなかったことです。

まあ、鎮守府にはあまり関係のないことでしょうから、自分で調べないと分からないことだったんでしよう。

「日本が全ての戦闘艦を失った時には、国号が日本皇国に変わっていた。……戦闘艦を全て失った時。艦娘たちが現れたんだ。その後、私たちと艦娘は”協力関係”になり、一時は共闘もしていたんだが……」

今の作戦でもありますように、『海軍本部』とかいう組織が何かをし始めたんでしょね。

『海軍本部』が実質、艦娘たちをコントロールし始めたんだ。……そこから聞いているだろう？」

「はい」

「……話を戻す。最低でも私は、これまでの恩も、これからの恩も返さないつもりはない。残りの人生を賭けて返していこうと思っている」
何というか、いきなり凄いことを言い出しましたね。

ですけど、新瑞さんは艦娘の皆さんと、少し似ていることを口にするんです。

艦娘の皆さんも、紅くんがどうのつてよく言っていましたからね。それ関連で昔事件を起こしたりだとか……。

ともかく、紅くんがこの世界で行っていたことは、褒められることだったんでしょね。

戦争ですけど。

「……何にせよ、弟が帰ってこなければ意味がありません。国力を戻すのも、戦線を押り返すのも何もかも」

新瑞さんと話しているうちに、どうやら動きがあったみたいです。連絡は入りませんが、海の方です。作戦艦隊が何かを捉えたみたいでした。

『赤城より司令部』

「……司令部。用件は」

突然オペレーターがヘッドセットのマイクを指で摘んで支えながら話し始めます。

どうやら通信が入ったみたいです。

『敵に不明戦力があります。念のため、航空教導団にお伝え下さい』
「司令部、了解」

通信が終わったみたいです。通信は口頭のもの、艤装に居る通信妖精さんが打電をします。恐らく、作戦室全体にはその打電された情報が口頭で連絡があるはず。

「作戦艦隊より入電。海上にて不明戦力を確認。航空教導団は警戒を

強めよとのこと」

不明戦力、とは……。この作戦での敵は『海軍本部』の部隊です。それ以外、ということ何でしょうか。

状況がまだ初期段階なんでしょうね。

――

――

――

作戦開始から時間が経ちますが、未だに第三段階に留まっています。

もっと流れが速いものだと思っていましたが、そんなことはありませんでした。呉司令支部から出撃した陸上部隊の侵攻速度とも関係がありますし……。

ともかく、現状はというと、陸上部隊よりも足の早い航空教導団が先行して上空待機をすることになっていますが、現在戦闘中です。

相手はというと……。

『H Q、H Q――』

「こちらH Q。状況は」

『こちらアグレッサー001!! 迎撃隊が現れた!! I F Fに該当しない白いボディの所属不明機がわんさか飛んでくる!!』

航空教導団の無線が、私には理解できませんでした。

I F F。敵味方識別装置に敵としても味方としても反応しない機体があるとは思ってもみませんでした。

交戦する相手である『海軍本部』は、元を辿れば軍の組織です。そんな組織が保有する航空兵器と考えると、同じくこちらが保有しているものと同じはずですよ。

ならばI F Fには味方が表示されるか、設定を変更して敵と表示されるかのどちらかしかなり得ません。

もし所属不明機として出てくるのであれば、どこから軍の配備していない別の戦闘機が飛んでいるか、もしくは別の何かが飛んでいるとしか考えられないんです。

「H Qよりアグレッサー001。航空戦に移行し、それらを撃破せよ」

『アグレッツサー01了解!』

戦場を飛んでいた1機のドローンが、航空戦をしている空域に入っています。

そして戦闘機同士の攻防戦の撮影が始まったのです。

作戦室に送られてくる映像を見ながら、航空教導団が伝えた情報と組み合わせて正体を探り始めます。

高速で行われる航空戦ですが、遠目からみたりだとかすると、案外目が追いつくものです。徐々にその迎撃隊の機体が分かっています。

白いボディであること。航空教導団の機体よりも小さい機体。ジェット機では無いこと。それらを加味して下されたこととはというと、迎撃隊として飛来してきたのは『所属不明の零戦二一型』ということでした。

流石に映像だけでは、所属は分かりません。ですけど、機体は何なのかまでは特定することが出来ます。

「迎撃隊を『所属不明の零戦二一型』と断定する。各部隊に通達」
「了解」

新瑞さんが最終決定を下し、それが各部隊へと伝えられることになります。

陸上部隊や広島空港で待機中の航空教導団の残り、作戦艦隊に伝えられました。

――――

――

――

瀬戸内海も海ではありますので、沿岸部は無人です。

もちろん点在する島々の住民たちも、内陸部に退避済み。

そんなところで動くモノと言えば動物か軍人だけです。

現在、陸上部隊が乗り物で移動中です。戦車や自走砲、トラックが列を成して倉橋島に接近しつつありました。

私としては果てしなく長い列ではありますが、その列が音戸大橋を超えた辺りで動きがあったんです。

『H Q！　こちら第三七機械化歩兵師団！　現在、敵対勢力の襲撃に遭っているツ!!』

「H Qより三七師団。状況を報告せよ」

『国道487号を南下中、側面から奇襲を受けた。敵は歩兵。対戦車兵器を装備している』

襲撃。奇襲など、作戦では想定されていたものです。

現場では混乱が起きているのかもしれませんが、作戦室はかなり落ち着いています。

『現在は全体停止、応戦中』

「H Qより三七師団。了解」

報告を受けただけだ。こちらから何かの指示を受ける訳でもないでしょう。現場指揮で判断し、撤退などはこちらに指示を仰ぐということみたいです。

それに襲撃に関するのですが、新瑞さんから事前に貰っていた作戦書には『陸上部隊は進行中にゲリラ戦術を執った『海軍本部』の歩兵部隊に攻撃を受ける』とありました。

これは想定範囲内なんです。

各地を偵察しているドローンの1機が、戦闘中の陸上部隊を映し始めました。

国道に展開している機械化歩兵師団の戦車や兵士が、海とは反対側の廃墟や山の方を銃撃・砲撃していました。

『海軍本部』側の兵士がどこの部隊で、どういう経緯で居るのかは知りません。

ですが、あそこで戦っているのは、本来味方同士です。どういった心境で戦っているんでしょうね。

乗り物や戦車を盾にしながら銃撃戦を繰り広げるそこは、度々爆炎を上げていました。『海軍本部』側が対戦車兵器を撃ちまくっているんです。

それに被弾した戦車やトラックが爆発しているんです。もう既に死人も映像で確認出来る程です。

これが本物の戦場なんですね。

私の身体が震え始めました。恐怖や怯えを、身体が表してしまっているんです。

私が平和な国から来たとはいえ、もう”兵士”になってしまいました。武器を握ってしまっているんです。ですからそれから逃げることは出来ません。

映像には音声がありませんが、きっと現地はけたたましい音を連続的に発し、空気を揺らしているに違いありません。

「損害が出ています。戦車7両が大破。トラック15両が走行不能です」

誰に聞かれた訳でもなく、オペレーターがそんなことを言いました。

戦車は対戦車兵器に吹き飛ばされてしまい、搭乗員は誰も出てくることはありませんでした。それにトラックも、運転していた兵が降りたりもしていましたが、戦闘開始直後に走行不能になった車両は、運転手や中に取り込んでいた兵が降りてこなかったりもしましたんです。

『第三七機械化歩兵師団よりHQ。敵の撤退を確認。前進を再開する』

「HQ、了解」

淡白なやり取りでした。

燃え上がる戦車やトラック。道端で倒れて動かなくなった兵を、丁寧に何処かに固めておく訳でもなければ、布をかぶせる訳でもない。

そのままにして、負傷した兵と少数の部隊を置いて、陸上部隊は前進を再開したんです。

ゾツとしました。

戦死者の遺体を回収し、丁寧に死体袋かなにかに入れる訳でもないんです。

死んだのなら、部隊の侵攻の邪魔になる者の亡骸だけを端に寄せるだけだったんです。負傷兵はその場に残った部隊と共に置き去り。

どうして後送しないんでしょうか。どうして手厚く介抱することが出来ないんでしょうか。

私は疑問に思いました。

そんな私に気付いてか、隣に座っていた西川さんが話しかけてきました。

「前線の兵は皆、ああいう風なんです。作戦が最優先で、倒れた兵の回収や負傷兵の介抱はああやって行われます。本来ならば後送するものですが、生憎……」

出来ないということなんでしよう。

「機械化歩兵のトラックを使えば……」

「駄目です。破壊されたトラックもそうですけど、全ては使うからああやってある訳です。負傷兵や戦死者の後送のために使うことは出来ません」

最悪です。酷すぎます。

負傷兵が前進の足手まといになるからと言って、残されるのは理解できます。ですけど、戦死者の回収が後回しだなんて考えられませんか。

「なら、近隣の部隊を……ッ!!」

「この作戦に参加している部隊は、その言葉通りの意味で参加しているんです。参加しなかった部隊に、こちらから動くような命令を下すようなことは、陸上部隊が全滅して呉司令支部が脅かされた時くらいですよ」

「何処かにヘリ部隊とかは」

全て言い切る前に、西川さんに遮られます。

「さつきと同じで無理です。民間なんて以ての外ですよ。……それに」

西川さんがそう言いかけた時、今度は新瑞さんが話に入ってきました。

「回収できるだけ、恵まれているんだ」

「……は？」

思わず出た声がそれでした。

この人は何を言っているんでしょうか。『回収できるだけ、恵まれている』って……。

「戦場で回収できる兵士の亡骸なんて極少数だ。今回の戦闘は国内で起きたものだから、回収は容易」

「……いくらなんでもそれは」

「これが普通なんだ。……ましろ。君が来た世界のこととは知っているが、ここは別だ。戦争をしている世界で、戦闘が今も行われている。甘っちょろい考え方をするのは止めろ」

その言葉を発した時の新瑞さんの目や声色は、何というかとても怖かったです。

殺気とは別の何かを感じましたが、それが何なのかは分かりませんでした。

「あ、甘っちょろいって……」

「戦争をしているんだ。分かっているだろう？ 君が何を言おうと、何を訴えようと、それは覆ることのない事実。私の言ったことも、君以外は不本意ながらではあるだろうが肯定するはずだ」

私は言葉に詰まりました。もう何と言えば良いのやら、私には全くわからなかったのです。

この世界に転移して、生きてきました。ですが、今日までこのようなことを目前にしたことがなかったのです。

私は理解していなかったんです。

肌を感じたこともなければ、真剣に考えてこなかったことを。

第66話

呉司令支部編

黎明の空②

目前に叩きつけられた、本来知っているものである筈のことを、私が飲み込むのには相当な時間が掛かります。

戦争や戦死者・負傷者の扱い……。日本に生きていると、絶対に感じることはないモノを、私は修正なしで目の当たりにしたんです。

他の国の人間だったなら、もしかしたら違っていたのかもしれない。

ですが、私は日本人です。日本国の国民です。あり得ません。

そんな私を置いてきぼりにし、時間は進んでいきます。

私が”そのこと”を考えている間に、何度も陸上部隊は攻撃を受けでは応戦していました。そして同じように負傷兵を置いていきます。戦死者も邪魔にならないようなところに置いて行かれます。

それを繰り返し、繰り返し、繰り返してやつと、『海軍本部』の攻撃を行う地点に到着していました。

その頃には、陸上部隊の3割を失っていました。戦死・負傷で脱落した兵は約1000人です。十分な戦車と自走砲を用意していたそうですが、尽く破壊されてしまい、到着できたのは出撃直後の半数程度。

これでは面制圧はおろか支援砲撃もままならないでしょう。トラックも数を減らされ、到着する直前なんて半数が徒歩移動でしたからね。

『侵攻部隊よりHQ。予定地点に到着した』

「HQ了解。別命あるまで待機せよ」

『了解』

一方、作戦艦隊の状況にも異常な状況が発生していました。

倉橋島への攻撃が既に開始されていても良い時刻だと言うのに、未だに作戦艦隊は倉橋島に到着していませんでした。

それには理由があります。

向かっている道中、所属不明の艦隊と遭遇し戦闘になったこの

と。詳しい情報が大淀さんから滞りなく伝わっていますが、その情報をどう処理するべきか分からない状況にあつたのです。

遭遇戦をした艦隊は、作戦艦隊と同様に艦娘の艦隊だったのと。

それと”無力化”して状況把握を行ったところ、どうやら違和感を持ったということでした。無線機の有無や所属等がそうです。

これに関して、作戦室から作戦艦隊への命令は何も出していません。現場の判断に任せている状況でした。

「……想定はしていたが、まさか本当に」

そう新瑞さんは口にした後、オペレーターに指示を出しました。

「至急、先行して倉橋島に潜入している諜報部隊に繋いでくれ」

「了解しました」

私たちが横須賀鎮守府を出発するよりも前に、出発していた『血獵犬』は既に倉橋島に潜入して隠密作戦を開始していました。

その『血獵犬』と連絡を取ろうと言うのです。

「HQよりスカウト」

『スカウト』とは、作戦室で『血獵犬』を呼ぶ時のコールサインみたいなものです。

『こちらスカウト』

「新瑞だ。最優先で調べて欲しいことがある」

返事は返ってきません。どうやら了承したみたいですね。

『海軍本部』の施設のどれかに、鎮守府と同じ設備を持ったモノがないか調べて欲しい」

『……スカウト了解』

理由は聞いてきませんでした。それもそうでしょうね。

ですが新瑞さんの言葉から考えれば、今何が起きているかは分かるでしょうね。『血獵犬』の皆さんなら。

ドローンには『血獵犬』の位置は映されていませんが、一応、何処に居るのかは分かっています。

この通信を行う前に、『海軍本部』の施設に潜入していることを知らせていたからです。

『血猟犬』との通信が終わるのを見計らっていた様に、作戦艦隊の方から通信が入りました。

『赤城より司令部。敵対的な艦隊の詳細を確認。敵は倉橋島泊地所属です』

「H Q了解。作戦遂行に支障をきたしているため、司令部で作戦の再構築中。指示を待て」

『作戦の再構築中』というのはデマカセです。作戦艦隊の侵攻が遅れていることと、こちらで事実確認をしているので、全体が一度停止しているんです。

『そうしたいのは山々ですが、現在別働隊が動いているという情報を入力しました。作戦艦隊は一部の艦隊を残し、遊撃掃討戦に移行するべきだと思います』

赤城さんの意見具申がありました。新瑞さんが首を横に振っています。

それにオペレーターにも、赤城さんの提案した作戦は余計なことだということが分かったみたいです。

「それでは味方に甚大な被害が……」

そうです。部隊を分散させると、各個撃破される可能性が出てくるんです。ですから、出来るだけ集団で行動するべきなんです。

『……新瑞さんを出して下さい。貴方じゃ話になりません』

「指揮官は現在対応に……」

『血猟犬』が逐一報告した情報を纏めたモノを片手に、新瑞さんは今後起きるであろうことを考えています。それをオペレーターは言いましたが、赤城さんは怒鳴ったのです。

『良いから出さないッ!!』

その声は騒々しかった作戦室を静かにさせます。

もとより私は口を開いていませんでしたが、報告をしていた他のオペレーターや作戦室外からの連絡で話していた兵たちが黙ったのです。

そんな中、新瑞さんは赤城さんの対応をしていたオペレーターの方に近づいていった。

そしてオペレーターからヘッドセットを借り、応答を始めます。

「……新瑞だ。赤城、報告は受けている」

『はい。それと伝えたいことがあります』

さっきの返答を欲しかったんでしようけども、赤城さんが欲しい回答を得るために何か切るみたいですね。

『『不明艦隊』は低練度であり、装備も旧式。拳句の果てに通信設備が撤去されています』

「ふむ……」

確かに赤城さんの提案する遊撃掃討戦に入るためには、有益な情報かもしれないね。

相手が新米で装備が旧式なら、なおさらこちらの方が戦いやすいですから。

ですが、そんな言葉に新瑞さんは耳を傾けませんでした。

『そこで提案なんですが、どうやら私たちが接敵した艦隊以外にも『不明艦隊』が存在しているようなんです。ですから作戦艦隊を分断し、遊撃掃討戦に突入する許可を……』

進行中の作戦の妨げになる行動と知っているの、赤城さんの再度の許可を求める声でした。ですが、それに対して新瑞さんは一刀両断しました。

「許可できない」

そう即答したんです。

『……理由をお聞きしても？』

あくまで赤城さんは平静を保ったまま、許可されない理由を聞いてきました。

理由なんてすぐに分かるものですよ。私にだって分かったことなんですから。

「はつきりしない情報に一々反応することはない。だから、予定通りに倉橋島に向かってもらう。それともし、本当に別働隊が居たとしても。その対処のためにわざわざ部隊を二分することは愚行だ」

『もし本当にいたとして、背後から攻撃された場合は……』

「包围される訳ではない。それに作戦艦隊は通常編成の8倍以上の大

艦隊だ。艦砲射撃を行わないことになっている水雷戦隊にその対処を任せれば良いだろう。それに航空爆撃から帰還した第二、第五航空戦隊が航空戦を行うことだ。出て来るはずだ」

「全くとってその通りです。もし『不明艦隊』が出現したとしても、恐らく6人の通常編成。30人以上で編成された作戦艦隊で対応するのなら、それこそ殲り殺しにだってできます。効率の良い対処だ。て、いくらか思いつきます。」

「ですから別に遊撃掃討なんて行わなくても良いんですよ。」

「流石に新瑞さんにここまで言われたら、赤城さんも言い返すことが出来ないみたいです。」

「少し静かになったかと思えば、返事が返ってきました。」

『……了解しました。これより作戦艦隊は倉橋島へ向かいます』
「そうしてくれ。こちらから大淀にも伝えておく」

「一息吐いた新瑞さんはオペレーターにヘッドセットを返し、大淀さんに伝えてもらうように言いました。」

「そしてこちらに戻ってきたのです。」

「椅子に腰掛けた新瑞さんは、少し溜息を吐きました。こういう場ではそういうことをしないのが普通なんでしょうけど、恐らく作戦室にいる誰もが思ったことでしょう。」

「赤城さんが焦っていることを。」

「赤城のあの癖はどうしても治らないんだな」

「作戦立案すると穴があるというやつですか？」

「私は真相を知っていましたので、それを口にします。恐らく新瑞さんも知っていますからね。」

「そうだ。天色からも聞いていたが、実感するところなんだな……」
「そうみたいです。」

「しかしながら、新瑞さんは赤城さんが焦っていることには気付いていないのでしょうか。」

「遊撃掃討戦。つまり部隊を二分して作戦を続行するということは、分断するのは水雷戦隊の方。倉橋島への艦砲射撃と航空爆撃は予定通りの物量で行うつもりだったんでしよう。」

大型艦のみで作戦行動を行うのは、かなり危険です。それを承知で赤城さんが作戦立案したのかもしれませんが、あまりにハイリスクでした。

もし航空部隊の奇襲を受けていたら、対応なんて全くできなかつたでしょうからね。

私は黙ってドローンの移す映像に視線を向けました。

陸上と海上の戦況を把握するためです。既に陸上部隊は次の段階に移る準備を整えています。海上では、今さっき艦隊が動き始めたところですよ。

この先、どうこの作戦が転んでいくのか……。私には想像も付きません。

第68話

呉司令支部編

黎明の空③

作戦室は海の方に視線が集まっていました。

『不明艦隊』という存在が確認された今、海上を安全に航行できない状態にあります。それを警戒してか、これまでよりも航行速度がかなり落ちていたんです。

作戦全体の時間も圧していますが、そもそもそんな予定通りにことが運べる訳が無いんです。

ですから皆さん、今動いている作戦艦隊の状況が一番気になってしまっているんでしょう。

予定航路は事前に作戦艦隊にも伝えられていますが、一直線っていうわけではないみたいです。

私は見ても分かりませんが、これが最善の進路だと新瑞さんは言っていました。

そんな静寂の中、これまで輪形陣を取っていた作戦艦隊が陣形変更を行っています。

特殊な陣形ではありますが、その陣形に変えた意図が分かりません。

そしてドローンに映っていますが、空母の飛行甲板が慌ただしく動き出しました。どれが誰なのかは分かりませんが、6人居る中で4人の飛行甲板が慌ただしくなりました。

――

――

――

作戦序盤から接敵していた『所属不明の零戦二一型』の迎撃隊との戦闘に決着が付きそうです。

100機以上が迎撃に上がってきていましたが、今では半数程度まで数を減らしています。

現行の戦闘機は継戦能力が低いですから、何度も往復を繰り返して

の戦闘ではありますが、着実に迎撃隊を落としていっていました。こちらも少々被弾したりもするものの、撃墜されることは無く、時間を掛けつつジワジワと削り取って行っていました。

「倉橋島上空の戦況に変化がありましたね」

「はい。損傷を受けた迎撃隊の零戦がちよくちよく撤退を始めていますように見えます」

暇に耐えかねたのか、西川さんが口を開いたのです。

戦況の変化までは私は気付きませんでした。零戦が撤退を始めているところがあることには私も気づいていました。

「……空母機動部隊」

私はその存在があることを考えます。

これまで大淀さんからの報告で分かっていることがあります。

1つ目は『これまでに艦隊戦を行ったのは2つの艦隊』。2つ目は『接敵して交戦を行った艦隊はどちらも6人の護衛・水上打撃を伴う空母機動部隊』。

ここから予想できるのは、迎撃隊はそのどちらの艦隊所属ではないということでした。となると、迎撃隊の母体となった母艦が居るといふことになります。つまり、まだ『不明艦隊』が存在しているということです。

「何かありそうですね」

そう呟いたその時、オペレーターの対応が始まりました。

相手は大淀さんです。

『大淀です。偵察機が航空教導団と交戦していた零戦を追撃、その際に空母機動部隊を発見しました。規模は6。全員が空母です』

想像はしていましたが、少し違いました。

ですけど100機以上を一度に出撃させることが出来るとなると、それくらい居て、これだけ継戦出来たと考えれば想像できたのかもしれないですね。

「こちらHQ。対応は？」

『作戦艦隊は手を出さないことになりました』
「了解」

触らぬ神に祟りなしって言いますし、それが妥当でしょうね。

艦隊を確認した該当海域を伝えた後、大淀さんは通信を終わらせません。その該当海域にドローンを向かわせつつも、ようやく作戦が進み出します。

作戦艦隊が倉橋島に到着し、航空爆撃を開始したのです。2回に分けられる航空爆撃と艦砲射撃は、島の地形を変えてしまうほどの攻撃ですが、先に潜入した『血猟犬』の情報を元に、爆撃・射撃ポイントは絞ってあります。

ドローンが次々と飛び立つ艦爆隊と護衛戦闘機隊が映り、その物量を物語っていました。上空を飛ぶのは約150機。空を埋め尽くしている艦載機たちは、倉橋島目掛けてぐんぐんと高度を上げていきました。

――――

――

――

これまでの戦闘で発生した被害が暫定ではありますが、作戦室に届けられました。

陸上部隊では死傷者約3125名。現在陸上部隊が展開している地域の後方10kmに、放棄された病院を利用した野戦病院で負傷者の手当を行っているとのこと。

戦死者の遺体はというと、ある程度纏めてビニールを被せてあるとか。後々回収する予定だということでした。

航空教導団での死傷者は0人。流石、深海棲艦ともタメで戦うだけがあります。というのも噂ではありませんけどね。

作戦艦隊が第一次、二次攻撃を行っている中、作戦室は残った陸上部隊の再編成を行いつつも、『血猟犬』から齎されている情報を元に攻略目標を定めていました。

「第一目標はここ、『海軍本部』司令部。元は地下坑道だったところで。深さもほとんどありませんので、外の敵を一層した後に制圧するのは、全く時間は掛からないでしょう」

情報を精査していた兵が、新瑞さんなどと地図を広げた机を囲ん

で、目標を定める会議を行っていました。

「第二目標は……」

名前を言わずに指し棒で指した先には、ただの埠頭がありました。何の変哲もない、建物もそこまで立っているところではないところ
です。

「……ここは何だね？」

「はっ。……ここは恐らく『倉橋島泊地』だと思われます。小さいですが資源保管庫や入渠場があります」

恐らくというよりも、それは十中八九そうでしょうね。しかも位置的に考えてみれば、第一目標との距離もかなり近いです。

倉橋島泊地で間違いないでしょう。

「第三目標は、現在の攻撃で撃ち漏らした兵舎等になります」

こうやって話を聞いてみれば、存外に目標物は少ないんですね。

これまで大本営が追い込んできたという『海軍本部』の余力が伺えます。ですけどそれでも、陸上部隊を襲撃していた部隊の装備はあまり変わりありませんでした。

「作戦成功は『海軍本部』を指揮する幹部らの抹殺です。これは新瑞大將が定めたものでありますが、そもそも指揮官の人数が少ないと思われる
れます」

「私も同意見だ。それに頭を潰さねば、また沸いて出てくるだろう」

「はい。ですので、その任務をスカウトに任せることを私は……」

「ああ、それが良いだろう。この作戦に参加した部隊には尽く、そういった任務を出来る人間が居ない。私も君が言わなければ、私が言い出していたところだった」

大筋は決まったみたいですね。

困んでいた指揮官クラスの兵たちが散りました。

『血猟犬』は横須賀鎮守府に敵対的な組織の構成員などの顔写真などを収集していました。ですので、彼らも覚えているでしょう」

「私もそう思います。それを知っているの指示ではないでしょうけど、たしかに現実的な選択ですね」

私と西川さんは、そう言って話をした後椅子に腰掛けました。

既に部隊への連絡は始まっており、『血猟犬』なんて既に行動を始めています。

オペレーターに連絡が入ってきていますからね。

『スカウトよりHQ。幹部一名を射殺』

『HQ了解。引き続き任務を続行せよ』

『血猟犬』の指揮官である巡田さんは、きつと部隊を4つに分けています。

16人で構成されている『血猟犬』ですが、16人で固まって行動していると発見率が上がってしまいます。ですから4人で1つの部隊とし、それぞれに巡田さんが命令を出しているんだと思います。報告も巡田さんが行っていますし。

続々と入ってくる幹部射殺報告に、少しずつ作戦室の雰囲気も変わっていききました。

状況は優勢ではありませんでしたが、部隊にかなり被害を受けていましたからね。そして艦娘の登場によって、予測はされていましたがかなり混乱に陥りました。

ですけど、ここまで来たんです。最終段階に入った今、皆平静にことをこなしています。心の中ではきつと別のことを考えているに違いないありません。

そんな時、作戦室に一報が入ります。

『スカウトよりHQ！スカウトよりHQ！巡田が頭部に被弾、戦死ッ!!』

時間が一瞬止まります。そう言った報告は、作戦中にはありませんでした。

こういった報告というのは、作戦行動中にあるものと言えば指揮官クラスのもんです。作戦続行や指揮系統に問題を生じさせるような人物の殉職時のみにはされるものらしいです。

「じ、状況報告せよ」

『現在第一目標から脱出した幹部と護衛を襲撃。その際、遠方からの狙撃により……』

狙撃……。となると助かる見込みは無し。即死判定だったんです。

ね。

心が掻き乱されていきます。陸上部隊の戦死者でも私は感傷的になりませんでした。今回はそれ以上です。面と向かって話したことのある人ですし、何よりお世話になった人であり上司ですからね。

「HQ了解。亡骸を隠し、作戦を続行せよ」

『スカウト了解。現場の指揮は次席指揮官に委譲する』

通信の向こう側がどういった状況になっているのか、私には想像が付きません。

軍人ですから、隣の仲間が死ぬことに対して心の準備はしていたでしょう。

ですけど、私には出来ていませんでした。隣に立つ人、目の前に居る人、この目に映る人が”死ぬ”なんてこと、ほとんどありませんでしたからね。

前の仕事（看護師）の関係では、患者さんが亡くなることはよくありました。それには心構えというものをする猶予があったんです。危篤であつたりだとか、予兆があつたりだとか……。ですが戦場に於いて危篤状態に陥ることや予兆が現れることなんて、ほとんどありません。私が気付かないだけかもしれませんが、何かしらの予兆があつたとしたら、それが積み重なってこのようなことになったんでしょう。

そのような状況に陥っても、私はどうしてか心が乱れるだけでした。

巡田さんのことを考えていたら、作戦が進んでいました。

作戦艦隊が倉橋島に到着し、第一波・二波攻撃を開始した後、『降下猟犬』を乗せた赤城・加賀航空隊が発艦したとのこと。

作戦艦隊・水上打撃艦隊と第二・第五航空戦隊の航空爆撃の効果は想像以上で、倉橋島地表に点在していた対空陣地や兵舎などなど、『海軍本部』の施設として断定されていたもの全ての破壊を行い、地面もクレーターでボコボコになっていました。

作戦に前後や変更点などはありましたが、筋書き通りにことを運ぶことが出来ていたみたいです。残すは陸上部隊の突入で『海軍本部』の殲滅を行い、それで作戦は成功です。再起不能にまで追い込むことが出来れば、それで全てが終わるんです。

『降下猟犬』、降下開始。倉橋島東にて敵の残存勢力と交戦を開始」
「待機中の陸上部隊も呼応して倉橋島に侵攻を開始」

オペレーターによって伝えられる情報。私は耳を傾けて、覚えている作戦の筋書きを思い出していきます。

先ほども考えていましたが、全て筋書き通りにことが進んでいました。予測していない事態も起きていましたが、迅速に対応出来ていたと思います。

それに呼応するかのように、事態が動き出します。

作戦艦隊が発見した空母6人で構成された空母機動部隊より、攻撃隊と護衛戦闘機隊が発艦し、作戦艦隊に向かっているとのこと。状況から考えるに、攻撃目標が作戦艦隊なのは自明でした。

それに対する作戦艦隊の動きはというと、『降下猟犬』を降ろした赤城・加賀航空隊を対応に回すことでした。第二・第五航空戦隊の航空隊は、一度着艦してしまっているのです。後で上がるようです。

そんなことが海上で起きていても尚、作戦室では陸上部隊の動きが最優先でした。

侵攻を始めた陸上部隊は次々と倉橋島の要衝を踏破し、全域の安全

確認などを行っていたんです。

オペレーターのもとには続々と状況報告がなされていき、予定していた目標物の攻略なども着々と終わっていつているその時、一報が報じられます。

『こちら第二憲兵師団。倉橋島泊地の制圧に成功』

そう。倉橋島泊地。この作戦に於いて、一番厄介だった相手です。その存在を事前に知ることは出来ませんでした。情報を精査し、迅速に正確な対処が出来ていたと思います。

憲兵師団から、内部状況などが事細かに知らされていきます。

『艦娘を運営するだけの設備・資材の備蓄を確認。寮と思われる建造物からは、50名以上の艦娘を発見。目視では体の異常は感じられない』

「HQ了解。艦娘は保護し、引き続き制圧状況を知らせよ」

艦娘が見つかった。それは想像通りのことでした。

海で対峙したというのなら、存在していなければなりませんからね。

ですがやはり、口頭での状況伝達というのはもどかしいところがありますね。ちゃんとした容態なども気になるところです。

『海軍本部』に使われていた艦娘たちですからね。

そして他の隊からの制圧状況報告が着々と入っていき、全ての確認が終わりました。

これで倉橋島の制圧は完了です。残すは作戦艦隊が戦っている空母機動部隊だけです。

ですがここで私は疑問に思いました。

私はこの世界の仕組みなどはほとんど分かっています。紅くんが関わっていたことなども。

そんな私でさえも分かることがあるんです。”艦隊の運用可能上限”のことです。

何故これを今ここで取り上げたのかというと、理由は単純です。

倉橋島泊地が作戦艦隊の迎撃に出した艦隊の数は3つ。1つの泊地ないしは鎮守府が運用可能な艦隊数は、4つの艦隊にそれぞれ6人

の艦娘です。

普通に考えれば、あと1つ、艦隊が残っていることになるんです。

「空母機動部隊も航空戦力を失えば、ただの浮いている的だな」

「ええ。退艦するように赤城さんが呼びかけているみたいですが、全ての艦隊で退艦を行ったようですね」

そんな話をしている新瑞さんと西川さん。私の考えていることと、ほとんど内容は噛み合っていないんですが、お2人は私のようなことを考えているのか分かりません。

ですけど、お2人はこれで終わりだと思っているはずですよ。

「……まだ終わっていませんよ」

私はそう言いました。

お2人はおろか、作戦室にいる皆さんが私の方を向きました。

「どういうことだ？ 倉橋島は制圧し、今作戦艦隊が戦っている空母機動部隊を叩けば……」

「はい。ですから、それではまだ終わらないんです」

私は確証を持ってはいませんが、その話をしました。

4つの艦隊が運用できることについて。

「1つの鎮守府ないし泊地は、4つの艦隊まで運用することが出来るんです」

とは言っても、横須賀鎮守府は完全にそれを無視していますけどね。

それもあってか、お2人はそのことに気づかなかったんでしょう。というよりも、そのことを知っていたんでしょうか。そこからの話です。これは。

「横須賀鎮守府は特例みたいですが、他の鎮守府や泊地はそういった制限が掛かっているはずですよ。倉橋島泊地こそ特例中の特例ではあります。艦娘の運用に関して素人同然の『海軍本部』が定められた運用方針外を執ると思えません。……と考えると、あと1つ。あと1つ、艦隊が残っているはずですよ。私たちが気付かないだけで」

「な、にっ……?!」

新瑞さんの顔がみるみるうちに険しくなっていました。

西川さんも「あ、そういうえば」みたいな表情をしています。

「絶対にまだ、海上での戦闘は続きます」

「……………」

「……………」

「……………」

作戦艦隊が空母機動部隊からの攻撃隊への対応が行われている最中、ドローンの1機が海上で艦隊を確認しました。

その映像は作戦室に送信され、私たちはその映像を見ることとなったのです。

特に動きのない今、海上の映像だけに集中して見ている私たちは、目に飛び込んでくるその”大きな影”に押しつぶされそうになっていました。

「あ、あれはっ……………」

「なんてことだ……………」

「クソツ!!」

6人編成の艦隊が、作戦艦隊に向けて急速接近中なんです。編成を確認するしな限らず、その姿を見た誰もが正体が分かったんです。

作戦艦隊にも含まれていない上に、今の状況で作戦艦隊がその艦隊と交戦しても、勝機があるのかないのか分からないような相手…………。そう、大和型戦艦が現れたのでした。

「大和型戦艦2、重巡4……………」

オペレーターが大和型以外にも確認したところ、戦艦ではなく重巡だったみたいです。

形状から型が分かるんですが、そんなことはどうでも良いことなんです。問題はその大和型戦艦にありました。

「何かあるとは思っていたが、まさかこれとは…………。作戦艦隊の現状は?…」

「現在、空母機動部隊と交戦中にあり。初撃の航空戦は無理と判断ツ!!」「水上打撃部隊の残弾が3割ほどになっており、継続した水上砲撃戦は困難かと」

「効果的な打撃を加えられる大型艦が、まともな攻撃が出来ないだ
とっ?！」

状況最悪です。今までにないくらいに絶望的でした。

いくら30人以上で編成されている大艦隊の作戦艦隊が、6人の通
常編成艦隊と交戦したとしても、相手は世界最大最強の戦艦。大型艦
の主砲残弾数も正面切つて戦うほど残ってない今、数の差などほとん
どないように見られました。

「……私たちには何も出来ることはないが、支援は出来るだろう」

そう言った新瑞さんは、オペレーターに言つて航空教導団の出撃可
能な数を聞いた。

「航空教導団で出撃可能な機体は？」

「迎撃隊との交戦後の補給で後が詰まっています。それにパイロット
の疲労のことを考えると……」

航空教導団はジェット戦闘機では慣れることのない、レシプロ機相
手の格闘戦をしていた訳ですからね。そりや疲労も貯まっているで
しょう。

それに補給で後がつかえているということは、殆どの機体が戻つて
きていることになりませぬ。倉橋島の制圧も完了しましたし、制空権
を確保しておく理由もなくなった訳ではありませんが、現状、『海軍本
部』の航空戦力は作戦艦隊が交戦していた空母機動部隊以外には残つ
ていませんからね。

「出撃可能になった機体から上げれば良い。作戦艦隊と大和型の艦隊
の交戦を支援せよ！」

新瑞さんはそういう命令を下しました。

赤城さんたちは、恐らくですが支援を望んでいません。航空戦力が
空母機動部隊に向かっている現状、新瑞さんがおっしゃった通り、作
戦艦隊の空母機動部隊から航空隊が出るとは思えません。

となると、交戦に入る時には砲雷撃戦になります。近接戦になりま
すから、航空支援などうっとおしだけかかもしれません。

――
――

大淀さんの『空母機動部隊の無力化に成功』から、細かく入った報告もピタリと止んでしまします。

作戦艦隊にも大和型戦艦の艦隊が確認されたんでしよう。対応策を練っているのか、それとも混乱に陥っているのかは分かりません。ですけど、状況はドローンから送信されてくる映像で分かります。艦隊からの砲撃が作戦艦隊のところから夾叉で落下。それからというもの、数分間動くことはなかったんです。

一体、どうしたと言うのでしょうか。

普通ならば回避運動を取り始めるべきタイミングです。ですけど、作戦艦隊は動かなかったのです。

「混乱しているんですね」

私は状況を鑑みて、そういう結論に至りました。

ですが、その後すぐに作戦艦隊は動きだしたのです。全速力で艦隊が向かってくる方向とは反対側に艦首を向け、陣形を特殊な陣形から空母機動部隊を守るような陣形、輪形陣に変更したのです。

そして続々と戻ってくる艦載機を収容しながら、海域の離脱を図り始めました。

一体、何をしているんでしょうか。

正面切つての砲雷撃戦をするのではなく、作戦艦隊は退避を選んだのです。私にはその選択の意図が全く分かりませんでした。

ドローンから送信されてくる映像を、作戦室に居る人間は全員が注目して見ていました。

既に陸上部隊によって倉橋島の制圧は終わっています。残党勢力は次々と投降してきており、武装解除・拘束して開けたところに固めているみたいです。中には負傷兵も居るみたいですけど、その手当も順にやっていっている現状です。呉司令支部から倉橋島への道中にある野戦病院には、既に呉から出発した近隣の衛生部隊や救急隊が動いて搬送・治療を行っているとのこと。

今でも戦闘をしているのは海上だけでした。

現在、作戦室ではある話が持ち上がっていました。それは『横須賀鎮守府艦隊司令部に残っている艦娘に応援要請をし、現在交戦中の水上打撃部隊と交代してもらうこと』でした。

私もそうですけど、この話を聞いた西川さんは顔をしかめました。その要請をしたところで、艦娘の誰一人として支援に出てくるとは思えなかったからです。横須賀鎮守府艦隊司令部の指令系統は、別の軍や部隊と違って特殊なんです。

現在は鎮守府全体の指揮を代理という形で赤城さんや長門さんが負っています。そのポストに紅くんが居たのなら別の話でしょう。ですけど、今は別の人が代理を勤めています。

そしてそもその指揮系統にも特殊さがありました。紅くんの命令でなければ、横須賀鎮守府艦隊司令部は軍事行動を起こさないんです。それは門兵、『柴壁』に至るまでです。

安易な考えに、私と西川さんは顔をしかめてしまったんです。映像はどんどん移り変わり、戦況が一変したことを知らせます。海域からの離脱を図っていた作戦艦隊が回頭を始め、大和型戦艦の『不明艦隊』に向かって行き始めたのです。この行動には、作戦室の誰もが困惑しました。

相手は大和型戦艦。それも2人ということは、大和と武蔵というこ

とになります。その2人で霞んでいます。4人の重巡も普通に厄介です。

「作戦艦隊との通信は？」

「応答がありません！」

「クソッ!!」

撤退から回頭をして正面に向かったということは、混乱している訳では無いんでしょう。

ですけど、通信に出ないのとは何か訳ありということでしょうか。それとも、あえて出ないのでしょうか。

私には分かりませんでした。

そうこうしていると、作戦艦隊が部隊を2分しました。

空母機動部隊・水上打撃部隊と水雷戦隊。空母機動部隊を守るように輪形陣を取っていた陣形から、駆逐艦と軽巡だけが離脱していったんです。

そしてそのままある程度の陣形を取り、『不明艦隊』に攻撃を仕掛けました。

「小型艦では太刀打ち出来ないのでは?！」

作戦室に居た誰かがそんなことを言いました。確かに船の大きさも武装の大きさも比べるまでもなく、大和型の方が大きいんです。

そんな相手に水雷戦隊で当たるのは自殺行為にも等しいものであります。ですけど彼女たちはそれを実行したんです。

—————

—————

—————

『不明艦隊』との戦闘が始まってすぐのことです。水雷戦隊に動きがありました。

今までまばらだった攻撃が、しつかりとした目的のある攻撃へと変化を見せたのでした。ある程度固まって動いていた艦隊の陣形に変化があり、水雷戦隊が単縦陣を取ったのです。

そしてそのまま大和・武蔵の片舷集中して攻撃を始めたのです。

この攻撃には新瑞さんに覚えがあつたらしく、さつきまで出ていた

額の汗が消え失せていました。焦りからくるものの汗が引いた。つまり、焦る必要がなくなったことを表しています。

作戦艦隊が既に敗北する未来が見えているのなら、何か行動を起こすはずです。ですけど、その様子が見られませんでした。

ということは、今の戦いも勝つということでしょう。

新瑞さんは何も言いません。どうして勝つのか、その理由も。

ですけど、おとなしく戦況を見ていればそれは次第に分かってきました。

「大和型の1隻が傾斜を始めました！」

転覆させるつもりなんでしょう。単縦陣での戦闘に移行した時から、水雷戦隊の攻撃は魚雷がメインになっていました。

砲よりも威力が高い魚雷を片舷に集中して攻撃することで、相手のバランスを崩しているということでしょう。

その攻撃に気付いてから数十分後には、大和型の攻撃が止まりました。そしてその頃には重巡も大和型に向けて放っていた魚雷を食らったりだとか、別れていた作戦艦隊からの攻撃によって無力化されていました。

「作戦艦隊の戦闘停止を確認しました!!」「『不明艦隊』の無力化を確認！」

そして最後の戦闘は幕を降ろしたのでした。今までは作戦に於いても支援の支援として組み込まれていた水雷戦隊が、この作戦始まって以来の危機を退けたのでした。

—————

—————

—————

大和型戦艦の『不明艦隊』との戦闘終了後、陸上部隊からの連絡がありました。

倉橋島の制圧が終わっていたことは既に連絡を受けていましたが、違うものが入ってきたのです。

倉橋島に残っている武装勢力が陸上部隊だけになったことを確認した、ということでした。これが何を意味しているのか……。答えは

単純です。

この作戦、『黎明の空』作戦の成功を表していました。作戦が成功したというのに、作戦室は騒がしくなることはありませんでした。

連絡を受けた直後から、陸上部隊の撤退命令を出したり、各方面への連絡などが始まったのでした。その中で何もしていなかった私や西川さんは、ただ呆然とその作業風景を見ていることだけしかできませんでした。

「……終わっただんですよね？」

「はい。そうみたいです」

私は西川さんにそう言いました。今の状況を見ていて、作戦が成功したようには見えなかったからです。

『海軍本部』は完全に無くなった。そう考えても良いんですよね？」
「はい」

私は『海軍本部』がどういうものなのか、誰かからの言葉でしか聞いたことありませんでした。

どういったことをしてきて、何が起きていったのか……。そんな聞いたことしかなかった敵、『海軍本部』が消えたことに対してどうリアクションを取れば良いのか分かりません。

最終目的は紅くんととの再会です。それが達成されていない今、私はまだ通過点程度にしか思っていないませんでした。

そんな私とは打って変わって、西川さんはじわじわと作戦成功の実感を持ち始めているようでした。

顔がだんだんとにやけてきているからです。私にはその表情はまだ出来ませんでした。

――

――

――

ひとまず私たちは初期処理が終わった後に、作戦室を追い出されました。

後々の処理には邪魔になるから、という理由を添えられて。新瑞さ

んの仕事は、この作戦の全体の指揮を執っていたことから、最終決定を行う程度のことしかかないみたいで、私たちと同じように作戦室から出て行っていました。

気付けば既に夜になっており、時計に目を向けると9に針を指していました。

「作戦艦隊に撤退命令を出してある。むしろたちも帰ると良い。今後のことは追って連絡する」

「分かりました」

正確には現場にいましたが、現場に居なかつた気分の私にとっては今の状況を不思議に感じていました。

『黎明の空』作戦が成功したこと。巡田さんが戦死したこと。今までモニタ越しにしか見ていなかった戦場は、本当はリアルに作られたテレビゲームかなにかなのでは、と思っっています。

ですから、『黎明の空』作戦はシミュレーションで成功し、その最中に巡田さんが戦死してしまった。そういう風に作られたシナリオだつたんじゃないか、と。

この世界に居ること自体、夢か幻のような気分になることがあると
いうのに……。

「現在まで分かっている、暫定的な状況を報告しておこう。それから夕食を食べて寝ると良い」

「了解しました」

私は返事をしませんでした、西川さんは返事をしました。

「倉橋島に残っている陸上部隊の憲兵たちが、『海軍本部』の痕跡を調査し始めて結構な時間が経っている。そこまで分かっていることは、『海軍本部』の残っていた戦力を全て投入した総力戦であったことと、武器弾薬共に出し惜しみ無く使っていたことだ」

私は少し考えました。

新瑞さんが言った言葉の意味の理解に時間が掛かってしまっているのです。

「本来想定されていた状況の中に倉橋島に埋蔵した爆発物を使う可能性があつたが、それも無い程に爆弾の備蓄も無かつた。地面を吹き飛

ばし、地雷代わりに使えるだけの余剰砲弾も無かった」

つまり、今回の私たちの攻撃に対して、かなりの抵抗を見せたかのように思えた『海軍本部』は、そもそも大本営に追いたてられていたために補給物資がろくにない状況で戦っていたということらしいです。

アレだけの被害を出したというのは、きつと『海軍本部』が必死に抵抗をしたからでしょう。襲撃を徹底したり、防戦しかなかったことも頷けます。

「抵抗する分の備蓄が無かったから、あれだけ容易く投降が始まったのだと思う」

私たちが戦った相手は、そういう状況にあったのだと初めて知りました。

幅のきかせ方や規模、参加しようとする手を挙げる部隊の少なさから私は勝手に勘違いしていたみたいですね。

『海軍本部』の幹部の遺体も全て確認した。これで安全は確保されたと言っても良いだろう」

何の安全を確保出来たのか、新瑞さんは具体的なことを言いませんでした。ですけど私にも西川さんにも分かりました。

もう軍病院に居る紅くんを横須賀鎮守府に戻しても良いということが。それだけの環境にすることが出来た、ということですよ。

私たちはこの後、前日と変わらない夕食を摂って床に就き、早朝に呉司令支部を出発しました。

第71話 提督〈紅〉を探しに来た姉〈私〉の話

私たちが帰るなり、鎮守府内は慌ただしくなりました。現在任務中の各部隊への伝令や事務棟への連絡から始まり、赤城さんと金剛さん呼び出して全艦娘への通達。酒保などへの連絡等々……。

そんな鎮守府ではありませんでしたが、重要なことを忘れていました。本当に紅くんは帰ってくるのでしょうか。

私が出たことを口にした時、近くに居たのは赤城さんだけでした。そのことは赤城さんも気になっていたようで、すぐに連絡を取ろうと言います。

「今から電話のあるところに行きましょう」

「そうですね。私たちが帰ってきてから4日ほど経っていますから、新瑞さんに電話しても多分大丈夫でしょう」

忙しかったので忘れていましたが、呉から帰ってきて4日ほど経っています。

連絡を終えた私たちは、それぞれの部署に連絡を出して会議を繰り返していました。それはもう休憩という休憩が無かったように忙しかったです。ですから気付けば4日も経っていました。

そして、休憩をあまりしていなかったからか、疲労で酒保の人がその場で寝てしまったことから始まり、今は全体に休憩をするように言っています。

私はというと、私も忙しかったですがそこまでではありませんでしたし、ちゃんと休憩中にご飯を食べたり寝たりしているので、そこまで疲れては居ないんですね。それは赤城さんも同じだったみたいです。

赤城さんとはたまたま同じ会議に出席していて、そのまま休憩に入ったので一緒に外のベンチに座っていました。

ちなみに他の人たちは会議をしている部屋で、そのまま寝ています。なんていうか凄い光景でした。

「今電話があつて人が居ないところってどこでしたっけ？」

「確か……地下司令部だけだったような。あそこでは会議は出来ませ

んし、会議室や事務の出来る部屋以外で電話の通っているのはあそこだけです」

「今すぐ行きましようか」

「そうですね」

私たちはベンチから立ち上がり、地下司令部を目指します。今回の休憩に与えられた時間は3時間です。それまでにはかなりの時間があるので、ゆっくり行きましよう。

ちなみに、こんなに忙しく何の会議をしているのかというと、『どうやって紅くんを出迎えるか』『帰還式をどうやって行うか』『帰還式の来賓に誰を呼ぶのか、それとも誰も呼ばないのか』等々。正直必要なのか、という会議もあったりする。それは『私（ましろ）の何をどうやって説明するのか』だ。正直に言ってしまうえば良いような気がしますけどね……。

それはともかくとして、地下司令部に着きました。

初めて入る訳ではありませんが、私は赤城さんの後に続いて入っていきます。

――――

――

――

地下司令部は地上施設よりも静かでした。というよりも、管理の妖精さんしか居ません。そんな地下司令部を新鮮に感じつつ、電話の前までやってきます。

受話器を取り赤城さんはボタンをプッシュします。

そしてコール音が受話器から聞こえてきました。

『海軍部 新瑞だ』

「横須賀鎮守府の赤城です。本日は少し聞きたいことがありますて」
そう切り出したが、どうやら新瑞さんは分かっていたみたいですね。

『天色 紅提督のことだな？ あと3日後に横須賀鎮守府に到着予定だが？』

「あ、ありがとうございますっ!!」

『用件はそれだけなのだろう？ 私も電話をする予定だったから丁度いい。こちらの用件も伝えておく。実は』

受話器越しでも、私には新瑞さんの声は聞こえてきます。そして新瑞さんの伝えたかった用件というのは……。

『実は天色 紅提督の帰還に伴い、私と総督もそちらに向かうつもりだ。そちらは受け入れの用意などは要らないから、何かするのなら席でも用意しておいて欲しい』

「分かりました。……では3日後に」

『ああ。よろしく頼む』

それだけで電話は終わったそうです。

事前に知らせたいことは、自分たちも行くからということだったんですか。確かに知らせておく必要がある内容でしたね。私たちの方の準備は、完全に紅くんを迎えるだけの準備をしているだけに過ぎませんでしたから。

受話器を置いた赤城さんは、そのまま何かを考え始めたみたいです。多分、新瑞さんと総督をどうするか、についてでしょうね。

私としては、別に私たちや『柴壁』と一緒に立って貰えば良いような気もしますけどね。

「……まあ、特別何かする訳でもありませんし、それとなく多方面に伝えておけば良さそうですね」

赤城さんも同じことを考えたみたいです。私に言ったのか、独り言なのか分かりませんが、そう言いました。

これで地下司令部の用は無くなりました。まだ休憩時間は残っていますので、どうしましょうかね。

そんなことを話しながら、私と赤城さんは地下司令部を後にします。

――

――

――

紅くんが帰ってくるまでの3日間は、本当に忙しかったです。それまでの会議漬けの方がまだマシなように思えるほどに忙しかったん

ですから。

最初に横須賀鎮守府全域の清掃活動に、出迎えのアーチ的なやつ
の練習。紅くんが居なかった約2年（初期の頃）で売り飛ばしてし
まった資源の再回収、鎮守府近海の掃討作戦。これは艦娘の皆さんの
仕事でした。私たち『柴壁』や酒保の人たちの仕事は主に、物資の運
び込みや買い付けなどでした。そして到着2日前に突然新瑞さんか
ら届いた『海軍音楽隊が演奏するらしいから、その準備も頼んだ』と
いう言葉に踊らされ、大慌てで舞台と設備、席の設置を行った。ちな
みに本来の物資の運び込みや買い付けだけだったら、ここまで忙しく
なることは無かったです。

皆、口々に『することありがたいけど、直前に言わないでくれ……』
と愚痴をこぼしながら作業していたのを覚えています。

そして紅くんが帰ってくる当日。

皆、やっと逢えるという喜びや嬉しさ、帰ってくるからと言って
ずっと掃除をしていたり、準備をしなくてはと早朝から起きてきてい
ました。

それは私も変わりません。皆さんは2年逢えなかったんですが、私
はそれよりも長い時間遭ってませんからね。

今日という日をどれだけ待ち望んでいたか……。

今日という日をどれだけ夢見てきたか……。

私はそんなことを心に秘めて、予定時刻まで作業をし続けます。

——そして、その時は来ました

今日の天気は晴天。雲ひとつない青空の下、季節は春を迎えて、正門から伸びる長い道の両脇に植えられている桜の木々が花をめいっぴい広げています。

鼻孔をくすぐる花とお陽様の香りに包まれながら、私や100名以上の艦娘、1500名以上の『柴壁』と酒保従業員は今か今かと待ち構えています。

これまでの長くはありませんでしたが、紅くんを取り戻すために戦った日々。そしてこの中で唯一、生きたまま遭うこと叶わなかった巡田さん。

全てはこの日この時のために費やしたことでした。

私がこの世界に来た時、横須賀鎮守府というよりもこの国自体に生気は感じられませんでした。まさしく”死んでいるかのような”様子だったんです。

そんな中で、私たちは紅くんが生きていることを知り、紅くんのために働きました。そしてそれが今！ここに報われようとしているんです。

皆は、長い時逢えなかった紅くんのために

私は、行方不明になった実の弟を探しに

鎮守府の前の道を通り過ぎる自動車の音に、一々反応をしては深呼吸します。

落ち着こう、落ち着こう。やっと逢えるのだから……。そんな声が聞こえてくるようでした。

風に靡く桜の枝にふと目を向け、舞い散る花びらに目を奪われます。ひらりひらりとゆっくり地面に落ちていく様は、まるで私が感じているこの時間を表しているようでした。

ゆっくりゆっくりと時間が過ぎていき、そしてその時が来たんです。

正門が開き、自動車が3台だけ入ってきました。その前後を固めていた装甲車は門の外に止まります。

自動車の2台目だけが、私たちが出来たアーチの前に止まります。

ガチャ……

少し離れたところに止まった車から、人が降りてきます

——コツ……コツ……

その、降りてきた人は……

——
みんな

——
ただいま

——
おかえりなさいっ!!

私が探しに来た紅くん〈提督〉だったんですから——
「おかえりなさいっ!! 紅くんっ!!」

After Story 私と紅くん

帰ってきた紅くんは、遠い昔の記憶と同じ表情をしていました。少し痩せたというか、顔付きが険しくなったような気がしますけどね。

帰ってきた紅くんを迎え入れ、皆さんがどんちゃん騒ぎをしている中、私はいつ話しかけようかと悩んでいます。

私の言った『おかえりなさい』だって、きつと横須賀鎮守府の人たちの声にかき消されていたに違いありませんから。

「おかえりー!! 提督うー!!」

「うわっ!! 抱きついてくるなっ!!」

「安心したよおおおおお!!」

「泣くな泣くなっ!! ああもう!! 皆どうしたってんだ!!」

「二二そりやもちろん、やつと帰ってきたから」

群衆の中心にいる紅くんは、艦娘の皆さんや『柴壁』の皆さん、酒保の皆さんに囲まれています。

その外れ、群衆の外に居るのは私だけなのかもしれません。私が近づくのはまた後でも良いでしょうからね。それにいきなり私の姿を見て、驚いてしまうかもしれませんし。

「新瑞さんと総督がいらっしやっているから、一旦整列してくれないか?」

皆が泣き叫ぶ中、その声があった刹那、皆が元いた位置に戻ってきました。私はまた皆の中に紛れ込みました。

そして少し遅れてきた新瑞さんと総督が紅くんに近づいていきます。

多分、新瑞さんの横に居る方が総督なんでしょうね。私は見たことありませんけど、総督の方は私のことを知っているんでしょうけど。

「改めて、これからもよろしく頼む」

「ええ。出来得る限り、力を尽くします」

「頼む」

それだけの言葉を交わした総督は、少し離れたところに行ってしまう

いました。

次は新瑞さんのようですね。

「こうやって直接話すのは何時振りだろうな。改めて、全快おめでとう」

「そうですね。ありがとうございます」

「逐一、部下がそちらに現状の詳細が書かれていた書類を送っていたが、日本皇国全体で起きていることは把握できているな？」

「もちろんです。つい先日、大本営主導の『海軍本部』殲滅に向けた最終作戦が成功したことも……。テレビや新聞では『クーデターを企てていた一部の軍の討伐を行った』というような言われ方をしていたんですけど、メディアや国民の方にも『海軍本部』の存在は知られていたんですよね？」

「ああ。だが、今回ののは被害が被害だけにそういうことにさせてもらった」

「そういうことでしたか」

事務的な会話をしているのか、はたまた専業主婦の昼間の井戸端会議とはまた違いますけど、そういうような会話にも見えます。

「先日送った報告書にもあっただろうが、最後は横須賀鎮守府の戦力も使わせてもらった」

「はい。……結構な人数を投入して、こちらだけ戦死者1名というのはなんとというか……。その……」

「いい。それに”彼”の働きは大きかった。日本皇国に巢食うガンの殲滅に大きく貢献してくれたいたからな」

私はそんな2人の会話を遠目から眺めていました。

話している内容は、周囲が静かですので普通に聞こえてきます。

「ああ。……済まなかったな」

「何のことだか分かりませんが、よしてください。私は何もしていません」

「……それでも、だ。私自身が君に謝りたいと思ったから、謝っただけに過ぎない」

「そうですか」

そんな会話も、すぐに切り替わります。

今までの話をしていても仕方ありませんからね。

「それで、だ。君には報告書になかったことも、報告しなければなら
ない」

その言葉に、紅くんはあまり反応しませんでした。ですが、私は反
応してしまいました。

何か報告を怠ったものでもあったんでしょうか。それとも、今まで
意図的に報告していなかったのか……。

「今まで黙っていたことだ」

「そりやそうでしょうね……」

何かあったんでしょうかね？ 私は記憶にありませんので、きっと
大本営と紅くんとの間でのことなのでしょうか。

「君のお姉さんがこの世界に来ている」

「はい？」

……なるほど。私のことは紅くんに知らせてなかった訳ですか。それもそうですよね。つい最近、新瑞さんは私と初めて会いましてからね。

紅くんは一瞬動きを止めたかと思いきや、すぐにあれこれと新瑞さんに訊きます。

軍病院に居た『天色』という苗字の人は、この世界の『天色 紅』の姉であることや、その名前を語っている一般人なのではないかとかそういうことを新瑞さんに訊いていました。ですけど、新瑞さんは首を縦に振ることはなかったんです。

そして、私のことを簡潔に説明を始めました。

「君のお姉さんは横須賀鎮守府艦隊司令部所属 私設軍事組織『柴壁』の構成員として、横須賀鎮守府に居る。今もどこかに居るんじゃないだろうか？ この盛大な出迎えの中に紛れて」

そういった新瑞さんの言葉を聞き、紅くんはバツと振り返って並んでいる私たちの顔を順番に見ていきます。

そしてその途中で見つけた武下さんにも、私のことを訊き、探します。

……そして、その時は来しました。

紅くんが順々に見ていっていた『柴壁』の列に並ぶ私の前で止まり、顔を見ます。そして……。

「姉、貴……なのか？」

「う……ん」

「本当に？」

「うん」

じわーっと目頭が熱くなり、次第に視界がぼやけていきました。頬を伝う水滴がBDUに落ちていく感触を感じつつ、私は目尻に溜まった涙を手の甲で拭きます。

私の主観時間で約2年、ずっと探してきた私の弟が目の前に居ます。

さつきは遠目でしか見えませんでした。今は目の前に私のことだけを見ています。

紅くんったら全然変わってないんですから。やっぱり痩せた気もしますけど、表情は相変わらず仏頂面で髪が少し長く、近くまで行ったら見上げないと顔が見えないくらいに身長が高い。

それでいて、ぶっきらぼうな喋り方の中にある癖。私や家族にしか分からない癖が見え隠れし、少し頭を掻きます。

きつと恥ずかしいかったりだとか、何か心の中で感情が渦巻いているんでしょう。

そんな紅くんに向かって私は、精一杯笑います。

「おかえりなさいっ!! 紅くん!!」

また頬を涙が伝いました。本当に逢えるまで、どれほど辛いことを乗り越えて来たかと思うと、本当に本当に……。

私はそのまま持っていた小銃を投げ出して、紅くんを抱きつきました。私は小さくて、紅くんは大きいですが、紅くんは私の大切な弟ですから。何にも代えがたい、大事な、大事な弟なんですから……。

「うん。……ただいま、姉貴っ」

私の身体を包み込んでくれる紅くんはとても温かく、とても良い匂いがしました。

—————

—————

↓

正門前の桜並木から解散し、グラウンドでは帰還祝賀会が行われて

いました。最後の『黎明の空』作戦から帰還してすぐに準備に取り掛かった、この会はとんでもない騒ぎになりました。

料理は次々に運び出されてくるわ、舞台では艦娘艦種対抗一発芸大会やら、横須賀鎮守府ベストギャップ萌え選手権だとか……。かなり真面目に会議をしていたというのに、どうしてそんなモノが執り行われているんでしょうかね。

それと、こちらが呼び出した来賓の方々もかなり賑わっていました。私はそちらを決める会議には少しだけ顔を出していましたが、結構な人が出ていましたね。毎日鎮守府に物資を運んでくれる陸軍輸送部隊の方々(約100名)や、『柴壁』や酒保のご家族等々(計測していない)、横須賀市の市議会の方々等など。グラウンドを埋め尽くす人数が入念なボディーチェックや身体検査の後に入ってきています。もちろん、メディアは誰一人として居ないらしいですけどね。

これだけのことをするのに、どうやらかなりの額が飛んでいったらしいですけど、それは今気にしても仕方ないですよ。

そしてその帰還祝賀会も夕方には終わりを迎え、来賓を鎮守府の外に見送りをした後、私は紅くんに呼ばれて執務室にきていました。

何度か入った記憶のある執務室に、本来の主である紅くんが居ることに私は少し違和感を持ちましたが、これがこの執務室の本来の姿ですからね。

私は紅くんが座っている椅子と長机の前に立ち、話をします。

「姉貴……」

「はい」

「訊きたいことは沢山あるのはお互いだろう？　まずはあつちに座らないか？」

そう言っつて、紅くんはソファの方を指差しました。

私は言われた通りに、ソファに座ります。紅くんも向かいに腰を下ろしました。

「まずは何を訊こうか……。……姉貴は何かあるか？」

訊きたいことは、今のところ考えられませんが。知りたいことは全て、艦娘や『柴壁』の皆さんから聞くことが出来ましたから……。

きっと訊きたいことがあるのは紅くんの方の筈です。

「特に無いですね。紅くんの方こそ、私に訊きたいことは山のようにあると思いますけど?」

「その通りだが、姉貴は無いんだな?」

「はい」

私は頷きます。

「……どうしてここに居る」

「え?」

紅くんが最初に言った言葉はそれでした。

様々な意味を含んでいるであろう言葉、『どうしてここに居る』というのには、私はどれから説明すれば良いのか分かりません。ですけど、ただひとつ言えることがありました。

「どうしてここに居るんだ、姉貴。この世界に”呼ばれた”のは俺だけだった筈だし、姉貴を呼べるようなところは無い筈。それに、艦これをやっていかなかったらどう?」

「はい。紅くんの記憶にある限り、私は艦これをやっていませんでしたよ。ですけどね……」

そう。どうして私がこの世界に居るのか……。

「紅くんが居なくなつたあの日、紅くんの部屋のパソコンでは艦これが起動したままだったんですよ? 居なくなつた原因も方法もどこに行つたのかも分からなかつたあの時、私は紅くんの部屋に残されていたモノが何か理由があつたんじやないかって調べました。それで見つけたのがパソコンだったんですよ」

「パソコン……。そういえば、パソコンに……」

「はい。紅くんの性格上、パソコンを起動したまま居なくなることはありませんでしたからね。ですから、何も手がかりが無い状況下で、私はパソコンの艦これがきつかけだったんじやないか、つて思つたんです」

ですから、私は艦これをプレイし始め、調査を始めたんです。

「何もかもが分からない状況で、私は艦これにすがるしかありませんでした。そして調査していくと分かったことがあつたんです」

「……」

「開発資源や高速修復材、各資材の数値が勝手に上下していたんですよ。これはつまり、紅くんがこちらで行っていた艦隊運営がこちらに反映されていたってことです。ですから、私は確信したんです。『紅くんは艦これの世界に行ってしまったんだ』と」

推理ではありますが、これは的の真ん中を射ているはずですよ。これを外していたのなら、私がここに居る理由も、紅くんが目の前に居る理由も説明が付きませんかね。

「そんなことが分かって、お父さんお母さんにそのことを言っても信じてもらえませんでした。頭がおかしくなったんじゃないかって思われたくらいですよ」

「……」

「そして半年前、私はこの世界に来ました。きっと状況は紅くんと同じだったはずですよ。ですけど、私と紅くんとは決定的に違うものがありました。……紅くんは運営していた鎮守府サーバーに現れたんだと思います。ですけど私が現れたのは、ここから自動車で数十分のところでした」

そう。この違いが何かを表しているんです。紅くんと私とでの決定的な違いを。

「私は岩国でしたから、ここ横須賀に現れること自体変なことでした。ですけど、私はこの世界に来て、紅くんが居ることに確証を得た後、ここに来たんです」

「……そうだったのか」

「はい。……ですけど、この格好には納得していないみたいですね」

「そりゃ、な。実の姉が看護師していると思ったら、今は兵士だからな……。いいや、今は会社員か」

私は頷きます。今は私設軍事組織『柴壁』の二等兵。軍人と民間人の間の立ち位置に居ますからね。

「大体分かった。……もう起きてしまったことだし、決めてしまったことだから今からではどうしようもない。けどね」

紅くんは凄みました。

今までに見たこともないオーラを放ち、私の顔を見たんです。その表情は怒ってるようにも見えましたが、それはまた別。本当に見るのが初めての表情でした。

「どうして兵士になったんだッ!! 姉貴ッ!!」

私の腰にぶら下がっているナイフが音を立てます。

今も私はBDUを着ており、紅くんからは『柴壁』の前身である横須賀鎮守府艦隊司令部警備部の人間にしか見えないんでしょう。

「こうするしか方法が無かったんですよ。ここに居るために、紅くんを探すためには……。ですから私は兵士になった、ならざるを得なかったんですッ!!」

私は兵士にならざるを得なかったんです。ここに居るため、横須賀鎮守府に居るために私は兵士になったんです。銃を握ってしまったんです。

「そうか。……今更何を言っても仕方がない。……所属は？」

紅くんの切り替えの速さに驚きつつも、私はそれに答えます。一応、立場的には紅くんは上官ですから、それなりの態度で言わなければなりませんね。

私は立ち上がって敬礼をし、自己紹介をします。

「日本皇国海軍横須賀鎮守府艦隊司令部所属 私設軍事組織『柴壁』
『血獵犬』 諜報班 天色 ましろ二等兵です」

ポカンと口を開けて聞いていた紅くんは、すぐに戻ってきて口を開きます。

表情には一瞬、驚きがありましたが、それをすぐに隠してしまいました。

「まあ、大学出てないから少尉任官は無理だったか……。まあ良いや。姉貴」

「はい？」

紅くんはスツと立ち上がります。そして私に向かって答礼をしました。

「かなり心配事が増えたが、今はそれを考えている余裕は無い。今俺たちがすることを考えて実行するだけだ」

手を降ろした紅くんは、私にあるものを渡してきました。

それは辞書並みの厚さのある紙袋。渡されると、その重さに一瞬よろけました。

「それは今朝方大本営から出された命令書だ。姉貴のも入っている」「えつと？ どういうことですか？」

そう言っつて、紅くんは私の持っている紙袋の中の一番上の書類を引き出して読み上げました。

「『本日0600を以て、日本皇国海軍横須賀鎮守府艦隊司令部所属私設軍事組織『柴壁』『血獵犬』所属 天色 ましろ二等兵は、日本皇国海軍に編入し、これと同時に事務官扱いの特務大尉の階級を授ける』。一気に何階級特進したんだ？」

「へ？ 特務大尉ですか？」

「ああ。そう書いてあるぞ、この辞令には」

そう言っつて、紅くんは私にその書類を渡してきました。

確かに、辞令にはそう書かれています。ですけど、この書き方だと私は最初から軍に籍を置いていたことになっていますね。私は軍に志願した覚えは無いんですけど……。

そのことに関して、紅くんから私が言い出す前に説明がありました。

「姉貴がこの世界に来て、横須賀鎮守府に入れるようにした時点で、既に軍籍になっていたみたいだぞ。そう新瑞さんも言っていたし」「そうなんですか……。知らなかったです……」

私はその説明を聞き、納得しました。確かに横須賀鎮守府は軍事施設ですからね。ここに滞在するとなると、軍人以外は特例以外はあり得ません。私はその時点では特例扱いされていませんでしたから、自動的に軍人になっていたんでしょうね。

私はその書類を机の上に置き、紅くんの顔を見ます。

紅くんは私の顔を見ていました。正確に言えば、目ですけど。その目は、私の記憶にある中では、いつもの紅くんの目でした。ぶっきらぼうで無口な紅くんです。

「何にせよ姉貴」

「はい」

表情は変えませんでしたでしたが、口調や声色から真面目な話をするこは伝わってきました。

「ここに居たのなら色々知っているだろうが、安全面を考えるとここに居た方が良い。だけど、俺は姉貴の意思を尊重する。どうする？」

「私はここに居ますよ。ずっと横須賀鎮守府に居ますからね。出ていくつもりはありません」

「そうか……。ま、転属なんて受け取って貰えないだろうけどな」

聞いたただけだ、と言わんばかりの表情で紅くんは笑いました。

私と紅くん以外は誰もない執務室で、誰にも邪魔されずに姉弟水入らずの会話は弾みました。

紅くんのことは、艦娘の皆さんや『柴壁』の人たちからかなり聞くことが出来ますが、やはり本人から話してもらうのが一番です。それに聞けなかったような内容も聞けたんです。楽しいこと、嬉しいこと、辛かったこと……。全てが紅くん自身が体験したことです。他人の見たものとは全然違っていたことが分かったんです。

そして、私が横須賀鎮守府に来て体験したことを話します。それは紅くんも興味があったみたいですね。自分以外の視点から、自分が居なかつた時期の横須賀鎮守府の状況が知れる訳ですから。

私はこの世界に来てからあったことを話します。横須賀鎮守府の様子や『柴壁』の人たちのことだけですけどね。

そして時は過ぎ去って行きます。

—————

—————

—————

約2年ぶりの再会を果たしたというのに、私と紅くんとの間にこれ以上の会話はありませんでした。

ただ、執務室に流れる空気を感じ、静かに座っています。お互いに話し尽くしたというのもあり、話す内容もないという状況にあったのかもしれない。

そんな時、紅くんの方から話を切り出してきました。

「俺も色々な経験をしたし、立場というモノも持つてしまった。……それでも俺は姉貴の弟だ。この先、俺が何か間違えようとしていたら正して欲しい」

そう言つて、紅くんは頭を下げました。

私の中に強く在る『紅くん』という存在が、絶対に言わなかったような言葉を言いました。それに驚きつつ、複雑な気持ちで答えます。「分かりました。私は紅くんの部下という立場になりましたけど、姉として弟の行く道が逸れたのなら正します」

「頼む……」

紅くんは静かに頭を下げました。それは何か特別な考えが籠っているようにも見え、また、これからいつまで続くか分からないこの関係のことを頼んでいるのか……、私には全く分かりません。

ですけど、それに私は必ず答えなければなりません。それが天色ましろ、紅くんの姉としての仕事なんですから。

A f t e r S t o r y 責任

俺が横須賀鎮守府艦隊司令部に帰ってきてからの仕事の中には『海軍本部』掃討の最終作戦中に殉職した巡田の葬式に参列することも含まれていた。

ハガキの宛名は『横須賀鎮守府艦隊司令部』だったので、俺が出ていくこともないものでもある。軍規的には代行として武下が行くものはある。

だが、一応俺にもそのハガキは回ってきていたのだ。

作戦が行われていたことも、横須賀鎮守府がその作戦に途中から参加していたことも知っていたが、作戦中に部下が死んだことを聞かされたのは、帰ってきて落ち着いてからのことだった。

帰還祝賀会やら何やらがを企画していたみたいで、それを全て終えた次の日になってから秘書艦の長門に訊かれたことだった。

「紅提督……」

「なんだ？」

だが俺は無神経を装う必要があった。

それは曖昧な立ち位置ではあるが、軍人であるならば必要な心だと云う。俺の知っていたことだ。

兵は上司や長にとつての自分が何なのかをかなり気にする。聞かれたら答えてしまいそうな『私は貴方にとって、どういう人間なのか』という質問の回答を素直に答えてはいけない。

だから俺は無神経を装う必要があった。だから長門にそのことを聞かれた時も、どれだけ悲しくても表情をピクリとも動かしてはいけないのだ。

「明日の夜から、横須賀で葬儀があるみたいだが、どうする？」

「無論参列させてもらう。事務棟を経由して先方に伝えておいてくれないか？ まあ、門前払いされるかもしれないけどな」

「……了解した」

長門は何も聞かずに、そう言って書類を渡してきた。

俺はそれを片付け始める。長いことやっていたかったことではあ

るが、身体は覚えているものだ。書類を見ても間違えることなく、正しい記入を進めていく。

そんな風に時間が過ぎ去っていった。

まだまだ鎮守府は熱気で溢れていた。それまでの鎮守府は水で固く閉ざされたような様子だったと誰かが言っていたが、そんなものが幻だったかのように活気に溢れているように思える。

――

――

――

俺の手元には今、例の作戦に参加していた各部隊の死傷者リストがある。

リストにはそれぞれの部隊に細かく分類され、どういう傷を負っているのか、生死はどうなっているのかが事細かに書かれている。

リストを受け取ったのは、今日の昼過ぎだ。

昼前に到着していたリストを、事務棟に用事があって立ち寄っていた陸奥が受け取り、持ってきてくれたのだ。

「じゃあ渡したからね」

「ああ、受け取った」

「……その、また今度、お茶しない？」

「良いぞ。誘ってくれば行く。それとも、俺からお誘いした方が良いか？」

そう言うと、陸奥は耳を赤くしてバツと振り返って出て行ってしまった。

普段言わないことだし、面白い反応を見ただけ良いだろう。

受け取ったリストを見ていき、俺は横須賀鎮守府から派遣された部隊の一覧を確認した。

やはり負傷者は少なからずいた。それでも『戦死』の言葉は1つも出てこない。そして見ていくと、その文字を見つけてしまうのだ。

「狙撃により、頭部に7.62mm徹甲弾が直撃。即死……」

簡潔且つ詳しく書かれていたその言葉は、巡田の最期を想像するには十分すぎる言葉だった。

それはそのリストを閉じ、近くに居る長門に声を掛ける。

「明日、護衛は要らない」

「必要だ」

護衛は要らない。その場所に行けば、少なからず何か面倒事が起きるに決まっている。そう俺は確信していた。理由なんてたくさんあるが、むしろ起こらない方が不思議でならない程に。

だが、長門は了承してくれなかった。

それでも、鎮守府の外は危険があるかもしれないからだ。長門はそう考えたのだろう。『海軍本部』が完全に無くなったとはいえ、それ以外にも俺への否定的な意見を唱える人間は少なからずいるだろう。今までは『海軍本部』で見えていなかったものが、見えてくるかもしれないからだ。

「要らない」

「……ならばせめて門兵を連れて行ってくれ」

「……」

その代替案は認めよう。長門の妥協出来るラインなんだろう。

本来ならば、自分らで守るべきだと考えているんだろうが、門兵ならばと考えたのだろうか。

俺はその代替案を了承する。

それならば、艦娘を連れて行くよりも波風立てずに帰ってこれるかもしれないからだ。

「4人だ」

「分かった」

「私の方で武下に伝えておこう」

「頼んだ」

これだけ少な言葉でも話が成立するのも、長い間会ってなかったとはいえ凄いことだ。

それはともかくとして、リストを机の上に置き、あることを考えた。俺が葬儀に参列することを遺族はどう思うのか、ということだ。

そもそも、俺が葬儀に呼ばれているのだろうか。巡田を直接ではないが、死地へと追いやった張本人でもある俺を、遺族は恨んでいるの

ではないだろうか、と思ったのだ。

だが、横須賀鎮守府にハガキは来ている。ハガキがあるということ
は、恨みで何かされる心配はないだろうな。そう考え至ったのだっ
た。

――

――

――

横須賀市内に巡田の家があり、実家も市内にあるらしい。葬儀が行
われるのは巡田の実家みたいだ。

俺は礼服に身を包んでいる。とは言っても軍の指定服であること
に変わりはないのだが、今日は色や装飾品が違っていた。第二種軍装
ではなく第一種軍装をしていく。普段は腰から下げない軍刀（サーベ
ル）を下げているのも相まって、より軍人であることが全身で分かる。
ちなみに部隊章とかそういうものは何一つとしてないので、階級章と
記念章は外せないらしい。武下からそう聞いた。

護衛の4人はというと、こちらも一応正装ではあるが、士官なので
服装も少し違う。

見れば誰が偉いかが分かる辺り、正直やめて欲しいところではある
んだけどな。

「本当にこれで良いんですか？」

「これが規則ですからね」

「そうなんですか……」

俺は式場である巡田の実家の近くで、再度確認をした。

まあそこまで言うのなら、そうなんだろうな。イマイチ分からない
んだけど……。

暗い空気が漂く式場に到着し、周囲に俺と同じような格好をしてい
る人たちをちらほらと見かけた。軍人だ。それは見れば分かるほど
に。そして皆、俺や護衛で付いてきた門兵と同じ格好だ。

それぞれは俺の顔を見て階級章を見ると敬礼をする。俺は答礼を
していく。まあ、これもアレだ。礼儀なんだろうな。仕方ない。

「ハガキを」

「……」

俺は黙って受付の人に渡した。

ゆつくりとハガキを受け取った受付の人は、バツと俺の顔を見た。きつと宛名を見たんだろう。

「お、お名前を伺っても?」

「天色 紅です」

そう言うと、辺りは騒然となった。

桜がまだ舞う春の夜。少し肌寒い程度の気温であったので、少しの防寒具は身に着けていたが、それでも顔くらいは分かるだろうに。

周囲には海軍と思われる軍人で即席の防御陣が出来上がっていた。どうして出来たのかは分からないが、何か思うところでもあったのだろう。

受付の人は静かに参列者名簿にチェックを入れると、俺に中に入るよう促した。

一足先に入れ、ということだろうか。他の参列者は受付を終わらせた後でも、道路を塞がないように待っているというのに。

「……………」

「……………」

「……………」

受付の人が別の人に声を掛け、俺を奥の部屋へと案内した。

連れてきた護衛も全員が来てしまうと迷惑になってしまったので、1人だけに付いてきてもらう。

通されたのは、巡田の親族が集まっている部屋だった。

実際には通された訳ではないが、そのまま親族の部屋から60、70代くらいの老人が2人が呼び出されたのだ。

そしてそのまま別室へと連れて行かれ、4人にされてしまう。

「テレビにて拝見させていただいています。私は巡田海軍曹長の母にございます」

深々とお辞儀をしたのは、どうやら巡田の母だったみたいだ。となると、もう1人は容易に想像が出来る。

「お初にお目にかかります。私は日本皇国海軍 横須賀鎮守府艦隊司

令部の天色です」

「ええええ、存じておりますよ」

すごく優しそうな話し方で、巡田の母は返答をした。

そんな一見和みそうな雰囲気は漂う中、俺は全く違う空気を感じていた。

極度の緊張感だ。この状況に緊張しないのなら、それは人間を辞めている証だろう。”身内”ならば絶対に気付くべきなのだ。

俺は首筋をすーっと汗が伝うのを感じた。

額には浮かび上がってきていないだろうから、大丈夫だろう。俺の後ろを見ている人はいない。

「……」息子が皇国を守護する英霊となられたこと、誠に悔やまれてなりません」

テンプレだと云う。武下が言っていた。とは言っても、士官学校時代に教官から教わったもので、実際に教官が使ったことはなかったそうだ。

自分の発する言葉の重さに驚きつつも、俺は目の前に座る2人の反応を観察した。

母の方は顔を伏せたままだ。表情は少し変わっている。だが、もう1人のおそらく父の方はみるみるうちに表情が変わっていたのが分かる。

「息子は士官学校に入ってエリート軍人になり、政府や陛下に貢献できたことを誇りに思っていたよ。実家に帰ってきた時に、俺はそんな人から聞いていた」

やはり父だったみたいだ。

「それでアンタに見込まれて転属したっていうことを聞いた時のことは、今でも鮮明に思い出せるよ。あの時の息子の表情がすぐにね」

脚色をしたのだろう。

ところどころ話す内容に違和感を感じていたが、やはり正確なことはいくら両親でも軍のことは話すことが出来ないんだろうな。その事実が俺の心を締め付けた。

「なあ提督さんよお」

「なんででしょうか？」

スツと立ち上がった巡田の父は俺に近づき、肩を掴んだ。その力はとても強く、表情でそれをなんとか隠せるくらいの力強く掴んだのだ。

「大本営も海軍も息子が死んだ場所も、どういう風に死んだのかさえ教えてくれない。アンタなら知っているだろう？ 息子の上司だったんだから」

俺の目に刺さる、巡田の父の視線はとても鋭かった。

艦娘が過剰反応した時や、デモ隊の血走った目と同じそれだったのだ。

見慣れていること自体おかしいことだが、その目を見慣れていた俺は動揺することもなく返答をする。だが、心は確実に揺さぶられていた。

「そうですね……軍が教えてくれないというのはいささかよく分かりませんね。機密扱いにはなっていませんでしたので、お教えしますよ」

とても心が痛い。

最初は敵対して、しかも俺を殺そうとした相手である巡田ではあったが、それからはよくしてくれた。兄のような存在だった、と言ってもいいのかもしれない。

だが、そんなことは口が裂けても言えない。言っではいけないのだ。

「瀬戸内海の倉橋島で戦死されました」

「っ?! 軍の反乱分子を潰した、というやつか?!」

よく知っている。作戦開始前に陛下直々の放送もあったからだろう。むしろ知らない方がおかしいくらいだ。

「はい。作戦に参加していた巡田曹長は部隊を率いていました」

横須賀鎮守府の特殊部隊だ。赤城が独断で投入した。

当時のことを考えると、横須賀鎮守府の指揮権は実質艦娘たちが握っていたといってもいいので、俺がどうこう言えるものでもない。

「作戦行動中、敵の狙撃が頭部に被弾。即死だったそうです」

俺も作戦参加者から出た死傷者のリストを見ただけだから、そういう言い方しかできなかつた。

「……そうか。息子は国を乱そうとする輩を討つために」

「はい。大本営側で参加していました」

俺は静かに淡々と話していく。

そうしなければいけないのだ。

「そうか、そうか、そうか……」

2人は静かに涙を流し始めた。

今日になつて知らされた真実というのだ、どれだけの衝撃を2人に与えたのかは分からない。だが、辛く悲しいことは分かつていた。2人ほどでもないのかもしれないが、俺もその気持ちは十二分に分かっていたし、悲しく思っている。

今でも巡田が『提督！』と言つて現れるような気がしてならない。近くの物陰からひょっこり出てくるかもしれない。そんなことばかり考えていた。

少し涙を流した巡田の父は、おもむろに顔を上げて聞いてきた。

それは俺にとって、一番答えづらいものだった。

「息子が死んだ意味は、何だったんだ？ 理由は分かつて。教えてくれてありがとう。だけどな、死んだ意味は？ どうして息子が死ななければいけないかつた？」

「っ!!」

言葉に詰まつた。

どうして死んだのかは分かつたみたいだが、その死の意味を聞いてきたのだ。

それは幾万という命が同じ場所に灯つていた中、たった1人巡田の死の意味なんて言えるのだろうか。

それぞれの戦死者にそれぞれ死んだ意味があつて、理由があつて、死に選ばれたのか……。そんなものが事前に決まつていて、個々にそれがあつたのだとしたら、闘争は起きないのではないだろうか。

何かを手に入れるには、少なからず犠牲はつきものだ。そう云うように、その”少なからずの犠牲”に入った巡田を対価に、”何を手に

入れた”のか。

そんなもの……1つしかない。

「……わ、私を背後から刺す者を残らず始末するため。もつと言ってしまえば、私たちがより安全に、快適に暮らしていく地盤を作っている時に死んでしまった、としか言えません」

意味なんてそれ以外思いつかない。もつと綺麗なものではなく、泥臭い何かはあったかもしれない。だが、これが彼ら作戦参加部隊・参加者たち全員が等しく持つものだったのではないだろうか。

「なるほどな。アンタのため。ひいては、俺たちのためだったのか」
理解が速い。これだけの言葉で伝えたかったことが理解してもらえた。

俺は静かに頷いた。

だが今のは建前に過ぎない。

作戦の大局からしてみても、死ぬことで得られたことなど無いと言ってしまうてもいいだろう。そもそも作戦目標が『海軍本部』の完全な抹消だったからだ。何かを獲得した、とは到底言い難いものだった。

それに直接的な貢献はしていただろう。だが、死んだ意味なんてない。言ってしまうえば、不幸にも狙撃の目標にされて撃たれて即死だった、というだけだったのだ。

何かを守って死んだ、だとかいうそういう理由はないのだ。

「……もうすぐ始まる。アンタも参列者なんだから、最後まで見送ってやれよ」

「無論、そのつもりです」

立ち上がった巡田の父は、俺にそう声を掛けた。それに呼応するかのように、母の方も立ち上がる。

そして静かに部屋から出て行ったのであった。

――

――

――

粛々と参列者たちは涙を流し、式を進行させていく。そしてその式

も終わり、遺族から酒や食事が振る舞われる中、俺は其中で静かに座っていた。

式の最中は巡田のことしか考えてられなかった。ずっと考えたいのだ。そして今もそうだ。

そんな俺に声を掛けてきた人物が1人。

「おじちゃんも軍人さん？」

巡田の娘だ。歳は4〜6歳というところだろうか。

「そうだよ。おじちゃんも軍人だ」

20代になったばかりだが、訂正させても仕方ないと思いそのまま答える。

「パパもね、軍人さんなんだよ〜！」

「そうなのかあ!! おじちゃんはパパと一緒にいるんだよ」

心が痛い。キューッと痛む。

こんなに幼い子を遺していったなんて、俺はやり切れない気持ちでいっぱいだった。

「……ママがね、パパが遠くにいつちやつたって言ったの。パパと一緒にいるところにいたおじちゃんは知ってる？」

すぐに答えられないのが嫌で、辛くて、行き場がなくなっていた。

「お、おじちゃんは知らないなあ」

こう答えることしかできなかった。

小さな子に現実を教えたって、いいことなんてない。微塵もこれっぽっちもないのだ。

そんな風に、俺に話しかけてくる巡田の娘に気付いてか、もう1人近づいてきた人がいた。

「こらっ!! 大人しくしてなさいって言ったでしょう?」

「だって、つまらないんだもん」

「もう少しで終わるから、我慢してて欲しいかな?」

「本当に、ママ?」

俺は考えていることを表面に出さないようにお辞儀をした。

娘を諭して部屋から出て行かせた人は、娘が言っていたように『ママ』。つまり巡田の奥さんなんだろう。

「海軍の軍人さんですよね？」

「……ええ」

嫌な予感しかしない。

「どうも他の軍人の方とは容貌が違いましたし、お義父さんが貴方にはどうのと言ってましたから……。失礼ながら、巡田の教官をしていただいていた方でしょうか？」

階級章をチラツと見た奥さんは、それが他の軍人とは違う階級であることを見抜いたみたいだ。それに士官以上しか携帯しない軍刀も携帯しているからな。今は腰から外して隣に置いているが。

「いいえ」

俺は全く進んでいなかった箸を置き、奥さんの方を向く。

そしてはつきりと言ったのだ。

「私は日本皇国海軍 横須賀鎮守府艦隊司令部 天色 紅です」

「天、色……」

「はい」

みるみるうちにオーラが変わっていったのが分かりました。そしてそれが良いものでないことも。

さっきの予感は当たっていたのだ。

奥さんは少し顔を赤らめながら、涙を目に貯めて訴えたのだ。

「貴方があの天色ツ?! 夫が貴方のために死んだ、身代わりになつてツ!!」

そう怒鳴ってきたのだ。

近くに控えていた護衛が止めに入ろうとしてきたのを、俺は手で御してこのままにさせておく。

俺は遺族に何をされても仕方がないと考えていた。

軍隊というものがどういふものなのか分かっていているのなら、普通に考えれば『俺の命令で死んだ』と考えるのが一般的なのかもしれない。突撃命令を出して、従って突撃して死んだ。偵察命令を出して、斥候として潜り込んでいた時に死んだ。哨戒中に敵の斥候に殺されたのなら、哨戒を命令した俺のせいだ。

もつと複雑ではあるが、そう考える人もいるだろう。いてもおかし

くないのだ。

この場合、巡田の奥さんがそれだったのだ。

「今のご時世、軍人が死ぬことなんてないのが普通でしょう?! なのに夫は死んだ!! 理由を調べてみれば、貴方のために死んだそうじゃない!!」

「……」

「どうして?! ねえ、どうして!!」

「……」

俺は何も返さない。返したところで、聞きはしないのだ。

「どうして夫が死ぬ必要があったの?! 答えてよ!!」

「……」

「上司なんでしょ?!」

「……」

「どうして夫が貴方の身代わりになって死んだの?!」

「……」

段々とその声が大きくなっていき、話し声がずっと聞こえていた室内が静まりかえったのが分かる。

奥さんの剣幕に押されて、止めに入ろうとした他の海軍軍人も動きを止めている。

「夫が死ぬ必要なんてなかった!!」

「……」

「なんで黙ったままなの?! 答えてよ!!」

「……」

答えない。奥さんのぶつけてきた言葉、全てをはつきりと答えられる内容がなかったのだ。

それは式が始まる前に巡田の両親に話した時と同じだ。父に聞かれた『息子が死んだ意味』。これには正確がなかったのだ。

否。正解はある。あるにはあるが、それを言ってしまうことを、俺はよしとできなかつたのだ。

「夫じゃなくて、貴方が死ねば良かったのよ……」

俺が答えられずにいると、奥さんがそう切り出した。

凄い形相で。まるで般若の仮面を被ったように。

「艦娘の指揮なんて貴方でなくたって出来るのでしょうか？」

「いいえ」

「国内のあちこちに鎮守府はあるんでしょう？ 外洋の攻略は何も貴方のところだけが背負う必要なんてないのでしょ？」

「いいえ」

目から視線を外さず、鬼のような顔をしている奥さんに向かって俺は否定し続けた。

俺が指揮しなければ戦闘力は完全に失われるし、鎮守府は確かに各地に点在しているが、外洋の攻略はウチでしなければならぬのだ。

だが、そのようなことを幾ら下士官のお嫁さんであったとしても、知っているはずがない。知っていたらおかしいことなのだ。

「夫は駒じゃないわ……。軍上層部の使い勝手のいい駒なんかじゃ……」

「……」

「……それで」

スツと立ち上がった奥さんは、俺を見下ろして言い放った。

「それで、どう責任を取るつもりなの？ 私の夫を身代わりに使った責任を」

本来ならばここで応じるのはいけないことだ。だが目の前で狂乱する女性はそんなことを口で言ったところで納得するとも思えない。

周囲の参列者も軍人以外は傍観しており、その軍人も手を出せずにいるみたいだった。もし俺の立ち位置に他の士官が居たならば、きつと命令を無視して割って入ってたかもしれない。

だが、ここに居るのは俺だ。海軍の中でも特異的な立ち位置にいる俺に対して、強引に命令違反をして割って入るなんてことはバカでなければ出来ない。

俺は考えついた。

この手の問題は刑務所にぶち込まれたとしても、いくらお金を積んだとしても解決する問題ではないのだ。相手の認識がそれを超えているからだ。

ならばすることはただ一つ。実際に目の前でやって見せればいいだけのこと。

「ならばその責任、庭にて取りましょう」

考えた結果、俺は部屋から出て行き、外でその”責任”を見せることにした。

俺の覚悟は出来ている。ならばそれを実行するのみ。

庭に出てきた俺と巡田の奥さん、護衛や参列者たちは俺と奥さんを固唾を飲んで見守っている。

俺は玄関からわざわざ靴を履いてここに来ており、それは奥さんと同じことだった。

「巡田曹長が死を賭してまで成し得たこと、それは例の作戦の概要を知っているのならば分かるはずです」

「……知っているわ。新聞やテレビの報道番組でも取り上げられていますし、大本営発表の方も聞いているもの」

「それでも尚、私に”責任”を乞いますか？」

「もちろん」

言質は取った。俺の覚悟は揺るがない。

腰には軍刀の他にも下げているものがあつた。それは……

刹那、炸裂音。そして左足に激痛が走り、地面を赤くする。

「ッ!!」

「私はもう動けません。逃げることもできません」

俺は自分の腿を拳銃で撃ち抜いたのだ。骨と動脈は外しているのだ、それで死ぬことはないだろうが、その代わりに信じられないほどの激痛に見舞われる。

周りで見ていた参列者たちは顔を真っ青にし、軍人たちは携帯していた拳銃を抜いていた。目標は何か分からない。

意識が少し朦朧とし始めた中、俺は目の前で立ち尽くしている奥さんに声を掛ける。

「さあ、どうしますか？ 貴女が言うのなら私は自らの額を撃ち抜いても、軍刀で切腹でもしましょう。貴女が直接手を下したいのならば、拳銃も軍刀も貸します」

一部始終だけを見ていたのなら、それは頭がおかしくなった軍人が自分の足を撃ち抜いたようにしか見えないだろう。

だが、見ていたこの場にいる全員は分かっていることだろう。彼女が何を俺に要求し、俺がそれに答えたのかを。

「最愛の夫を殺した張本人が……目の前にいるんですよ？　どうしますか？」

意識が遠のき始め、もう左足を支えるのもやっとな状況。

痛みももう感じなくなっており、身体を支えている左手にも力が入らない。

こんな状況の中、声を出した人が1人いた。巡田の父だ。奥からのそのそと出てきて、靴下のままで庭に降り、俺の目の前に膝を付いた。

そして持っていたタオルで俺の左腿を抑えるのだ。

「……次がトドメになるように、骨と動脈を外したんだな」

「え、ええ……」

「痛いかい？」

「痛い……です。腿も、心も……」

俺の腿を力いっぱい押さえつけている巡田の父は、奥さんに向かって言い放った。

「提督を討つというのなら、俺も撃つなり斬るなりしろ」

「……お、お義父さん。で、ですが……」

食い下がってくる奥さんに、巡田の父は言葉を静かに発していた。

それはきつと、俺が今までしてきたことへの評価なのかもしれない。表面上の”提督”としてのものかもしれないが、それでも俺はこの耳で初めて聴くことになる。

「^{せがれ}俺は自分の腿を撃ち抜いて逃げられないようにするこの提督に、自分の命と引き換えにするほどの価値を見出したんだ。嫁に来てもらって悪いんだが、そんなことも分からないような娘っ子に息子を任せるんじゃないかった」

「なっ!？」

「嫁さん、アンタ誰に向かって『死ぬ』だの『息子を身代わりにした』

だの言ったのか分かっていいるのか？ そんな暴言を吐いた相手は、俺たちが生きていくために必要なものの全てを用意してくれているんだぞ。しかもあれだけ報道機関、テレビ、大本営発表って言ったのなら知っていて当然だよな？」

そう言った巡田の父は俺の腿を抑えているタオルに力を入れた。止血には最適なのかもかもしれないが、それ以上に痛い。指、爪が食い込んでいる。それほどに力を入れているのだ。

「お前さんは伴侶を失った”だけ”だ。……考えられるのか？ それまで持っていたものを何にも持たずに本当ならば大学生でサークルやったり恋したりしているような年齢で戦争をするなんて。しかも、自分の国の戦争だったのなら自分の国のためや家族のためと言っで戦えるが、自分とは全く無縁の国のために戦争をしているんだぞ」

「そ、それは……」

「……まあ、言っても分からないだろうな。のうのうと生きていた俺と同じだ」

そう言っで俺は立たされた。

周りで拳銃を抜いていた護衛も駆け寄ってくる。

「時折、日本皇国の置かれている状況を知らされている。そこまで重く、深く考える者は少ないだろう。だがこれだけは事実だ。……本来俺たちがやるべきことを、何も関係のない学生にやらせているんだ」

初めて艦娘や新瑞以外から、このようなことを聞いた気がする。

確かに、俺の置かれている環境はそういうもので、日本皇国の現状も今巡田の父が言った通りだ。そして、そのことをよく考えていない人たちが居るのもまた事実。だから反戦運動なんかが起きる。

巡田の奥さんは、よく情報収集はするが、それで満足していたタイプなんだろう。何かを考えることもせず、疑問に思うこともない。そういう人種だったのだ。

「今まで黙りこくっていたが、あれだけのことを言ったんだ。自らが発した言葉の”責任”は取るべきだ」

「……お義父さん」

こうして俺は庭から移動させられ、腿の応急処置をされた。どうや

ら拳銃の弾丸は貫通していたために、傷口を塞ぐだけで済んだみたいだ。

血も止まっっていて、大事にはならなかった。そりやそうだろうな。大事にならないところを撃ったんだからな。

近隣住民には来ていた海軍軍人たちが『弔砲よの小銃の誤射』ということを言っただけで済んだ。

そして、今俺の目の前に再び巡田の奥さんが来ていた。治療も騒ぎも落ち着いた1時間ほど経った後だった。

「……」

「……謝ることはありません。私は自らの意思で足を撃ったんです」「ですが」

「すみませんね。私の血で庭を汚してしまっただけ」

「いいえ、そんな……」

俺はそんな巡田の奥さんの態度が気に入らなかった。

今座らされているんだが、その前で巡田の奥さんは正座をしている。そして腿と顔を視線が往復しているのだ。何をしたいのかも、何を言いたいのかも分かる。それが気に入らなかった。

「あ、あのっ……」

「なんですか？」

「申し訳ありませんでした」

ただ、その気に入らないことも黙っていたのだが、それも我慢が限界に来ていたのだ。

さっきの態度の変わり様。そして、今の態度も。

俺にそう訴えるのは間違っていた。『どうして巡田が死んだのか』『どうして死ぬ必要があったのか』と俺に問いただすことは間違っていない。むしろ正しいことだし、俺もそのことは覚悟して来ていたのだ。恨まれてそれで良いと思っていた。そういう態度を取るつもりだった。

だがそれでも物の言い方には限度がある。『巡田は貴方の身代わりになって死んだ』『貴方が死ねば良かった』『その言葉は違う。恨むこととは似て異なるのだ。率直に言っただけ、暴言に分類されるその

言葉は、確かに聞こえは恨みの言葉だろう。それでも、本質は違っていたのだ。

「こちらこそ、申し訳ありませんでした」

「……」

「本当ならば、艦娘たちも葬儀に来たがっていたんですよ」

「……え？」

話を逸らすため、俺の精神衛生を保つために話題を変えて振った。

「巡田曹長は艦娘たちとよく接していましたから。彼女ら、人間不信でしたからね」

「それは、あの……『海軍本部』の」

「そうですね。……彼女たちには、兵器 としか見られてきませんでしたかね。ですけど巡田曹長を始めとする、一部の兵士たちは人間を相手するかのように接していたんです」

「そう、ですか……」

「よく彼女たちも巡田曹長を頼ってました。ですから、この葬儀にも来たがっていたんです」

これは紛れもない真実だ。長門や赤城といった大型艦の艦娘たちは、口には出すことはなかった。他の小型艦の艦娘たちは、執務室に顔を出しては俺に言っていたのだ。『巡田さんの葬儀はいつ?』と。

「斯く云う私も、大変お世話になりました。公私共に……」
「……」

俺は痛む足を我慢しながら立ち上がり、巡田の奥さんに言ったのだ。

「私はそろそろ帰らせていただきます。では」

「え、ええ……」

足を引きずりながら、俺は玄関へと向かい、鎮守府に帰ったのだ。た。

—————

—————

———

足の治療は、艦娘たちに悟られないようにするために、鎮守府に着

く前に本格的な治療を受けた。その後には鎮守府に帰ったのだ。

次の日。俺が鎮守府に帰ってからというもの、テレビで報道される話題は同じだった。

俺が鎮守府から居なくなつた顛末、その間に起きた出来事、大本営が起こしていた反乱分子への攻撃、陛下のお言葉……。コーナにされて、キャスターとコメンテーター、専門家たちが話をしているものだ。『それでは帰還に際し、どのようなことが起きていくのでしょうか。……深海棲艦が広げた戦線の押し返し。……資源補給ルートを整備。……各海域の再攻略が予想されていますが、どうでしょうか?』

『そうですね。大きく見てその3点が最優先で進められると思います。ですが、水面下では別のことも進められているのではないのでしょうか?』

『別のことは?』

『横須賀鎮守府以外にも、深海棲艦と表立って戦う部隊が現れるのではないのでしょうか? 現在、九州にある端島鎮守府も態勢を立て直しつつあり、着々と横須賀鎮守府と歩調を合わせた攻撃準備を行っているみたいです。それに海軍は莫大な資源と予算を投じて、新たな戦闘艦の建造を行っています。既に3隻が極秘裏に進水と艤装を終わらせています』

『なるほど。これまでと同じように前衛的な姿勢を取る、ということですね』

『そういうことになりますね。ですが、今回を節目に軍自体が”何かしら”の変化をしていくと思いますよ』

今はたまたま集中して見ていたが、このコーナ結構長い時間やっている。

俺は溜息を吐いて、テレビの電源を消した。

私室のテレビで見えていたが、もうここずっとこんな状況だというのだ。

—————

—————

—————

俺は今の取り巻く環境が変わりつつあることを少しではあるが、感じ取っていた。

『海軍本部』の消滅を中心に、軍の体制の変化、国民の意識の変化。大まかに言えばこの3つだが、大きな変化だと言っても過言ではないだろう。

その変化が凶と出るか吉と出るか、そんなものは後になってからでなければ分からない。

ゆつくりと立ち上がり、俺は執務室へと出て行った。

もう変わってしまったこの世界を直視するために。

終幕の章 (マルチエンディング その3)
第72話 帰還と記憶

『大本営を攻めてきた”犬”共のリーダーがコイツなのか?』

『にしては貧弱だな。新兵でここまで弱い奴はあまり居ないぞ』

……ああ、私はどうしているんでしょうか。

『本当にあの”提督”の姉弟なのか? だったら傑作だな! 姉弟揃って身内に殺られるなんてな』

『そうだな。……ま、でも良いんじゃないか? どうせどつかで死んでいただろうさ。深海棲艦にミンチにされるか、兵士に撃たれて死ぬかどつちかだ』

……そうです。私は今、武下さんたちと大本営に来ていたんです。

『ツ!! っち!! 良かった。”味方”か』

『おお……。お前は×か、無事だった……。訳では無いみたいだな』

『当たり前だろ!! アイツら、獣か何かだぞ!! 兵士と兵士の撃ち合いをしているのとは訳が違う!!』

『そんなことは分かっている』

紅くんの、形見を……。取りに来たんですけどっけ……。

『それで、こんなところでだべっていると殺されるぞ? どうして、移動しないんだ?』

『ん? それもそうだけど、これ、見てくれよ』

『ええ? ……ああ、コイツがああ、獣たちのリーダーの女か? でも、どうしてこんなところぞ?』

『さっきまたまた遭遇してな、距離的に格闘しか出来なかったから、殴ったらこれだよ……。新兵でもこんな弱つちい奴は居ないって』

……ここには無いですよね……。階段の踊場になんて。

『あ、動いたぞ。さっきまでは気を失っていただけなのか』

『みぞおちに入ってたからなー。アレはキツイだろう』

『そうだな……。ここら辺に来た時、あらかたの獣は殺されたみたいだし、ここらで生きてるのはこの女だけみたいだぞ』

『そうなのか。……なあ、ちよつと良いか?』

巡田さんに連絡を取れば、もう見つけたかもしれないね。……無線機はどこでしょうか?』

『何だ?』

『俺たちはコイツらに酷い目に遭わされているだろう? ならば、良いんじゃないのか?』

『おまツ?! 本気で言ってるのか?!』

『本気だ、本気。それにどうせ殺しちまうんだ。ならば”楽しませて”貰おうぜ』

……そういえば、階段の下に転がっているのは私の無線機でしたね。壊されたんです……。』

どうやって巡田さんと連絡を取りましょうか。……目の前で立っている人は多分、私たちの仲間では無いでしょう……。一緒に居た西川さんも1時間前くらいに撃たれて、動けなくなっていましたから……。』

『い、良いのかよ……』

『気にすんなって。それに見てみるよ。動けないみたいだしな。所詮、新兵にも劣る訓練兵かそれ以下でしかないからな』

……あれ? 何だか、身体を持ち上げられたみたいですけど、拳銃とかナイフとか取られていきますね。

それがないと、身が守れないんですけど……。

そして、どうして私のベルトを外すんですか……。抵抗したくても、身体が動きません。周りに仲間も居ません。

『ほーん。着痩せするタイプなのか……』

『お、おい!!』

『良いんだって。それにお前だって、俺を無理やり止めないんだから同罪何だからな。バレても営倉には放り込まれないだろうけど』

『うぐっ……』

どうして、どうして、どうして……。

『へへっ』

『……』

嫌っ、嫌っ……。

『コイツ、泣いてらあ!! 泣きたいのはこっちだったのにな!!』
……。

『そこまでしておけて』

何で、何で……。

『あ? うっせえな。俺が終わったら次、お前もやれよ?』
……。

—————

—————

—————

気付いた時、私は懐かしいところに居ました。

そこは半年くらい前、ずっと私が寝て起きてを繰り返していた場所です。服と仕事で必要な資料、勉強道具、使い古した参考書……。ふかふかのベッドに沢山の本たち。

私の寮の部屋とは正反対の、生活感のある部屋でした。鼻には私の匂い。忘れていた私の匂いがします。そして、窓からは明るい光が差し込み、見慣れたはずの景色が広がっていました。

部屋に静かに響く時計の針が進む音、そして自動車が近くを走り去る音。

そんな、私の部屋に座っていたんです。そして私の目の前にあって、今まで目に入らなかつたノートパソコンがありました。

画面を点灯させて確認します。

艦これのプレイ画面でした。私のアカウントで、秘書艦は吹雪さん。初期艦ですけど、ずっと第一艦隊に入れていましたから、練度は艦隊の中でも一番です。

そして私は”全て”を思い出します。横須賀鎮守府での出来事、紅くん、死ぬ寸前の光景……。

全てが頭の中に流れ込み、それと共に頭痛を起こします。信じられない程の痛み、耐えると、ほんの30秒でその痛みは収まり

ました。この次に取った行動は必然だったでしょう。

「確認しなくては……」

そう。”この世界”が一体何なのか、ということを確認しなければなりません。

もしかしたら、私が元居た世界とかなり似ている世界である可能性が十分にありますがからね。そう思い、立ち上がろうとしても、立ち上がることが出来ませんでした。

死ぬ間際、私が”何をされていた”のか、そのことが脳裏に一番深くに刻み込まれていました。それが私の腕と足の力を劣ろわせ、立ち上がらせまいとします。

ふらつき、私は床に転びました。身体中に残っている感触、痛みが神経を過剰に反応させ、それが背筋を駆け上がります。

怖い。動くのが怖い。そう考えてしまっていました。

その一方で、私は確認しなければなりません。

”この世界”は一体何なのか。そして、この世界が何であれ、紅くんは居るのか……。

もう一度、腕と足に精一杯の力を入れて立ち上がります。

そして少しふらつきながらも、なんとか立ち上がることが出来ました。本棚に捕まりながら部屋の中を移動し、扉に手を掛けます。そしてその扉を開きました。

その先にあつたのは、見慣れた廊下だけです。ここは私の部屋で、私の家です。

そのまま私は紅くんの部屋を目指しますが、捕まるところを変えようとした時、手を空振ってしまって転倒します。

その音に反応してか、下の階が騒がしくなりました。そして廊下に出てくる音、階段を駆け上がって来る音と共に、現れたその人物に目を向けます。

「あ、貴女……まして、ましてッ?!」

「……お、お母さん」

お母さんだったんです。少し老けた気もしますが、それはまごうとことなく私のお母さんでした。

温かい身体に包まれ、私の耳元でお母さんが鼻声になりつつも話しかけてきます。

「おかえり、ましろっ……。どこに行っていたのか全然分からないけど、”あの話”のことだったら異世界に行ってたんでしょ？」

「はい」

少し身体を離し、お母さんが私の目を見て話します。

「紅と同じ失踪の仕方だったから、私もお父さんも考え直したよ。ましろは紅を迎えに行っただって」

「その、通りです……」

「でもね、ましろ」

そんなお母さんの口から、私の全ての思考を止めさせる言葉が発せられました。

ここまでの話を聞いている限り、私は元居た世界に帰ってきていることは確定です。ですけど、その中でもお母さんが言った言葉だけは……。

「紅は、ましろが失踪してから1ヶ月後に帰ってきたんだよ。今さっきのましろみたいに、突然ね」

どういうことでしょう……。全く私の頭は働きませんでした。

お母さんが言っている言葉の意味が分からずにいる私を知ってか知らぬか、お母さんは次々と話を進めていきました。

「帰ってきたのは良いんだけどね、様子がおかしいの」

そんなことをお母さんは言い出しました。

たしかに、紅くんが何かいつもしないようなことをしていれば目立ちますからね。家ではスマホを見ているか本を読んでいるか部屋に居るくらいしかありませんからね。

「何だか、魂が抜けたみたい……。まるで”大切なモノを奪われた”みたいな様子で、ご飯とお手洗いとお風呂に入る時以外は、ずーつと部屋で外を見ているみたい」

何ですか、それ……。

状況は分かりましたし、どういう風に見えるのかも伝わりました。ですけど、その様子は流石におかしすぎます。何もしないなんてありません。好きなことをして過ごすはずですし、やらなければいけないことはちゃんとこなしていく人だった筈ですのに……。

私はお母さんに支えられながら立ち上がります。

もう、私の頭に流れ込んできた”記憶”を気にしている場合ではありません。私はこんな様子ではありませんけど、私よりも酷いだなんて思いもしませんでした。

紅くんの部屋は、私の部屋の隣です。扉をノックして返事を待ちますけど、全然返ってきません。

お母さんは『いつものこと』と言って、勝手に扉を開けて入ってきます。

「……」

そこにはいつもの片付いた部屋、綺麗に整頓された机の上、そして『この話の根幹としてある紅くんのノートパソコン』がありました。

ですけど、ノートパソコンの電源は点いておらず、それどころか、机に付いた形跡もありません。

紅くんは静かに窓の外を、ベッドに腰掛けて眺めているだけでした。

そんな紅くんにお母さんは話しかけます。

「紅、ましろが帰ってきたよ……。アンタを追うように失踪したましろが……」

そう言ったお母さんの言葉に反応した紅くんは、スツと私の方を見たかと思うと、すぐに窓の外へと視線を戻してしまいました。

これは確かに様子がおかしいとしか言えませんね。口も開かなければ、動こうとしない。これは完全に”精神的に何か”起きているんでしょう。

どういものかは分かりませんが、十中八九あの世界、私が言っていた世界でもあり、紅くんも居た世界のことでしょう。失踪する前はこんな風に、日々の時間を浪費するような人ではありませんでしたからね。

私は紅くんの目の前に座ります。

話をするためです。聞いてくれるかは分かりません。専門家でもありませんから、下手に何かを刺激してしまうと”壊れてしまう”可能性もありますけど、これは専門家でも専門外の事象です。少しでも事情を知っている私が、最初に触れていった方が良いでしょう。

「……」

紅くんはこちらに見向きもしませんが、私は話しかけました。

「お久しぶりです、紅くん」

「……」

「あははっ、私も異世界に行っていたんですよ？ 姉弟揃って凄いですよね？」

「……」

当たり障りのない言葉から、私は紅くんに語りかけていきました。「私、言った先で色々な経験をしてきましたよ。”普通”に生活していれば、まず経験しないことを」

「……」

「いろんな人に出会って、いろんな経験をして……。紅くんも同じな
んですよね?」

「……」

そう聞きますけど、私は“知っている”から言っています。紅くん
が何をしてきたのか、どんな人に出会って、何があったのかを。

そんな話はまだ持ち出しません。こうなっている原因は確実にそ
れですからね。

言葉を選んで話しかけていきますが、返事はおろか反応も返ってき
ません。ですけど、ある言葉には反応したんです。

「入れ違いだったんですよ」

それまで外を眺めているだけでしたが、急にこつちを見たんです。

私の目を捉えた紅くんの瞳は、とても霞んでいました。暗くなつて
いました。ですけど、そんな目でも発した言葉には力が入っていました。

「どこに……。行っていたんだ?」

虚ろな目で、そう私に言いました。

「紅くんが居た世界、あの世界です」

「……そう」

「皆さん、とても落ち込んでいましたよ」

具体的なことは言いません。ですけど、紅くんが居た世界に私も居
たことには変わりありません。

言葉を続けて話します。

「ですけど最後は、紅くんがどこにいるのかを探しました。いろんな
方面に声を掛けて、総督や新瑞さんにも連絡を入れたんですから」

「……そう」

「でも結局見つかりませんでした」

「……そう、だな。俺は、ここに居る」

「はい」

「俺が居ない”鎮守府”は、どうなっていた……」

「活気がまるでありませんでした。……。誰も外を歩いていませんでし

た。門兵さんも軍から抜けて、横須賀鎮守府だけのために居ました」
「バカだなあ……」

「そして、最後は……」

言葉に詰まります。

「最期は……」

言い換えました。本当に最期だったんですから。

私がそう口を開いた時には、紅くんの目も変わっていました。

少し輝きを増した、そんな風に見えました。ですが、そんな風な目を向けられても、期待しているようなことにはならなかったんですよ。

私は真実を伝える義務があります。見てきたことを、経験してきたことを。

「みんな死にました」

「っ……」

口をぽかんと開けたかと思うと、すぐに口を閉じた紅くんは少し俯きます。

ですがすぐに顔を上げて、私を手招きしたんです。

「私も……死んだんです」

そうすると、後ろで聞いていたお母さんが走り寄ってきたんです。ずっと扉の近くにいましたから、話が聞こえているのは当然でしょう。

「……どういうこと？ 軍とか死んだとか言ってたけど」

「お母さんには後で説明します。ですから少し待っていてください」

「でも……」

「待っていてください!! 私には紅くんに話さなければならぬんですッ!!」

強く言って、私はお母さんに離れてもらいました。

この話は「知らない人」が詳しく聞いても仕方のないことですからね。混乱するでしょうし、きつとお母さんなら怒りもするでしょうから。

「……私ですね、兵隊になっていたんですよ。紅くんの鎮守府で」

「海軍の軍人になっていたってことか？」

「違います。その辺りの説明は省きますが、端的に表すと『傭兵』に当たります」

「……」

情報を飲みこむのが速いですね。それに少ない言葉でも、瞬時に何の話をしているのかを理解しているように見えました。

「さっきの話に戻りますが、どうしてみんな死んだのか……」

伝えなければなりません。

「全ては紅くんが撃たれたところからでした。あの時、紅くんは搬送された先で死んだんですよ」

「……そうだな」

「その真実は誰に伝わることなく、大本営がそれを隠蔽したんです。横須賀鎮守府にもです。ですが結果的にはその情報は報道機関でも報道されました」

「……」

「それが私の主観時間で1週間ほど前です。あまりにも遅すぎて笑っちゃいますよね」

くすくすと笑い、話を続けます。

「そんな発表の前に、横須賀鎮守府は陸軍からの攻撃を受けました。建前は第三方面軍 第一連隊が持ち込んだまま、私用していた装備の奪還。本音は横須賀鎮守府を叩いて火種を消すという目的」

「……」

「もう味方なんて居なかったんですよ」

「っ……」

「ですから、みんな死んだんです」

後ろで聞いているお母さんは首を傾げていますが、多分ほとんどの情報は拾えているでしょうから顛末は分かるでしょうね。

「紅くんを利用していたあの国の国防中枢を潰したんです。死を覚悟して、その言葉通り死ぬまで徹底的に。ですがそれをしたのは軍を抜けた兵たちと、酒保の人たちだけです」

「1500人……」

流石、横須賀鎮守府の長をしていただだけありますね。人員の把握はしています。

「艦娘たち、赤城さんや金剛さんはどうしたのか……」

「……自己解体を、したのか？」

そこまでお見通しなのも、凄いことです。ですが、それは違います。

「違います。……全軍が中部海域へ進軍したんですよ。装備・武器・弾薬・燃料満載にして」

少し考えた紅くんはそれだけの情報で答えを出しました。

「片道……か」

「ええ。片道です」

「そうか……」

お母さんから聞いていた様子とは違って、結構大丈夫そうではありませんね。こうやって話してみても、そんな風に感じました。

受け答えも私の覚えている一番新しい紅くと変わりません。目は死んでますけどね。

これ以上、私は話すことはありませんでした。紅くんから何かあるかと思いましたが、どうやら何もなかったみたいです

ですから私は部屋に戻ることにしたんです。

――――

――

――

お母さんに説明を要求されました。私と紅くんが行っていたところについて。そして、何を2人が経験してきたのか……。

紅くんにも声を掛けてから、お母さんは私のところに来て言ったんです。そもそも説明する必要があると思っていましたし、さつき紅くんと話していた時にも聞かれたので答える予定ではありましたが。

ですから、お父さんが帰ってきてから話すことを伝えました。それにはお母さんも納得してくれました。

私と紅くんとのお話を聞いていて、ある程度は理解しているでしょうけどね。

そして夜になり、お父さんが帰ってきました。

私を見るなり色々と言を掛けてくれました。『大丈夫だったか?』とかでしたけど。そして、リビングで家族会議が始まるとうとうとしました。

机の上にはお茶が出されています。きっと長丁場になることは、お母さんは分かっていたんでしょね。

「誰から話すべきですか?」

「無論、紅だろう。帰ってきたかと思えば、口も開かなかったからなお父さんはそう言い放ちました。」

それに応じ、紅くんは話し始めたのです。

「簡潔に言うし、これは客観的な状況説明をするから。……異世界へと強制的に転移させられた俺は、その先で軍を率いさせられていた」「なんだそれ……」

「技術レベルは今と同等で、居た国は日本と酷似している『日本皇国』という別の天皇帝国家。その国が何十年続けているのか分からない『深海棲艦』と呼ばれる集団・組織・国家のどれかに属する戦闘集団との戦争を肩代わりしていた」

「肩、代わり……?」

「戦場は主に海の上」

「……」

言葉を失うのも無理はありません。

まさか息子が居なくなっていた短い期間に、それだけ壮絶な経験をしていたというのなら猶更です。

「世界情勢も最悪。ドイツ以外の国との国交は完全に断絶。『世界の警察』と揶揄されるアメリカも強制的な鎖国状態。唯一その時まで深海棲艦に抗っていたのは日本皇国だけ」

「……」

「そんな日本皇国に居た。これでいい?」

「ああ……なんともまあ、突拍子もなければ意味の分からないことに……」

「だけど、それが俺の経験してきた事実」

そう言い切った紅くんの次に、私の番が回ってきました。

お父さんが私の方を向いたんです。

「私は紅くんの”居た”世界に居ました。ですけど状況説明は紅くんがしてくれていましたから、私は何をしていただけを言います」
少し息を整えます。

「私は兵士になっていました。厳密に言えば傭兵ですけどね」

これだけです。深いところはこの後で話していくでしょうから、一気に話したって意味はありませんからね。

お父さんも一気に言われたって整理がつかないでしょうから。

お父さんは少し考えた後、私と紅くんに問いました。

「紅は異世界に強制的に連れていかれ、ましろはどういう状況で異世界に行っていたんだ？」

「……残念ながら、私にはその状況が全く分からなかったんです。紅くんは確かに強制的に連れていかれた、という状況下であったことは本人にも知らされるような状況でした。ですけど、私は全く分からなかったんです。ただ、私も同じように強制的に連れていかれたのではないかと考えます。前例が紅くんしかありませんからね」

「ふむ……」

少しずつ、お父さんは聞いていきます。

「じゃあ、どうして帰ってこれた？ 強制的に連れていかれた、というのなら外的要因でなければ移動できないと思うんだけど」

流星お父さんです。頭ごなしに常識に囚われずに、仮定しながら話を進めていきますね。

「俺は……殺された」

「っ?!」

今まで黙っていたお母さんが反応します。その辺りは、私と紅くんとこの話で聞いていたところですからね。

「状況は……」

「それを話すには、そもそも俺が何を率いさせられていたか、ということから説明する必要があるんだけど？」

「……ならばそこから」

紅くんは頷いてポケットからスマホを取り出しました。そして少

し動かして、私たちの机の上の中心に置いたんです。

表示されているのは艦これのプレイ動画。動画サイトから適当に再生したものでしょう。

「これ。今画面に映っているゲーム、喋ったりしている武器のようなモノを持った女の子が居るだろう？ それを指揮していた」

「またこれはよく分からない方向に……」

「まあ、そのまま考えてよ。……この女の子たちはさつき話した深海棲艦と対等に戦える唯一の存在だったんだ。だけど、俺が来る前に国内で色々あった原因で元はこの女の子たちだけが戦争をしていた。肩代わりしていた」

「そうなのか」

「それで話をすつ飛ばすんだけど、この女の子たちを道具のように兵器のように扱っていた軍の一部組織が、俺を消そうと動き出して攻撃を受けていた。最初は防いだ。だけど、2回目では防ぎきれなかった。俺は俺を消しに来た特殊部隊の兵士に銃殺された」

「どうして紅を消すような動きになったのかが分からないが、分かった。ましろは？」

私の番になりました。

ですけど、私の帰ってこれた理由は紅くんと同じでも、それまでの過程が話せません。話したくなかったです。ですから私は、話したくないところは話さずに行こうと思いました。

「私は紅くんが指揮していた女の子たちが集められた基地に居たんです。そして紅くんがどこにいるのか、ここで起きていることを聞き、もしかしたら紅くんは生きていないのかと考えたんです。その時、紅くんは死んでいるのかいないのか分からなかったですからね」

「……」

お父さんは黙っています。

「ですから行動を始めました。まずそこに居るためには兵士になる必要があります。ですけどその時には、その基地は軍の指揮から外れていました。多分紅くんが色々してきたから、特権とかあったんで

しようね。ですから普通ならばやらなければならないことは沢山ありましたが、私は最低限の教育を受けて兵士になりました」

「……」

「そして行動を起こしていくうちに、真相が見えて行っただけです。軍上層部は紅くんの死亡を隠蔽し、一部の関わった人たちに箝口令が敷かれていたことと、それと同時に紅くんが死んでいたことが情報開示されたんです」

ここからは少し脚色します。

私しか知らないことですからね。

「その基地には一般の兵士も常駐していました。私と紅くんの指揮していた女の子たちは『柴壁』と呼んでいましたけどね。世間一般俗称や蔑称で言えば『犬』なんですけどね。その人たちと共に、紅くんの死を隠蔽していたことと紅くんを殺したその組織の存在を認知しながらもそれまで放置していたことへ訴え、その償いをさせたんです」

「……」

「有り体に言えばクーデターです。1500名の兵士で軍の司令部を攻撃。言葉通り、身体が動かなくなるまで攻撃しました。そこに私も居たんです」

「……」

「司令部ですから、そこには現場から登ってきた将官とキャリアの将官、警備の兵も居ました。その全員を私たちは殺し、殺し、殺し、最期は私自身も殺されました」

言い切る頃には、お母さんは泣いていました。

私と紅くんの経験を聞いたからでしょうか、私にはよく分かりません。ですけどお父さんは表情を変えません。難しい表情をしたまま、少し間を置いたんです。

「……分かった。分かったから、ましろ」

そう言ってお父さんはティッシュを私に渡してきました。

「その涙を拭け。……ましろはそれが正しいことだと思ってやったんだろう？ 紅を道具のように扱って捨てたその『日本皇国』という国が悪いんだ」

「はいっ……」

微笑んだお父さんはお母さんに何かを言うと、今日はこれで終わりにになりました。

時間はそこまで経っていませんでしたが、私と紅くんの精神衛生を鑑みて切り上げたみたいですね。特に、私の状態は悪かったみたいですし……。

――――

――

――

次の日の午後。私は紅くんと共にお母さんに連れられて、あるところに来ていました。精神内科です。

どうしてここに来たのか説明してくれませんでした。道中にお母さんの運転する自動車で紅くんはあることを言ったんです。

『きつと俺と姉貴の精神状態が正常でないと思ったんだらうな。だから専門医に診てもらえってことだろう。親父はきつと母さんに頼んでいたんだ』

と言っていました。確かに、昨日今日の出来事を考えればそうなりますよね。

精神内科に付き、私と紅くんは問診など色々と受けました。

そして結果を最後に伝えられました。私も紅くんも子どもではありませんから、私たちの目の前で言い渡されます。

「まず紅さんの方ですが、特に問題はありません。ですけど、この歳では考えられないくらいに冷静な判断をしますね。その一点が異常であると判断し、経過観察をしていただきたいです」

そう言い渡されました。

確かに、昔の紅くんよりも大人びた話し方をしますからね。それにその内容もどこか先を行ってますし、何より冷静であると思います。

次は私の番ですね。

ですが、私は何となく何を言われるのかは分かっていました。

「ましろさんの方ですが、こちらはかなり……」

「と、言うところ？」

「PTSD 心的外傷後ストレス障害ですね。それも日本国内では見ない重度の……」

やはりありましたか。確かに昨日から音に敏感ですし、手とか細かいものが怖くて仕方ないですからね。

「あと……ましろさん」

「はい」

「貴女、”暴行”を受けてましたね？」

お医者さんは言葉を濁しましたが、私にはその意図が伝わりました。

「はい」

「私と話している間も、それによる反応がありました」

お母さんや紅くんは分かっているようでしたが、後で話しましょう。

それにもう一つ、私は自覚していましたがありません。

「……先生」

「はい。なんですか？」

「診察の時には言いませんでしたが、まだあります」

そう言っただけは、あるものを取り出します。

それを机の上に置きました。

「……こ、これは？」

「これを持っていないと不安なんです」

私を取り出したのはモデルガンとナイフでした。

昨日から近くにないと不安で仕方なかったんです。ですから朝、紅くんが付いてきてもらって買いに行っただけです。

「……何をされたらこんなことに」

お医者さんは考え込んでしまいました。そりやそうですね。診察した女性をPTSDと判断したら、どうしてかモデルガンとナイフを持っていないと不安で仕方ないなんて。

私は何を経験してきたかは話しませんでした。ですけど、私の症状が全てを物語っていたんじゃないでしょうか。お医者さんは深く聞き出すことはせず、そのまま私たちの診察を終わらせたんですから。

薬を処方してもらい、次何かあった時に来るようにと言われました。

紅くんは少ししてから、また診察に来るみたいですけどね。あと、念のためと言われ、私には女性の精神内科医への紹介状を書いてもらいました。

もし何かあった時は、そっちに行くようにと。カルテの備考にも、書けないことを書いておくと書いていました。

――

――

――

お母さんは私にモデルガンとナイフのことは言及しませんでした。そして、私と紅くんは“変わってしまった”んだと、改めて思ったと言われました。

私は男性に対してかなり怯えること（※ただし紅とお父さんは大丈夫）、モデルガンとナイフがないと落ち着かないこと。紅くんは主観で話さなくなった、と言っていました。全くその通りです。

そして月日は流れていき、私も紅くんも外に出るようになりました。紅くんは大学入学のために、勉強を始めました。そして私はいいと、お父さんが色々と交渉してくれていたみたいで、勤めていた病院には在籍していることになりました。ですから、長い間出勤していなかったことと、何かあったのかを上司に説明しました。そして、職場復帰したんです。

「何をしているんですかっ!! キビキビ働きなさい!! 男ならば力仕事を率先してやるのは当然です!!」

「はいっ!!」

そしてここでも、私が“変わってしまった”ところが顕著に出ていました。指揮を執り、それぞれに見合ったポストに人員配置を的確にするところを評価されていますが、男性をないがしろにしすぎである、というところですね。それに職場にはナイフだけは持ってきています。隠してはいますけどね。

人が変わった、と言われました。

当然ですよ。あのようなことを体験してしまえば、誰だってこうな
ります。ですが”変わってしまった”のではなく、私は”壊れてし
まった”んです。もう、戻れないですからね……。

「まるで軍隊だ……」

「口を開く余裕があるのでしたら、休憩はなしですよ」

「ひいー!!」

「一度死ねば、その鈍い動きも少しは良くなるでしょう」

私の脳裏にあの光景が焼き付いて、もう一生それは消えることにな
いでしよう。あの血と硝煙の臭い。そして人としての尊厳までも奪
うような殺し方をした死体。紅くんが居た証、私が居た証。この手に
残っている感触。身体に刻み込まれた”感触”。

今でも気を抜けば見えてくるんです。”あの光景が”、”あの場所
が”、そして……散って行った仲間たちや、出撃していった皆さんの
姿が……。